

# 法 垣 遺 跡

## 3次・4次調査

— 本文、遺構・遺物図版、石製品写真図版・観察表編 —  
事務所建設・地域振興施設（道の駅）建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

2018

中津市教育委員会



## 序

大分県の最北部に位置する中津市は、国指定名勝耶馬溪など緑豊かな自然や城下町の香りを色濃く残す、自然と文化の町として知られています。近年は、自動車関連会社などの進出を受け、工業の町としての新たな側面を見せはじめています。

一方、経済活動の発展・促進は、埋蔵文化財へ影響を与えていることも事実です。今年度、市内では中津日田道路に伴う埋蔵文化財発掘調査が大分県教育委員会により行われ、当市教育委員会も民間開発・公共工事に伴う本発掘調査を行っております。また、各種開発事業に伴う試掘・確認調査件数はここ数年減少することなく高止まりしたまま推移しています。今後も東九州道などへのアクセス道路、インター周辺の開発等が予想されるため、埋蔵文化財を取り巻く状況の厳しさは続くことが予想されます。しかし、文化財は現代に生きる我々が責任をもって未来へ伝えていかなくてはなりません。

本書はこうした開発の中で、中津市大字加来における事務所・道の駅建設に先立ち、中津市教育委員会が調査した法垣遺跡3次・4次調査の発掘調査報告書です。調査では縄文時代後期の掘立柱建物など重要な遺構が調査されました。また、人面形土製品など珍しい遺物も発見されています。今後、九州の縄文時代研究に大きな影響を与える遺跡になることでしょう。重要遺構が検出された一角は遺跡公園として開放され、道の駅来場者・市民の憩いの場として利用されています。

本書が学術研究資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護やその理解への一助となりましたら幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力賜りました関係各位、及び、調査に従事して下さった方々に対し、深甚から感謝申し上げます。

平成30年3月31日

中津市教育委員会  
教育長 廣畑 功

## 例 言

1. 本書は大分県中津市教育委員会が平成8（1996）年度、平成23（2011）年度、平成24（2012）年度に実施した法垣遺跡発掘調査事業の報告書である。平成8年度調査を3次調査、平成23・24年度調査を4次調査として報告する。
2. 平成8年度の調査は、(株)日進コンサルタントより委託を受け中津市教育委員会が実施した。平成23・24年度の調査は、中津市役所農政振興課より依頼を受け中津市教育委員会が実施した。
3. 出土遺物の整理作業は、平成8年度、平成23～29年度にかけて実施した。
4. 出土遺物は定留遺物保管場・旧東谷小学校にて保管している。
5. 現場・整理作業の外部委託は、空中写真撮撮を東亜航空技研(株)、九州航空(株)に委託した。遺構実測は、(株)九州文化財総合研究所（平成23年度）、(株)アーキジオ大分（平成24年度）へ委託した。石製品のトレース・写真撮影は、(株)大信技術開発、(有)九州文化財リサーチに委託した。放射性炭素年代測定、リン・カルシウム分析は、(株)パレオ・ラボに委託した。
6. 平成8年度調査区出土石製品の实測・トレース・観察表作成は、衛藤美紀（中津市教育委員会）・土谷崇夫（同嘱託）が行った。
7. 遺物の洗浄・注記・実測・拓本・浄書・観察表作成等は、村上久和・末永弥義（中津市教育委員会嘱託）、臨時職員の浅田くるみ、安倍方恵、栗田真弥、岩男純子、岩崎弘子、衛藤京子、小野のり子、門脇和恵、吉上かおり、金丸孝子、久原彩、高野ツギ子、武吉久美子、土橋厚子、古市智子、長倉朱見の協力を得た。
8. フローテーション機器は、国立大学法人熊本大学埋蔵文化財調査センターより借用した。記して感謝申し上げます。フローテーション・ソーティング作業は、臨時職員の岩男純子・衛藤京子・小野のり子・門脇和恵・武吉久美子・長倉朱見の協力を得た。
9. 本書は本文、遺構・遺物図版、石製品写真図版・観察表を掲載している。その他については、中津市教育委員会「法垣遺跡3次・4次調査-遺構・遺物（土器・鉄製品）写真図版、観察表編-」2017（以下、中津市2017）に掲載している。
10. 遺構名称は下記のように略し掲載している。  
SH＝竪穴住居 SB＝掘立柱建物 SK＝土坑 SD＝溝状遺構 SE＝井戸 SA＝柵列  
SX＝性格不明遺構 SH平・断面図の青線は貼床想定線である。
11. 歴史時代区分は、古墳時代を3世紀～7世紀まで、古代を8世紀～12世紀まで、中世を13世紀～16世紀まで、近世は17世紀～19世紀として取り扱う。
12. 本書中に掲載した部署名・肩書きは当時のものである。
13. 本報告と以前に刊行した概報（「法垣遺跡 地域振興施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」2013）や中津市2017と遺構の時期・挿図・記載内容などが異なるものは、すべからく本報告のそれを正式報告とする。
14. 第5章特論編は、竹村恵二先生・山田圭太郎先生（京都大学理学研究科附属地球熱学研究施設）、舟橋京子先生・田中良之先生（九州大学大学院）、小畑弘己先生（熊本大学大学院）、福永将大氏（九州大学大学院生）・足立達朗先生・田尻義了先生・小山内康人先生（九州大学大学院）から玉稿を得た。記して感謝申し上げます。
15. 発掘調査・整理作業は次の方々を始め多くの方々にご指導・ご教示いただきました。記して御礼申し上げます（所属は当時、敬称略）。  
田中良之・宮本一夫・舟橋京子（九州大学大学院）、水ノ江和同（文化庁記念物課）、小畑弘己（熊本大学）、後藤晃一（大分県教育庁文化課）
16. 本書の執筆は、第1～2章、6章を浦井が、第3章石器事実記載の内、玦状耳飾については大坪志子先生にご執筆いただいた。第3章のその他の石器については荻・土谷・衛藤・浦井が記述した。石器以外の遺物については浦井が記述した。

17. 現場作業は下記の皆さんの協力による。(順不同・敬称略)
- 青英木・阿部恵子・安倍方恵・粟田真弥・石塔美代子・井上ミツル・今永夏樹・今西雅典・岩男純子・岩田孝子・岩本慶子・植山加奈江・衛藤京子・江藤由美・大江由美子・太田博泰・小川礼子・奥中廣雪・小野國雄・加来田泰明・片桐千鶴・片桐文隆・金崎ミチ子・神一子・川口政代・河原田実夫・菊池年子・吉上かおり・木村洋・楠木純子・黒瀬昭一・合嶋玲子・小林公子・坂本志織・佐藤洋史・新開初美・新家年春・末廣洋子・巢野典子・角節代・角美枝子・清城玉美・析口慧・瀬口礼子・高榎俊幸・高田早苗・竹折正二・田島律子・田中奈津子・田中政恵・出口勝也・寺本利子・寺本浩文・友綱あんり・中尾亜紀・長倉朱見・凧 省三・野田英幸・橋本里美・原ひとみ・久恒義生・廣津トシ子・藤川健介・藤野初音・榎木智美・松村たか子・松本浩司・松本光由・宮津しのぶ・宮久修身・宮久君子・村上由美子・山本高亮・若木和美・渡邊俊子
18. 本書の編集は、浦井が担当した。

## 目 次

例 言

目 次

第1章	調査の経過	
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 発掘作業の経過	2
	第3節 整理等作業の経過	4
第2章	遺跡の位置と環境	
	第1節 地理的環境	4
	第2節 歴史的環境	5
第3章	調査の方法と成果	
	第1節 調査の方法	7
	第2節 層序	12
	第3節 遺構と遺物	12
	1. 縄文時代の遺構と遺物	23
	2. 古墳時代の遺構と遺物	194
	3. 古代の遺構と遺物	253
	4. 中世の遺構と遺物	296
	5. 近世の遺構と遺物	297
	6. 時期不明の遺構	304
	7. 柱穴出土遺物	318
	8. 一括遺物	325
第4章	自然科学分析	341
第5章	特 論	355
第6章	総 括	411
	あとがき	435
	報告書抄録	

## 挿 図 目 次

第 1 図 中津市内主要遺跡分布図 …………… 6	第 38 図 SH9 出土遺物(8) …………… 55
第 2 図 地区割・等高線図 …………… 9	第 39 図 SH9 出土遺物(9) …………… 56
第 3 図 基本土層図 …………… 12	第 40 図 SH13 平・断面・土層図 石囲炉平・ 断面・土層図 …………… 57
第 4 図 主要遺構配置図 …………… 13	第 41 図 SH13 遺物出土状況 出土遺物(1) …… 58
第 5 図 3 次調査区遺構配置図 …………… 14	第 42 図 SH13 出土遺物(2) …………… 59
第 6 図 第 1 調査区遺構配置図 …………… 15	第 43 図 SH13 出土遺物(3) …………… 60
第 7 図 第 2 調査区遺構配置図 …………… 17	第 44 図 SH13 出土遺物(4) …………… 61
第 8 図 第 3 調査区遺構配置図 …………… 19	第 45 図 SH13 出土遺物(5) …………… 62
第 9 図 第 4 調査区遺構配置図 …………… 21	第 46 図 SH21 平・断面・土層図 出土遺物(1) …… 64
第 10 図 第 5 調査区遺構配置図 …………… 22	第 47 図 SH21 出土遺物(2) …………… 65
第 11 図 SH2 平・断面・土層図 炉平・断面図 …… 24	第 48 図 SH22 平・断面・土層図 石囲炉平・ 断面・土層図 …………… 67
第 12 図 SH2 遺物出土状況 平・断面図 …… 25	第 49 図 SH22 出土遺物(1) …………… 68
第 13 図 SH2 出土遺物(1) …………… 27	第 50 図 SH22 出土遺物(2) …………… 69
第 14 図 SH2 出土遺物(2) …………… 28	第 51 図 SH22 出土遺物(3) …………… 70
第 15 図 SH2 出土遺物(3) …………… 29	第 52 図 SH22 出土遺物(4) …………… 71
第 16 図 SH2 出土遺物(4) …………… 30	第 53 図 SH22 出土遺物(5) …………… 72
第 17 図 SH2 出土遺物(5) …………… 31	第 54 図 SH22 出土遺物(6) …………… 73
第 18 図 SH2 出土遺物(6) …………… 32	第 55 図 SH22 出土遺物(7) …………… 74
第 19 図 SH2 出土遺物(7) …………… 33	第 56 図 SH22 出土遺物(8) …………… 75
第 20 図 SH2 出土遺物(8) …………… 34	第 57 図 SH22 出土遺物(9) …………… 76
第 21 図 SH2 出土遺物(9) …………… 35	第 58 図 SH24 平面図 399 遺物出土状況平・断面図 …………… 78
第 22 図 SH2 出土遺物(10) …………… 36	第 59 図 SH24 平面図 ピット平・断面・土層図 …… 79
第 23 図 SH2 出土遺物(11) …………… 37	第 60 図 SH24 平面図 石囲炉平・断面図 …… 80
第 24 図 SH5 平・断面・土層図 平・断面図 …… 39	第 61 図 SH24 块状耳飾出土状況 …………… 80
第 25 図 SH5 出土遺物(1) …………… 40	第 62 図 SH24 人骨周辺遺物出土状況 平・断面見通し図 …………… 83
第 26 図 SH5 出土遺物(2) …………… 41	第 63 図 SH24 平面図 東西・南北ベルト断面・ 土層図 …………… 84
第 27 図 SH5 出土遺物(3) …………… 42	第 64 図 SH24 平面図 人骨出土状況平・断面図 …… 85
第 28 図 SH5 出土遺物(4) …………… 43	第 65 図 SH24 出土遺物(1) …………… 86
第 29 図 SH9 平・断面・土層図 炉平・断面・土層図 …… 45	第 66 図 SH24 出土遺物(2) …………… 87
第 30 図 SH9 遺物出土状況 平・断面図 …… 46	第 67 図 SH24 出土遺物(3) …………… 88
第 31 図 SH9 出土遺物(1) …………… 48	第 68 図 SH24 出土遺物(4) …………… 89
第 32 図 SH9 出土遺物(2) …………… 49	第 69 図 SH24 出土遺物(5) …………… 90
第 33 図 SH9 出土遺物(3) …………… 50	
第 34 図 SH9 出土遺物(4) …………… 51	
第 35 図 SH9 出土遺物(5) …………… 52	
第 36 図 SH9 出土遺物(6) …………… 53	
第 37 図 SH9 出土遺物(7) …………… 54	

第70图	SH24出土遺物(6)	91	第109图	SH24出土遺物(45)	130
第71图	SH24出土遺物(7)	92	第110图	SH24出土遺物(46)	131
第72图	SH24出土遺物(8)	93	第111图	SH24出土遺物(47)	132
第73图	SH24出土遺物(9)	94	第112图	SH24出土遺物(48)	133
第74图	SH24出土遺物(10)	95	第113图	SH24出土遺物(49)	134
第75图	SH24出土遺物(11)	96	第114图	SH24出土遺物(50)	135
第76图	SH24出土遺物(12)	97	第115图	SH24出土遺物(51)	136
第77图	SH24出土遺物(13)	98	第116图	SH24出土遺物(52)	137
第78图	SH24出土遺物(14)	99	第117图	SH24出土遺物(53)	138
第79图	SH24出土遺物(15)	100	第118图	SH24出土遺物(54)	139
第80图	SH24出土遺物(16)	101	第119图	SH24出土遺物(55)	140
第81图	SH24出土遺物(17)	102	第120图	SH24出土遺物(56)	142
第82图	SH24出土遺物(18)	103	第121图	SH24出土遺物(57)	144
第83图	SH24出土遺物(19)	104	第122图	SH24出土遺物(58)	145
第84图	SH24出土遺物(20)	105	第123图	SH24出土遺物(59)	146
第85图	SH24出土遺物(21)	106	第124图	SH24出土遺物(60)	147
第86图	SH24出土遺物(22)	107	第125图	SH24出土遺物(61)	148
第87图	SH24出土遺物(23)	108	第126图	SH27平・断面・土層图 地床炉平・ 断面・土層图	149
第88图	SH24出土遺物(24)	109	第127图	SH27出土遺物(1)	150
第89图	SH24出土遺物(25)	110	第128图	SH27出土遺物(2)	151
第90图	SH24出土遺物(26)	111	第129图	SH27出土遺物(3)	152
第91图	SH24出土遺物(27)	112	第130图	SH27出土遺物(4)	153
第92图	SH24出土遺物(28)	113	第131图	SH27出土遺物(5)	154
第93图	SH24出土遺物(29)	114	第132图	SB12平・断面・土層图 出土遺物(1)	157
第94图	SH24出土遺物(30)	115	第133图	SB12出土遺物(2)	158
第95图	SH24出土遺物(31)	116	第134图	SB13平・断面・土層图 出土遺物	159
第96图	SH24出土遺物(32)	117	第135图	SB14平・断面・土層图	160
第97图	SH24出土遺物(33)	118	第136图	SB14出土遺物(1)	161
第98图	SH24出土遺物(34)	119	第137图	SB14出土遺物(2)	162
第99图	SH24出土遺物(35)	120	第138图	SB14出土遺物(3)	163
第100图	SH24出土遺物(36)	121	第139图	SB21平・断面・土層图 出土遺物	165
第101图	SH24出土遺物(37)	122	第140图	SB24平・断面图 出土遺物	166
第102图	SH24出土遺物(38)	123	第141图	SB25平・断面图 出土遺物	166
第103图	SH24出土遺物(39)	124	第142图	3次SK1平・断面・土層图 出土遺物(1)	168
第104图	SH24出土遺物(40)	125	第143图	3次SK1出土遺物(2)	169
第105图	SH24出土遺物(41)	126	第144图	3次SK1出土遺物(3)	170
第106图	SH24出土遺物(42)	127			
第107图	SH24出土遺物(43)	128			
第108图	SH24出土遺物(44)	129			

第145図	3次SK1 出土遺物(4) ……………	171	第183図	SH6平・断面・土層図 カマド平・ 断面・土層図 出土遺物 ……………	205
第146図	3次SK1 出土遺物(5) ……………	172	第184図	SH7平・断面・土層図 ……………	206
第147図	3次SK1 出土遺物(6) ……………	173	第185図	SH7カマド平・断面・土層図 ……………	207
第148図	3次SK1 出土遺物(7) ……………	174	第186図	SH7 出土遺物(1) ……………	208
第149図	3次SK2平・断面図 出土遺物 ……………	176	第187図	SH7 出土遺物(2) ……………	209
第150図	3次SK3平・断面図 出土遺物 ……………	177	第188図	SH7 出土遺物(3) ……………	210
第151図	3次SK6平・断面図 出土遺物 ……………	178	第189図	SH8平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	212
第152図	SK2平・断面図 出土遺物 ……………	179	第190図	SH8 出土遺物 ……………	213
第153図	SK7平・断面図 出土遺物 ……………	181	第191図	SH10平・断面・土層図 ……………	214
第154図	SK9平・断面図 出土遺物 ……………	181	第192図	SH10カマド平・断面・土層図 出土遺物(1) ……	215
第155図	SK12平・断面・土層図 出土遺物 ……	181	第193図	SH10 出土遺物(2) ……………	216
第156図	SK13平・断面図 出土遺物 ……………	182	第194図	SH11平・断面・土層図 カマド平・ 断面・土層図 出土遺物 ……………	217
第157図	SK14平・断面図 出土遺物 ……………	182	第195図	SH12平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	219
第158図	SK15平・断面図 出土遺物 ……………	182	第196図	SH12 出土遺物 ……………	220
第159図	SK16平・断面図 出土遺物 ……………	184	第197図	SH14平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	221
第160図	SK17平・断面図 出土遺物 ……………	184	第198図	SH14 出土遺物 ……………	222
第161図	SK24平・断面図 出土遺物 ……………	184	第199図	SH15平・断面図 ……………	223
第162図	SK37平・断面図 出土遺物 ……………	185	第200図	SH15カマド平・断面・土層図 出土遺物 ……	224
第163図	SK39平・断面図 出土遺物 ……………	185	第201図	SH16平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	226
第164図	SK44平・断面図 出土遺物(1) ……	187	第202図	SH16 出土遺物(1) ……………	227
第165図	SK44 出土遺物(2) ……………	188	第203図	SH16 出土遺物(2) ……………	228
第166図	SK44 出土遺物(3) ……………	189	第204図	SH16 出土遺物(3) ……………	229
第167図	SK44 出土遺物(4) ……………	190	第205図	SH17平・断面・土層図 出土遺物 ……	230
第168図	SK45平・断面・土層図 出土遺物 ……	190	第206図	SH18平・断面・土層図 ……………	231
第169図	SK46平・断面・土層図 出土遺物 ……	190	第207図	SH18 出土遺物 ……………	232
第170図	SK47平・断面・土層図 出土遺物 ……	191	第208図	SH19平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	234
第171図	SK53平・断面図 出土遺物 ……………	191	第209図	SH19 出土遺物(1) ……………	235
第172図	SK56平・断面・土層図 出土遺物 ……	192	第210図	SH19 出土遺物(2) ……………	236
第173図	SK57平面図 出土遺物 ……………	192	第211図	SH20平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	238
第174図	SK64平・断面・土層図 出土遺物 ……	193	第212図	SH20 出土遺物 ……………	239
第175図	地層横転1平・断面・土層図 出土遺物 ……	193	第213図	SH23平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	240
第176図	3次SH1平・断面・土層図 カマド平・ 断面・土層図 出土遺物 ……………	196	第214図	SH23 出土遺物 ……………	241
第177図	3次SH2平・断面図 出土遺物 ……………	197	第215図	SB4平・断面・土層図 出土遺物 ……	242
第178図	3次SH3平・断面図 出土遺物 ……………	198	第216図	SB7平・断面・土層図 出土遺物 ……	242
第179図	SH1平・断面・土層図 カマド平・断面・土層図 ……	199	第217図	SB5平・断面・土層図 出土遺物 ……	243
第180図	SH1 出土遺物 ……………	200	第218図	SB8平・断面図 出土遺物 ……………	245
第181図	SH3平・断面・土層図 ……………	202	第219図	SB9平・断面・土層図 出土遺物 ……	247
第182図	SH3カマド平・断面・土層図 出土遺物 ……	203			





第295図	SX2平・断面・土層図	316	第304図	包含層出土遺物	328
第296図	SA1平・断面・土層図	317	第305図	一括出土遺物(1)	330
第297図	地層横転10平・断面・土層図 出土遺物	317	第306図	一括出土遺物(2)	331
第298図	地層横転11平・断面・土層図 出土遺物	317	第307図	一括出土遺物(3)	332
第299図	柱穴出土遺物(1)	320	第308図	一括出土遺物(4)	333
第300図	柱穴出土遺物(2)	321	第309図	縄文遺構変遷図	412
第301図	柱穴出土遺物(3)	322	第310図	法垣遺跡周辺主要縄文遺跡分布図	420
第302図	柱穴出土遺物(4)	323	第311図	古墳時代遺構配置図	421
第303図	柱穴出土遺物(5)	324	第312図	古代遺構変遷図	423

## 写 真 目 次

写真図版1	SH2・5・9・13・22出土石器	429
写真図版2	SH24出土石器	430
写真図版3	SH27 SB12・13・14 3次SK1出土石器	431
写真図版4	3次SK6 SK2・5・7・14・44・46・50・54 SB19 3次SH1・2 SH7・10・15・16・19・26 SD42出土石器	432
写真図版5	SX4 SK59・60 地層横転10 3次SX1 柱穴出土石器	433
写真図版6	一括出土石器	434

## 表 目 次

表1	法垣遺跡出土石器観察表	334
表2	法垣遺跡出土石器観察表	335
表3	法垣遺跡出土石器観察表	336
表4	法垣遺跡出土石器観察表	337
表5	法垣遺跡出土石器観察表	338
表6	法垣遺跡出土石器観察表	339
表7	法垣遺跡出土石器器種別石材別組成表	340
表8	SH24出土縄文土器重量集計表	414
表9	SH24出土縄文土器各区重量棒グラフ	415
表10	石器組成表	419
表11	各遺跡別出土石器生産具組成表	419
表12	SD42出土皿、坏法量図	424

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

調査に至る経緯は、中津市2017に詳述しているため、本報告では以下に調査の体制を記述する。

### 平成8（1996）年度

中津市教育委員会	教育長	高橋	忠隆（平成9年1月31日まで）
”	”	前田	佳毅（平成9年2月1日～）
”	市民文化センター館長	麻川	尚良
”	” 係長	田中	布由彦
”	” 技師	花崎	徹（調査担当）

### 平成23（2011）年度

中津市教育委員会	教育長	北山	一彦
”	文化振興課長	藤原	義郎
”	” 係長	田中	布由彦
”	” 主任	浦井	直幸（調査担当）
”	” 嘱託	荻	幸二（ ” 、10月1日～）

### 平成24（2012）年度

中津市教育委員会	教育長	廣畑	功
”	文化振興課長	藤原	義郎
”	” 参事	田中	布由彦
”	” 係長	高崎	章子
”	” 主任	浦井	直幸（調査担当）
”	” 嘱託	荻	幸二（ ” ）

### 平成25（2013）年度

中津市教育委員会	教育長	廣畑	功
”	文化財課長	川西	州作
”	” 係長	高崎	章子
”	” 主任	浦井	直幸（整理担当）
”	” 嘱託	荻	幸二（ ” ）

### 平成26（2014）年度

中津市教育委員会	教育長	廣畑	功
”	文化財課長	今津	時昭
”	” 主任研究員兼係長	高崎	章子
”	” 主任	浦井	直幸（整理担当）
”	” 嘱託	荻	幸二（ ” 、9月30日まで）

### 平成27（2015）年度

中津市教育委員会	教育長	廣畑	功
”	文化財課長	平原	潤
”	” 主任研究員兼係長	高崎	章子
”	” 副主任研究員	浦井	直幸（整理担当）
”	” 嘱託	村上	久和（ ” ）

## 平成28（2016）年度

中津市教育委員会	教育長	廣畑 功
〃	社会教育課長	高尾 良香
〃	〃 文化財室長	高崎 章子
〃	〃 主幹	花崎 徹
〃	〃 副主任研究員	浦井 直幸（整理担当）
〃	〃 主事	衛藤 美紀（〃）
〃	〃 嘱託	土谷 崇夫（〃）

## 平成29（2017）年度

中津市教育委員会	教育長	廣畑 功
〃	社会教育課長	高尾 良香
〃	〃 文化財室長	高崎 章子
〃	〃 主幹	花崎 徹（整理担当）
〃	〃 副主任研究員	浦井 直幸（〃）
〃	〃 主事	衛藤 美紀（〃）

## 第2節 発掘作業の経過

### 3次調査（平成8（1996）年度）日誌抄

平成8年5月9日 表土剥ぎ・調査開始  
7月3日 調査終了

### 4次調査（平成23・24（2011・2012）年度）日誌抄（肩書きは当時）

平成23年

- 5月 9日 1区表土剥ぎ。
- 5月16日 全体遺構検出作業開始（1回目）。1区北側で柱穴を多数検出する。
- 5月20日 1区略図（1/100）作成。
- 5月31日 遺構掘削開始。
- 6月 8日 全体遺構検出（2回目）。
- 6月15日 田中裕介氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）来跡。
- 6月22日 SK1より鉄製品出土（保存処理によって馬具と判明）。
- 6月23日 各遺構から縄文土器・土師器などが出土。
- 6月29日 地層転横1より並木式土器片出土。
- 7月 1日 農政水産課より調査区の最高所（5区）の調査は、造成計画決定後とするよう依頼を受ける。
- 7月29日 1区空撮。
- 8月 1日 2・3区表土剥ぎ。
- 8月 2日 古墳時代の住居跡複数検出。
- 9月 5日 SH2から多量の縄文土器出土。
- 9月14日 後藤一重氏（県埋蔵文化財センター）・棚田昭二氏（豊前市教育委員会）来跡。SH2の土器、立石について所見を伺う。
- 9月28日 江藤和幸氏（宇佐市教育委員会）来跡。SD11について所見を伺う。
- 9月29日 坂本嘉弘氏（県埋蔵文化財センター）来跡。SH2について所見を伺う。
- 10月 3日 栗田勝弘氏（県埋蔵文化財センター）来跡。
- 10月 4日 3区遺構検出。
- 10月13日 田中裕介氏・友岡信彦氏（県埋蔵文化財センター）来跡。
- 10月17日 3区略図（1/100）作成。
- 10月20日 3区SD42から足鍋の脚部出土。
- 11月16日 3区古墳時代住居跡を調査。
- 11月24日 3区縄文時代住居跡を調査。
- 12月16日 造成計画変更の可能性が生じ調査中断。

平成24年

- 2月16日 造成計画は遺構を損壊するため調査再開。SD42掘削再開。
- 2月20日 SD42上層で古代の遺物が多量に出土。

2月21日 坂本嘉弘氏・後藤一重氏来跡。  
 3月21日 江田豊氏・横澤慈氏・越智淳平氏（県埋蔵文化財センター）来跡。  
 3月22日 後藤一重氏・江田豊氏来跡。土鍋の脚・瓦器碗等について所見を伺う。  
 3月30日 SD42完掘写真撮影。縄文・古墳時代住居跡の調査を再開する。  
 5月 8日 友岡信彦氏・松本康弘氏（県埋蔵文化財センター）来跡。  
 5月16日 田中裕介氏（別府大学）来跡。縄文住居について所見を伺う。SX3より三稜尖頭器出土。  
 5月29日 耕地課より外構工事を7月末か8月末に着手したい旨説明あり。  
 5月31日 大塚正俊市議来跡。  
 6月11日 4区表土剥ぎ。  
 6月12日 原田昭一氏（県埋蔵文化財センター）来跡。SD42について所見を伺う。  
 6月13日 坂本嘉弘氏来跡。SH2・9・13出土縄文土器について所見を伺う。  
 6月14日 坂本嘉弘氏来跡。SH2縄文住居の立石について所見を伺う。  
 6月16日 現地説明会開催（2・3区）参加者50名。  
 7月 5日 坂本嘉弘氏・友岡信彦氏来跡。  
 7月 9日 4区遺構検出。  
 7月10日 藤本啓二氏（国東市教育委員会）来跡。  
 7月12日 4区略図（1/100）作成。地山は灰白色。1～3区と異なる。河川の運搬作用の堆積土か。  
 7月18日 小林昭彦氏（県埋蔵文化財センター）・原田昭一氏来跡。  
 7月19日 渋谷忠章氏（元県歴史博物館館長）来跡。台風による大雨。  
 7月26日 耕地課から工事について協議依頼あり。  
 7月30日 坂本嘉弘氏来跡。  
 8月 1日 SK64（カラスザンショウ大量含有土器出土遺構）土層図図化。  
 8月 8日 5区表土剥ぎ。遺構多数、東側は石原状態。旧地形を近代に削平か。  
 8月 9日 5区表土剥ぎ中に緑釉陶器出土。  
 8月10日 5区遺構検出。  
 8月17日 4区空撮。  
 8月21日 中津市議6次産業議員勉強会対応。  
 8月30日 坂本嘉弘氏来跡。SX4について所見を伺う。  
 8月31日 5区略図（1/100）作成。  
 9月10日 SH24検出状況撮影。歪な方形プラン。  
 9月11日 SH24掘削開始。黒色埋土より多量の縄文土器が出土し始める。  
 9月13日 坂本嘉弘氏来跡。SH22・24・27縄文住居出土土器について所見を伺う。  
 9月14日 SH24から人骨出土。  
 9月18日 SX4検出作業。坂本嘉弘氏・友岡信彦氏・松本康弘氏来跡。埋葬人骨について所見を伺う。村上久和氏から田中良之先生が今週末までに現場入りするとの連絡入る。  
 9月20日 田中良之先生・舟橋京子先生（九州大学）、村上久和氏による実測・人骨取り上げ作業。報道各社へ縄文住居から人骨や多量の土器、儀礼用の3本の柱が出土したことを発表（柱は後にSB14の西側柱穴列であることが判明）。  
 9月21日 田中良之先生より縄文時代の柱穴列の希少性について所見を伺う。  
 9月23日 現地説明会（5区）、参加者120名。  
 9月24日 SB12・13・14など縄文掘立柱建物検出状況撮影。  
 9月25日 SB14柱穴半截、PIT4より鐘崎式土器出土。  
 9月27日 新貝市長視察。SH24・縄文掘立柱建物跡などの遺構・遺物について説明する。  
 9月28日 宮内克己氏（県埋蔵文化財センター）来跡。  
 9月29日 山田昌久先生（首都大学東京）、塩地潤一氏（大分市教育委員会）、若枚善満氏（荇田町教育委員会）来跡。  
 10月 2日 溝口孝司先生・田尻義了先生（九州大学）、坂本嘉弘氏（県埋蔵文化財センター）来跡。  
 10月 3日 九州歴史資料館職員複数来跡。  
 10月 4日 市として重要遺構を検出した5区を保存し広場として整備する方針が決まる。記録保存調査を中止し、遺構の配置などを記録する調査方針へ変更する。  
 10月 5日 今田秀樹氏（日田市教育委員会）、林潤也氏（大野城市教育委員会）来跡。  
 10月 9日 木村幾多郎氏（九州考古学会会長）来跡。  
 10月15日 SB14PIT4の性格把握のため1/4を掘削。  
 10月16日 5区空撮。  
 10月18日 SH24周辺精査。長方形プランを確定させる。  
 10月19日 藤丸詔八郎氏来跡。  
 10月21日 大坪志子先生（熊本大学）来跡。玦状耳飾について所見を伺う。後日、研究用に貸し出すことを約す。  
 10月23日 竹村恵二先生（京都大学）・立石義孝先生（県立中津東高等学校）来跡。遺跡の地形・地質について所見を伺う。

- 10月24日 宮本一夫先生(九州大学)の調査指導。村上久和氏同行。  
10月25日 後藤晃一氏(県文化課)の調査指導。  
10月27日 大野薫氏、坪根伸也氏(大分市教育委員会)来跡。  
10月29日 SB12~14遺物取り上げ。  
11月 1日 SH24炉検出・図示。  
11月 2日 SH24炉清掃。農政水産課・耕地課と保存について協議。現場片付け開始。  
11月 5日 SH24土層実測。現場片付け。  
11月 6日 SH24調査終了。  
11月 7日 図面チェック作業。竹村恵二先生・立石義孝先生来跡。  
11月 8日 小畑弘己先生(熊本大学)の調査指導。SH24埋土などのフローテーション作業を勧められる。  
11月12日 坂本嘉弘氏来跡。SH24炉周辺の赤色部は火を焚いた痕跡ではないかとの所見を伺う。  
11月13日 現場片付け。  
11月16日 後藤宗俊先生・飯沼賢司先生(別府大学)、後藤晃一氏来跡。  
11月22日 図面チェック。調査終了。

その他、現場作業中に富井眞先生(京都大学)、岩永省三先生(九州大学)、石井寛氏、千葉豊先生に所見を伺った。記して感謝申し上げます。

### 第3節 整理等作業の経過

3次調査の整理等作業は平成8年度に開始した。4次調査の整理作業は、平成24年度から本格的に着手し、遺物の洗浄・注記などの作業を現場と併行して実施。平成25年度は、熊本大学より機器を借用し、縄文掘立柱建物埋土、SH24埋土のフローテーション作業に着手。全ての遺物接合作業は当年度で終了した。平成26年度より遺物実測・トレース作業を開始。縄文竪穴住居出土遺物は、文様などが施されている資料をできるだけ多く実測したが、SH24は出土数が多く実測していない遺物もある。縄文掘立柱建物出土遺物は小片も多く抽出した。古墳時代以降の出土遺物は、基本的に同器種の多数の実測は避けた。ただし、SD42は、県内でも検出例の少ない時期の遺構であり可能な限り多くの遺物を実測した。

整理作業中、田中良之先生・宮本一夫先生・福永将大氏(九州大学)、村上久和氏、今田秀樹氏、林潤也氏に縄文土器についてご指導頂いた。SD42出土猿投窯陶器については、井上喜久男氏(愛知県陶磁美術館)の元へ土器を持ち込み、所見を伺っている。緑釉陶器については、高橋照彦先生(大阪大学)へ写真データを送付し所見を伺った。本文中に記載してある文章もご所見の要約である。抽出種実の同定、圧痕採取・分析について小畑弘己先生(熊本大学教授)・眞邊彩氏(鹿児島県立埋蔵文化財センター)の協力を得た。出土鉄器の保存処理は大分県立歴史博物館と共同研究で行った。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

中津市は大分県の最北部に位置する。人口約8万4千人、面積491km<sup>2</sup>を誇る。北は周防灘に面し、西は福岡県、東は宇佐市、南は玖珠町・日田市と境を接する。英彦山に源を発する一級河川山国川が市内を南から北へ貫流し流域一帯を潤す。上中流域は山々に囲まれた地形で、山国川やその支流により開析された河岸段丘上に集落は営まれる。頼山陽により絶景と称された奇岩・奇勝の多くは名勝耶馬溪として国の指定を受ける。下流域は沖積作用による県北最大の平野「沖代平野」と洪積台地「下毛原台地」が広がる。

法垣遺跡の東側は、八面山を源流とする犬丸川が流れる。遺跡は調査前まで畑地として利用され、周辺は水田が営まれていることから、調査地は周囲より一段高い地形であったことがわかる。調査区の最高所は遺跡の中央部で、扇状に地形が低くなる。

## 第2節 歴史的環境

**旧石器時代** 旧石器時代の石器は才木遺跡（35）や諸田遺跡（49）で発見されているが、いずれも散発的な出土であり、集落の発見には至っていない。

**縄文時代** 上畑成遺跡（47）で早期の無文土器が検出された。早期末から前期は黒水遺跡（18）で陥し穴が発見され、諫山遺跡では県下最多54基の縄文時代の陥し穴が検出されている。遺跡数は縄文後期から増大する。植野貝塚では縄文後期前葉の遺物が出土し、現地に貝殻が散布する。法垣遺跡（19）から北東1.5kmのボウガキ遺跡（21）では、縄文住居から九州で初めて伸展葬状態の人骨が4体検出されている。上毛町上唐原遺跡では炉付近に立石が認められ注目された。縄文晩期には女体像とみられる土偶が出土した高畑遺跡がある。

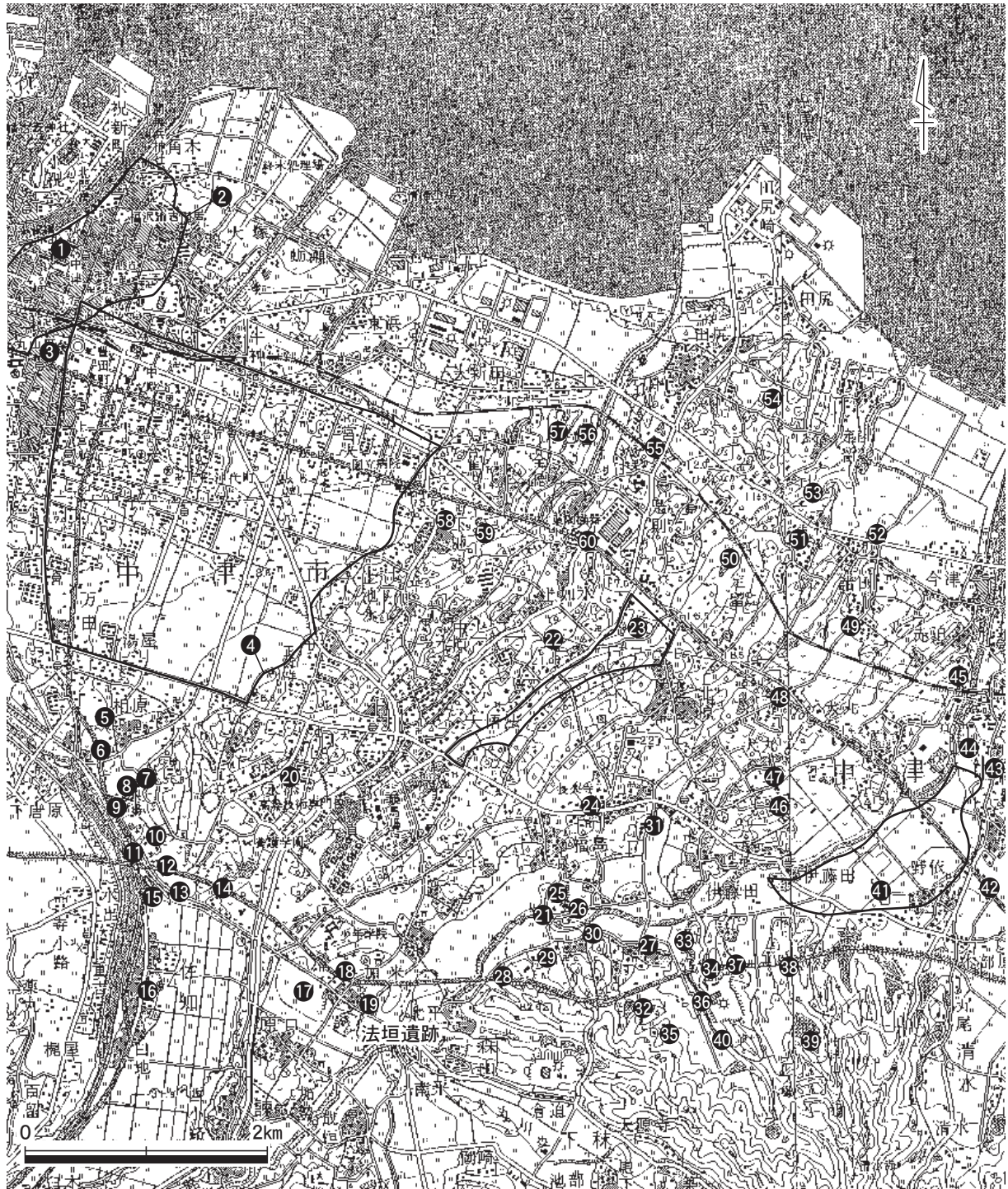
**弥生時代** 前期後葉から中期初頭の上ノ原平原遺跡（13）で貯蔵穴群が確認されている。続く中期では二列埋葬の土壇墓・住居跡・溝が福島遺跡（25）で確認され、諫山遺跡では弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されている。

**古墳時代** 亀山（亀塚）古墳（58）がかつて存在したが、調査せず破壊されたため詳細は不明である。その他の墳墓の多くは下毛原台地の南西に造営される。5世紀中ごろには山国川に面する勘助野地遺跡（12）で方形周溝墓が造営され、5世紀後半から7世紀前半にかけては上ノ原横穴墓（11）が展開する。相原山首遺跡（7）で7世紀から9世紀にかけて方墳が造られる。古墳時代後期の集落は諸田遺跡や定留遺跡（51）など海岸部でまとまって発見されている。生産遺跡は、草場窯跡（37）、踊ヶ迫窯跡（38）などが調査されている。

**古代** 古代には7世紀末に白鳳系の相原廃寺（5）が建立される。また、遅くとも8世紀初頭には沖代平野に条里制（4）が施行されたと考えられている。条里の南限は「勅使街道」と呼ばれる古代官道が走る。8世紀後半には官道南側に下毛郡衙正倉に推定される長者屋敷官衙遺跡（20）が確認された。集落は10世紀代の緑釉陶器や墨書土器が出土した三口遺跡（6）がある。11世紀代など古代末の遺構はほとんど検出されていない。

**中世** 長久寺の田丸城跡（24）など中世城館が市内各地に築かれる。16世紀末は黒田氏の入封によって中津城（1）が築城される。近年の調査によって、中津城は石垣に高度な構築技法が採用された現存する九州最古の近世城郭であることが判明した。

**近世** 関ヶ原の合戦後、黒田氏に替わって細川氏が入部し、城・城下町は整備・拡張される。城下の造営は小笠原氏が入部する1632（寛永9）年に完成を見る（2）。1717（享保2）年に奥平氏が入部し、1871（明治4）年の廃藩置県まで城下は奥平氏が統治した。



- |              |              |             |             |             |
|--------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 中津城跡      | 13. 上ノ原平原遺跡  | 25. 福島遺跡    | 37. 草場窯跡    | 49. 諸田遺跡    |
| 2. 中津城下町遺跡   | 14. 大池南遺跡    | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ迫窯跡   | 50. 定留貝塚    |
| 3. 豊田小学校校庭遺跡 | 15. 佐知久保畑遺跡  | 27. 前田遺跡    | 39. ホヤ池窯跡   | 51. 定留遺跡    |
| 4. 沖代地区条里跡   | 16. 佐知遺跡     | 28. 森山遺跡    | 40. 大谷窯跡    | 52. 天貝川遺跡   |
| 5. 相原廃寺      | 17. 槇遺跡      | 29. 岩井崎横穴墓群 | 41. 野依遺跡    | 53. 和間貝塚    |
| 6. 三口遺跡      | 18. 黒水遺跡     | 30. 犬丸川流域遺跡 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 田尻大迫遺跡  |
| 7. 相原山首遺跡    | 19. 法垣遺跡     | 31. 畑中遺跡    | 43. 中須遺跡    | 55. 是則遺跡    |
| 8. 鶴市神社裏山古墳  | 20. 長者屋敷官衙遺跡 | 32. 安平遺跡    | 44. 若旗遺跡    | 56. 全徳遺跡    |
| 9. 坂手隈横穴墓群   | 21. ボウガキ遺跡   | 33. 城山横穴墓群  | 45. 十前垣遺跡   | 57. ガラヌノ遺跡  |
| 10. 幣旗邸古墳群   | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群   | 46. 野田遺跡    | 58. 亀山古墳    |
| 11. 上ノ原横穴墓群  | 23. 原遺跡      | 35. 才木遺跡    | 47. 上畑成遺跡   | 59. 石堂池遺跡   |
| 12. 勘助野地遺跡   | 24. 田丸城跡     | 36. 城山窯跡群   | 48. 諸田南遺跡   | 60. 舞手川流域遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)

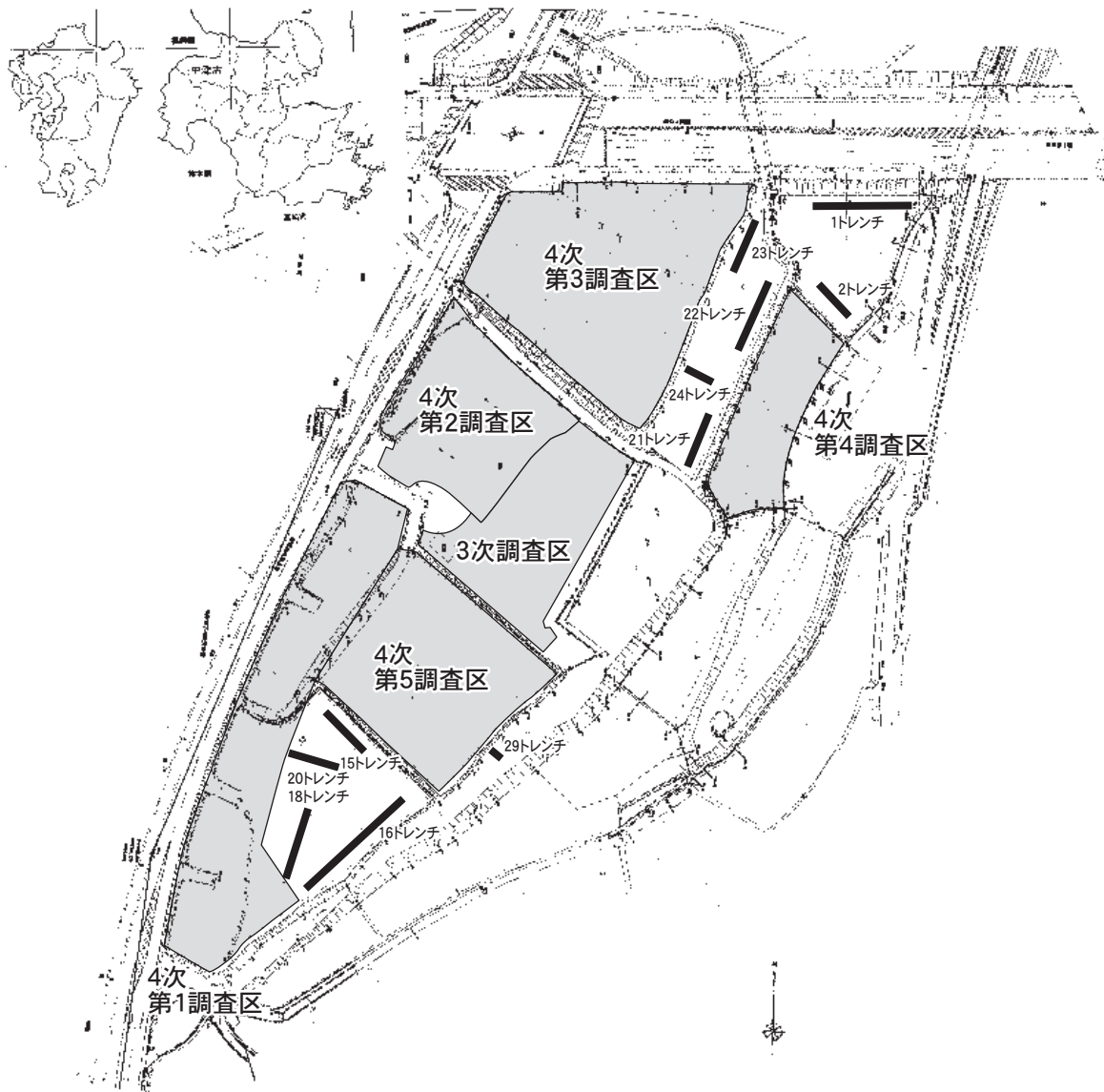


# 第3章 調査の方法と成果

## 第1節 調査の方法

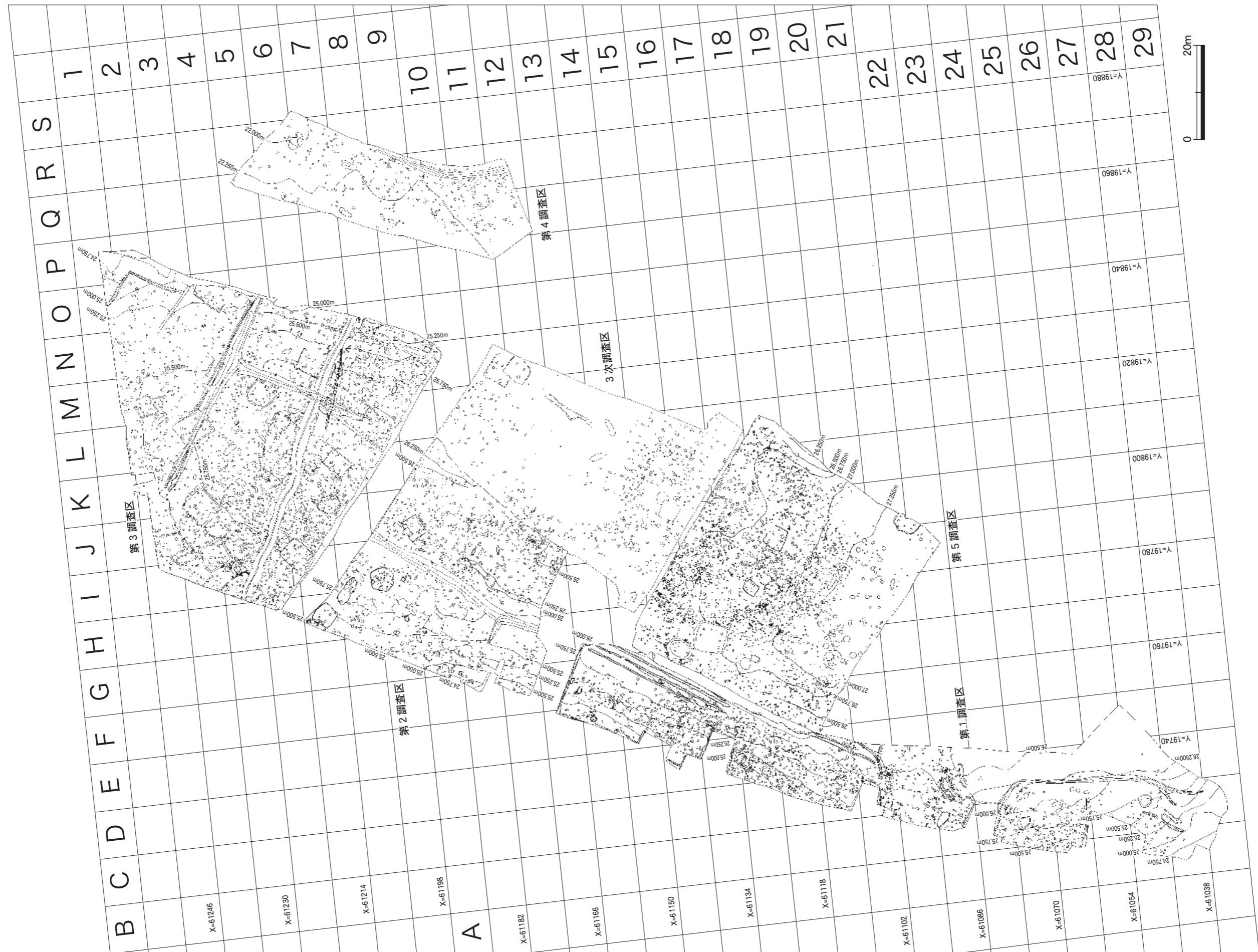
### 発掘区の設定 (第2図)

法垣遺跡の発掘調査区は世界測地系を用いて本調査前に机上で地区割を行った。X=61262、Y=19710を基点として、東へ10m毎にA・B・C～Sとアルファベットで、南へ8m毎に1・2・3～29と数で区分した。この小グリッドをA-1・B-2として作図を行っている。調査区は1～5区に分割し、1区と5区は調査区が接する。現場グリッド杭の打設は、市教委が光波トランシットを用いて実施した。



調査区配置図 (S=1/2,000) ※トーン部分が本調査区域





第2図 地区割・等高線図 (S=1/800)

### 表土の掘削と遺構の検出

表土の掘削は、重機を用いて行い、包含層を残すことなく遺構検出面まで掘削した。これは当初7ヶ月という極めて限られた期間の中で調査終了を迫られたためである。現場での地区割りは、作業員による遺構検出作業と並行して進め、重機による表土剥ぎや地区割り未実施の時点で出土した遺物はすべからく「〇〇区一括」として取り上げた。現場グリッド杭打設後に遺構に伴わない状態で出土した遺物は「A-〇区」など区毎に取り上げを行っている。

### 発掘作業

遺構検出の結果、各区に高密度に遺構が存在することが判明した。調査期間の関係から、掘立柱建物などが復元できた柱穴及び上面に柱痕跡が確認できた柱穴は半截とし、それ以外の柱穴は半截せず掘り下げを基本とした。全ての柱穴を半截しない方法は、調査スピードを速めたものの、上面以下の柱痕跡の有無を確認できていない点に課題を残した。竪穴住居跡は土層観察用ベルト（以下、ベルト）を十字に設定し、遺物は区毎に取り上げた。住居は貼り床が認められるものは除去している。

遺物の多少を表現するため掘り下げ途中でSH2・9は出土状況の図化を行った。この図化作業は多大な時間を要したため、工期が迫るSH24掘削時は、掘り下げ途中の図化作業は省略し、掘削時の撮影数を増やすことで対応を図った。しかし、住居を4分割した内の1箇所（SW区）しか対象としなかったため、人骨が出土した区画についてはその上面の遺物出土情報が図面や写真記録として残っておらず、人骨出土位置の層位的な理解に影響を与えた。今後、人骨が出土する可能性のある縄文住居跡を調査する際は、上面で遺物出土状況図化を行うなど、遺構の時代や種類に合せた調査を行う必要がある。

土坑などは半截もしくはベルトを残し掘削した。溝は任意の箇所にベルトを設定し掘り下げている。

### 写真撮影

空中写真撮影は基本的に各区の遺構を完掘してから撮影することを基本とした。ただし、梅雨時期その他の関係で、掘削途中であっても遺構のプランを写真へ投影できると判断した場合は掘削途中で撮影した区もある。遺構個別写真は、ベルトと完掘状況は必ず撮影することとし、遺構検出状況については撮影したものとそうでないものがある。35ミリ白黒フィルムとカラーリバーサルフィルム、一眼レフデジタルカメラを使用した。

### 自然科学分析

法垣遺跡の発掘調査では、抽出種実の同定、圧痕採取・分析調査を小畑弘己先生の多大な協力のもと実施している。一連の作業の経過・目的・結果などは第5章に詳述されているので割愛する。

出土種実・炭化材の放射性炭素年代測定を(株)パレオ・ラボに委託した。種実と炭化材は市教委が発掘調査終了後に抽出し提供している。分析の目的は、縄文掘立柱建物から出土したコムギやイネ、カラスザンショウ、炭化材（クリなど）の年代と発掘調査所見との整合の確認である。また、SH24出土No.399内埋土のリン・カルシウム分析を(株)パレオ・ラボに委託した。No.399が胞衣壺として利用されていたか否か確認するためのものである。比較資料としてSH24埋土なども分析対象と

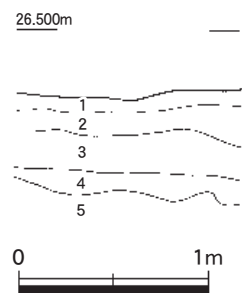
し、資料は現場で市教委が採取したものを提供した。

### 縄文遺物の器種分類

遺跡では多数の縄文土器が出土している。器種は、底部から口縁部までの器高が10cm未満のものを浅鉢、10～20cmのものを鉢、底部もしくは口縁部からの器高が20cm以上のものを深鉢とした。残存状況により器高が不明なものは鉢とした。

## 第2節 層序（第4図）

基本層序は次のとおりである。1層は茶褐色砂質土で現代の耕作土層。2層の赤茶色砂質土、3層は遺物が混入する厚さ18～24cmの暗茶褐色砂質土層。4層は縄文から古代の遺物を多く含むいわゆるクロボク層。5層は赤茶色砂質土の地山である。4層のクロボク層は第5調査区などの高所には存在せず、第1調査区などの周縁部で確認した。高台に遺物包含層が欠如していることは、近代の畑地造成が大規模であったことを想像させる。



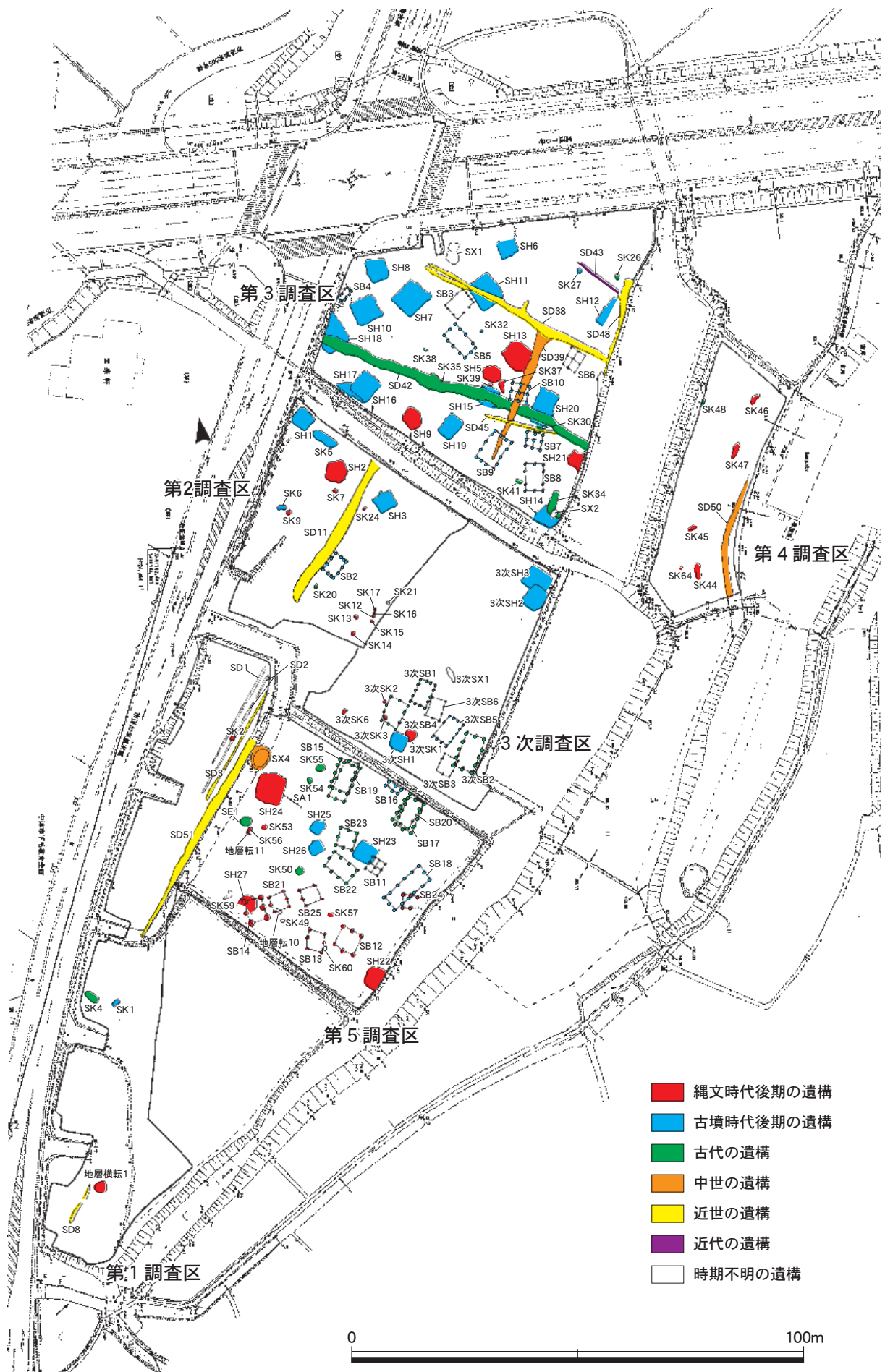
第3図 基本土層図（S=1/40）

## 第3節 遺構と遺物

### 遺構と遺物の概要

3次・4次調査で検出した主な遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡8棟、掘立柱建物6棟、古墳時代後期の竪穴住居跡21棟、古代の掘立柱建物跡10棟・土坑12基・溝状遺構1条・井戸1基、中世の溝状遺構2条、性格不明遺構1基、近世の溝状遺構などである。掘立柱建物以外の柱穴は約3,200基検出している。遺物は、各遺構内やその周辺でまとめて出土し、第1調査区に土師器や須恵器小片が混在する遺物包含層が存在した。第5調査区は表土直下に遺構を検出していて、表土剥ぎの際に遺物はあまり出土していない。

出土遺物は、縄文土器が最も多く、古墳時代、古代、中世、近世、弥生の順に少ない。縄文時代の検出住居数は、古墳時代より少ないものの遺物点数は古墳時代のそれを圧倒する。各遺構は、出土した遺物を基本に遺構時期を比定している。出土遺物が少量、もしくは全くない遺構については、時期の明確な遺構の規模、配置などを参考に時期比定したものがあある。掘立柱建物跡については、調査終了後の整理作業中に3次SB5を机上復元した。それ以外は全て現場作業中に確認したものである。



第4図 主要遺構配置図 (S=1/1,200)



第5図 3次調査区遺構配置図 (S=1/300)



第6図 第1調査区遺構配置図 (S=1/400)







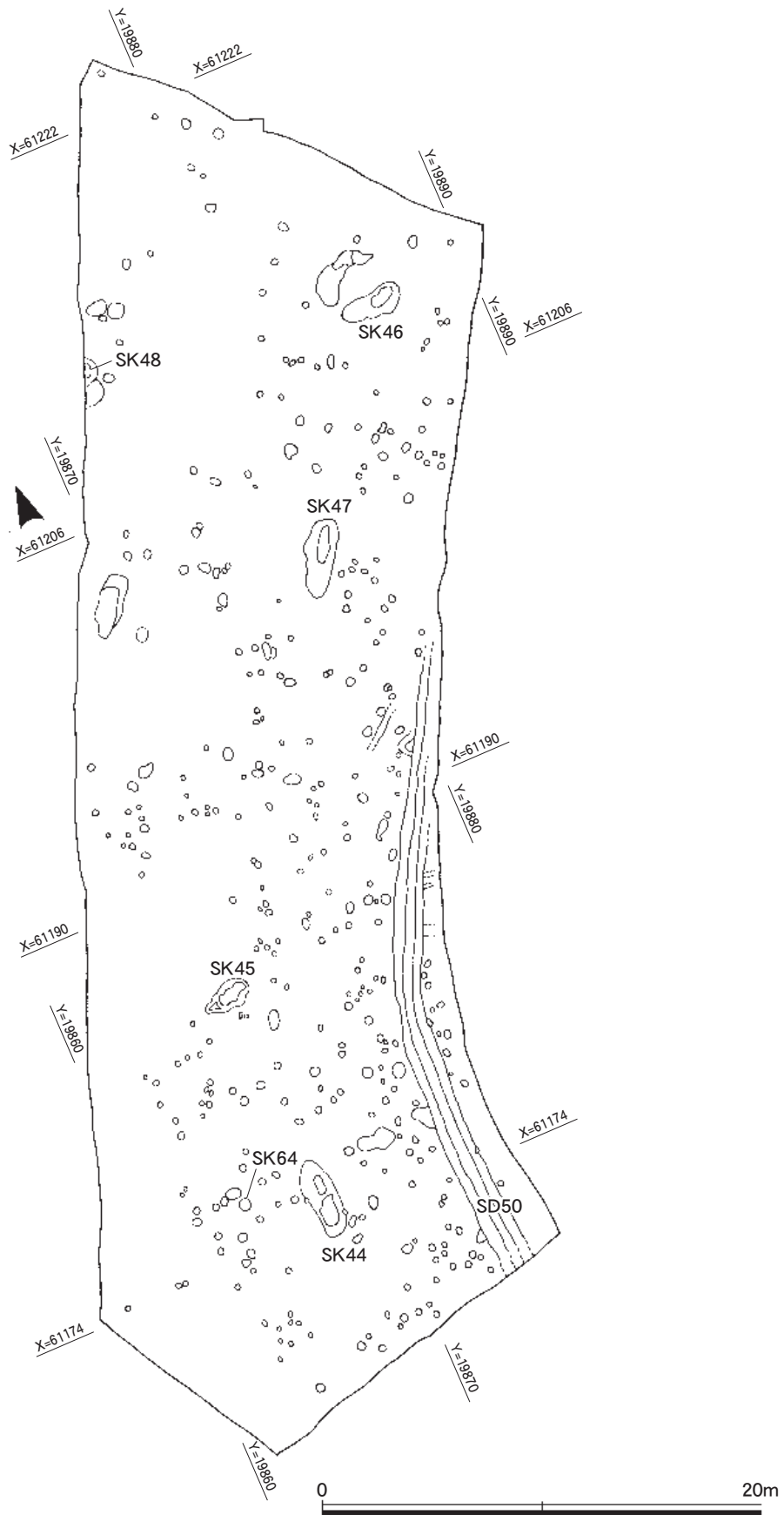
第7図 第2調査区遺構配置図 (S=1/300)



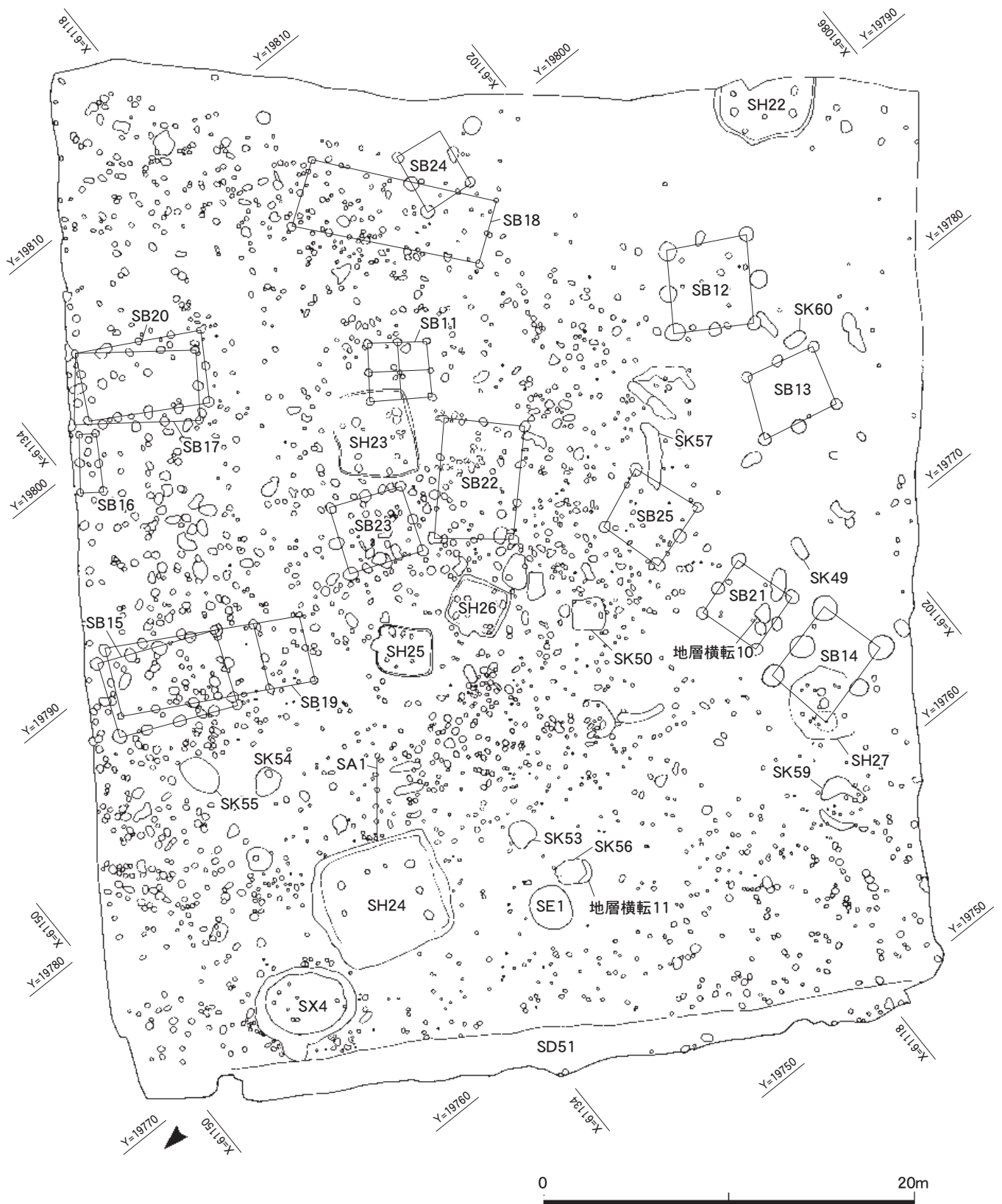


第8図 第3調査区遺構配置図 (S=1/300)





第9図 第4調査区遺構配置図 (S=1/300)



第10図 第5調査区遺構配置図 (S=1/300)

# 1. 縄文時代の遺構と遺物

## 竪穴住居跡

### SH2 (第11図)

第2調査区I-8で検出した竪穴住居跡である。東・南辺は近代の耕作溝により一部損壊している。輪郭は歪な五角形を呈する。北東-南西方向に5.1m、南東-北西方向に4.7m、深さ40cmの規模である。周壁は認められない。壁の傾斜は緩やかである。埋土は、壁付近に暗茶褐色砂質土が薄く堆積した後、炭・焼土を含む黒褐色砂質土が堆積し、土器を多量に含む暗茶褐色砂質土が厚く堆積する。

床面中央に炉が敷設され、炉の東30cmの位置に立石が存在した。炉の西側の土坑は性格不明である。また、住居西側に焼土の集中が認められたが炉跡ではない。柱穴状ピットは、P1~7が配置され、深さから支柱穴と考えられるが明確ではない。P3・6は深さ20~30cm程度、P1・2・4・5・7は15cm程度である。P8~14は深さ14~22cmあり、屋根などを支えるための遺構であろう。その他のピットは浅く用途不明である。遺物はパンケース12箱分が出土している。

### 炉跡と立石 (第11図)

炉跡は住居跡のほぼ中央に位置し主軸方位N42°Wの楕円形プランを呈する。長軸1m、幅76cm、深さ12cmの大きさである。埋土上位は炭と焼土が混入し、底面は赤褐色で固くしまる焼土面を形成している。炉跡外に焼土面は存在しない。

立石は直径約35cm、厚さ15cmの扁平な安山岩で、N27°E方向に軸線に向ける。半分を炉跡と同程度の深さまで埋め込まれている。観察不測で敲打や研磨の痕跡は確認できていない。

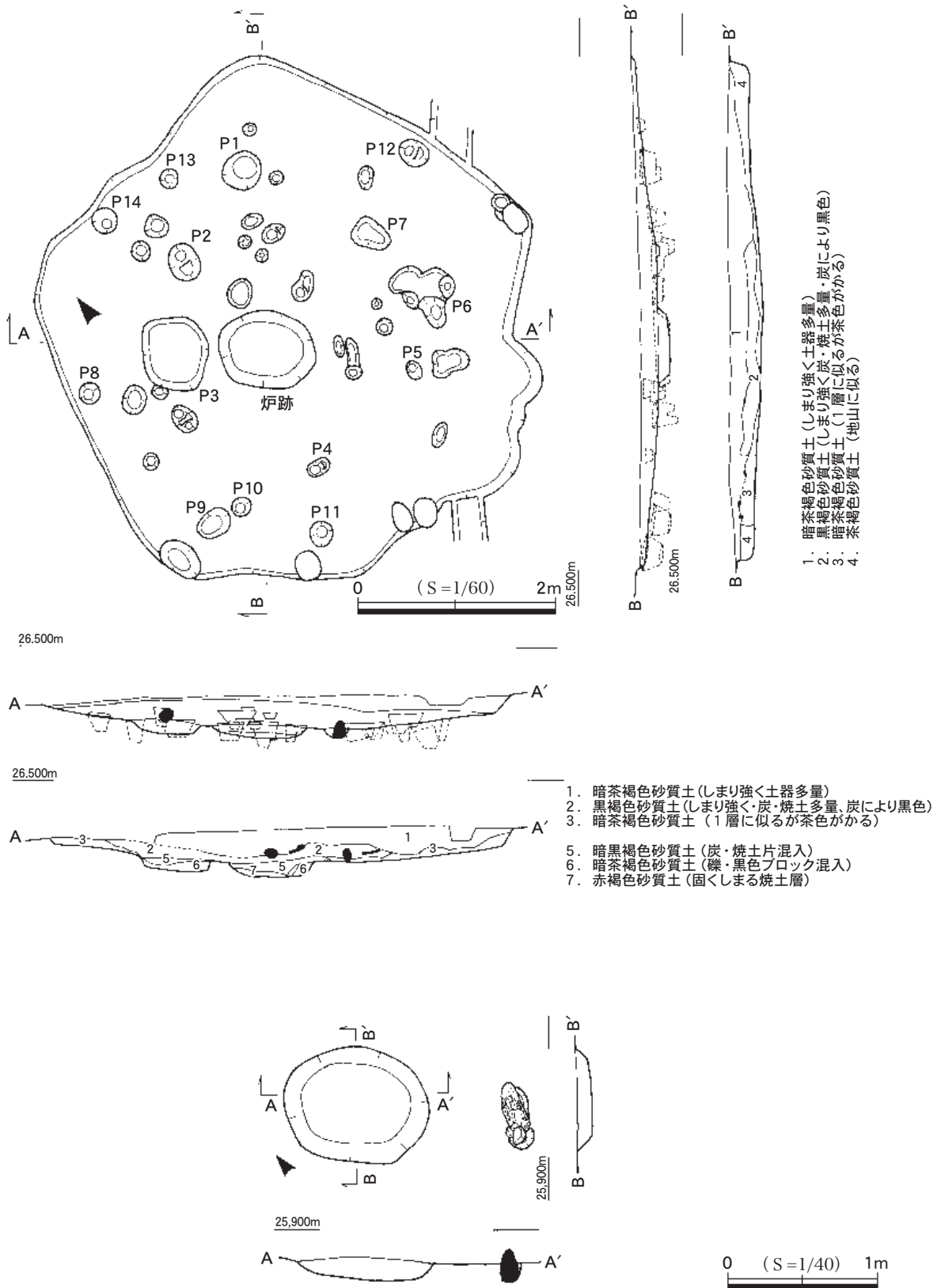
### 遺物出土状況 (第12図) 出土遺物 (第13~23図)

土器は68点、石器を5点図示した。遺物は床面直上にほとんど出土しておらず、床面から10cm程浮いた状態で出土している。住居は廃絶後少し埋まった後に遺物を多量に含む土砂で短期間の内に埋没されたものと思われる。

鉢形土器は口縁部形状、紋様の有無を基準として以下のように分類した。遺物の殆どは大きくみていわゆる北久根山第二型式の範疇に含まれると思われる。本形式の属性を含む東北部九州出土の遺物は、林潤也氏により石町式が設定・呼称されている。本報告では同遺物を石町式として報告する。石町式土器が多数出土した本遺構は縄文時代後期中葉の所産と推定する。

- ・ A類 口縁部が緩やかに内湾する一群。紋様の有無などにより3つに細分。
  - A-1類：沈線+縄文を施すもの。
  - A-2類：沈線または縄文を施すもの。
  - A-3類：条痕などの器面調整のみの無紋土器。
- ・ B類 口縁部が「く」字状に小さく内傾または直立する一群。紋様の有無などにより3つに細分。
  - B-1類：沈線+縄文を施すもの。
  - B-2類：沈線または縄文を施すもの。
  - B-3類：条痕などの器面調整のみの無紋土器。
- ・ C類 口縁部が緩やかに外反または外傾する一群。紋様の有無などにより3つに細分。
  - C-1類：沈線+縄文を施すもの。
  - C-2類：沈線または縄文を施すもの。





第11図 SH2平・断面・土層図 (S=1/60) 炉平・断面図 (S=1/40)



第12図 SH2遺物出土状況 平・断面図 (S=1/40)

C-3類：条痕などの器面調整のみの無紋土器。

A-1類（1～5） 波頂部は山型をなし、波頂部直下に渦巻文が描かれている。口縁部外面は巻貝擬似縄文とし、平行沈線を3～4条巡らせる。1は沈線が楕円を形成しその内側に1本沈線を取り込む。口縁部外面は沈線により段を有す。楕円形文の間には刺突がみられる。胴部は頸部付近でくびれた後に外方に張り出す。その張り出し部に平行沈線を4条程度描く。4は復元口径46cmの深鉢である。5は胴部に斜めの平行沈線を施す。

A-2類（6～11） 山型の波頂部を有する。6の口縁部は厚い。6・10は口縁部と頸部の境に段がつく。いずれの資料も口縁部の沈線が浅く、A-1類のような段を有さない。11は巻貝による擬似縄文を胴部へ密に施す。

A-3類（12～14） 波頂部は山型をなす。12は胴部が張り出さない。

B-1類（15～19） 口縁部は器壁が薄いものと厚いものに分かれる。器壁の薄い15には穿孔がみられる。胴部には波状沈線が巡る。17・18は磨消縄文とする。

B-2類（20～39） 深鉢形状のものと浅鉢形状のものに分かれる。24は波頂部直下に渦巻文が描かれる。27は波頂部に縦位隆帯が付される。32は口縁部と胴部に沈線を描くがA-1類と比べると細く浅い。33は波頂部直下に放射状に3本の沈線がのびる。横は沈線の展開が予想される。浅鉢形状の34は内面に沈線で波状の紋様を描く。36は同一個体か。35は外面に多数の刺突文がある。39は多条沈線の磨消縄文とする。

B-3類（40～42） 口縁部の形状は多様である。41は三角形に肥厚する端部である。42は口唇部に刺突孔を施す。

C-1類（43） 口唇部に擬似縄文、口縁部に沈線を施す。

C-2類（44～46） 44の口縁部は外面がやや肥厚する。45は胴部外面に沈線がみられる。46は内面に円形の圧痕がある。

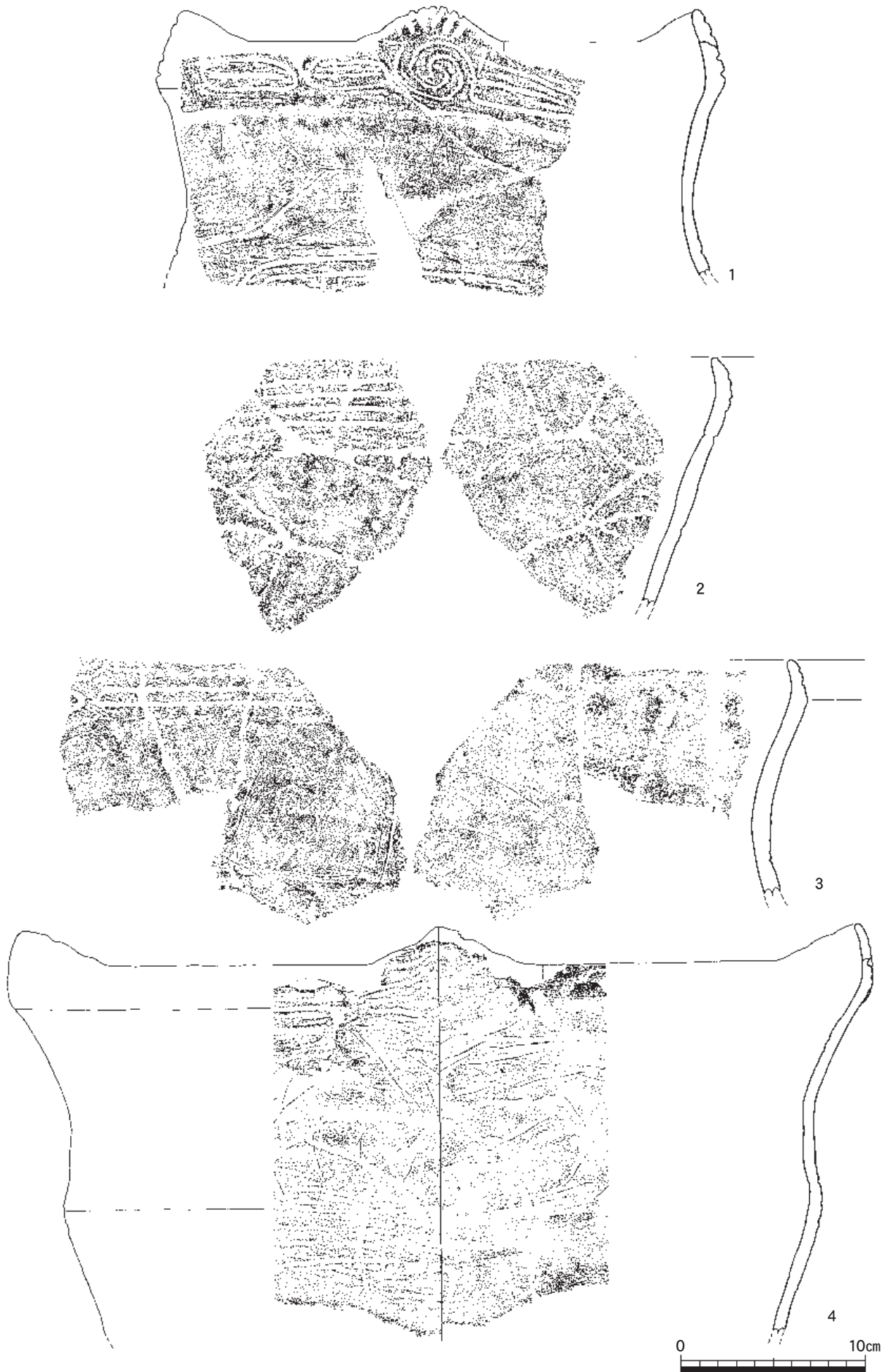
C-3類（47～52） 波頂部を有す資料が多く外面の条痕は横方向に施すものが多い。47・52は深鉢である。49は口縁部に穿孔が2つ認められる。

胴部（53～60） 53は口縁部に近い部位で巻貝による擬似縄文を密に施す。55は2段の平行沈線間にV字の沈線を連続で刻む。56はS字状に沈線がみられる。59は縄文を施す。60は内面に沈線文を施す。

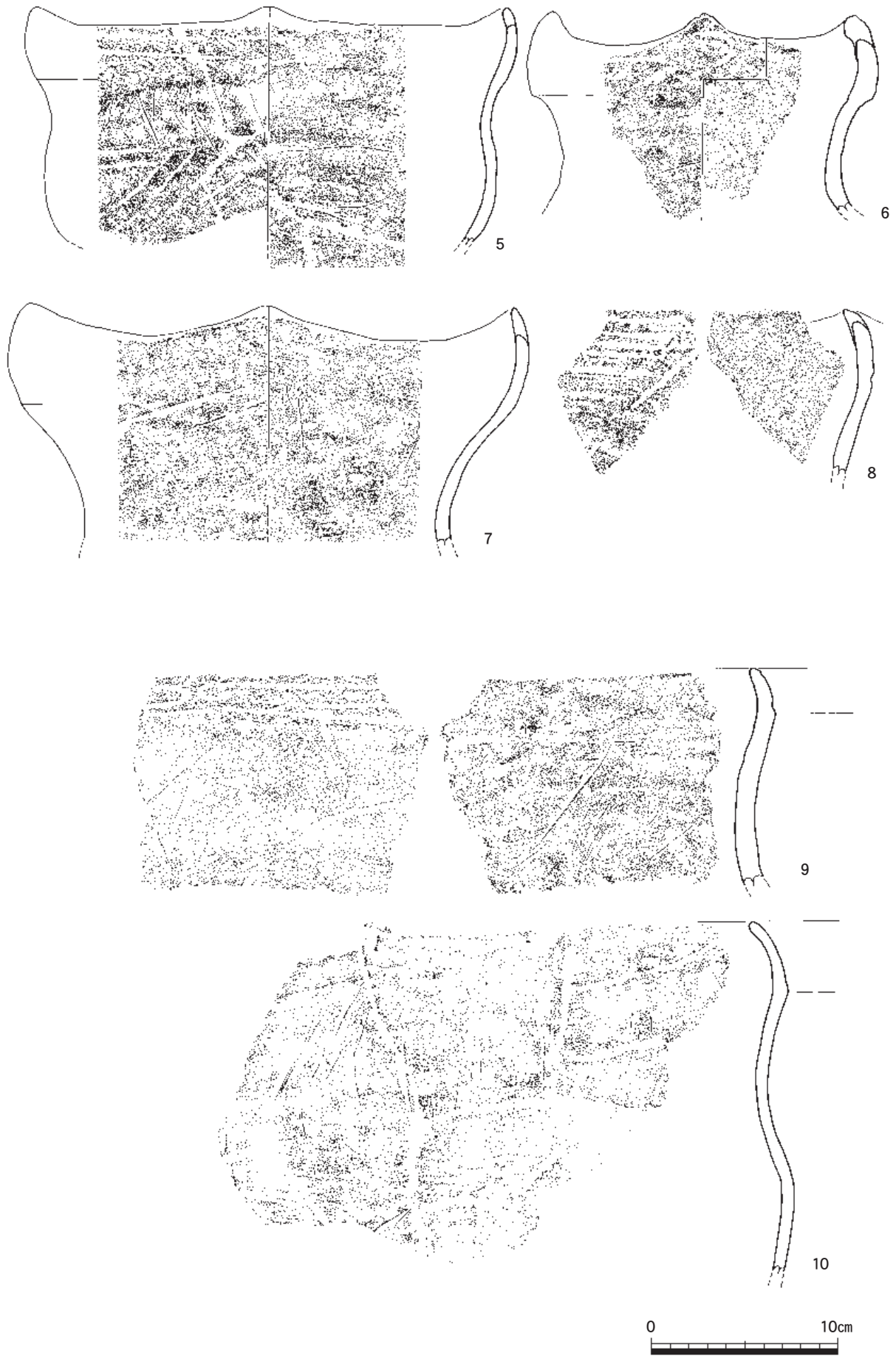
底部（61～64） 61・62はバケツ型を呈する。61は器高10cmと低い。64は高環状の脚部で4箇所穿孔を施す。

メンコ状土器（65～68） 土器片の縁辺部を削り円形に加工したものである。65・66・67は加工後研磨し断面は丸みを帯びる。65・68は土器の内面と考えられ中央部に刺突が認められる。

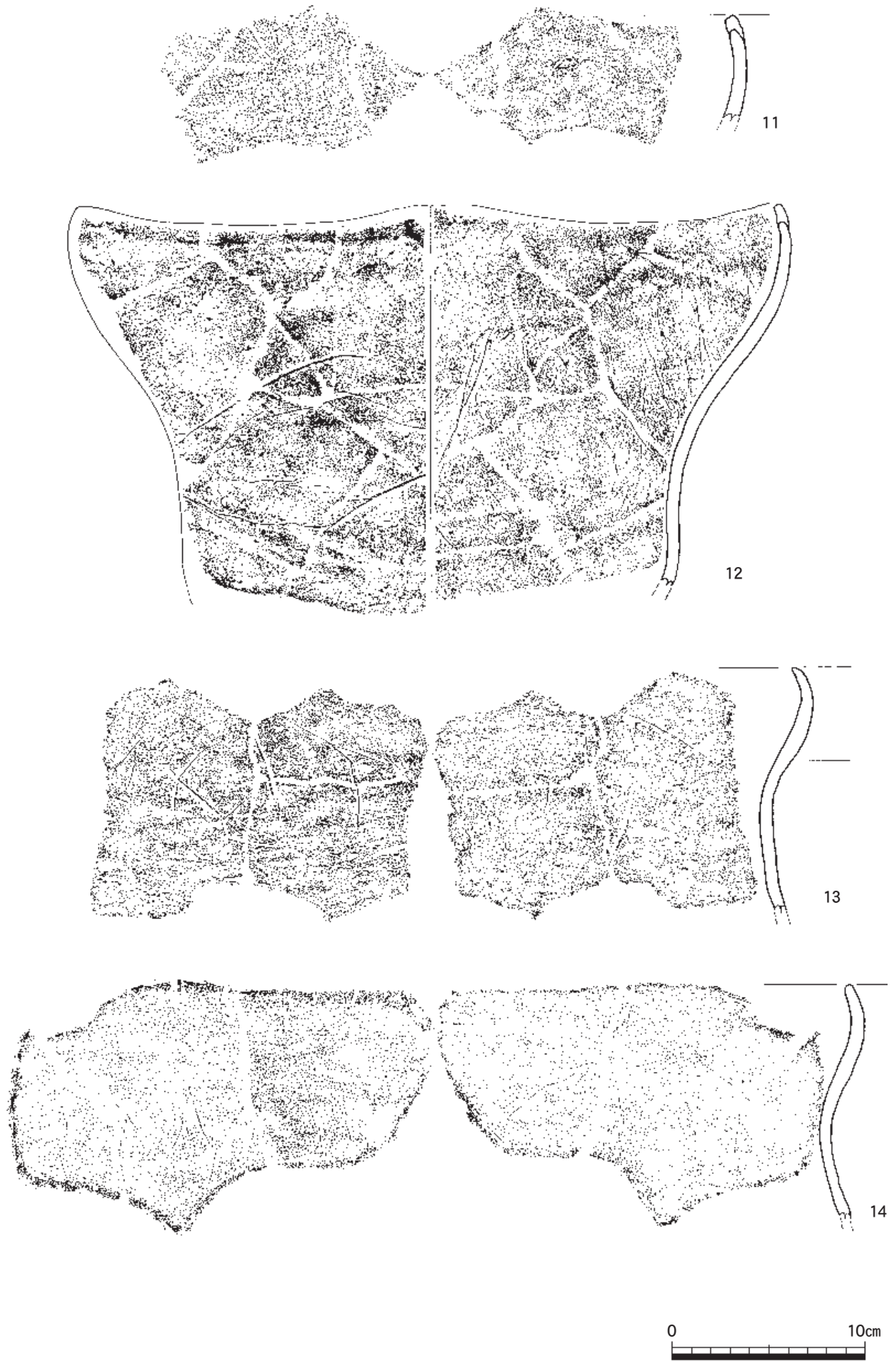
石器は10点を図示した。1・2は石鏃。姫島産黒曜石製。中央部でやや肩が張り出した後に脚部はまっすぐ降り、基部にやや深い抉りが入る。表・裏面ともに丁寧な押圧剥離が施されている。2は多久産と考えられるサヌカイト製。表・裏面に丁寧な押圧剥離が施されている。3は緑泥片岩製の横刃削器。扁平な幅広剥片を素材としており、周縁部に裏面から急斜度の加工を施して整形・刃部形成している。左半を欠損している。4～9は打製石斧。4～6・8・9は緑泥片岩製。4は表・裏面に大柄で平坦な加工を施した後、周縁部にやや細かな調整を入れて整形・刃部形成を行っている。右周縁部付近を欠損している。5は表・裏面に大柄で平坦な加工を施した後、周縁部に急



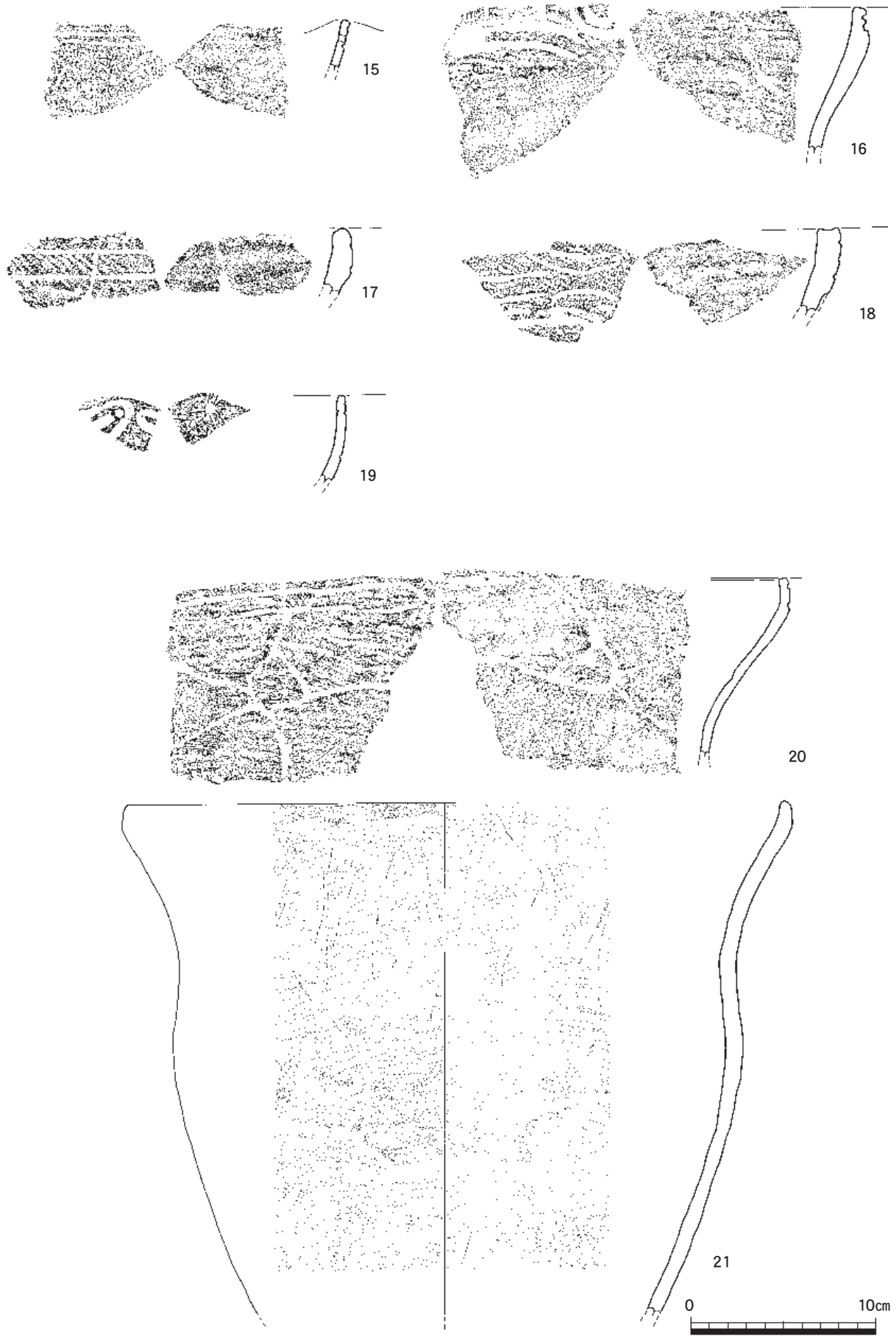
第13図 SH2出土遺物 (1) (S=1/3)



第14図 SH2出土遺物(2) (S=1/3)



第15図 SH2出土遺物(3) (S=1/3)

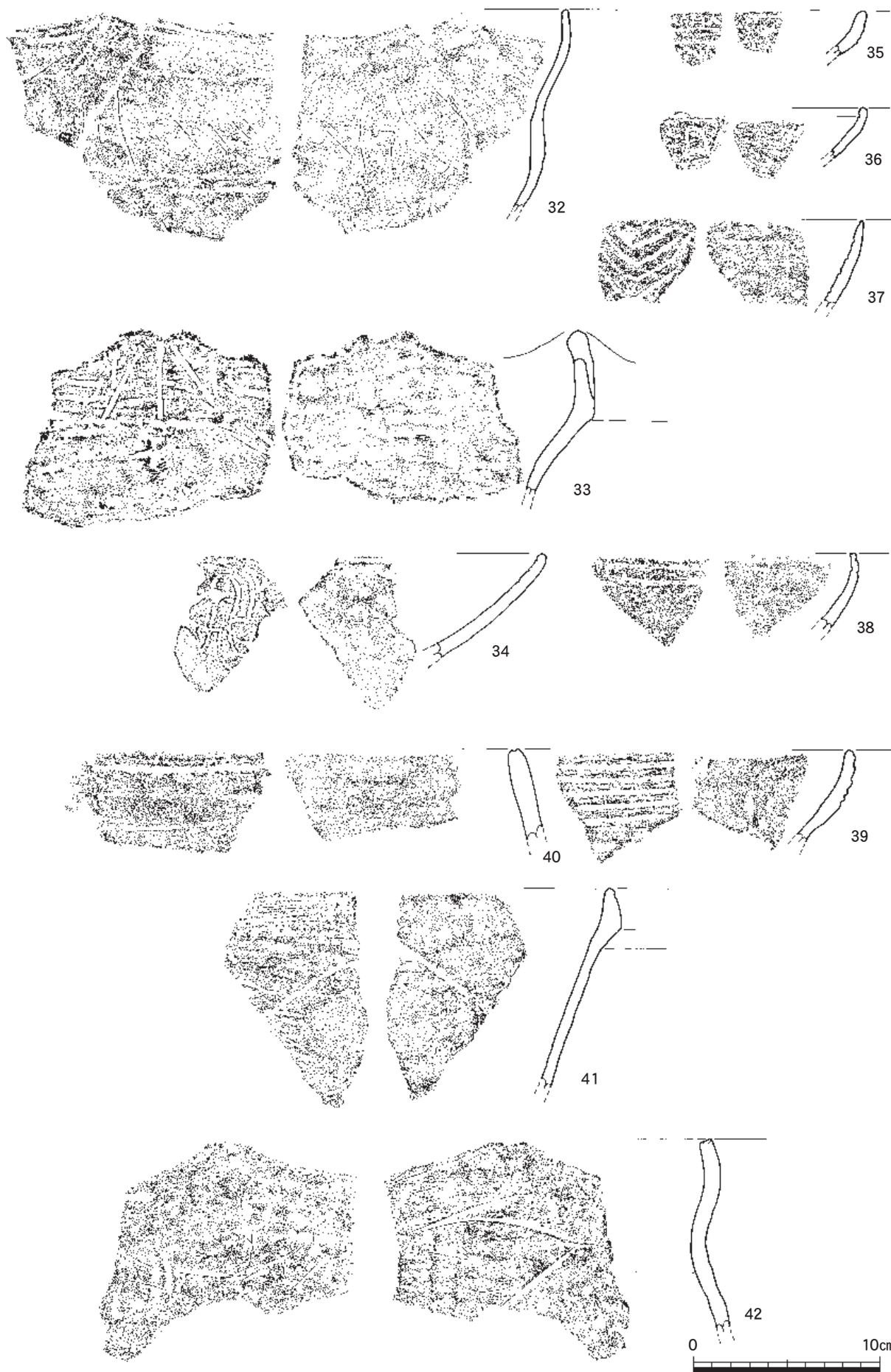


第16図 SH2出土遺物(4) (S=1/3)

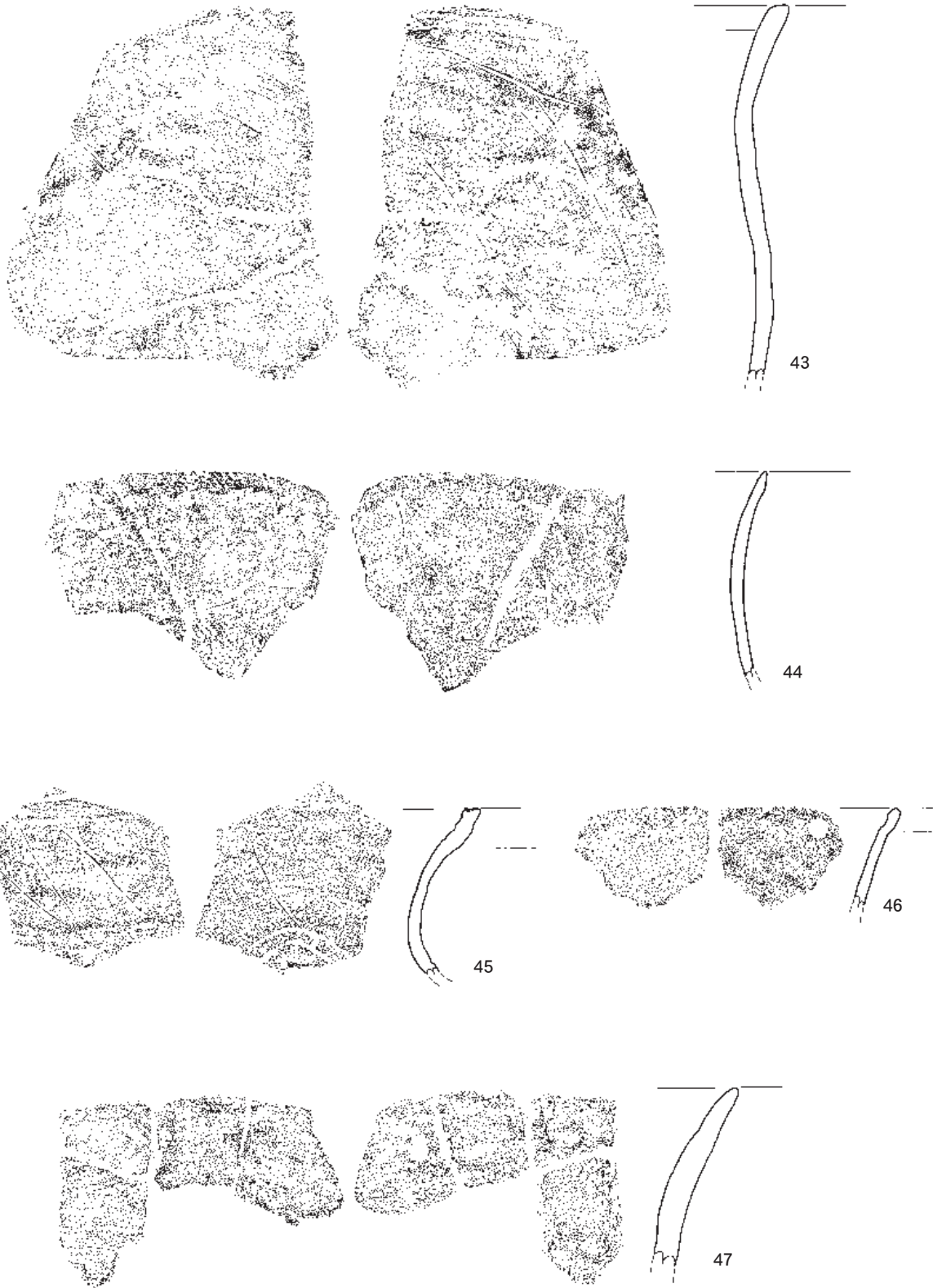


第17图 SH2出土遺物 (5) (S=1/3)

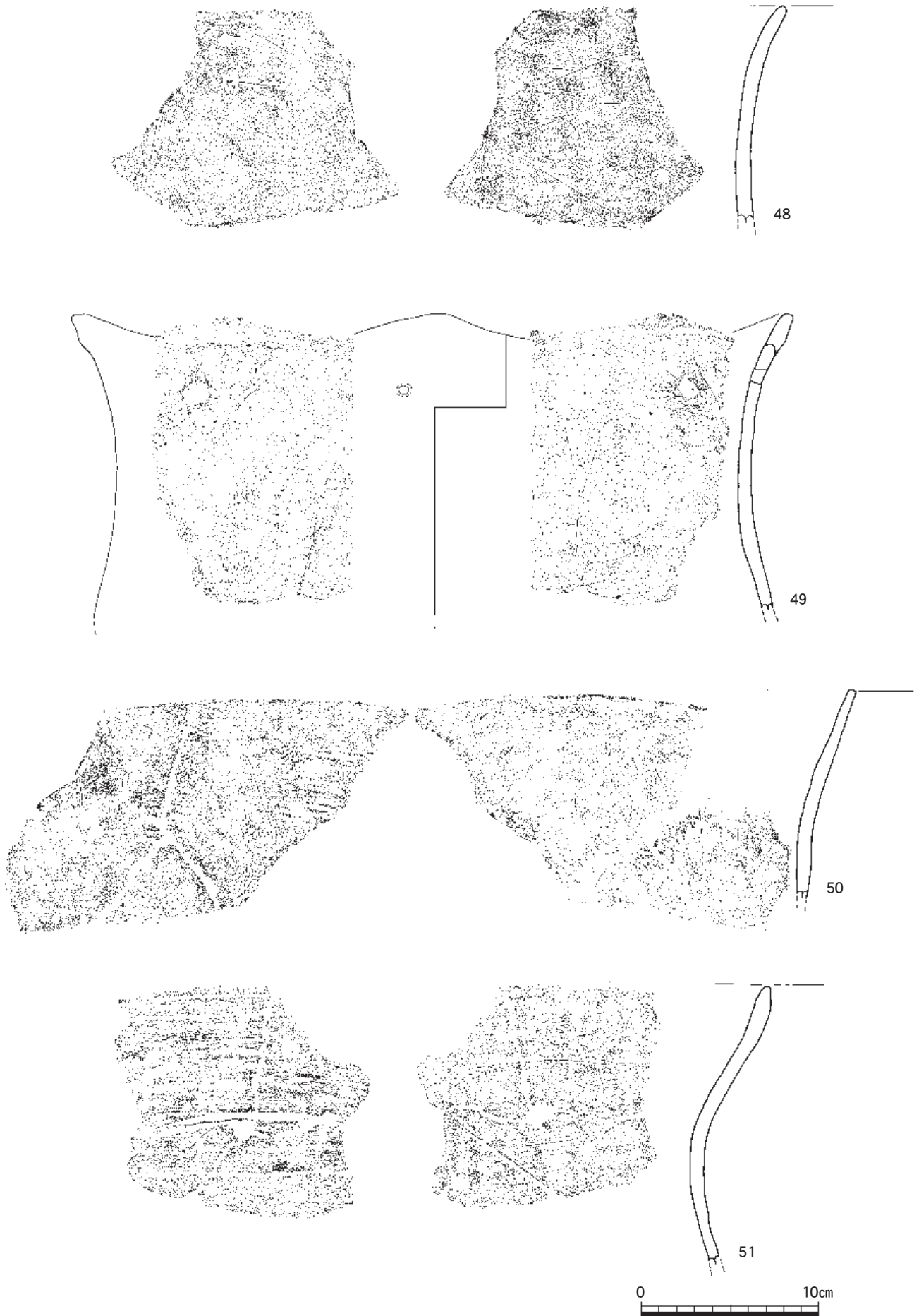




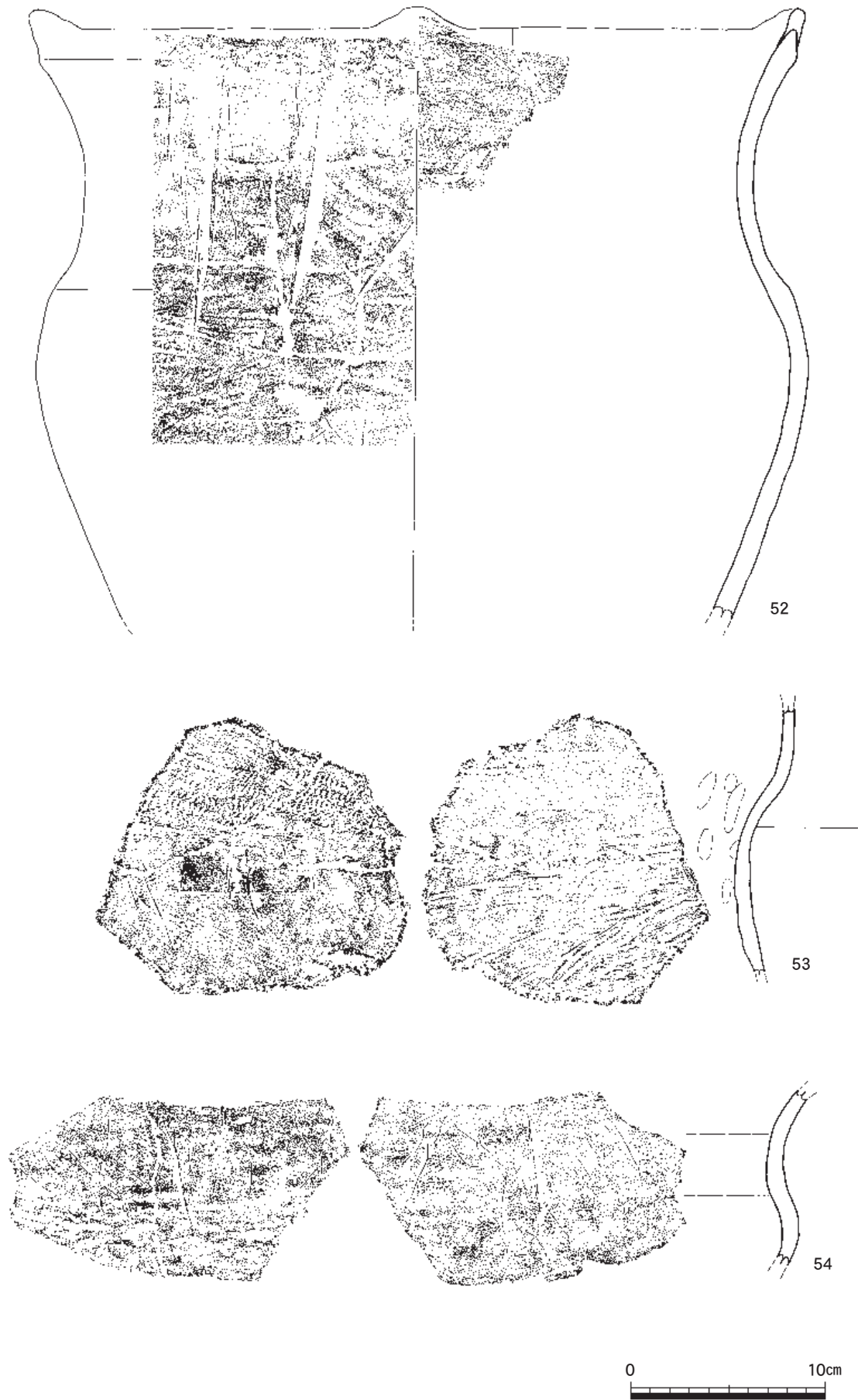
第18図 SH2出土遺物(6) (S=1/3)



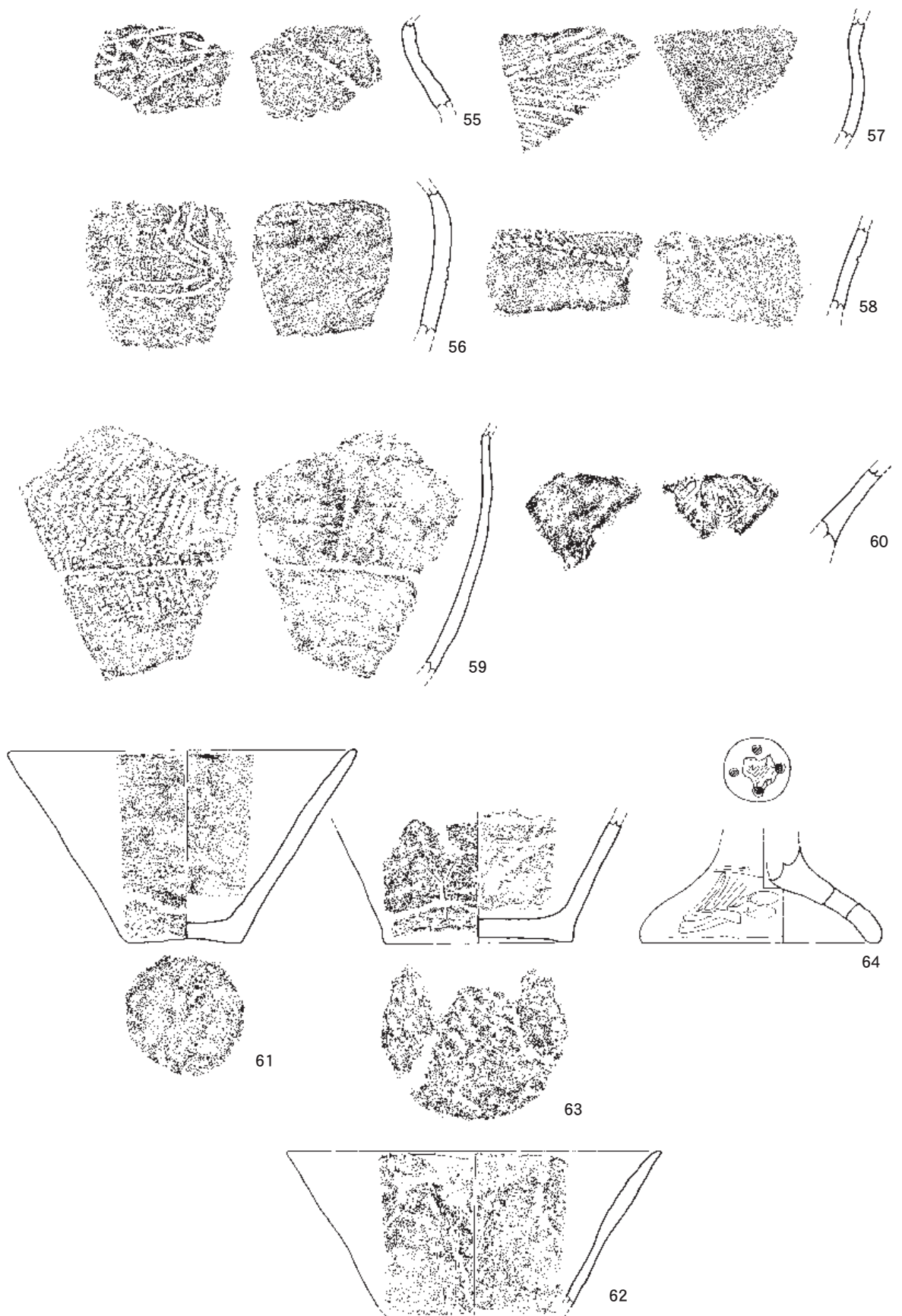
第19図 SH2出土遺物(7) (S=1/3)



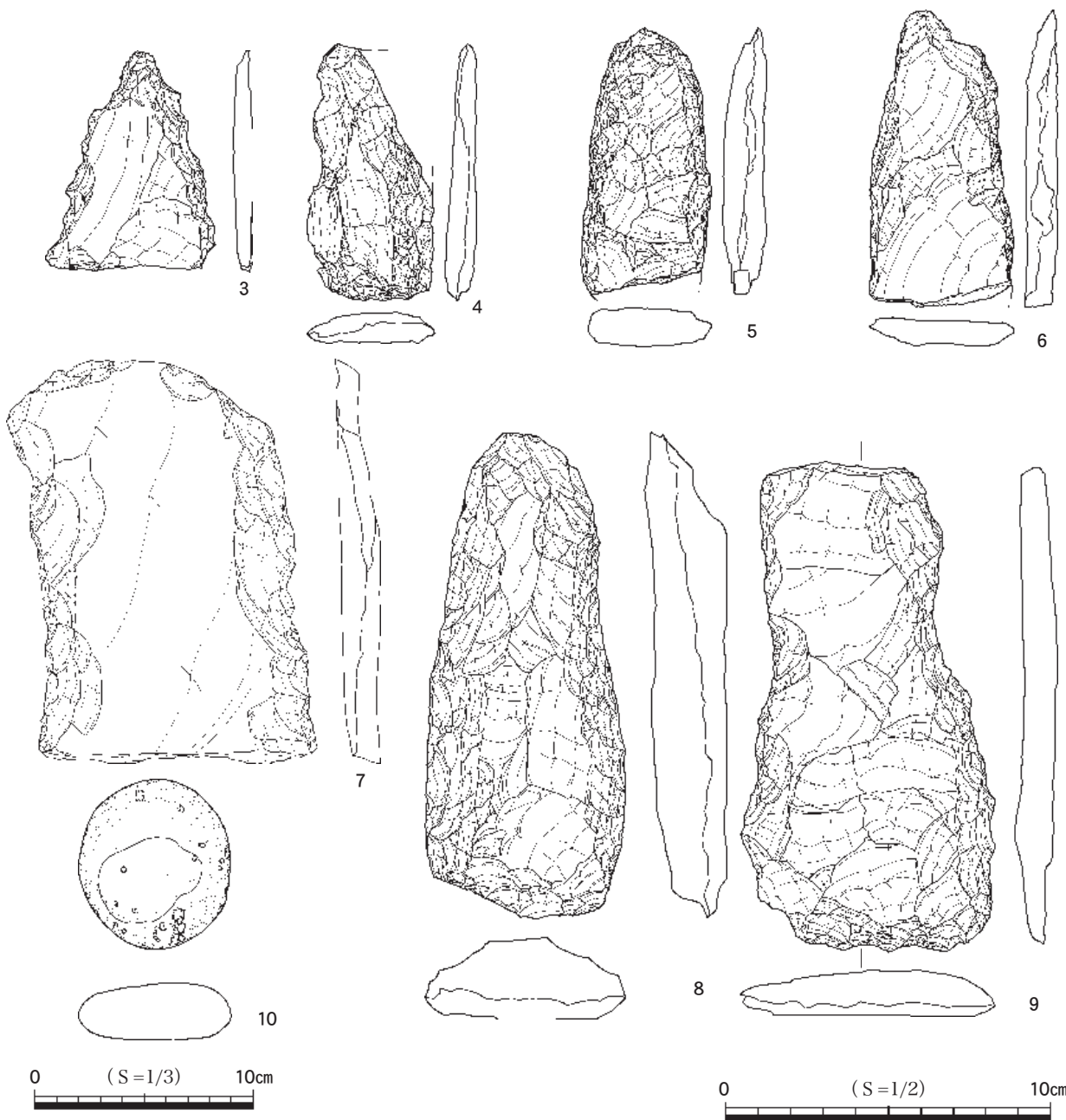
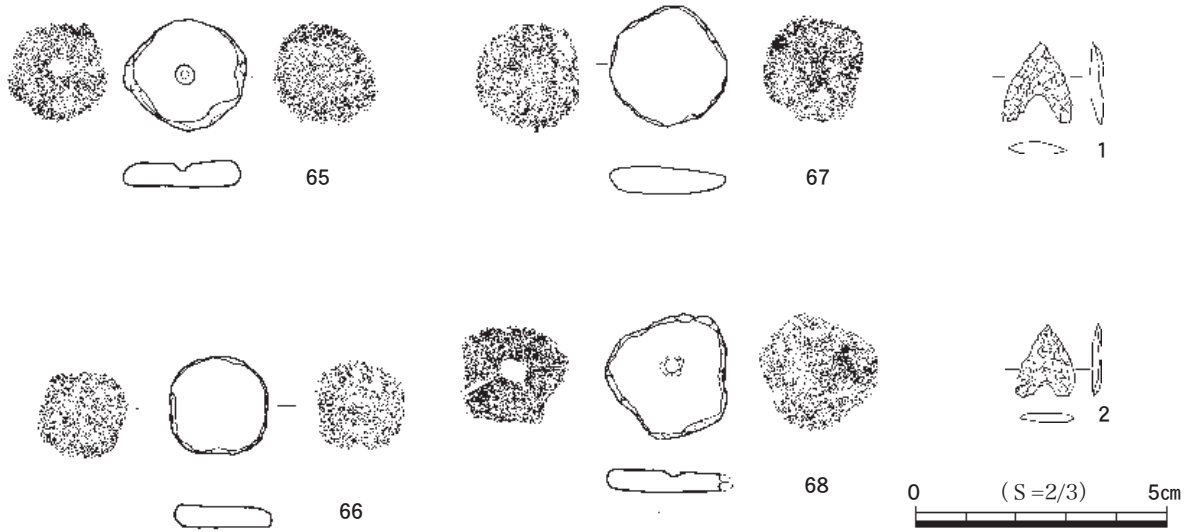
第20図 SH2出土遺物(8) (S=1/3)



第21図 SH2出土遺物 (9) (S=1/3)



第22図 SH2出土遺物(10) (S=1/3)



第23図 SH2出土遺物 (11) (S=1/2 (3~9)、S=1/3 (10、65~68)、S=2/3 (1、2))

斜度な調整を行って整形している。基部を若干、刃部を完全に欠損している。6は表・裏面に大柄で平坦な加工を施した後、周縁部に急斜度な調整を入れて整形している。基部と刃部を欠損している。7は結晶片岩製。大型の幅広剥片を素材とし、表・裏面の周縁部にのみ加工を施して整形している。刃部を大きく欠損している。8は表・裏面に大柄で面的な加工を施して厚みを取った後、周縁部に急斜度の調整を入れて整形・刃部形成している。9は表・裏面に大柄で面的な加工を施して厚みを取った後、周縁部に急斜度な調整を入れて整形・刃部形成している。刃部に使用痕が認められ、基部を若干欠損している。10は磨石兼敲石。安山岩製で円礫縁辺部に敲打痕が認められる。

#### SH5 (第24図)

第3調査区L-6で検出した竪穴住居跡である。南辺は明確に検出できなかったが、円形を基調にしていると思われる。南北方向に3.6m、東西方向に4.1m、深さ25cmの規模である。周壁は認められない。壁の傾斜は緩やかである。埋土は土器を多量に含む暗茶褐色砂質土が堆積する。2層に分層したが単層の埋土とみてよい。

床面中央に炉が敷設されている。本住居には立石は認められない。柱穴状ピットは、P1～5が主柱穴と考えられる。P2・3は深さ10cm程度と浅い。P6・7・8は12～15cm程度とやや深く、配置から入口などの遺構であろうか。その他のピットの用途は不明である。遺物はパンケース2箱分が出土している。石町式土器が多数出土しているため本遺構は縄文時代後期中葉の所産と推定する。

#### 炉跡 (第24図)

炉跡は住居跡のほぼ中央に位置し、N71°W方向に軸線に向ける。輪郭は楕円形を呈し、長軸30cm、幅20cm、深さ10cmの大きさである。壁に被熱した安山岩の円礫を2つ検出している。壁面全体に石が貼り付けられていたかどうか不明である。埋土の情報は未記録のため詳細にしない。炉跡外に焼土面は存在しない。

#### 出土遺物 (第25～28図)

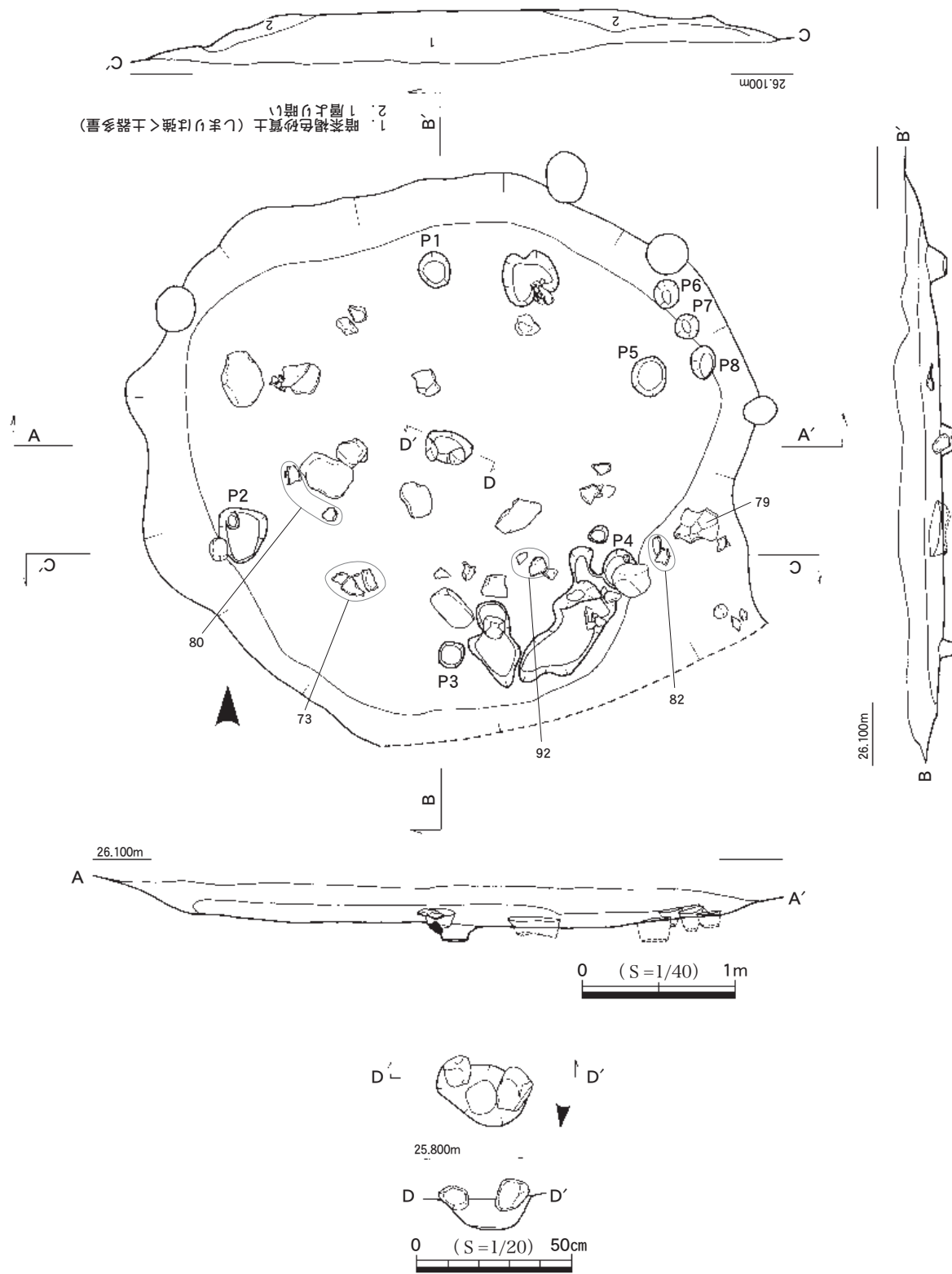
土器は17点、石器を4点図示した。遺物は床面直上にほとんどみられず、床面から10cm程浮いた状態で出土している。住居は廃絶後遺物を多量に含む土砂で短期間の内に埋没したものと思われる。鉢形土器はSH2の分類基準を準用する。本住居ではA類は確認できていない。

B-2類 (69～71) 胴部外面に沈線が付されている。71は端部が外方に肥厚し段を有する。

B-3類 (72～73) 72は波頂部を有し、直下に縦位の隆帯を付す。沈線は隆帯の横に縦方向に施される。73は波頂部があり、口縁部は内方への屈曲が強い。

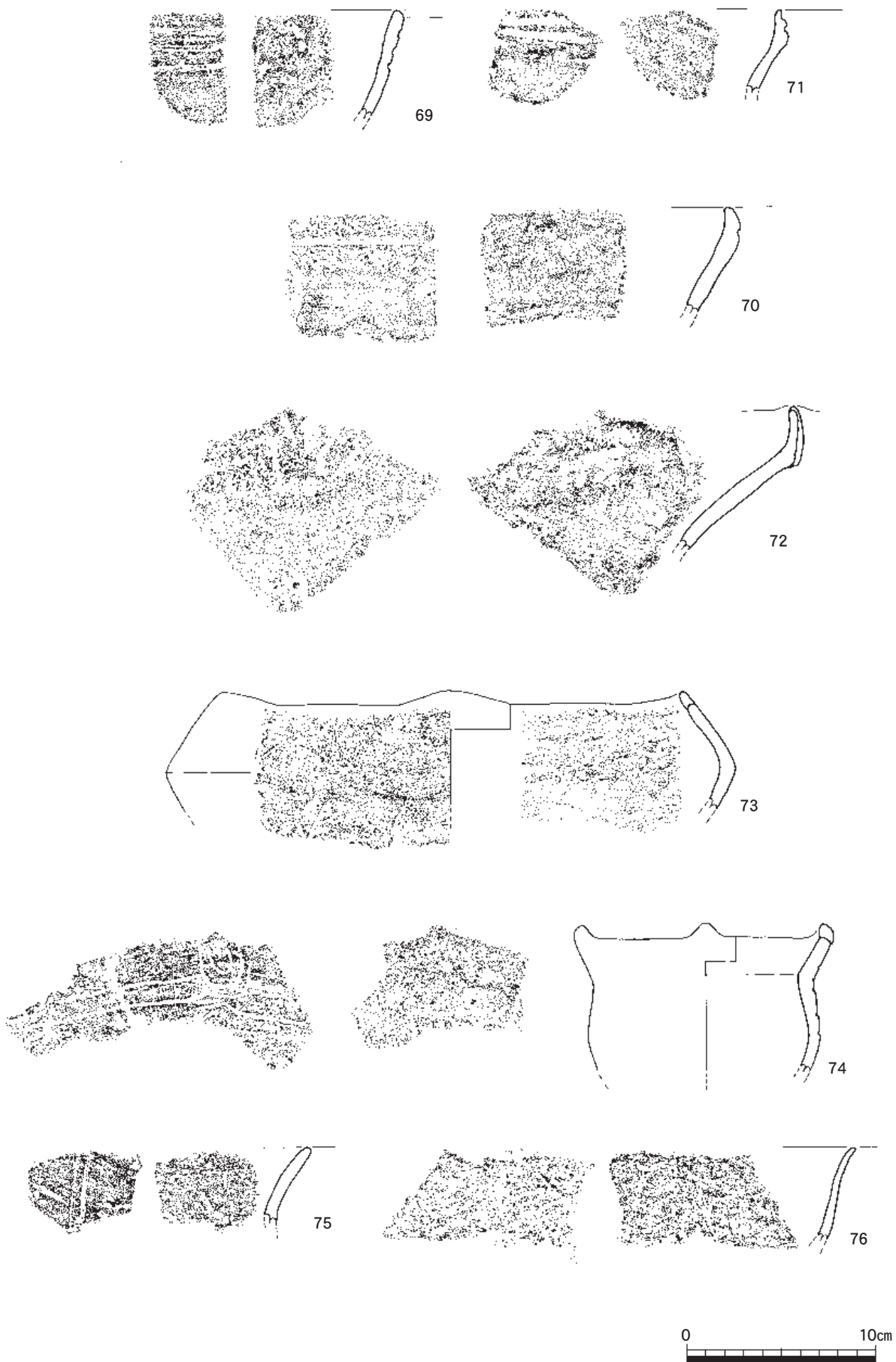
C-2類 (74～76) 74は復元口径13cmの小型の鉢。山型の波頂部直下に沈線で雑な円弧を描く。75は2本の縦方向の沈線がみられる。

C-3類 (77～82) 79は縦位の隆帯が波頂部とみられる箇所にある。80は端部が短く外方に屈曲する。



第24図 SH5平・断面・土層図 (S=1/40) 平・断面図 (S=1/20)

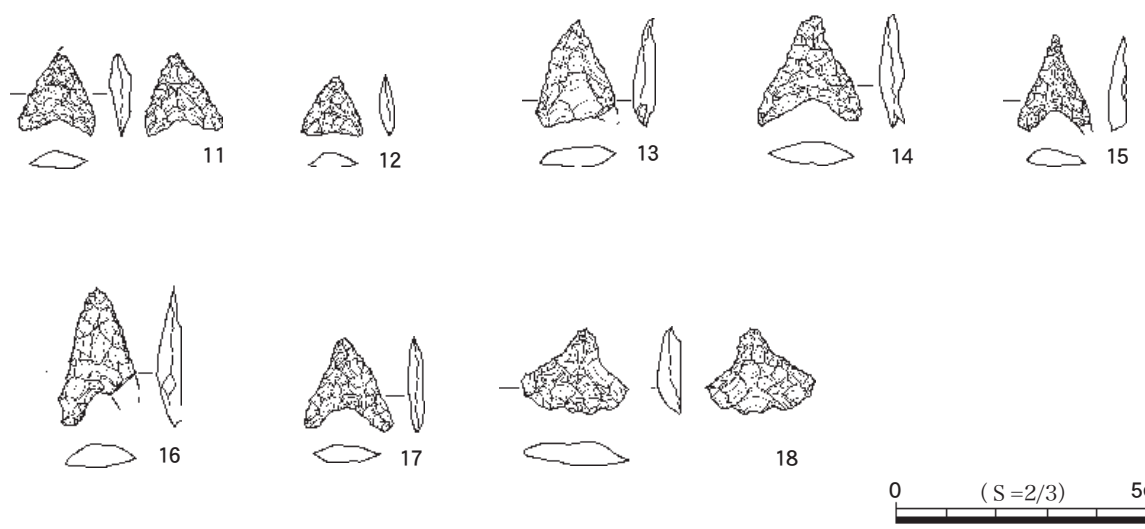
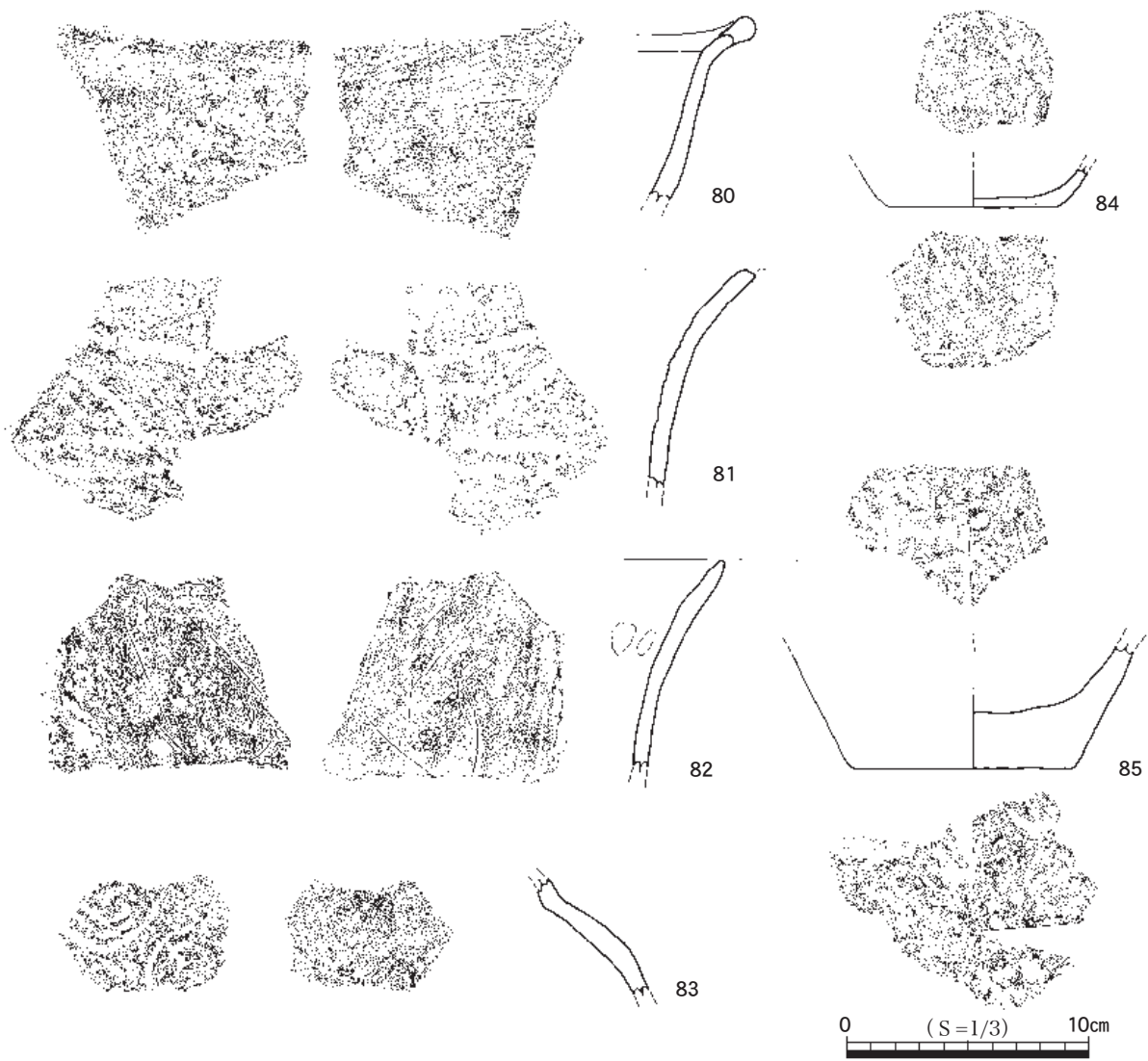




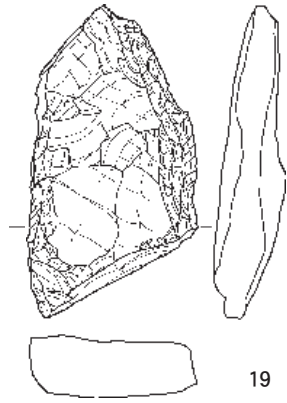
第25図 SH5出土遺物 (1) (S=1/3)



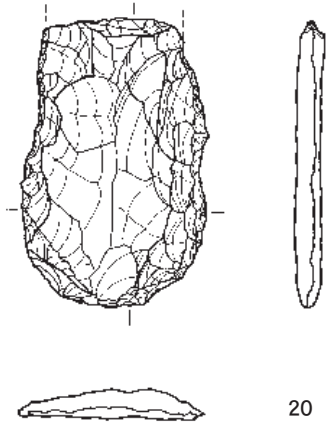
第26図 SH5出土遺物(2) (S=1/3)



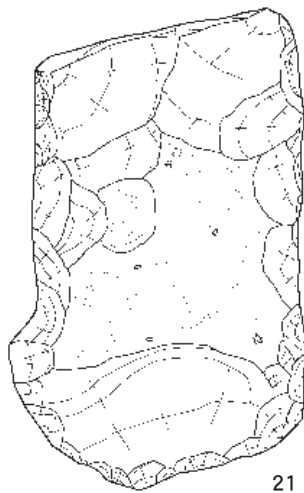
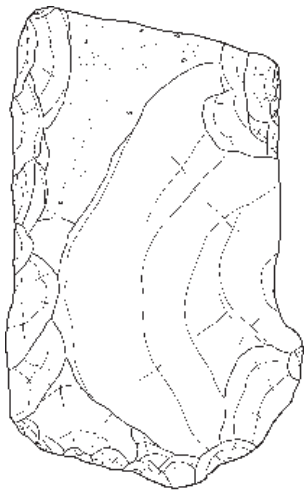
第27図 SH5 出土遺物 (3) (S=1/3 (80~85)、S=2/3 (11~18))



19

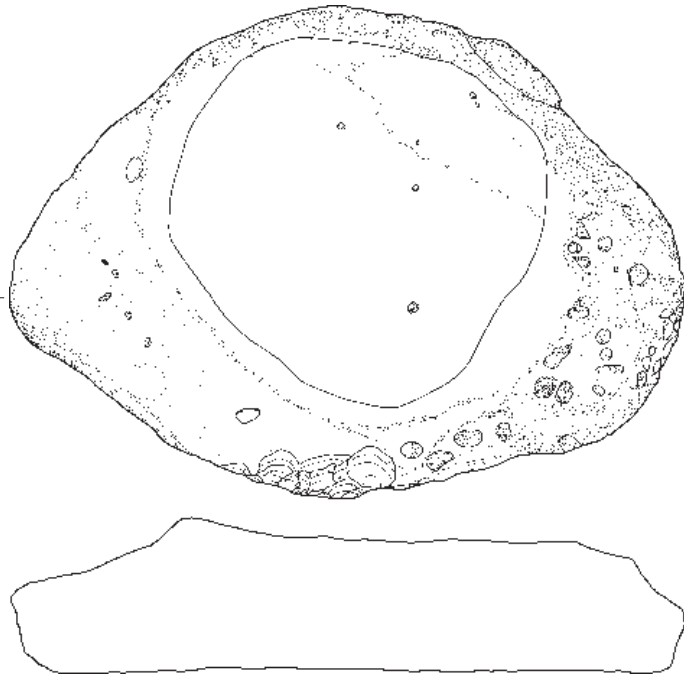


20



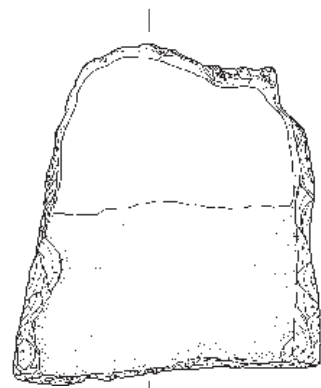
21

0 (S=1/2) 10cm



22

0 (S=1/4) 10cm



23

0 (S=1/3) 10cm

第28図 SH5出土遺物(4) (S=1/2 (19~21)、S=1/3 (23)、S=1/4 (22))

胴部 (83) 円弧を2つ描く。

底部 (84・85) 84は器壁が薄く、内面にススが付着している。85は厚い底部で雑なナデを施す。

石器は23点を図示した。11～17は石鏃。11は安山岩製。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、正三角形に近い形状に仕上げられており、先端と左脚を僅かに欠損している。12はチャート製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及ぶが、裏面の先端近くには素材の面が若干残る。先端・両脚ともに僅かに欠損している。13～17は姫島産黒曜石製。13は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、ごく浅い抉りも認められる。先端は欠損後にリダクションしており、右脚は欠損している。14は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、脚部が斜めに広がる形状に整形されたようで、基部にはやや浅い抉りが入る。右脚の欠損後のリダクションによってやや歪となり、最終的には先端も欠損している。15は表・裏面のない奥部にまで押圧剥離が及び、基部に浅い抉りが入る。先端・右脚を僅かに欠損している。16は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、やや深い抉りが入られている。先端は欠損後にリダクションされており、左脚は僅かに、右脚は完全に欠損している。17は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、正三角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りが入る。先端を僅かに欠損している。18は姫島産黒曜石製の石匙。表・裏面に平坦な加工を施した後、左右側面中央に裏面から急斜度な調整を入れて抉りを形成している。刃部に顕著に使用痕が認められる。19～21は角閃石安山岩製の打製石斧。表・裏面に大柄で面的な加工を施して厚みを取った後、周縁部に急斜度な調整を入れて整形している。基部を若干、刃部を完全に欠損している。20は幅広剥片を素材とし、背面に大柄な加工を施して扁平化し、裏面から周縁部に細かな調整を入れて整形・刃部形成を行っている。基部を若干、裏面からの折れによって欠損している。21は基部が欠損している。短冊形か。22・23は角閃石安山岩製の台石。22は上面が磨耗しわずかにくぼむ。炉から1m西に離れた場所で床面から浮いた状態で出土した。23は全長不明の小型品。縁辺部を調整剥離している。

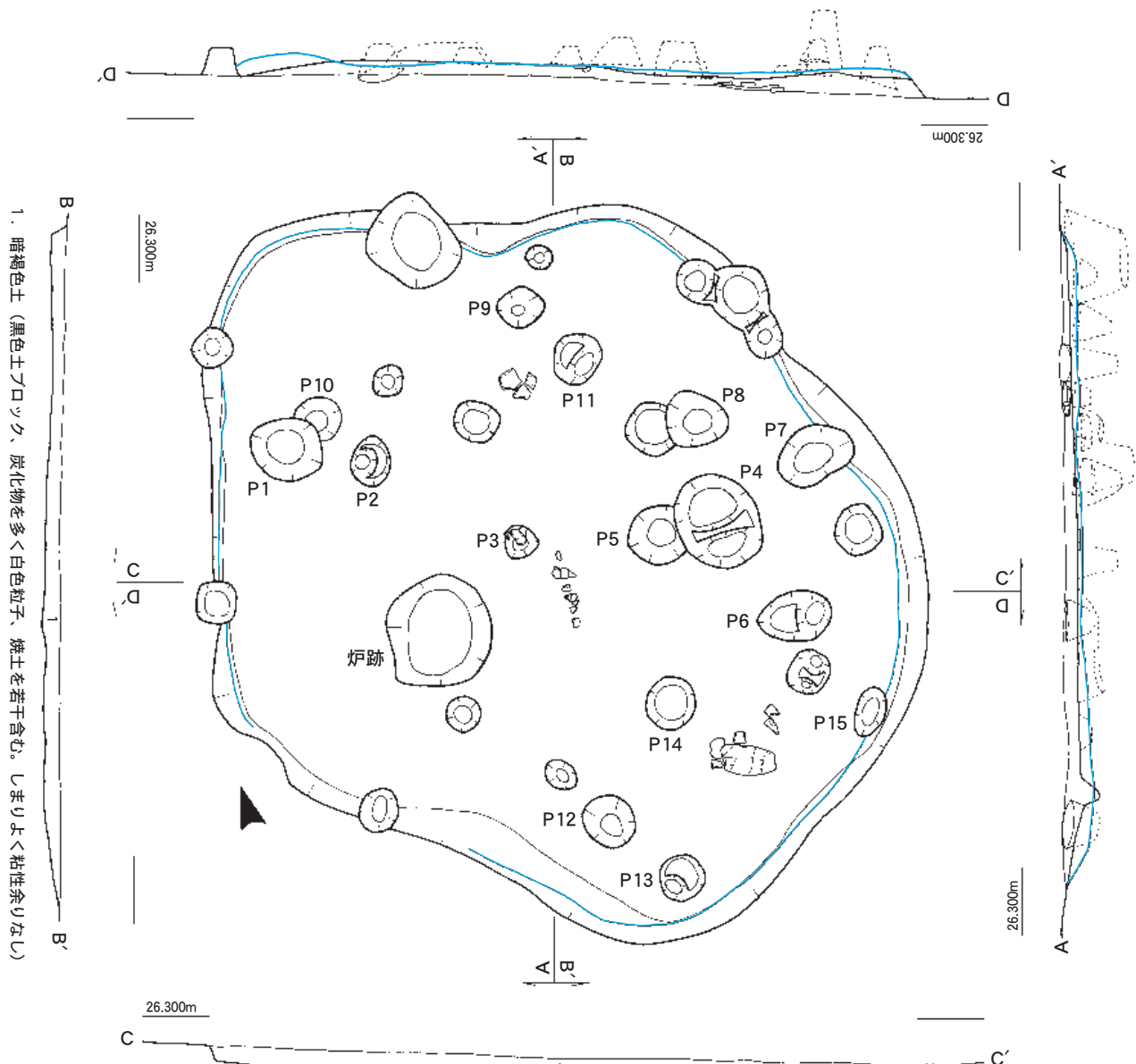
### SH9 (第29図)

第3調査区J-6で検出した竪穴住居跡である。歪な5角形を呈する。南東-北西方向に4.4m、北東-南西方向に4.3m、深さ20cmの規模である。周壁は認められない。北辺や西辺の傾斜はやや急である。埋土は土器を多量に含む暗褐色砂質土で、炭化物が多く焼土を若干含む。

床面中央やや西よりに炉が敷設されている。柱穴状ピットは、P1～15が主柱穴と考えられるが本数が多く判断できない。P1～9は深さ20～40cm程度と深く、P10～15は10～20cm程度とやや深い。住居中央西よりの炉を配置したため、柱穴はそれ以外の範囲に集中している。その他壁際に深さ30cm程度の柱穴があるが、住居との関係は不明である。貼り床は深い所で6cmの厚さで構築されている。遺物はパンケース9箱分が出土している。石町式土器が多数出土した本遺構は縄文時代後期中葉の所産と推定する。

### 炉跡

炉跡は住居跡の中央やや西よりに位置し、N60°W方向に軸線に向ける。輪郭は歪な楕円形で、最大長70cm、最大幅60cm、深さ10cmの規模である。炉の床面は被熱しており赤色を呈する。その上面に炭化物や黒褐色土ブロックを多く含む焼土塊が堆積する。さらに上面は焼土が多く炭化物が多い黒褐色土が堆積し、中央西よりに赤色範囲が広がる。

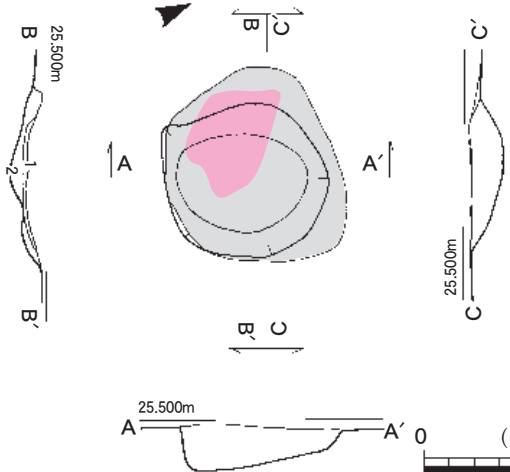


1. 暗褐色土 (黒色土ブロック、炭化物を多く白色粒子、焼土を若干含む。しまりよく粘性余りなし)

1. 暗褐色土 (黒色土ブロック、炭化物を多く白色粒子、焼土を若干含む。しまりよく粘性余りなし)

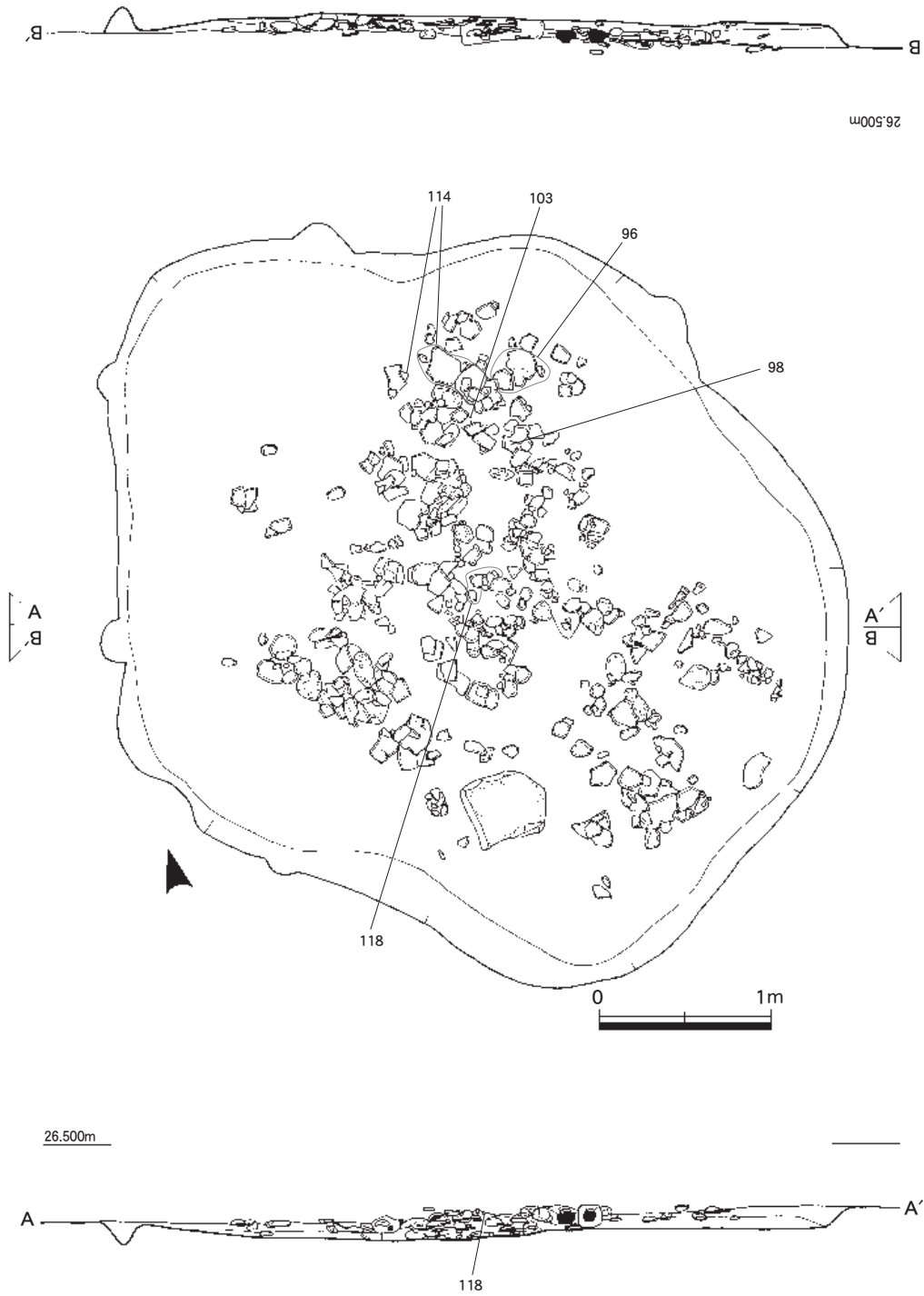
0 (S=1/40) 1m

1. 暗褐色土 (黒褐色土ブロック、焼土を多く炭化物を若干含む。しまりよく粘性始どなし。上半部実測前に掘られた)  
 2. 赤褐色土 (炭化物、黒褐色土ブロックを多く含む。しまりよく粘性始どなし。焼土塊)



0 (S=1/30) 1m

第29図 SH9平・断面・土層図 (S=1/40) 炉平・断面・土層図 (S=1/30)



第30図 SH9遺物出土状況 平・断面図 (S=1/40)

### 遺物出土状況（第30図） 出土遺物（第31～39図）

土器は36点、石器を5点を図示した。遺物は床面直上に少量みられたが、ほとんどが床面から5cm程浮いた状態で出土している。住居埋土は単層であることから廃絶後短期間の内に埋没されたものと思われる。

鉢形土器はSH2の分類基準を準用する。

A-1類（86～88） 86は波頂部に縦位の隆帯が付され、沈線が3条延びる。87は隆帯は施されず沈線が延びる。

B-1類（89） 口縁部に巻貝による擬似縄文が施され浅い沈線が巡る。

B-2類（90～91） 90は直立する口縁部の波頂部に縦位の隆帯がみられる。91は口縁部に山形の沈線文が施される。

B-3類（92～94） 94は粗い貝殻条痕がみられる。

C-1類（95） 胴部に巻貝による擬似縄文が施されている。

C-2類（96～99） 96は口唇部に指頭サイズの凹みを3箇所施す。胴部は沈線文が巡る。98は縦位の隆帯が施される。99は波頂部の口唇部に刻目上に施文を施す。

C-3類（100～106） 100～102は胴部の張り出し部から口縁部まで緩やかに伸びる。103～105の口縁部は外方に直線的に伸びている。106は器壁が薄い。

胴部（107～115） 107は1本沈線を横方向に施しそこから半円状に沈線を二重に巡らせる。112は胴部の張りが強い。

底部（116～119） 116・118の底部は厚い。117は底径が12cmと他より大きい。

その他（120・121） 須恵器の蓋と皿である。6世紀末段階の資料である。混入であろう。

石器は10点を図示した。24は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、基部にはやや深い抉りが入る。右脚は若干の欠損の後、リダクションを施したようである。25はサヌカイト製の石錐。幅広剥片を素材とし、表・裏面から周縁部に加工を施して整形・先端形成を行っている。上端には手擦れ痕が認められ、末端の機能部は若干欠損している。26は緑泥片岩製の横刃削器。薄平な幅広剥片を素材とし、面的な平坦剥離を表・裏面に施した後、周縁部にやや細かな加工で整形と刃部形成を行っている。刃部には使用痕が、上端には装着痕ないしは手擦れが認められる。27は安山岩製の磨石で楕円形を呈する。28・29は安山岩製の磨石兼敲石。30は安山岩製の敲石で縁辺部に敲打痕が残る。31は凹み石で若干表面がくぼむ。32・33は台石。32は表面に擦痕などが認められる。33は使用面は平坦であるがくぼまない。厚みがあり縁辺に敲打痕がみえる。

### SH13（第40図）

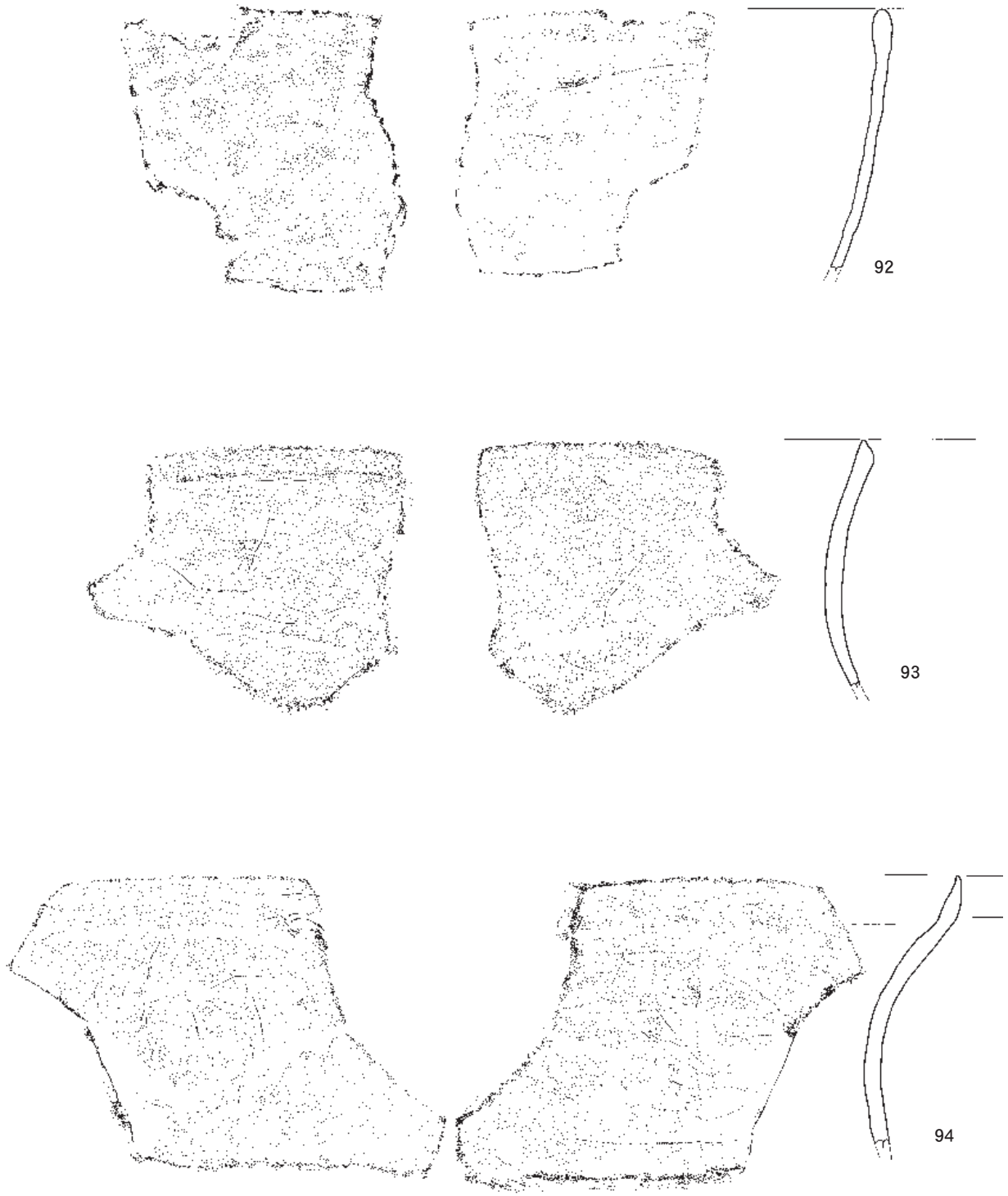
第3調査区M-5で検出した竪穴住居跡である。東辺はSD39により削平されている。N18°W方向に軸線を向ける。平面隅丸方形、南北方向に5.5m、東西方向に5.8m+ $\alpha$ 、深さ27～37cmの大きさである。深さ5cmの周壁が巡るが、西辺付近で途切れる。入口部であろうか。立ち上がりはやや急である。埋土は火山ガラスを多く含むしまりのよい暗褐色土が堆積する。土器の出土量は多くない。

床面中央やや西よりに炉が敷設されている。柱穴状ピットは、深さ20～45cmのP1～8が主柱穴と考えられる。P5・8は深さ約45cmある。P9～24は深さ10～20cm程度とやや深い。主柱穴の補助穴であろうか。その他の柱穴は浅い。床面から15cmの深さまで貼り床と想定し掘削したが、やや

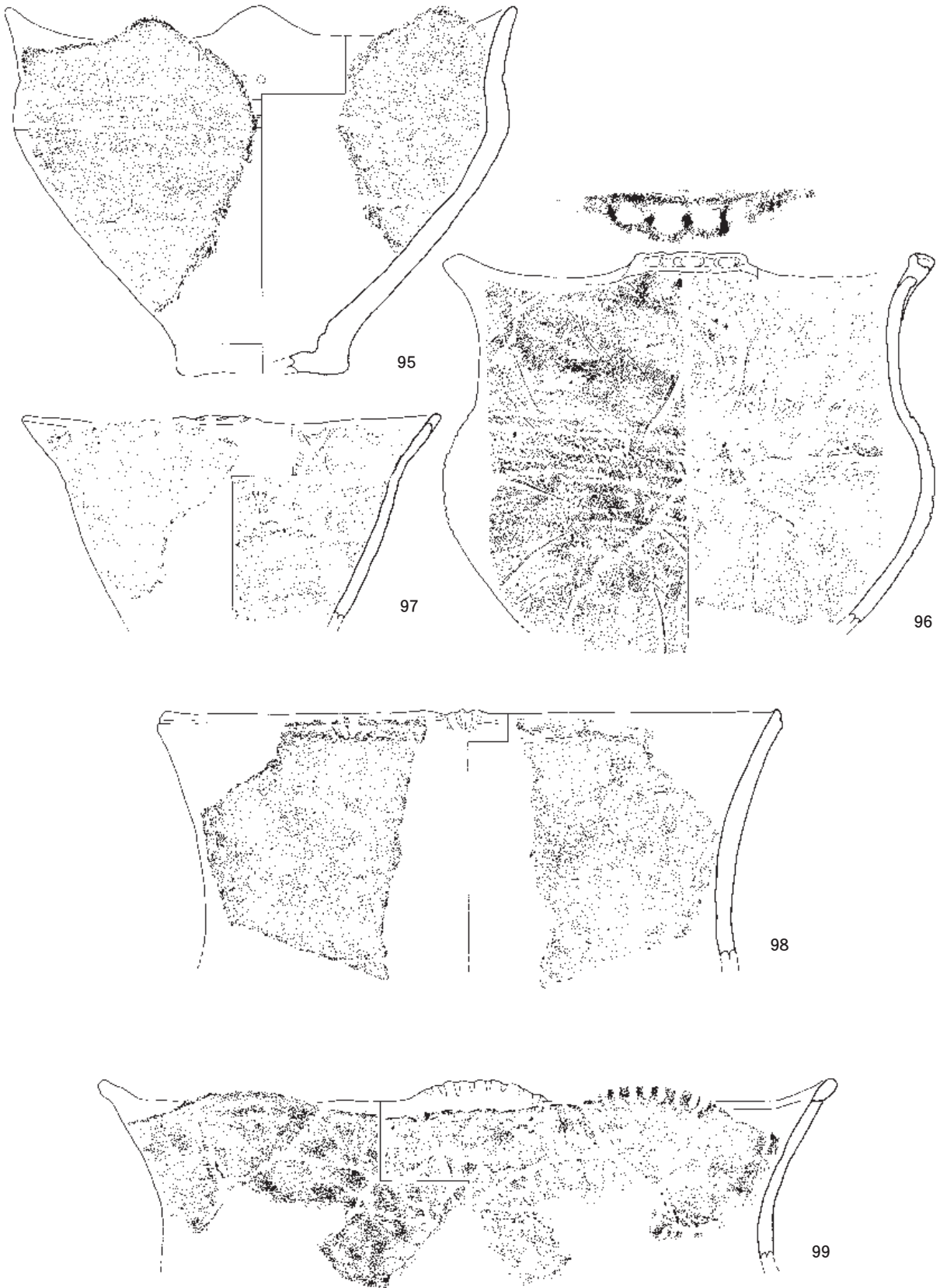




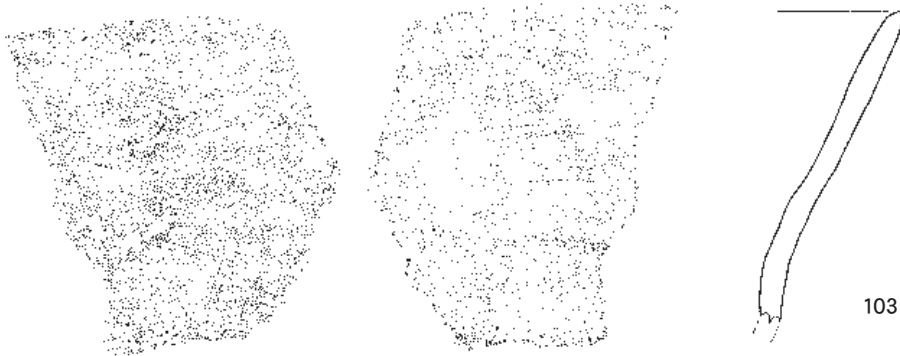
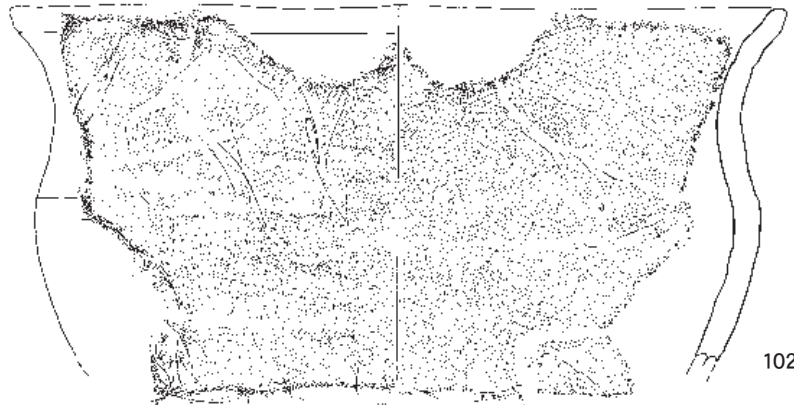
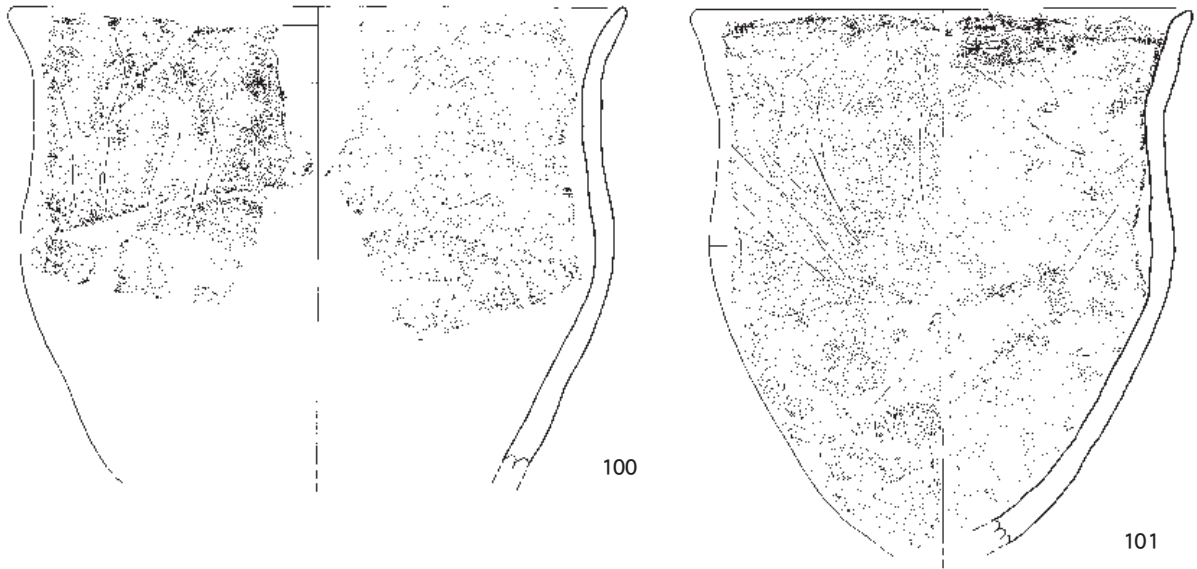
第31図 SH9出土遺物 (1) (S=1/3)



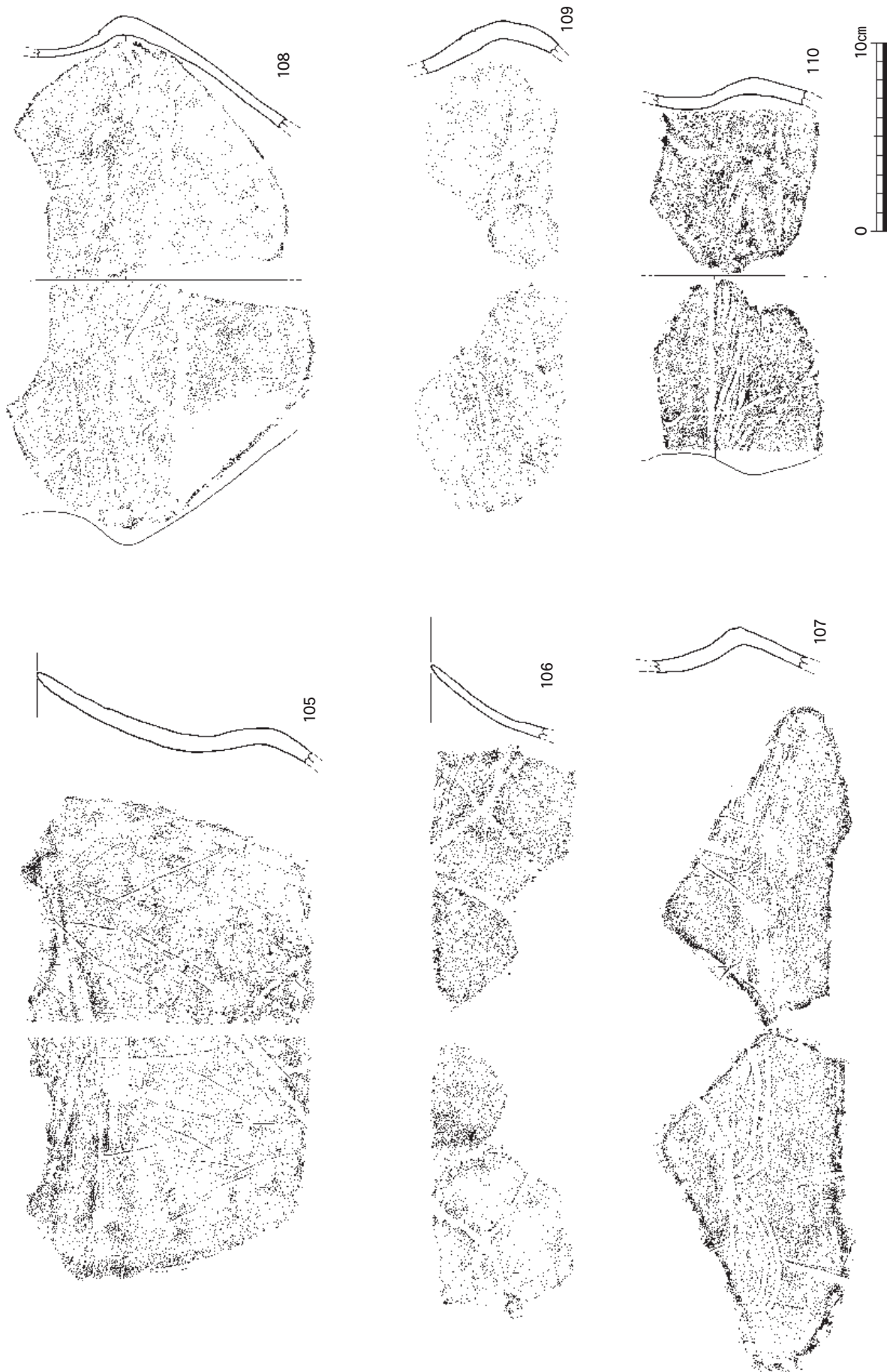
第32図 SH9出土遺物(2) (S=1/3)



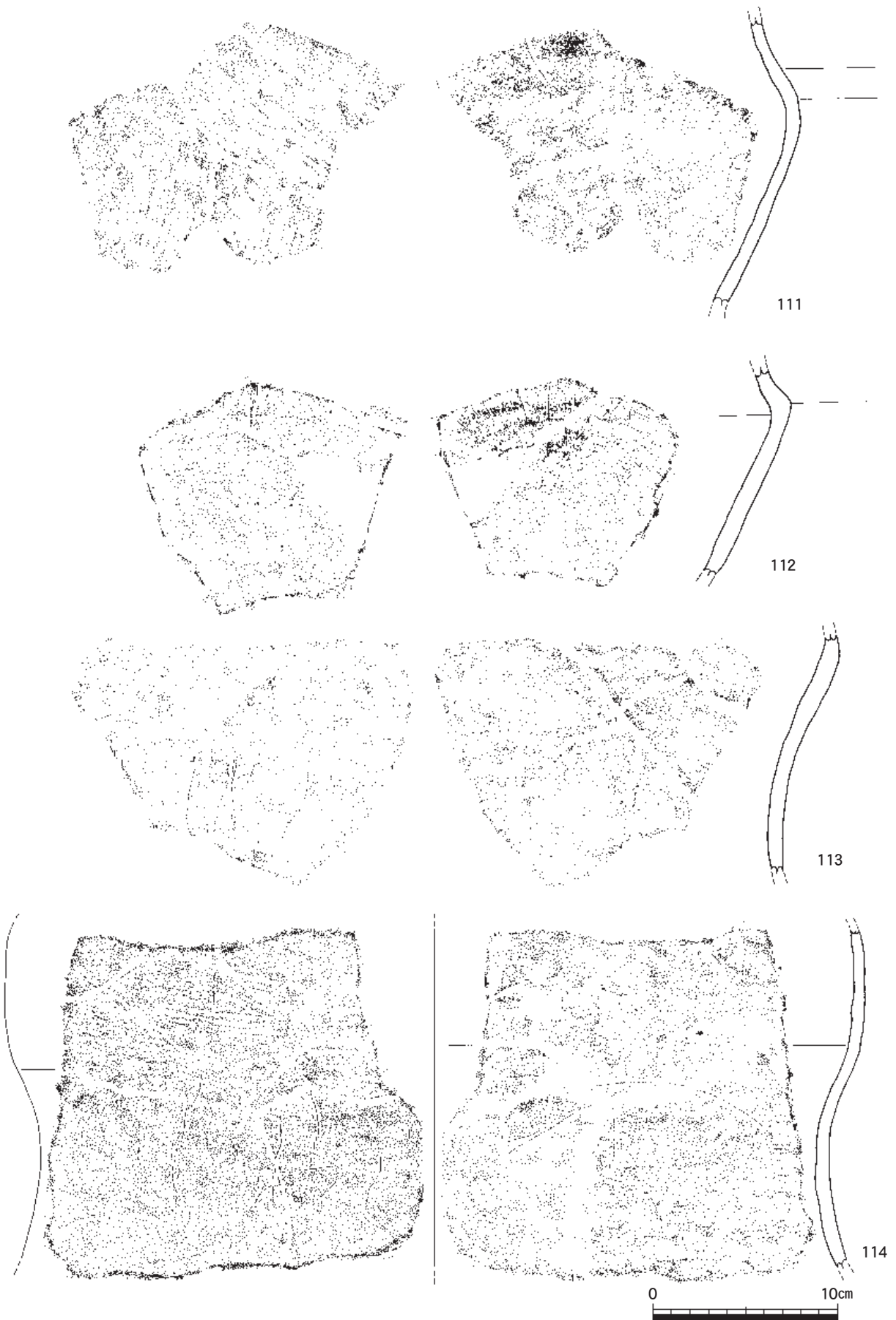
第33図 SH9出土遺物(3) (S=1/3)



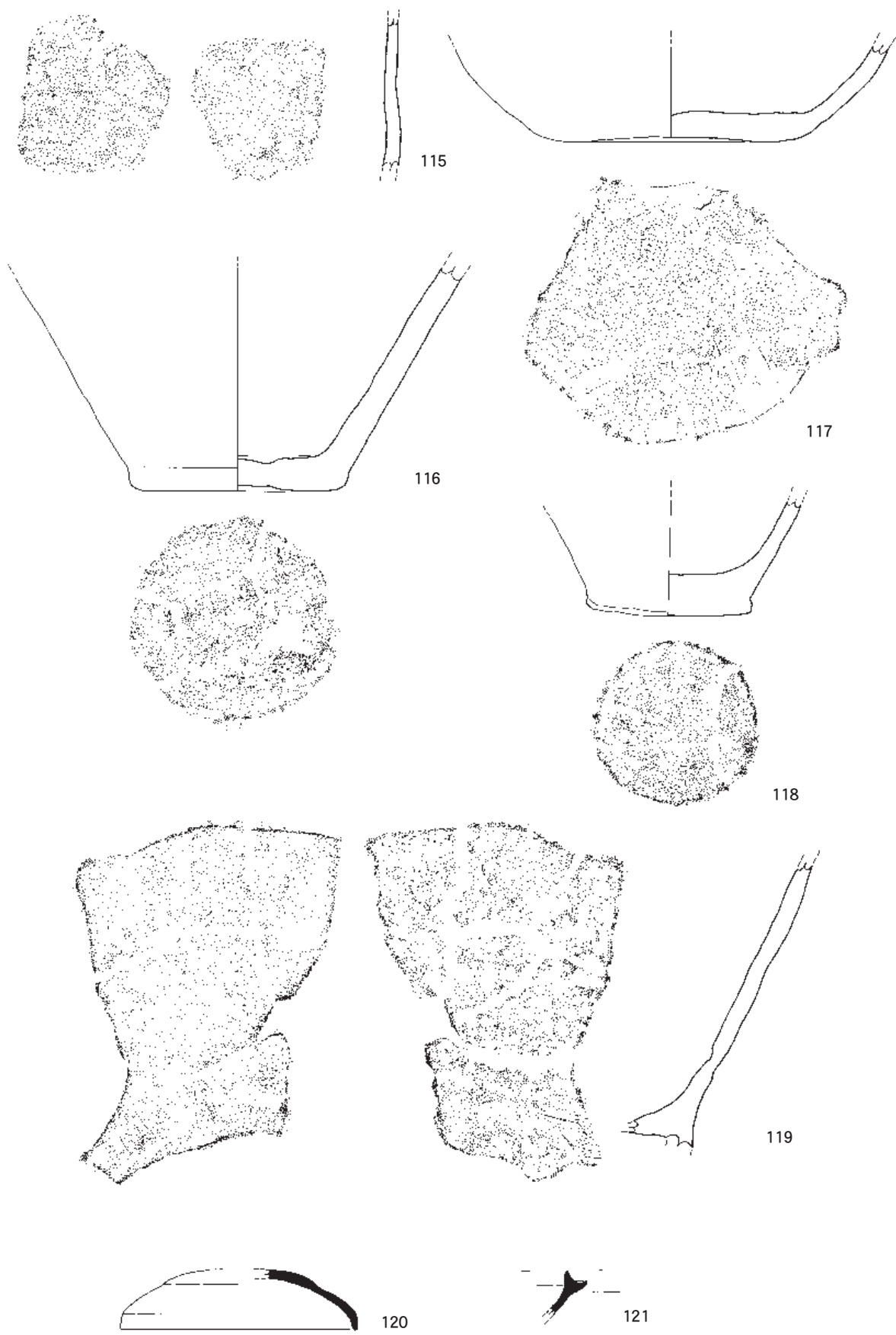
第34図 SH9出土遺物(4) (S=1/3)



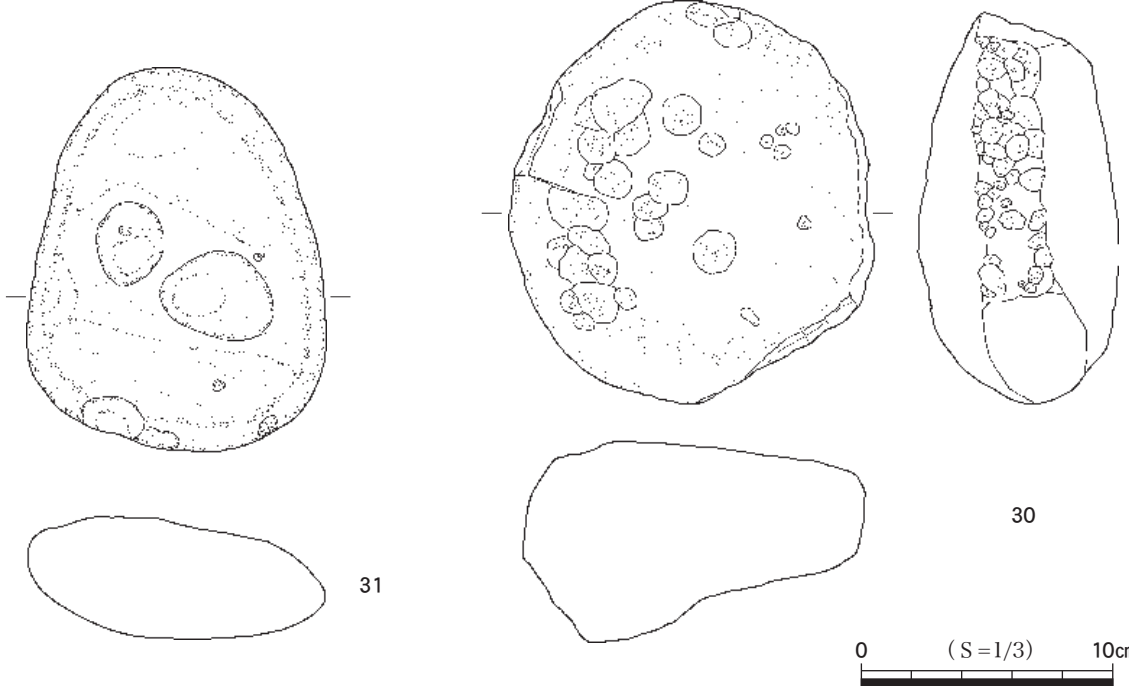
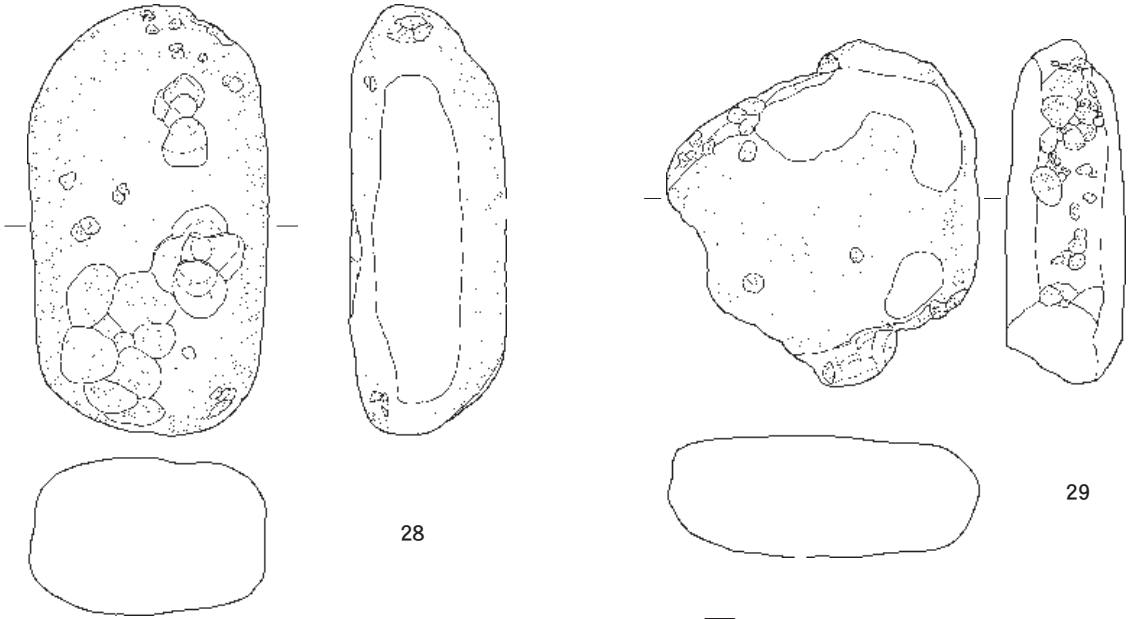
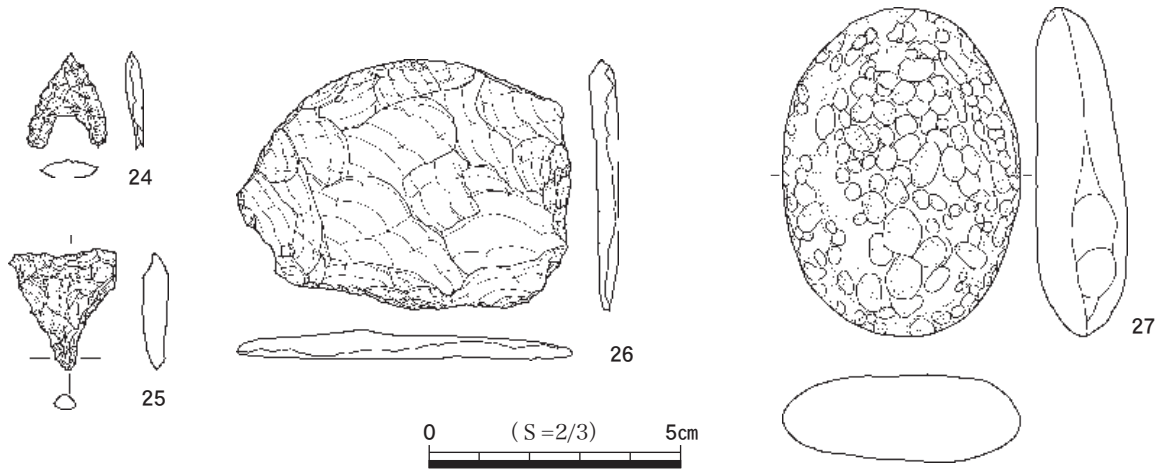
第35図 SH9出土遺物(5) (S=1/3)



第36図 SH9出土遺物(6) (S=1/3)

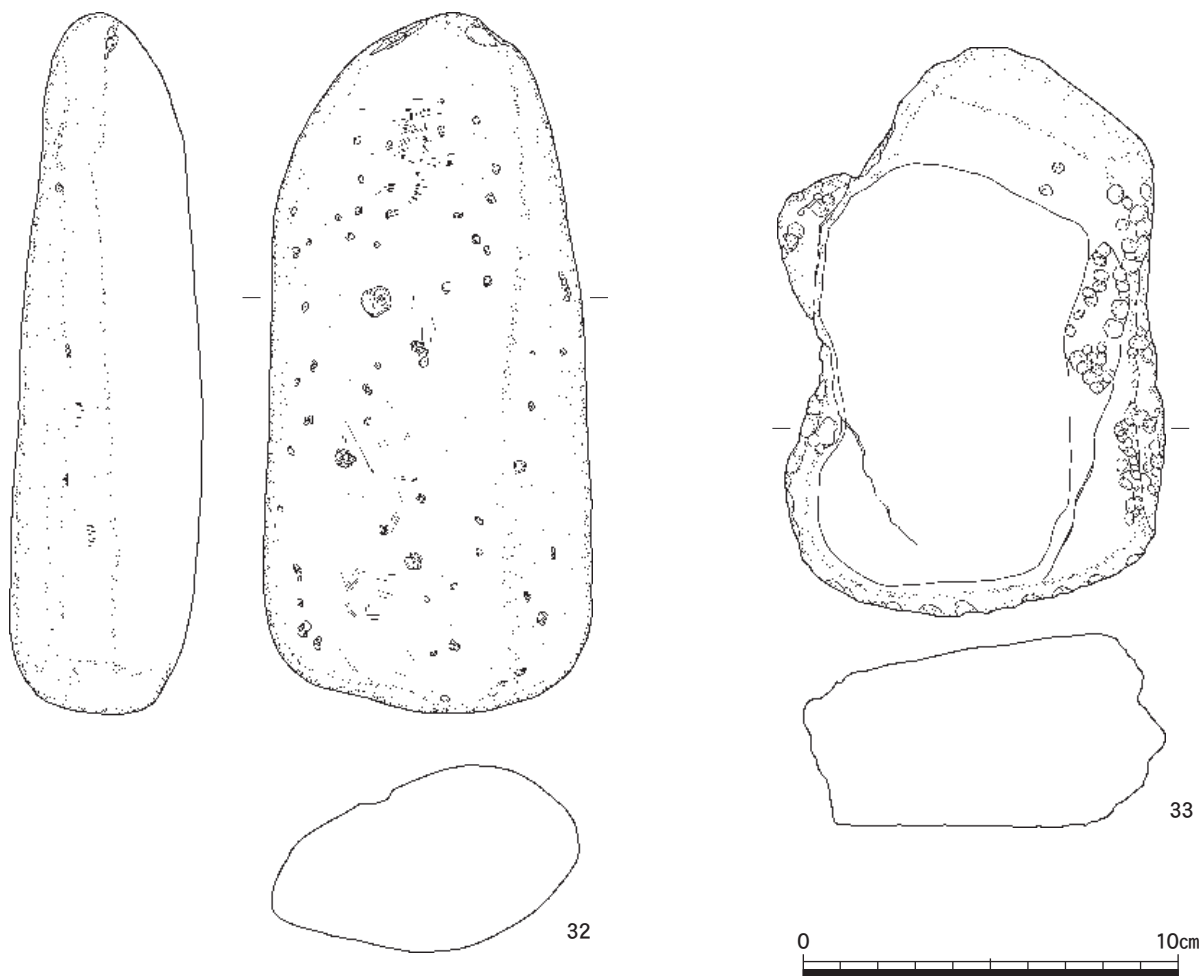


第37図 SH9出土遺物(7) (S=1/3)



第38図 SH9出土遺物(8) (S=1/3 (27~31)、S=2/3 (24~26))





第39図 SH9出土遺物(9) (S=1/2)

掘り過ぎている可能性もある。遺物はパンケース3箱分が出土している。鐘崎式の最新相土器が多数出土しているため、本遺構は縄文時代後期中葉の所産と推定する。

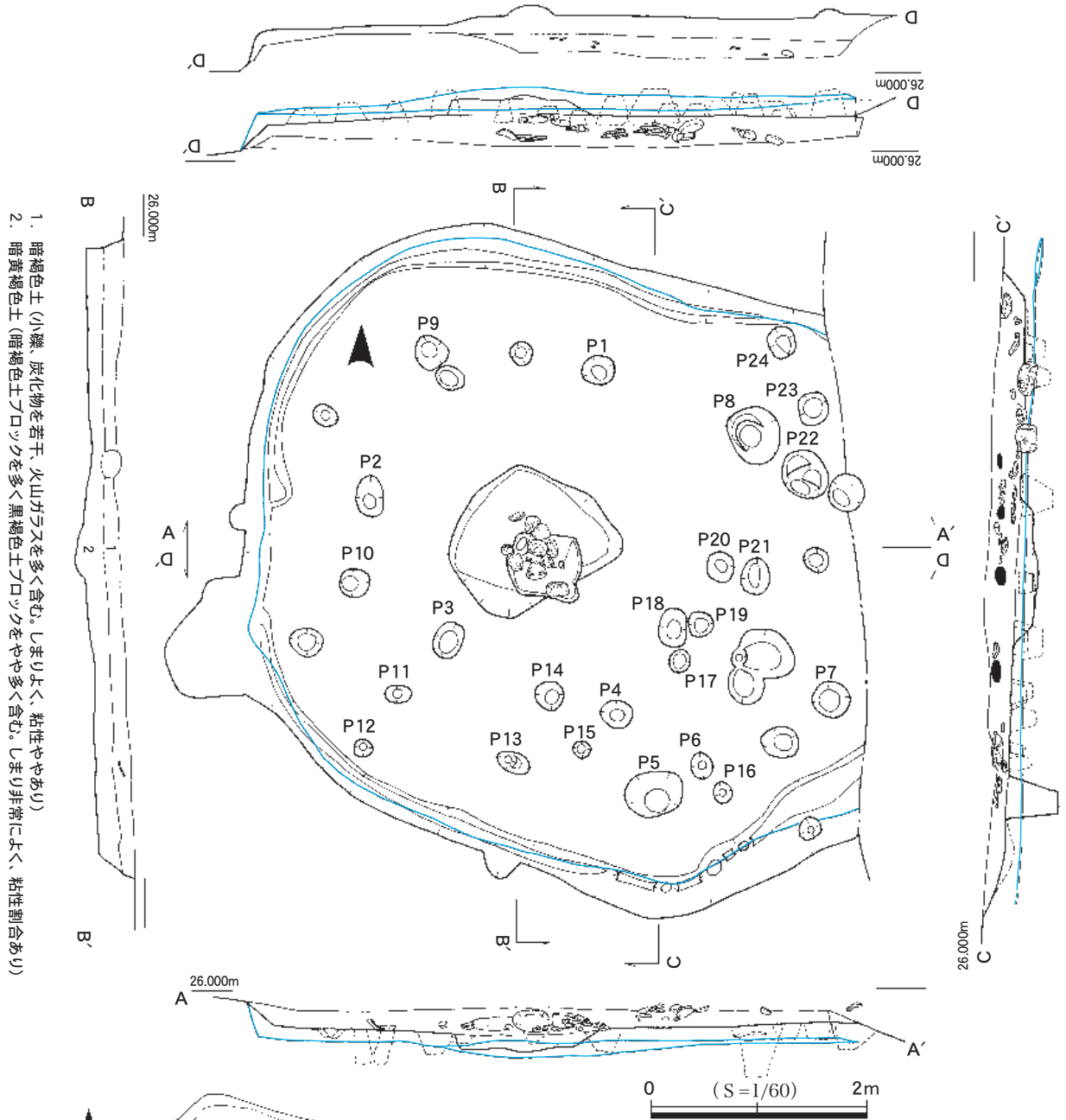
#### 炉跡(第40図)

炉跡は住居跡の中央やや西よりに位置する。中央部を掘り込み、安山岩の円礫を配置する。その周囲は浅い掘り込みが巡る。この部位は地山とは異なる埋土が堆積しており、図面上で掘り込みの表現をしているが、中心の円礫部とどのような関係になるのか不明である。円礫部を含めた掘り込み範囲の大きさは、最大長1.45m、最大幅1.27m、深さ10cmである。円礫部の埋土は、床面直上に、炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積し、次に黒色ブロック・炭化物を多く含む層が堆積する。掘り込み部は、褐色土を基調とし炭化物や焼土を多く含んでいる。円礫は赤色を呈し被熱している。配石状況から石囲炉であったと考えられるが、石の多くが抜き取られたかのような状況を呈する。

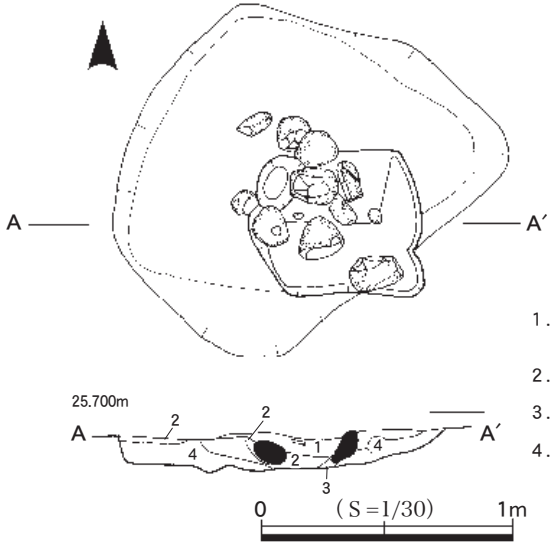
#### 出土遺物(第41～45図)

遺物は床面直上にわずかにみられたが、ほとんどが床面から5cm程浮いた状態で出土している。住居埋土は単層であることから廃絶後短期間の内に埋没されたものと思われる。

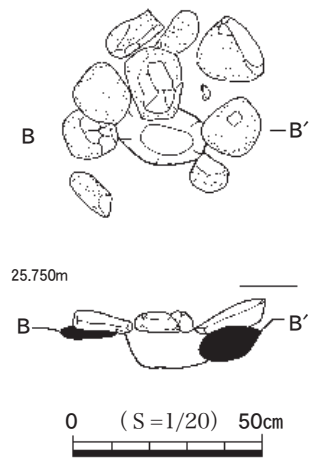
土器は36点を図示した。122～132は有文土器である。122～125、131・132は鐘崎式土器。123は沈線が胴部上位に集中し、浅く幅が狭くなる。126・127は口縁部。127と130は同一個体の



1. 暗褐色土 (小礫、炭化物を若干、火山ガラスを多く含む。しまりよく、粘性ややあり)
2. 暗黄褐色土 (暗褐色土ブロックを多く黒褐色土ブロックをやや多く含む。しまり非常によく、粘性割合あり)



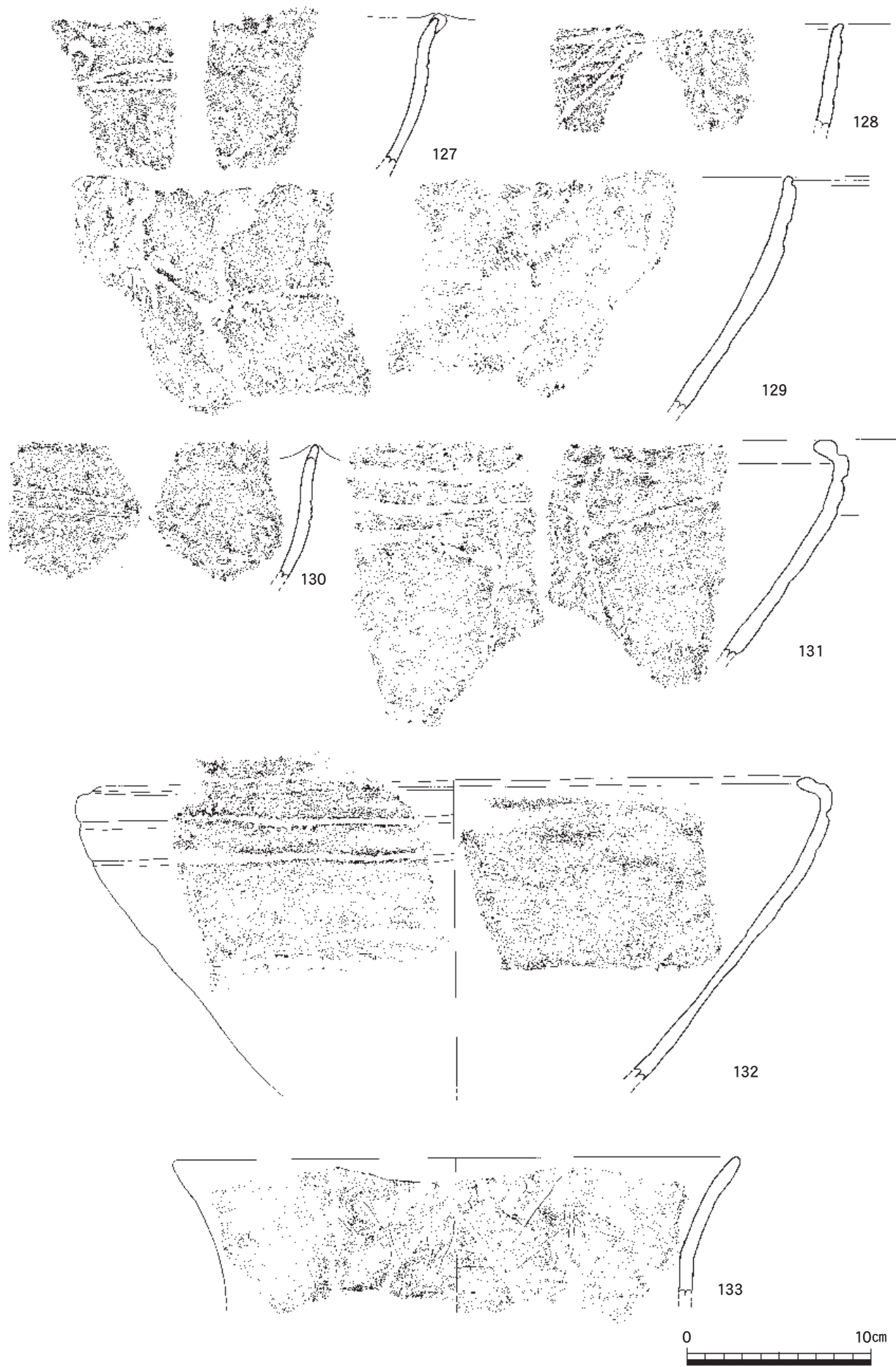
1. 暗褐色土 (黒色土ブロックを多く、炭化物をやや多く、焼土を若干含む。しまりよく粘性ややあり)
2. 暗褐色土 (炭化物を非常に多く、小・中礫を若干含む。しまりよく粘性割合あり)
3. 褐色土 (炭化物をやや多く、焼土を多く含む。しまりよく粘性ややあり)
4. 褐色土 (黒褐色土ブロックを若干含む。しまりよく粘性割合あり)



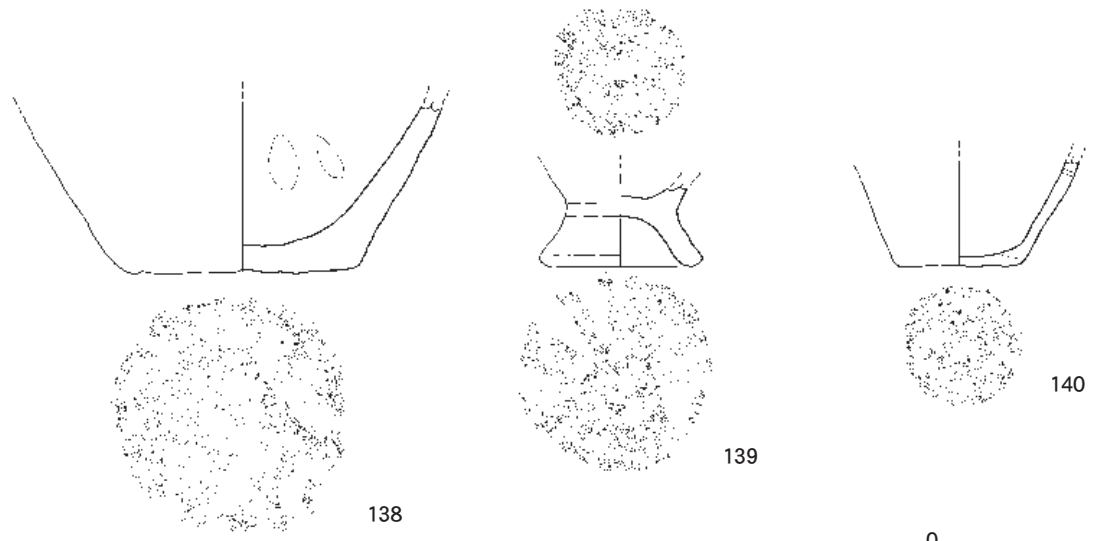
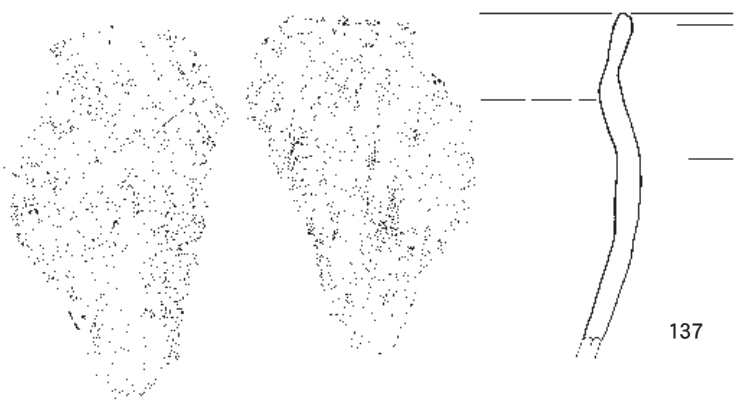
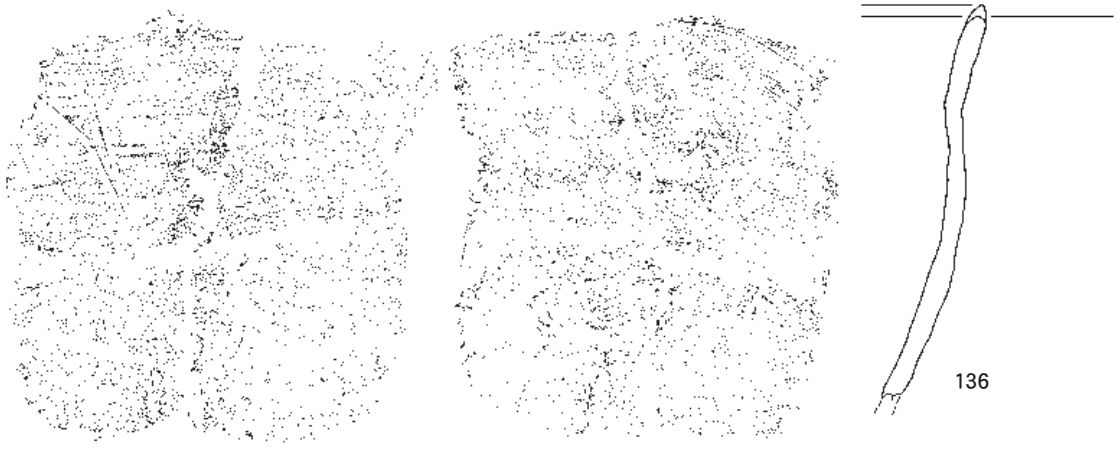
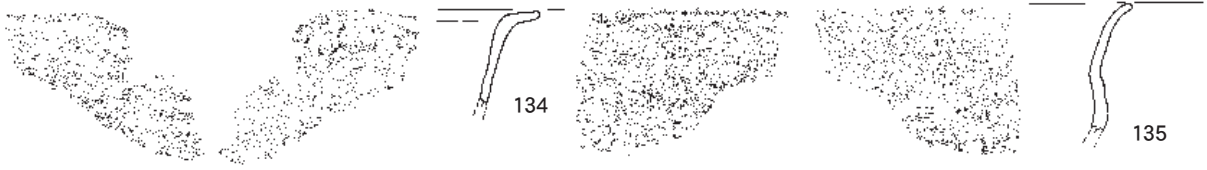
第40図 SH13平・断面・土層図 石囲炉平・断面・土層図 (S=1/30、S=1/20)



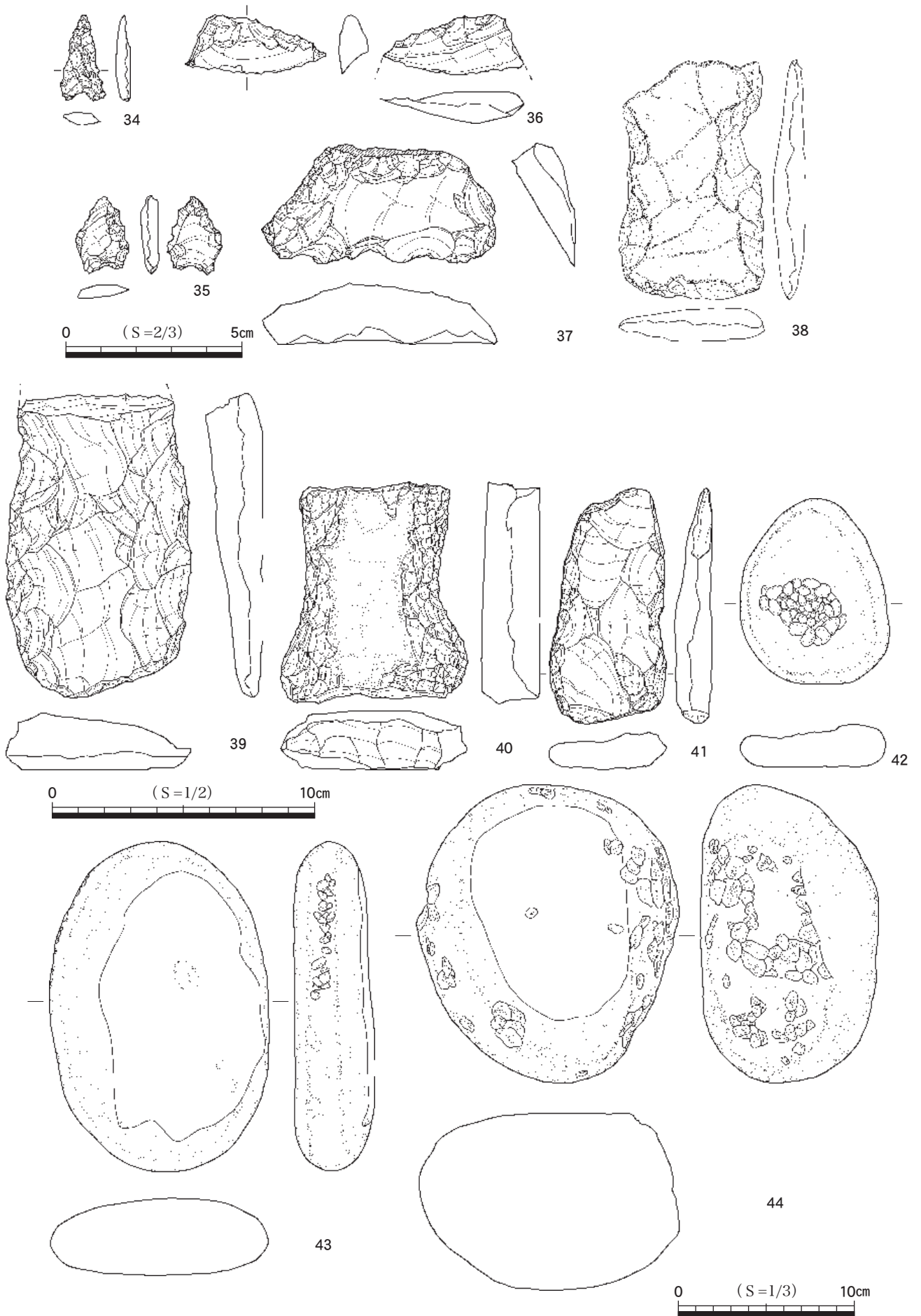
第41図 SH13遺物出土状況 (S=1/60) 出土遺物 (1) (S=1/3)



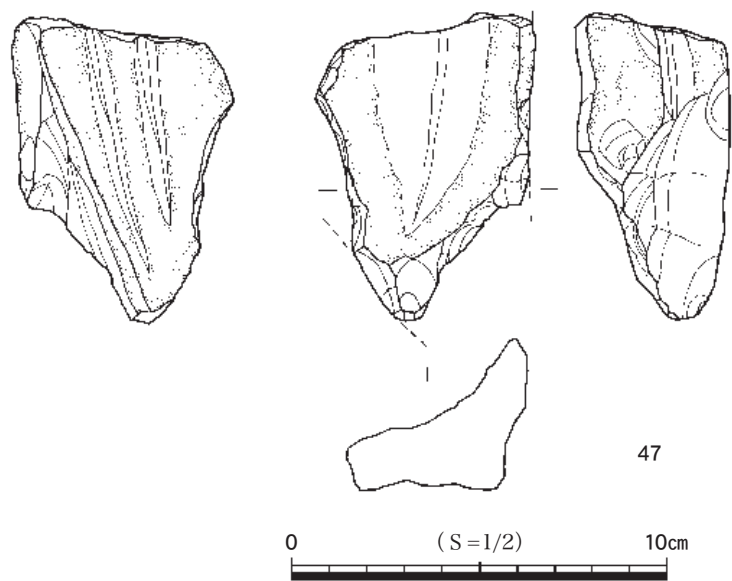
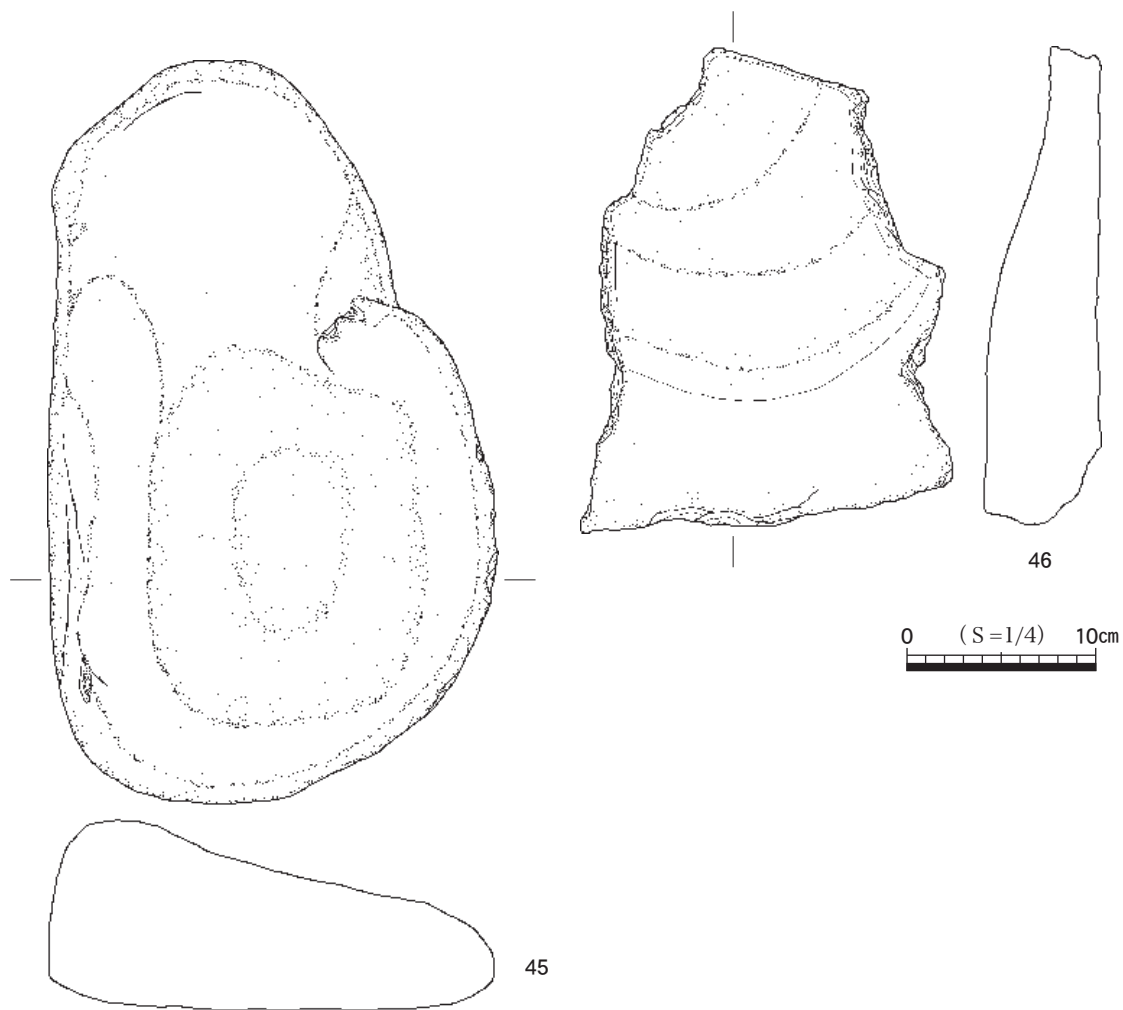
第42図 SH13出土遺物(2) (S=1/3)



第43図 SH13出土遺物(3) (S=1/3)



第44図 SH13出土遺物(4) (S=1/2 (36、38~41)、S=1/3 (42~44)、S=2/3 (34、35、37))



第45図 SH13出土遺物(5) (S=1/2 (47)、S=1/4 (45、46))

可能性が高い。口唇部肥厚部直下に弧状の沈線を施す。128は斜位に2条の沈線を施文する。131・132は口縁部が強く内湾し、外面に2条の沈線がある。133～137は無紋土器の口縁部。135は口縁部が外反し胴部の屈曲が強くなる。138は平底の底部。胴部と底部の境に指頭圧痕あり。139は上げ底の底部。140は穿孔が2箇所認められる。ほぼ完形であるが口縁部が欠けている。

石器は14点を図示した。34・35は姫島産黒曜石製の石鏃。34は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に整形され、基部に浅い抉りが入る。先端と両脚は僅かに欠損している。35は石鏃未成品。表面を主要剥離面とする幅広剥片を素材とし、表面の右側面と裏面の先端付近から左側面に加工を施し、整形及び先端形成を行っている。また、下端に抉りを入れ始めているが、この時点で製作を放棄している。36は泥岩製の搔器（背付石器）。幅広剥片を素材とし、素材の打面側に表・裏面から加工を施して、手持ちを形成しており、素材の末端部を刃部とし、使用痕が認められる。左側縁を欠損している。37は姫島産黒曜石製の大型削器。自然面打面のやや分厚い幅広剥片を素材とし、下端に表・裏面から大柄な加工で刃部を形成しており、裏面上端付近には、手持ち用ないしは装着用の平坦で細かい調整が施されている。刃部には使用痕が認められる。38～41は打製石斧。38は角閃石安山岩製。表・裏面に大柄で面的な加工を施した後、左右周縁部にやや細かな調整を入れて整形、更に下端部になお細かな調整を行って刃部形成をしている。基部を欠損している。39は緑泥片岩製。表・裏面に大柄で平坦な加工を施して厚みを取り、周縁部に急斜度な調整を入れて、整形・刃部形成をしている。表面から裏面への折れによって基部を欠損している。40は角閃石安山岩製。表面がほぼ全面礫面の分割礫を素材とし、裏面には大柄で面的な加工を施して平坦化し、周縁部に急斜度な調整を入れて整形している。基部・刃部を欠損している。41は泥岩製。表・裏面に大柄で平坦な加工を施した後、周縁部にやや細かな調整を入れて整形・刃部形成を行ったと考えられる。基部を若干、刃部を完全に欠損している。42は磨石。中央部に敲打痕が認められる。43・44は磨石兼敲石。側縁部の敲打が顕著にみられる。45は凹み石。中央部がややくぼむ。46は台石。中央部は磨耗によりくぼむ。42～46は角閃石安山岩製。47は砥石。表面に葉研状の筋が数本認められる。

#### SH21（第46図）

第3調査区N-8で検出した竪穴住居跡である。東辺は畑地造成により削平されている。歪なプランを呈するため、不定形土坑の可能性も考えられたが、柱穴が一定量検出されたため住居として報告する。

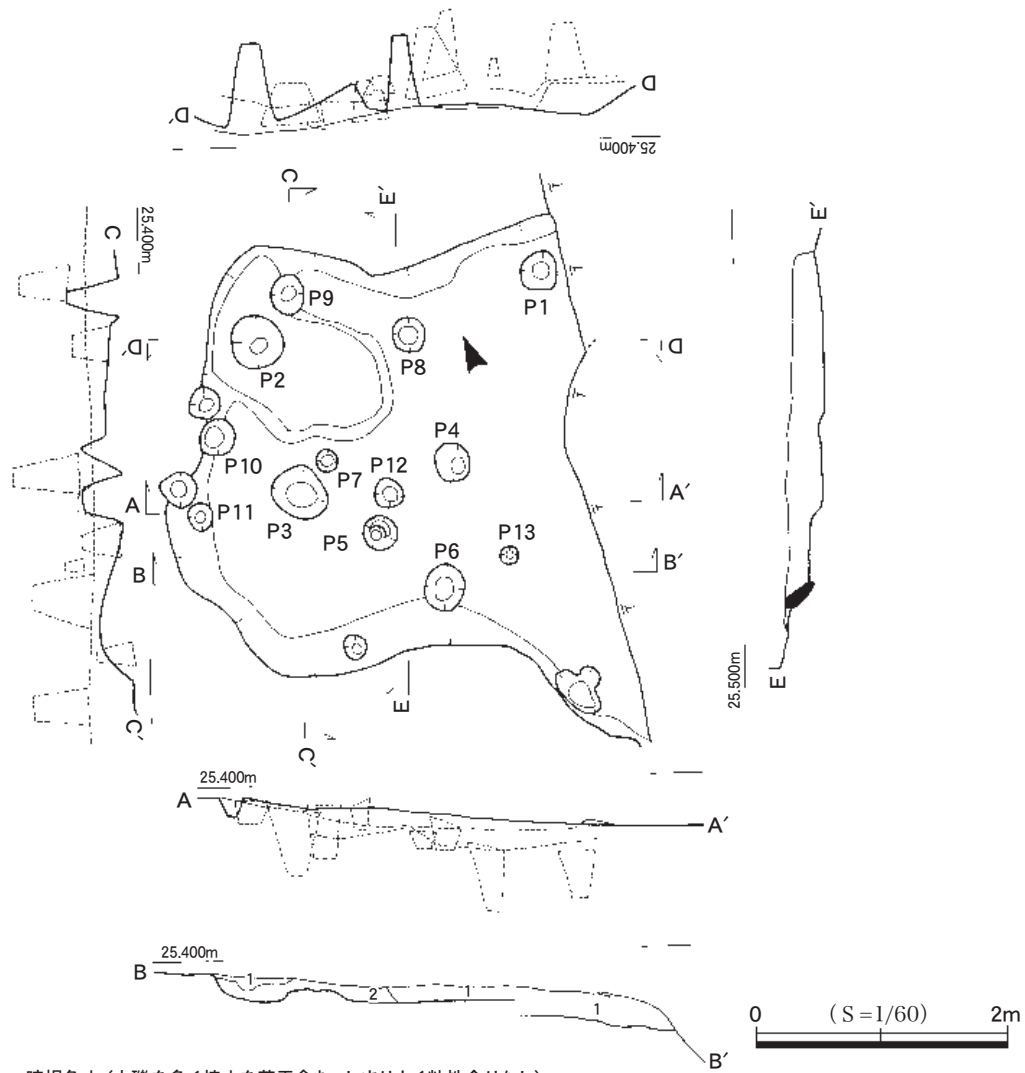
N32°E方向に軸線を向ける。南東-北西方向に4m、北東-南西方向に3.3m+ $\alpha$ 、深さ25cmの大きさである。周壁は認められない。立ち上がりはやや急である。小礫が多く、しまりのない暗黄褐色土が堆積し、その後、中礫を多く含み、焼土をわずかに含む暗褐色土が堆積する。土器の出土量は多くない。

炉跡は検出されていない。削平された範囲に存在したのであろうか。主柱穴は深さ20～30cm以上のP1～8と考えられる。P7は深さ79cmの柱穴である。P9～13は深さ10～20cm程度とやや深い。主柱穴の補助穴か。その他の柱穴は浅く用途不明である。遺物はパンケース1箱分が出土している。石町式土器が多数出土した本遺構は縄文時代後期中葉の所産と推定する。

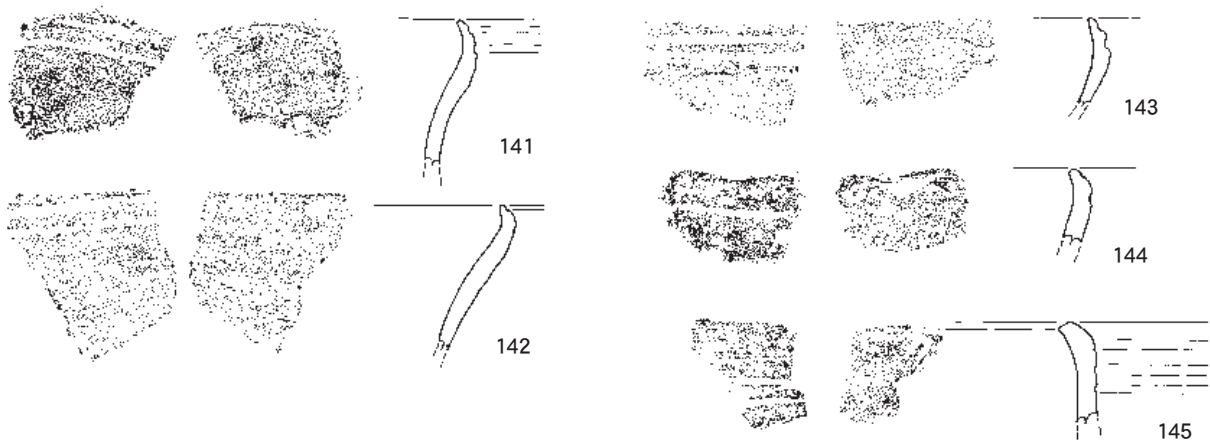
#### 出土遺物（第46・47図）

石器は14点を図示した。住居埋土は2層認められるが、住居は廃絶後短期間の内に埋没したもの

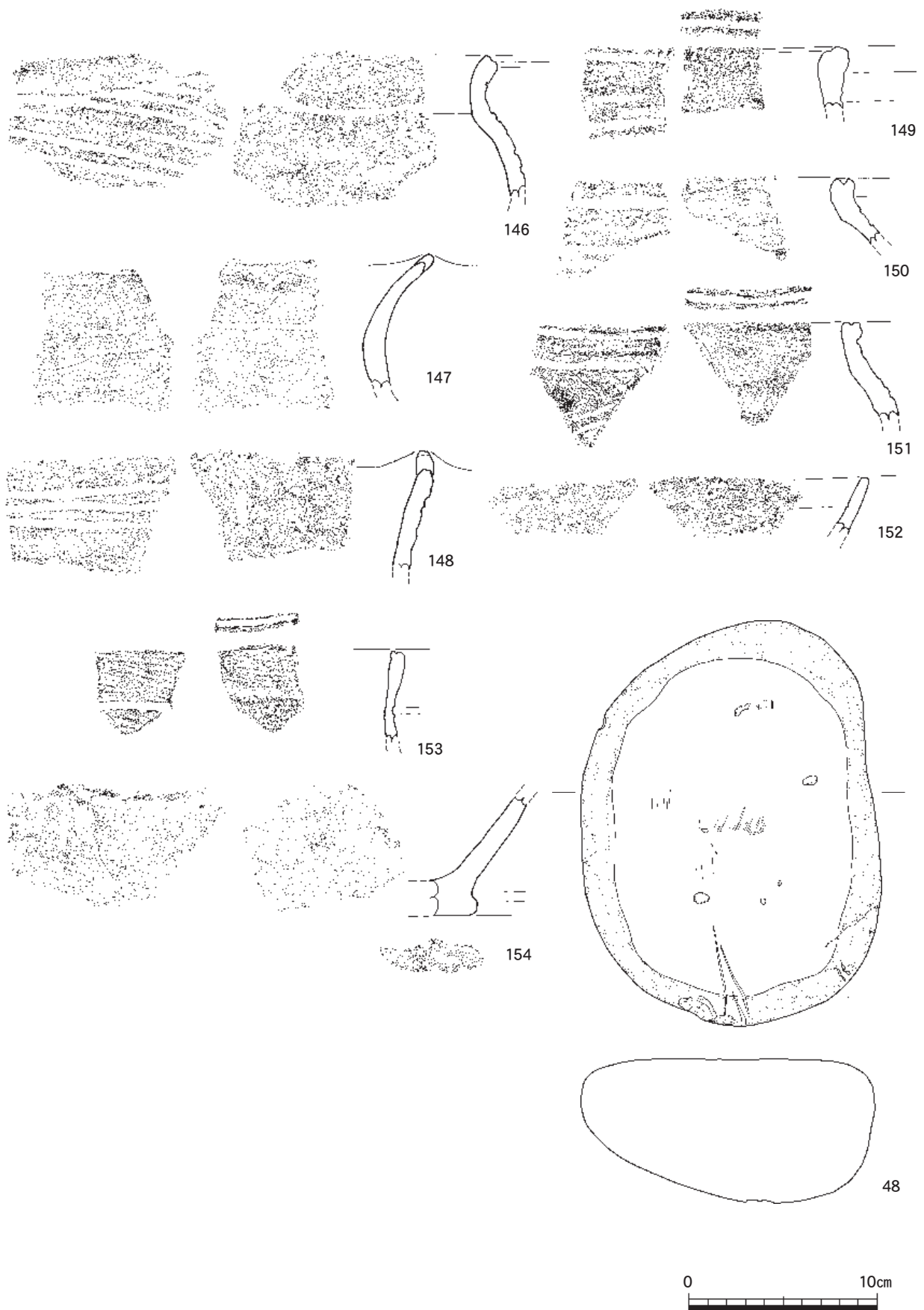




1. 暗褐色土 (中礫を多く焼土を若干含む。しまりよく粘性余りなし)
2. 暗黄褐色土 (小礫を多く暗褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく粘性余りなし)



第46図 SH21平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (1) (S=1/3)



第47図 SH21出土遺物(2) (S=1/3)

と思われる。

141～145は、SH2分類のA-2類である。口縁部の沈線は2条が主体である。146・150・151は、口縁端部が短く外反し、胴部に多条の沈線を施す鐘崎最新相の系統。152は無紋土器。浅鉢か。153は直立する口縁部に特徴がある。154は底部である。底部と胴部の境に段を有する。

石器は1点を図示した。48は磨石。中央部に平坦面があり、擦痕が認められる。

#### SH22 (第48図)

第5調査区H-22で検出した竪穴住居跡である。東辺は後世に削平されている。N43°E方向に軸線に向ける。北東-南西方向に5.3m、北西-南東方向に3.1m、深さ20cmの大きさである。深さ5cmの周壁が巡る。西辺は途中膨らみを見せる。立ち上がりはやや急である。埋土は2層からなり、まず縄文土器を少量含む暗茶褐色土が堆積し、次に縄文土器を多量に含む黒褐色砂質土が堆積する。土器はパンケース3箱分出土した。鐘崎式の最新相土器が多数出土しているため、本遺構は縄文時代後期中葉の所産と推定する。

炉は床面中央やや南よりに敷設されている。主柱穴は、P1～6であり、削平により失われた東部にも炉跡を中心として線対称の位置に柱穴が存在していたものと推測する。この推測が正しければ住居の各辺に沿うように柱穴が規則的に配置され、炉を中心にして「口」の字に柱穴が配されていた可能性がある。

角の位置のP1は深さ67cm、P3は89cmと深く、直径は共に約40cm程ある。底面と埋土の区別が不明確であったため、掘り過ぎた可能性がある。P2・5は直径・深さ共に30cm前後である。角の位置にある柱穴の規模は大きく、他はそれらより小規模である。また、P5の上に石が置かれていた。

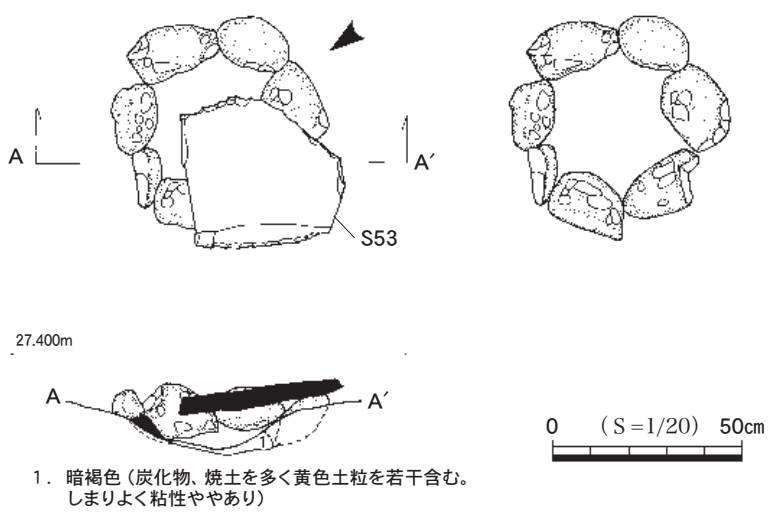
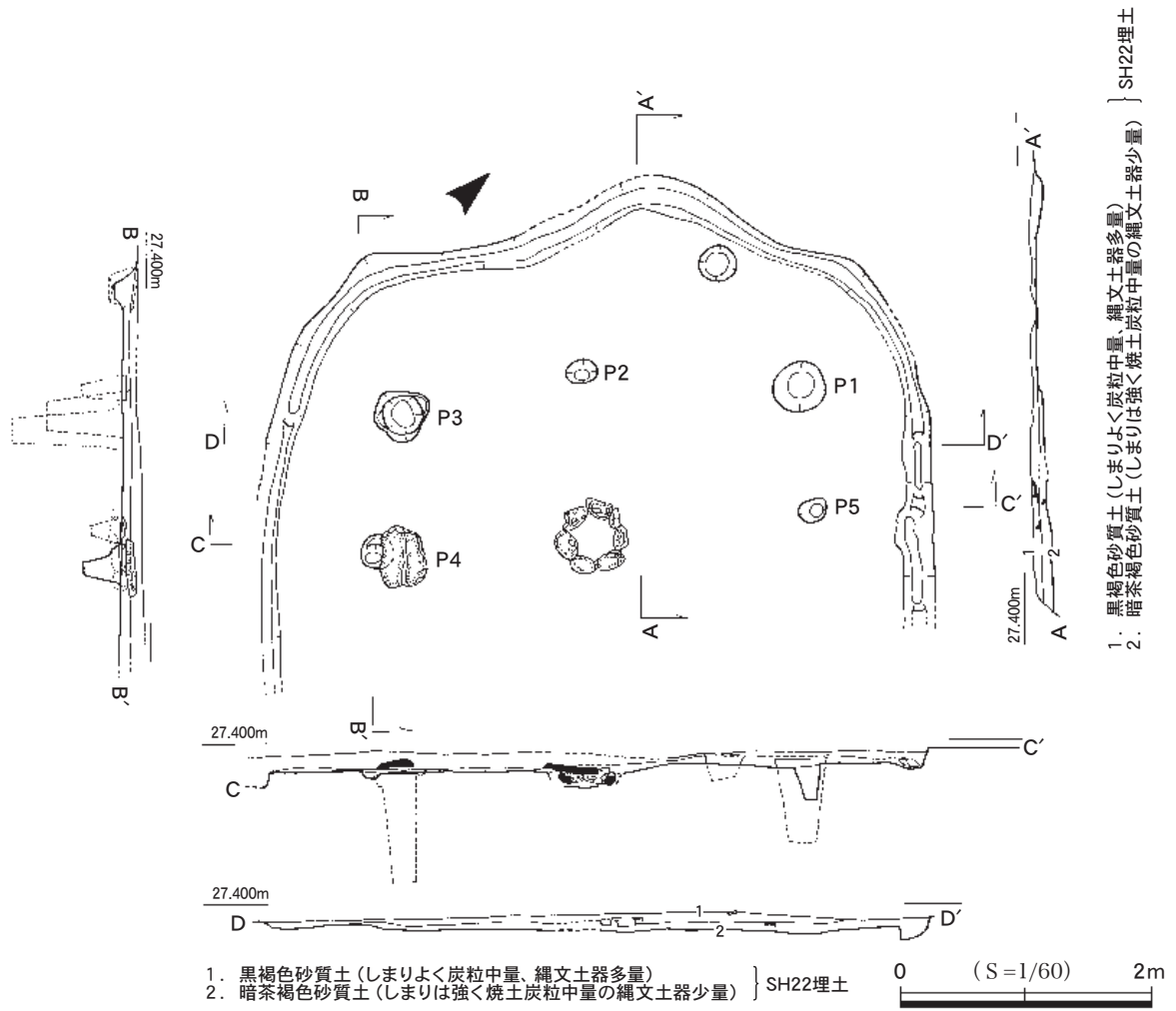
#### 炉跡 (第48図)

炉跡は、直径60cmの範囲を、深さ20cm丸底風に掘り込み、安山岩の円礫を7個花弁状に配置する。円礫はいずれも被熱しており赤色を呈し、一部加熱によるひび割れも認められる。埋土は炭化物・焼土を多く含む暗褐色土が堆積し、円礫に接して台石(53)が検出された。炉を意識的に埋め最後に台石を置く行為が行われている。

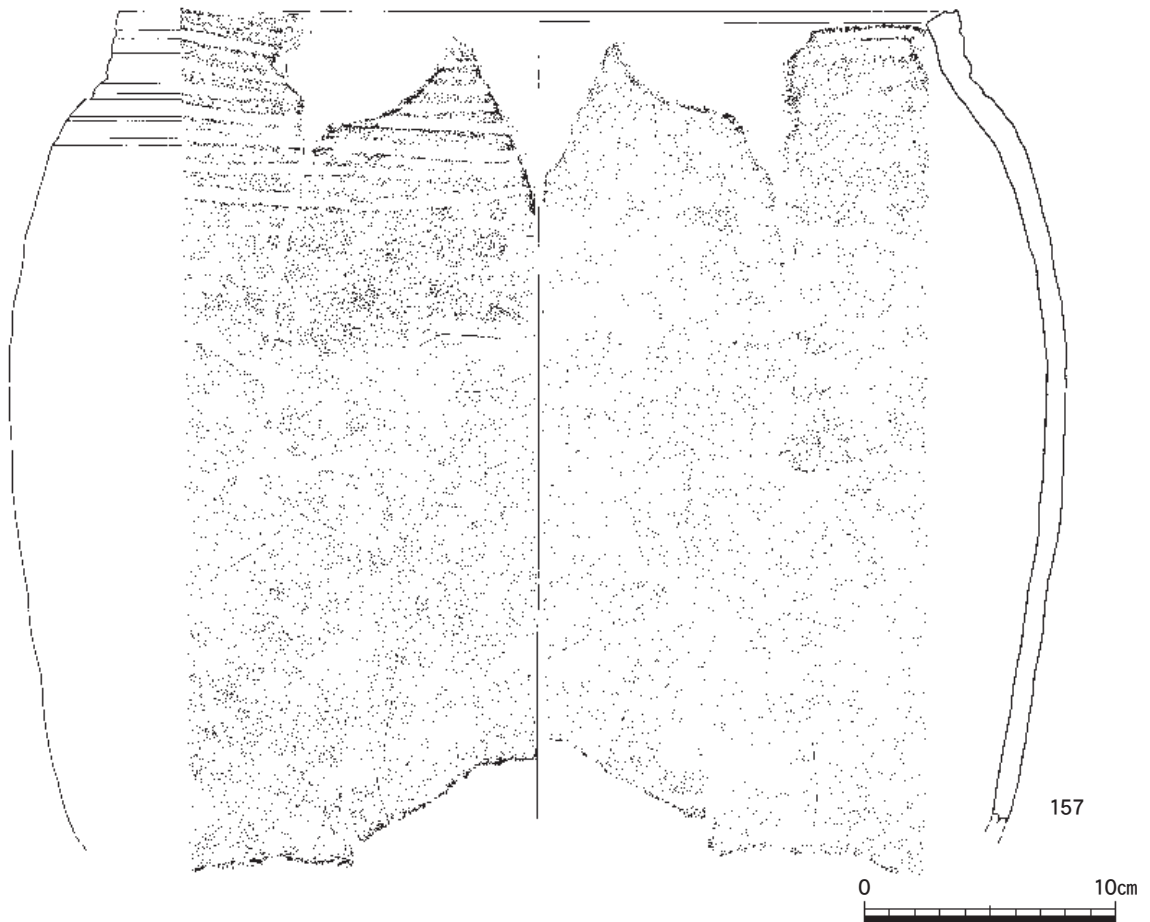
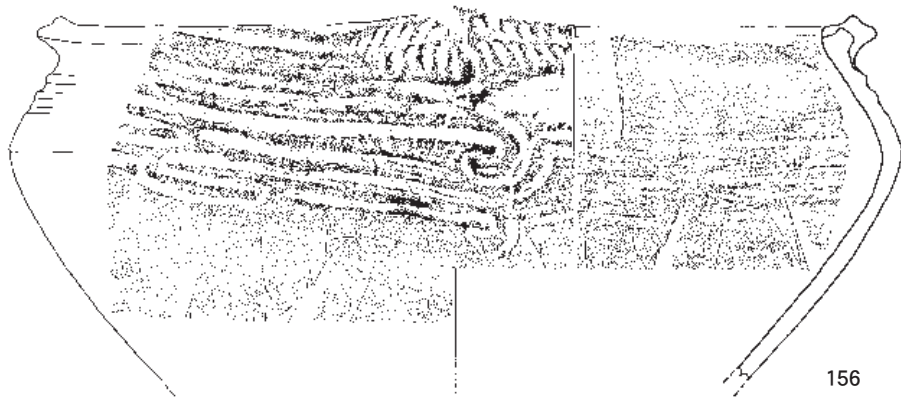
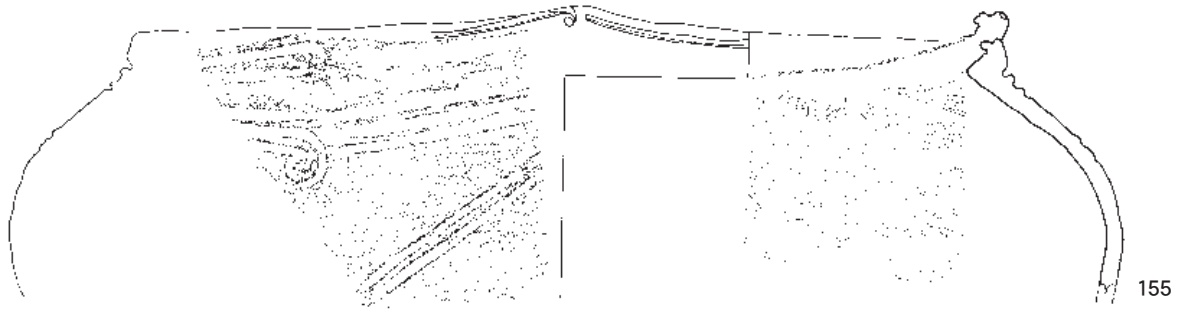
#### 出土遺物 (第49～57図)

土器は35点を図示した。155～168は1層出土で14点。169～176は2層出土で8点。177～189は一括で取り上げた13点である。遺物は床面直上にわずかにみられたが、ほとんどが床面から5cm程浮いた状態で出土している。住居埋土は単層であることから廃絶後短期間の内に埋没されたものと思われる。この他、第5章の福永氏の分析報告中に、他所からの搬入の可能性のある羽状縄文土器が報告されている。

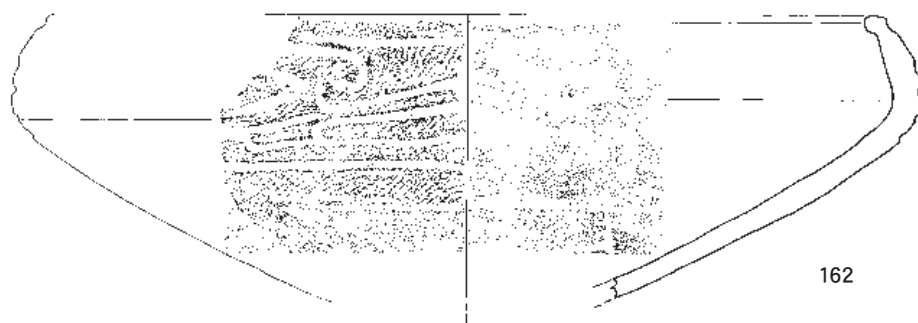
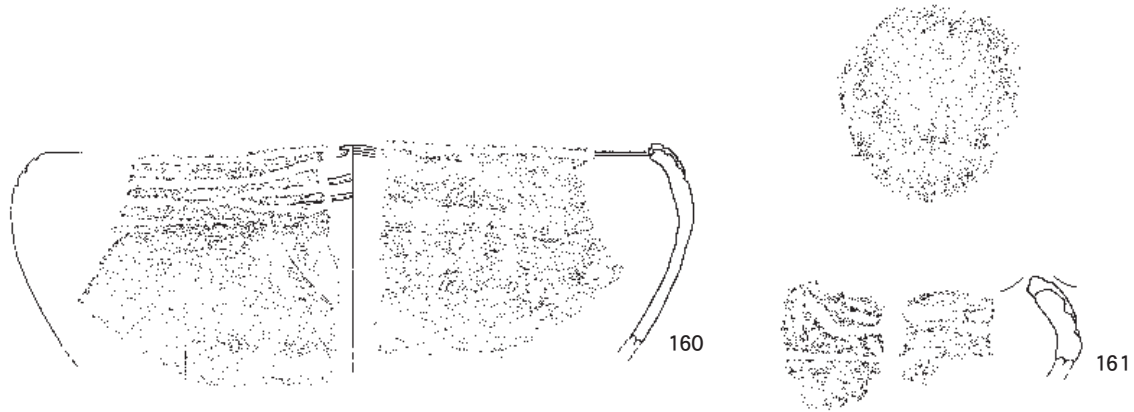
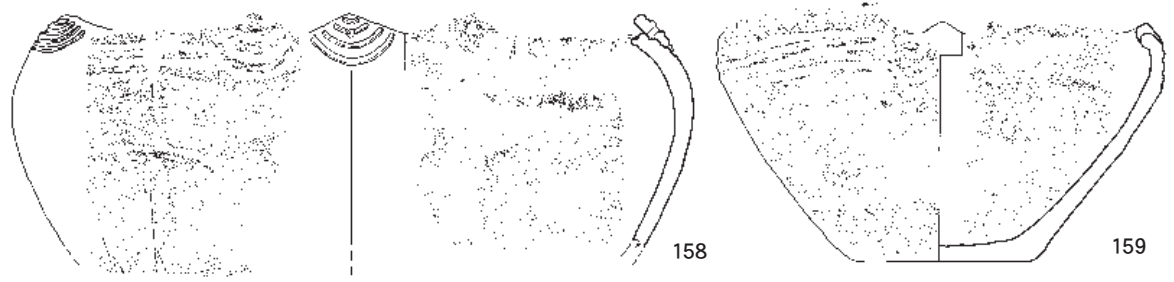
155～164、164～173、177～183、187は有文土器。155は鐘崎Ⅲ式期。156～163は沈線の口縁部への集線化が進む。鐘崎最新相期であろう。158～162は口縁部が内湾するボール状の鉢。163はS字状(波状)の沈線文を縦位に描く。165～167は無紋土器。167は観察表では壺としたが鉢の誤り。羽状縄文はないが福永氏報告のHGK13と形態が似る。168は底部。169は入り組み部がS字縄文化の兆しをみせている。170・171は石町式の範疇。172・173は胎土に滑石を含み半裁竹管文を施す。174は口縁部が直線的に延びる鉢。175・176は底部。177～183・187は有文土器の鉢。177～179は鐘崎Ⅲ式の範疇。178は口縁部を1箇所穿孔する。180～183は鐘崎最新相か。184～186は無紋土器の鉢。188・189は底部。



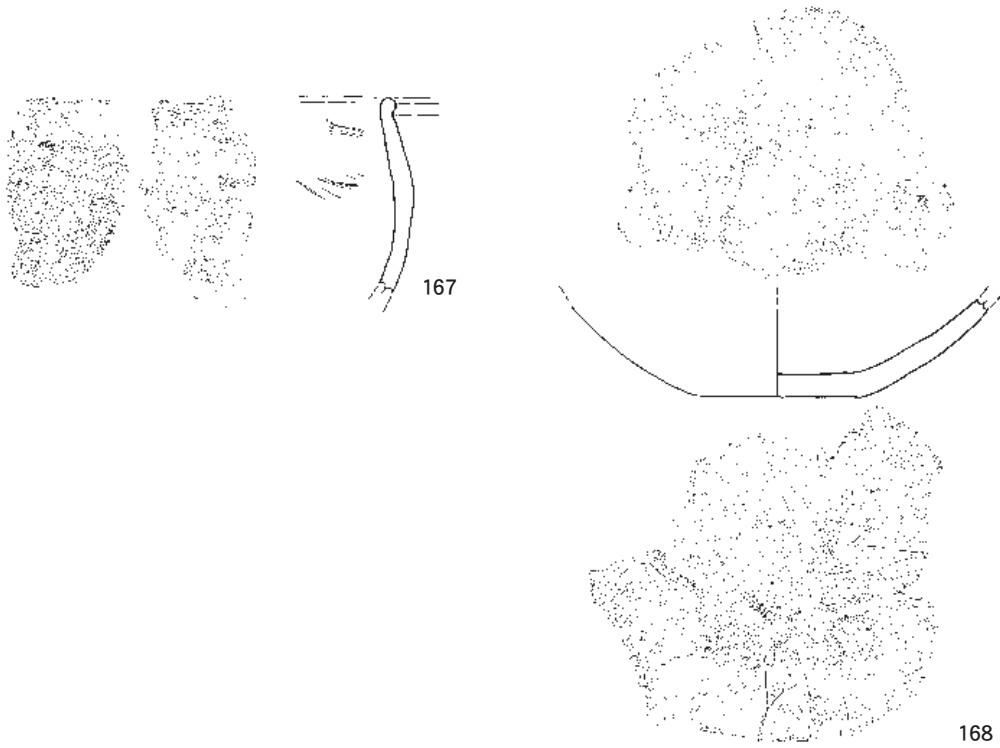
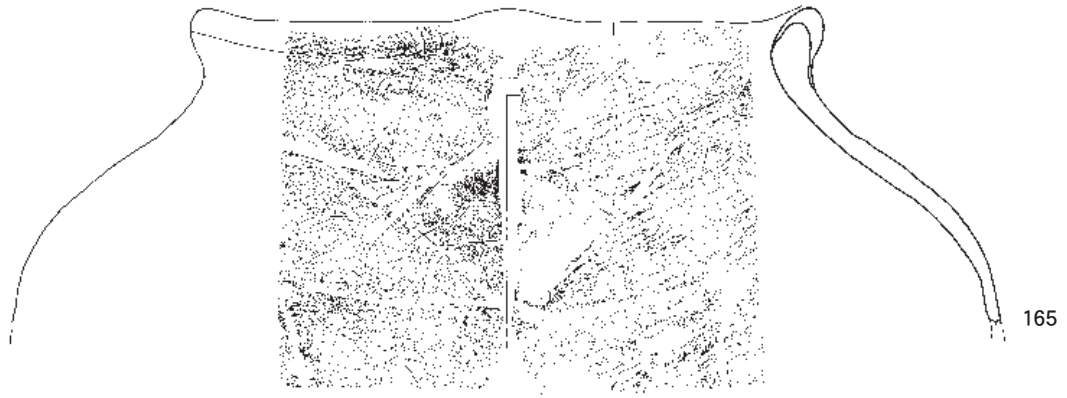
第48図 SH22平・断面・土層図 (S=1/60) 石囲炉平・断面・土層図 (S=1/20)



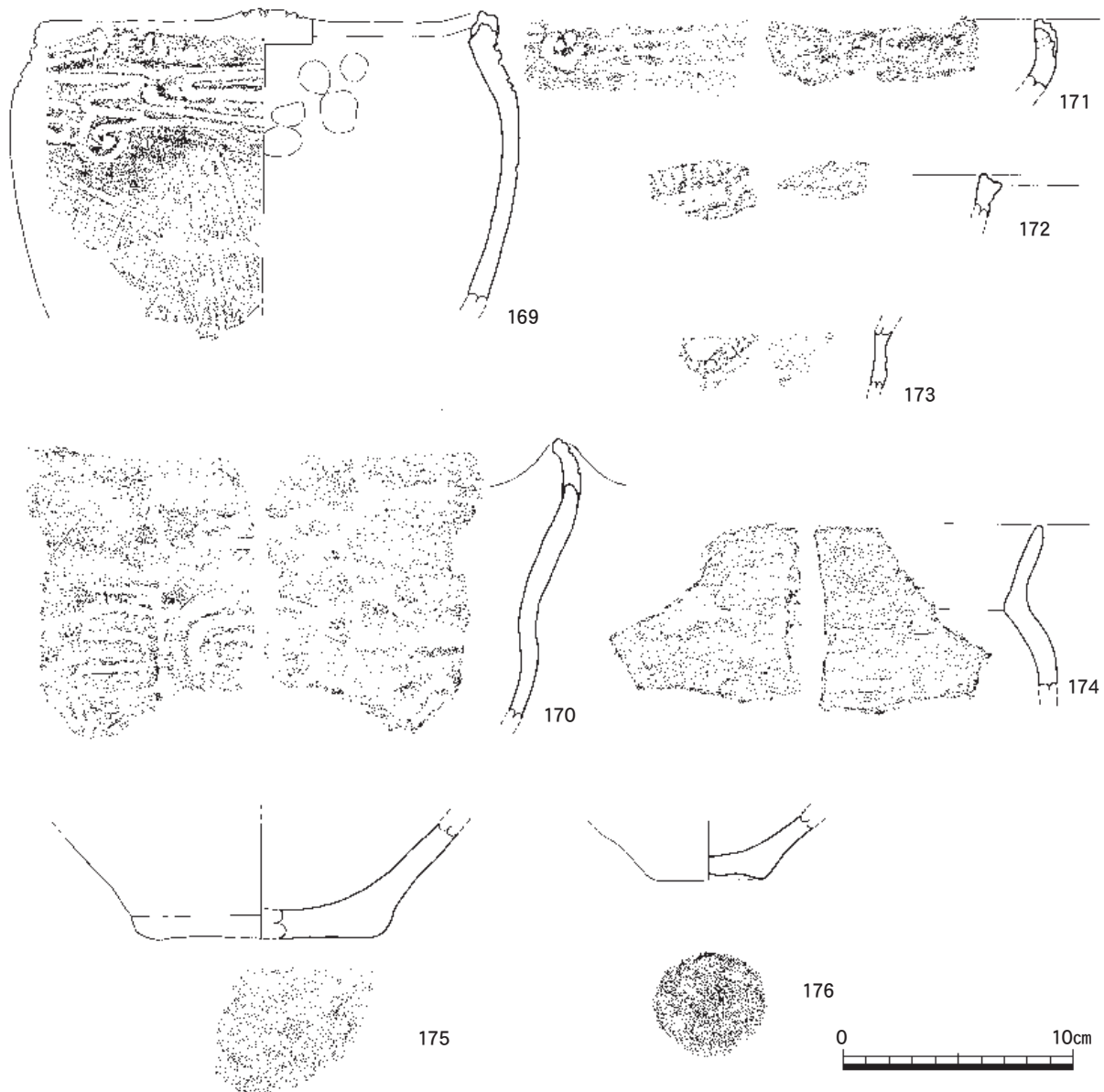
第49図 SH22出土遺物(1) (S=1/3)



第50図 SH22出土遺物(2) (S=1/3)



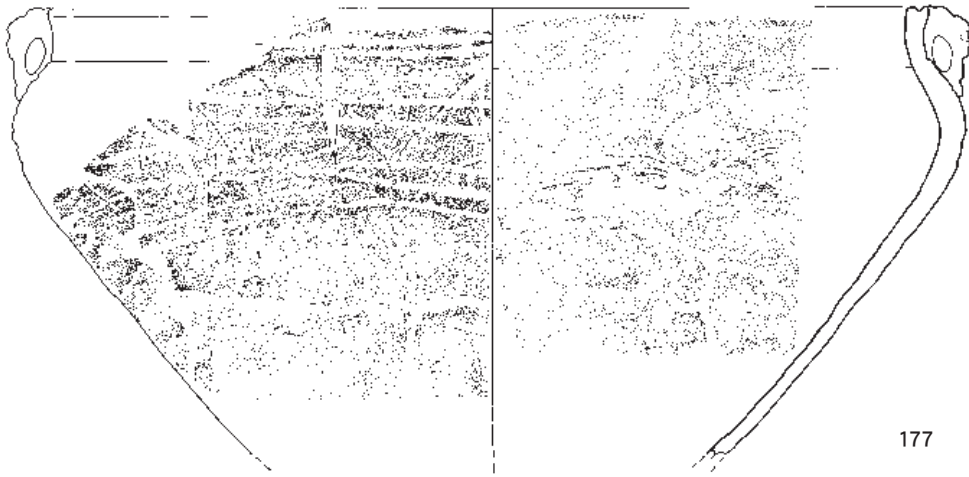
第51図 SH22出土遺物(3) (S=1/3)



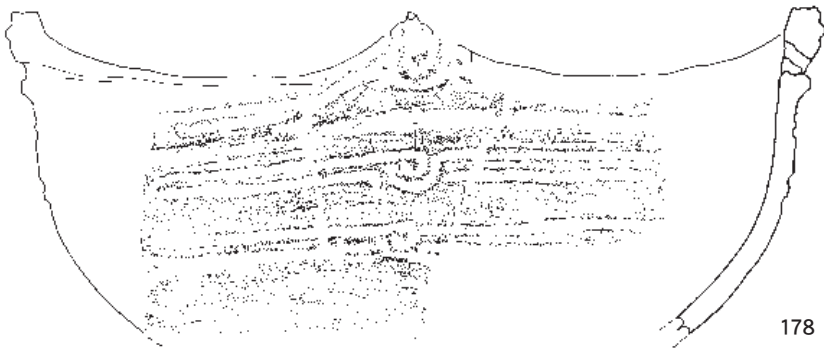
第52図 SH22出土遺物(4) (S=1/3)

石器は8点を図示した。49は腰岳系黒曜石製の二側縁加工ナイフ形石器。縦長剥片を素材とし、左側縁上半が刃部であるが、裏面からの折れによって欠損している。薄平で小型であり、ナイフ形石器文化終末期のものである可能性が高い。50は玉髓製の石核。上端の平坦な分割面を打面とし、正面を作業面として剥離している。51は姫島産黒曜石製の削器。やや分厚い幅広剥片を素材とし、その右側縁に裏面から加工を施し、中央をやや尖らすように整形・刃部形成している。使用痕が顕著に認められる。52は姫島産黒曜石製の使用痕を有する剥片。縦長剥片を素材とし、左側縁に顕著な使用痕が認められる。53は台石。炉跡の上に置かれていたもの。扁平な安山岩製。中央部は平坦で触ると滑らかな質感がある。周縁部はやや細かな調整を入れて整形している。54・55は磨製石斧。54は蛇紋岩製。礫片ないしは自然礫を素材にしていると考えられ、表・裏面に丁寧な研磨を行っているが、表面に磨き残しが若干認められる。また、基部付近の左側縁に敲打調整がみられる。裏面は面的に大きく欠損しており、刃部には使用痕が顕著に認められる。55は結晶片岩製。基部がかな

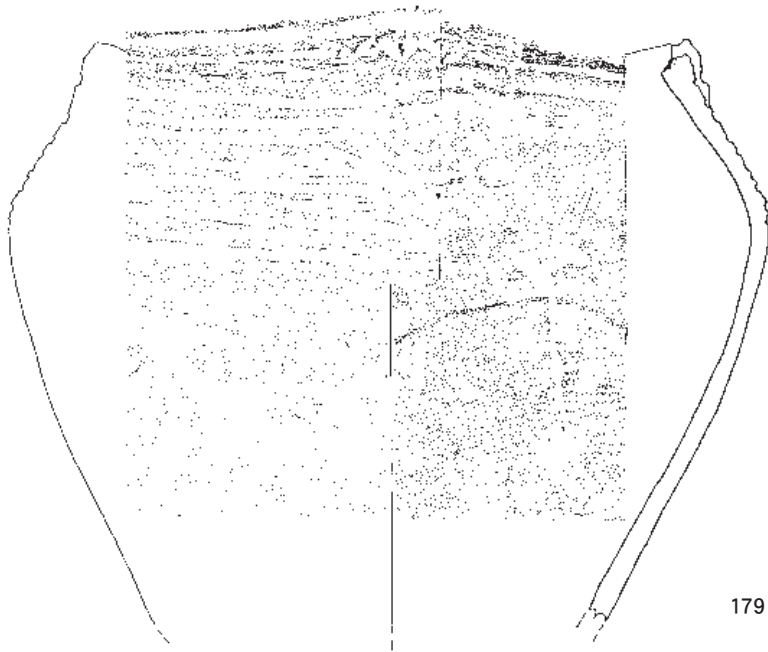




177



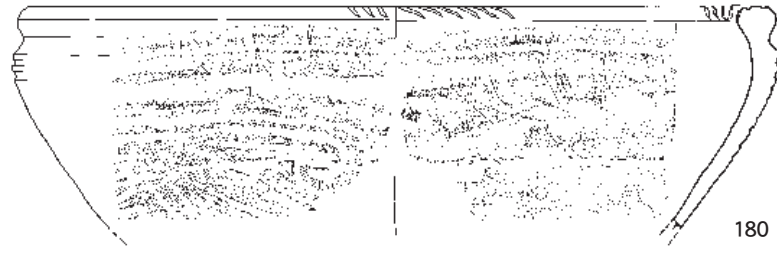
178



179



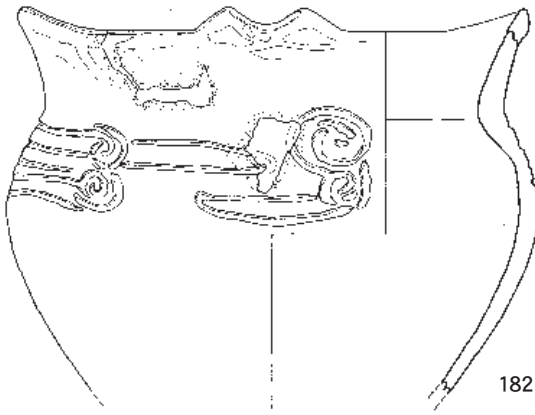
第53図 SH22出土遺物(5) (S=1/3)



180



181



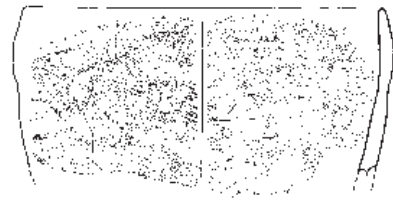
182



183



184



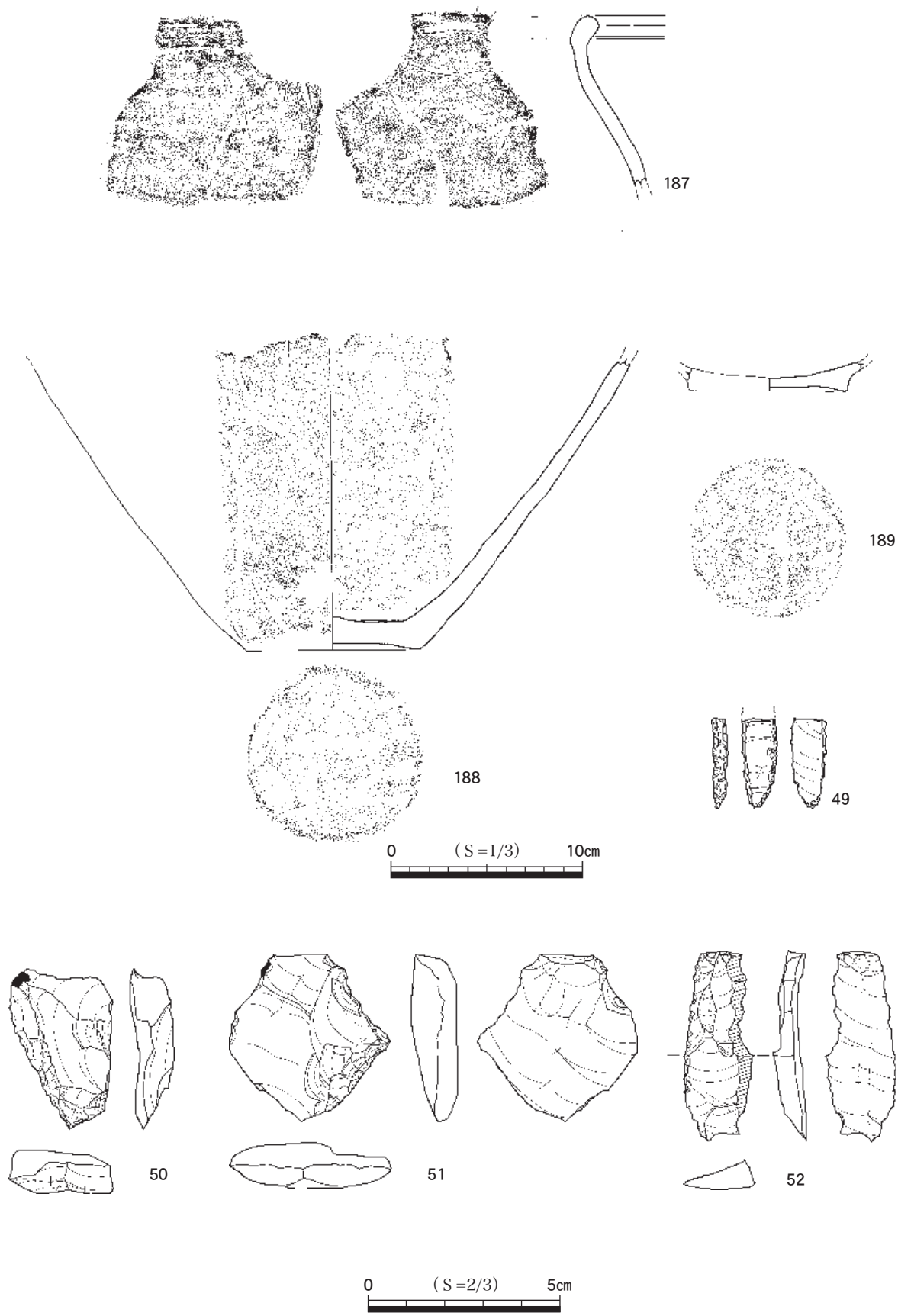
185



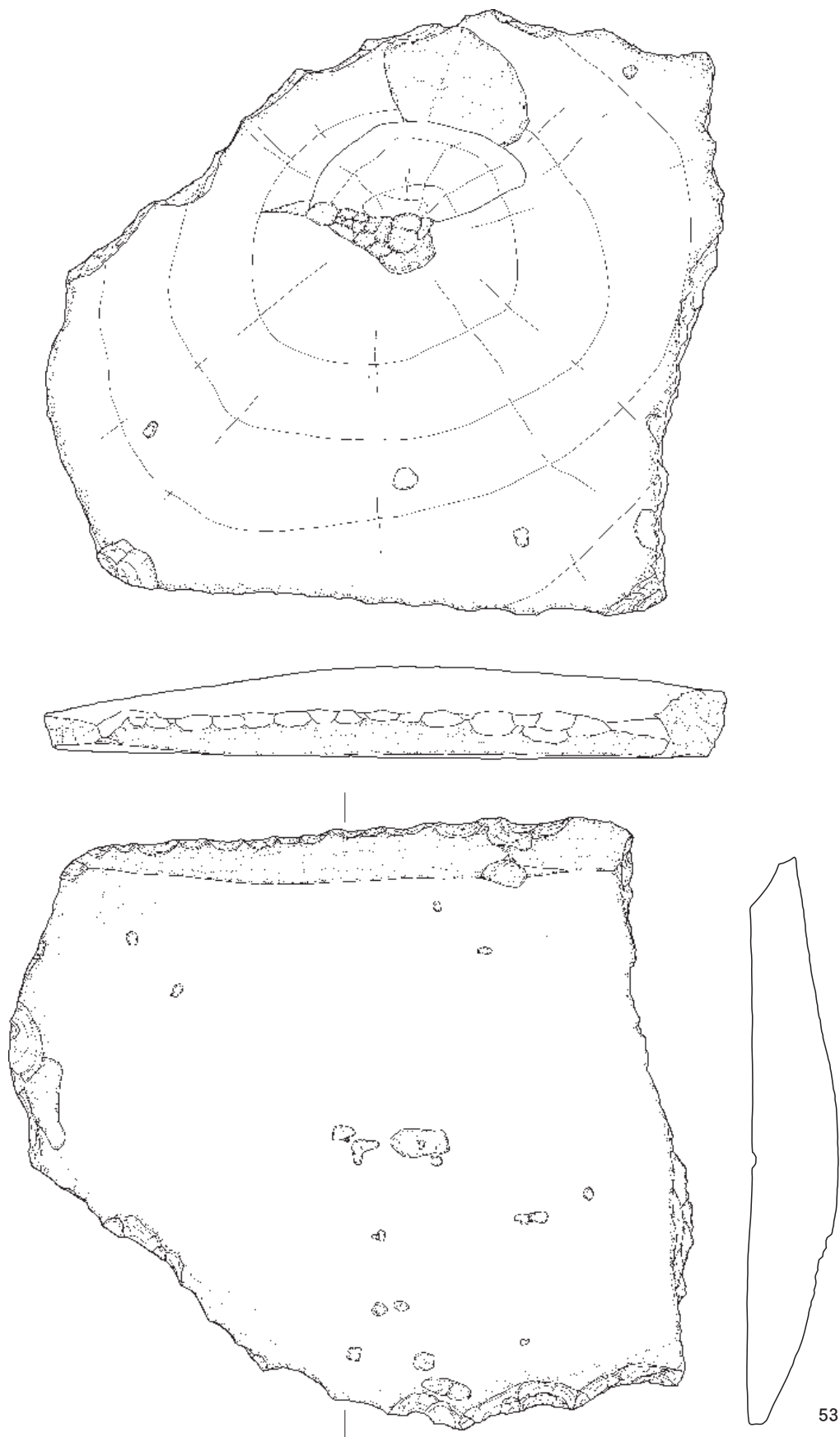
186



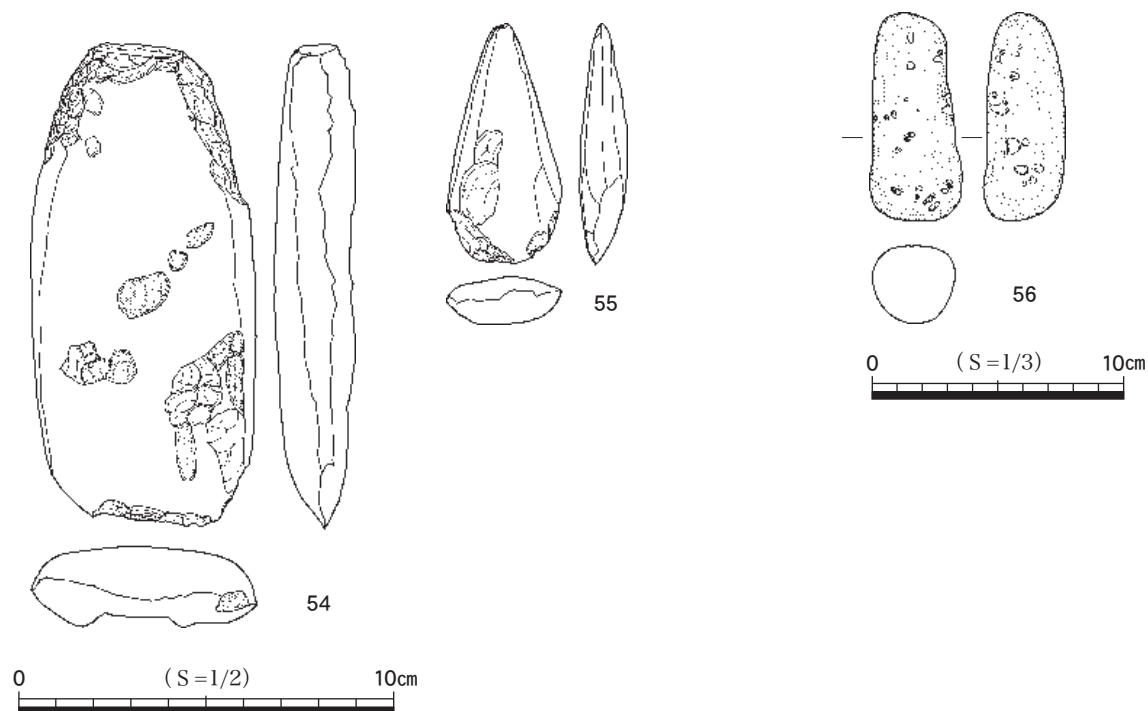
第54図 SH22出土遺物(6) (S=1/3)



第55図 SH22出土遺物(7) (S=1/3 (187~189)、S=2/3 (49~52))



第56図 SH22出土遺物(8) (S=1/4)



第57図 SH22出土遺物(9) (S=1/2 (54、55)、S=1/3 (56))

り細く、最大幅は刃部のやや上部にくる。表面下半右側に大きな磨き残しがみられる。また、刃部付近は使用による欠損が多く生じ、幾度もリダクションしたようである。56は掌に収まるサイズの磨石。

#### SH24 (第58～64図)

第5調査区G-16で検出した竪穴住居跡である。検出した歪な形状の黒色プランを住居の輪郭と判断し掘り進めたが、結果としてこの住居は隅丸方形プランになった。検出プランに合わせて土層観察用ベルトを設定し掘り下げを行ったため、住居を4分割するような位置にベルトを設定できていない。また、掘り下げ途中で第5調査区の保存が決定したため、住居の北西域及び柱穴は完掘していない。

住居の軸線はN25°E方向に向ける。南北方向に6.6m、東西方向に6.3m、深さ32cmの大きさである。北辺及び南辺の膨らみは、掘り過ぎによるものであり正確な輪郭ではない。本来は直線的な輪郭であったものと思われる。周壁の立ち上がりは急で、周溝は幅17cm、深さ10cmの規模で周壁下を巡り、東辺で途切れている。

埋土は1～6層まで分層している(第63図)。1層・1'層・2層は黒褐色砂質土で同質であるが、炭化物など含有物・量に違いがあり分層している。これらの層は住居内に厚く堆積し、縄文土器や石器が多量に包含されていた。黒褐色土堆積以前は黄褐色や橙色の地山によく似た3～5層が、住居中央付近は薄く、壁付近は厚く堆積していた。よって本住居は、埋没過程の初期に地山に似た土(住居の土手?)が、壁下及び住居中央付近へ挿鉢状に堆積し、そこへレンズ状に土器を多量に包含する1層などの黒褐色土が堆積したものと思われる。床面直上出土土器と黒色土内の土器

が接合する状況から住居廃絶後、間を置かず埋没が始まったことがわかる。

土器はパンケース約53箱分が出土した。鐘崎Ⅲ式、鐘崎最新相、北久根山第二形式、鐘崎Ⅱ式、太郎迫式の順に出土量が減少するが、床面に張り付くように鐘崎Ⅱ式期の遺物が出土したため本遺構はこの時期と推定している。また、住居の北西区で人骨が出土し、東西ベルト西半の黒色土（1層）より塊状耳飾1点が横向きの状態で出土している。人骨から75cm東に離れた位置にあるため副葬品ではないと考える。

炉は床面中央やや西よりに敷設されている。支柱穴は、P1～7であり、完掘しなかった範囲にも支柱穴が存在すると思われる。炉を中心に住居の各辺に沿うように柱穴が「口」の字状に規則的に配置されていた可能性が高い。角の位置のP2・4・6は規模が大きく、P2は直径44cm、深さ36cm、P4は直径48cm、深さ67cm、P6は直径40cm、深さ52cmである。P1・3・5・7は直径20～30cmと小規模であり、P3・7は深さ32cmを測る。壁溝がこの東側で途切れることから、入口施設の柱穴であろうか。また、P1・3・7の埋土上位で小礫を検出している。柱穴が埋没する最終段階で意図的に小礫を埋置した可能性もある。なお、南北ベルトから出土したカラスザンショウ種子の放射性炭素年代は、概ね3500年BPの年代値が得られている。

#### 人骨（第64図）

NE区で人骨が1体出土している。第5章の舟橋京子先生・田中良之先生の特論では、人骨の埋葬形態は仰臥屈葬、右腕は肘を強屈し、左腕を伸展、下肢は膝関節を強屈という状況であり、頭蓋が遺体安置後右肘付近に移動されているという。頭蓋の位置から断体儀礼が行われた可能性も指摘されている。以下、出土状況について報告する。

人骨は、長さ70cm、幅37cmを測る。1層を発掘中に発見したものであるが、この部分に土層観察用ベルトが掛かっていなかったため、人骨出土位置の層位的理解を助けるものとして第62図を作成している。これを見ると、人骨は住居中位で検出されていることがわかる。明確な墓壙は検出されていないが、人骨出土状況及び周辺の土器出土状況を勘案すると、長軸75cm、短軸45cm程度の墓壙が構築されていた可能性がある。墓壙は住居が埋没する途中で掘り込まれたか、完全埋没後に構築されたのかは判然としない。

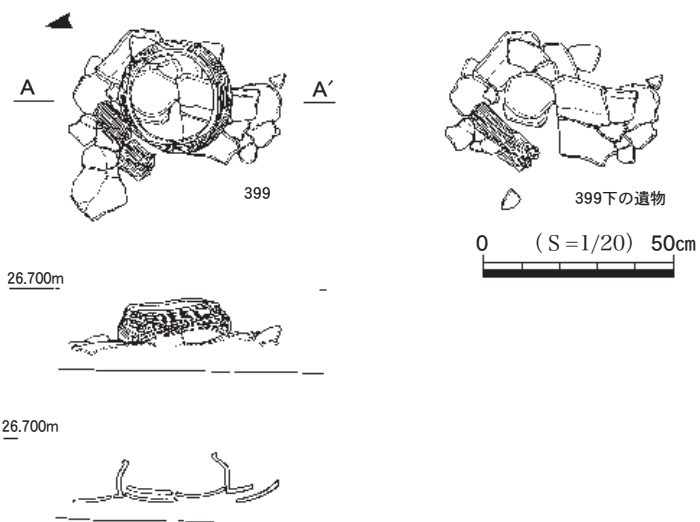
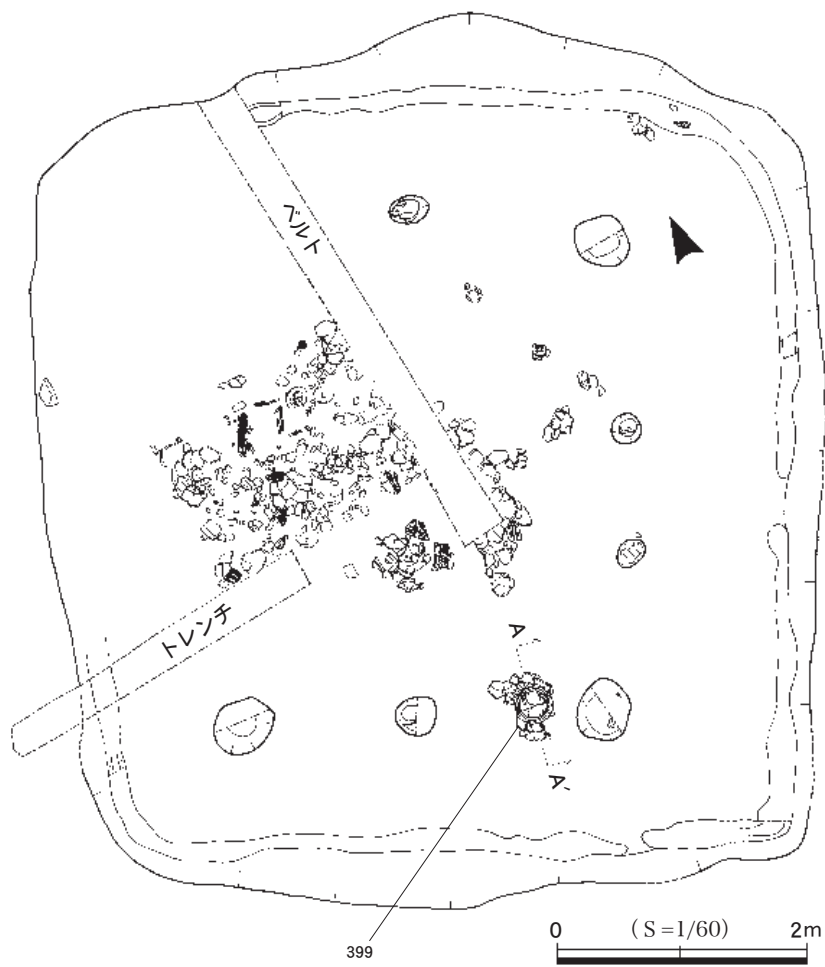
#### 炉跡（第60図）

炉跡は、一部ベルトにかかり全形が不明なものの、上部の直径は75cm、下部の直径は48cm、深さ14cmの大きさである。壁面の立ち上がりが比較的緩やかな穴を掘り、川原石と思われる石を底面と壁面に8個据え置いている。礫は被熱により赤色を呈し一部剥落した部分もある。壁面の石は2～3石程度欠落しており、その内の1石が被熱した面を下向きにして底面に敷いた石の上から出土している。埋土は1・2層に分かれるがいずれも住居に堆積した埋土と同質であった。炉外の西及び北の面が赤色化していた。一部掘り下げ、土が硬くしまった状態と掘り込みがないことを確認した。よって、この部位で火を焚いたか、何らかの理由で地山が被熱したものと推測する。

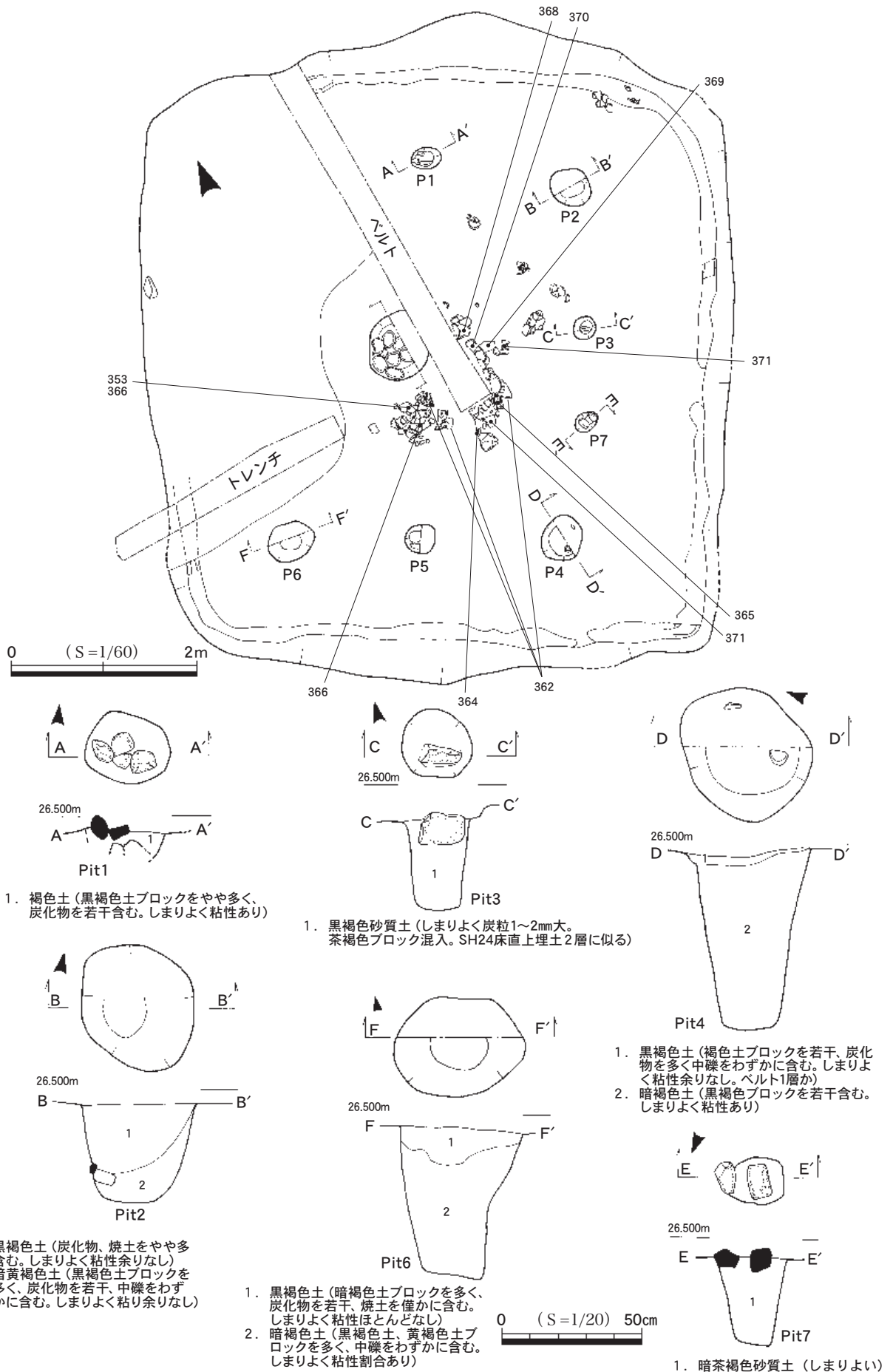
#### 遺物出土状況

住居内から総破片数25,413点、総重量396,145.2g（約396kg）の縄文土器が出土した（接合に用いた石膏も含むため純粋な土器総重量ではない）。土器は255点を図示した。1層が157点、1層と2層が接合したもの14点、床面と1層が接合したもの10点、2層が24点、3層と柱穴が3点、No.399とその下が5点、一括が41点、その他1点である。

特筆すべきは住居南西区で出土したNo.399である（第58・112図）。住居に1層が堆積して間もな

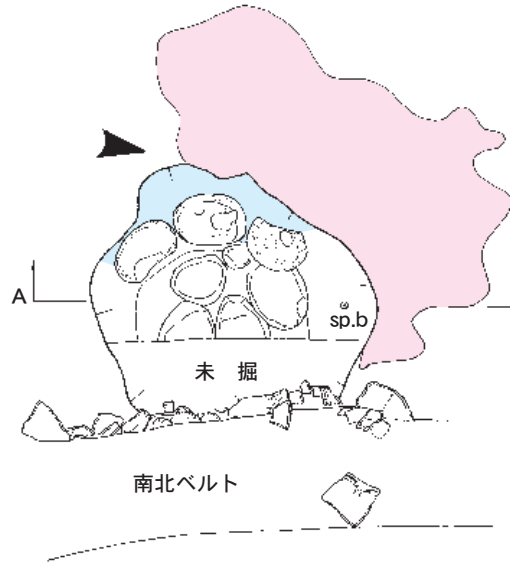


第58図 SH24平面図 (S=1/60) 399遺物出土状況平・断面図 (S=1/20)

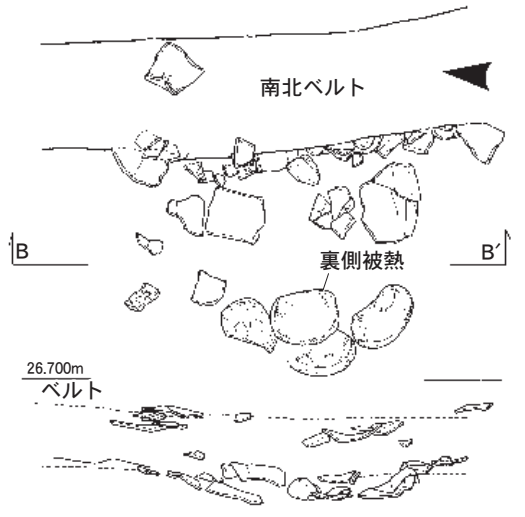
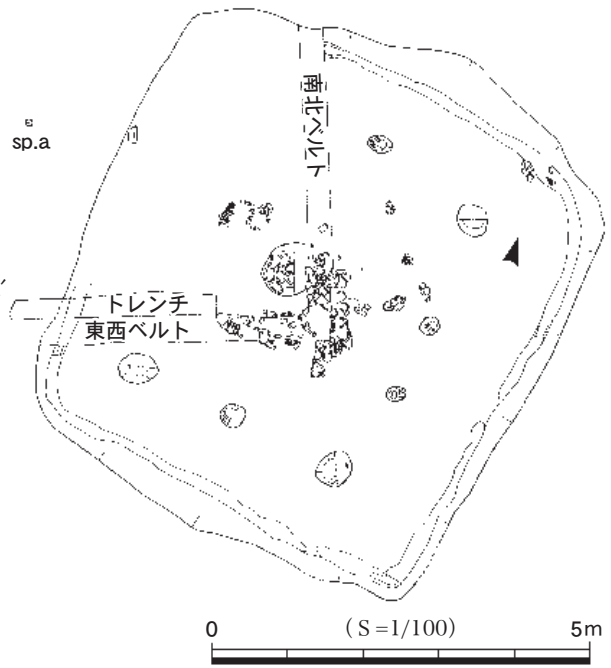


第59図 SH24平面図 (S=1/60) ピット平・断面・土層図 (S=1/20)

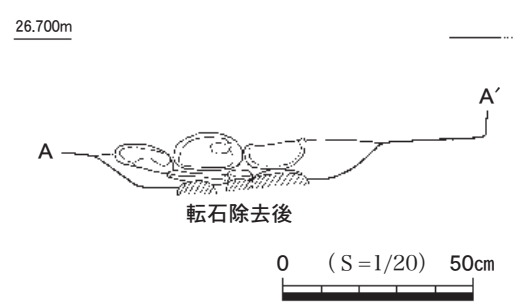




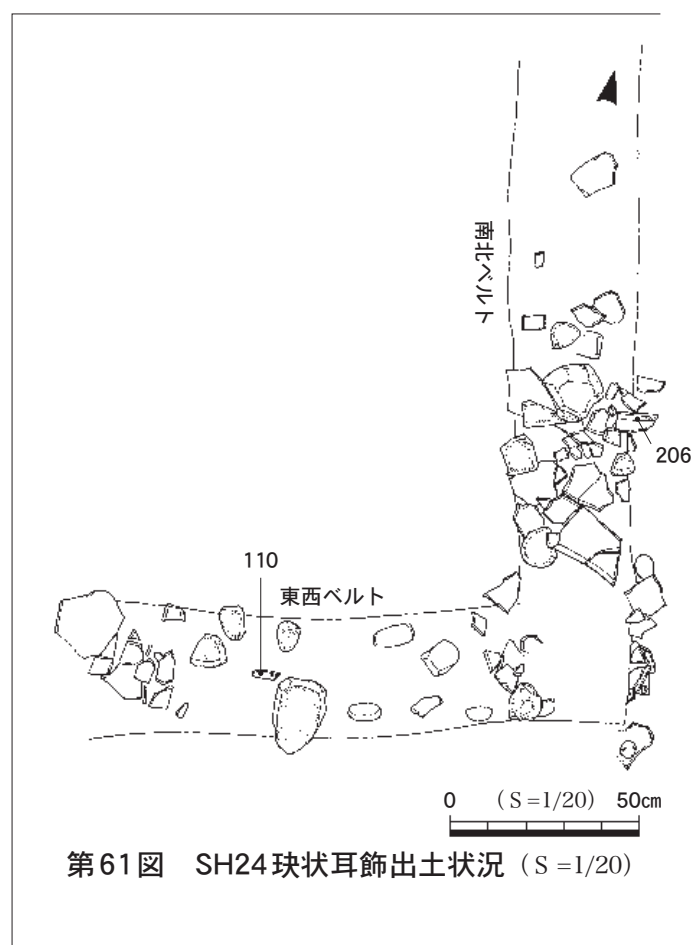
- 黒褐色砂質土 (炭片、焼土粒中量含む石の裏込め土)
- 暗赤褐色砂質土 (しまりよく炭粒 (1~2mm大) 多量)



1. 黒褐色砂質土 (しまりよく炭片多く含む。ベルト1層と思われる)
2. 暗赤褐色土 (しまりよく炭粒多く含む。地山直上の2層)



第60図 SH24平面図 (S=1/100) 石囲炉平・断面図 (S=1/20)



第61図 SH24 珧状耳飾出土状況 (S=1/20)

い頃に、土器の下半部を打ち欠き、上半部のみを据え置いている。上半部は土器片の上に置かれていたが、これらの土器片はNo.399とは接合せず別個体の一部であることが判明している。また、本遺物の性格を把握するため埋土のリン・カルシウム分析を実施した。結果、骨・歯の存在が確認されたが、住居内埋土と差がないため、胞衣壺として利用された土器ではないことが考えられる。

1層（第65～96図） 鐘崎式から太郎迫式までが出土した。190～275、318は鐘崎式に位置付けられる口縁部を含む有文土器の鉢である。190～193は幅広のしっかりとした沈線文を施す。鐘崎Ⅱ式とみられる。194～262は沈線の幅が狭く、沈線の口縁部上部への集約、及び施文の退化が認められる鐘崎Ⅲ式の範疇である。197・233は沈線後に渦巻施文を施し沈線と渦巻が分化している。220はステッキ状施文とする。234はステッキ状施文下方を沈線で2重に区画する。渦巻文の萌芽をみる。244は胴部過半へ沈線で半弧を描く。245・253も同類だが橋状取手下に施文が3箇所認められる。255は残存率が70%程あり残りがよい。260・262は口縁部が強く内傾し、短径壺のような形状を呈す。262の橋状取手下には入組部を多重に区画する。263～275は鐘崎式最新相の一群である。口縁部形状などの変化はほとんど見られないが、文様の簡略化が著しく、入り組部にS字状（波状）の沈線文を縦位に描くことに特徴がある。270はステッキ状施文の簡略・退化が始まった段階であろう。272は口縁部が直立する。273～275は胴部が強く張り出し、口縁部が立ち上がらない一群。273は退化したS字状沈線文を4列並べる。274はS字状沈線文とステッキ状施文を多重に区画し渦文風にしたものとS字状沈線文が併存している。275はS字状施文を施し、「く」の字の沈線で区画を作り出す。276～278は型式認定が困難であった一群である。279・284・294は口縁部や胴部の形状から石町式段階とみられる。285は沈線間に半裁竹管文を、その下に刺突文を施す。286は滑石を多量に含有する。287は渦巻施文とS字状沈線文が併存する。295は口縁端部に浅い沈線を2条巡らせる。太郎迫式と考えられる。296～303は有文の胴部片である。299は入り組部の多重沈線の横に小さな入り組文が認められる。304は滑石を多量に含み、爪形文風の刻みを3段に施す。305～317、319～333、346は無文土器。305・306は浅鉢形状。308は穿孔あり。320は胴部内面に幅の広い貝殻条痕が縦方向に残る。326は口縁端部内面に段を有する。334～345は底部片。平底が多い。底に網代圧痕などは認められない。337は上げ底を呈する。347は土師器の坏。9世紀代か。本住居埋没後に掘られたと思われる遺構から出土した土師器。

1層+2層（第97～102図） 348～361は1層と2層が接合した土器群で、348～356は鐘崎Ⅲ式の範疇であろう。348は残存率約80%の深鉢で、ステッキ状施文を多重で区画する部位や、渦巻施文の部位も認められる。同一個体の中でも文様に差があることがわかる。349は残存率約70%の深鉢で、口唇部に多数の刺突文を施す。350はほぼ完形の深鉢。退化したステッキ状施文や、橋状取手上位及び波頂部上位に入組状の文様を描く。353は胴部の平行沈線間にへら状工具による刺突を巡らせ、底部に網代圧痕が確認できる。358は浅鉢で、胴部屈曲部下位に巻貝擬似縄文を施す。359も浅鉢。口縁部に2箇所穿孔がある。

床面+1層（第103～105図） 362～371が床面直上と1層が接合した一群。362・363は短い口縁部が立ち上がり、胴部には幅広の沈線を描き入り組部の文様も明確である。鐘崎Ⅱ式に位置付けられる。365は鐘崎Ⅲ式か。367は浅鉢。波頂部を1箇所作る。

床面直上土器は量的には多くないものの、鐘崎Ⅱ式が多く鐘崎Ⅲ式土器が少量のため、本住居の時期は鐘崎Ⅱ式期と判断する。

2層（第106～110図） 372～395は2層出土土器。372～384は鐘崎Ⅲ式。380は寸胴形の形

状。385・386は鐘崎式最新相である。386はS字状文の上部に刺突文を施す。387は浅鉢であろう。口縁部に2条の沈線を回す。388～398は無文土器や底部。389は外面にへう状工具によるミガキを施す。395は底部に指頭圧痕が4箇所残る。

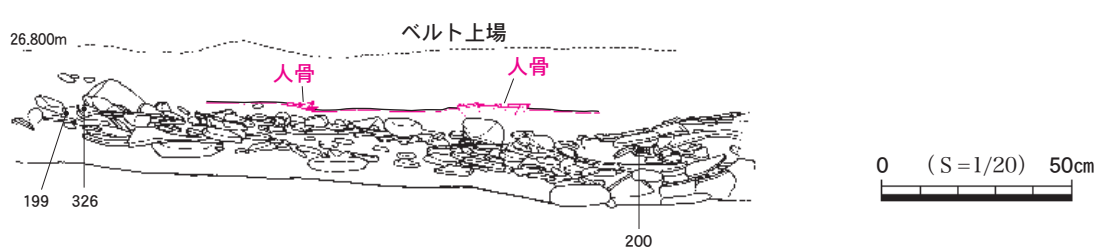
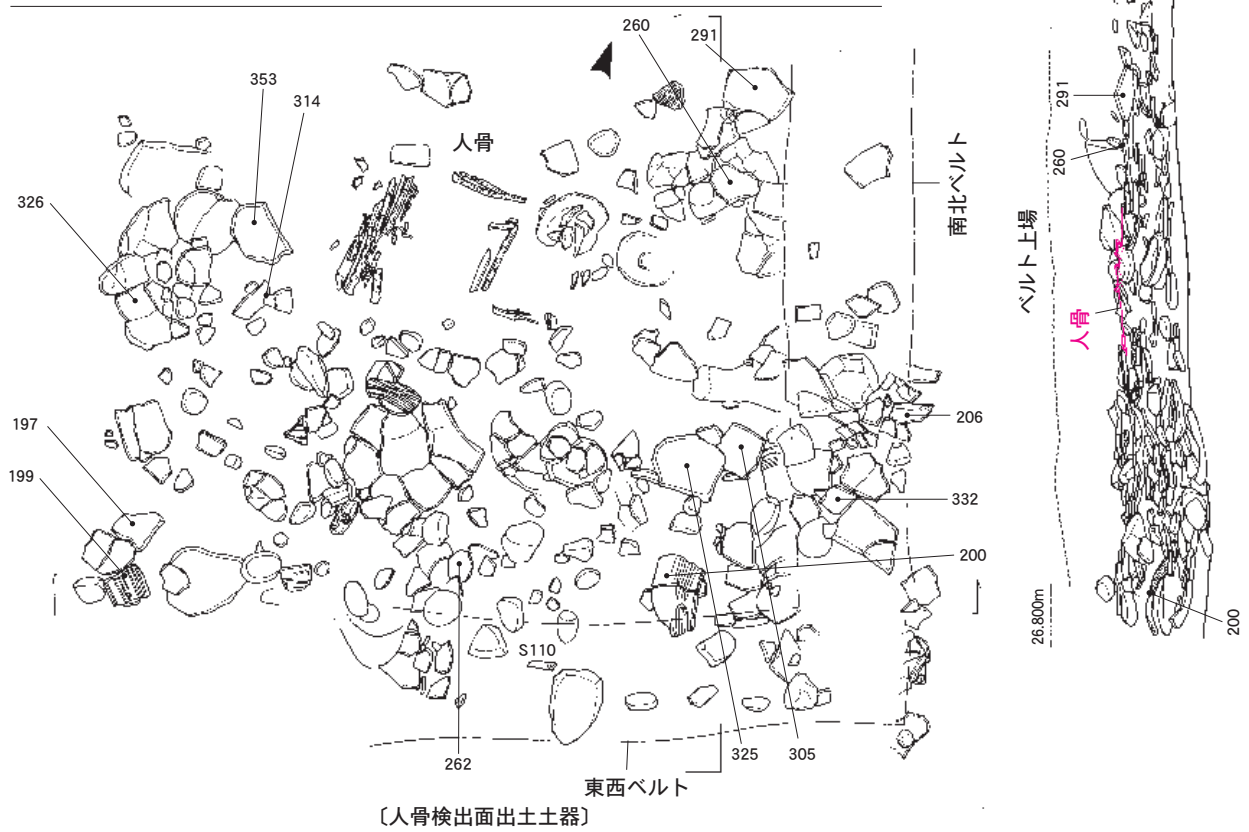
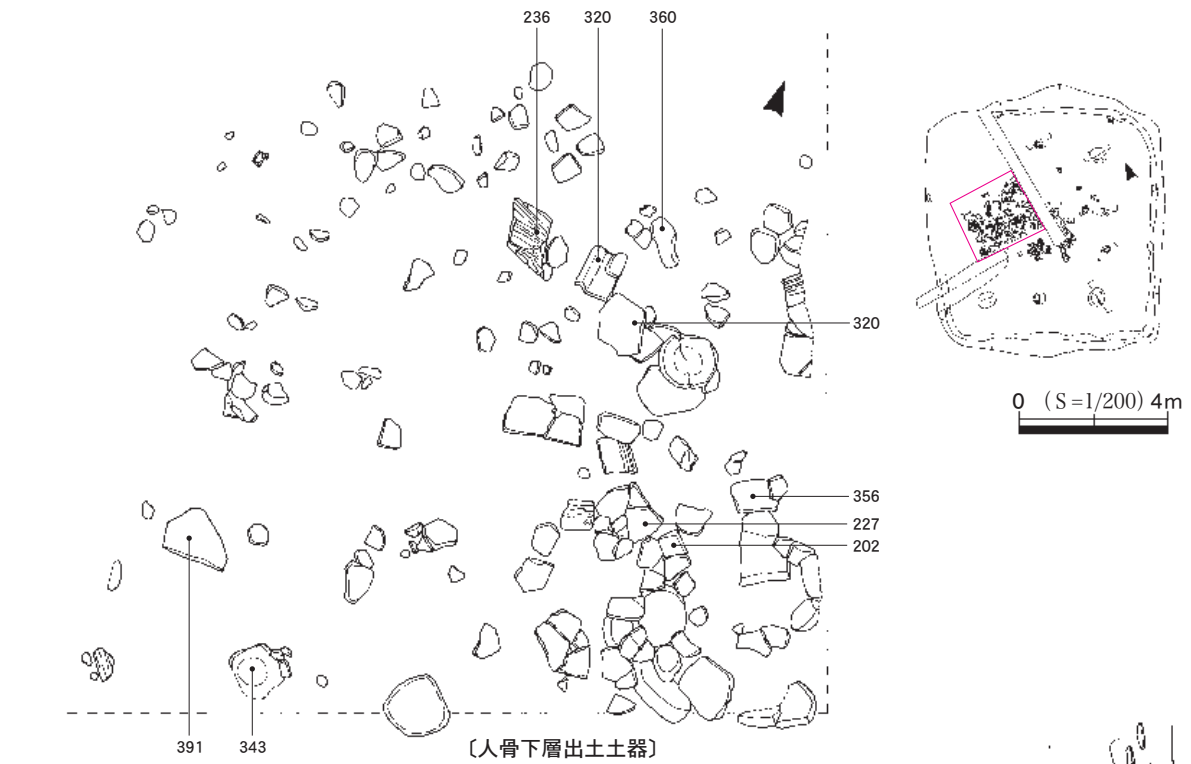
3層と柱穴（第111図） 396は3層出土の鐘崎式無文土器である。397・398は住居内の柱穴から出土した。

No.399とその下（第112～113図） 399とその周辺の土器は調査中「O区」として遺物の取り上げを行った。399は胴部にステッキ状施文や渦文を描く。下半部は失われている。401は胴部に鉤手に近いステッキ状施文を施す。403は肩が張り短径壺のような形状。

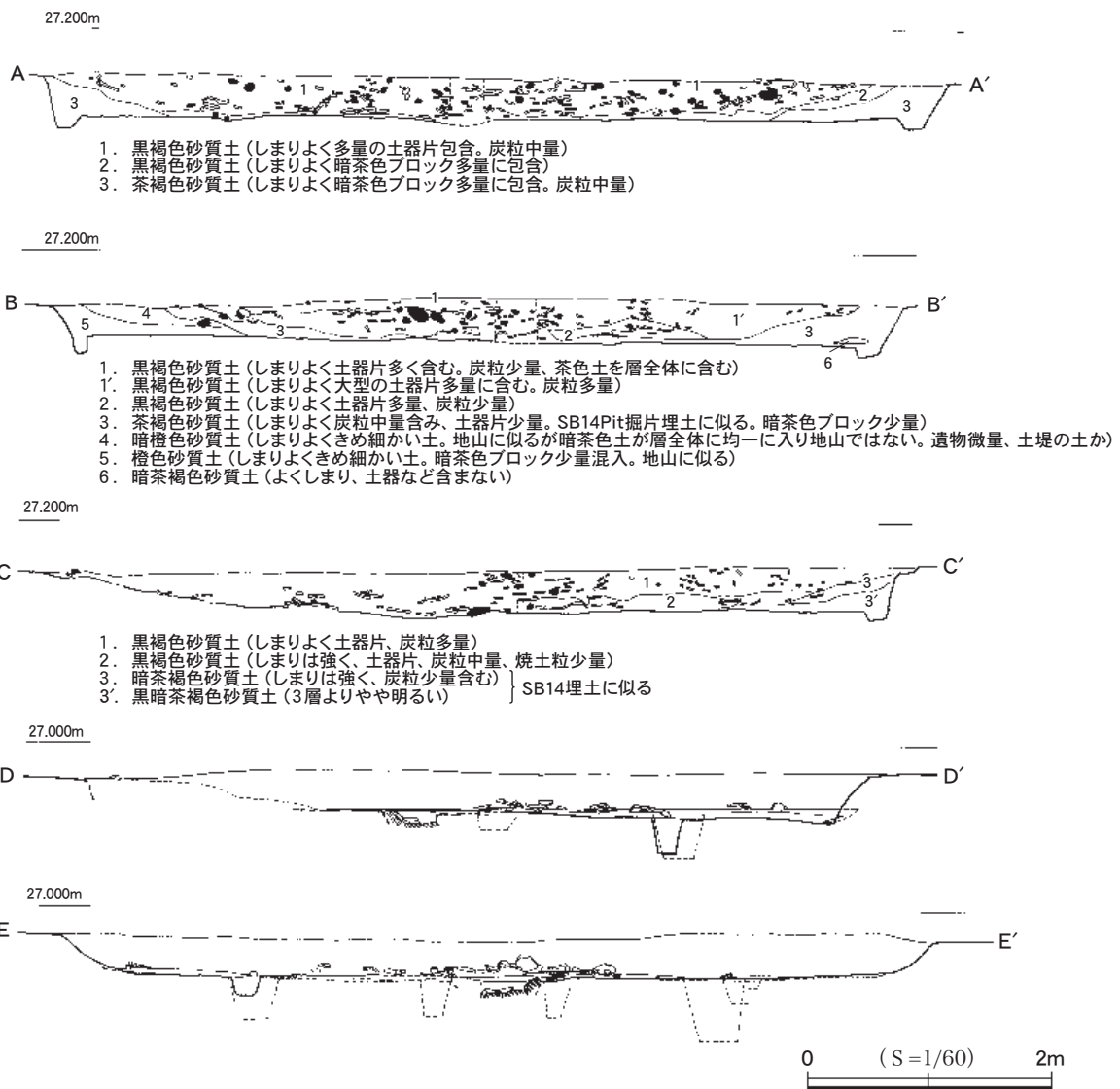
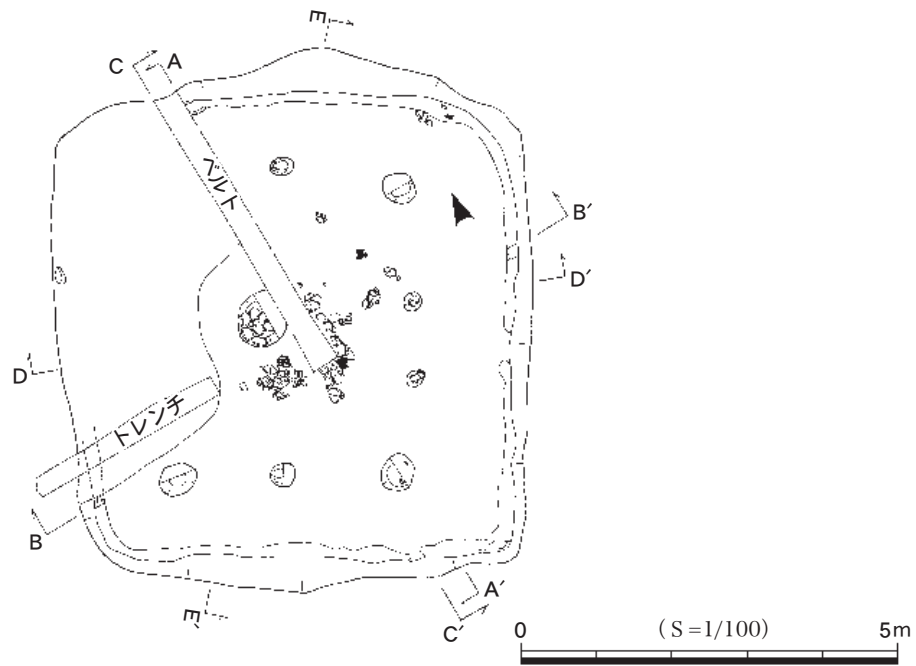
一括（第114～119図） 404～444は一括で取り上げた一群。404～435は鐘崎式土器で、404・405・434は幅広の沈線で文様を描く。鐘崎Ⅱ式に位置づけられる。406～431、435は鐘崎Ⅲ式である。432・433は鐘崎式最新相を示す。437は肥厚する口縁直下を穿孔する。438～444は無文土器。439は橋状取手を4箇所付ける。

#### 石器（第119～125図）

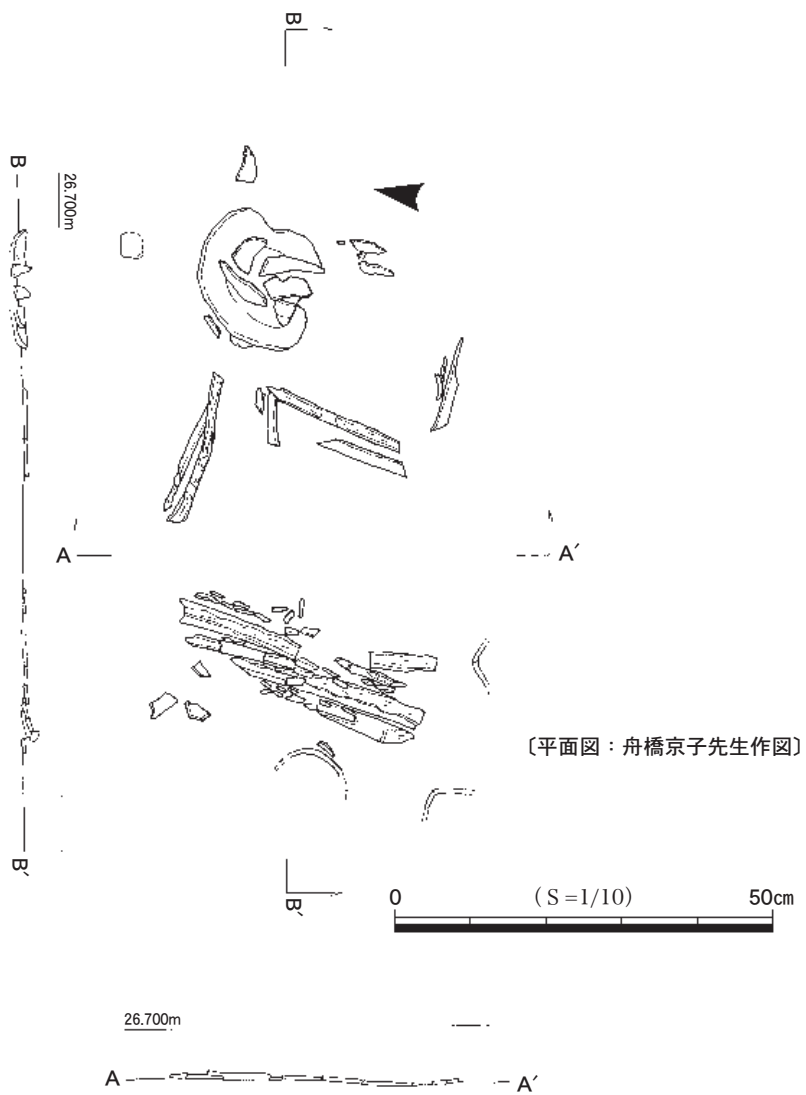
57～60、62～75は石鏃。57は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、正三角形に近い形状に仕上げられており、基部にやや深い抉りが入る。先端は欠損後にリダクションされている。58は姫島産黒曜石製の未成品。主に表・裏面の周縁部に加工が施されており、基部にも抉りが若干入る。先端部が折れた時点で製作を放棄したようである。59は多久産サヌカイト製の小型石鏃。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及ぶが、表面中央部の厚みは取り切れておらず、両肩が張り出す形状をしていたと考えられるが、左肩部は欠損している。基部にやや深い抉りが入る。60は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、正三角形に近い形状に整形し、基部にはやや深い抉りが入っている。左右の側縁形状が異なっており、右側縁は欠損の後、リダクションした可能性が高く、本来は左側縁のように右側縁も肩が張り出していたと推測される。62は姫島産黒曜石製。薄平な幅広剥片を素材とし、表・裏面の周縁部に急斜度な加工を施して、二等辺三角形に近い形状に仕上げているが、形状はやや歪である。内奥部には素材の面が大きく残り、基部の抉りは裏面への調整のみによる。63は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでいるが、横断面は蒲鉾型で表面の厚みを取りきれず、基部にはやや浅い抉りが入る。先端は若干欠損している。64は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、基部よりやや上の最大幅から真直ぐ落ちる形状に整形しており、基部には浅い抉りが入る。基部は僅かに、右脚部は若干欠損している。65は姫島産黒曜石製。幅広剥片を素材とし、表・裏面ともに加工は周縁部に留まり、両面の中央に素材の面が残る。先端を欠損して、右側縁上半をリダクションしており、先端・左脚を若干欠損している。66は姫島産黒曜石製の未成品。幅広剥片を素材とし、表・裏面とも2/3くらい加工が及んでいるが、中央部に素材の面が残る、整形は不十分である。基部に若干抉りも認められる。67は多久産と考えられるサヌカイト製。表・裏面の内奥部まで押圧剥離が及んでおり、基部にやや深い抉りが入っている。先端と右脚を若干損失している。68は姫島産黒曜石製の未成品。幅広剥片を素材としており、表面は全面に加工が及んでいるが、裏面は周縁部のみで半ばほどである。基部の抉りも不十分で、先端が欠損した際に製作を中止したか。69は姫島産黒曜石製。幅広剥片を素材としており、表面の全面には押圧剥離が及んでいるが、裏面は上半のみで、素材の面が大きく残る。基部にはやや深い抉りが入り、先端を僅かに欠損している。70は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、浅い抉りが入る。先端を若干欠損してい



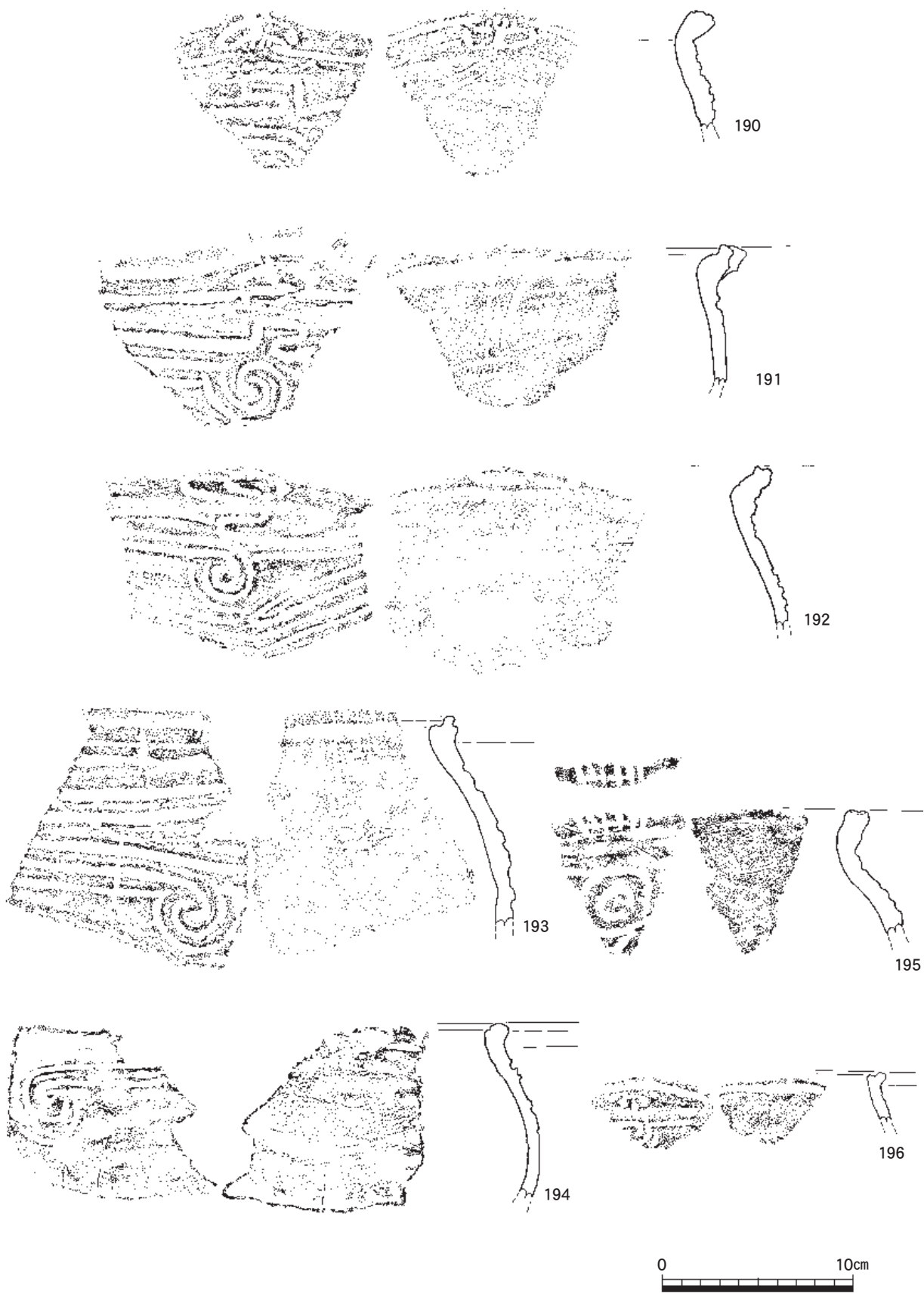
第62図 SH24人骨周辺遺物出土状況 平・断面見通し図 (S=1/20、S=1/200)



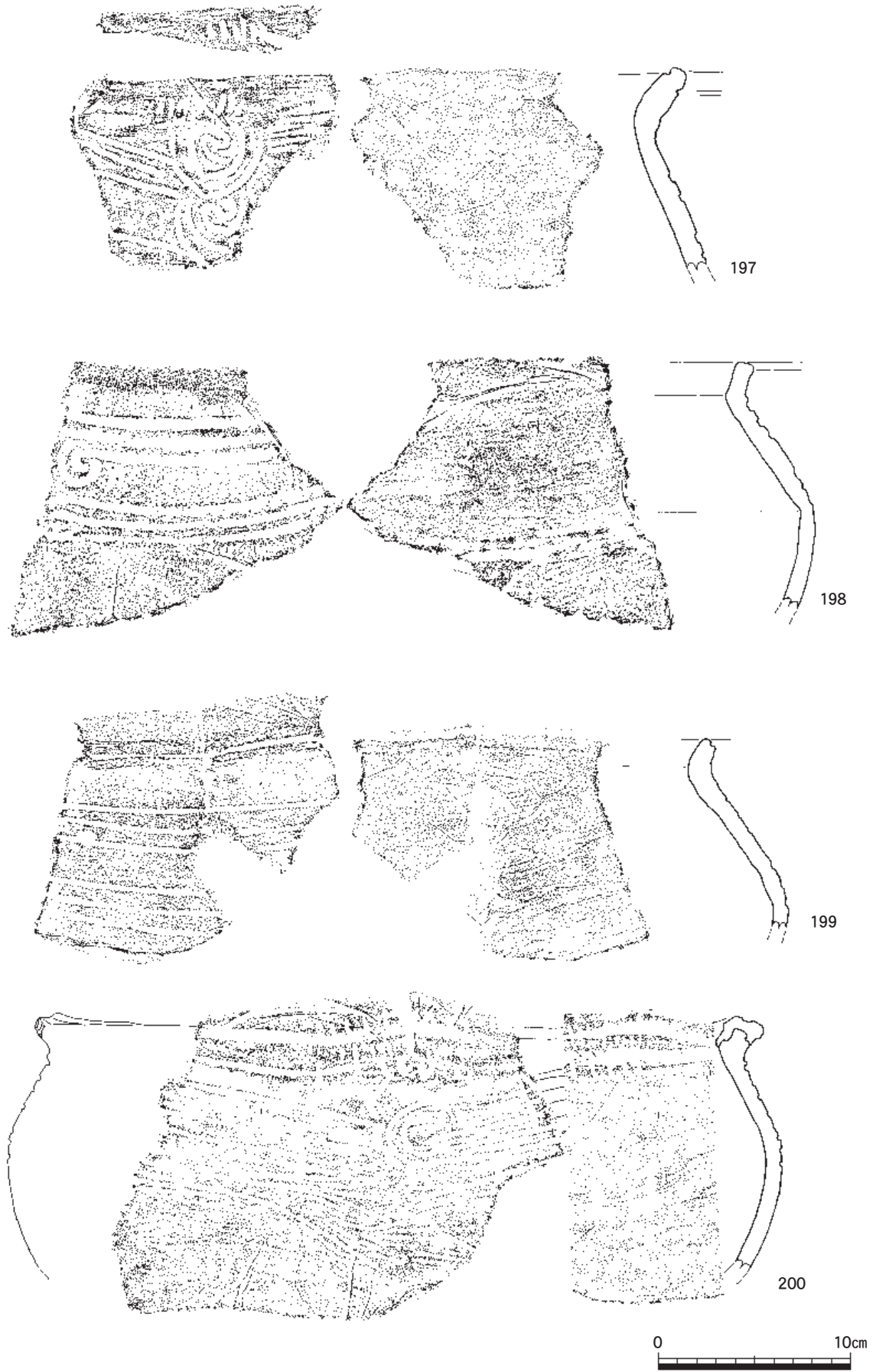
第63図 SH24平面図 (S=1/100) 東西・南北ベルト断面・土層図 (S=1/60)



第64図 SH24平面図 (S=1/100) 人骨出土状況平・断面図 (S=1/10)

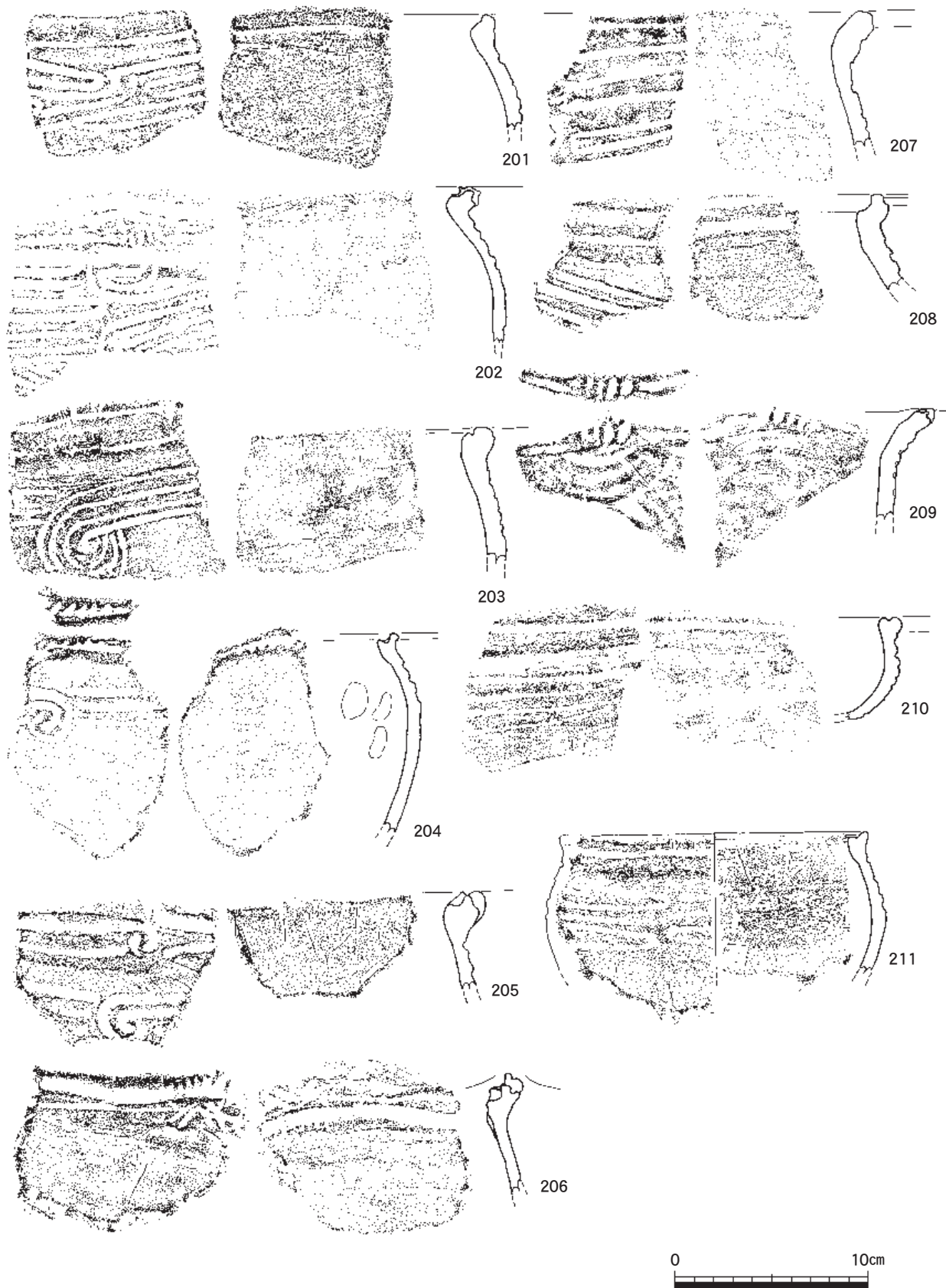


第65図 SH24出土遺物(1) (S=1/3)

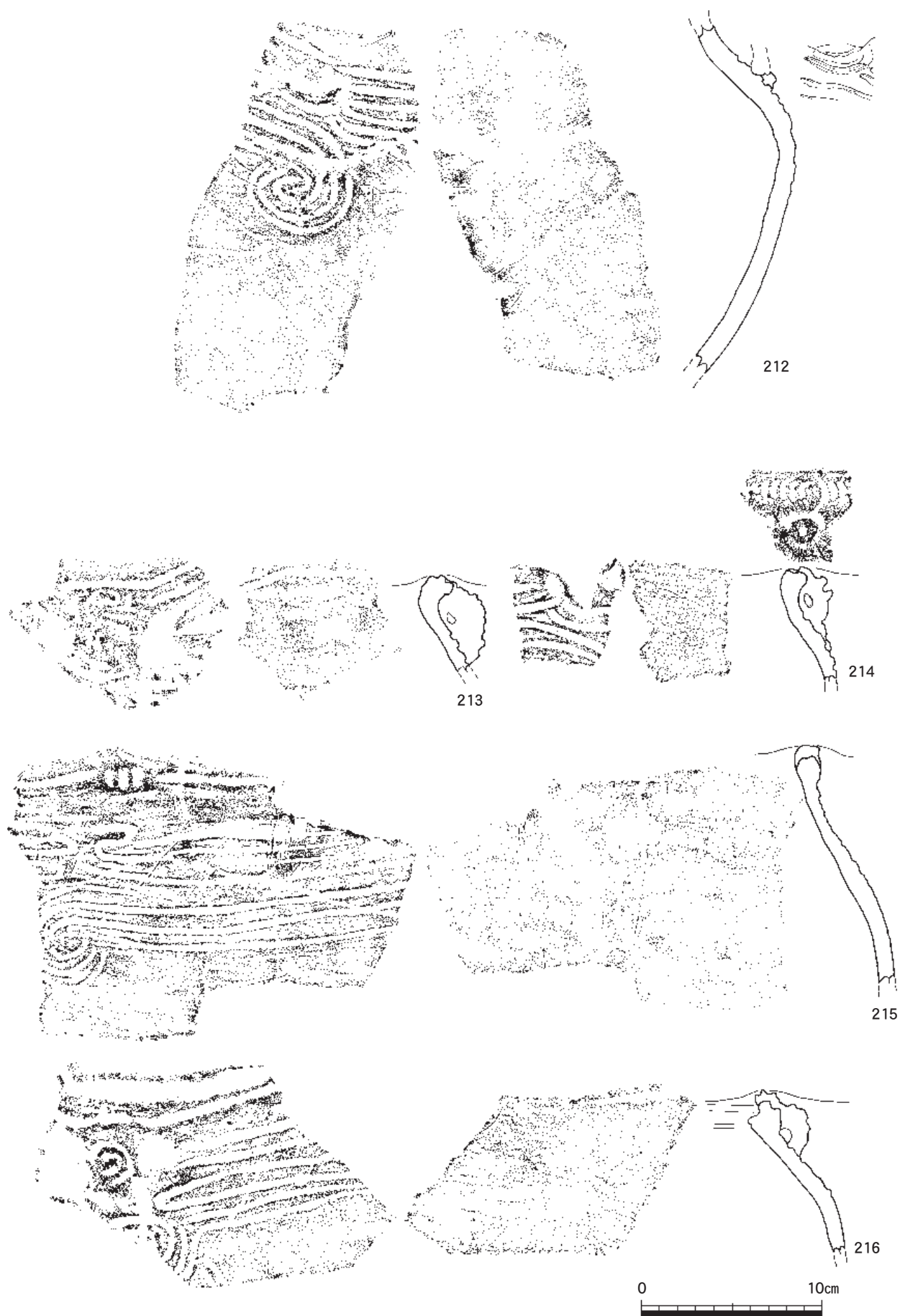


第66図 SH24出土遺物(2) (S=1/3)

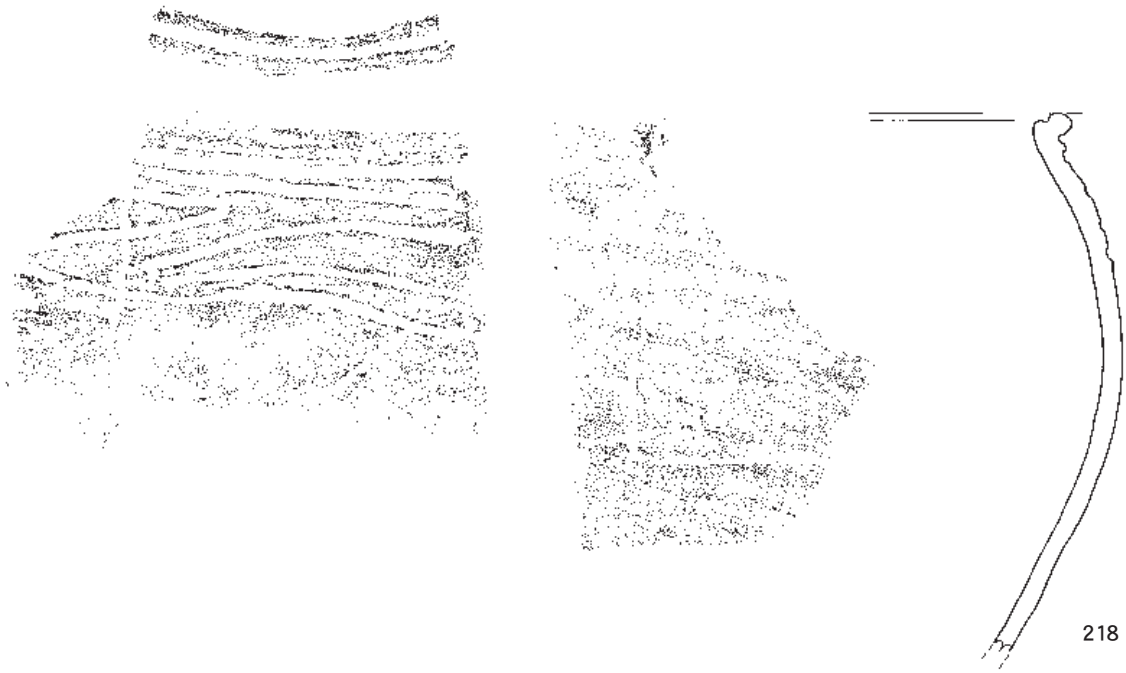




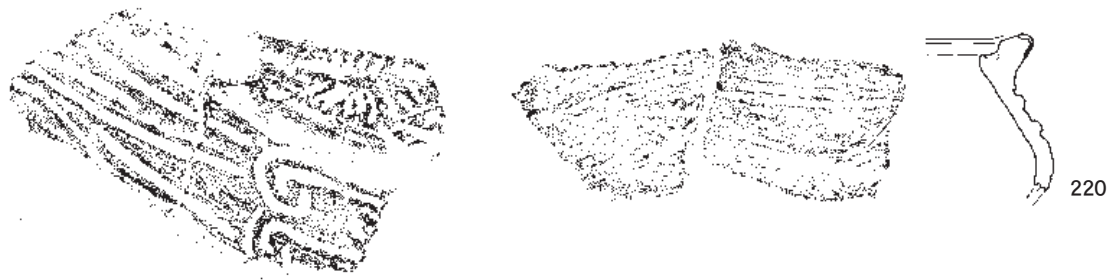
第67図 SH24出土遺物(3) (S=1/3)



第68図 SH24出土遺物(4) (S=1/3)



第69図 SH24出土遺物(5) (S=1/3)



220



221



222



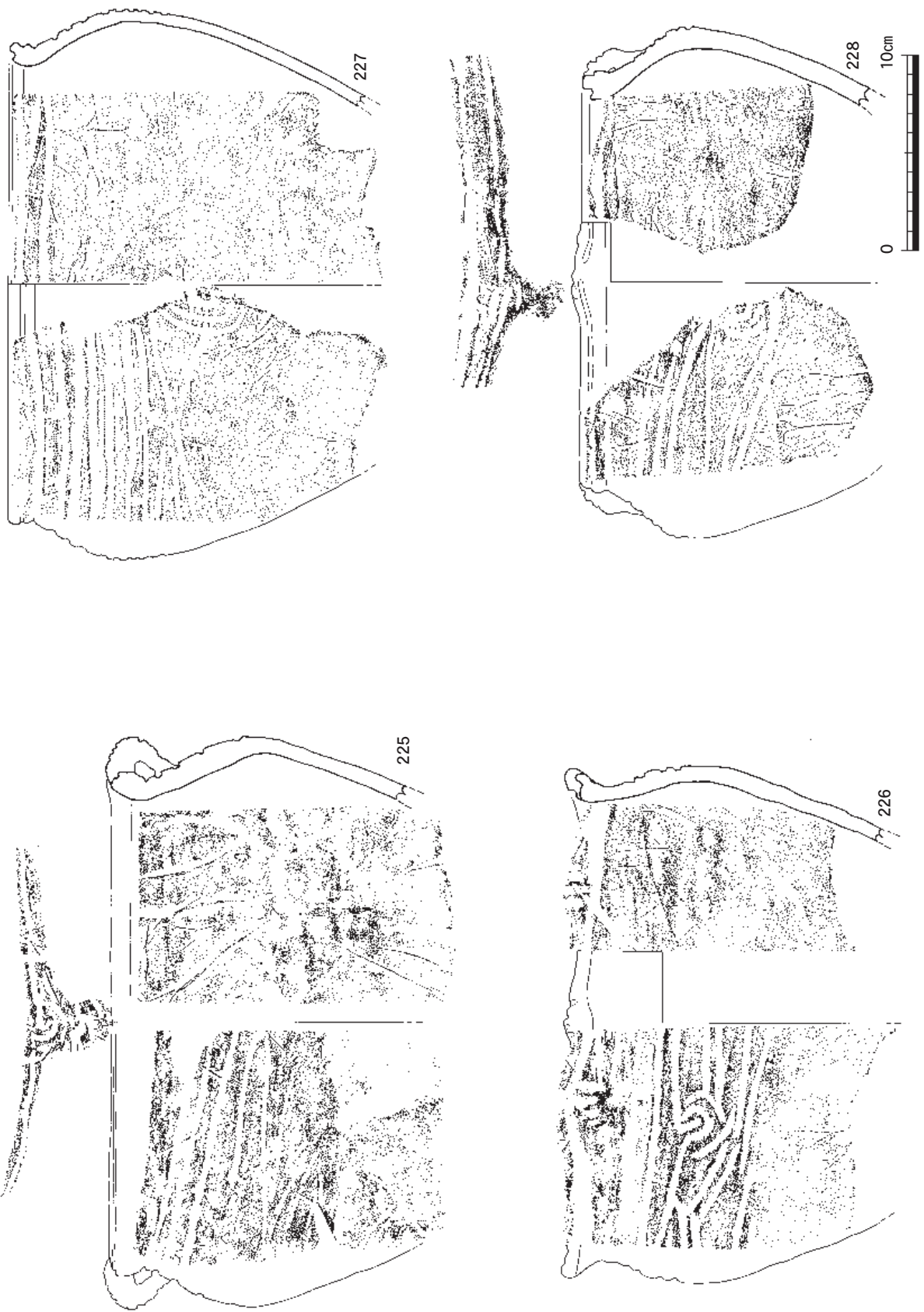
223



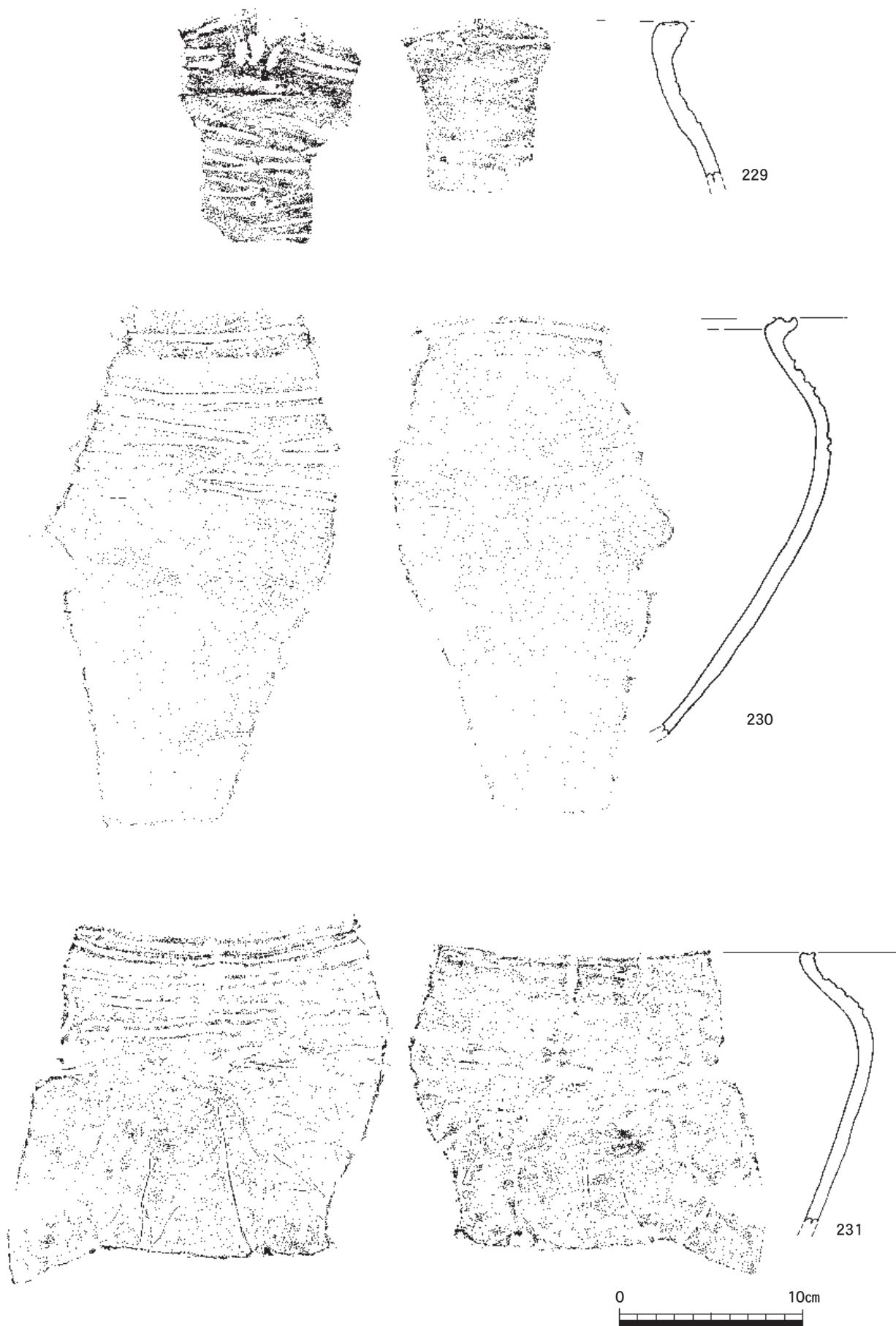
224



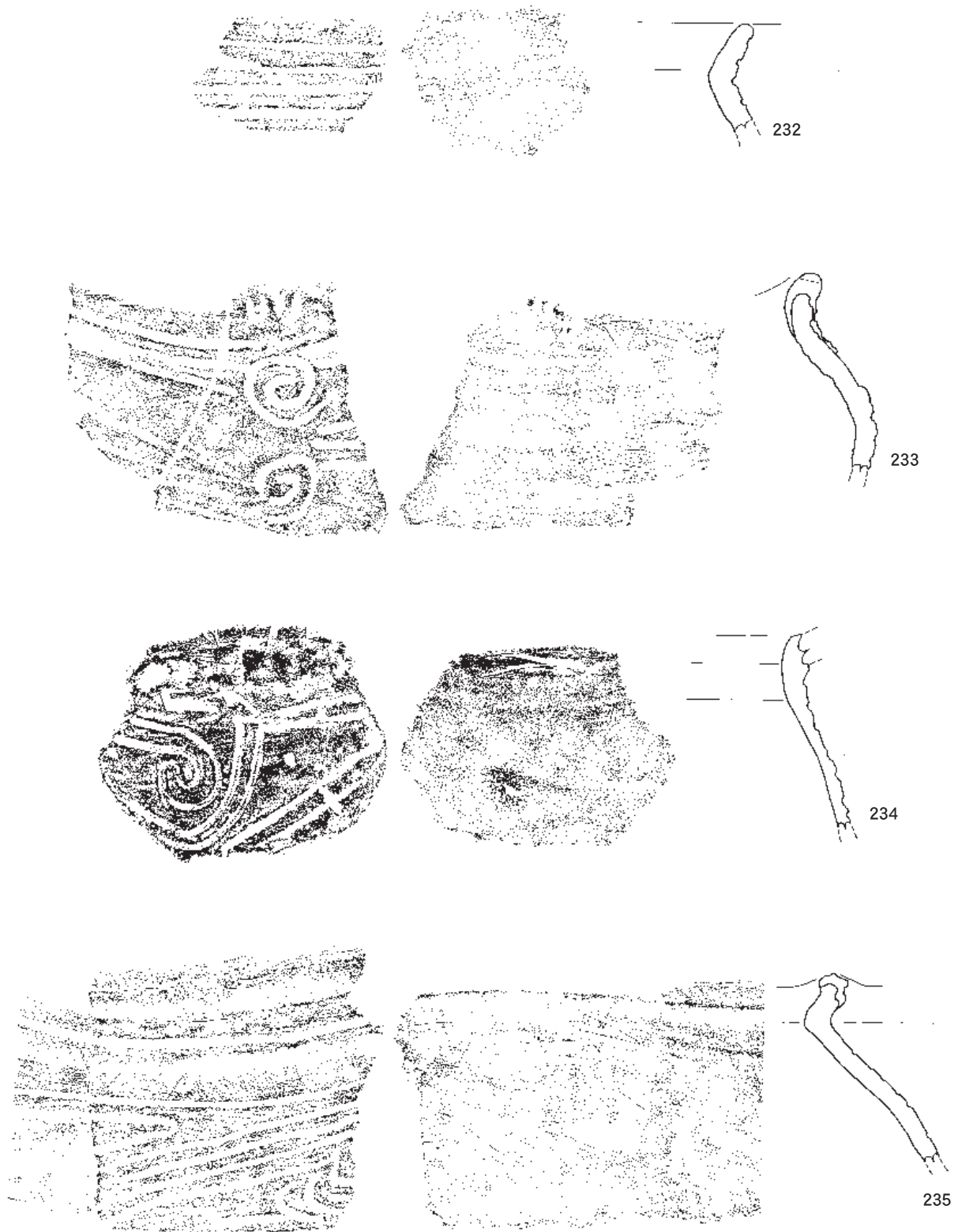
第70図 SH24出土遺物(6) (S=1/3)



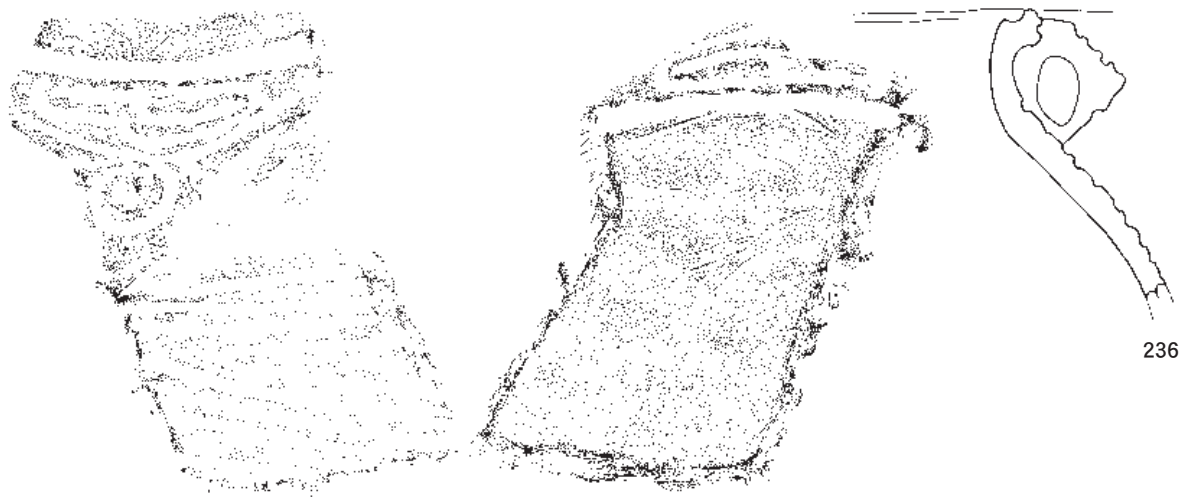
第71図 SH24出土遺物(7) (S=1/3)



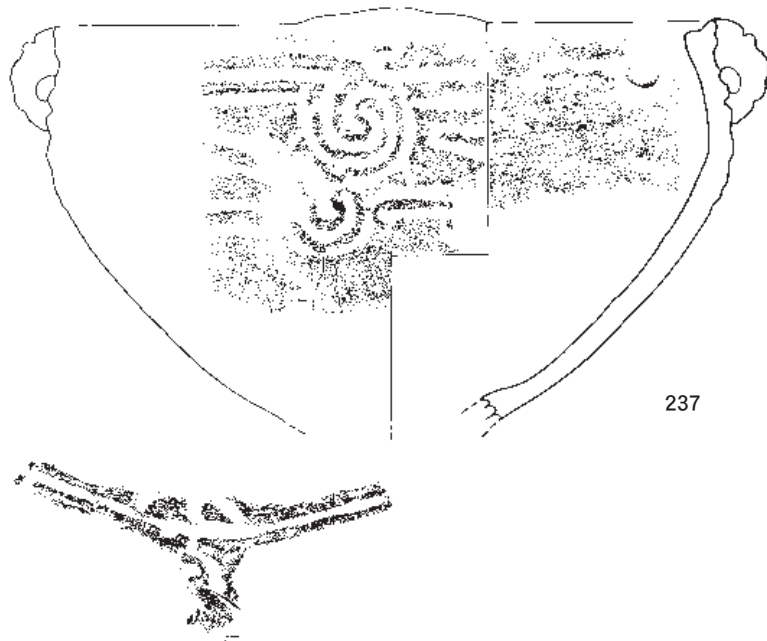
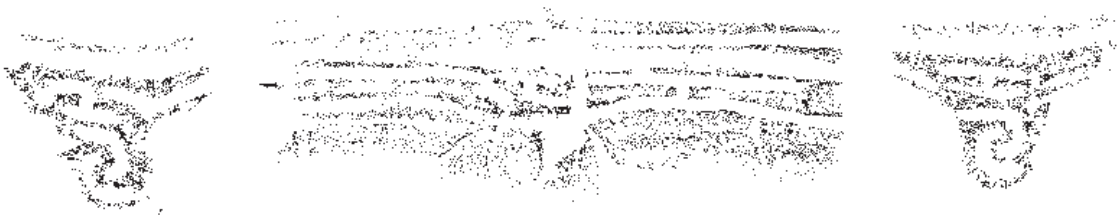
第72図 SH24出土遺物(8) (S=1/3)



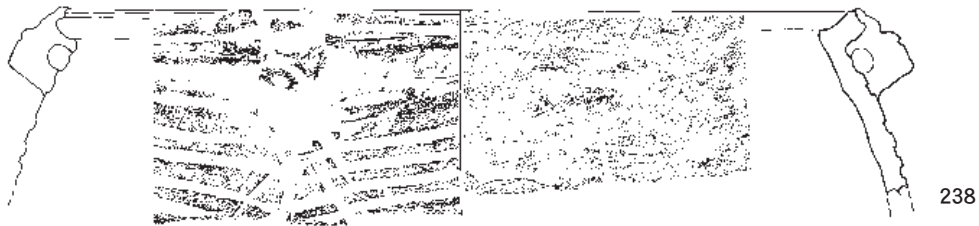
第73図 SH24出土遺物(9) (S=1/3)



236



237

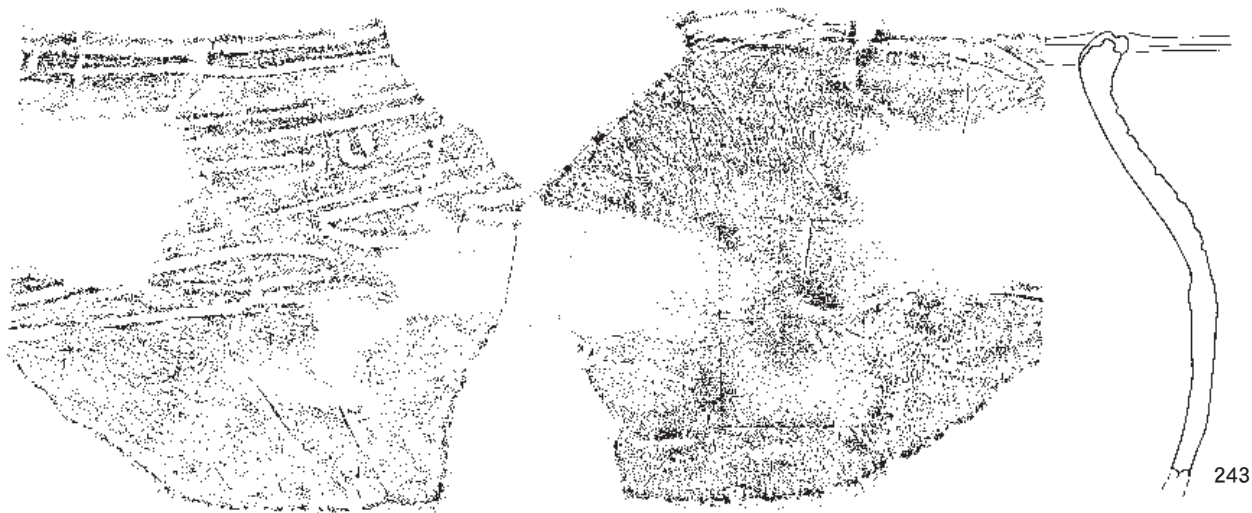
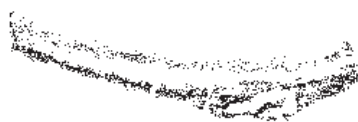
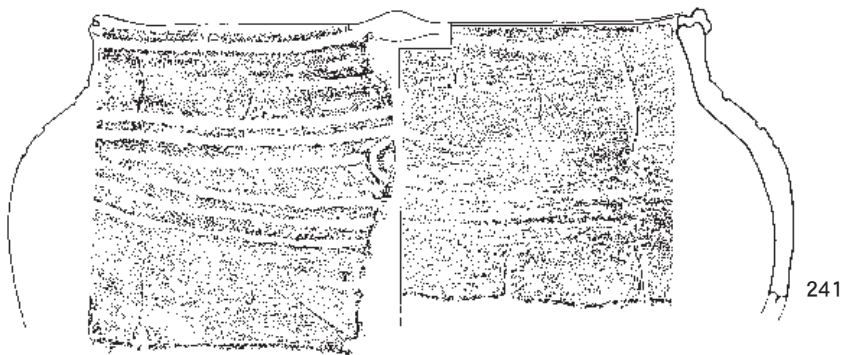
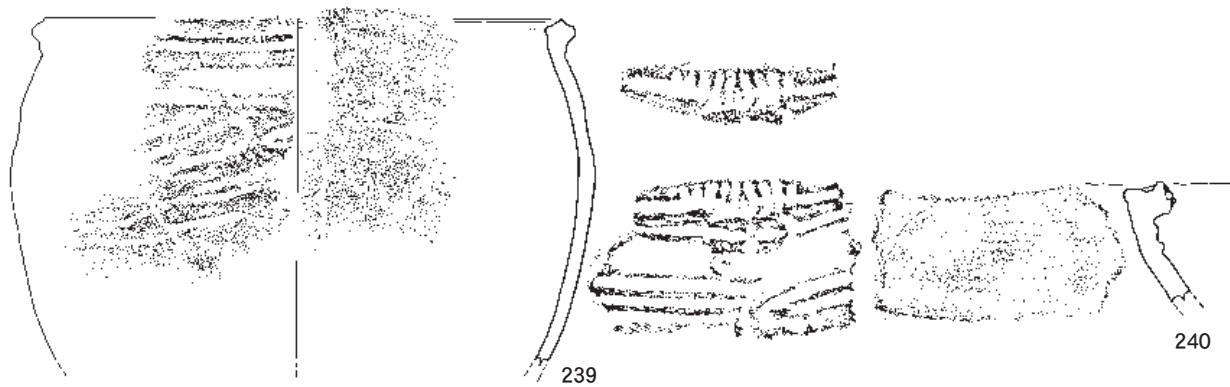


238

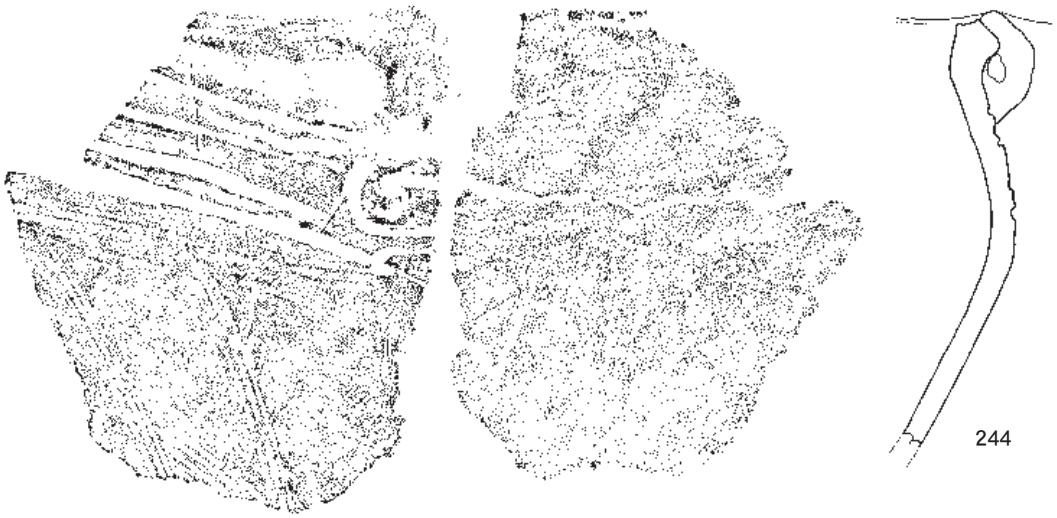


第74図 SH24出土遺物 (10) (S=1/3)





第75図 SH24出土遺物 (11) (S=1/3)



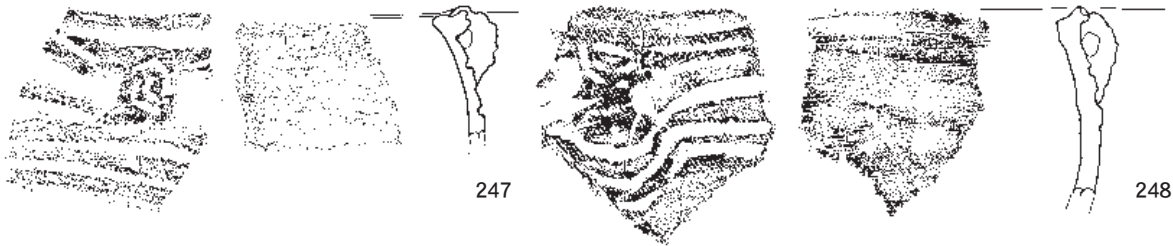
244



245



246

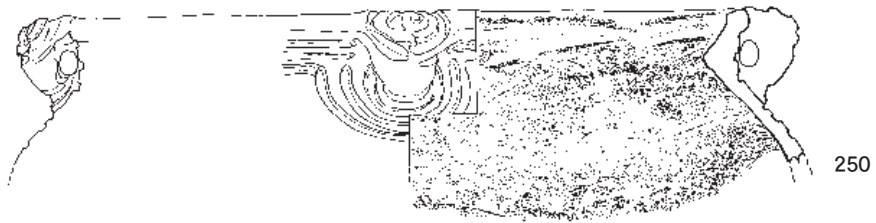
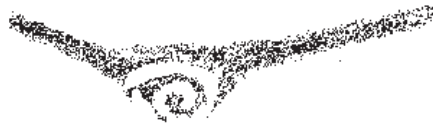
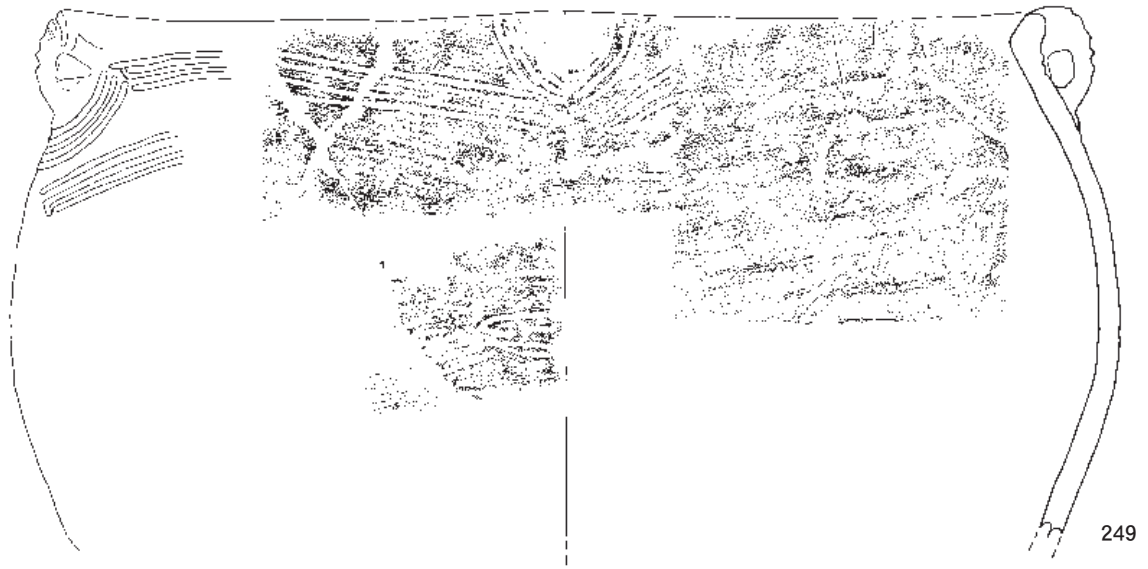


247

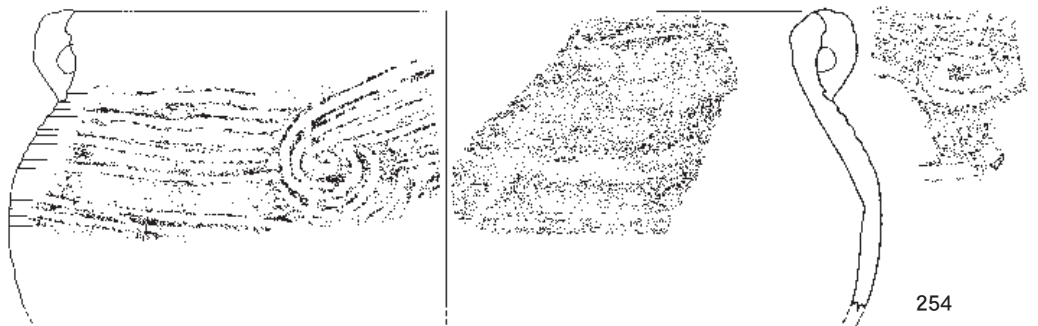
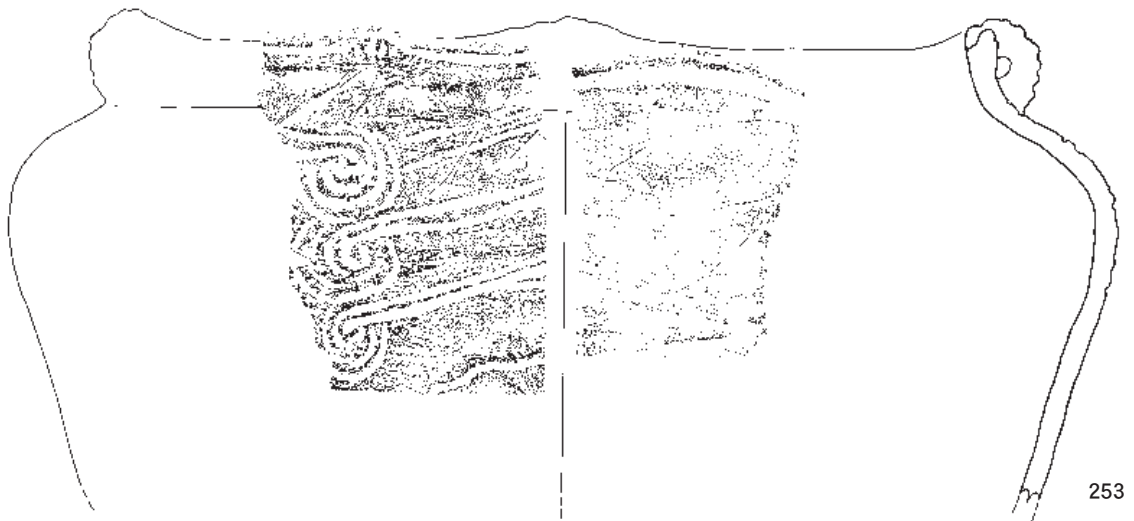
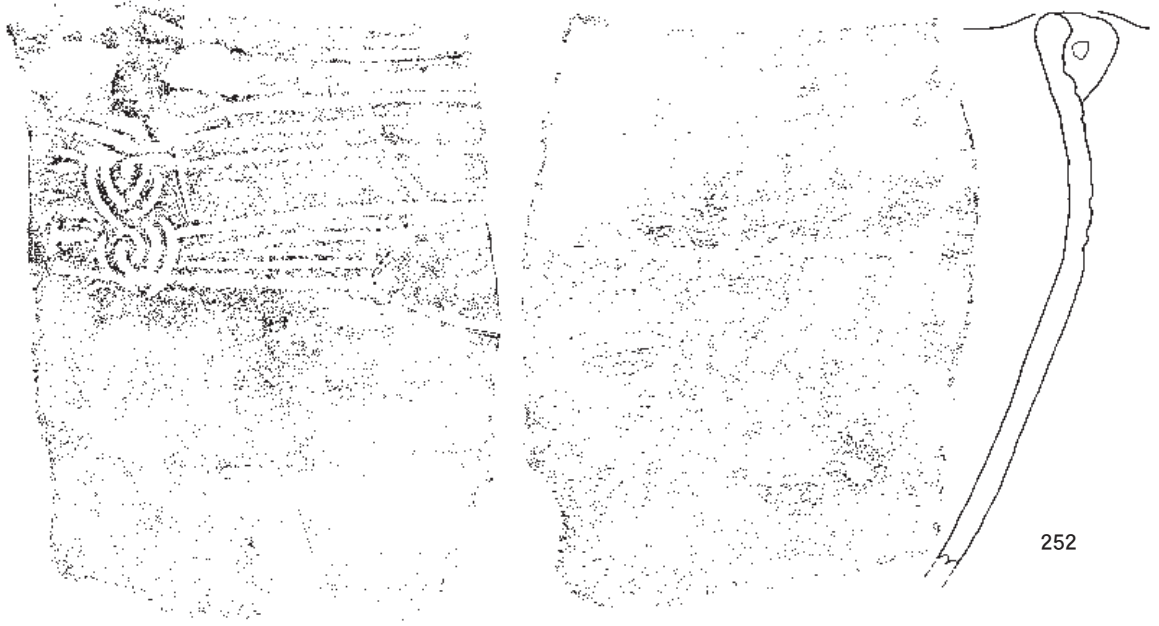
248



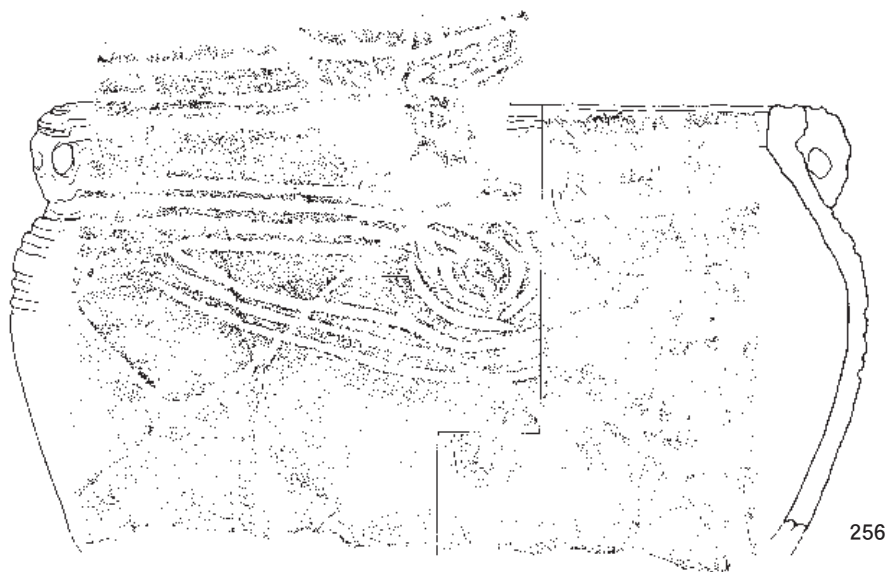
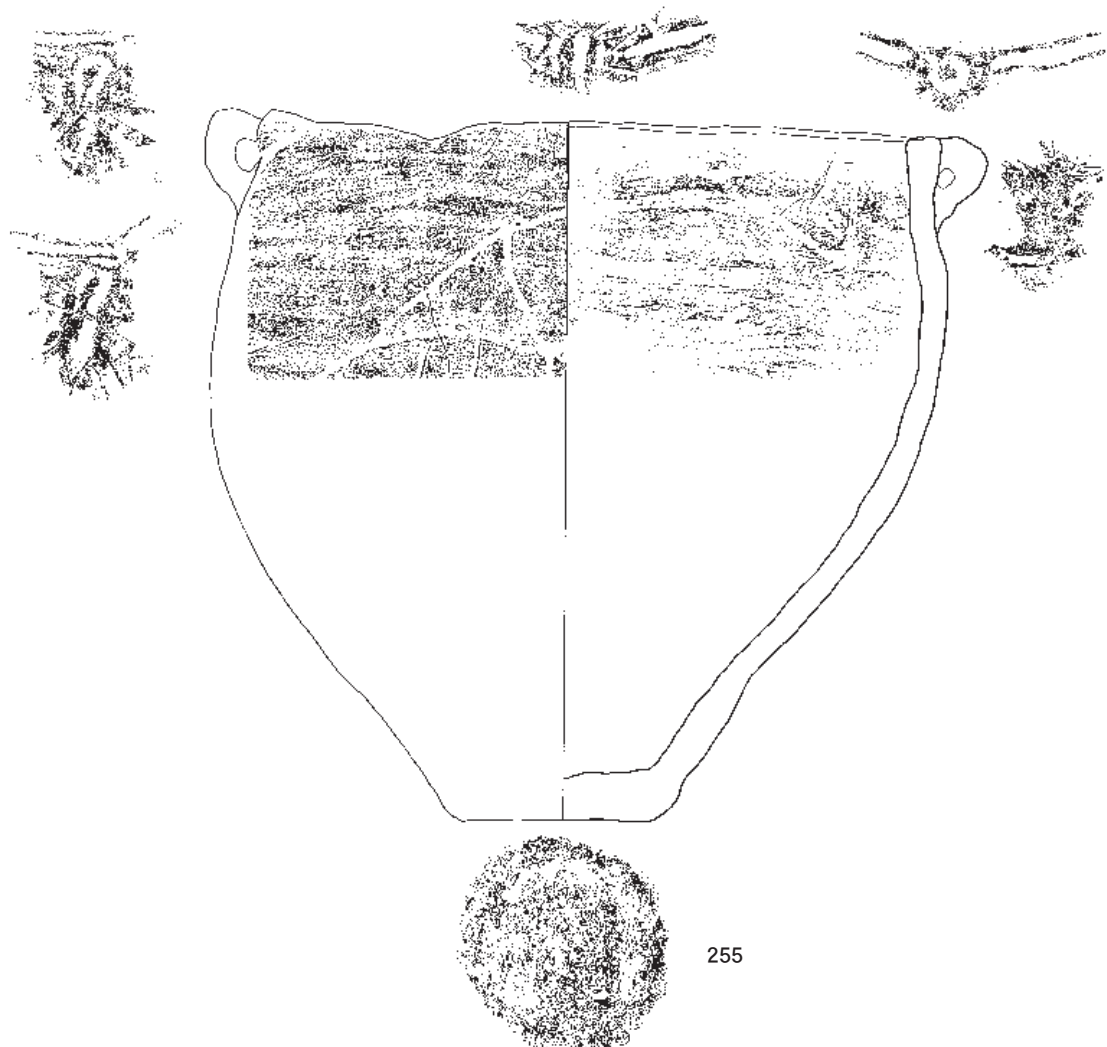
第76図 SH24出土遺物(12) (S=1/3)



第77図 SH24出土遺物 (13) (S=1/3)

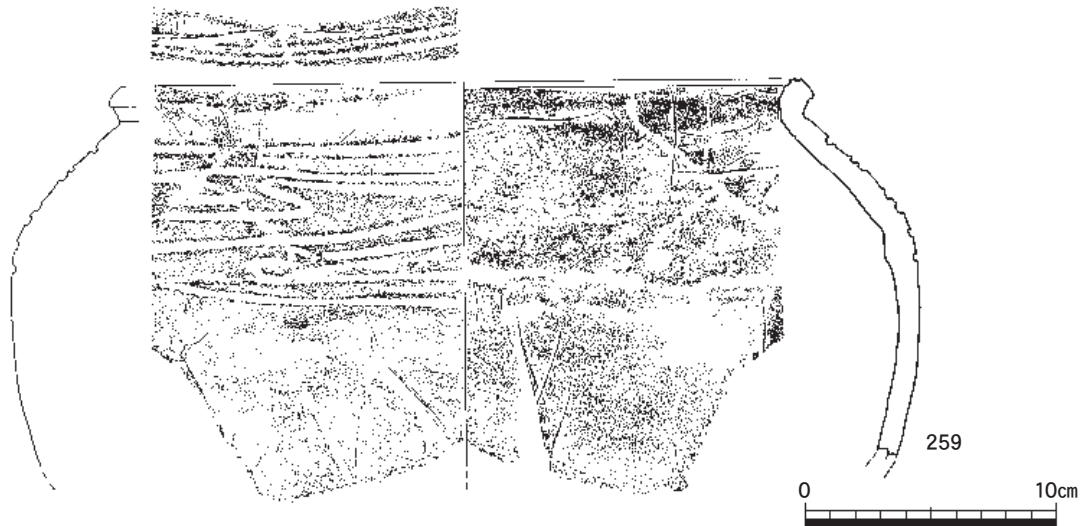
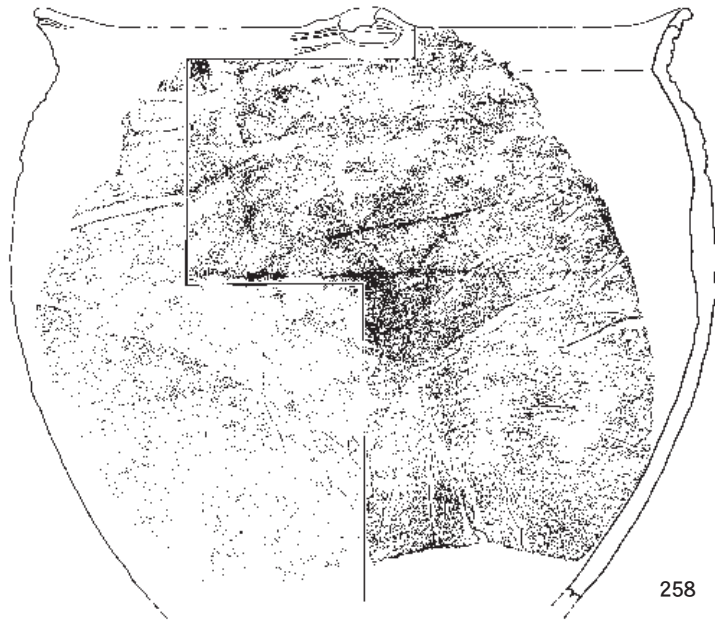


第78図 SH24出土遺物(14) (S=1/3)

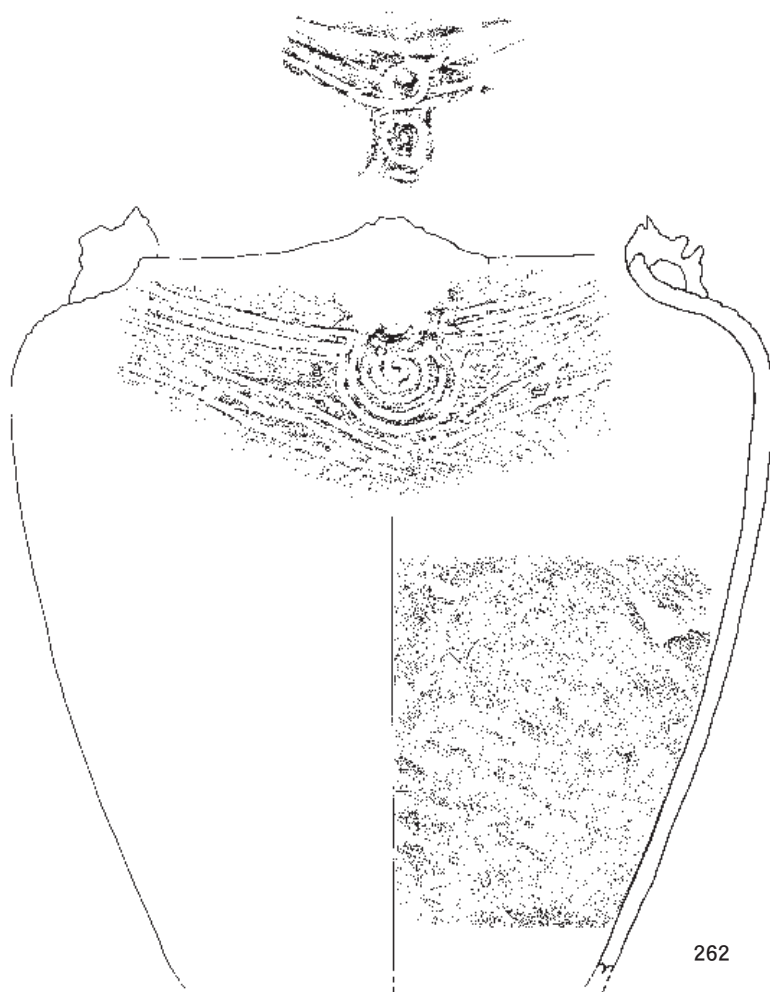
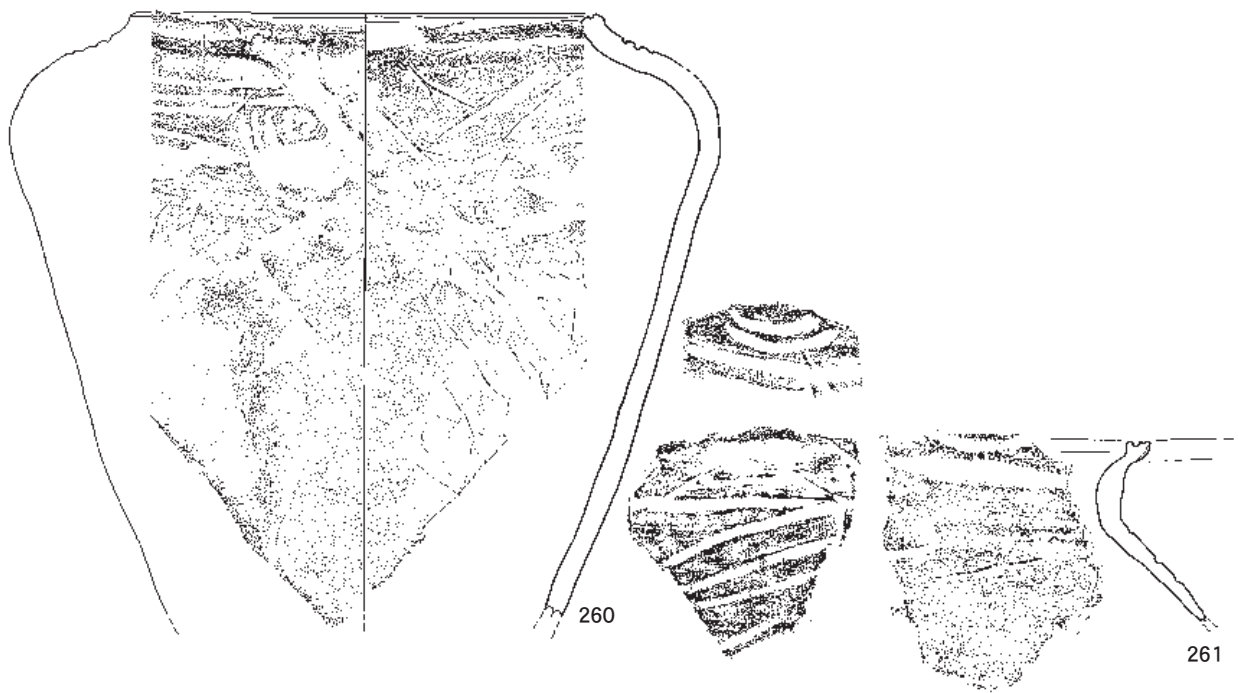


0 10cm

第79図 SH24出土遺物(15) (S=1/3)



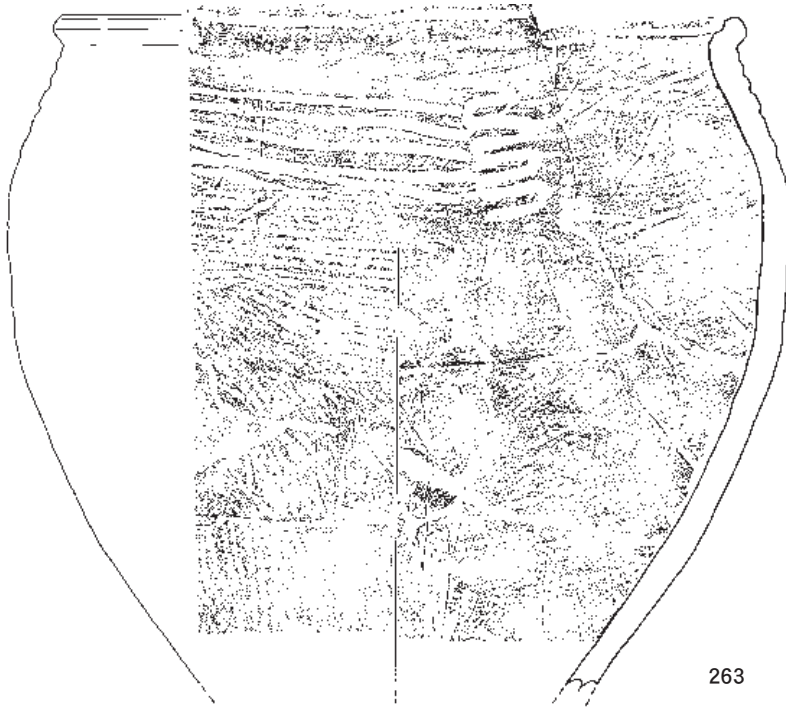
第80図 SH24出土遺物(16) (S=1/3)



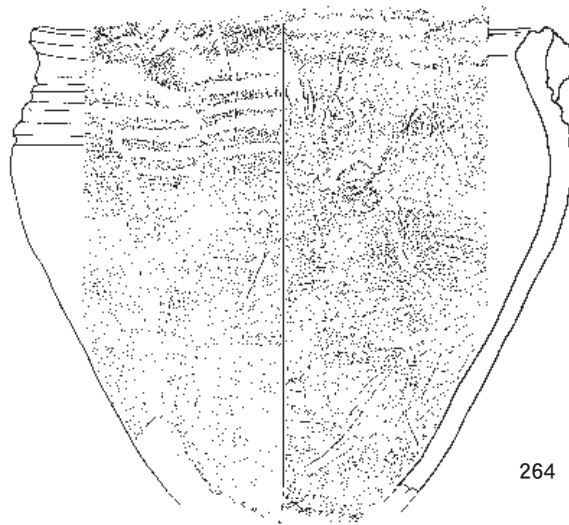
262



第81図 SH24出土遺物 (17) (S=1/3)



263



264

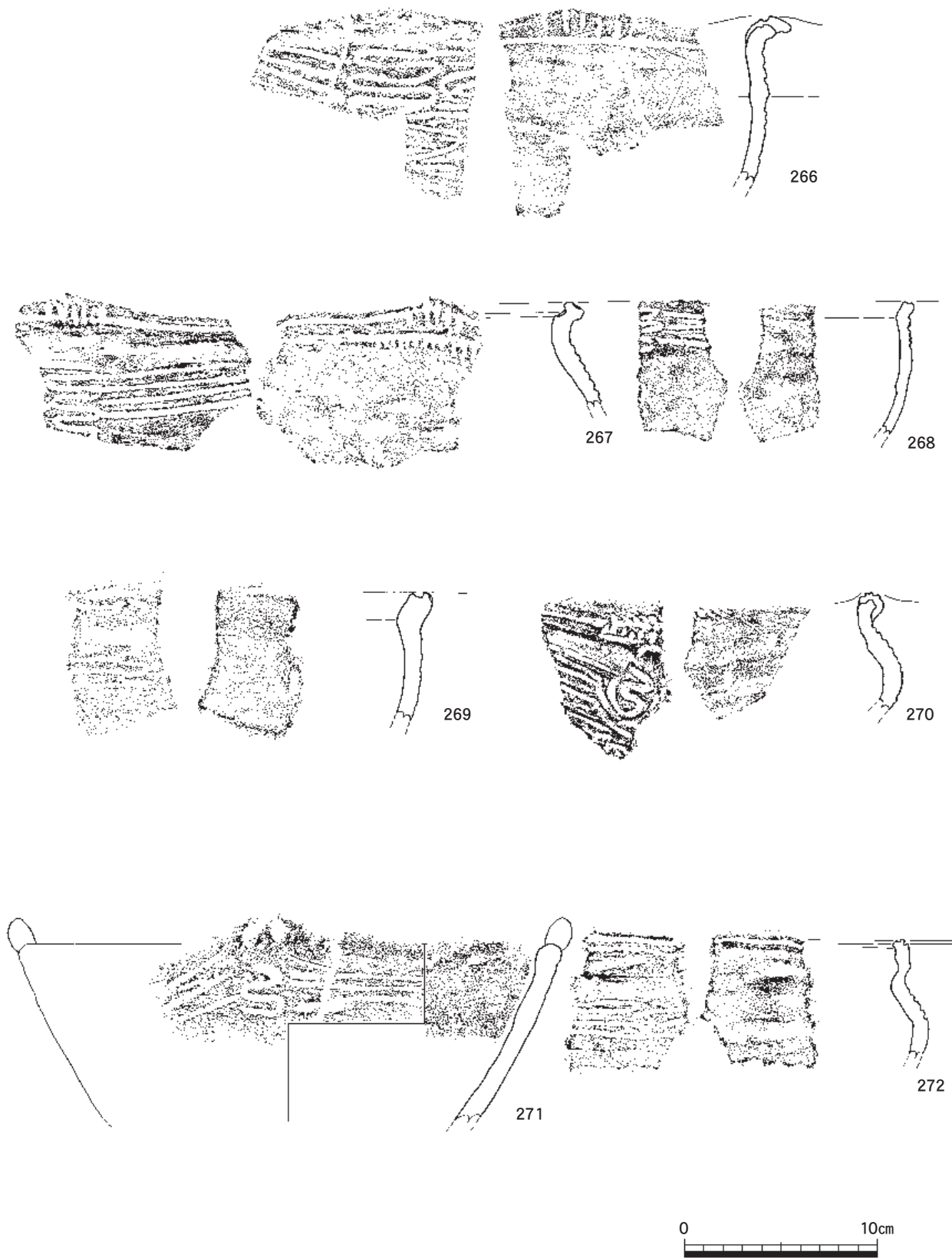


265

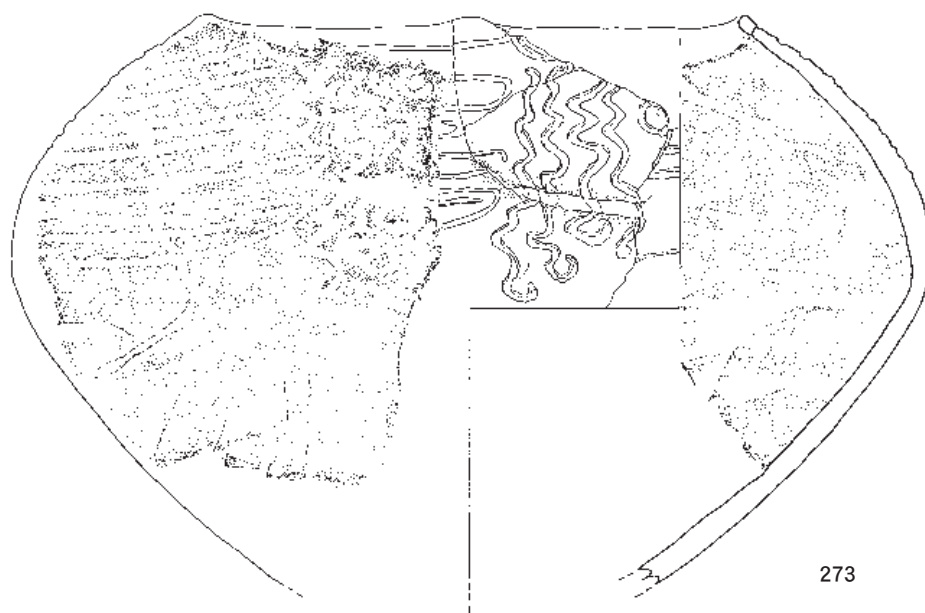
0 10cm

第82図 SH24出土遺物(18) (S=1/3)

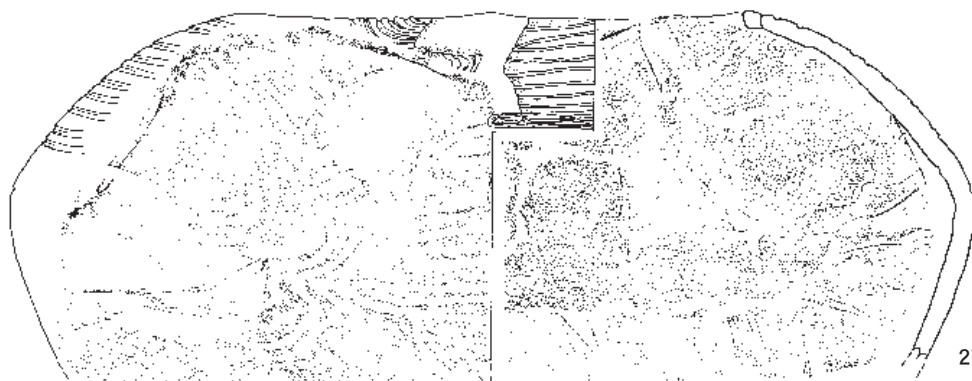




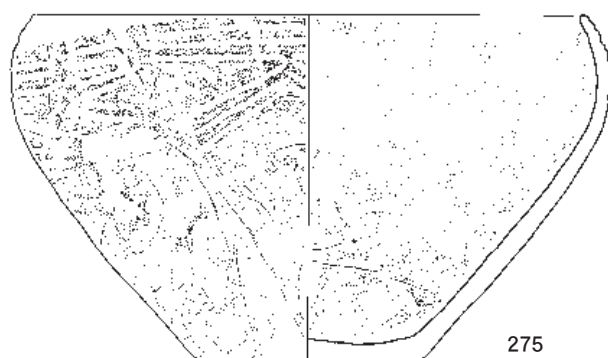
第83図 SH24出土遺物(19) (S=1/3)



273



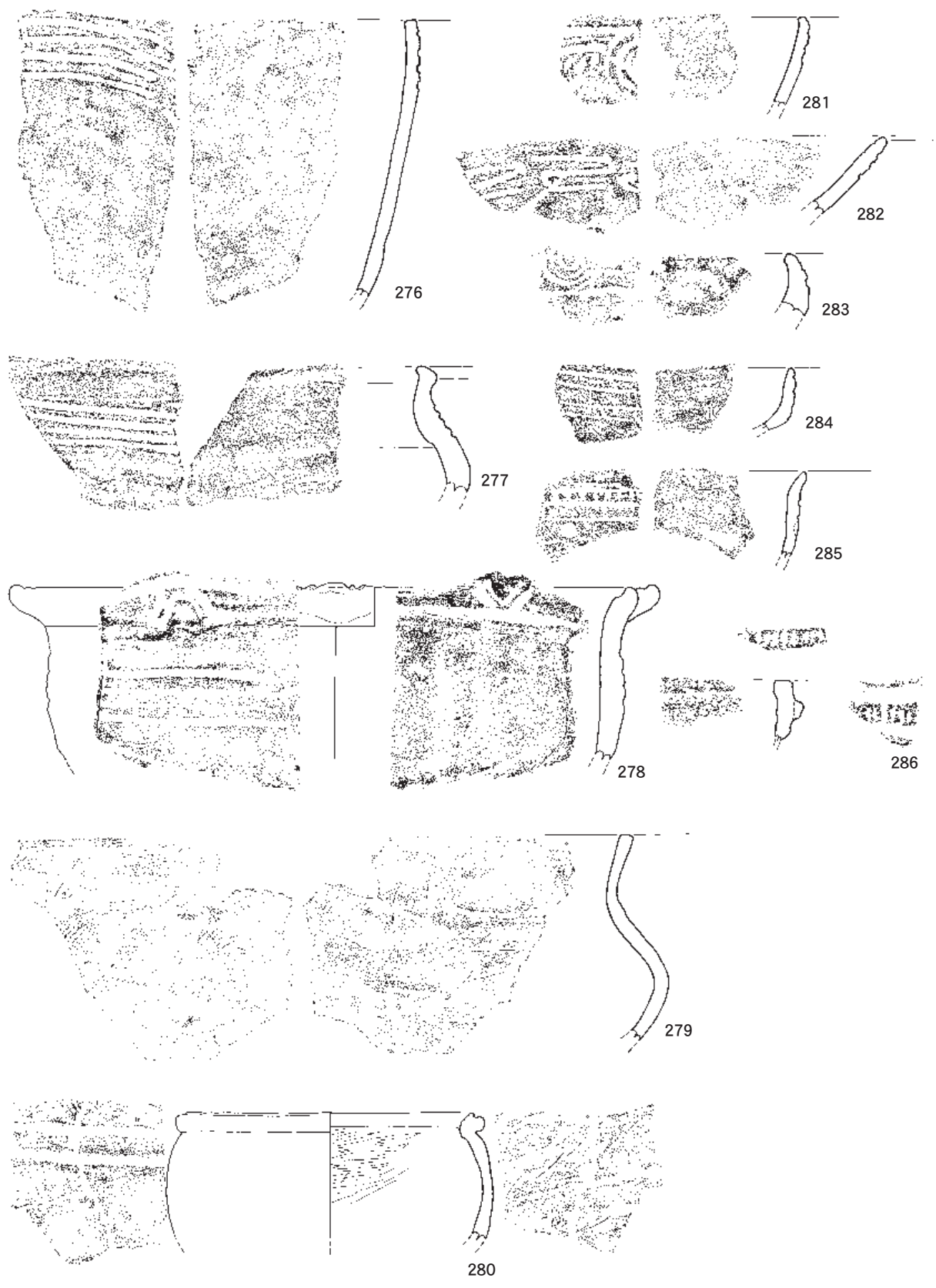
274



275



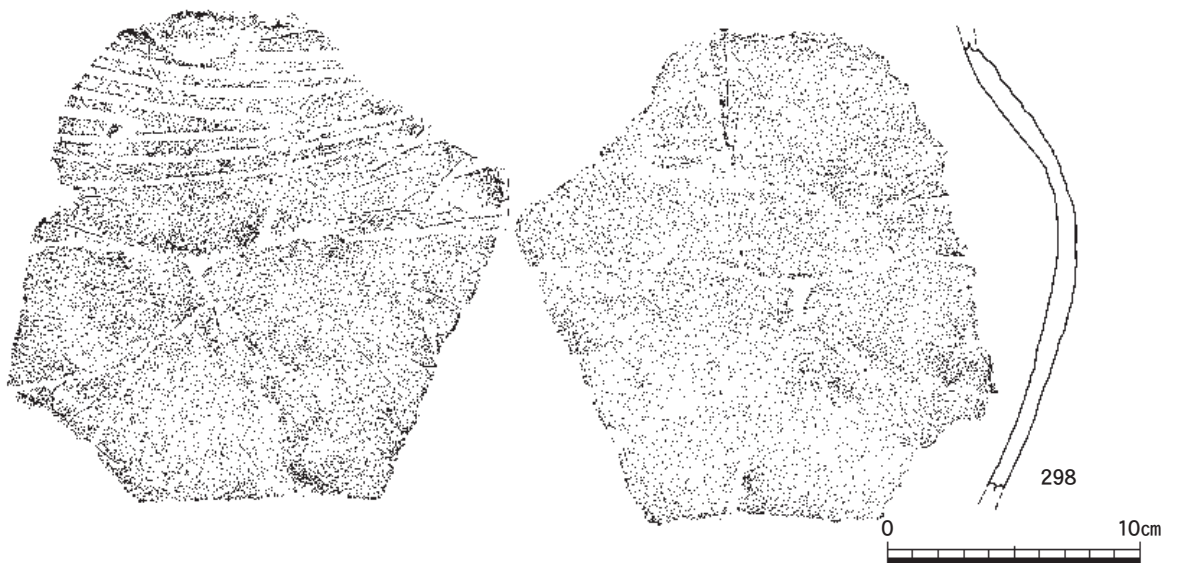
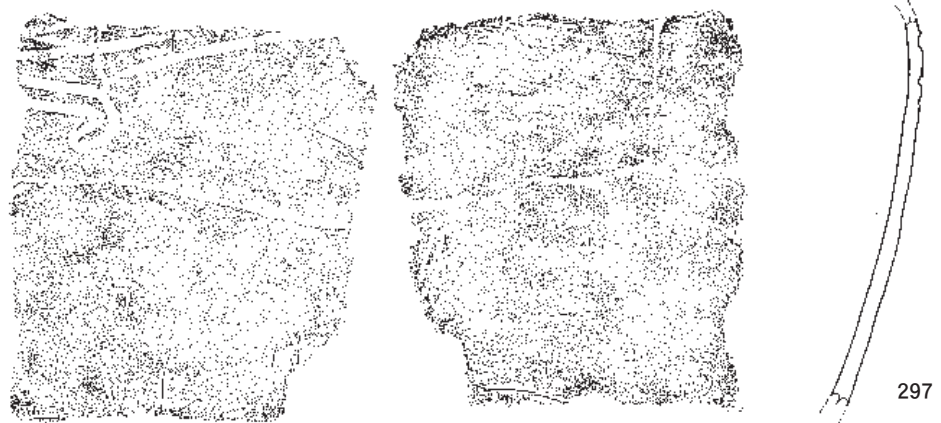
第84図 SH24出土遺物(20) (S=1/3)



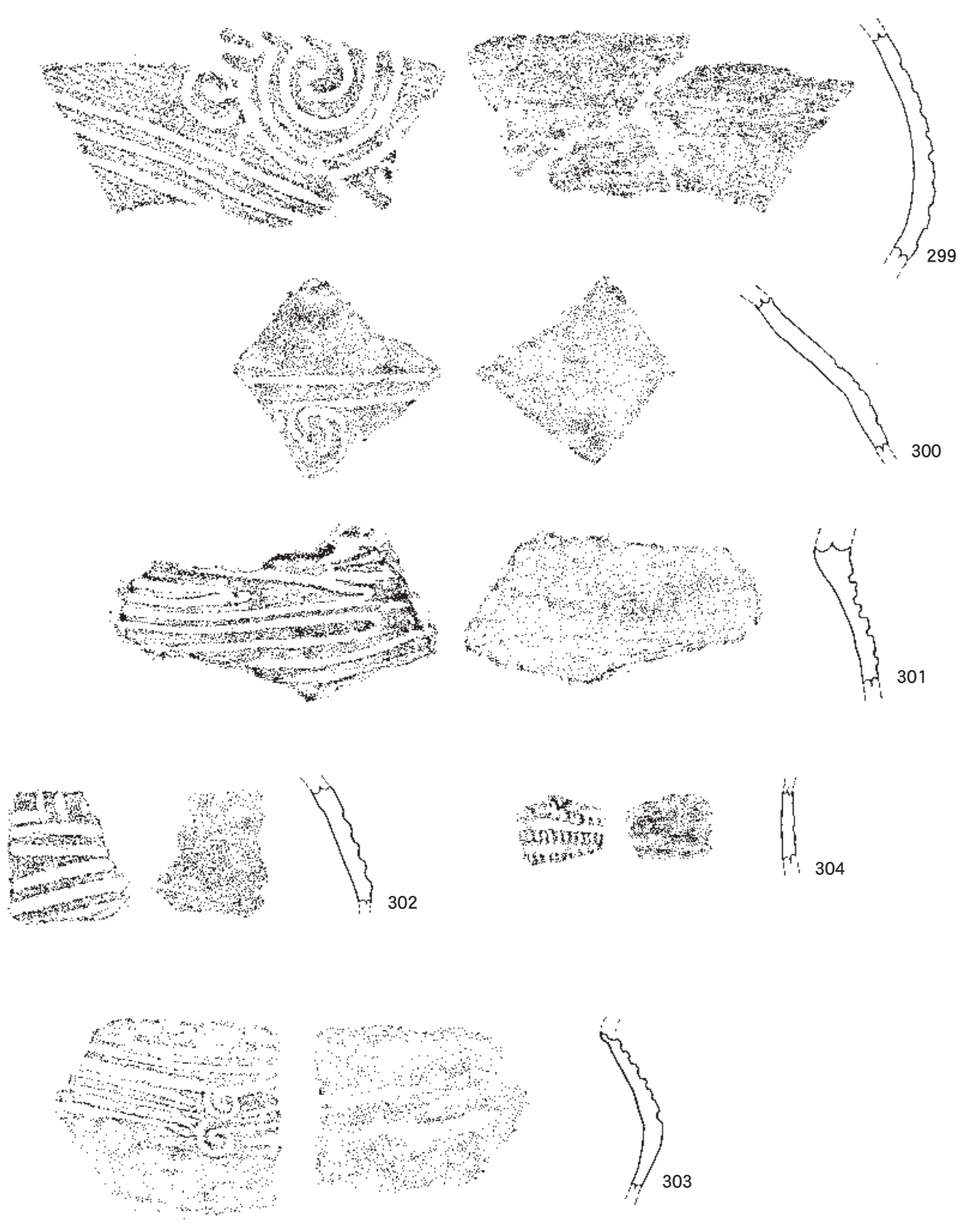
第85図 SH24出土遺物 (21) (S=1/3)



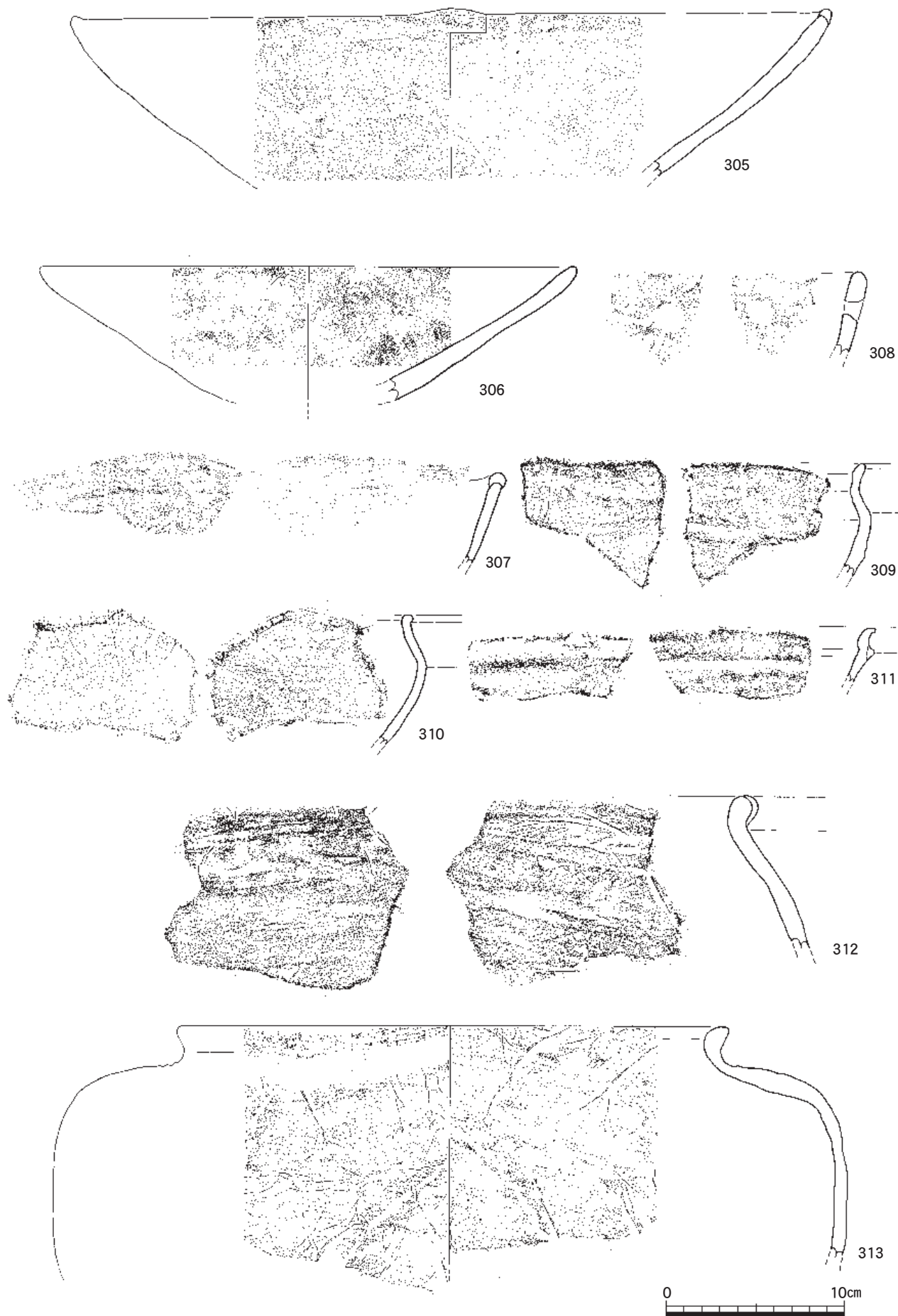
第86図 SH24出土遺物(22) (S=1/3)



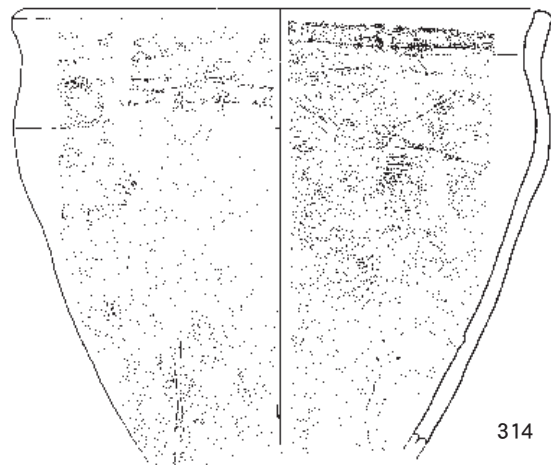
第87図 SH24出土遺物 (23) (S=1/3)



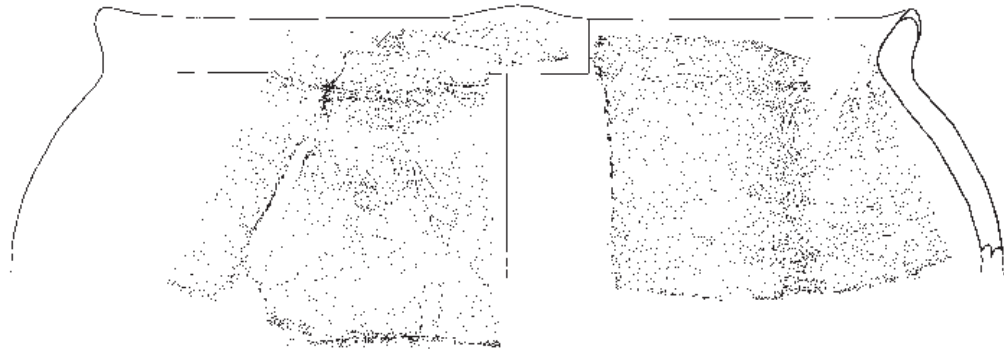
第88図 SH24出土遺物(24) (S=1/3)



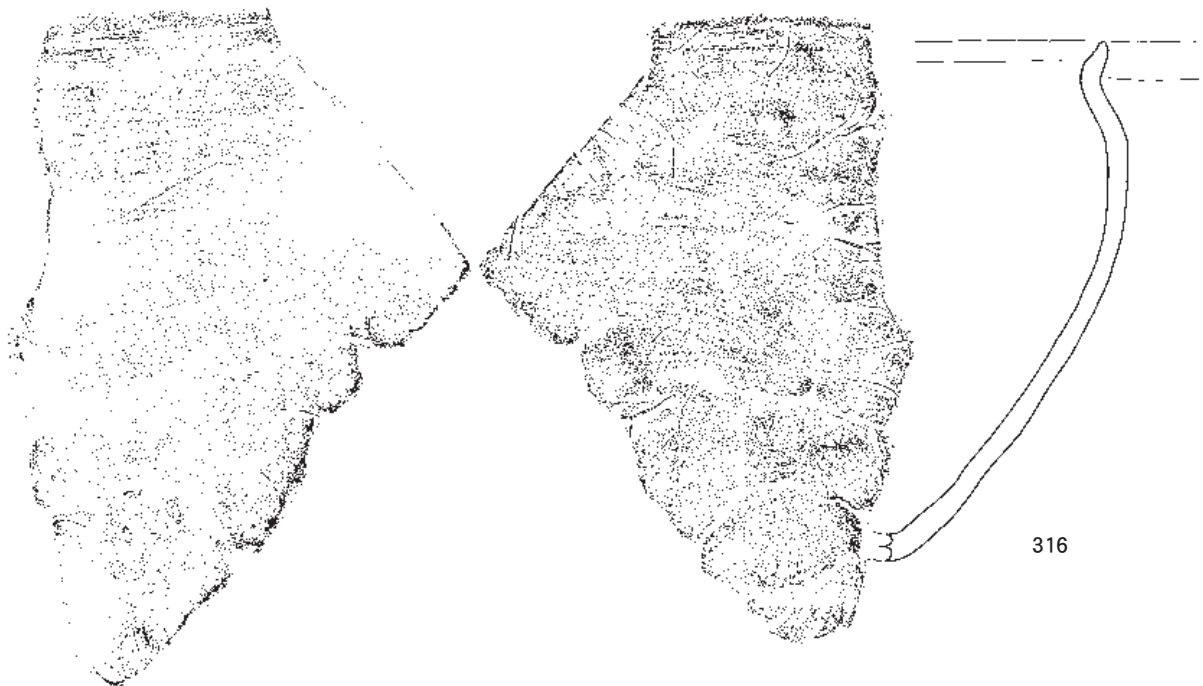
第89図 SH24出土遺物 (25) (S=1/3)



314



315

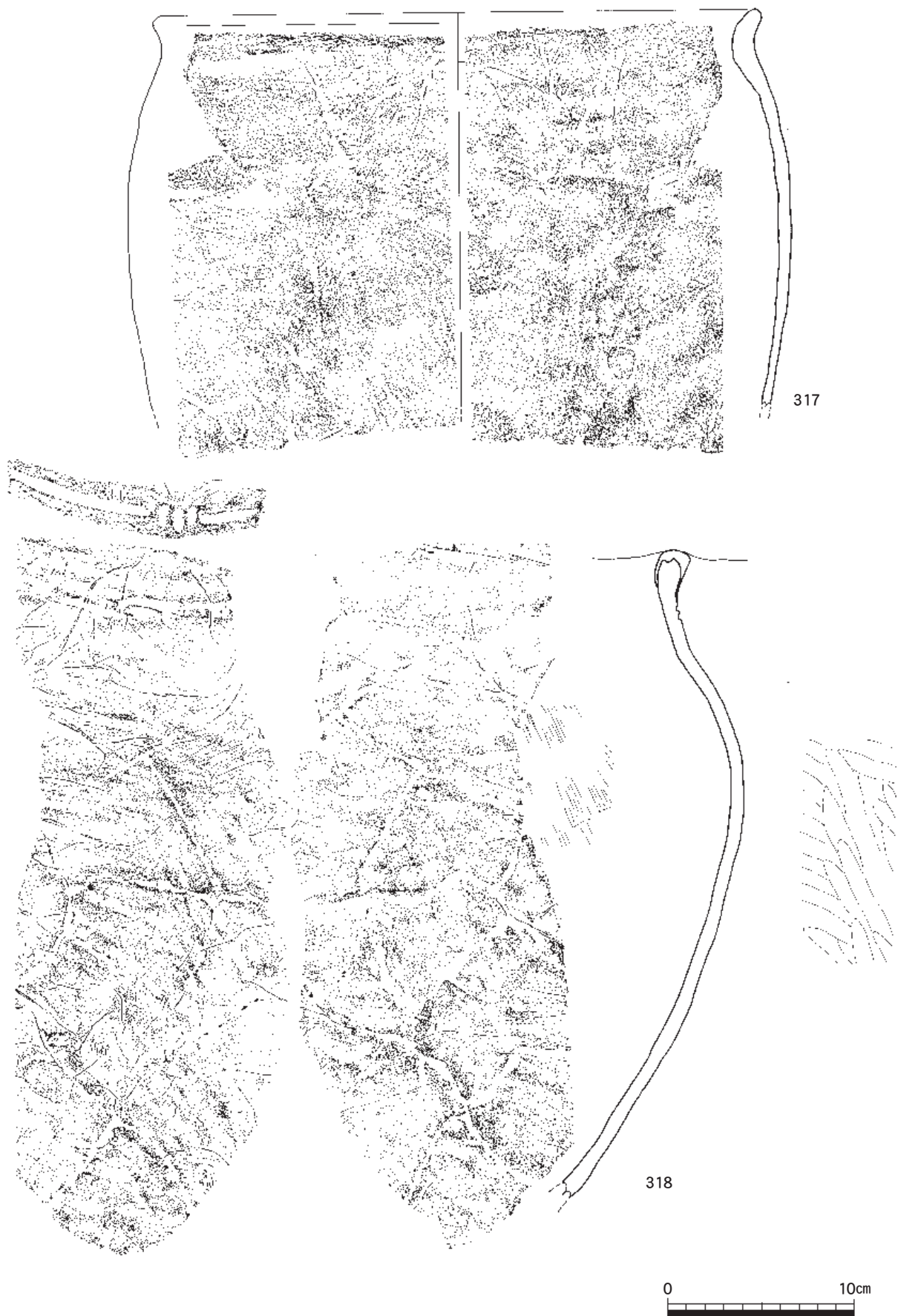


316



第90図 SH24出土遺物(26) (S=1/3)

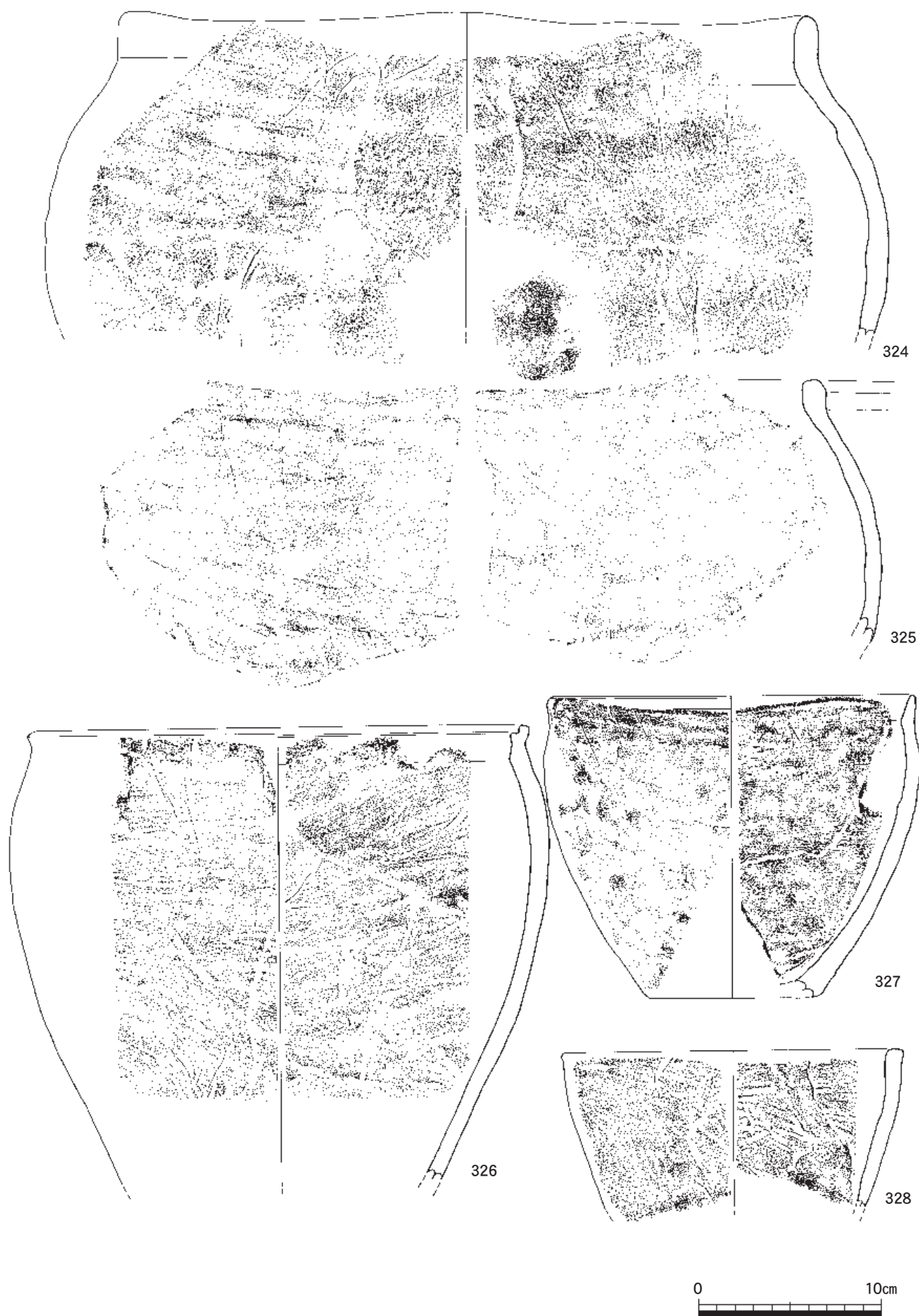




第91図 SH24出土遺物(27) (S=1/3)



第92図 SH24出土遺物(28) (S=1/3)



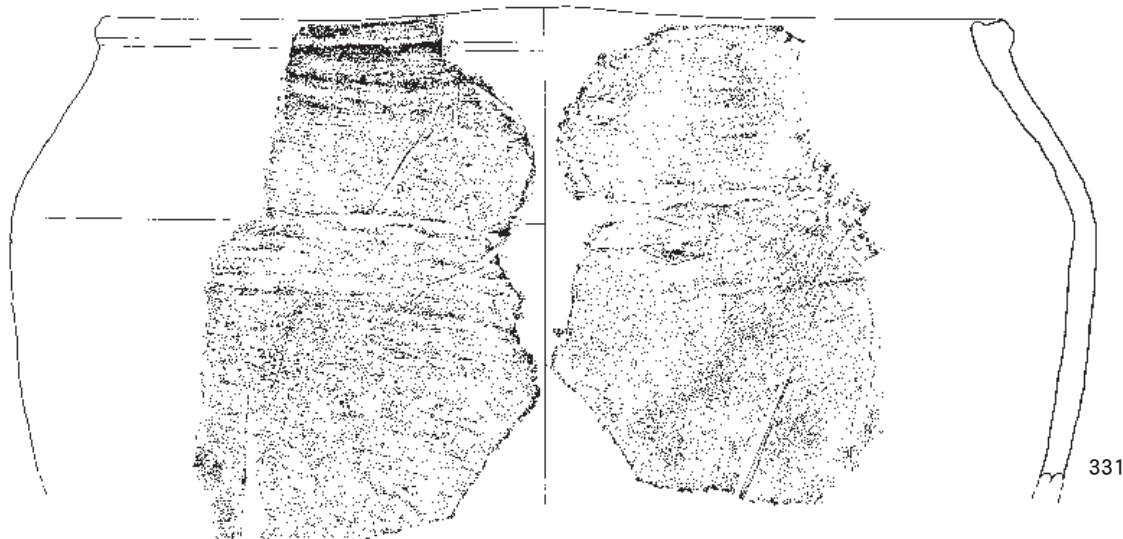
第93図 SH24出土遺物(29) (S=1/3)



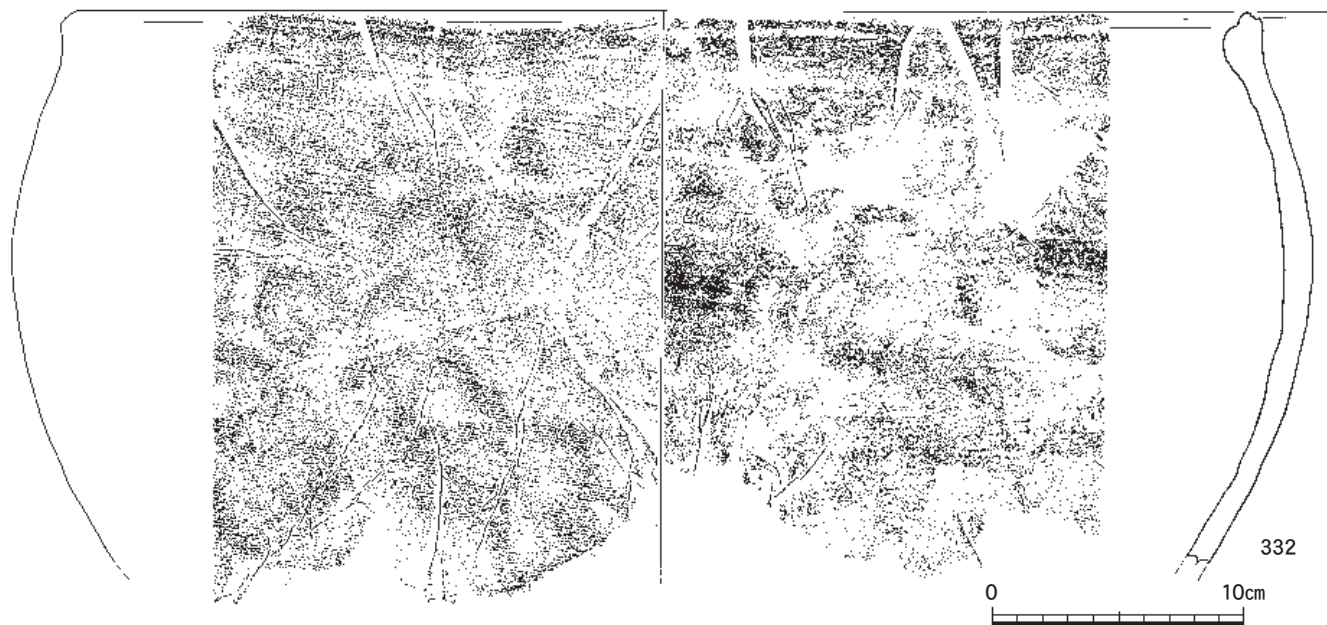
329



330



331



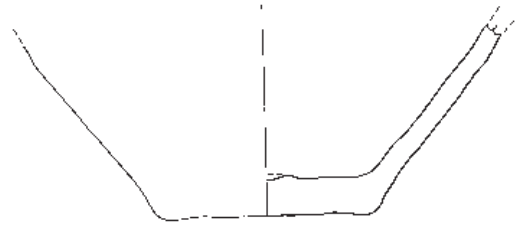
332

0 10cm

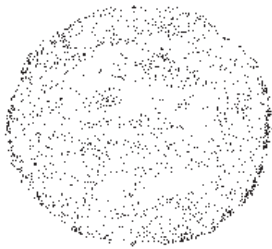
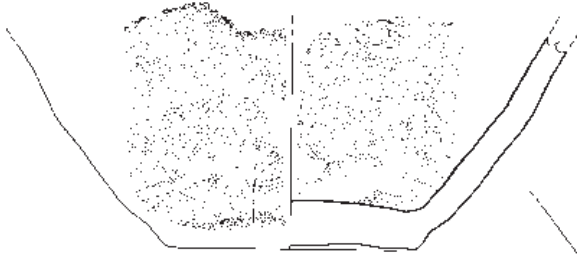
第94図 SH24出土遺物 (30) (S=1/3)



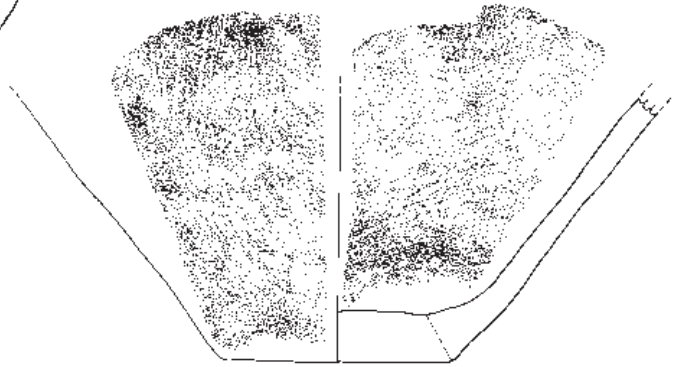
333



334



335



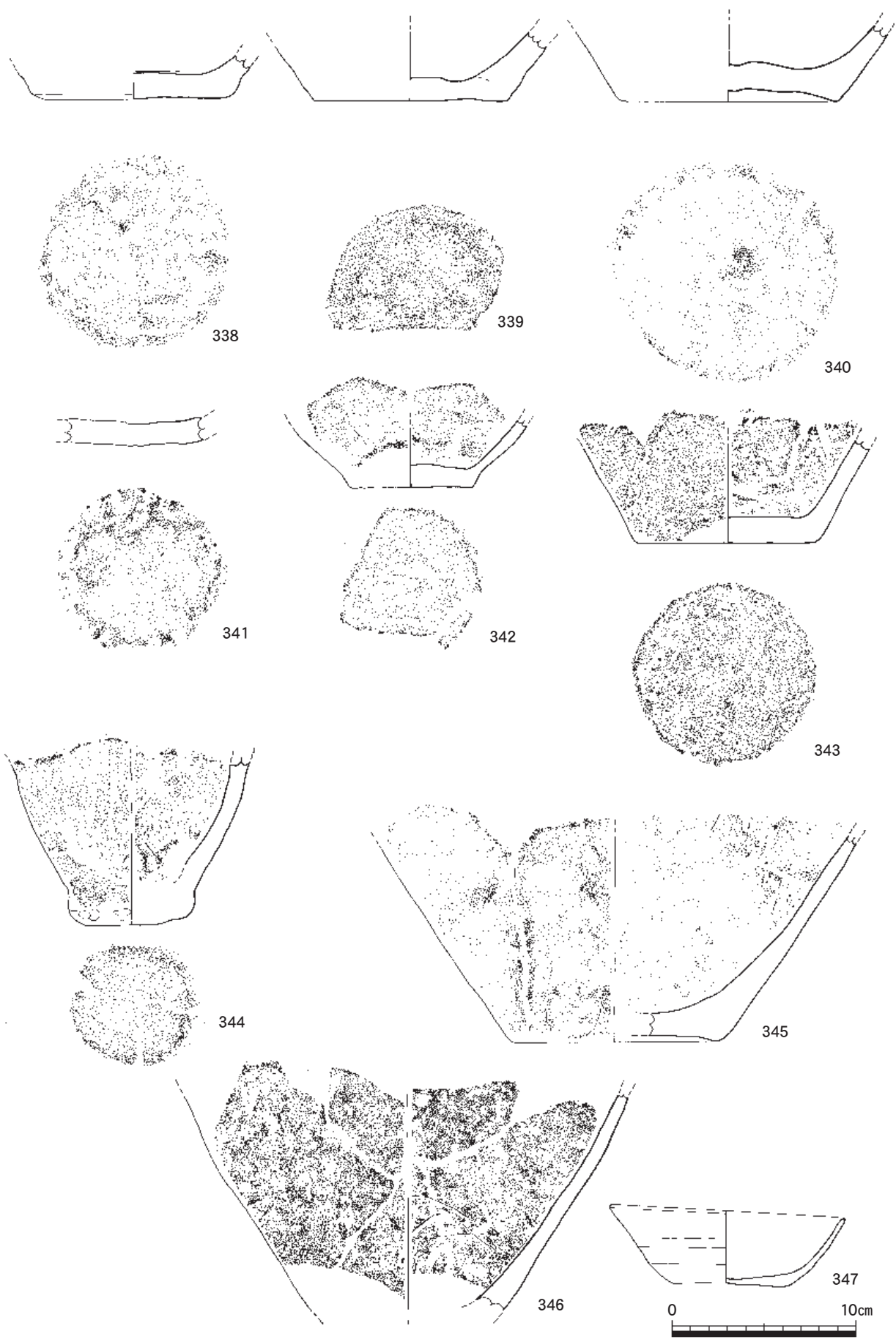
336



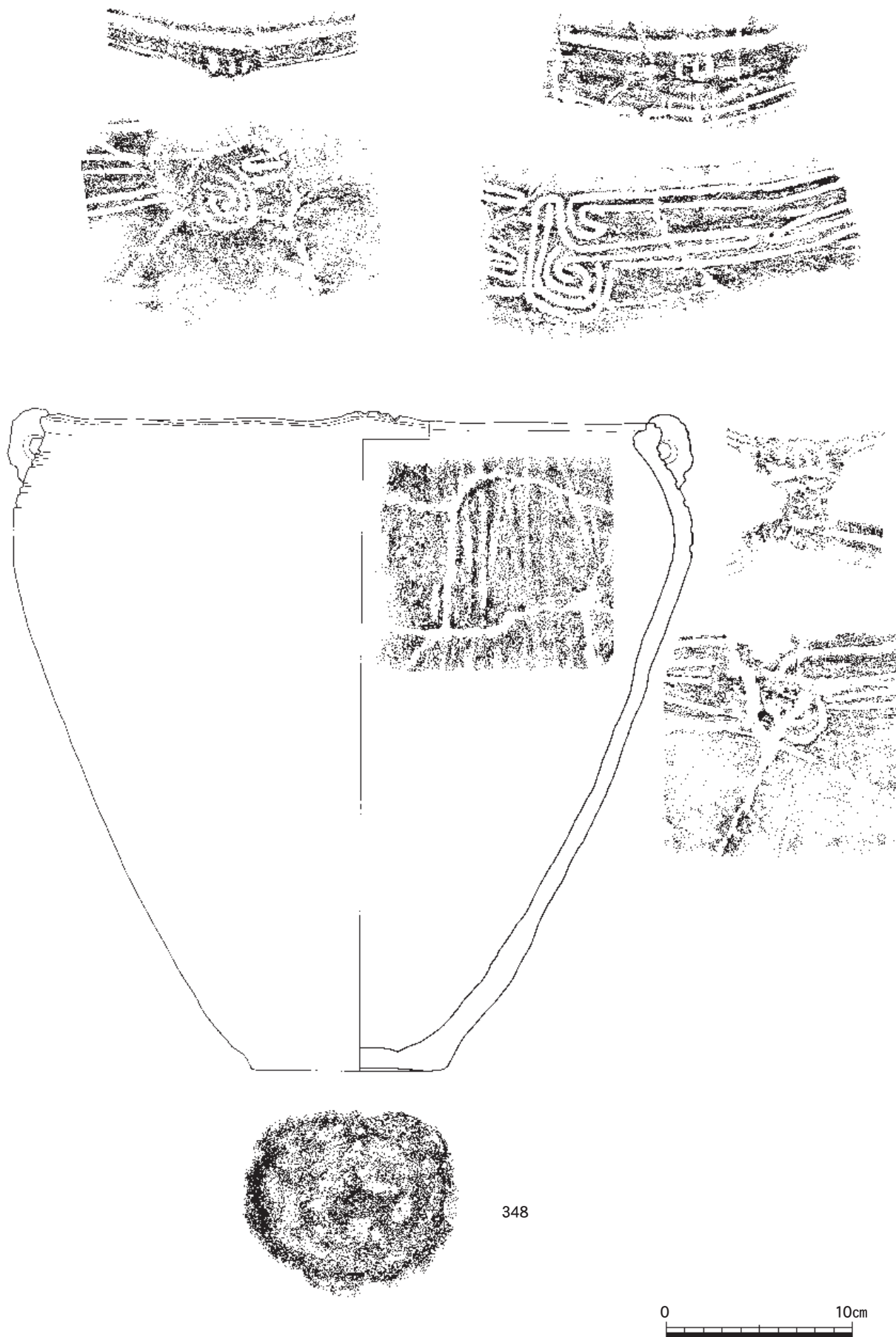
337



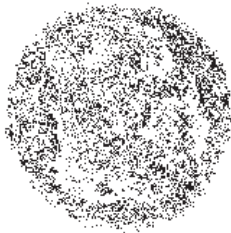
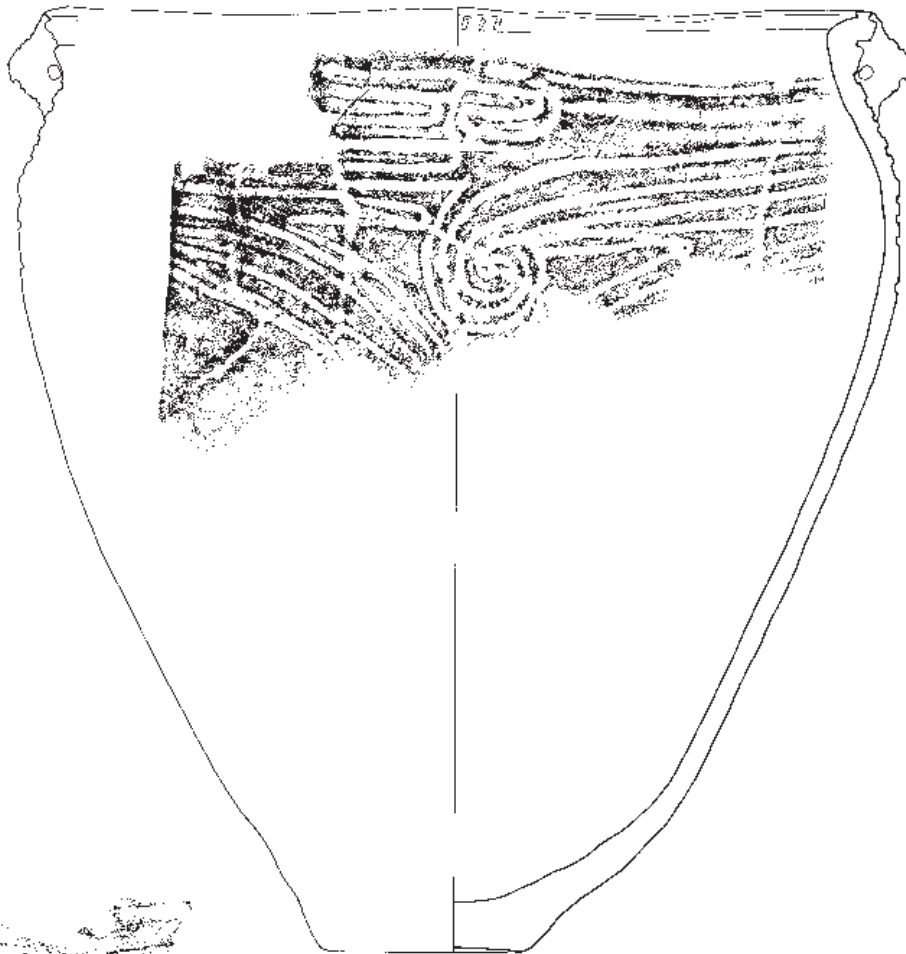
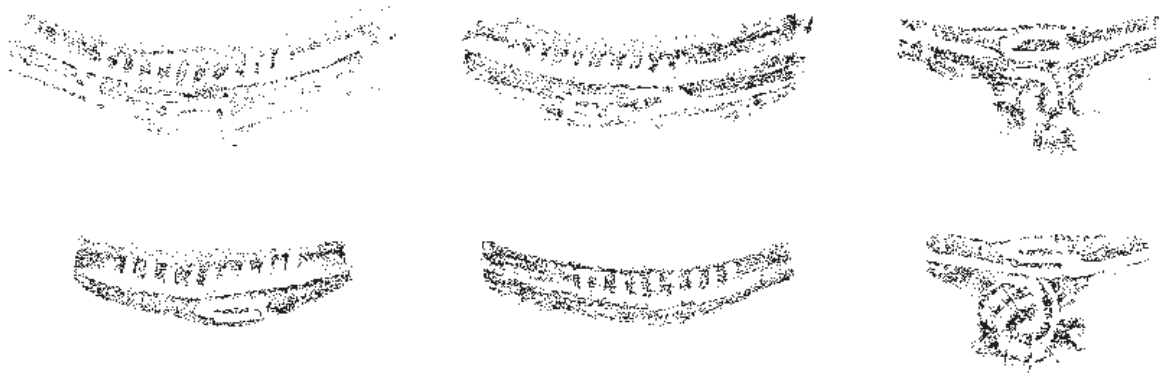
第95図 SH24出土遺物(31) (S=1/3)



第96図 SH24出土遺物 (32) (S=1/3)



第97図 SH24出土遺物 (33) (S=1/3)

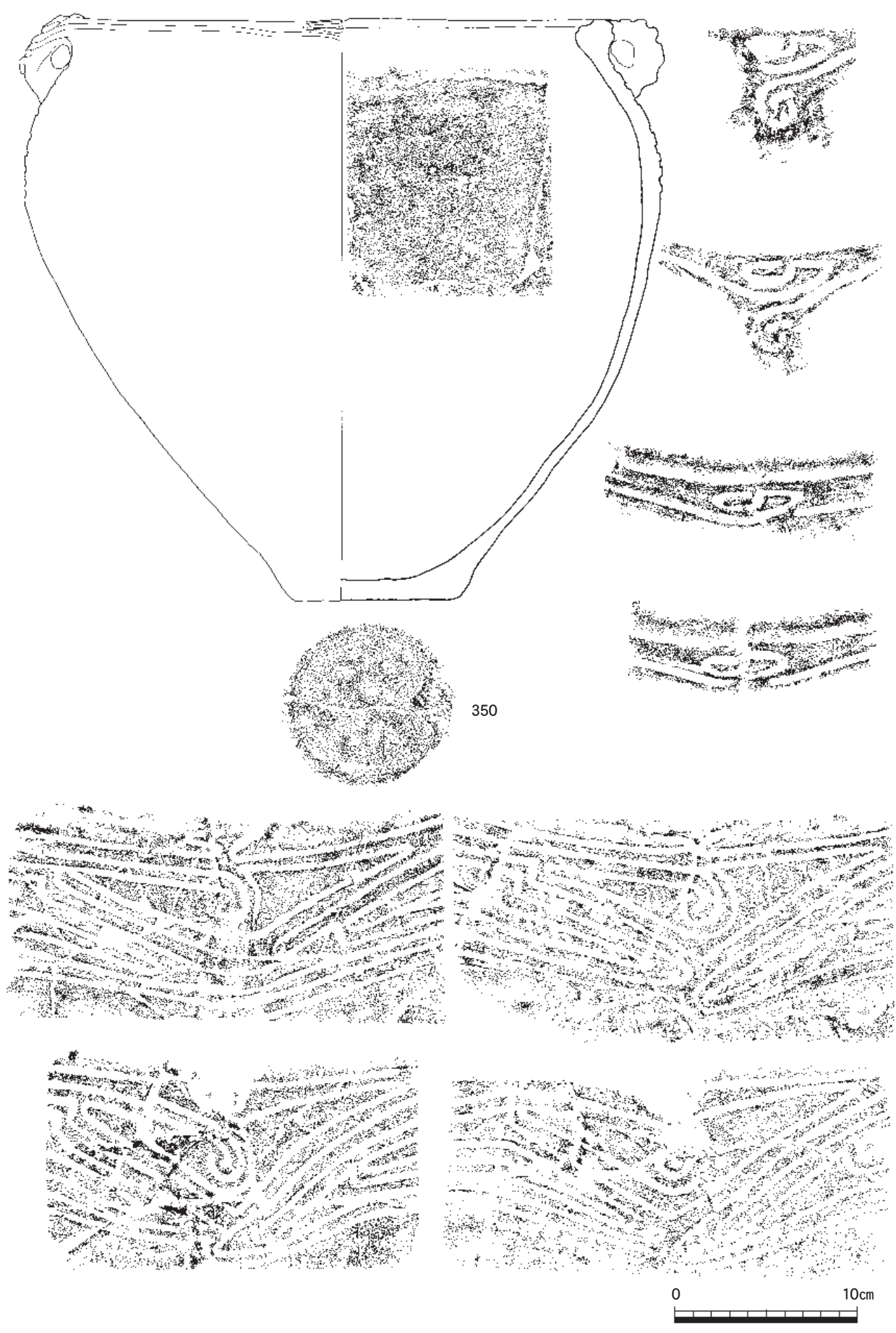


349

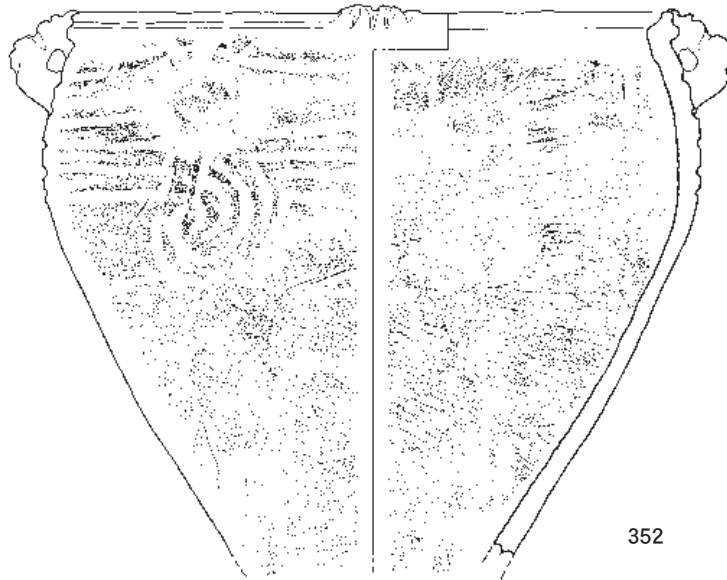
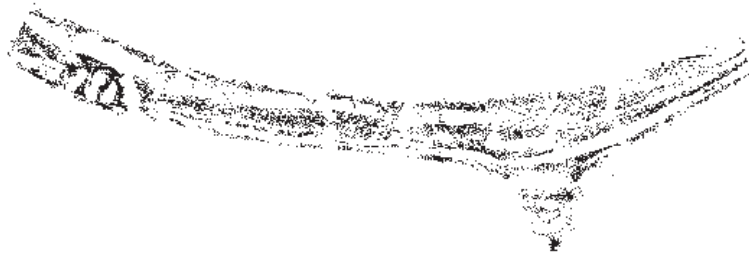
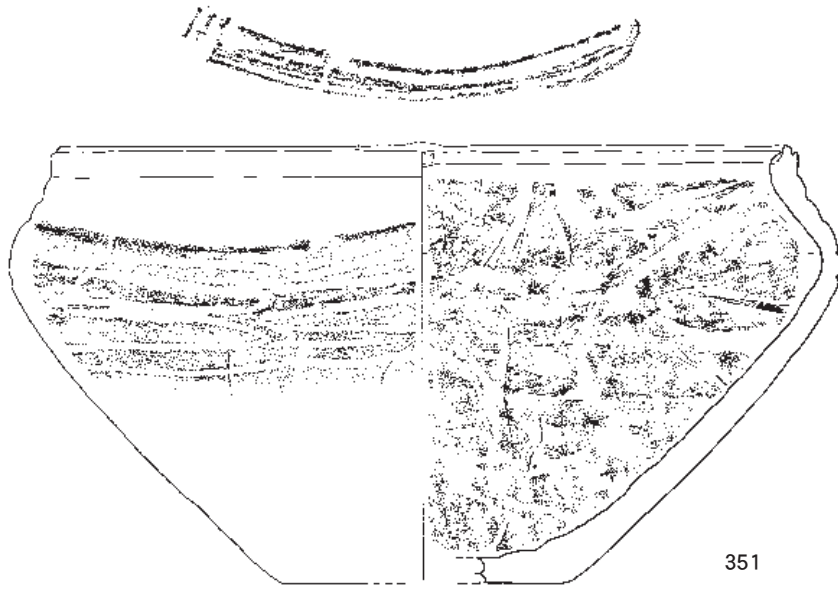


第98図 SH24出土遺物 (34) (S=1/3)

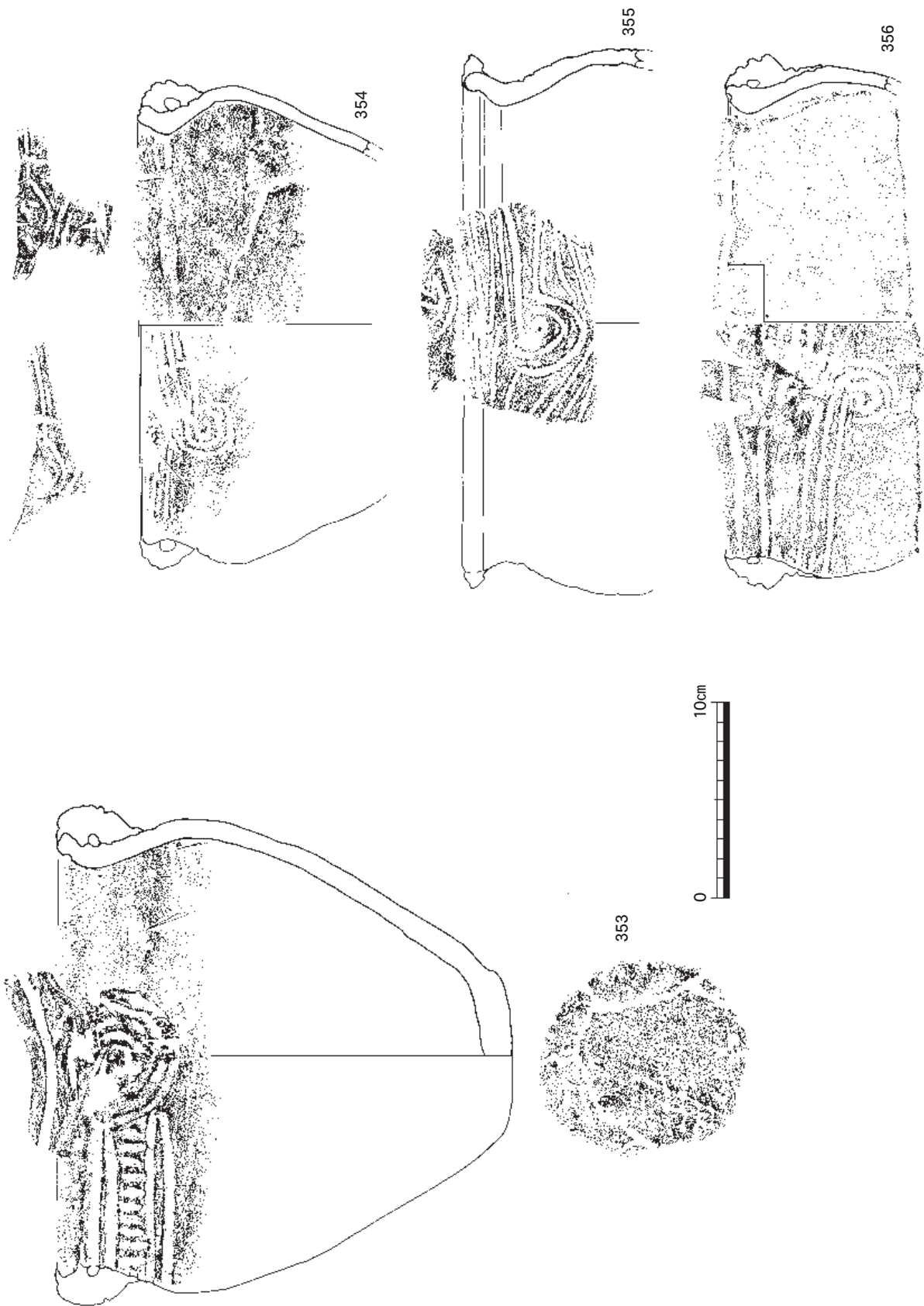




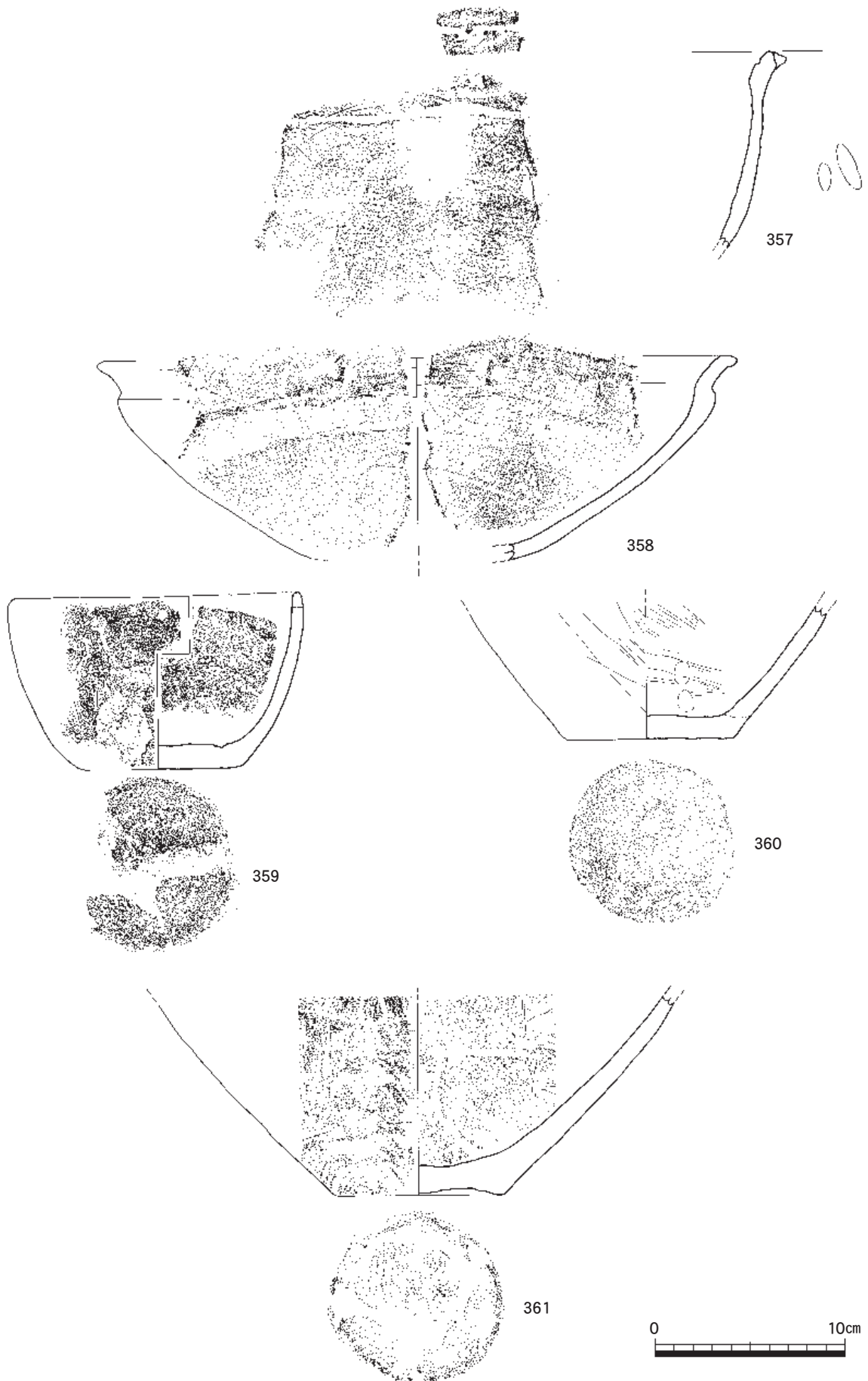
第99図 SH24出土遺物 (35) (S=1/3)



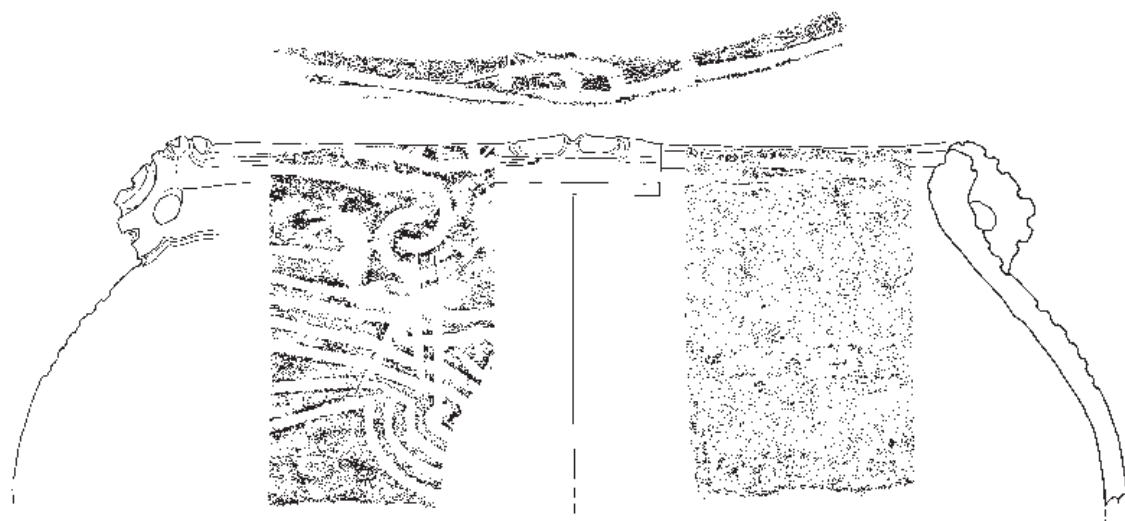
第100図 SH24出土遺物(36) (S=1/3)



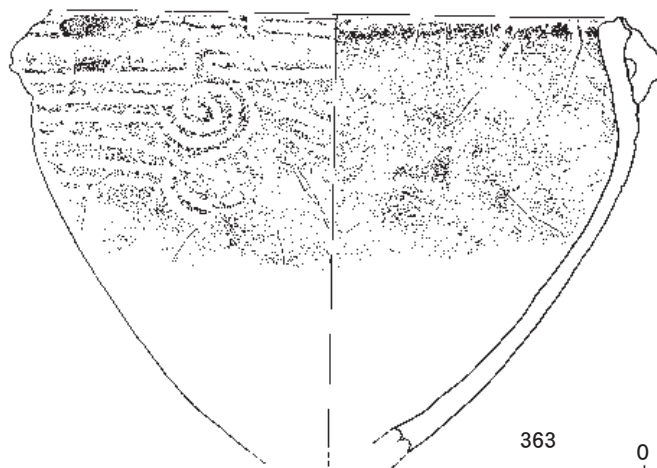
第101図 SH24出土遺物(37) (S=1/3)



第102図 SH24出土遺物(38) (S=1/3)



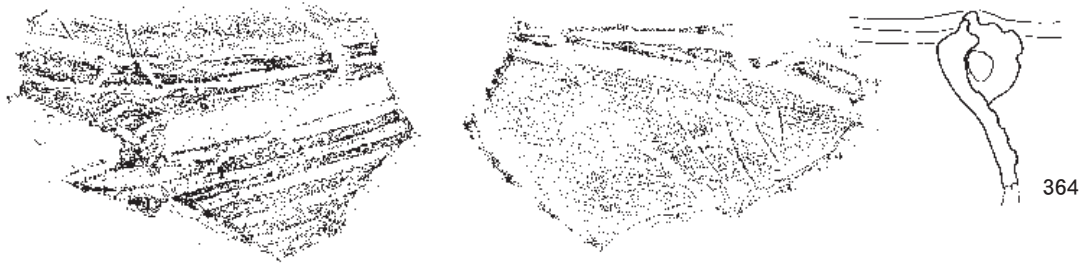
362



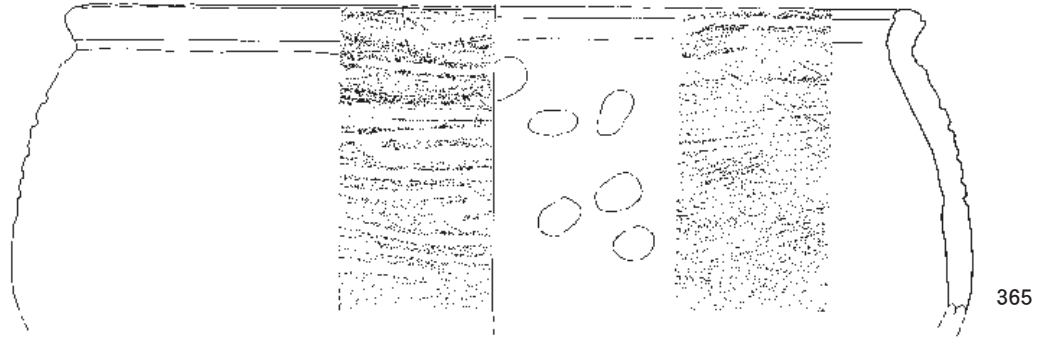
363



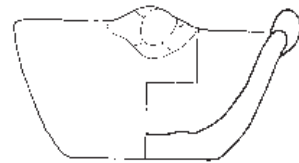
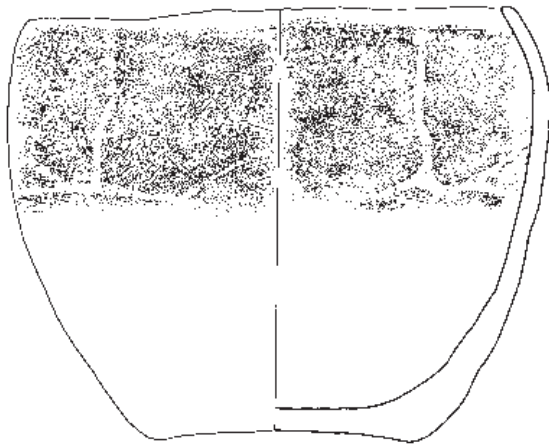
第103図 SH24出土遺物(39) (S=1/3)



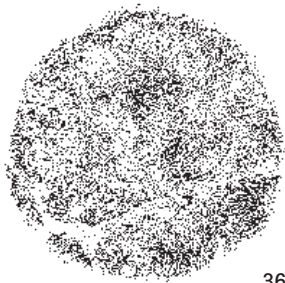
364



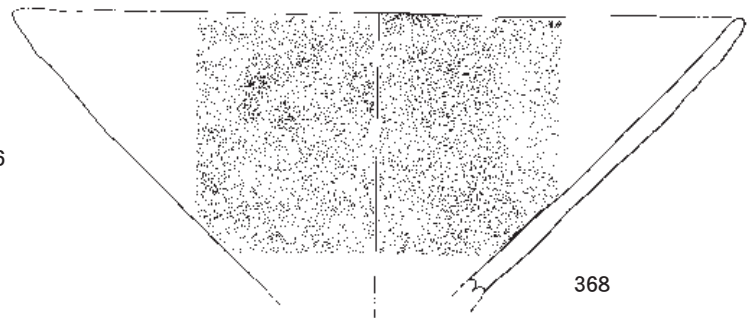
365



367



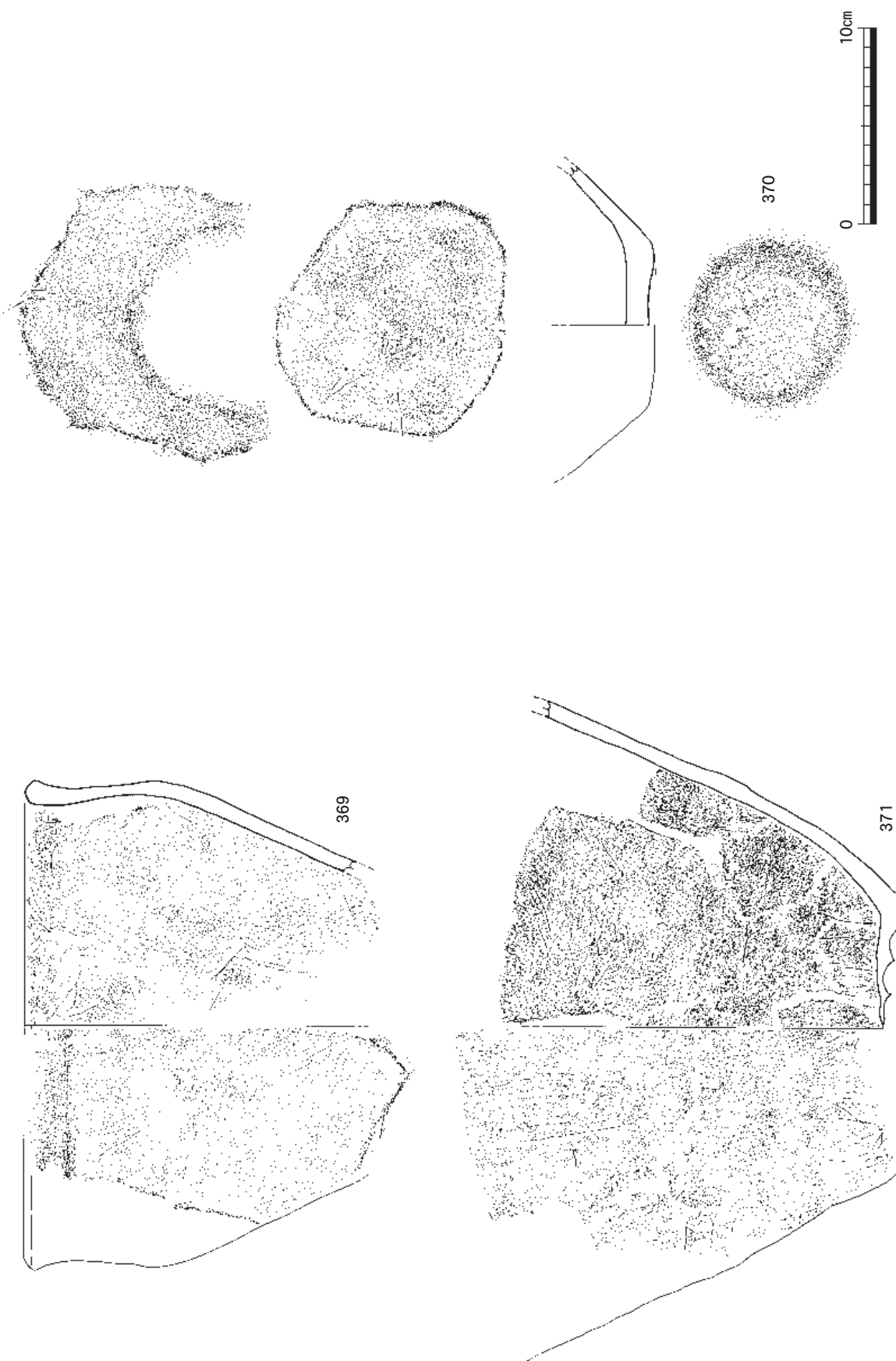
366



368



第104図 SH24出土遺物(40) (S=1/3)



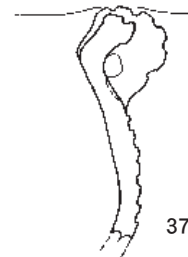
第105図 SH24出土遺物(41) (S=1/3)



372



373

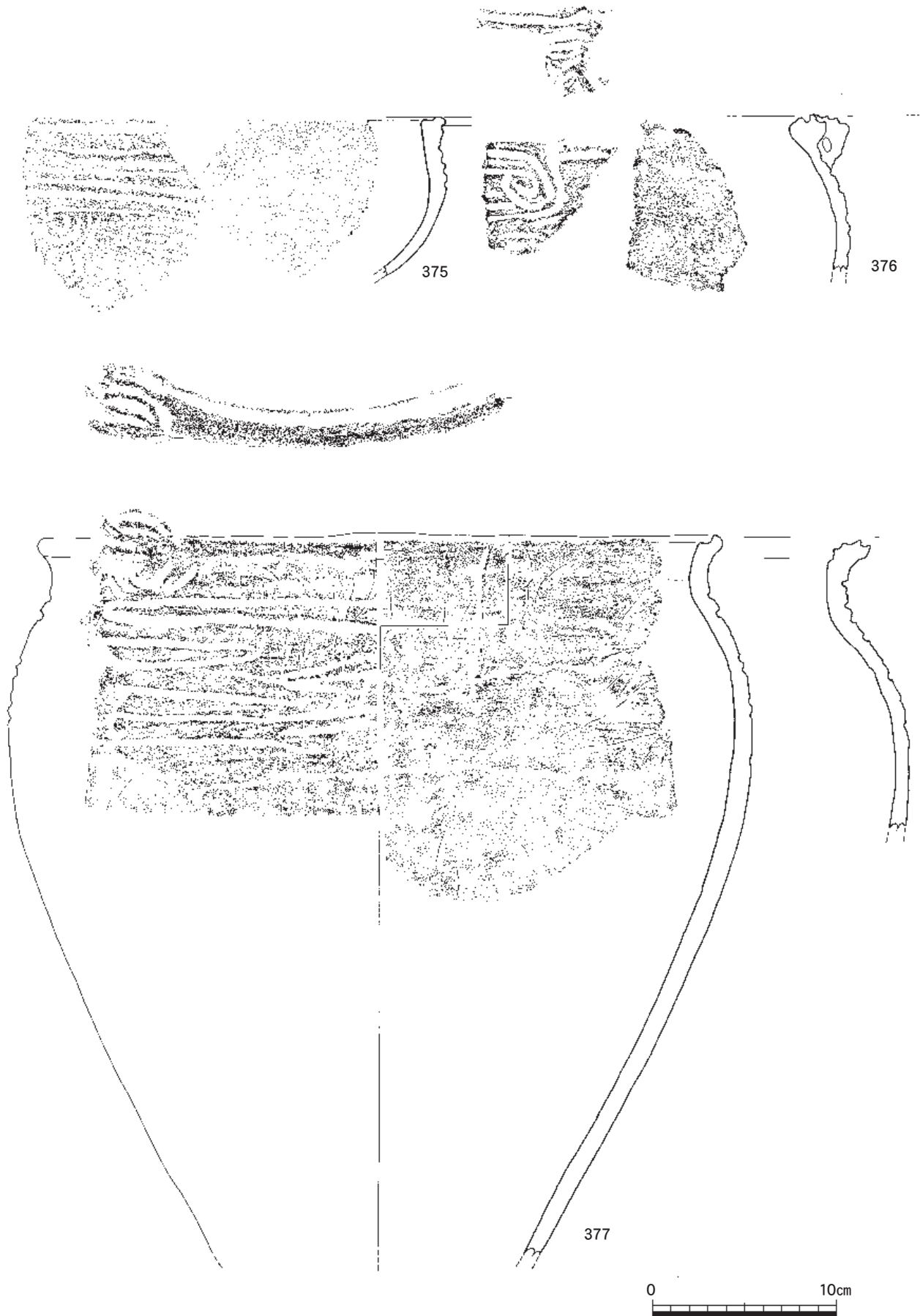


374

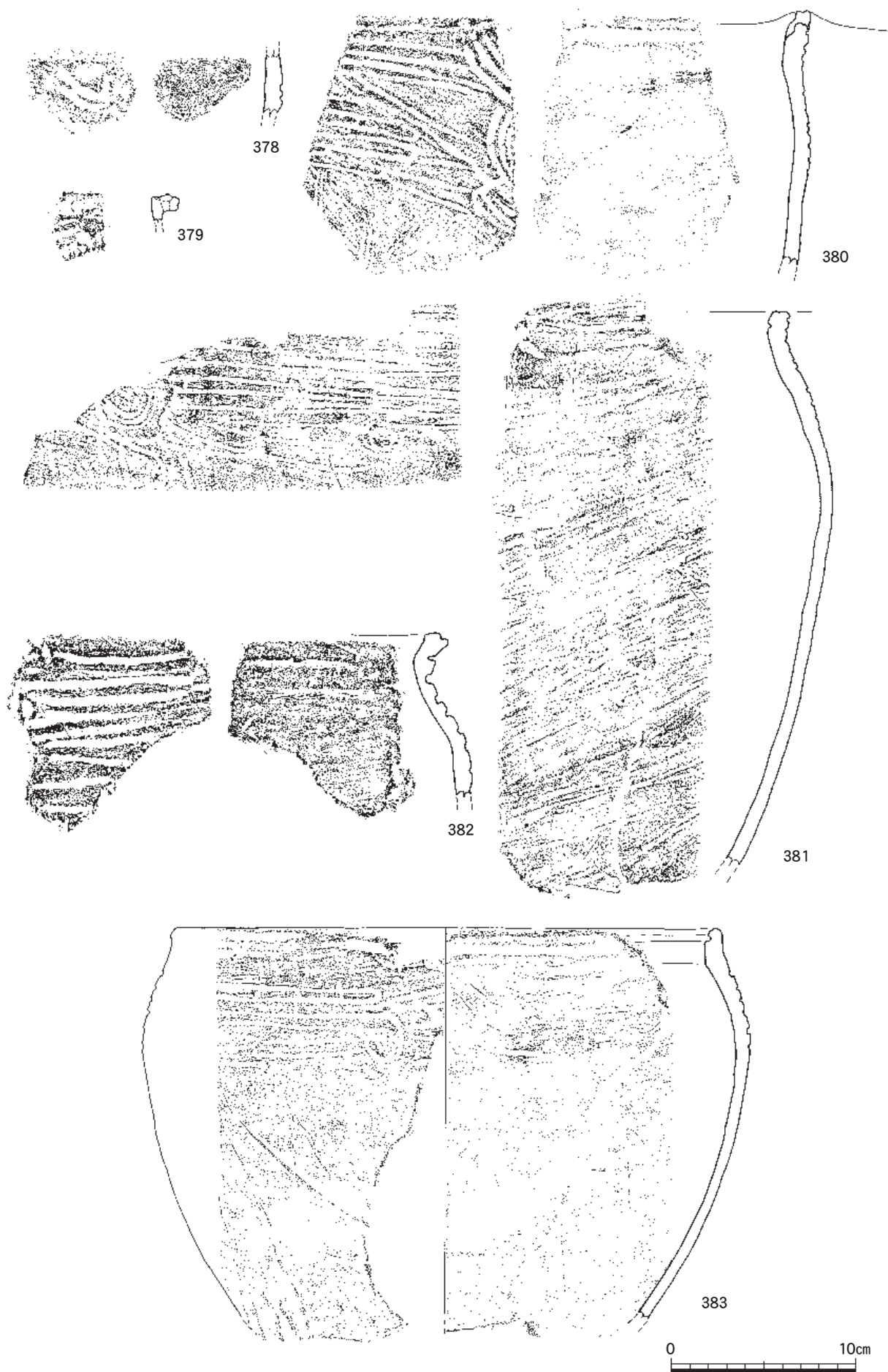


第106図 SH24出土遺物(42) (S=1/3)

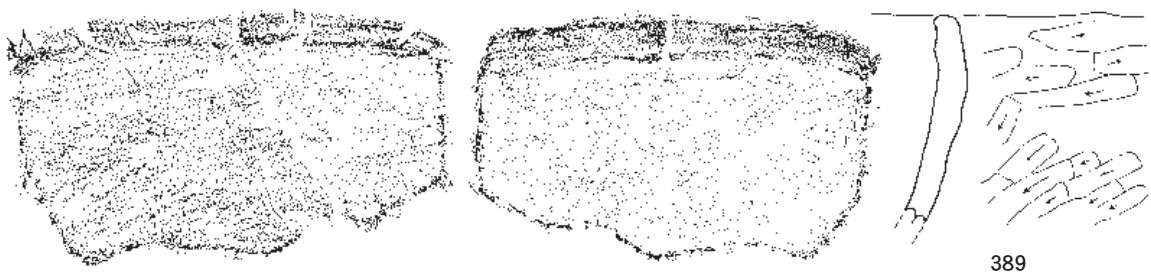
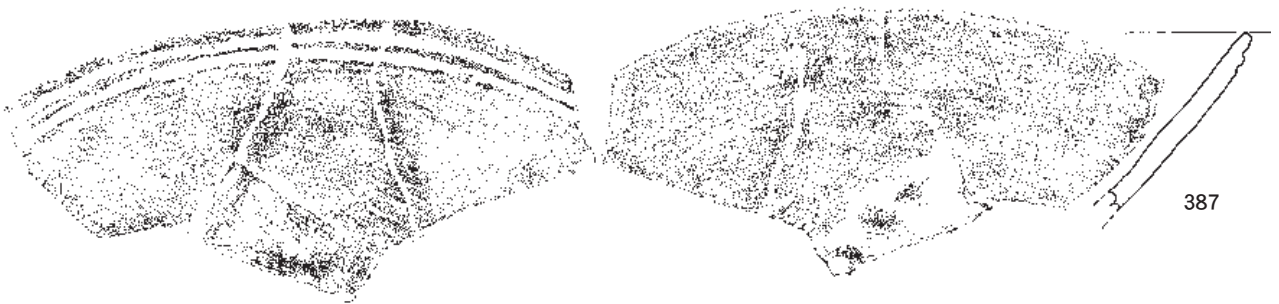
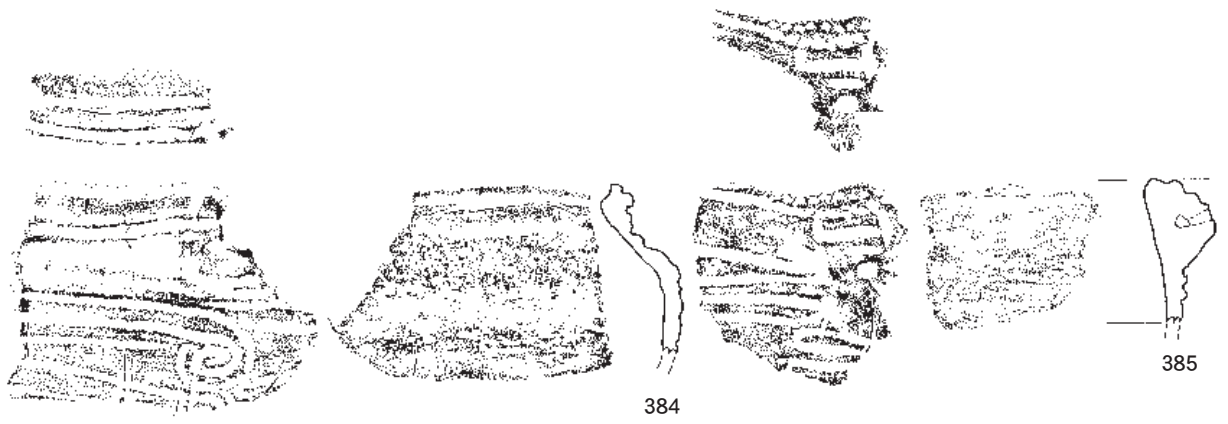




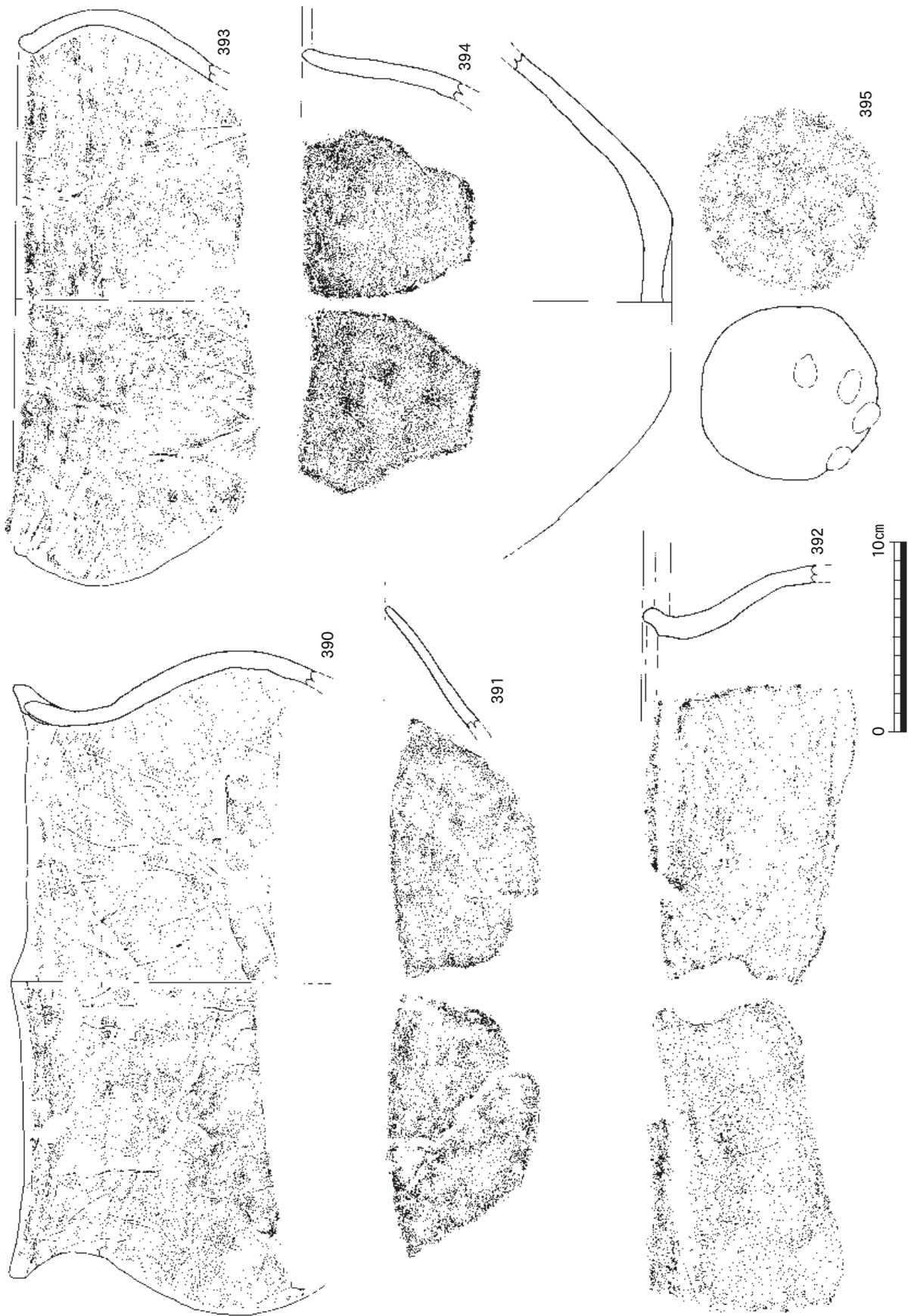
第107図 SH24出土遺物(43) (S=1/3)



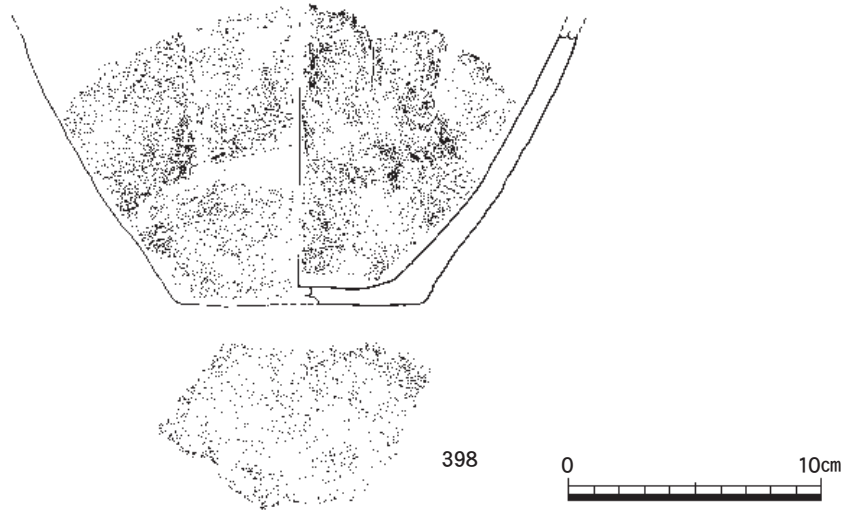
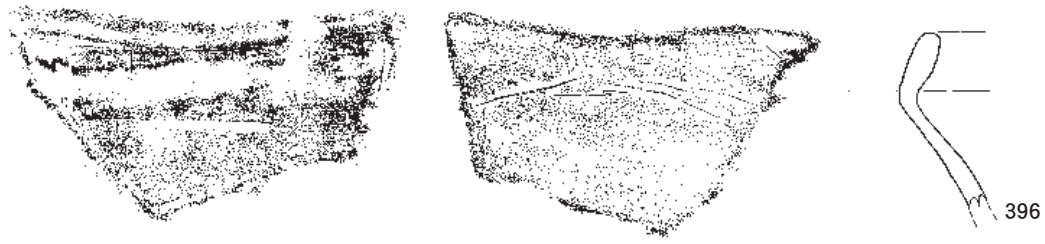
第108図 SH24出土遺物(44) (S=1/3)



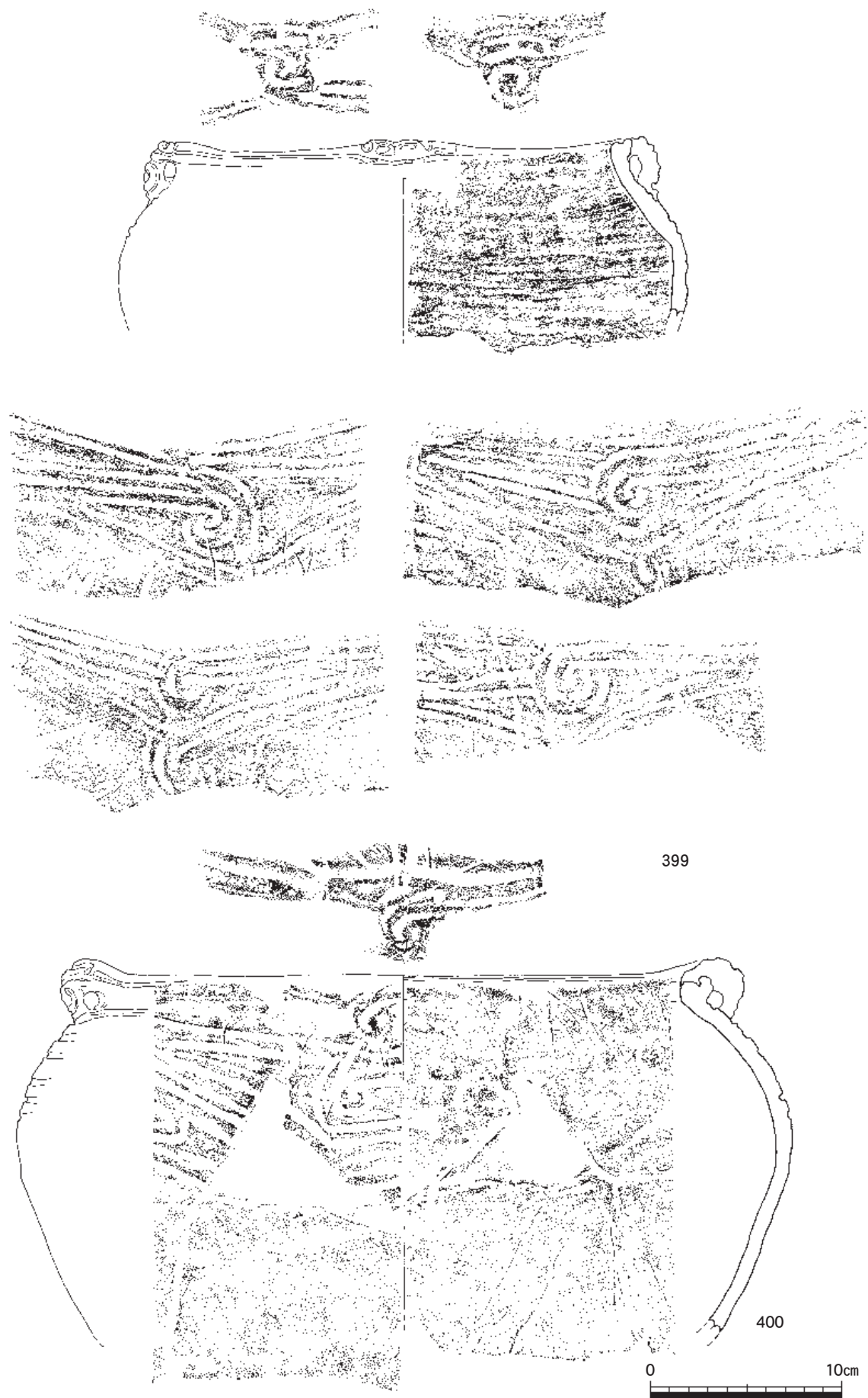
第109図 SH24出土遺物(45) (S=1/3)



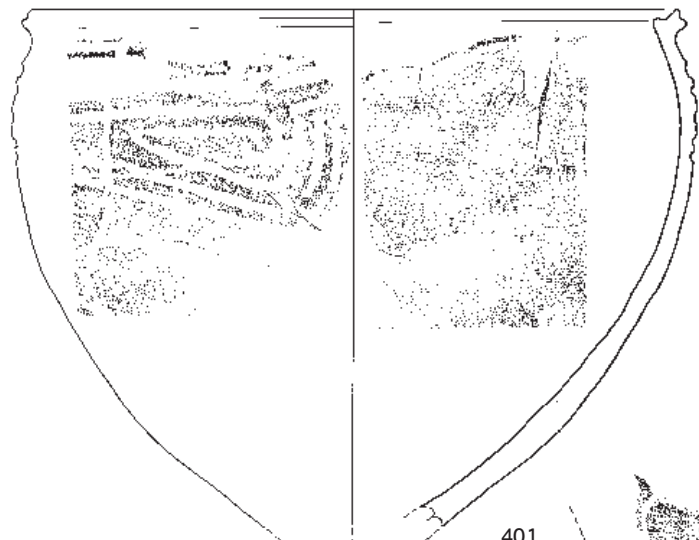
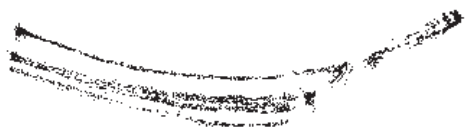
第110図 SH24出土遺物(46) (S=1/3)



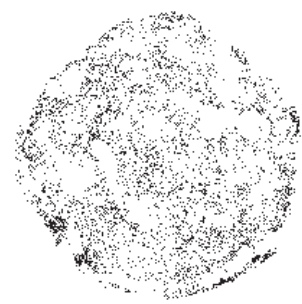
第111図 SH24出土遺物(47) (S=1/3)



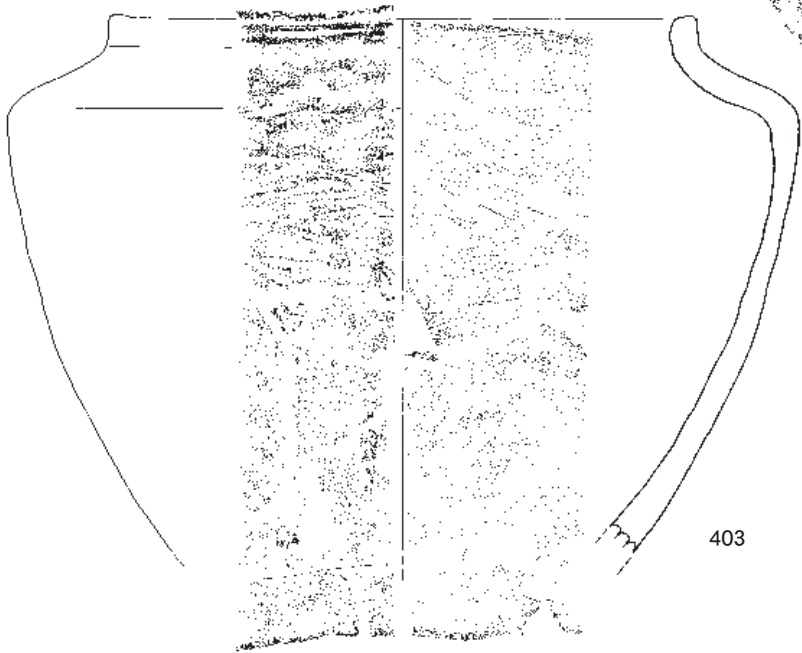
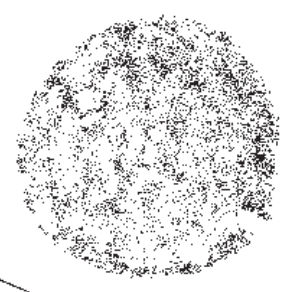
第112図 SH24出土遺物(48) (S=1/3)



401



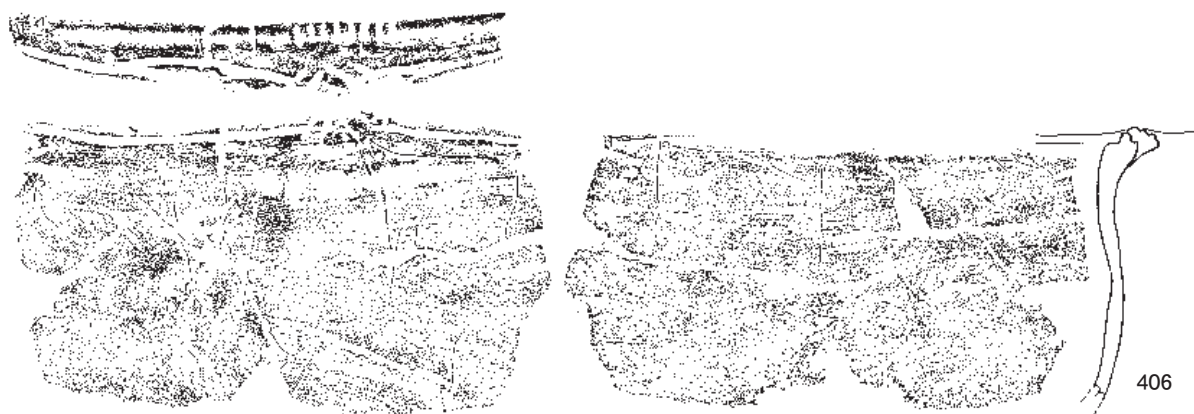
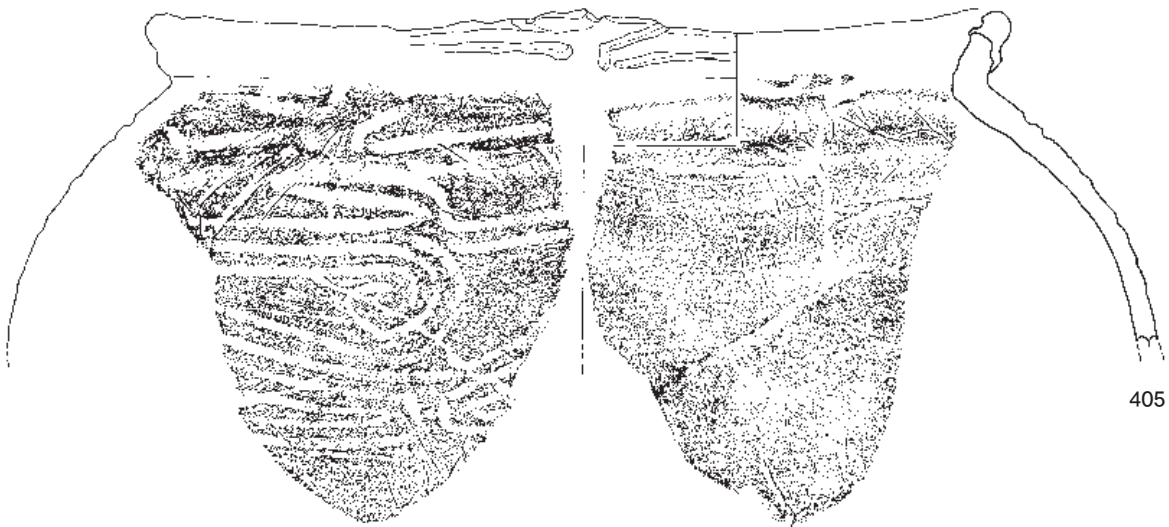
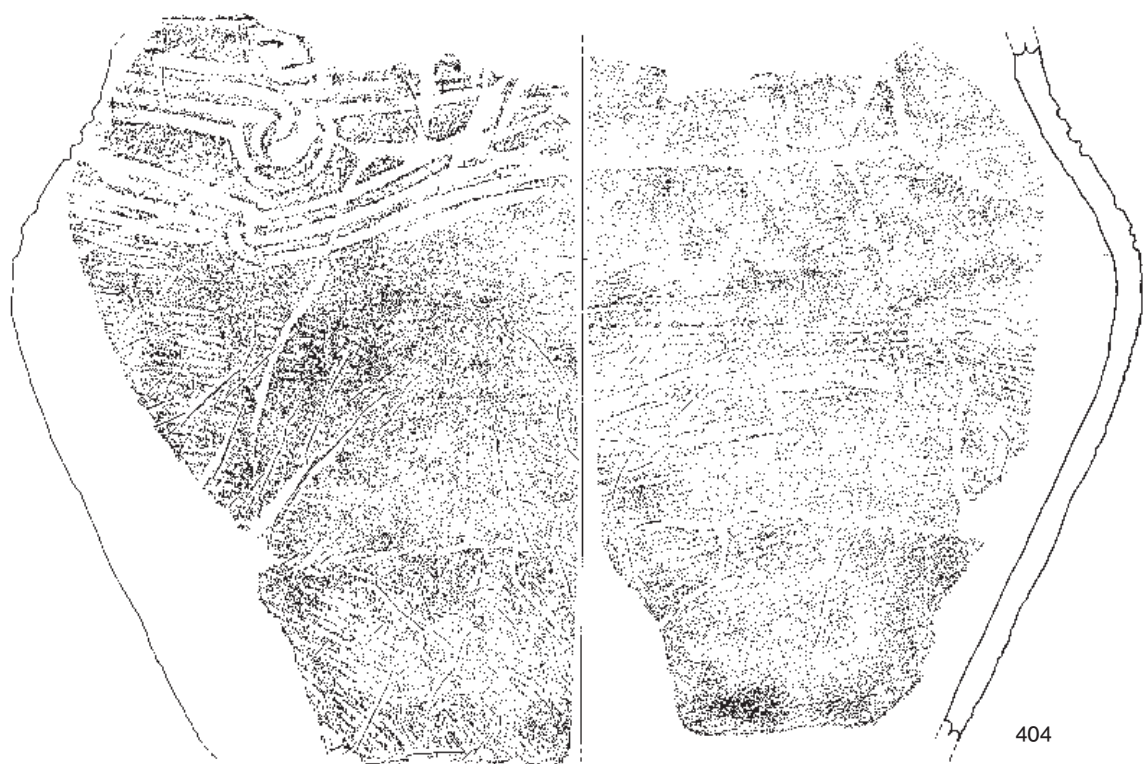
402



403

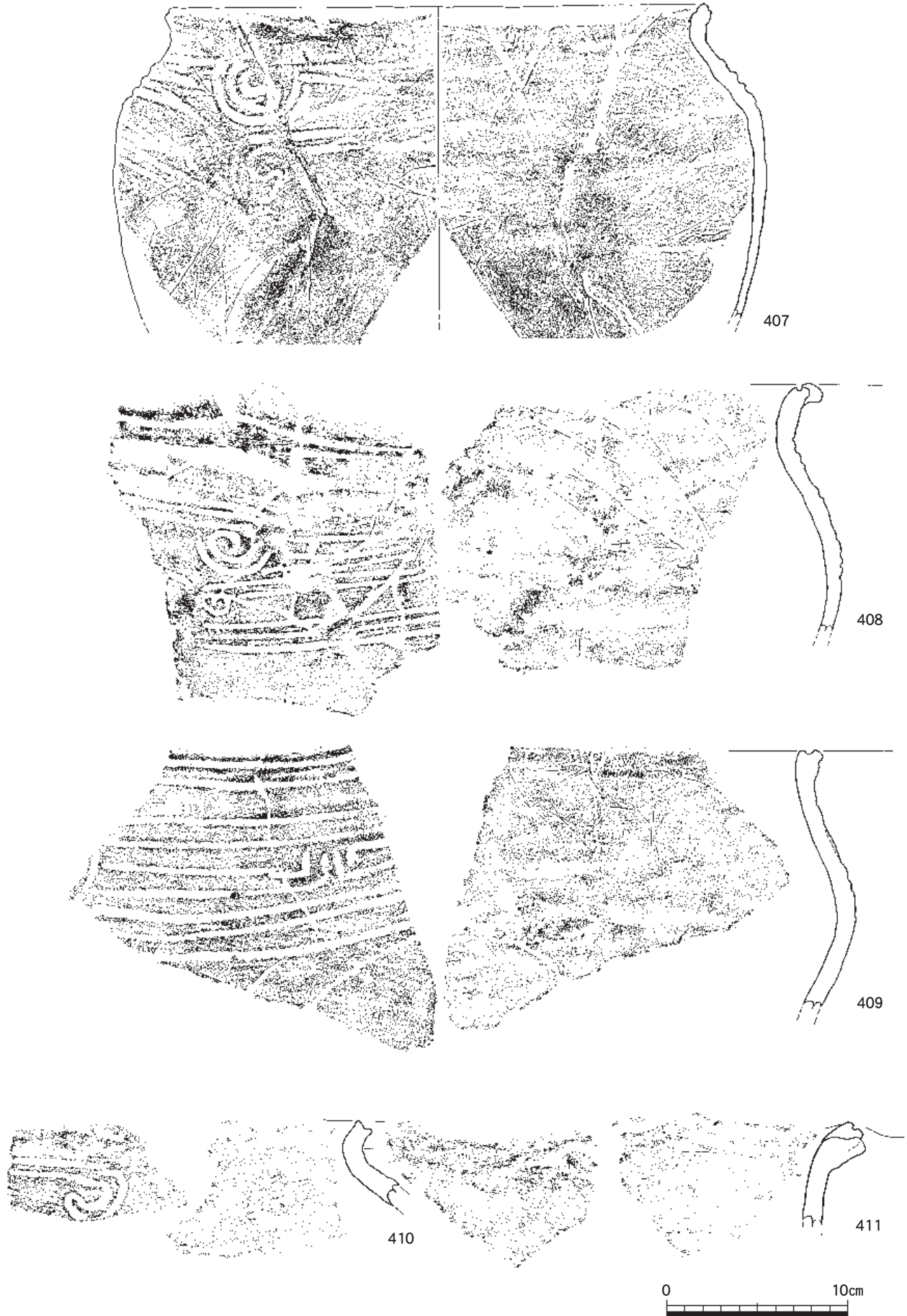


第113図 SH24出土遺物(49) (S=1/3)

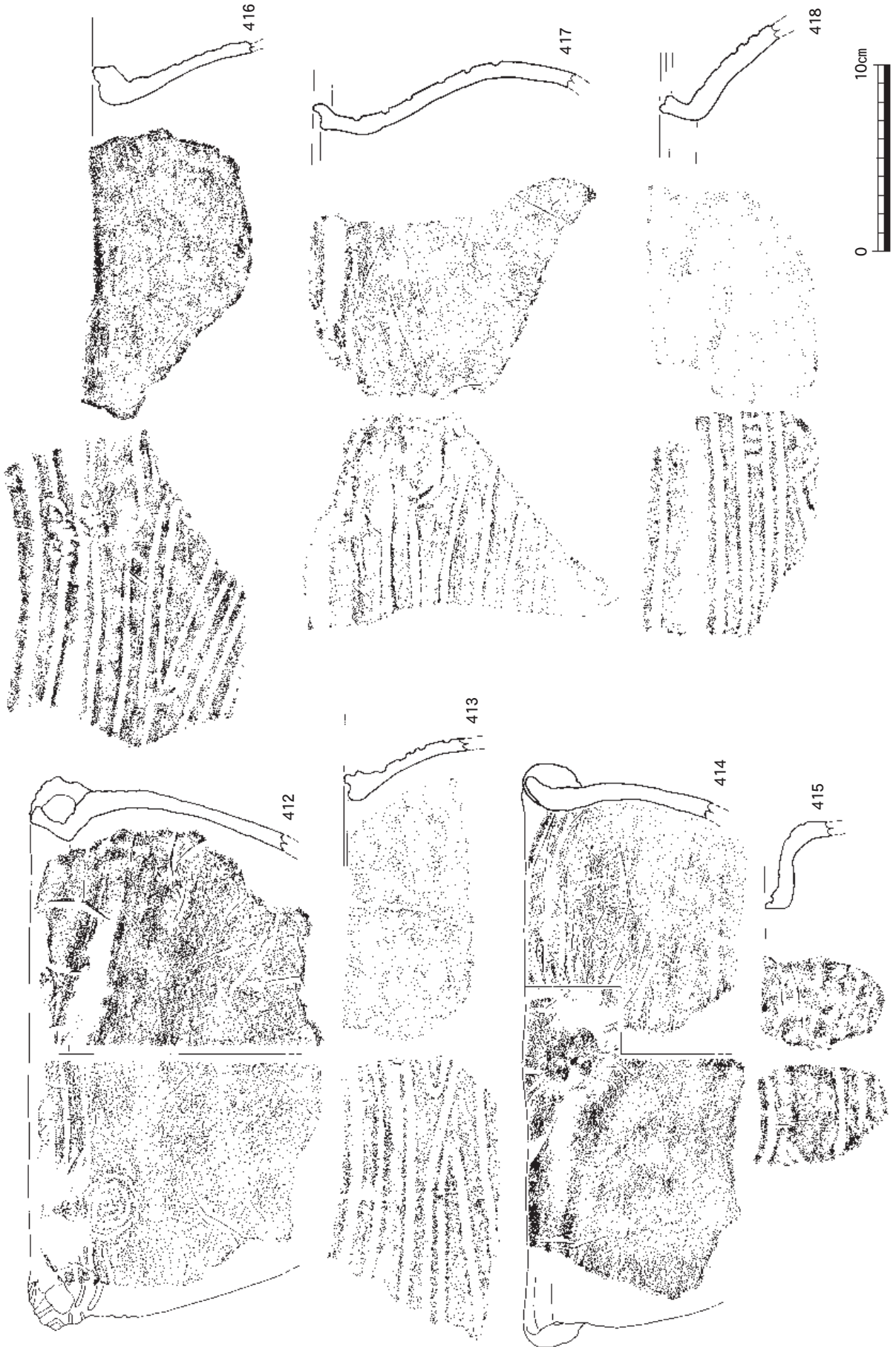


第114図 SH24出土遺物(50) (S=1/3)

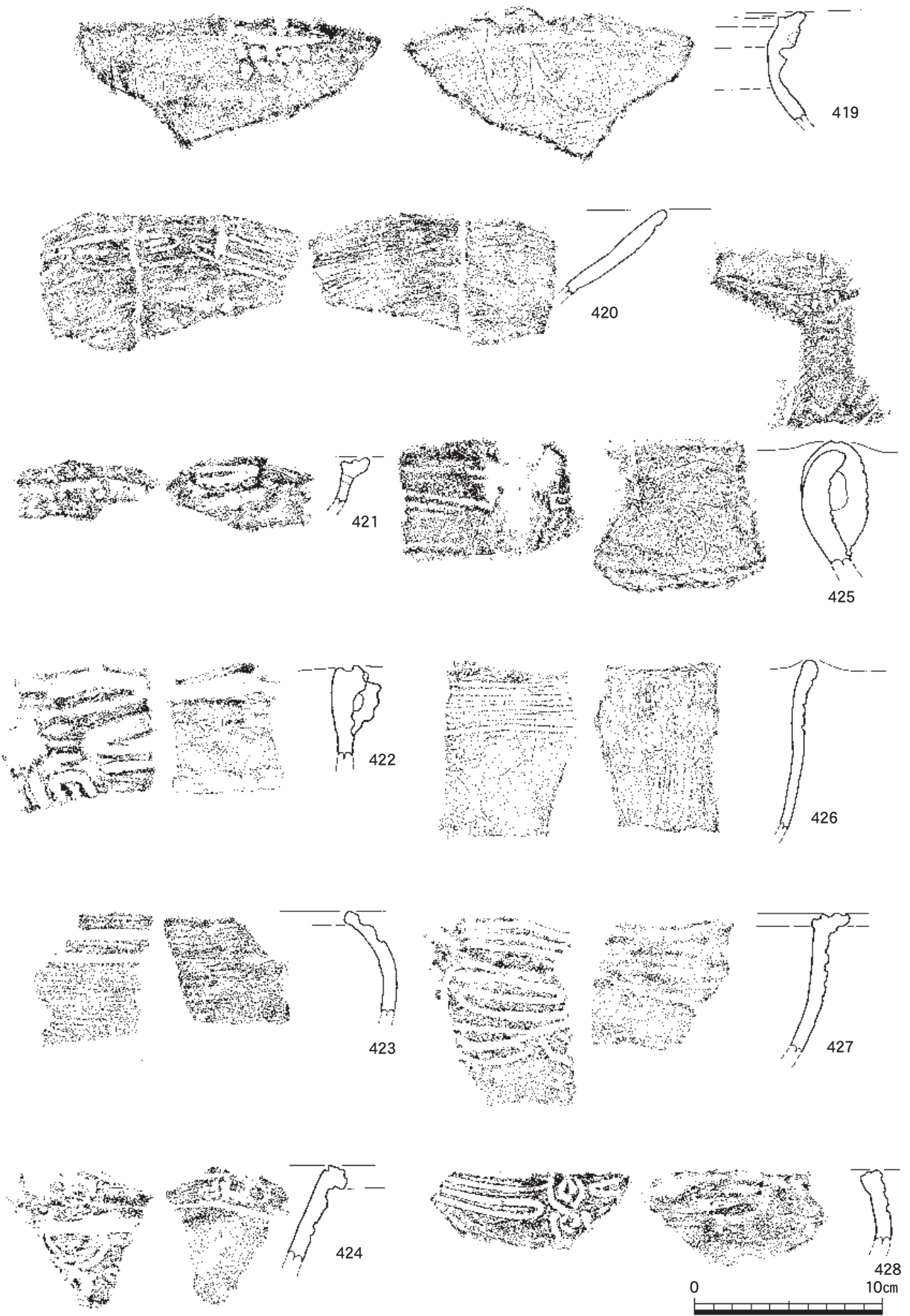




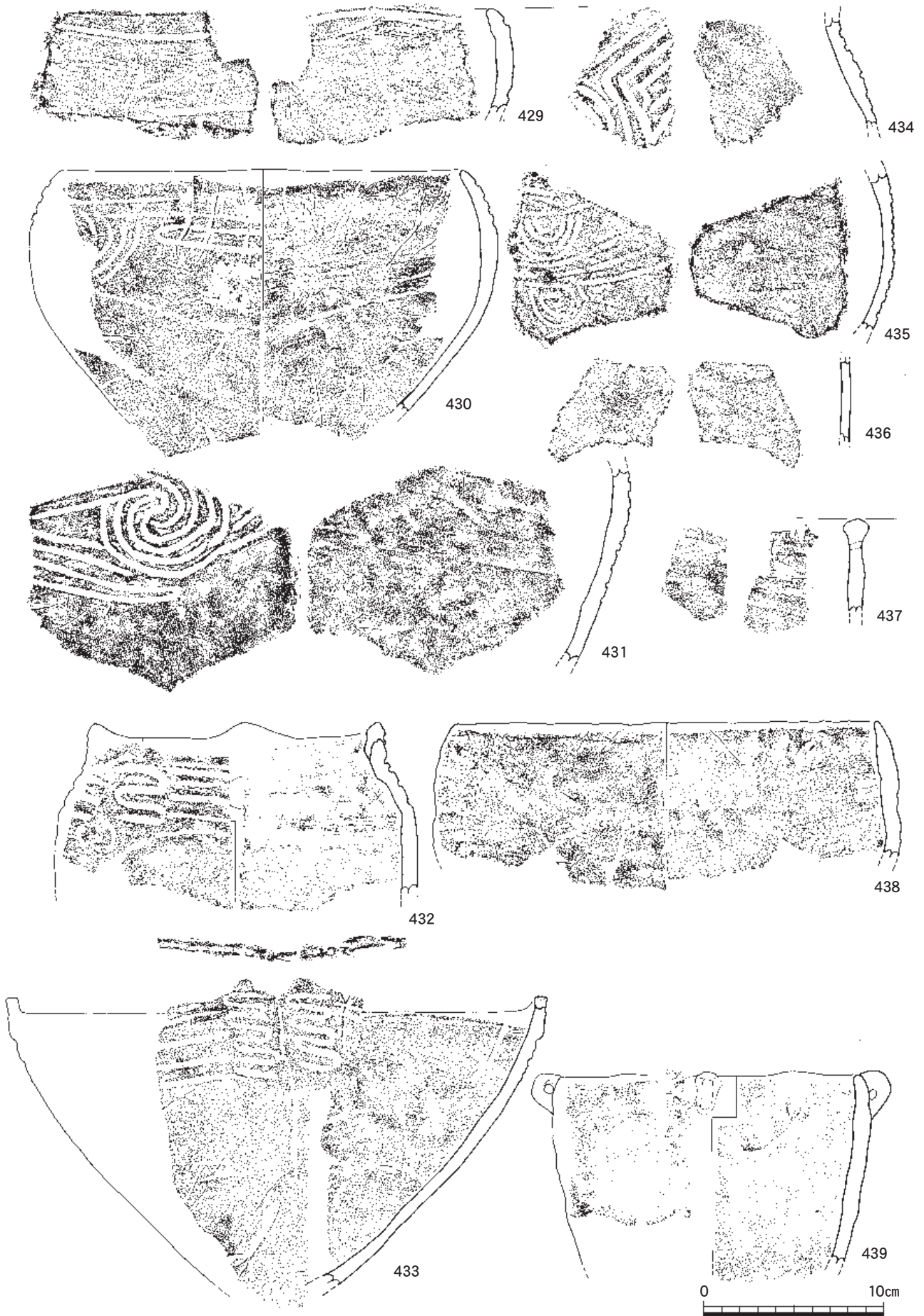
第115図 SH24出土遺物(51) (S=1/3)



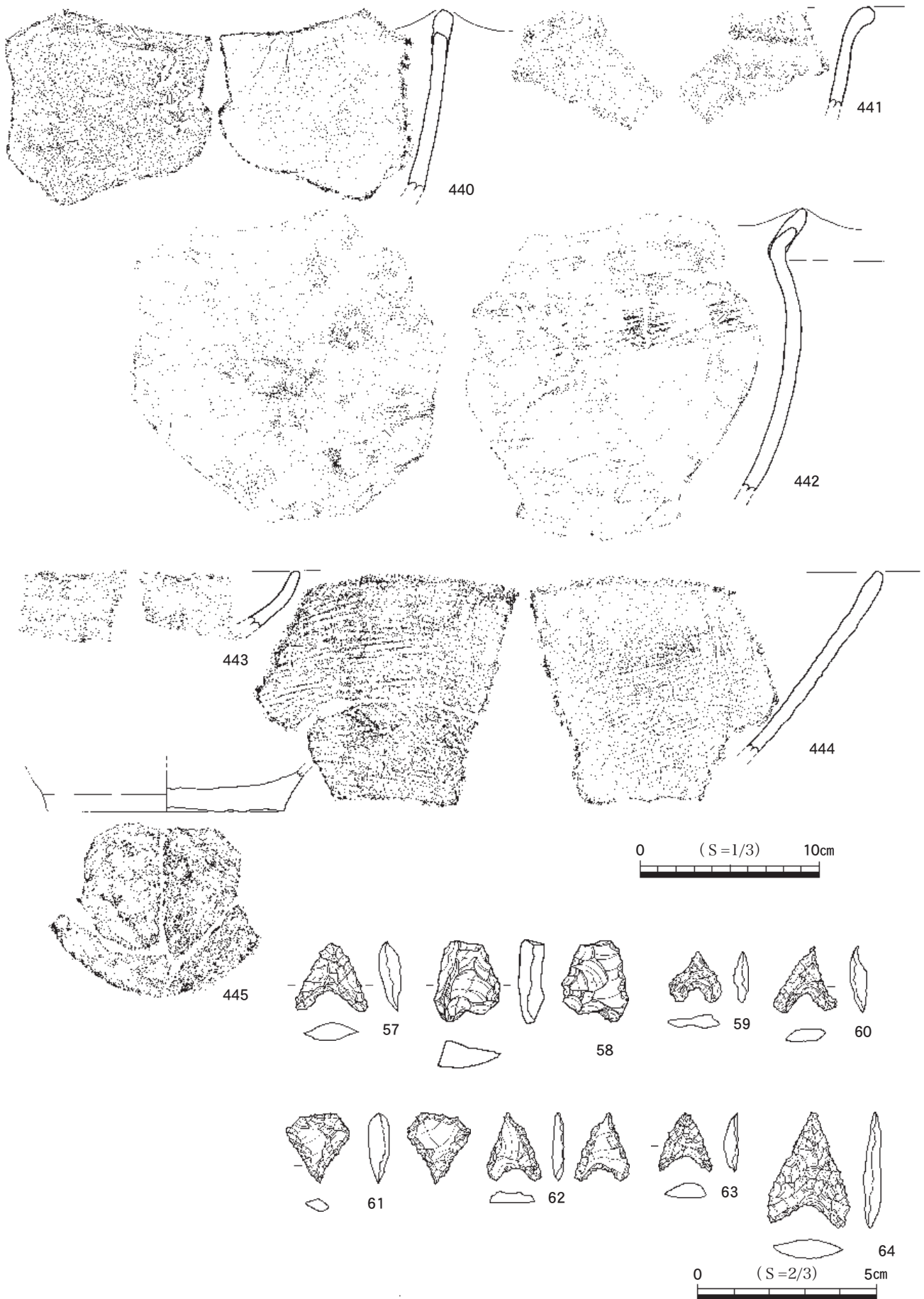
第116図 SH24出土遺物(52) (S=1/3)



第117図 SH24出土遺物(53) (S=1/3)

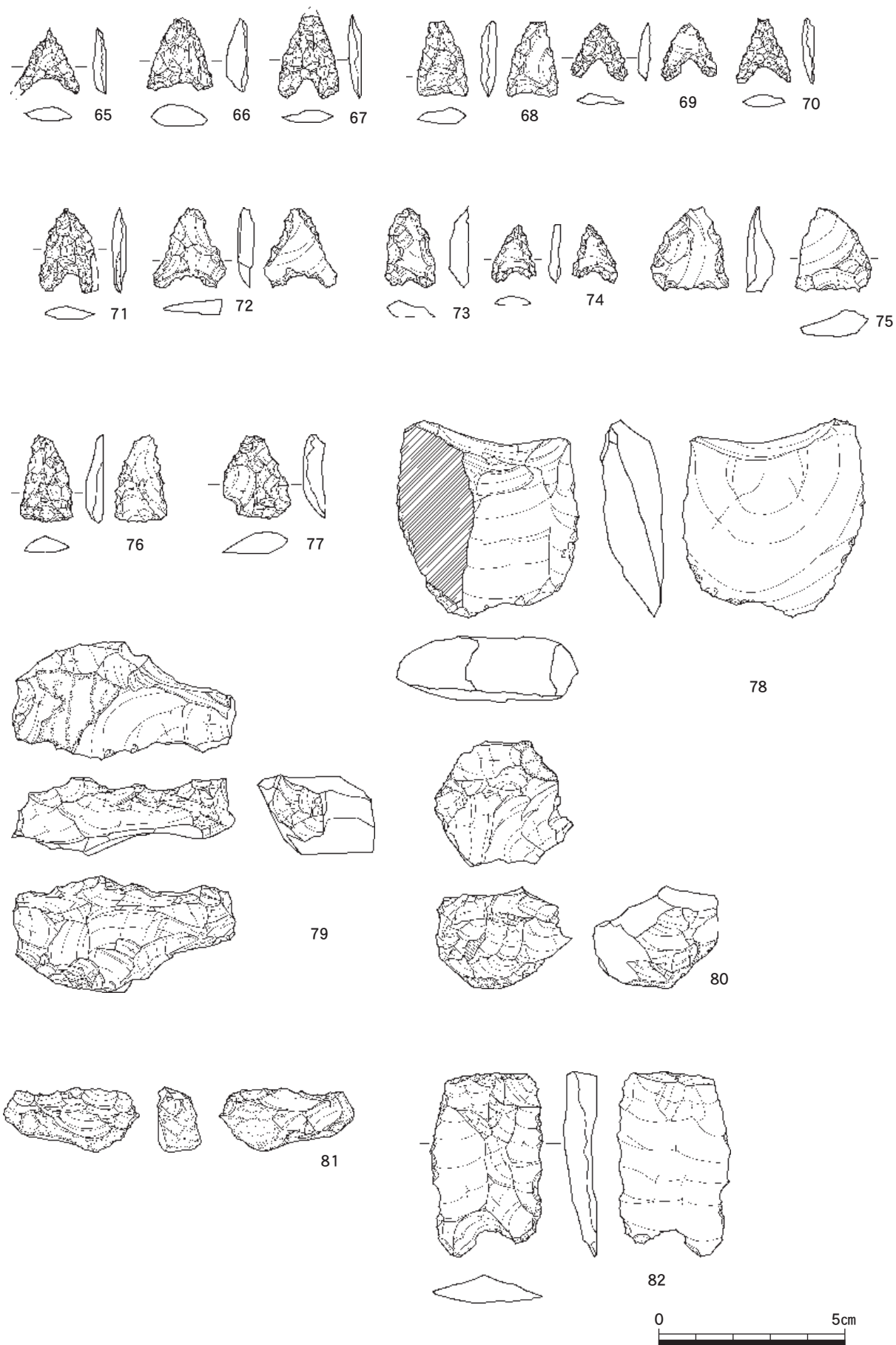


第118図 SH24出土遺物(54) (S=1/3)



第119図 SH24出土遺物 (55) (S=1/3 (440~445)、S=2/3 (57~64))

る。71は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、基部にやや歪な抉りが入れている。右側縁上半は先端の欠損後にリダクションした可能性が高く、右脚は欠損している。72は姫島産黒曜石製の未成品。幅広剥片を素材としており、現況で表・裏面の周縁にのみ加工が施されており、基部の抉りも若干形成されている。74は姫島産黒曜石製の石鏃。薄平な幅広剥片を素材とし、周縁にブランディング状の加工を施して、整形・先端形成をしている。右脚部を僅かに欠損している。75は姫島産黒曜石製の未成品。幅広剥片を素材とし、素材の背面の右側縁下半の周縁に加工を入れた後、主要剥離面の周縁のほぼ全縁に調整を施し、ほぼ三角形に整形しているが、打瘤付近の厚みを除去し切れなかったためか、製作を放棄している。61は姫島産黒曜石製の石鏃。やや厚い幅広剥片を素材とし、周縁部に平坦な加工を施して下端を尖頭形に、上端を直線状に整形しており、表・裏面ともに中央には素材の面が残る。両側縁には微細な使用痕が顕著に残り、先端は若干欠損している。76・77は姫島産黒曜石製の搔器。76は姫島産黒曜石製。幅広剥片を素材としており、表面は押圧剥離状の加工が全面に及んでいるが、裏面は下半部にのみに留まる。刃部には使用痕が顕著に認められる。形状や加工から、石鏃未成品を利用した可能性がある。77は表面全面と裏面の一部に認められる押圧剥離と、全体的な形状が三角形に近いものであることから、石鏃の未成品であったと考えられ、左側縁末端部の欠損から石鏃製作を止め、末端部を刃部とする搔器に変えたと考えられる。刃部には使用痕が顕著に認められる。78・82は姫島産黒曜石製の使用痕を有する剥片。78は単剥離打面の分厚い幅広剥片を用い、左右側縁から末端までの縁辺に使用痕が観察される。82は割合連続的に剥取した痕跡が窺われる縦長薄片を素材とし、上端の打面を除く全周縁に顕著に使用痕が認められる。79～81は石核。79は多久産と考えられるサヌカイト製。上端を打面、裏面を作業面として剥離した後、同じ上端を打面、正面を作業面として剥離している。80は鉄石英製。上面を打面、右側面を作業面として剥離→正面を打面、上面を作業面として剥離→上面を打面、正面を最終作業面として剥離しており、毎回打面は90度転回している。下端には若干自然面が残る。81は針尾系黒曜石製。裏面及び下端面に礫面を残す剥片ないしは分割礫を素材とし、複剥離面の上端を打面、正面を作業面として幅広剥片を剥離している。83・84、86～89は削器。83は姫島産黒曜石製の石核削器。上端を打面、正面を作業面として剥離した後、左右側縁に若干の加工を入れて削器として利用しており、使用痕が認められる。84は多久産サヌカイト製の横刃削器。自然面が多く残る表面から、連続的に剥がされた幅広剥片を素材とし、表面のみへの加工によって整形・刃部形成が行われており、上端右端に手持ち用の加工が表・裏面に認められる。刃部には使用痕が顕著にみられる。86は姫島産黒曜石製の削器。やや分厚い幅広剥片を素材とし、素材の末端部に表・裏面から加工を施して刃部を形成し、素材の打面部の表・裏面に平坦な調整を入れて、装着ないしは手持ちのための箇所を作り出している。右側面は若干欠損している。87は姫島産黒曜石製。幅広剥片を素材とし、末端部の裏面に浅い加工を施して刃部を形成している。細かな使用痕が顕著に認められる。88は姫島産黒曜石製。左側縁の表・裏面に加工が施されているが、刃部は薄い下半部で、上半は手持ち部か。また、右側縁上半には使用痕が認められる。89は姫島産黒曜石製の削器。表面に節理面が大きく残る縦長剥片を素材としており、右側縁に裏面からのみ加工を施して刃部を形成しており、若干の使用痕が認められる。また、上端の素材の打面には手擦れ痕がみられる。85は姫島産黒曜石製の縦長剥片。表面からすると縦長剥片を連続的に剥がしてはならず、打面付近が折れている。90・91は石匙。90は多久産と考えられる。複剥離打面の幅広剥片を素材とし、左右側縁中央付近に裏面→表面の順で浅い加工を施して抉りを形成し、下端部に裏面からのみ急斜



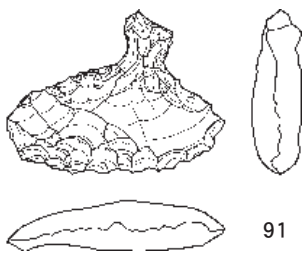
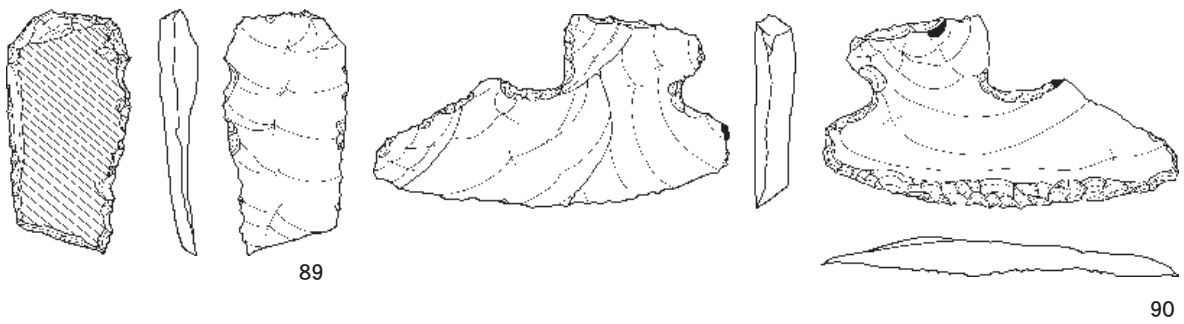
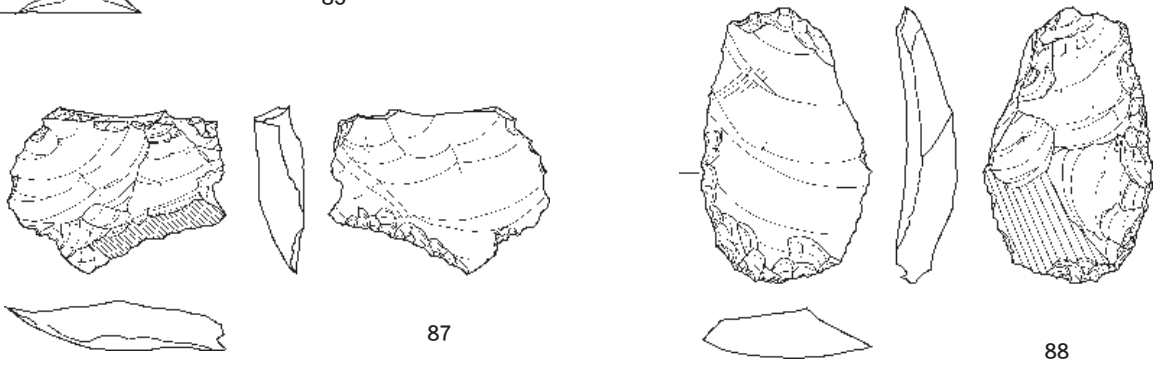
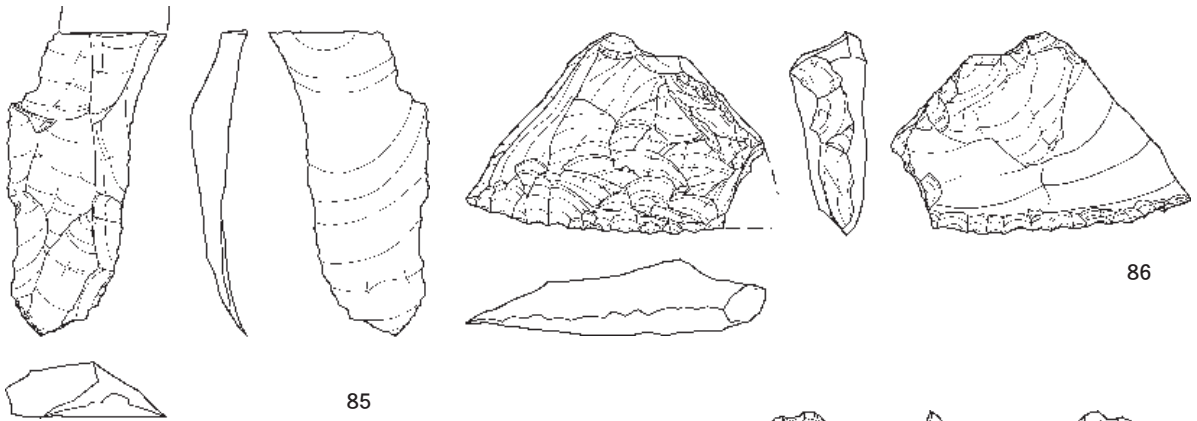
第120図 SH24出土遺物(56) (S=2/3)

度の調整を入れて刃部を作り出している。表・裏面とも中央部は素材の面が大きく残る。刃部には顕著な使用痕が認められる。91は姫島産黒曜石製。分厚い幅広剥片を素材とし、周縁部にのみ表・裏面から加工を施して整形しており、下端の刃部には使用痕が認められる。左右の頂部は若干欠損している。92・99は磨製石斧。92は蛇紋岩製の磨製石斧片。中央部辺りが残ったものである。99は硬砂岩製。表面は意外にきれいに研磨されているが、裏面は深く抉れた磨き残しが大きく残る。基部には顕著な装着痕が認められ、刃部は完全に欠損している。93～98は扁平打製石斧。93は角閃石安山岩製。薄平な自然礫を素材としており、周縁部にのみ表・裏面から加工を施して整形・刃部形成を行っている。基部を若干欠損しており、刃部の表・裏面には摩滅痕が認められる。94は安山岩製。薄平な剥片を素材とし、裏面は自然面のみで形成される。周縁部にのみ加工を施し整形しており、中央部は左右側縁とも内湾させている。刃部側の下半は大きく欠損している。95は角閃石安山岩製。やや薄平な自然礫を素材としており、加工はほぼ周縁部に留まり、表・裏面中央と上端面に礫面が大きく残る。刃部を若干欠損している。96は角閃石安山岩製。表面がほぼ全面礫面の剥片を素材とし、裏面に大柄で面的な加工を施して厚みを取った後、周縁部に急斜度な調整を施して整形・刃部形成をしている。刃部には使用痕が認められ、基部は僅かに欠損している。97は角閃石安山岩製。片面がほぼ全面礫面の分割礫を素材とし、周縁全縁に加工を施して整形し、両刃の刃部を形成している。98は角閃石安山岩製。表面のほぼ全面が自然面だったと考えられる礫片を素材とし、裏面の一部に大柄で面的な加工を施した後、周縁部に表・裏面から急斜度の調整を入れて撥形に整形し、刃部を形成している。基部を僅かに欠損している。100は角閃石安山岩製の石製円盤。表面がほぼ礫面の幅広剥片を素材とし、裏面に面的な加工を若干施して平坦化した後、周縁部に急斜度な調整を入れて円形に整形している。右側縁上半と左側縁下半を若干欠損している。101～103は磨石。平坦面や周縁部に敲打痕が認められる。104・105は凹み石。106～108は台石。106は角閃石安山岩製。表面中央の窪んだ位置に研磨による変色が認められる。また、裏面の平坦部の中央にも研磨による変色が見られ、砥石としても使用していたと考えられる。108は大型品。周縁部の敲打が著しい。109は砥石。花崗岩製の砥石。直方体に近い礫を素材としており、周縁に整形のための加工が観察される。表面は使用によって深く抉れており、上端近くには研磨によるごく浅い窪みが認められる。裏面は硬度のあるものを研磨した深い抉り1条と浅い抉り2条がみられる。

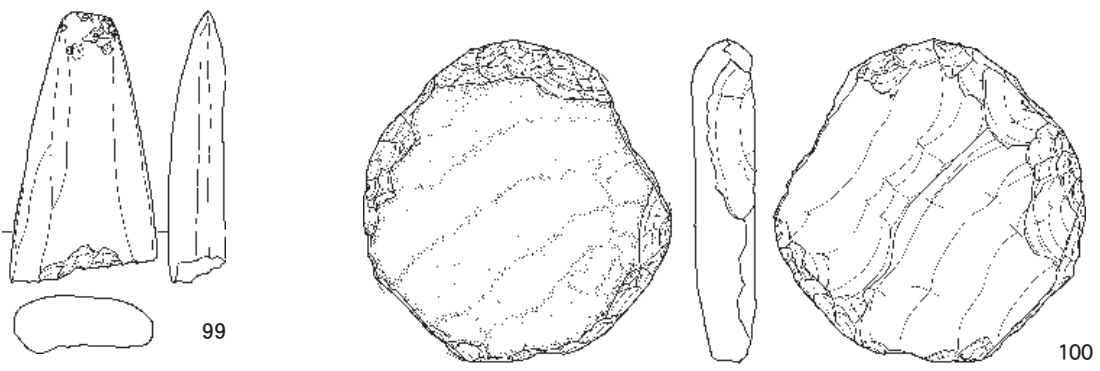
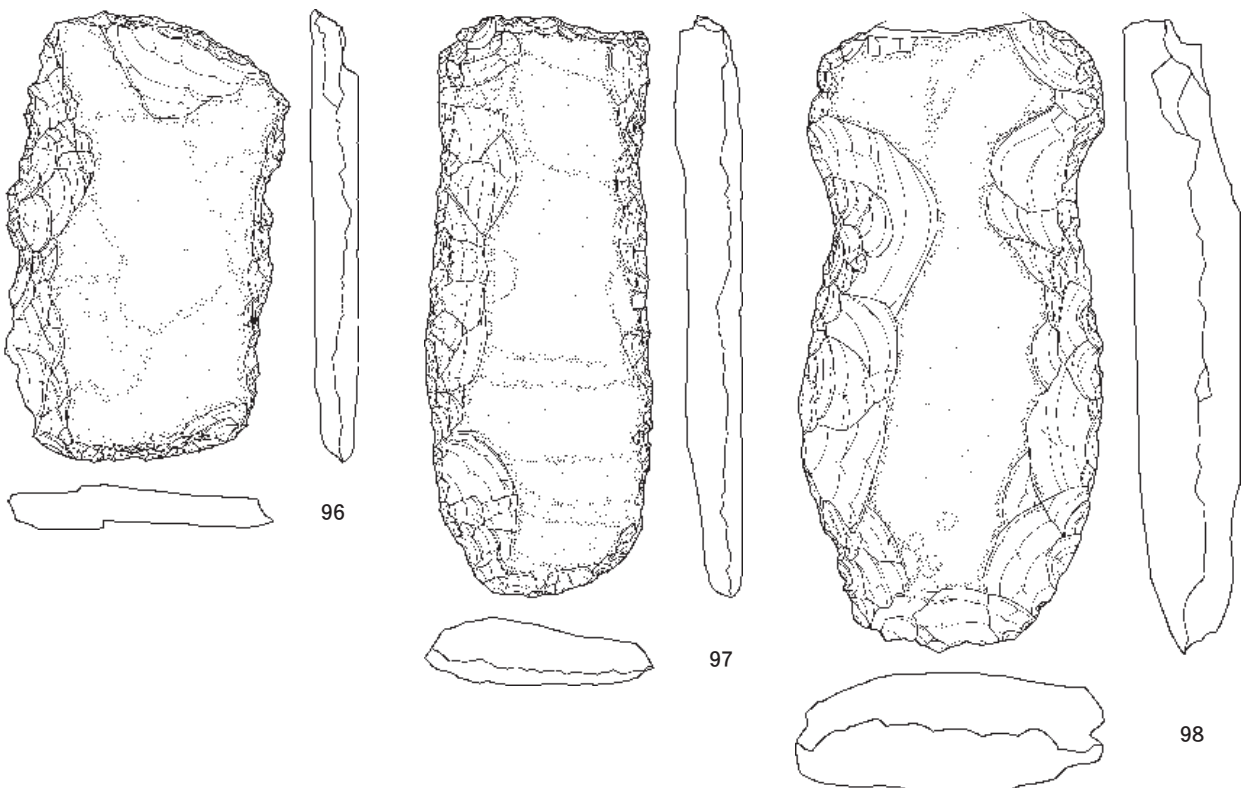
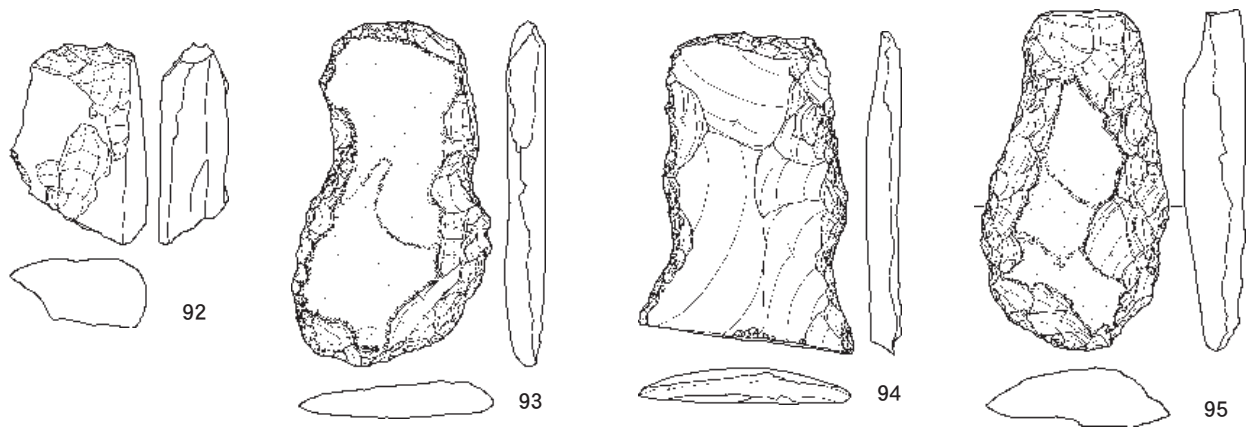
110は縦型の塊状耳飾である。現在は約半分が破損しており、残部は長さ49.2mm、幅14.2mm、厚さ4.3mmである。少しくすんだ乳緑色に黒色と茶色の斑点が入る滑石製である。滑石独特の柔らかい手触りで、片岩質の光沢がある。破断面は、凹凸を残すが全体的に滑らかで、破損後に再研磨した可能性がある。切り目は歪みがなく、直線であることから、擦切りによると考えられる。中央孔は、塊状耳飾としては珍しく片側から穿孔、もしくは抉られているようである。上部に孔が一つ、両側から穿孔されている。正円に近い孔であるが、片面（図左側）の孔の縁は乱れており、穿孔場所を変えたり、回転による穿孔後に手を加えたと考えられる。通常、補修のための孔と考えられるが、やや破断面から遠い感もする。破損後、垂飾としての利用を意図した可能性がある。しかし、石材が軟らかい滑石であるにもかかわらず孔には顕著な紐ずれがない。補修のためであっても、垂下のためであっても、孔の状況からは、破損後長く利用はされなかったとみられる。

九州における塊状耳飾の形態変遷では、縦型は縄文時代前期後葉の曾畑式・尾田式・日木山式期から、中期前葉の船元Ⅰ・Ⅱ式期までで、一部春日式期に残る可能性もあるという年代観である(大坪)。

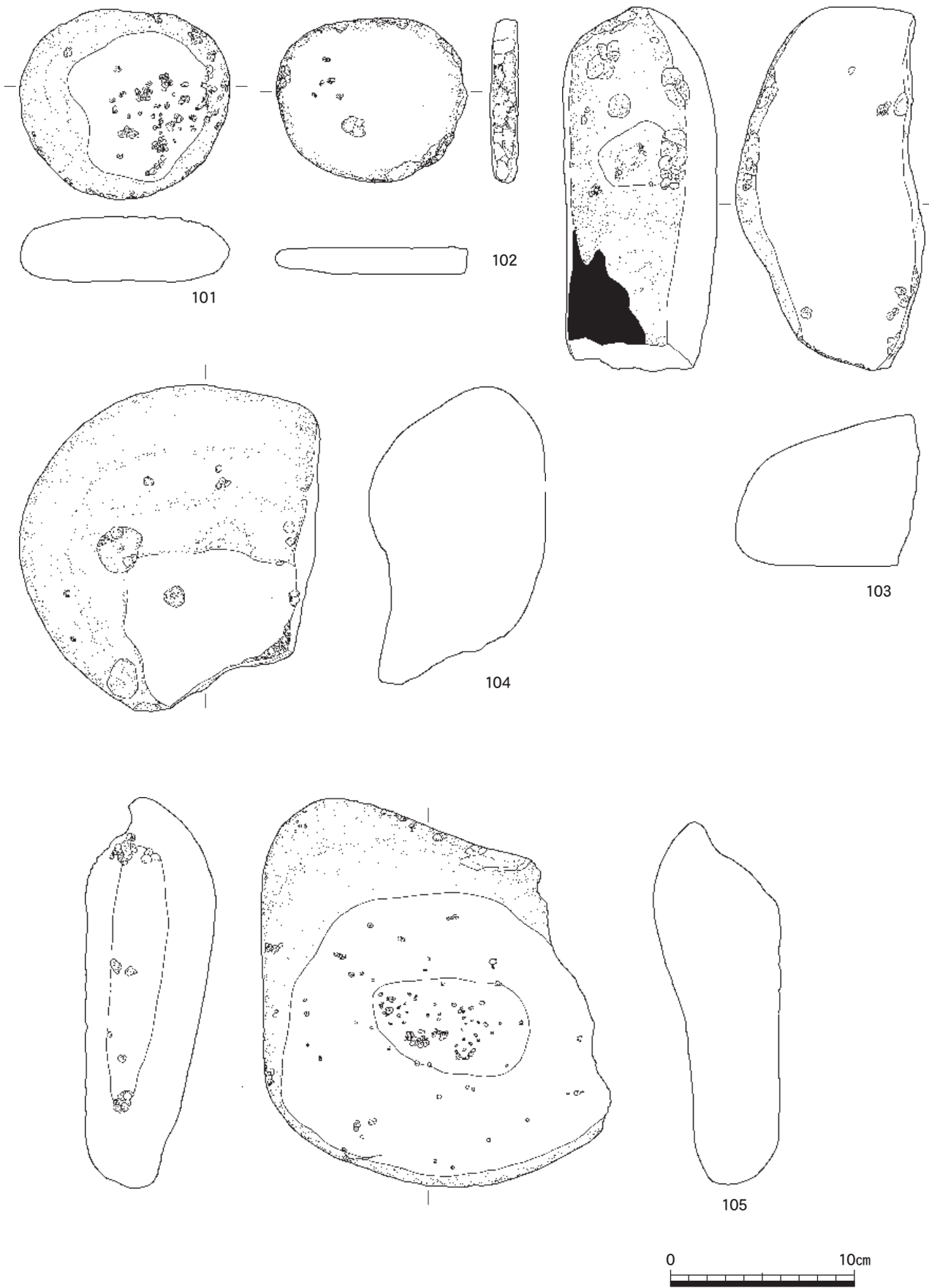




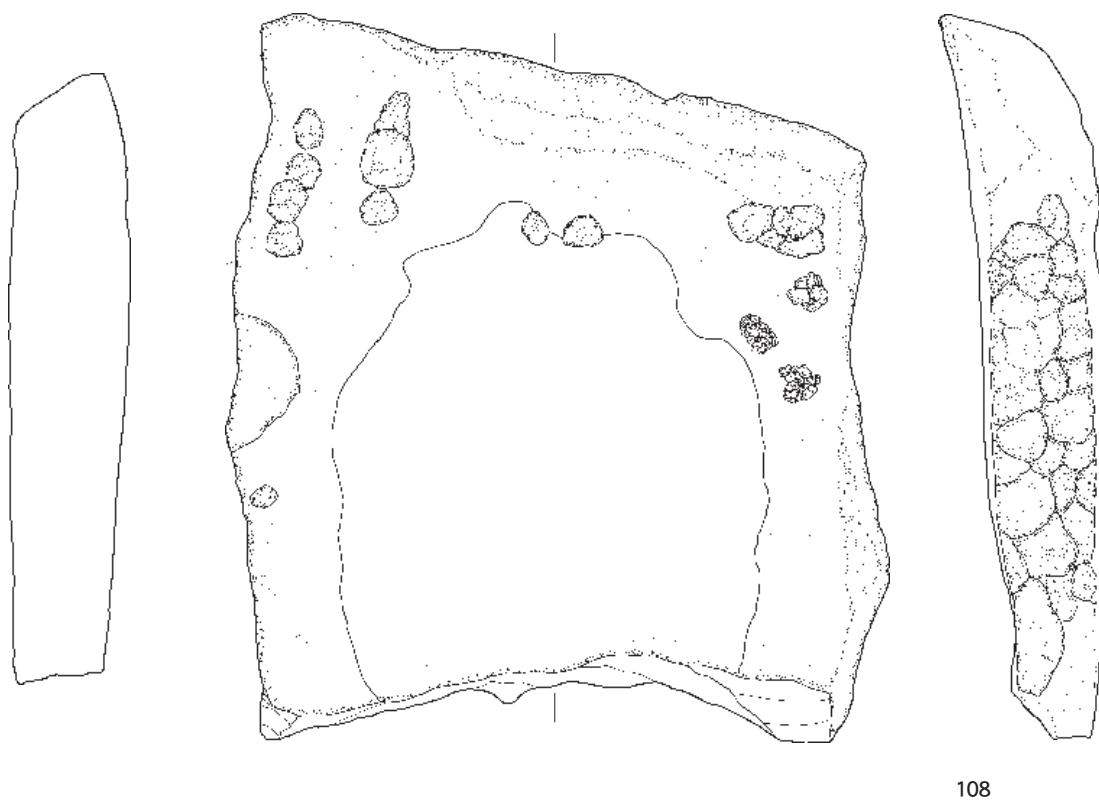
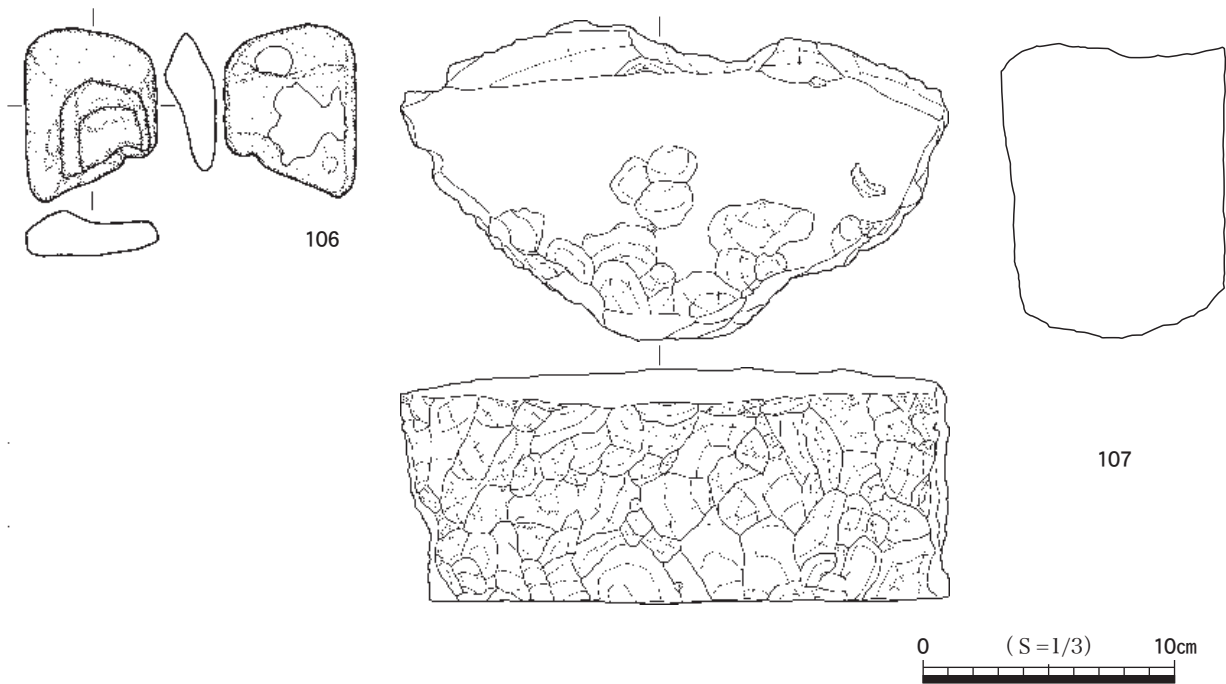
第121図 SH24出土遺物(57) (S=2/3)



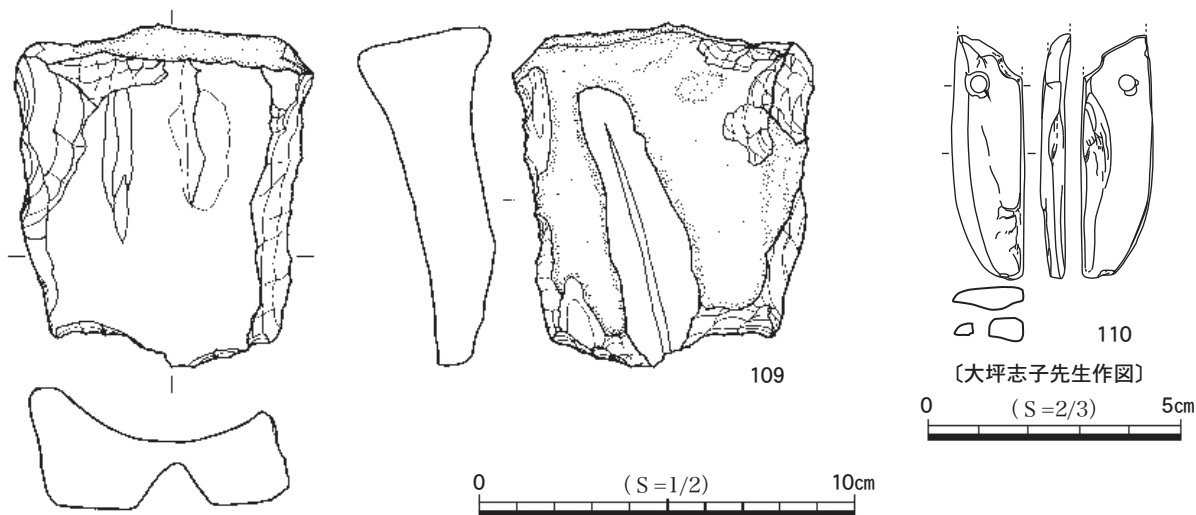
第122図 SH24出土遺物(58) (S=1/2)



第123図 SH24出土遺物(59) (S=1/3)



第124図 SH24出土遺物(60) (S=1/3 (107)、S=1/4 (106、108))



第125図 SH24出土遺物(61) (S=1/2 (109)、S=2/3 (110))

#### SH27 (第126図)

第5調査区F-19で検出した竪穴住居跡である。南辺は試掘トレンチにより失われている。N34°E方向に軸線に向ける。平面は円形に近く、南北方向に3m+ $\alpha$ 、東西方向4m、深さ18cmの大きさである。周壁は認められない。周壁の立ち上がりはやや急である。埋土はしまりのよい茶褐色土(2層)が堆積した後、土器を多く含む黒褐色砂質土(1層)が堆積する。また、本住居は後述するSB14廃絶後に構築されており、SB14のP1と重複している。また、SB14P2の一部にも重複している可能性がある。土層図の3層がSB14P1埋土である。柱穴埋没後、柱穴上部を破壊し本住居が構築されたことがわかる。

床面中央に炉が敷設されている。柱穴状ピットは、深さ20~40cmのP1・2、10~20cmのP3~9が主柱穴と考えられるが判然としない。その他の柱穴は浅い。遺物はパンケース4箱分が出土している。太郎迫期の遺物が多数出土しているため、本遺構は縄文時代後期後葉の所産と推定する。

#### 炉跡 (第126図)

炉跡は住居跡の中央に位置する。東側に深さ10cmの楕円形の掘り込みがあるが炉跡との関連は不明である。炉跡は1段テラス面を有し、中央部が深くなる。最大長57cm、最大幅50cm、深さ20cmである。円礫を配さない地床炉である。壁は被熱し赤色を呈するが硬化していない。

#### 出土遺物 (第127~131図)

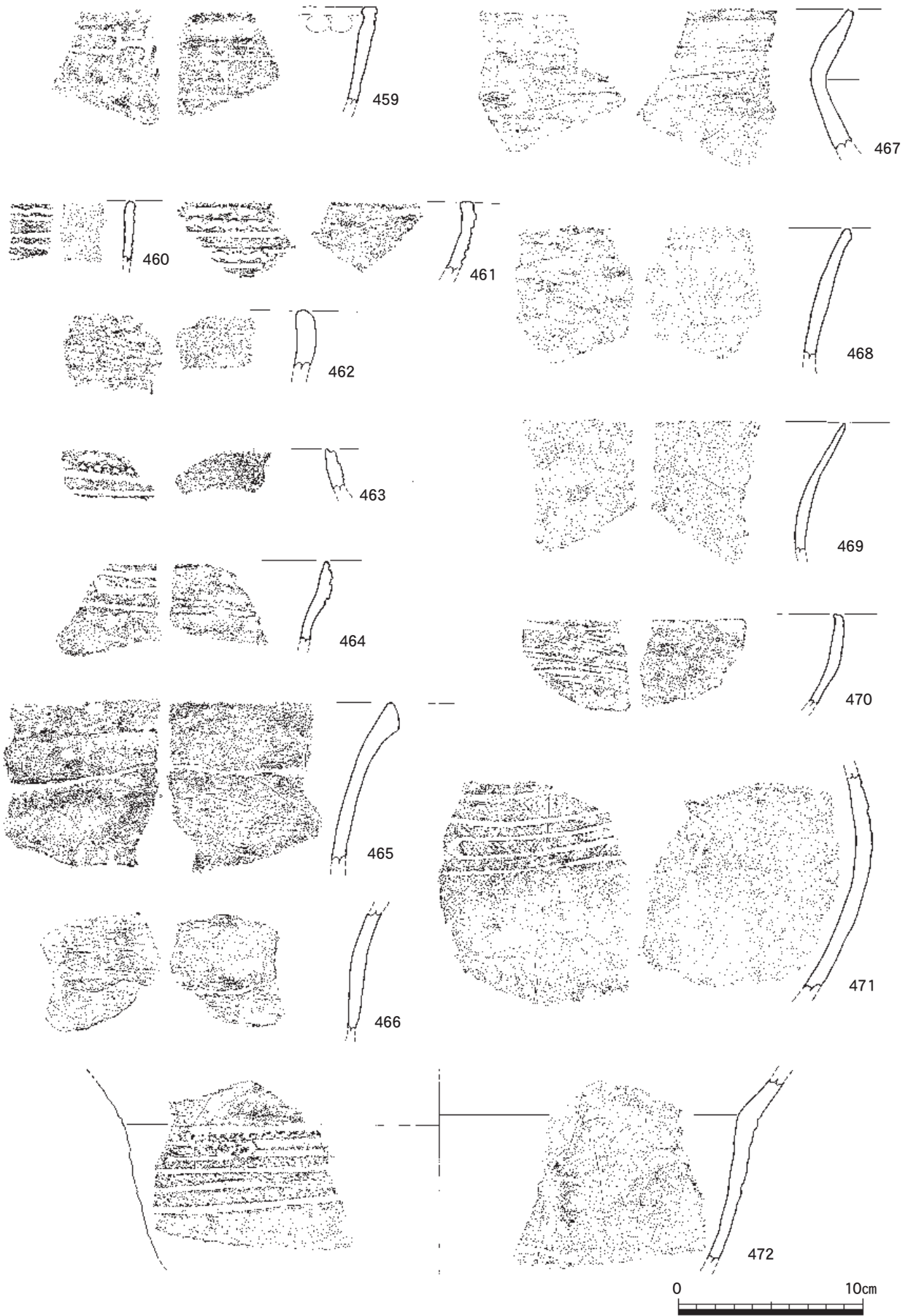
土器は47点を図示した。遺物の多くは1層から出土している。

446~458・472~474・476・484~488は、口縁端部に2~3条の沈線を巡らせ、波頂部下には入組文、胴部には「X」文や直線文、横位流水文を呈する。454は西平式であろうか。その他は太郎迫式土器に位置づけたい。452・457・473は沈線間やその上下に巻貝による縄文を施す。484は沈線間に波状文を描く。485は波頂部下の沈線間に刺突文を入れる。459~470・475はその他の口縁部。460・461は沈線を波状に描く。462は巻貝による擬似縄文を施し、463は刺突を連続させる。464は石町式の範疇であろう。475は竹管を連続させる。477・478はメンコ状遺物。479~483、490・491は底部。479・480・482・490・491はわずかに上底状になる。489は巻貝による擬似縄文を入れる。



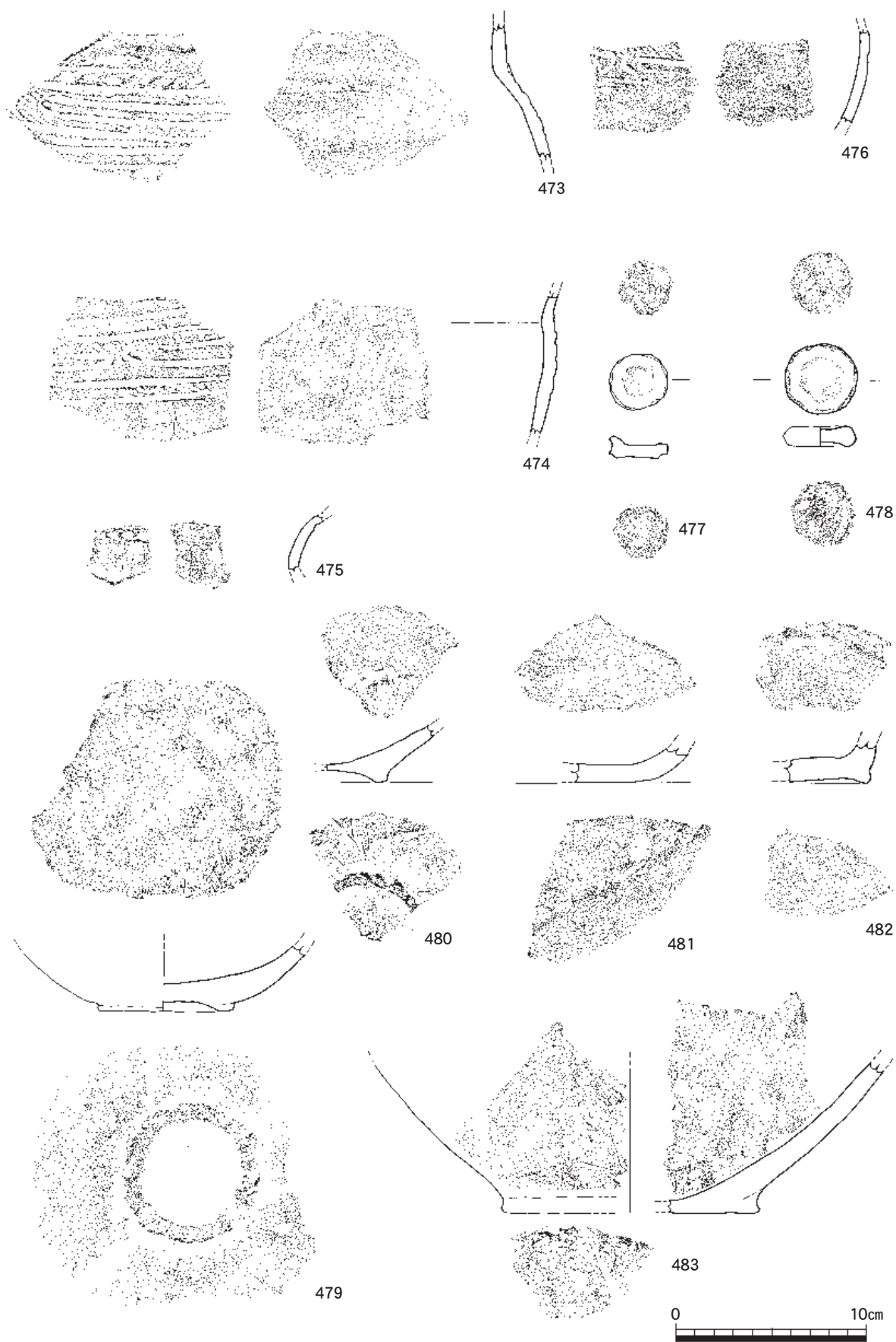


第127図 SH27出土遺物(1) (S=1/3)

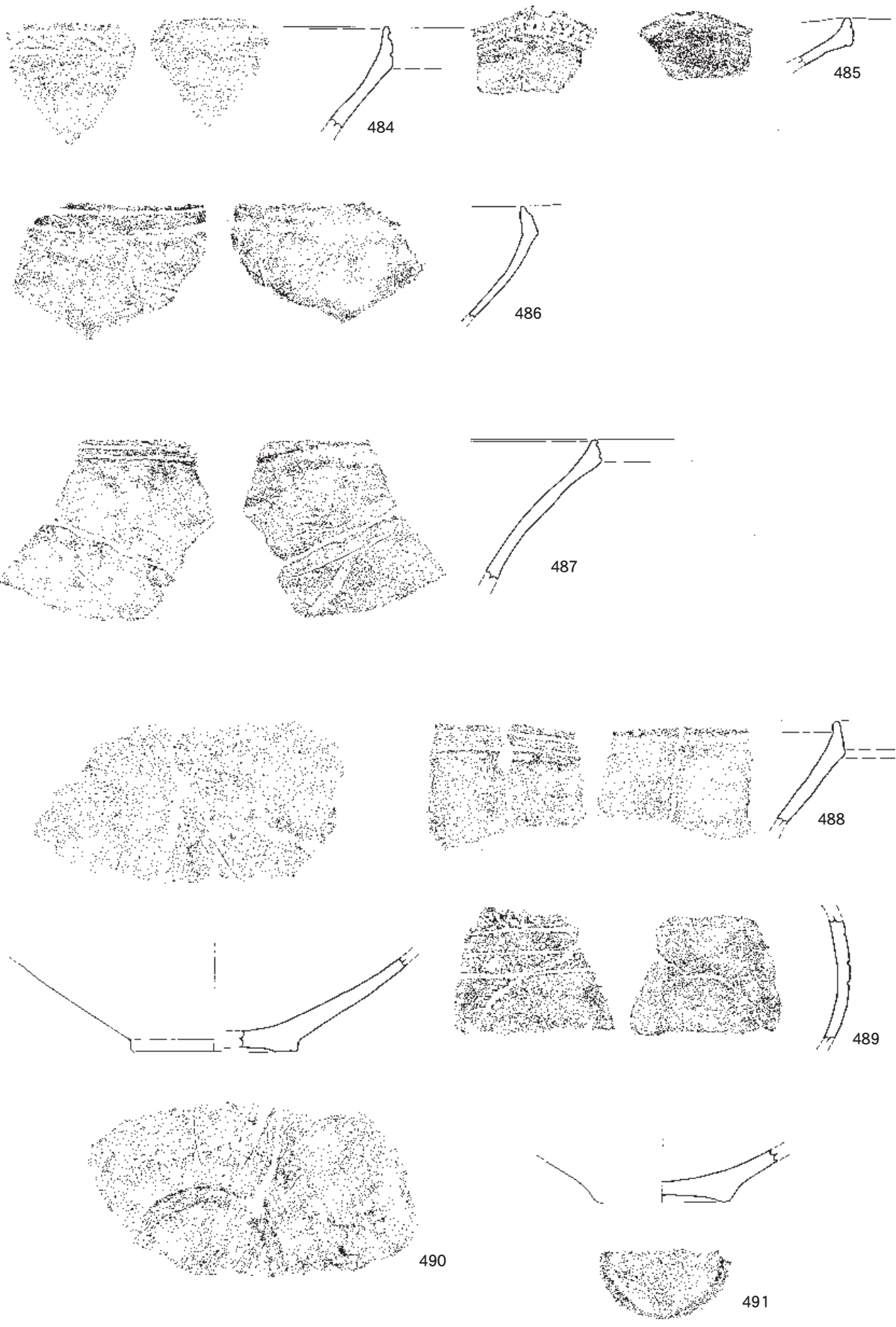


第128図 SH27出土遺物(2) (S=1/3)

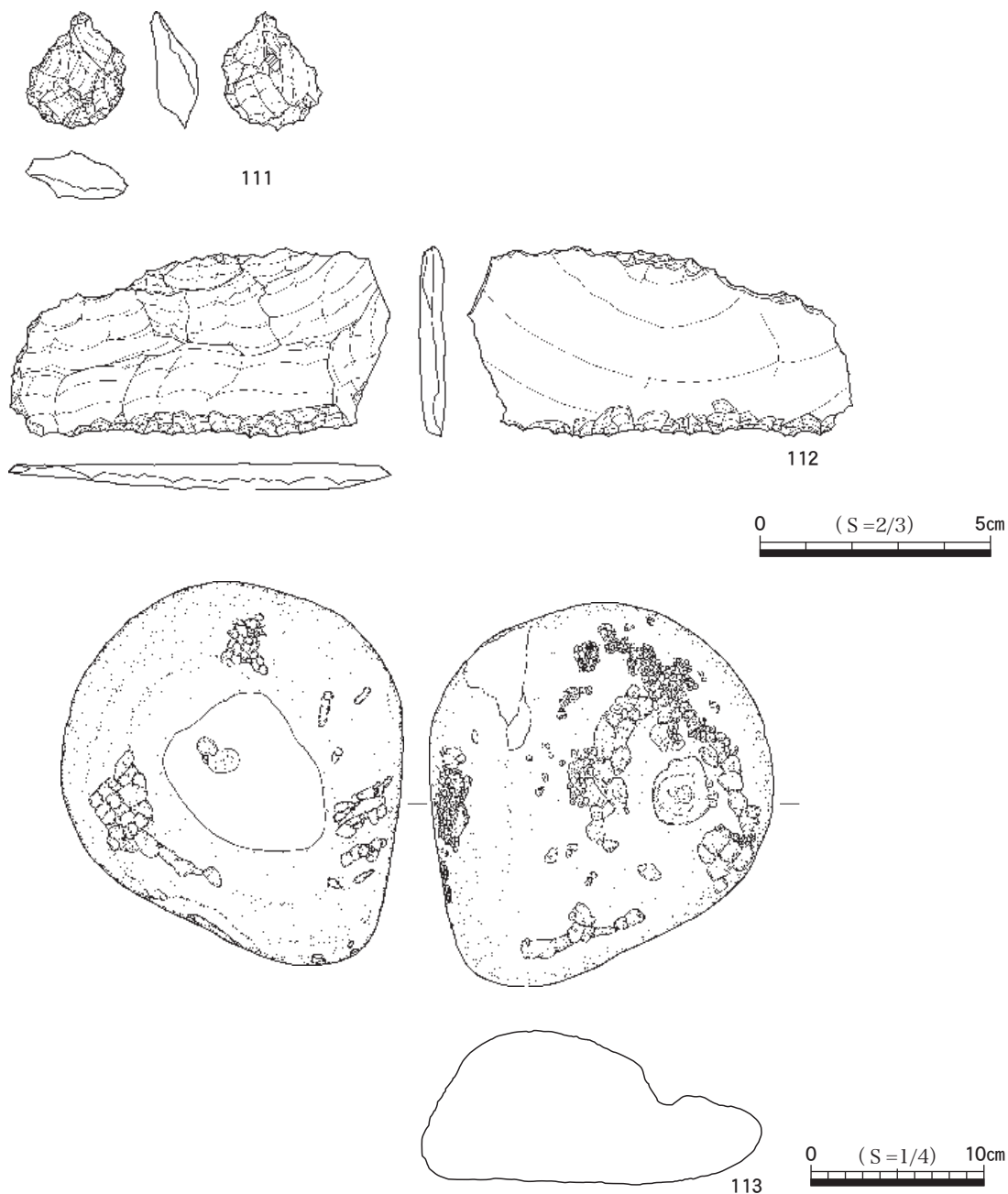




第129図 SH27出土遺物(3) (S=1/3)



第130図 SH27出土遺物(4) (S=1/3)



第 131 図 SH27 出土遺物 (5) (S = 2/3 (111、112)、S = 1/4 (113))

石器は 3 点を図示した。111 は姫島産黒曜石製の削器。やや分厚い幅広剥片を素材とし、裏面下半に平坦な加工を施して厚みを取り、下端に裏面から調整を施して刃部を形成している。刃部の表面には微細で顕著な、裏面には薄いやや大柄な使用痕が認められ、上端左側縁には手擦れ痕がみられる。112 は安山岩製の横刃削器。幅広剥片を素材とし、その末端に周縁の表・裏面に浅い加工を施して刃部を形成し、打面部にも若干の調整を入れて基部を作っている。刃部には若干の使用痕が、基部には手擦れ痕が認められ、右側縁上半は欠損している。113 は凹み石である。

### 掘立柱建物跡

縄文時代と思われる掘立柱建物跡を第5調査区で6棟検出している。鐘崎式最新相期の遺物が多数出土しているため、掘立柱建物は全て縄文時代後期中葉の所産と推定する。

#### SB12 (第132図)

第5調査区H-21で検出した柱穴6本で構成される1間×2間の掘立柱建物跡である。付近は全調査区の最高所であるが、表土を20cm除去すると地山に至るため、近代に地下げを伴う大規模な造成が行われたものと推測する。本来の柱穴上位は滅失していると思われるため、柱穴直径・深度は本来の形状を維持していない。身舎面積は約22㎡の大きさである。N40°E方向に軸線に向ける。掘方直径は0.76～1.04mあり、柱穴の深さは34～52cmを測る。柱痕跡の残る柱穴は3基認められ、直径21～67cmとバラつきがある。P1は柱痕跡直径が67cmと大型のため柱の抜き取り痕跡の可能性がある。直径約15cmの円礫が含まれていた。P1・2・6は柱掘方の掘削後、暗茶褐色砂質土を堆積充填させ柱を据える。柱を抜いた後は、黒褐色土などが堆積するが、P6には安山岩の拳大以上の大きさの石がみられる。

#### 遺物出土状況 (第132～133図)

土器は17点を図示した。出土土器は鐘崎式最新相に位置づけられる。492は小ぶりの橋状取手を付ける。493は退化した渦文が波頂部下に描かれ、498はS字状沈線文がある。499は、滑石を胎土とし円形の沈線内と上位の沈線間に刺突を施す。494・495は沈線を2条巡らせる。496は斜行沈線を描き、逆三角形の区画を作り出す。500～502は口縁部片。504～507は胴部。508は底部。

石器は2点を図示した。114は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部にはやや深い抉りが入る。先端を欠損している。115は台石である。周縁部を敲打して整形している。上面は平滑である。

#### SB13 (第134図)

第5調査区M-5で検出した柱穴6本で構成される1間×2間の掘立柱建物跡である。SB12同様近代の造成により柱穴上位は滅失していると思われる。N25°W方向に軸線に向ける。身舎面積約14.7㎡の大きさである。掘方は直径62～80cmあり、柱穴の深さ28～48cmを測る。柱痕跡の残る柱穴は4基認められ、直径21～40cmと幅がある。柱穴は土器片を含みやや粘質の黒褐色砂質土が最下層に堆積する(P1の4層、P2の3層、P3の5層)。この層は柱掘方の掘削後、柱を据える前に埋め置かれた層で、先述のSB12P3の3層や、後述するSB14柱穴下部にも同質の土が認められる。柱据え置き後は暗茶褐色砂質土が充填され柱を支えたものと推測する。

#### 出土遺物 (第134図)

土器は6点を図示した。509は鐘崎式の口縁部。510は口縁部。511・513は退化した渦巻文が描かれる。鐘崎式最新相の範疇であろう。514は底部である。

石器は2点を図示した。116は磨石。117は磨石兼敲石。いずれも石材は安山岩である

#### SB14 (第135図)

第5調査区M-9で検出した柱穴6本で構成される1間×2間の掘立柱建物跡である。N42°W方向に軸線に向ける。身舎面積約18㎡の大きさである。P1・2上面は、SH27により削られている。また、P2は試掘の際に誤って上面を削平し他の柱穴より規模が小さく見える。

柱穴掘方の直径は1.1～1.4m、深さ0.42～1.04mを測る。P3は最も規模の大きい柱穴で、直径1.45×1.20m、深度1.04mである。柱痕跡は全ての柱穴で確認している。柱痕跡の直径は29～44cmである。南西列の中央に位置するP2は、P1とP3を結ぶ線上からやや西よりに位置しやや胴膨れのような平面形態を呈する。最も規模の大きいP3の構築状況を詳述する。柱掘方を掘削後、底面と壁付近に土器片を含む黒褐色土（6層）を埋め置く。その上に柱を据え、2～5層の暗茶褐色土や暗黄褐色土を互層にして、よくしまるように入埋する。本建物が廃絶する際は、柱を抜き取ったものと思われるが、入埋された層に乱れがないため、柱痕跡と同程度の木材が据えられていたと考えられる。その後土器片を含む黒褐色砂質土（1層）が堆積する。単層であるため、短期間に人為的に入埋戻されたものと推測され、最後に直径30cmの安山岩の円礫を入埋込む。

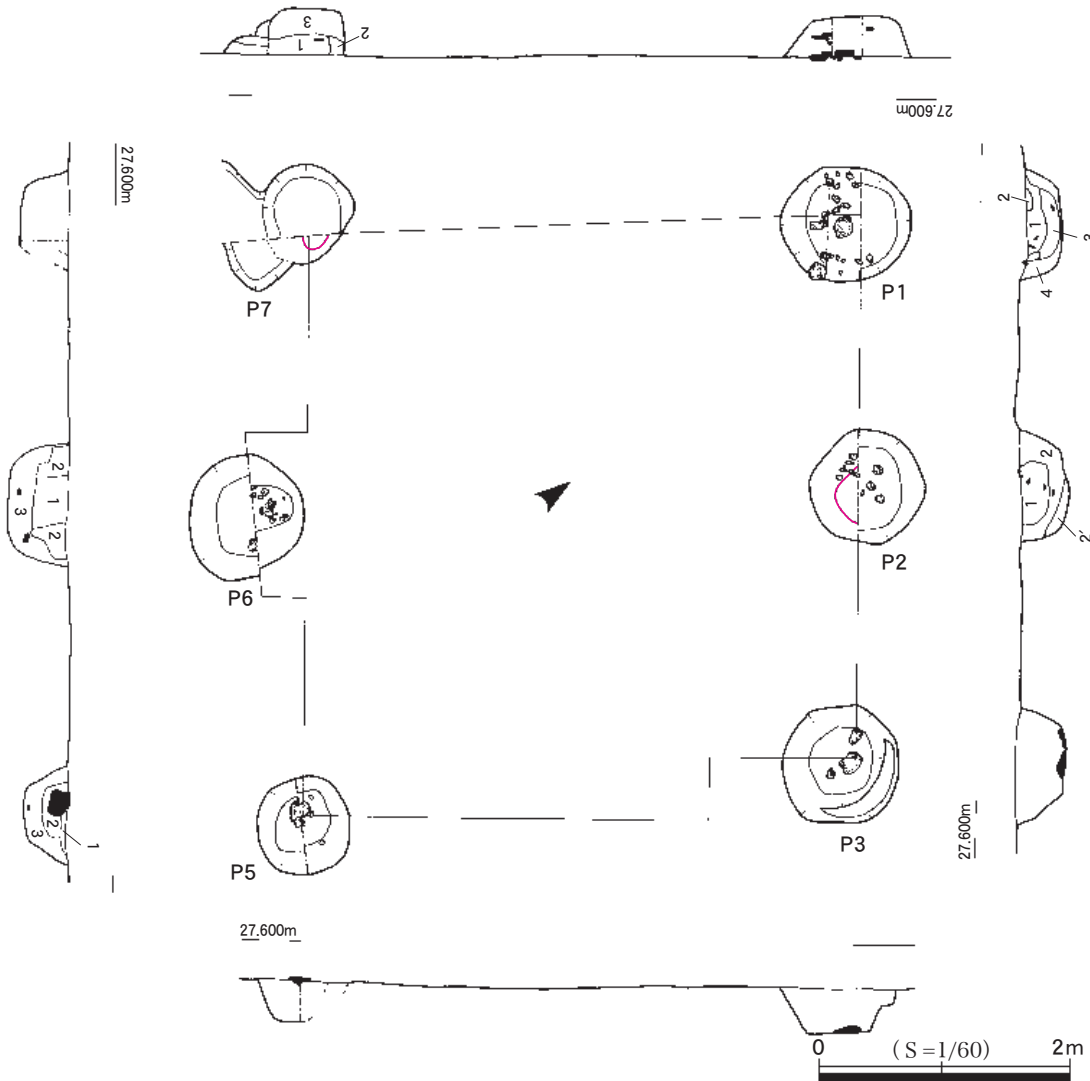
他の柱穴の土層堆積状況も円礫を入埋込む以外ほぼ同様であり、柱穴の掘削から柱の設置、柱の抜き取りに至る過程に共通性が認められる。P4は他の柱穴より浅いこと、最下層（3層）や柱掘方埋土から鐘崎式土器が比較的多く出土した点は特筆される。なお、P4掘方最下層・P5掘方上層と柱痕覆土出土炭化材の放射性炭素年代測定では、概ね3450年BP～3570年BPの年代値が得られている。P5柱痕出土カラスザンショウ種子は概ね3430年BPの年代値が示された。また、P3の柱痕・掘方埋土のリン・カルシウム分析では、骨・歯が検出され、輝度の高い箇所が柱痕埋土の方に多いという結果が出ている。発掘調査時も米粒大の大きさの白色の粒を確認しており、何かの骨であろうという感想を抱いていたが、自然科学分析によりそれらが骨類であることが明らかになった。

#### 出土遺物（第136～138図）

土器は37点を図示した。出土土器は鐘崎Ⅲ式に位置づけられる。

515～517は幅の狭い沈線を描き、退化した渦巻施文が施される。518はしっかりとした施文を描き、沈線の幅もやや広い。519は巻貝による縄文を施文する。524～532は口縁部片。平行沈線を2～3条描く。531は口唇部に列点を施す。536～545は無文土器の一群。543・544の胎土は滑石である。観察表では縄文中期の阿高系土器としたが、後述する福永氏による胎土分析成果によると、これらの遺物は胎土に滑石を含む在地産土器の可能性が高い。546～551は底部。平底や上げ底状のものがみられる。

石器は2点を図示した。118はP4から出土した姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、浅い抉りが入る。右脚を欠損している。119はP3柱痕跡で確認された安山岩の円礫である。被熱したのであろうか表面はボロボロと崩れやすい。石製品ではないが念のため図示した。



- (P1) 1. 暗茶褐色砂質土(しまりよく、1~2mm大炭粒、土器片含む)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりよく、黄褐色土多量に混入)  
 3. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強く、1cm大炭粒少量含む。やや粘性を帯びる)  
 4. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く、1mm大炭粒微量、黄褐色土多く混入)

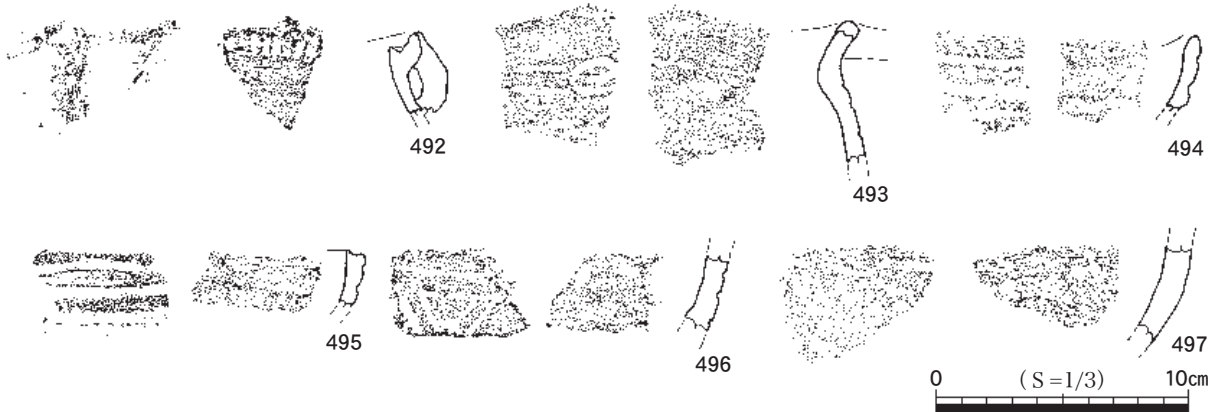
抜きとり痕?

- (P2) 1. 黒褐色砂質土(しまりよく、5mm大炭少量、1cm大黄褐色ブロック下位に少量、柱痕)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまり強く、1cm大炭少量、やや粘性帯びる。黄褐色土斑に入る)  
 2'. 暗茶褐色砂質土(2層より黄褐色土の混入が少ない)

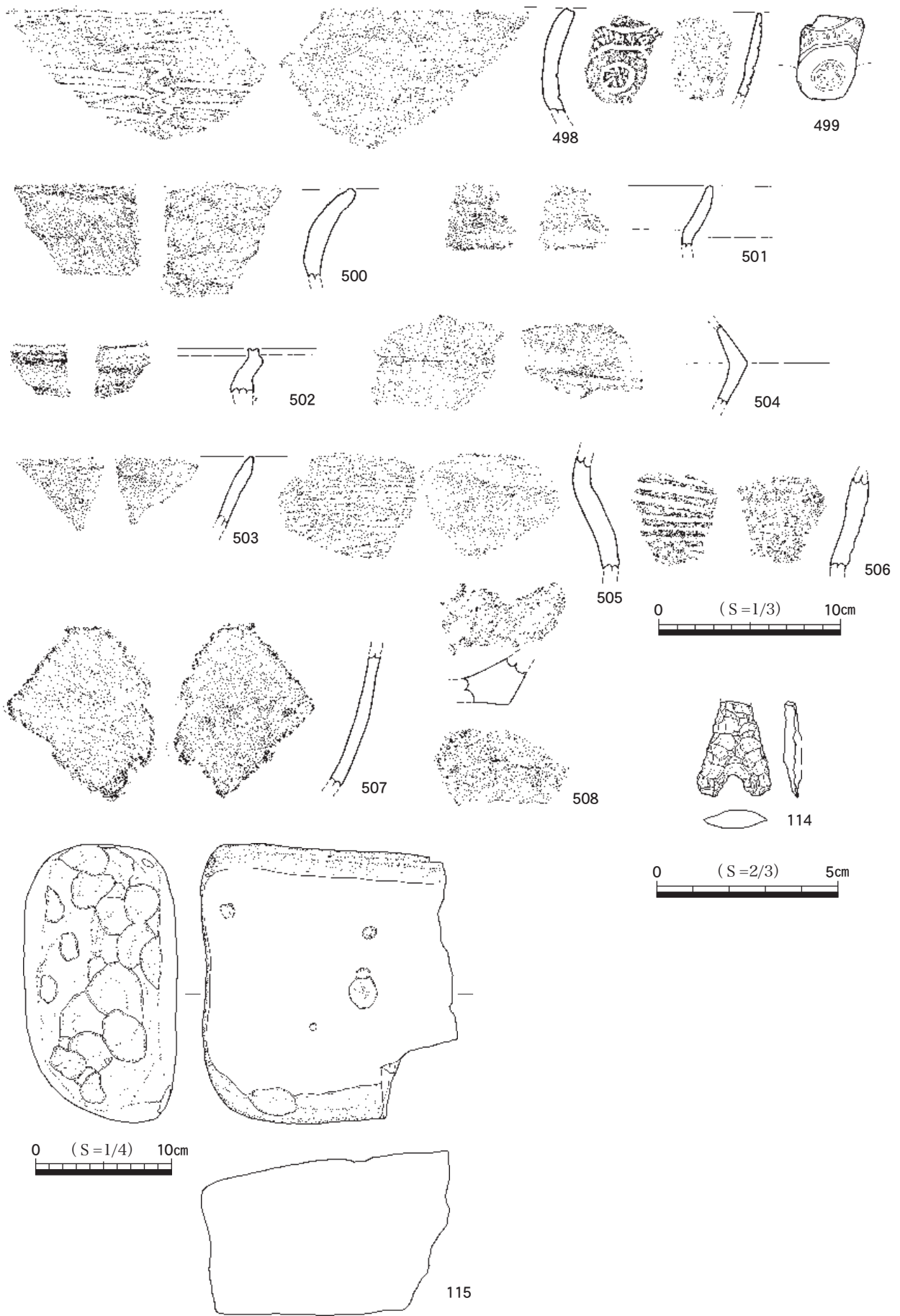
- (P5) 1. 暗灰褐色砂質土(しまりの弱い近世か近代の溝の層)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりはよい。1mm大炭粒微量、土器片少量、安山岩を入れ込む)  
 3. 黒褐色砂質土(しまりは非常に強い。2mm大炭粒微量、茶褐色粒、白色粒中量、粘性あり)

- (P6) 1. 暗茶褐色砂質土(しまりはよく、1mm大炭粒、上層に土器多く含む。柱痕)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまり強く、暗黄褐色土斑に入る。1~2mm大炭粒中量)  
 3. 黒褐色砂質土(しまり非常に強く、黄色粒、白色粒、褐色粒多量。拳大の砂量。やや粘質)

- (P7) 1. 暗褐色砂質土(しまりよく、1mm大炭少量。土器片あり。柱痕)  
 2. 暗褐色砂質土(しまりよく、黄色土多く入る)  
 3. 暗褐色砂質土(しまりは非常に強く2cm大炭粒中量、小礫少量、やや粘性あり。SB14 Pit3と同様)  
 ※風倒木痕を切る。

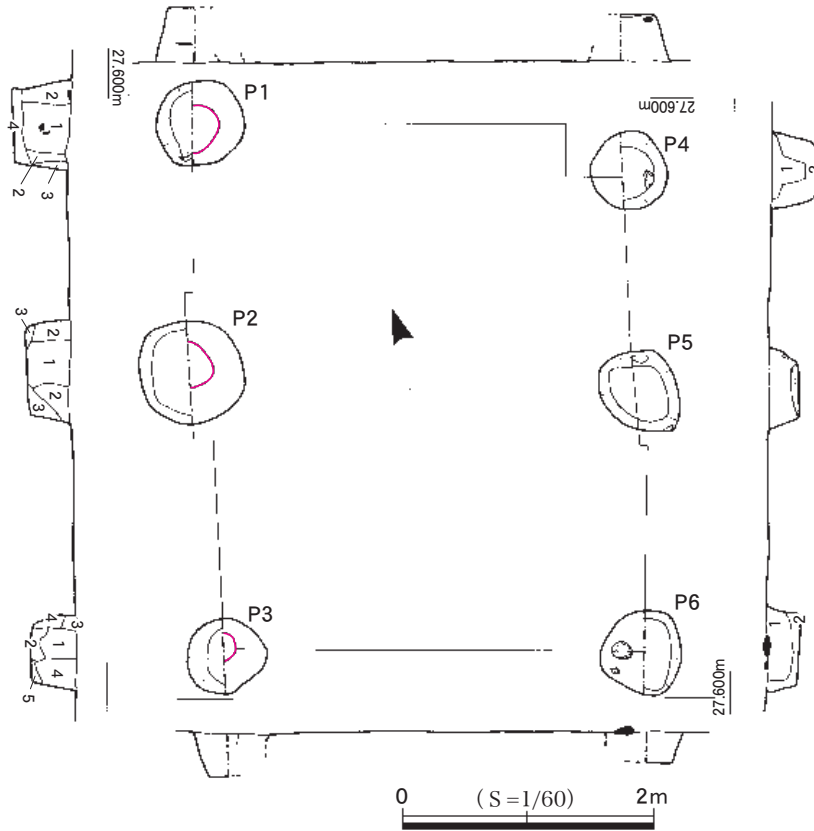


第132図 SB12平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (1) (S=1/3)

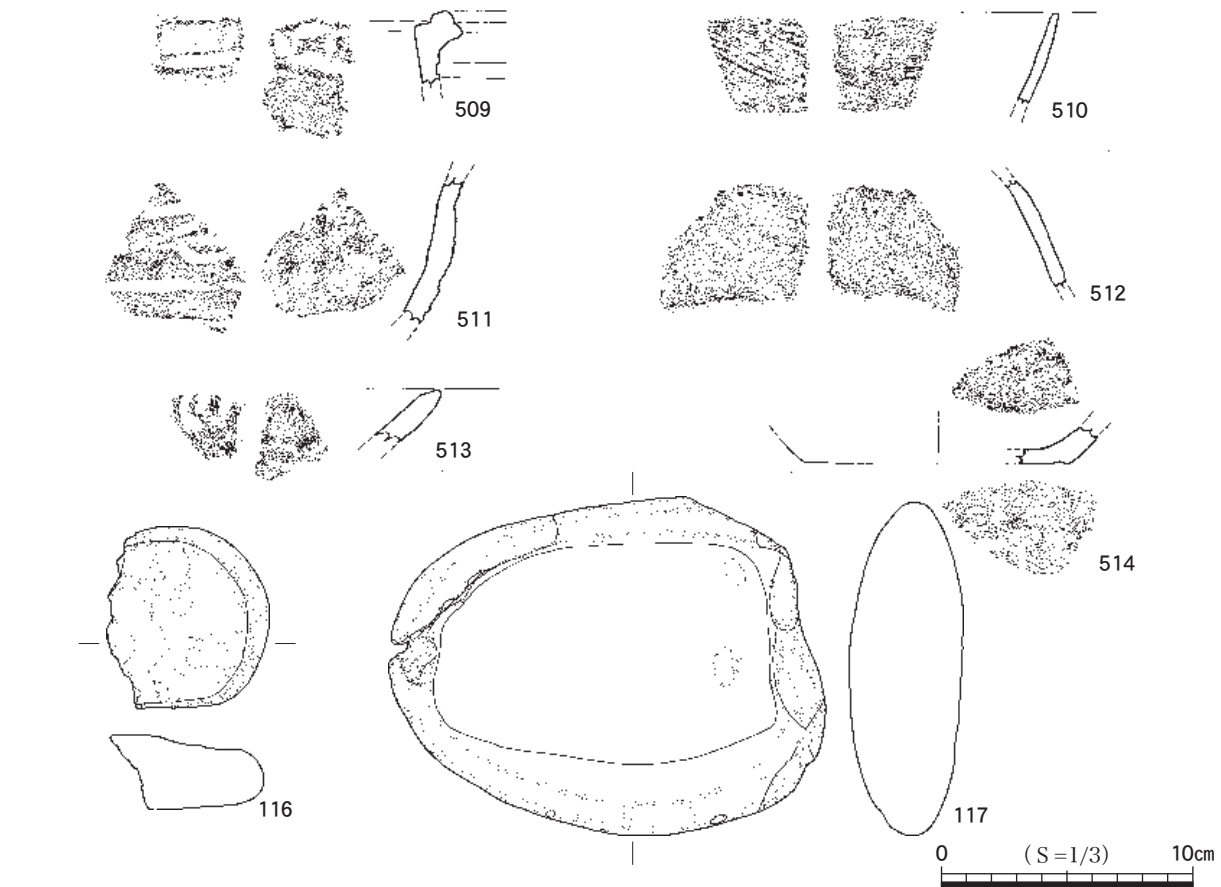


第133図 SB12出土遺物(2) (S=1/3 (498~508)、S=2/3 (114)、S=1/4 (115))

- P1
1. 黒褐色砂質土(しまりよく<5mm大炭粒少量、小石微量)
  2. 暗茶褐色砂質土(しまり強く5mm大炭粒少量、黄褐色フロッツ土5mm大多く混入)
  3. 暗黄褐色砂質土(しまり強い)
  4. 黒褐色砂質土(しまりは非常に強く、5mm大炭粒少量、暗黄褐色土帯状に混入、小礫少量)
- P2
1. 黒褐色砂質土(しまりよく<5mm大炭粒少量、骨粉中量含む、柱痕跡)
  2. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く2~3mm大炭粒少量、暗黄褐色フロッツ土中量含む)
  3. 黒褐色砂質土(しまりは強く、2mm大炭粒少量、土器片あり、やや粘性を帯びる)
- P3
1. 黒褐色砂質土(しまりよく2~3mm大炭粒少量、茶色粒中量を含む、柱痕跡)
  2. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く2~3mm大炭粒少量、やや粘性あり)
  3. 暗茶褐色砂質土(しまりは強い、1層よりやや明るい)
  4. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く、2~3mm大炭粒少量、暗黄褐色フロッツ土多く混入)
  5. 黒褐色砂質土(しまりは強く、やや粘性を帯びる)



- P4
1. 黒褐色砂質土(しまりよく、1~2mm大の炭、焼土粒少量、柱痕跡)
  2. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強く、黄褐色フロッツ土少量、黄褐色土帯状に多く混入、やや粘性を帯びる)
- P6
1. 黒褐色砂質土(しまりよく1~2cm大炭粒白色粒中量)
  2. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強く、黄褐色フロッツ土少量、小石少量、やや粘性を帯びる)

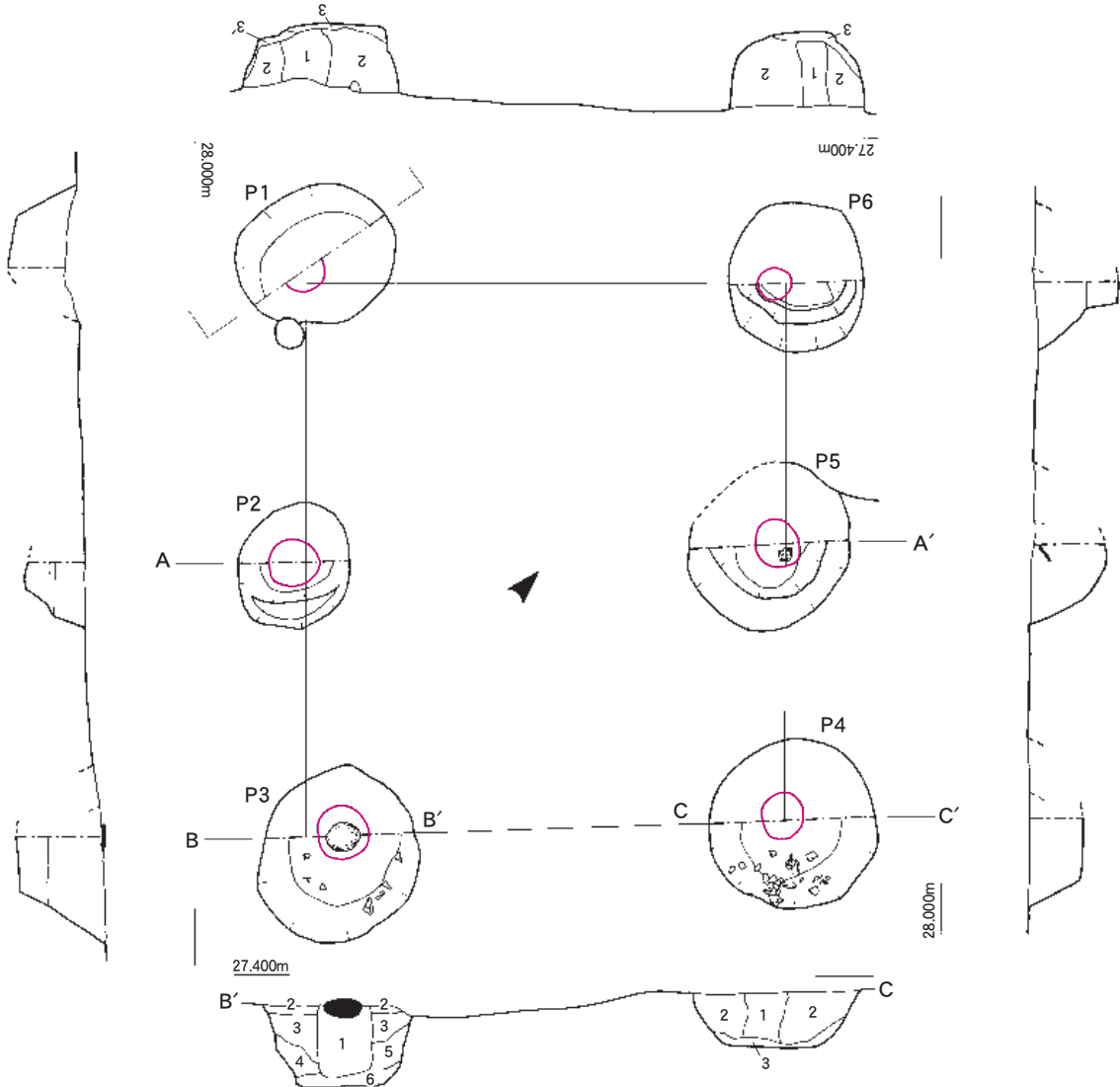


第134図 SB13平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



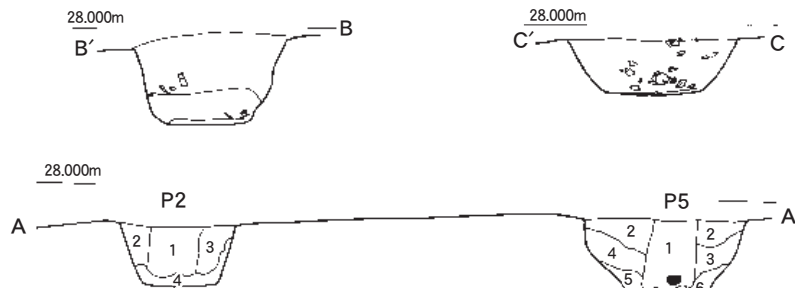
- P1  
 1. 黒褐色砂質土(しまりよく、1mm大炭粒少量、土器粒中量、柱痕跡)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強く、黄褐色ブロックが斑に入り、小礫少量)  
 3. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強く、1mm大炭粒微量、やや粘性を帯びる)  
 3. 暗茶褐色砂質土(3層よりやや明るい、3層とほぼ同じ層、1mm大炭粒、炭粒含む。やや粘性を帯びる)

- P6  
 1. 黒褐色砂質土(しまりよく、1cm大炭粒中量、茶褐色ブロック(1cm大)中量含む、柱痕跡)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く、黄褐色ブロックが斑に入り、小礫少量含む、やや粘性)  
 3. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強く、5mm大炭粒少量、黄褐色ブロック(5cm大)少量含む。やや粘性)



- P3  
 1. 黒褐色砂質土(しまりよく1~2cm大炭粒、焼土粒多量土器片含む。柱痕跡)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりよく茶褐色ブロック多量に混入、1cm大炭粒中量、土器片含む)  
 3. 暗茶褐色砂質土(しまりよく黄色ブロックに混入)  
 4. 暗茶褐色砂質土(3層とほぼ同じだが黄褐色ブロックが多く入る。やや粘性を帯びる)  
 5. 暗黄褐色砂質土(しまりは非常に強く暗茶褐色土が斑に入る。やや粘性を帯びる)  
 6. 黒褐色砂質土(しまりは非常に強く、5mm大炭粒、1cm大焼土ブロック少量入る)

- P4  
 1. 黒褐色砂質土(しまりよく5cm大炭粒多量、土器片少量、1~2mm大骨粉微量。柱痕跡)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く1~2cm大炭粒中量、黄褐色ブロック多量混入)  
 3. 黒褐色砂質土(しまりは非常に強く、鐘崎式を多く含む。1cm大炭粒少量含む)



- P2  
 1. 黒褐色土(褐色土ブロックを多く、焼土炭化物小礫黄褐色土ブロック若干含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。柱痕跡)  
 2. 茶褐色土(黒色土ブロックを多く、白色粒子小礫を若干含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。掘り方)  
 3. 茶褐色土(黒色土ブロックを多く、小礫をやや多く、焼土炭化物を若干含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。掘り方)  
 4. 暗茶褐色土(黄褐色土ブロックを多く、小礫、黒褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく粘性ややあり)

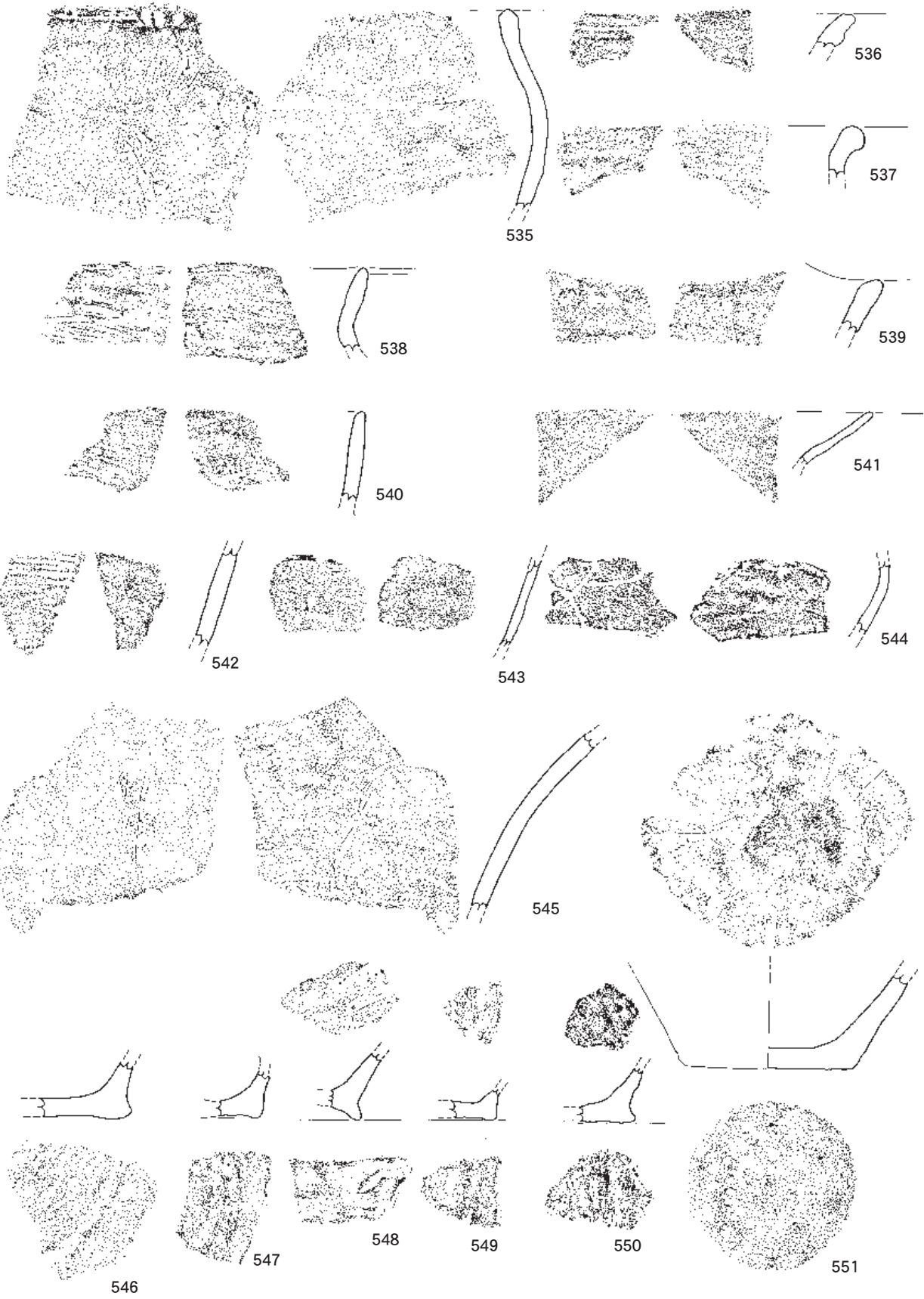
- P5  
 1. 黒褐色砂質土(しまりよく2~3cm大1cm大炭粒多量。石上位に焼土塊あり。焼土1cm大中量、白色粒あり(骨粉?)柱痕跡)  
 2. 暗茶褐色砂質土(しまりよく、5mm大炭粒少量、土器片含む。白色粒少量)  
 3. 暗茶褐色砂質土(しまり強く黄褐色ブロック多量に入り黄味がある)  
 4. 暗茶褐色砂質土(3層より黄褐色ブロック少ない。5mm大炭粒少量)  
 5. 暗茶褐色砂質土(しまりは非常に強い。黄褐色土多量に混入)  
 6. 黒褐色砂質土(しまりは非常に強い。5mm大炭粒少量)  
 7. 暗黄褐色砂質土(しまり強い。6層内ブロック土)



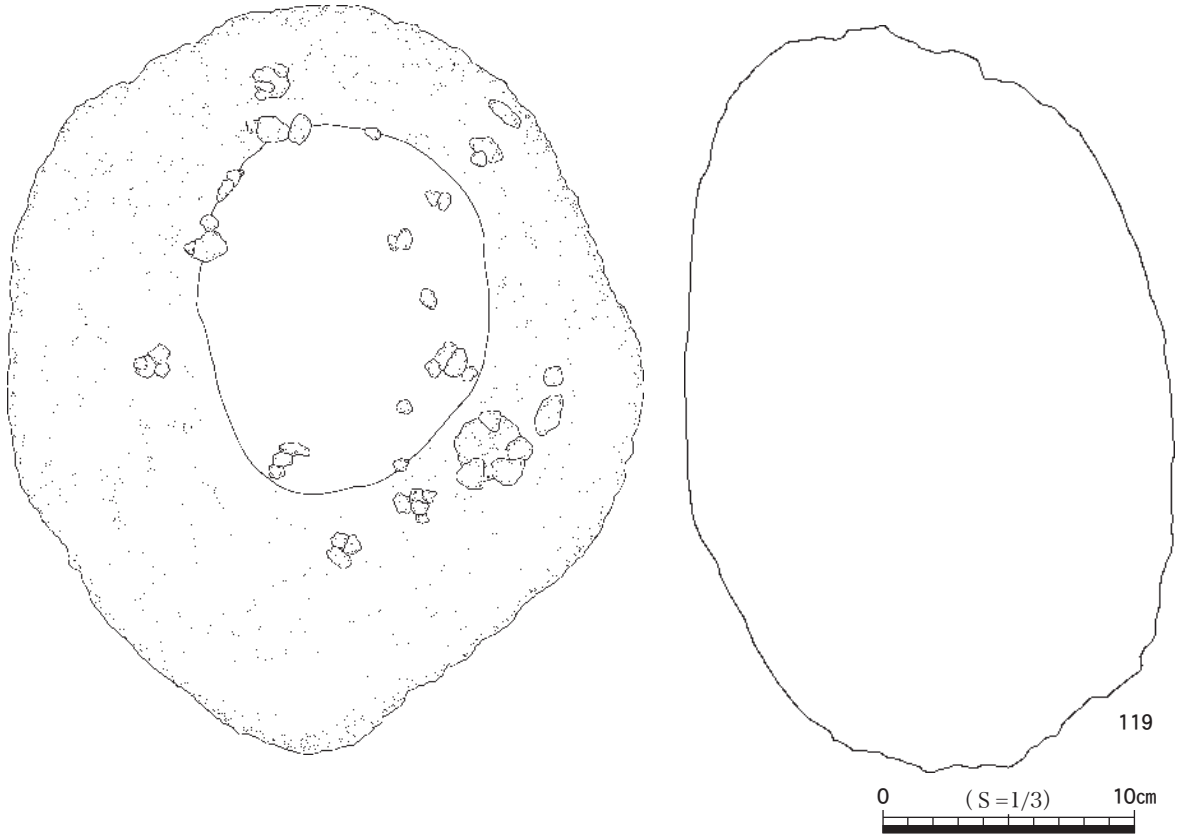
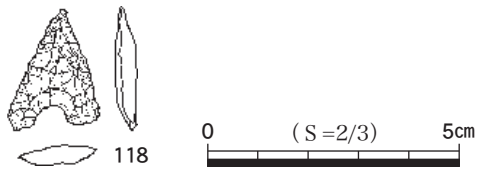
第135図 SB14平・断面・土層図 (S=1/60)



第136图 SB14出土遺物(1) (S=1/3)



第137图 SB14出土遺物(2) (S=1/3)



第138図 SB14出土遺物(3) (S=1/3 (119)、S=2/3 (118))

#### SB21 (第139図)

第5調査区N-8で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。SB14の東側に位置し近接する。N20°W方向に軸線に向ける。身舎面積約12.6㎡の大きさである。保存措置の関係で本住居跡はP3・4の半裁に留めている。柱穴掘方の直径は60～86cm、深さ32～50cmである。柱痕跡は全ての柱穴で確認した。埋土は最下層に暗灰褐色粘質土が堆積し、その上に柱を据え置いた様子である。なお、P3柱痕覆土・掘方出土炭化材の放射性炭素年代測定では、概ね3530年BP～3560年BPの年代値が、P4柱痕出土カラスザンショウの年代測定値は概ね3520年BPの年代値であった。P4柱痕出土コムギは15～17世紀の年代範囲であるため後世の混入と考える。

#### 出土遺物 (第139図)

土器は8点を図示した。552・554は退化した渦巻施文がみられる。553・556は口縁部下に沈線を施す。鐘崎Ⅲ式土器に位置づけられる。557は巻貝による磨消縄文がみられる。

#### SB24 (第140図)

第5調査区I-20で検出した掘立柱建物跡である。この付近も近代の地下げが著しく、残存状況は不良である。特に南辺の東端は本来柱穴が存在した可能性があるが確認できていない。仮に存在した場合は、1間×2間の構造となる。N100°E方向に軸線に向ける。身舎面積約10.4㎡の大きさである。保存措置の関係で本住居跡もすべての柱穴を完掘していない。柱穴掘方の直径は54～78cm、深さ12～18cmである。P1で柱の抜き取り痕、P2で直径19cmの柱痕状の痕跡を確認した。P2の平面プランは歪であることから旧状を保持していない可能性がある。なお、P1・2の柱痕・掘方出土炭化材の放射性炭素年代測定では、概ね3630年BPの年代値が得られ、P1掘方出土カラスザンショウ種子は概ね3500年BPの年代値が得られている。稲もP1掘方から出土しているが、奈良～平安時代中期頃の年代値が示されており、後世の混入と考える。

#### 出土遺物 (第140図)

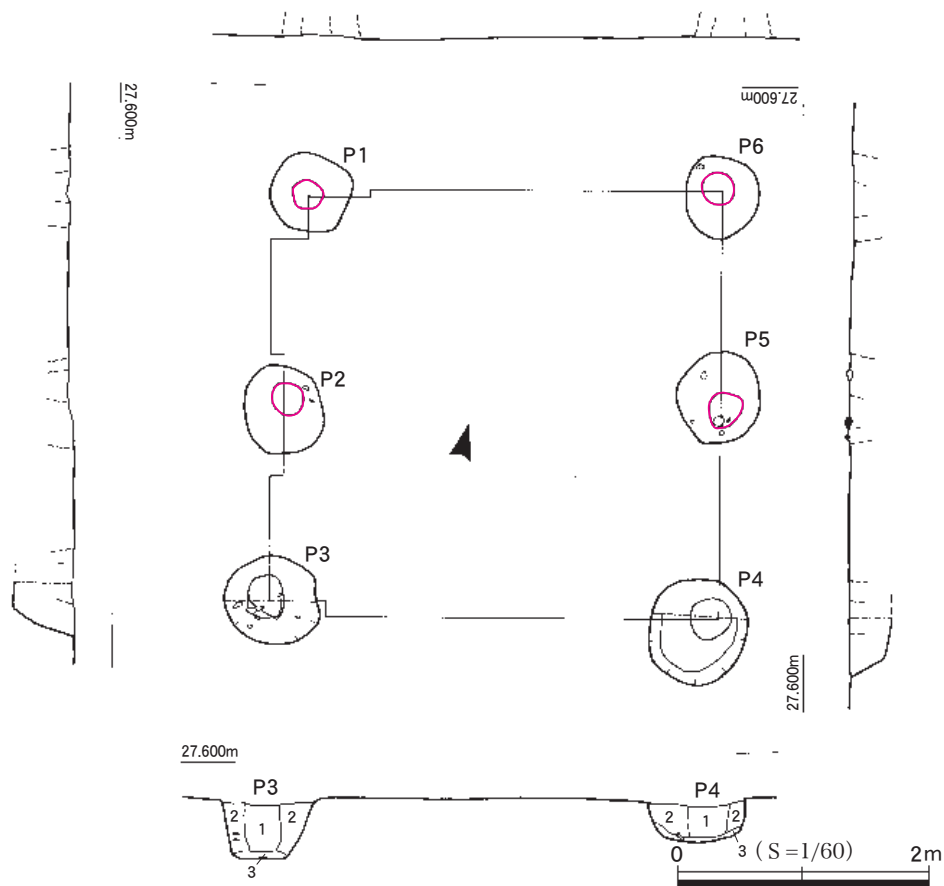
土器は2点を図示した。560・561は縄文土器で、560は薄く貝殻条痕がみえる。

#### SB25 (第141図)

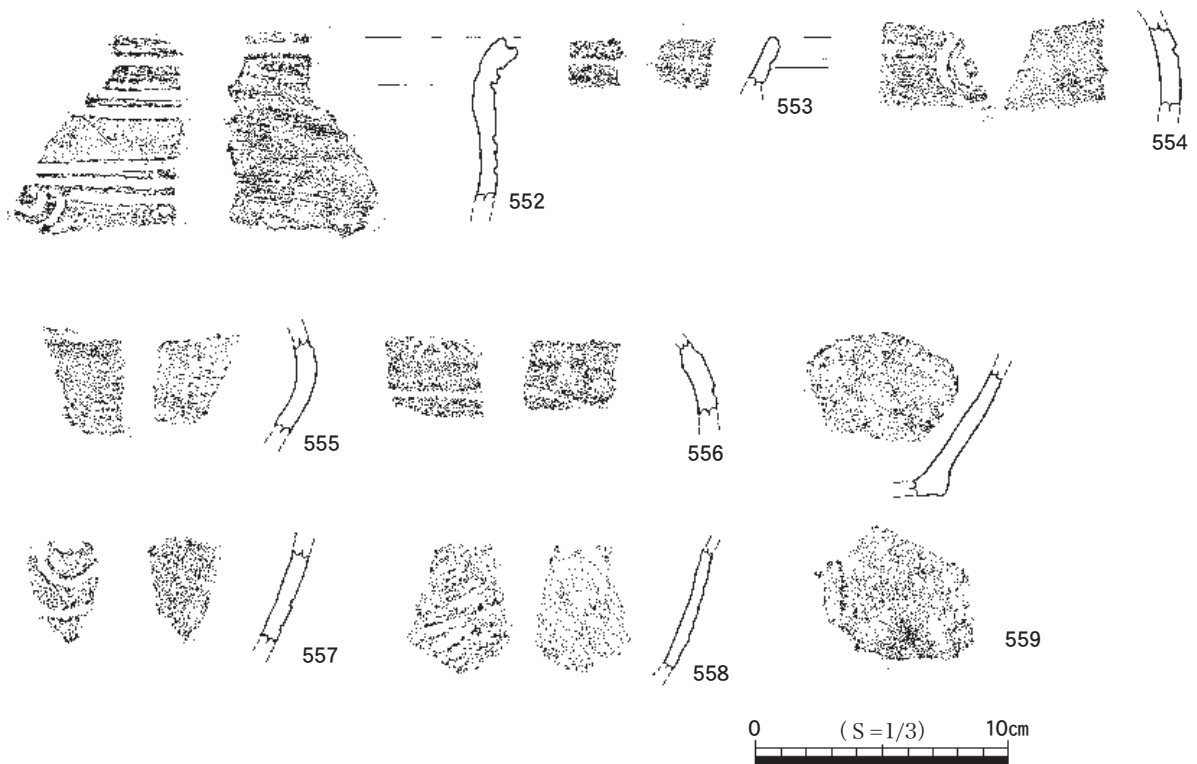
第5調査区Q-19で検出した掘立柱建物跡である。西辺は2間であるが、東辺は1間の構造である。東辺のP4・5の間で精査を試みたが柱穴は確認できなかった。本遺構も保護措置の関係から全て完掘せず、P5の半裁に留めている。身舎面積約14.8㎡の大きさである。柱掘方の直径は58～78cm、深さ36cmである。柱痕跡は全ての柱穴で確認できている。直径20～27cmを測る。P5の埋土は最下層に粘性を帯びる暗茶褐色砂質土が堆積している。土層図では2層に掘り柱が据えられたようにみえるが、本来は柱が他の建物跡と同様に最下層(3層)の上面に接していたものと考えられる。1層下の2層は柱を抜いた際に2層が崩落した際の痕跡と推測する。P5柱痕・掘方出土炭化材の放射性炭素年代測定では、2270年BPの年代値が得られているが、出土遺物から縄文時代後期中葉の遺構と考える。

#### 出土遺物 (第141図)

土器は4点を図示した。562・564は口縁部である。562は端部に浅い沈線を巡らせる。564は鐘崎式土器で、沈線を口縁部に施す。565はP5掘方から出土した底部片である。

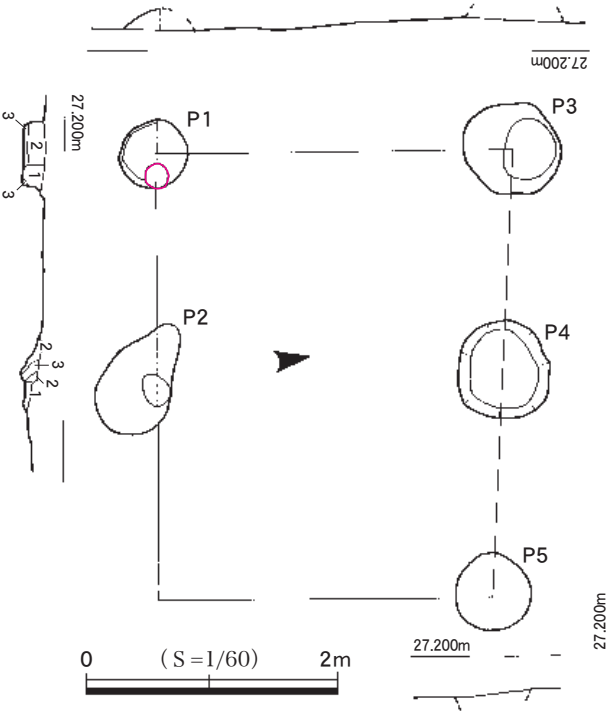


1. 黒褐色砂質土(しまりよく、全体的に1~5mm大炭片中量。柱痕跡)
2. 暗茶褐色砂質土(しまりは強く、黄褐色ブロックが斑に入り黄味がかかる。異物少量内包。礫微量。やや粘性あり)
3. 暗灰褐色粘土質(しまり強い。2~3mm大炭粒微量。粘性強い)

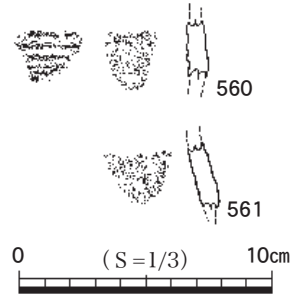


第139図 SB21平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

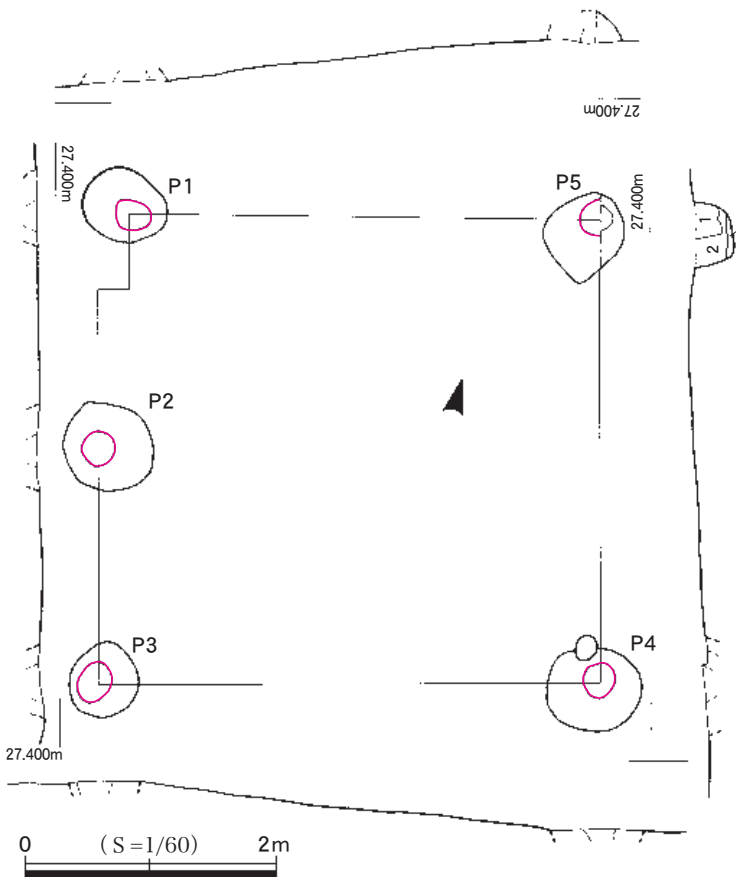
1. 暗茶褐色砂質土(しまり強<、1mm大炭粒微量、小石少量、柱痕跡)
2. 暗茶褐色砂質土(1層より明ら、1mm大炭粒少量、小石少量)
3. 黒褐色(しまり強<、1mm大炭粒中量、小石微量)



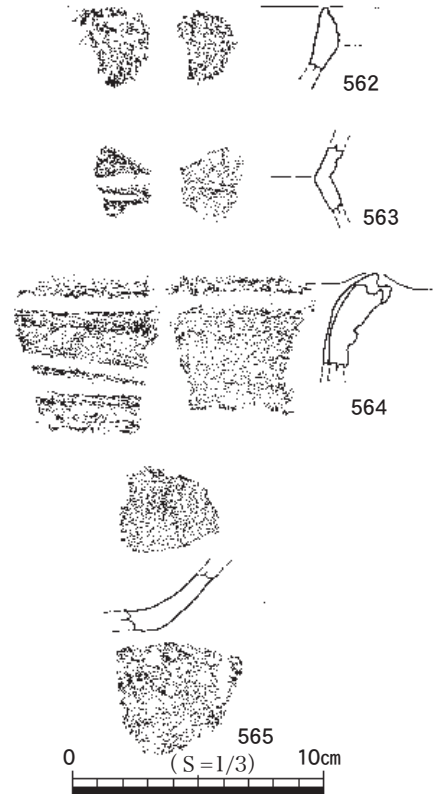
1. 暗茶褐色砂質土(しまり強<2~3mm大炭粒少量、茶褐色ブロック中量、小礫下部に微量、柱痕跡は少ない)
2. 暗茶褐色砂質土(1層より明ら、しまり非常に強い、1mm大炭粒微量、5cm大礫少量)



第140図 SB24平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



1. 黒褐色砂質土(しまり強<焼土粒少量、1~2mm大炭粒微量、柱痕跡)
2. 暗茶褐色(しまりは非常に強<焼土微量、小礫少量)
3. 暗茶褐色(2層より粘性を帯びる)



第141図 SB25平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

## 土 坑・地層横転（風倒木痕）

### 3次SK1（第142図）

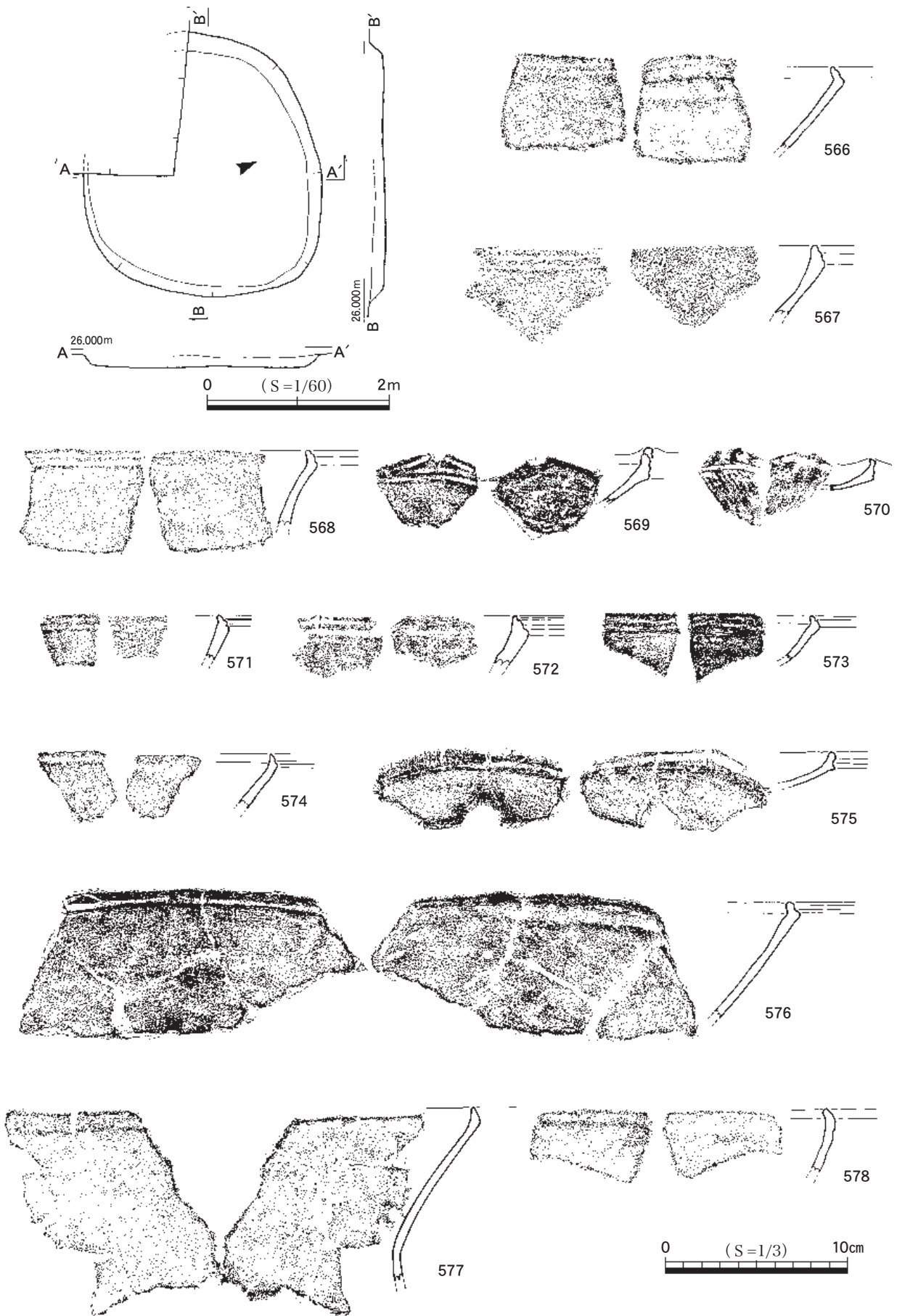
3次調査区で検出した楕円形遺構である。古墳時代の住居跡に切られている。最大長2.9m、最大幅2.5m、深さ14cmである。壁面の立ち上がりはやや急である。太郎迫式期の遺物が多数出土しており、本遺構は縄文時代後期後葉の所産と推定する。

### 出土遺物（第142～148図）

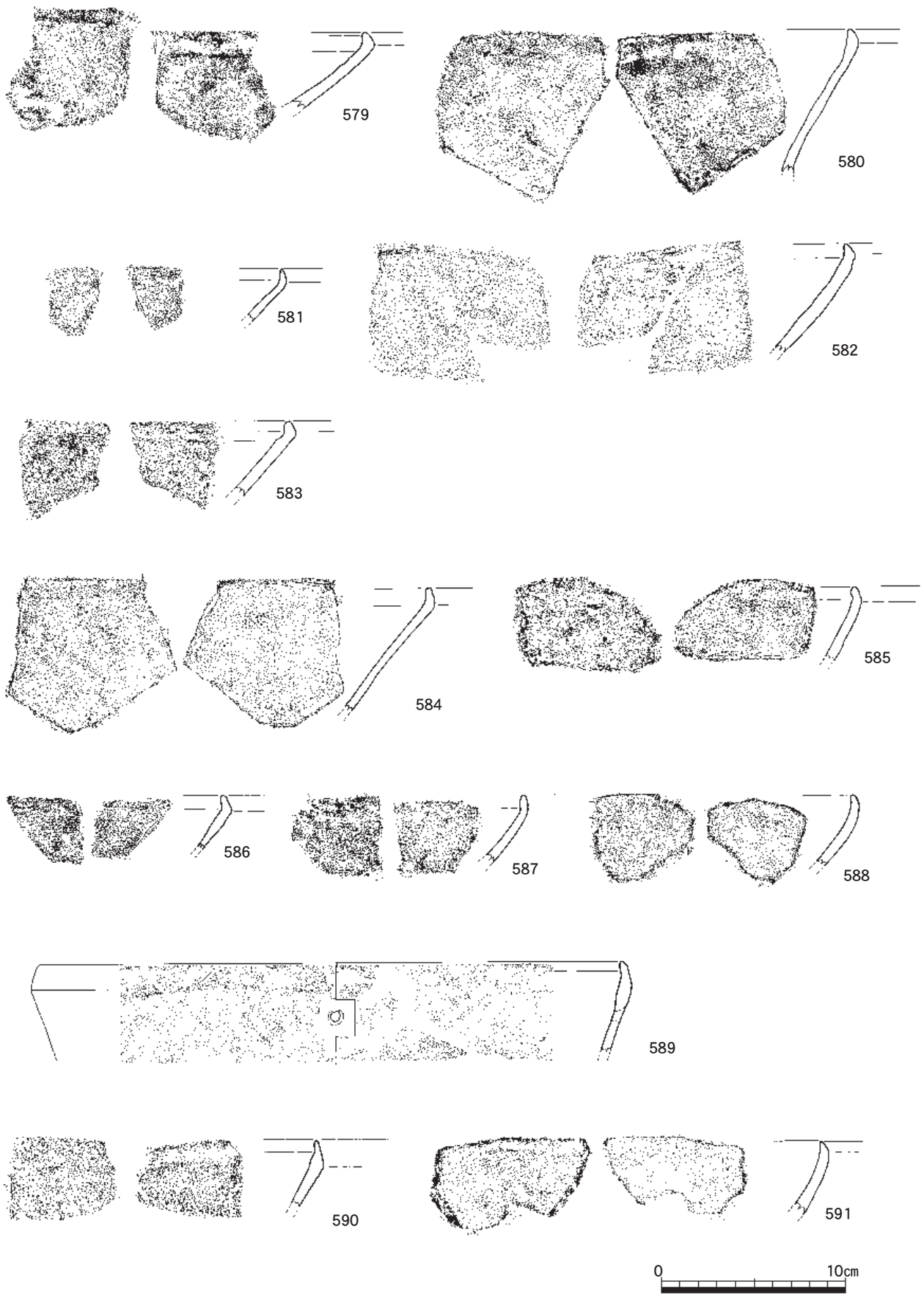
土器は52点を図示した。566～574は口縁部に2～3条の沈線を巡らせる太郎迫式の口縁部。575・576は胴部から口縁端部へ立ち上がる屈曲部が突帯状に小さく張り出す。三万田式に近い時期の所産であろう。<sup>(1)</sup> 577～591は短く内湾する口縁部が特徴である。太郎迫式の系統であろう。<sup>(1)</sup> 592～597は直立や外傾するやや長い口縁部が特徴。598・599は外傾し内向きに反る口縁部をもつ。古墳時代初頭の所産か。600～604も口縁部片であるが、時期を特定できていない。605・606・609は太郎迫式の胴部片。610は中央に穿孔が認められるメンコ状遺物。611～617は底部。径が小さく上げ底状を呈すものが多い。

石器は19点を図示した。120～125は姫島産黒曜石製の石鏃。120は中央部に階段状のコブがあり、先端部は欠損する。周縁部を細かく調整し抉りは深い。121は両面を押圧剥離し、脚部を欠損する。基部の抉りは深い。122は押圧剥離後、細かい剥離を周りに施す。先端部欠損。123はいわゆる飛行機鏃で、周縁部を押圧剥離により整形し、主要剥離面は裏面にある。脚部を欠損する。124は周縁部を押圧剥離し、表面には除去できなかったコブが残る。125は裏面中央に主要剥離面が残る。裏面は右側を調整剥離後、左側へ調整を施している。先端はどちらも裏面方向から折られている。126～130はサヌカイト製。126は搔器。表面の下部末端部に細かい剥離によって、刃部が形成されている。左側面には節理がみられる。127～130は剥片。裏面は上部が左右斜め方向から打撃を加え、剥離がなされており表面も裏面と同一方向による剥離がされている。裏面は階段状剥離が顕著である。128は表面上部に階段状の剥離が顕著にみられ、裏面はポジティブな面がみられる。129は表面の上部には細かい剥離がみられ、右側縁部は鋸歯縁状になっている。また、裏面はポジティブな面がある。130は刃部と両側縁に細かい剥離がみられる。左下半部は階段状の剥離が顕著にみられる。131は姫島産黒曜石製の石核。上面は右側面から打撃を加えている。また裏面は上面方向からの打撃によって、作業面が形成されている。右面は、右方向から打撃して剥離を行い、その後上方から剥離して、その面を切っている。下面は右、左、右方向からの剥離がされている。表面の最終剥離面の打点部に頭部調整がみられる。132は泥岩の石包丁か。両面とも上下部に剥離痕があり、薄く研磨している。周縁部に小さな装着痕らしきものもみられる。133～138は打製石斧。133は安山岩製で基部が表面方向から折れて欠損している。表面右側から大きな剥離を施し、側縁に小さな剥離で調整している。磨耗・風化が著しい。刃部に使用痕あり。134は角閃石安山岩製。表裏面とも大きな主要剥離面があり、表面右側縁部は中程度の階段状剥離と小さな剥離が周囲に施されている。裏面は右側縁とも中程度の階段状の剥離面がある。刃部は微細な剥離面があり、使用された際にできたものと考えられる。基部破損。135はサヌカイト製の未成品。表面は上方からの大きな剥離後、右・左側縁から階段状の剥離が施される。裏面は左下方から上に向けて大きな剥離後、右側縁から中程度の剥離を施している。136は緑泥片岩製。裏面は主要剥離面で、刃部は中程度の剥離をしており、末端がステップ状になっている。表面は中程度の剥離を側面からされており、刃部が小さな剥離で終わっている。左側面は節理面がみられ、それを中程度の剥離が切っている。基部破損。137はサヌカ

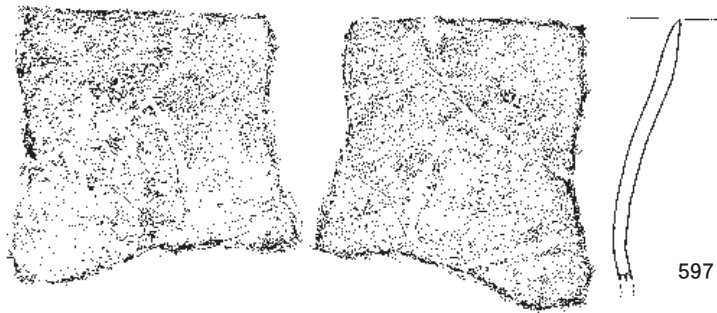
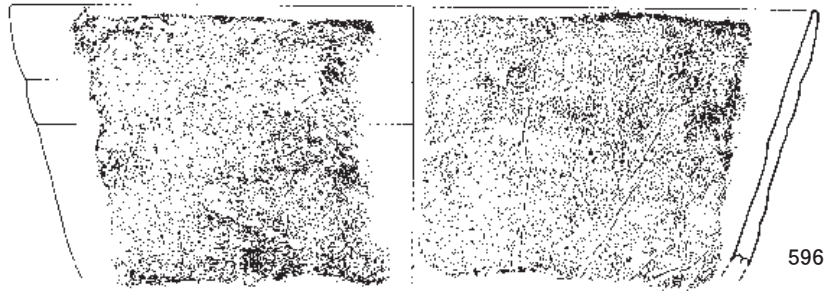
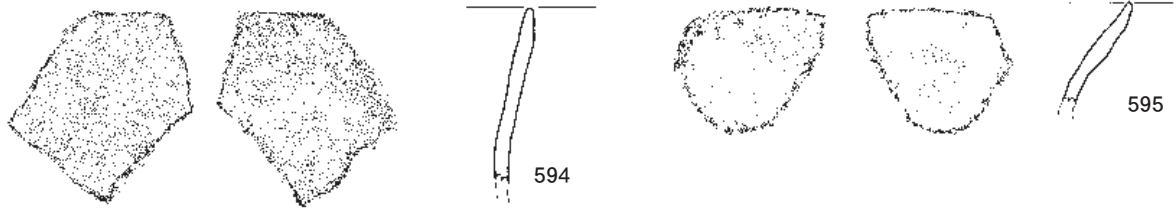
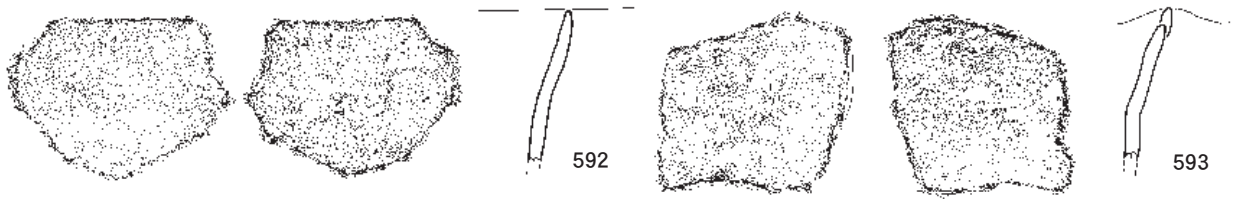




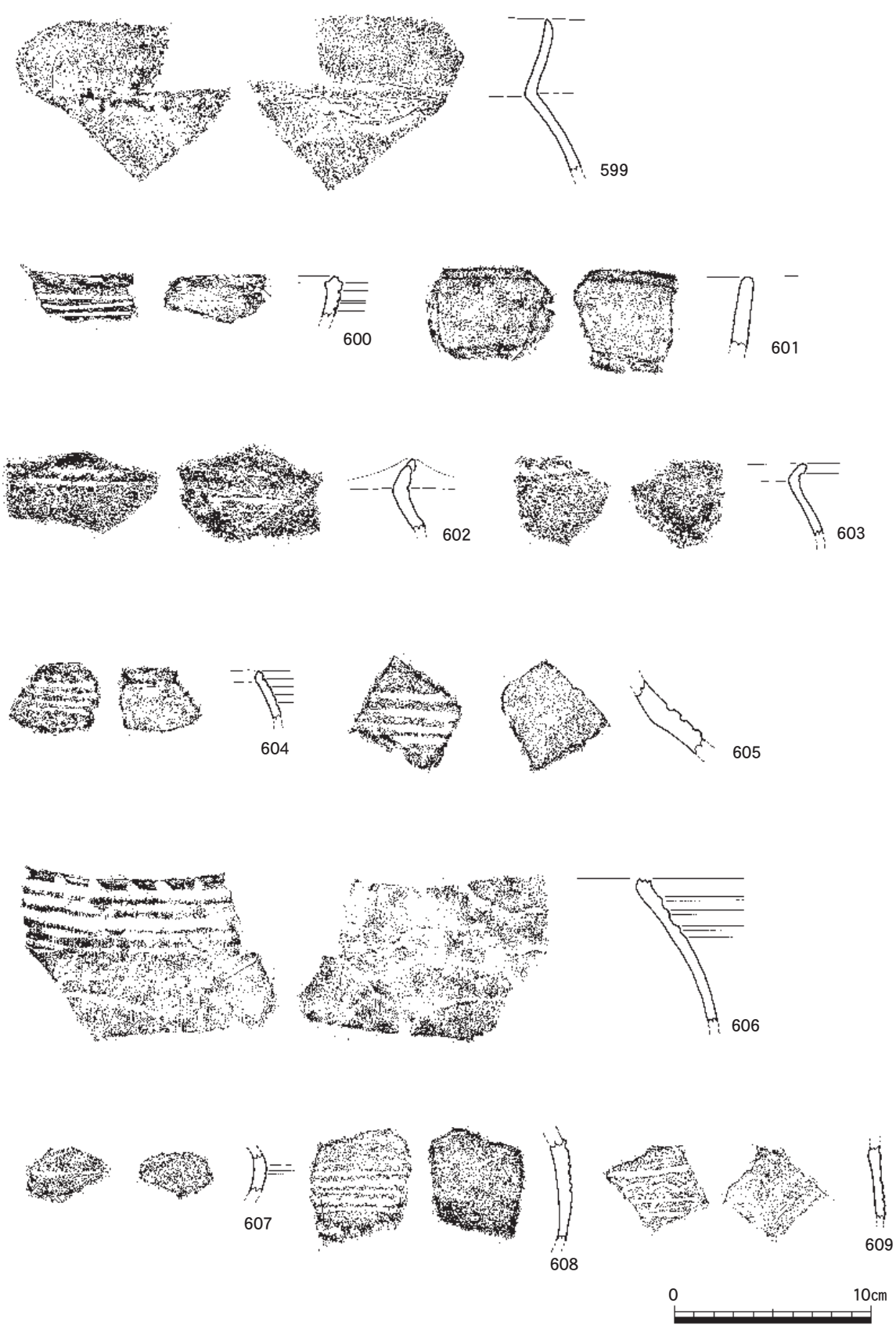
第142図 3次SK1平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (1) (S=1/3)



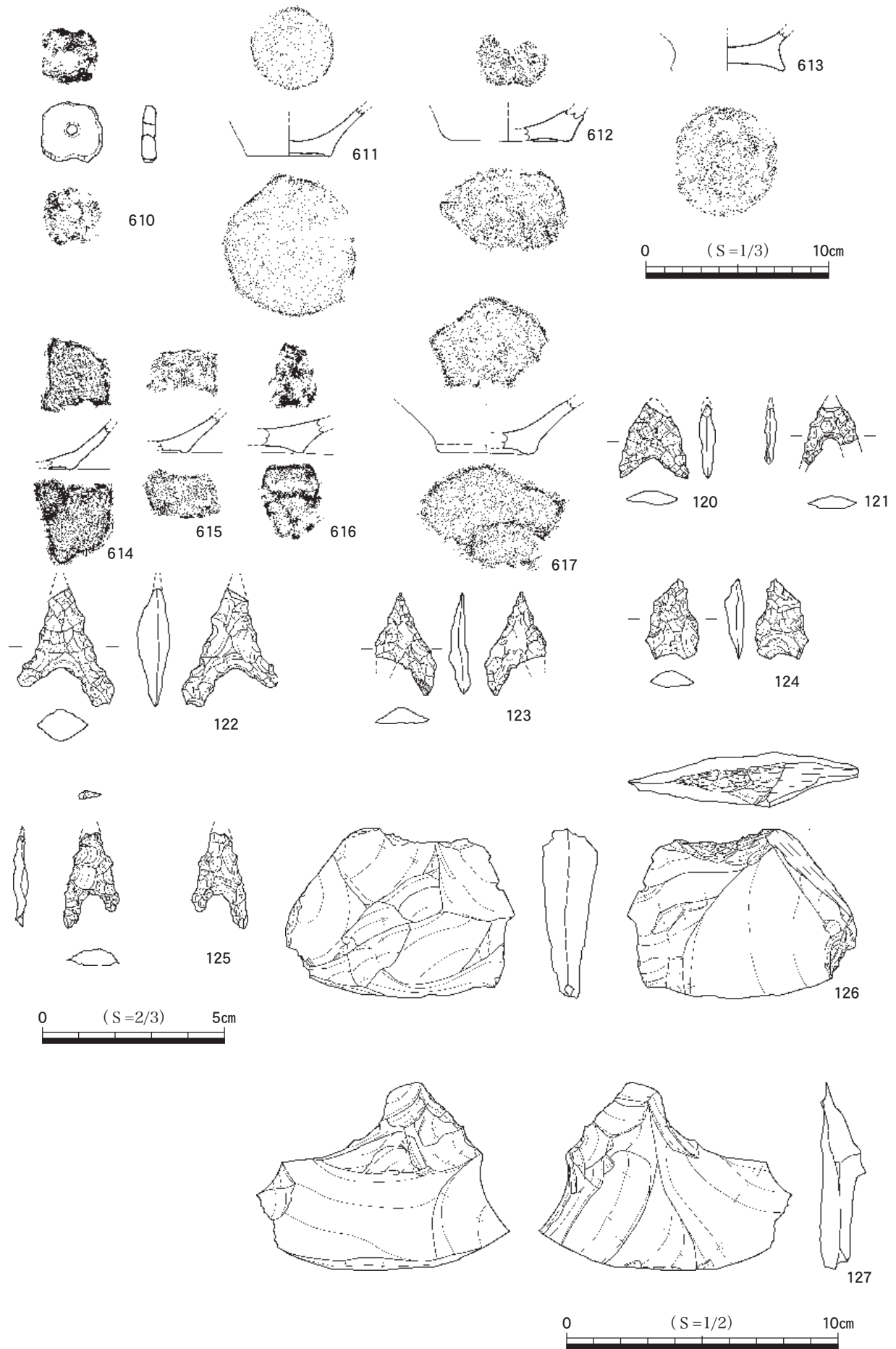
第143図 3次SK1出土遺物(2) (S=1/3)



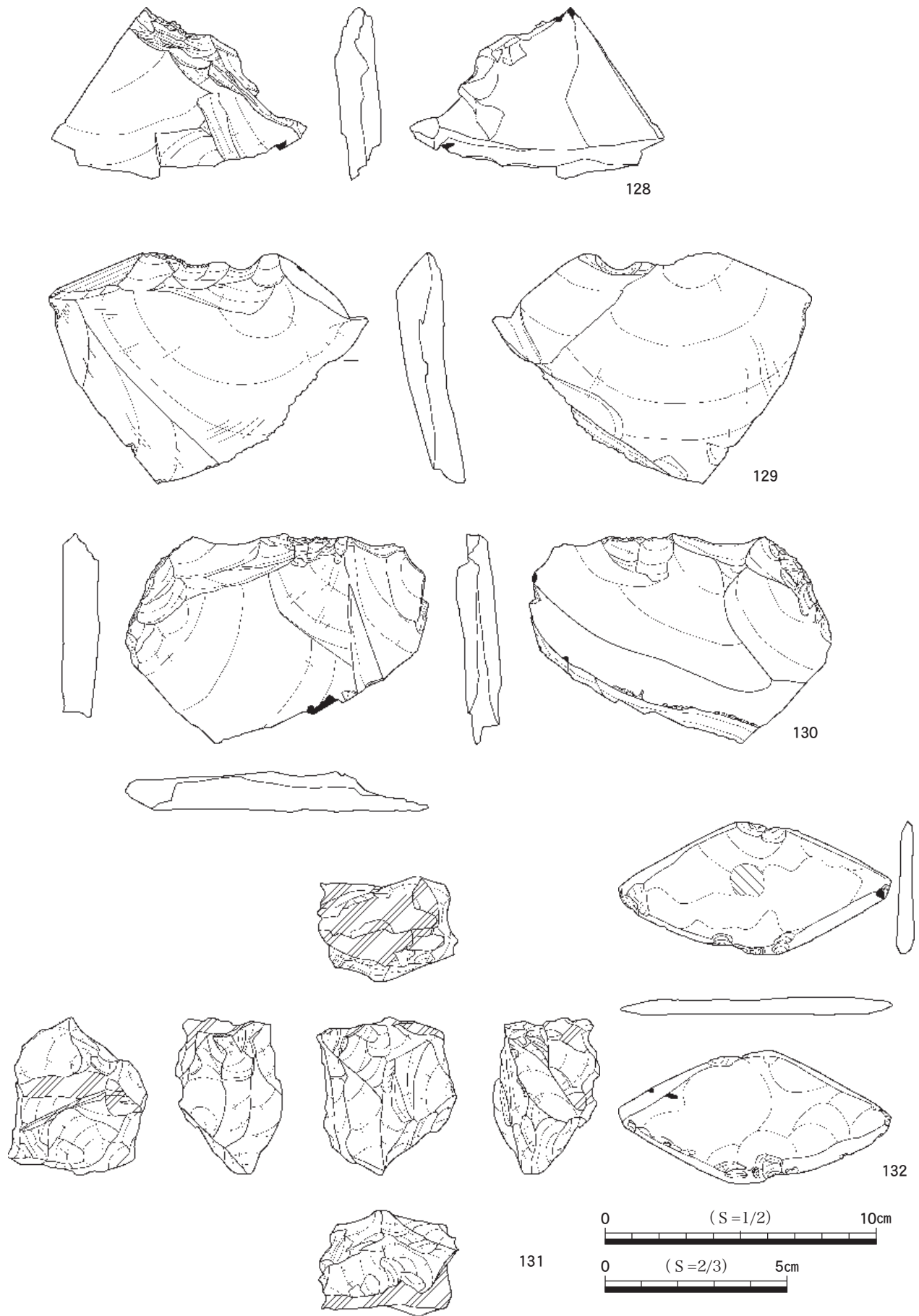
第144図 3次SK1出土遺物(3) (S=1/3)



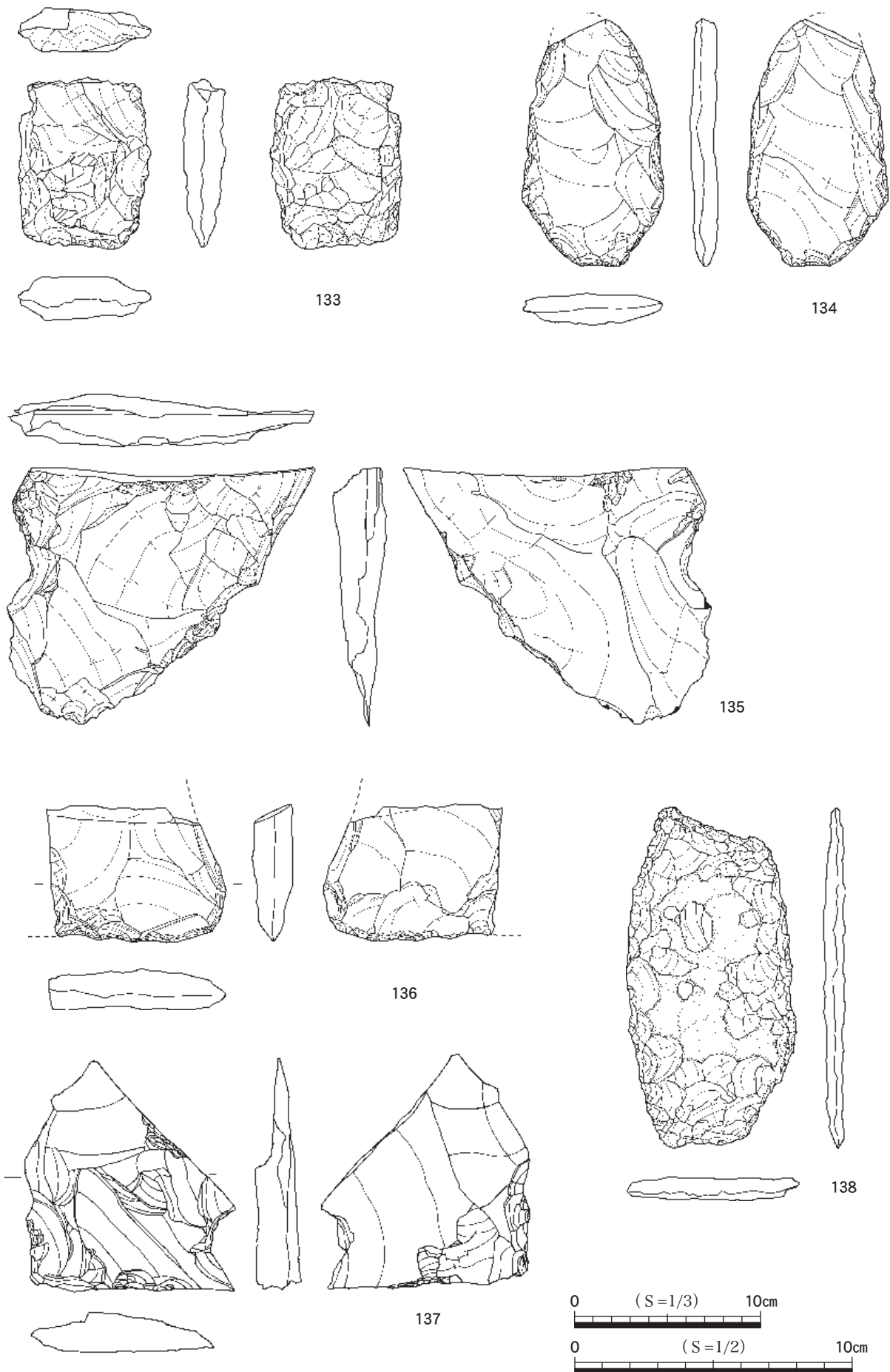
第145図 3次SK1出土遺物(4) (S=1/3)



第146図 3次SK1出土遺物(5) (S=1/3 (610~617) S=2/3 (120~125) S=1/2 (126, 127))



第147図 3次SK1出土遺物(6) (S=1/2 (128、129、130、132)、S=2/3 (131))



第148図 3次SK1出土遺物(7) (S=1/3 (135、136)、S=1/2 (133、134、137、138))

イト製の未成品。表面は左方向または右方向からの打撃によって、階段状に剥離され、のちに上方から剥離されている。細かい剥離が末端部と左側縁にみられる。裏面は大きく剥離が左方向からされ、のち上方から剥離されている。細かい剥離は右側縁と末端部にみられる。表裏面とも細かい剥離の位置はほぼ同じである。138は安山岩製。側縁に中程度の剥離後、細かい剥離が施されている。中央部にやや自然面が残る。

註(1) 小池史哲氏(福智町教育委員会)の御教示による。

### 3次SK2 (第149図)

3次調査区で検出した円形土坑である。最大長・最大幅95cm、深さ43cmを測る。断面形状は逆台形を呈す。遺物は少量出土している。

#### 出土遺物 (第149図)

土器は4点を図示した。618は口縁部で外面に2条の沈線を描く。619は無文土器の口縁部。620～621は底部である。

### 3次SK3 (第150図)

3次調査区で検出した楕円形土坑である。最大長1.4m、最大幅1.2m、深さ25cmである。遺物は中量出土している。特筆すべき遺物として人面形土製品や分胴形土偶が出土している。時期を特定できる遺物は少ないものの、石町式期と太郎迫期とみられる遺物が出土している。

#### 出土遺物 (第150図)

土器は14点を図示した。622は人面形土製品である。約1/3は欠損していると思われるが、右目・鼻・額・口の一部が縦6cm、横5.1cm程残存している。眼部の彫りは深く、眼は下方から斜め上部に穿孔し、鼻は貫通しない2つの小穴で表現する。口は開けているが、下唇付近が欠損しているため全容は不明。額はやや尖らせている。裏面の側縁部は、何かに貼り付けられていたような痕跡を残す。この内側は粘土帯が側縁部に沿うように半円状に巡る。裏面の中央付近は3段程度の凹みが認められる。丁寧にナデられていることから、裏面もみえることを意識して作られている可能性がある。623は分胴形土偶である。側縁部の3方に刺突を巡らせ、中央部からややそれた位置に突起が認められる。両方の先端部は凹みが認められ、それを繋ぐように沈線上の浅い溝がみられる。列点は裏面の側縁にも表面の反対の位置に施される。624～627は口縁部で、624は太郎迫式期に位置づけたい。625は石町式期であろうか。628・629は胴部片。630～633は底部である。630は尖頭形の底部。631・633は平底。632は上げ底気味を呈す。

石器は2点を図示した。139は姫島産黒曜石製の石鏃で、磨耗が激しい。周縁部を細かく調整し抉りは深い。140は姫島産黒曜石製の石核。左側面を下から剥離して、裏面を180°回転させて、上部から階段状に剥離している。さらに180°回転を行って、最終剥離面を上部から加撃して作成している。

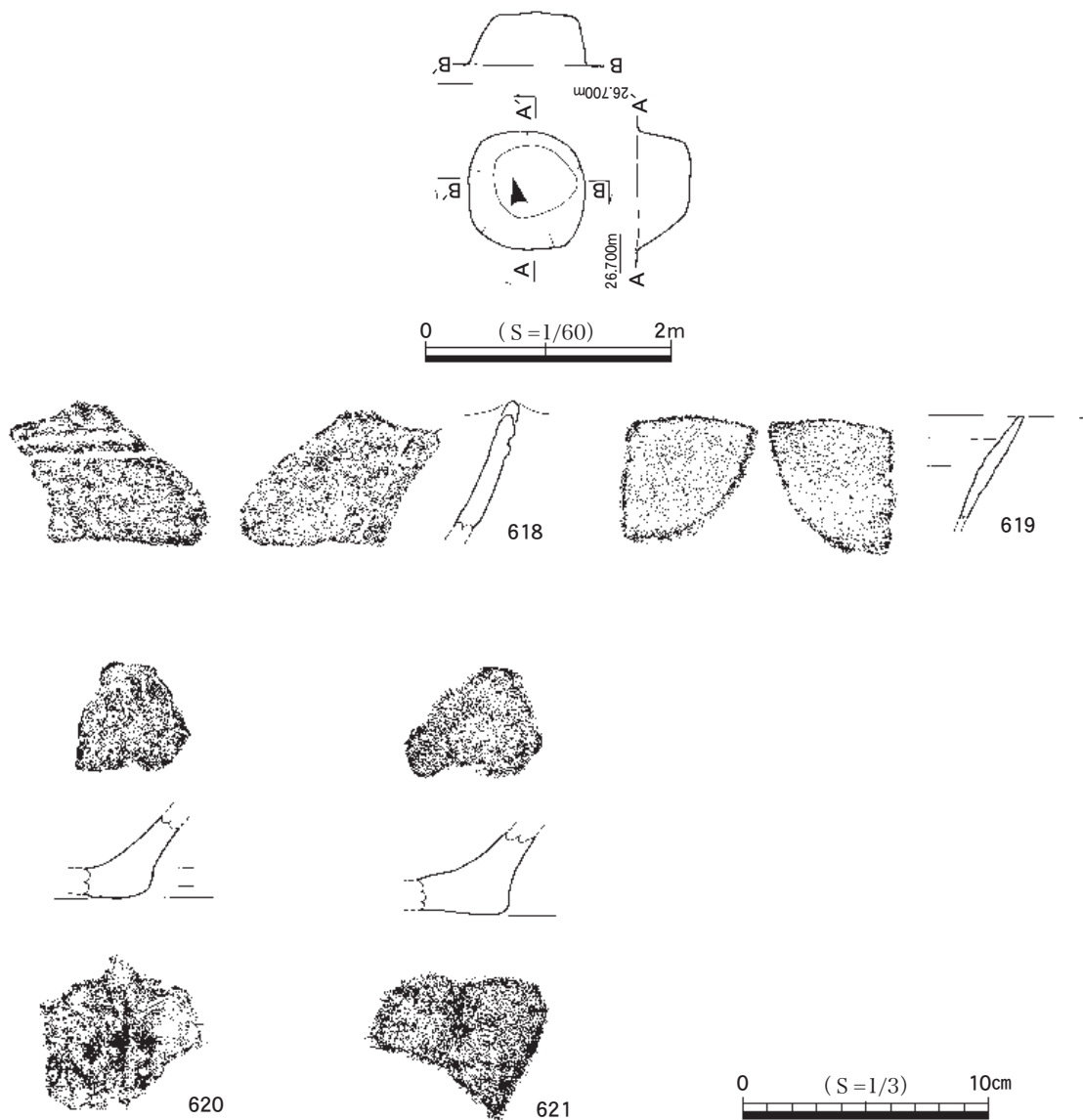
### 3次SK6 (第151図)

3次調査区で検出した隅丸方形土坑である。最大長1.5m、最大幅1.1m、深さ10cmである。遺物は少量出土している。

#### 出土遺物 (第151図)

634は三万田式に近い時期か。635は太郎迫式。石器は1点を図示した。141は姫島産黒曜石製の石鏃である。周縁は細かい剥離が施され、裏面に素材の面が残っている。





第 149 図 3次SK2平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

### SK2 (第 152 図)

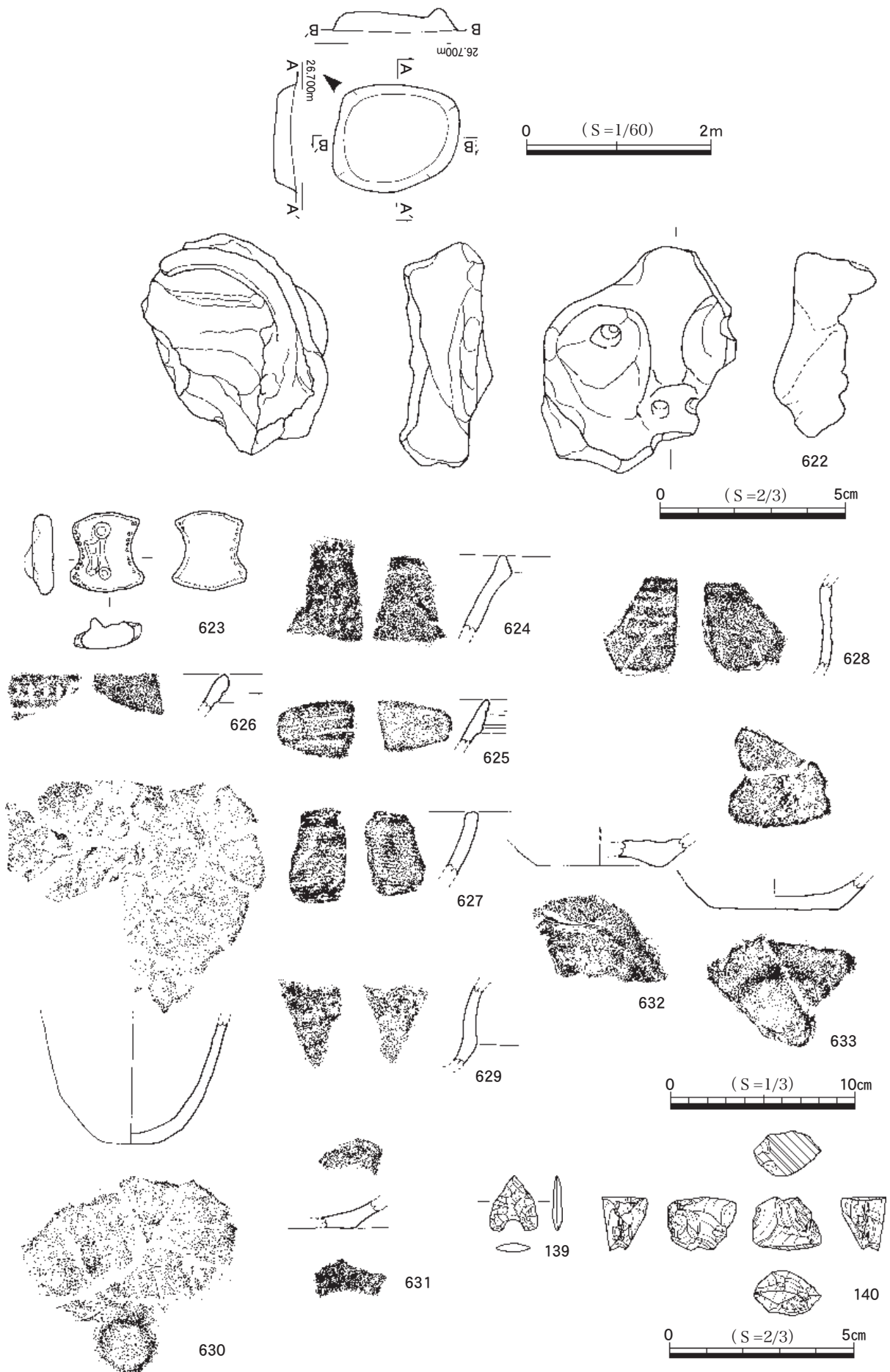
第 1 調査区 F-15 で検出した不定形土坑である。東側を近代の溝により切られている。最大長 1.34m、最大幅 1.24m、深さ 20cm の大きさである。底面からテラスを経て立ち上がる。壁の立ち上がりは急である。

### 出土遺物 (第 152 図)

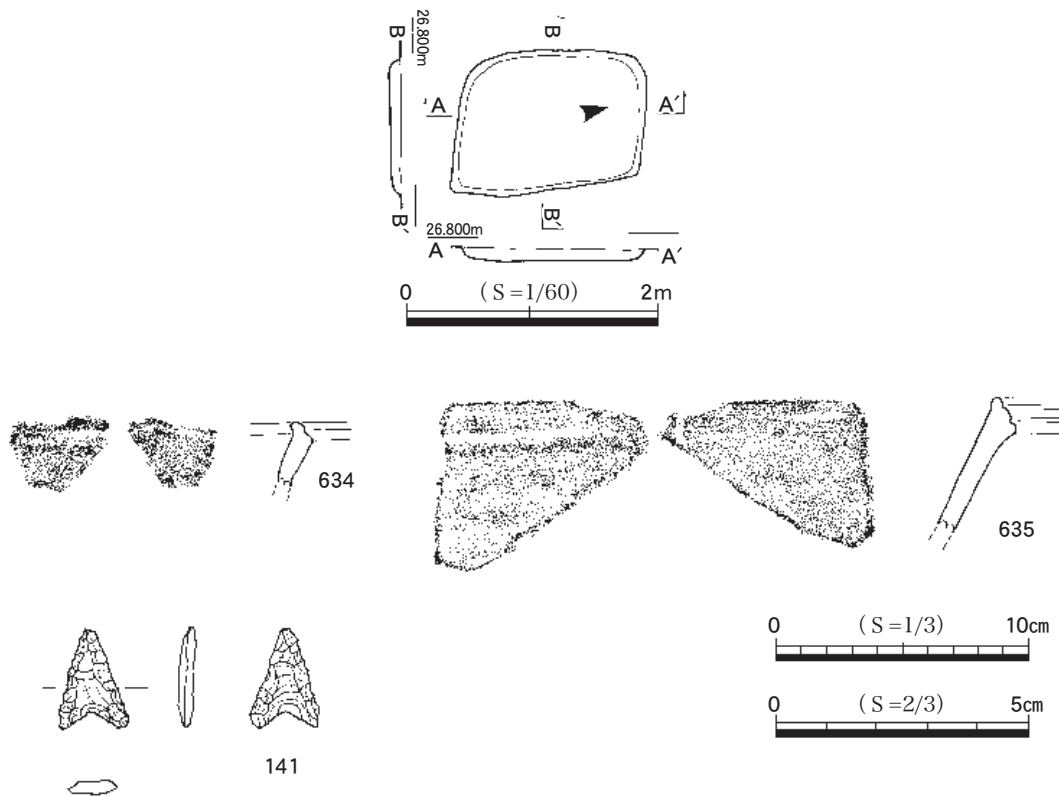
636 ~ 641 は口縁部で、637 は石町式と思われる。639 は口縁部が短く外反する。石器は 1 点を図示した。142 は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、基部には浅い抉りが入り、五角形に近い形状に仕上げられている。左脚を若干欠損している。

### SK7 (第 153 図)

第 2 調査区 I-8 で検出した長方形の土坑である。南東部を他の遺構に切られる。最大長 1 m、最



第150図 3次SK3平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3 (623~633)、S=2/3 (139、140、622))



第151図 3次SK6平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3 (634、635)、S=2/3 (141))

大幅90cm、深さ6cmの大きさである。底面に3基の用途不明の小穴が認められる。壁面の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物 (第153図)

645・646は縄文土器。645は口唇部に列点を施す。石器は1点を図示した。143は腰岳系黒曜石製の石鏃未成品。幅広剥片を素材とし、上端部を除く周縁部にのみ急斜度の加工が施されており、基部の抉りのみが完成している状況で、厚みを取り切れなかったためか、製作が中断されている。或いは、左側縁が削器の刃部として使用された可能性がある。

SK9 (第154図)

第2調査区H-19で検出した楕円形土坑である。最大長1.4m、最大幅90cm、深さ22cmの大きさである。底面に2箇所から浅い小穴がある。壁の立ち上がりは急である。

出土遺物 (第154図)

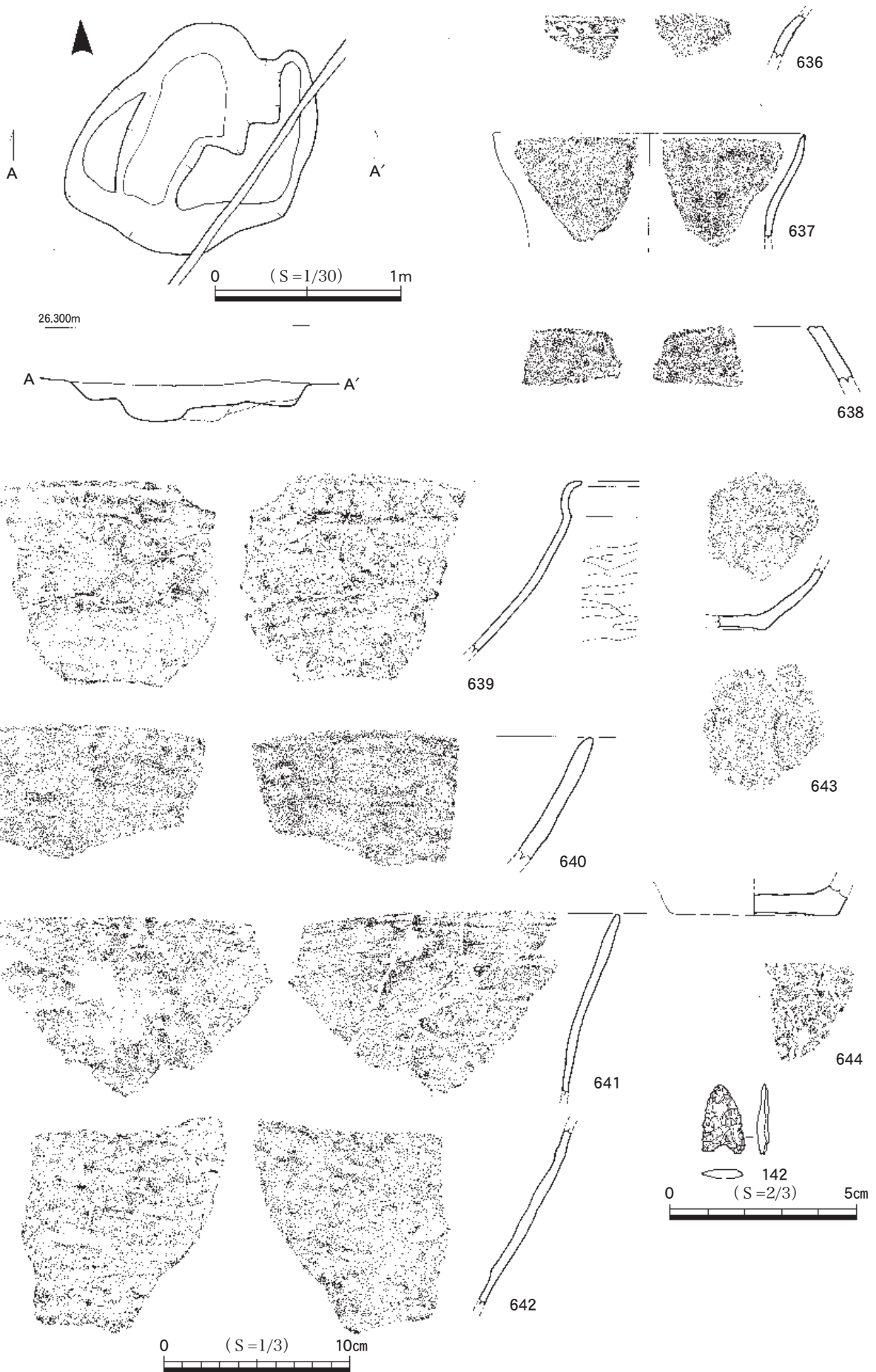
647～648は口縁部である。648は内面の肥厚に特徴が有る。

SK12 (第155図)

第2調査区I-12で検出した楕円形土坑である。東・南側を他の遺構に切られる。最大長幅共に40cm、深さ38cmの大きさである。壁の立ち上がりは急である。土坑というより柱穴としてよいサイズである。遺物は埋土中位より出土している。

出土遺物 (第155図)

649は胴部で、緩やかに立ち上がる胴部が特徴。石町式以降か。651～652は底部である。651は



第152図 SK2平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (636~644)、S=2/3 (142))

厚手の平底のタイプ。縄文時代後期の所産か。

**SK13 (第156図)**

第2調査区I-12で検出した不定形土坑である。最大長66cm、最大幅60cm、深さ40cmの大きさである。壁の立ち上がりは急である。土坑というより柱穴としてもよいサイズである。

**出土遺物 (第156図)**

653は底部で器壁はやや薄い。

**SK14 (第157図)**

第2調査区I-12で検出した不定形土坑である。最大長1.5m、最大幅1m、深さ12cmの大きさである。底面と壁の境に小穴がみられる。壁の立ち上がりはやや急である。

**出土遺物 (第157図)**

654・655は口縁部であるが、655は刺突を2箇所施す。石器は1点を図示した。144は金山産サヌカイト製の石匙。幅広剥片を素材としており、周縁部に表・裏面から加工を施して、整形・刃部・摘み部を形成している。左側縁を欠損するが、右側縁も欠損後にリダクションした可能性が高い。

**SK15 (第158図)**

第2調査区I-12で検出した楕円形土坑である。最大長90cm、最大幅69cm、深さ45cmの大きさである。壁の立ち上がりは急であり、他の柱穴に重複している。

**出土遺物 (第158図)**

656は縄文土器の底部である。

**SK16 (第159図)**

第2調査区I-12で検出した円形土坑である。最大長幅共に65cm、深さ40cmの大きさである。壁の立ち上がりは急である。土坑というより柱穴としてもよいサイズである。

**出土遺物 (第159図)**

657は胴部に平行沈線が2条認められる。

**SK17 (第160図)**

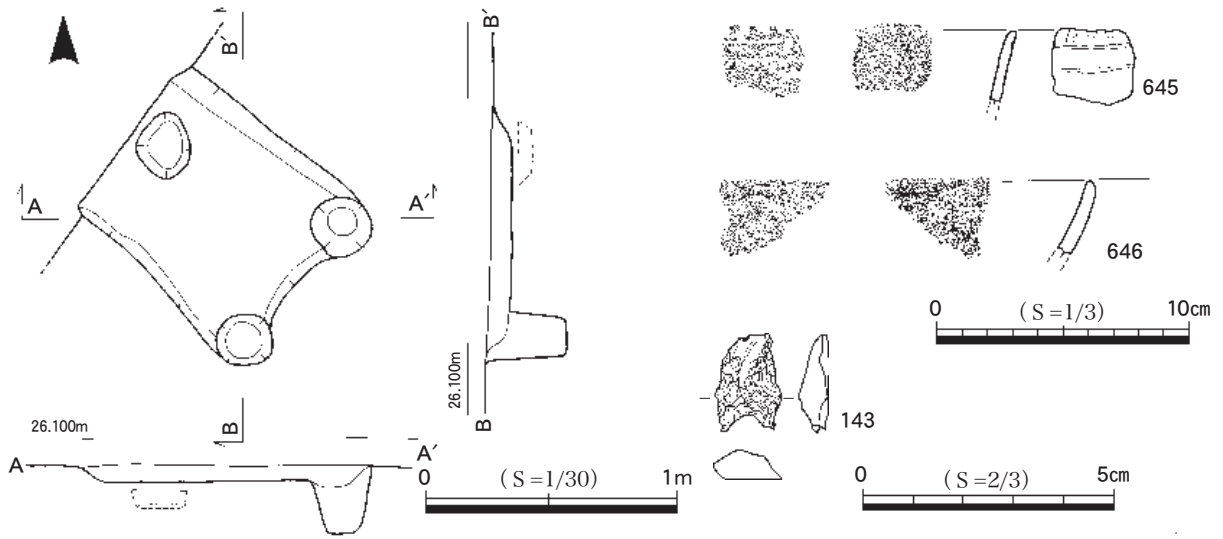
第2調査区I-12で検出した円形土坑である。最大長幅共に70cm、深さ35cmの大きさである。壁の立ち上がりは急である。土坑というより柱穴としてもよいサイズである。

**出土遺物 (第160図)**

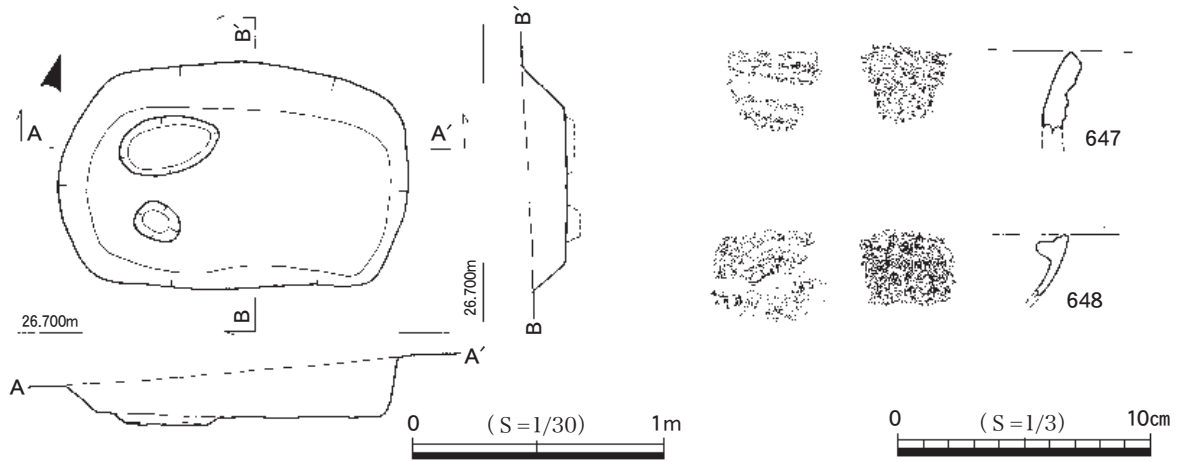
658は胴部で、外面に指頭圧痕がみられる。

**SK24 (第161図)**

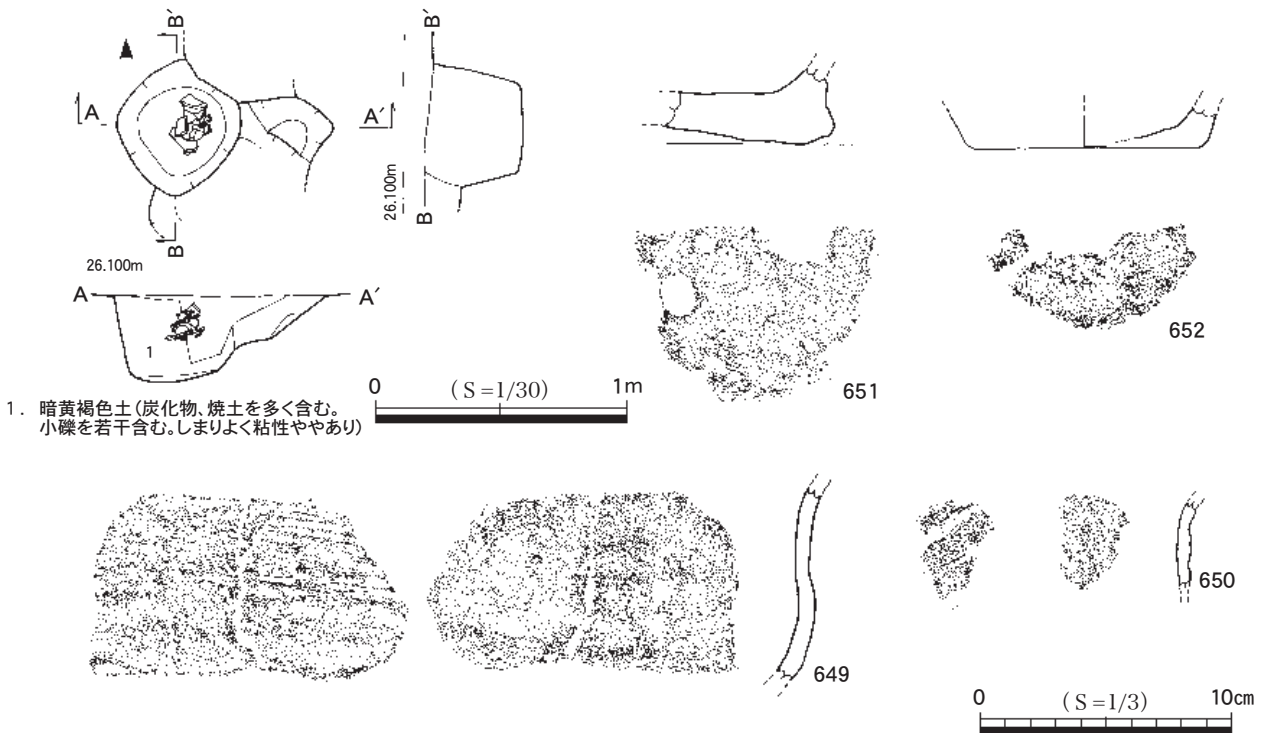
第2調査区I-9で検出した楕円形土坑である。南辺を他の遺構により切られている。最大長98cm、最大幅40cm、深さ14cmの大きさである。壁の立ち上がりはやや急である。



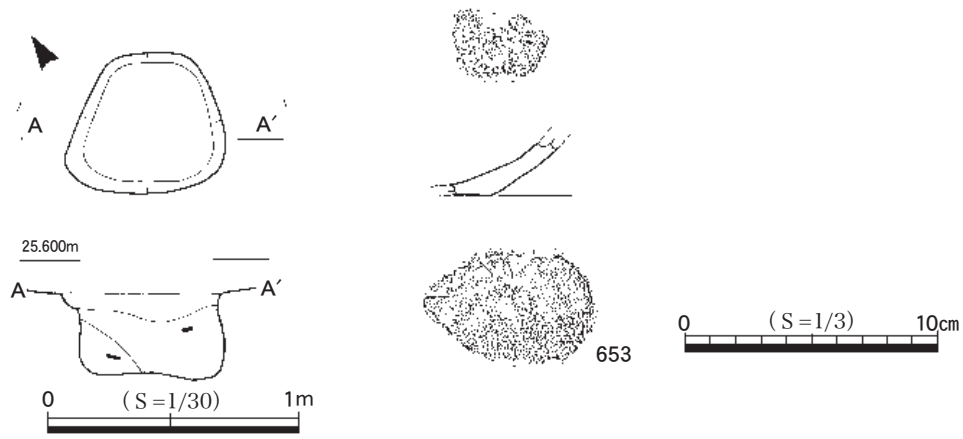
第153図 SK7平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (645、646)、S=2/3 (143))



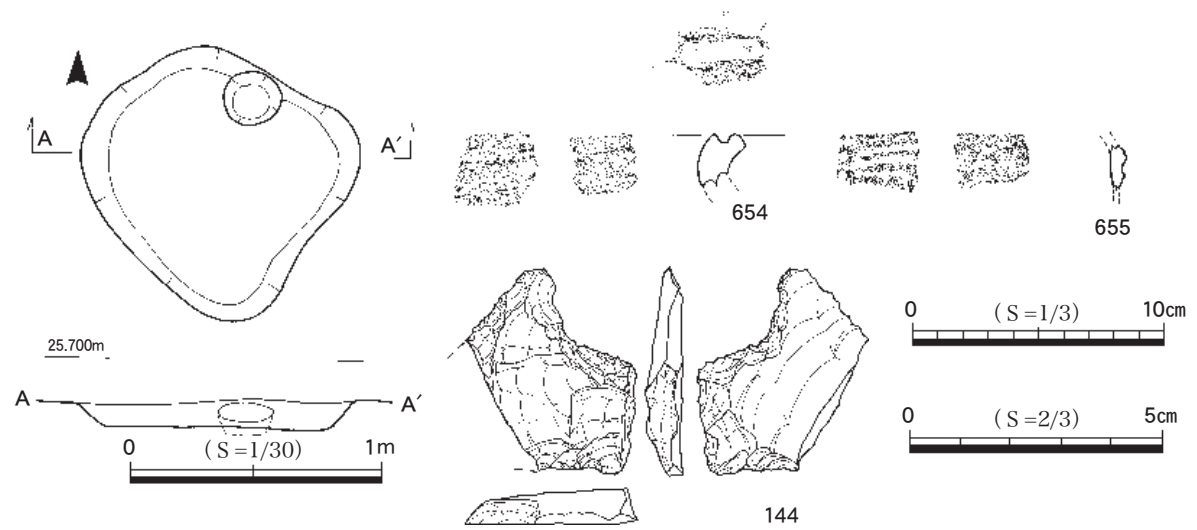
第154図 SK9平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



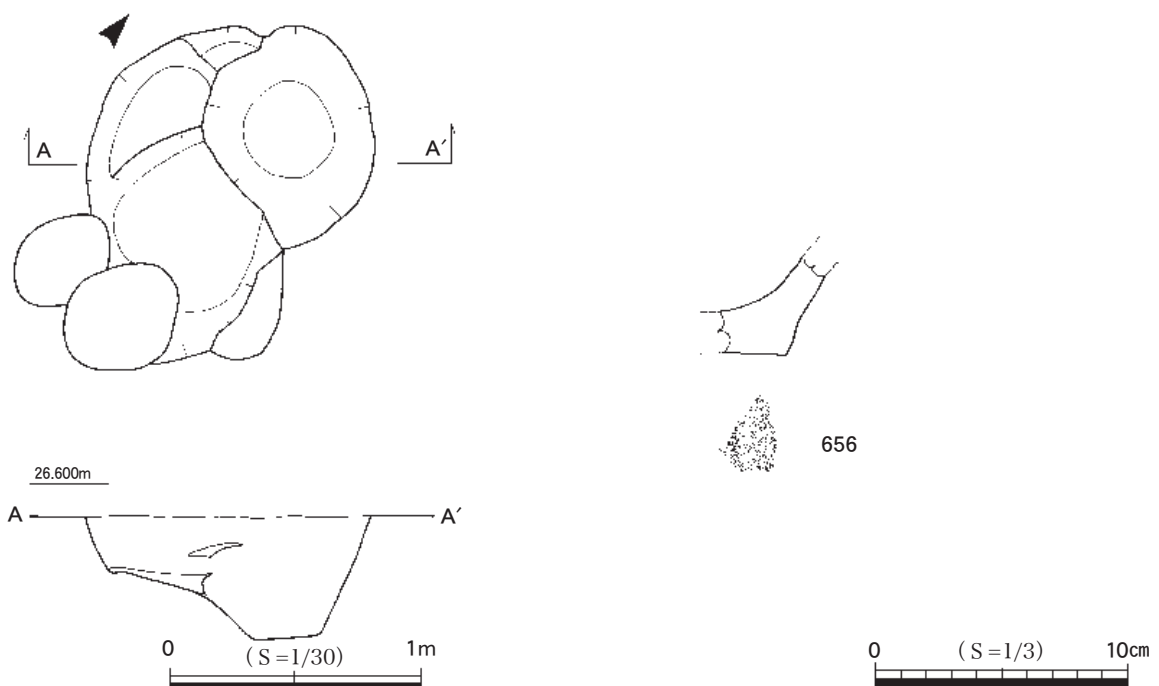
第155図 SK12平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



第156図 SK13平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



第157図 SK14平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (654、655)、S=2/3 (144))



第158図 SK15平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

#### 出土遺物 (第161図)

659は胴部片で上位に刺突がみられる。660は器壁が薄い鉢である。

#### SK37 (第162図)

第3調査区L-6で検出した不定形土坑である。最大長3.04m、最大幅1.5m、深さ38cmの大きさである。底面には小穴が見られ、底面からのテラスを経て立ち上がる。

#### 出土遺物 (第162図)

661～665は口縁部。661は内湾する。外面に沈線を施す。662は直立する口縁部。663は浅鉢と考えられる。664は強く外反する。665は外反する口縁部片である。石器は1点を図示した。145は姫島産黒曜石製の削器。主に上半部に平坦な加工が及んでいるが装着のためと考えられる。手擦れ痕が認められ、刃部には加工は殆どなく、使用痕が顕著に見られ、背付石器に近い。

#### SK39 (第163図)

第3調査区L-6区で検出した不定形土坑である。最大長76cm、最大幅70cm、深さ44cmの大きさである。底面中央は深くなり、テラスを経て壁面が立ち上がる。立ち上がりは急である。

#### 出土遺物 (第163図)

666は胴部片である。

#### SK44 (第164図)

第4調査区P-11・12で検出した楕円形土坑である。他の柱穴により東・西辺を切られている。最大長3.74m、最大幅1.4m、深さ50cmの大きさである。底面の南側は最も深く、それより浅い北側は凹凸をもつ。西-東の壁の立ち上がりはやや急である。埋土は黒褐色砂質土の単層である。

#### 出土遺物 (第164～167図)

667～682は鐘崎Ⅲ式期の口縁部である。667・668は口縁部内面に幅広の沈線で渦巻文を描く。669は退化した渦文を描く。674は鉤手文が丁寧に描かれておりやや古相を呈す。679は口縁部外面への沈線の集約化が著しい。687は沈線で大き目の区画を描き出す。688は肥厚する短い口縁部が特徴。鐘崎Ⅲ式に位置づけられる。694～699は底部であるが、694は内面に工具などによる押しえ痕跡がある。石器は2点を図示した。146は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部にはやや深い抉りが入る。147は金山産サヌカイト製の扁平打製石斧。薄平な剝片を素材とし、主に周縁部に加工を表・裏面から施して整形しており、基部中央には表・裏面から調整して抉りを入れている。

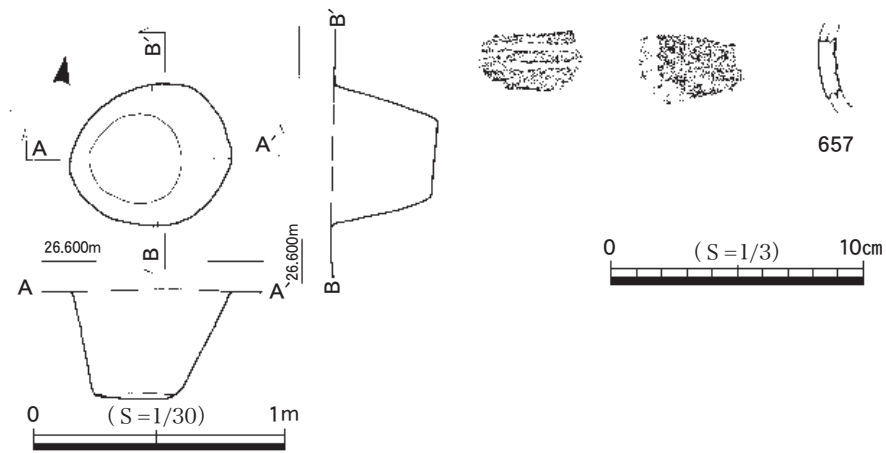
#### SK45 (第168図)

第4調査区P-10で検出した不定形土坑である。最大長2.1m、最大幅1.22m、深さ26cmの大きさである。壁の立ち上がりはやや急である。埋土は3つに分層した。

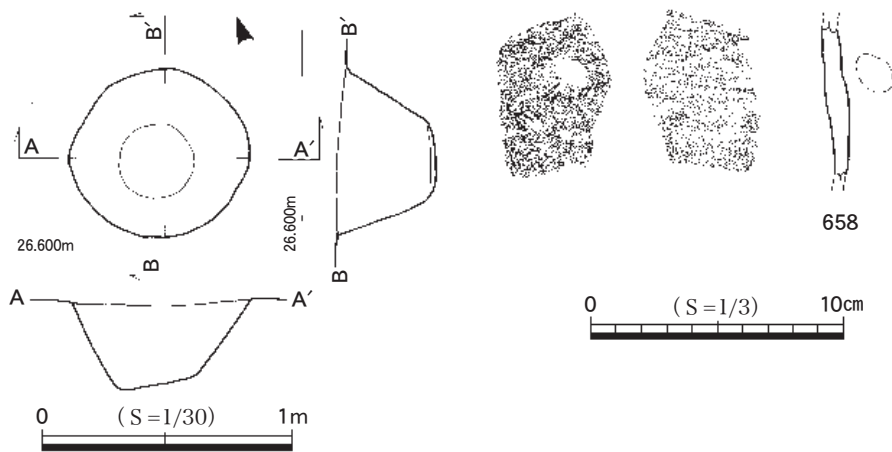
#### 出土遺物 (第168図)

700は鐘崎式での胴部片。沈線の幅が狭く中段階に位置付けられる。701は底部である。

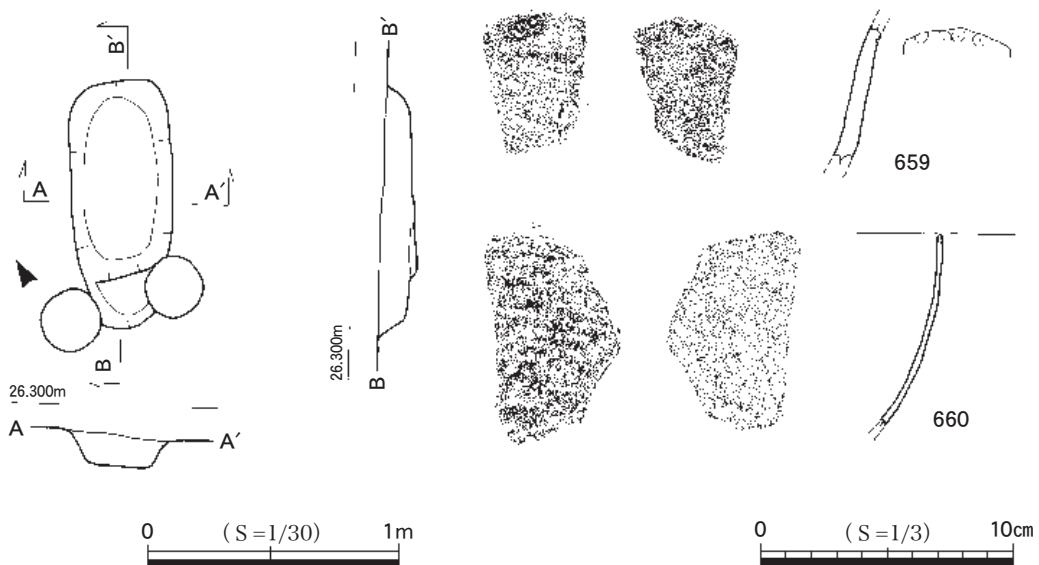




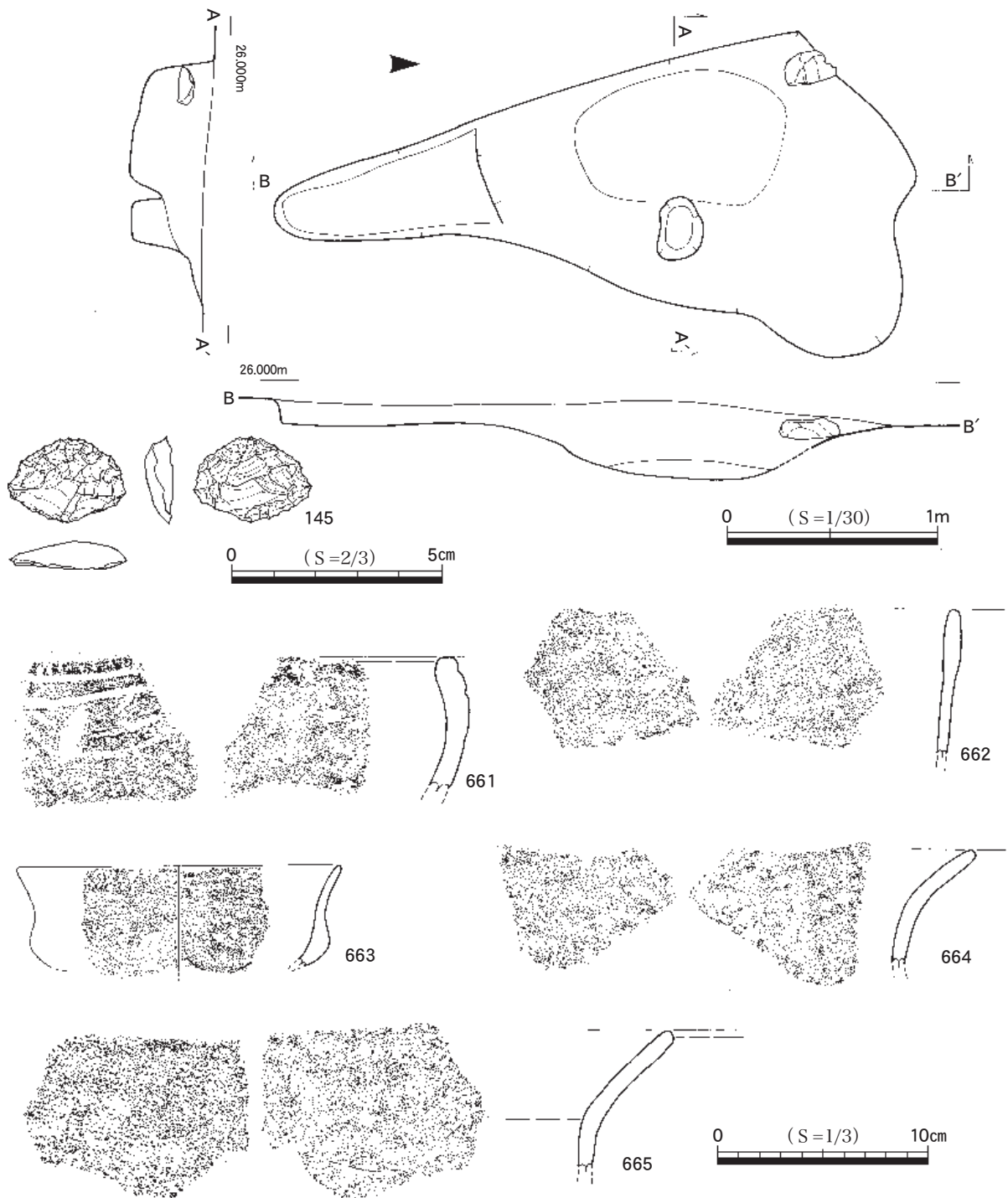
第159図 SK16平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



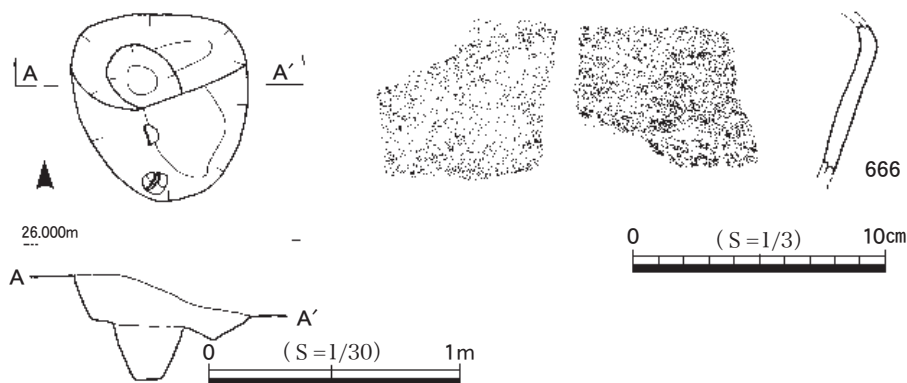
第160図 SK17平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



第161図 SK24平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



第162図 SK37平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (661~665)、S=2/3 (145))



第163図 SK39平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

#### SK46 (第169図)

第4調査区R-6付近で検出した不定形土坑である。最大長2.65m、最大幅1m、深さ70cmの大きさである。弓型の平面形状と底面に根跡の可能性のある小穴が複数認められる状況から風倒木痕の可能性もあるが土坑として報告する。埋土は最初に暗茶褐色土が堆積し、その後土器を多く含む黒褐色土が堆積する。壁の立ち上がりはやや急である。

#### 出土遺物 (第169図)

702～704は鐘崎式であるが、703はやや薄い口縁部が短く外反するもので中段階に位置付けられる。石器は3点を図示した。148～150は石鏃である。148は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、正三角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りが入る。先端は若干欠損しており、左脚は欠損後にリダクションしている。149は姫島産黒曜石製。薄平な幅広剥片を素材とし、脚部を中心とする周縁部に押圧剥離を施して整形しているため、表・裏面の上半には素材の面が残る。先端を若干欠損している。150は姫島産黒曜石製。丁寧な押圧剥離が表・裏面に及び、二等辺三角形に近い形状を呈する。基部にやや浅い抉りが施されている。

#### SK47 (第170図)

第4調査区Q-8付近で検出した不定形土坑である。最大長3.5m、最大幅1.5m、深さ50cmの大きさである。底面から1段のテラスを経て壁は立ち上がる。壁の立ち上がりは南側はやや急である。

#### 出土遺物 (第170図)

705～707は縄文土器と思われるが、形式は判然としない。

#### SK53 (第171図)

第5調査区F-17で検出した楕円形土坑である。最大長1.5m、最大幅1.3m、深さ38cmの大きさである。壁の立ち上がりは急である。

#### 出土遺物 (第171図)

708は鉢。鐘崎Ⅲ式期の範疇であろう。

#### SK56 (第172図)

第5調査区F-17で検出した不定形土坑である。最大長98cm、最大幅94cm、深さ44cmの大きさである。2段のテラスがあり、底面に至る。壁の立ち上がりは急である。

#### 出土遺物 (第172図)

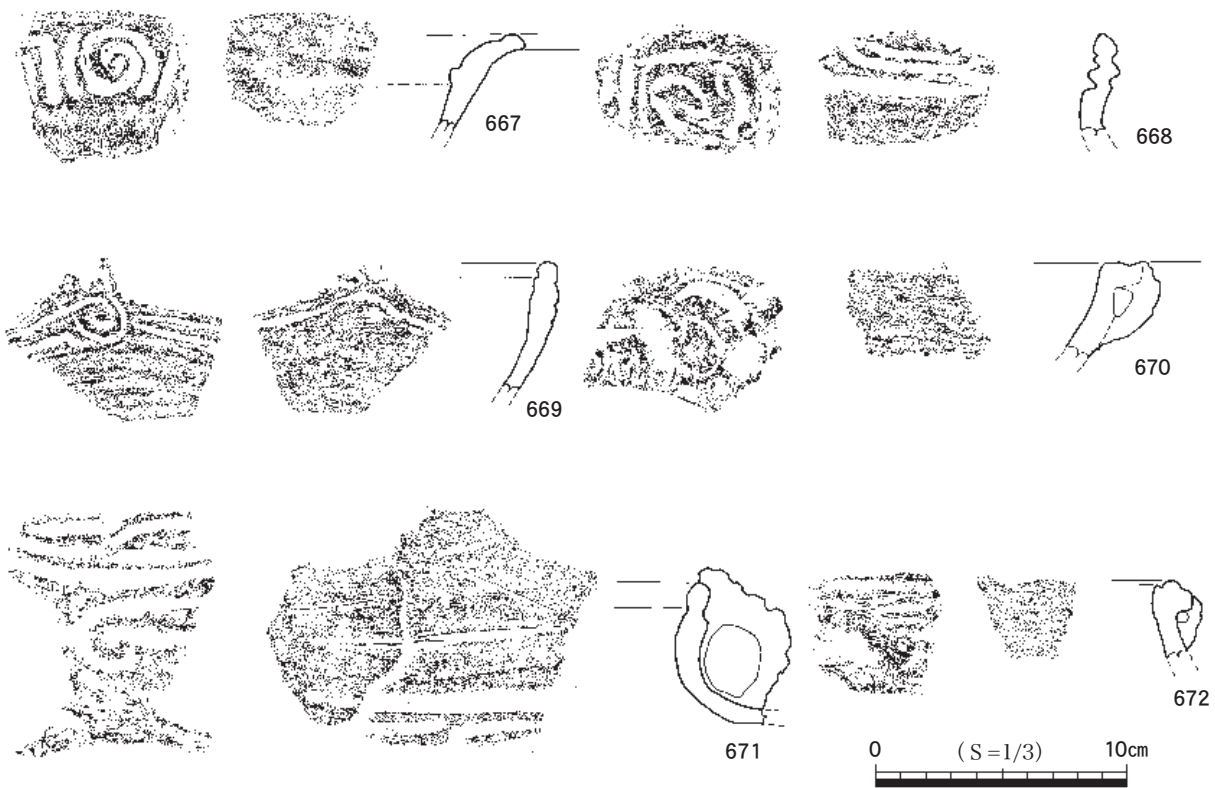
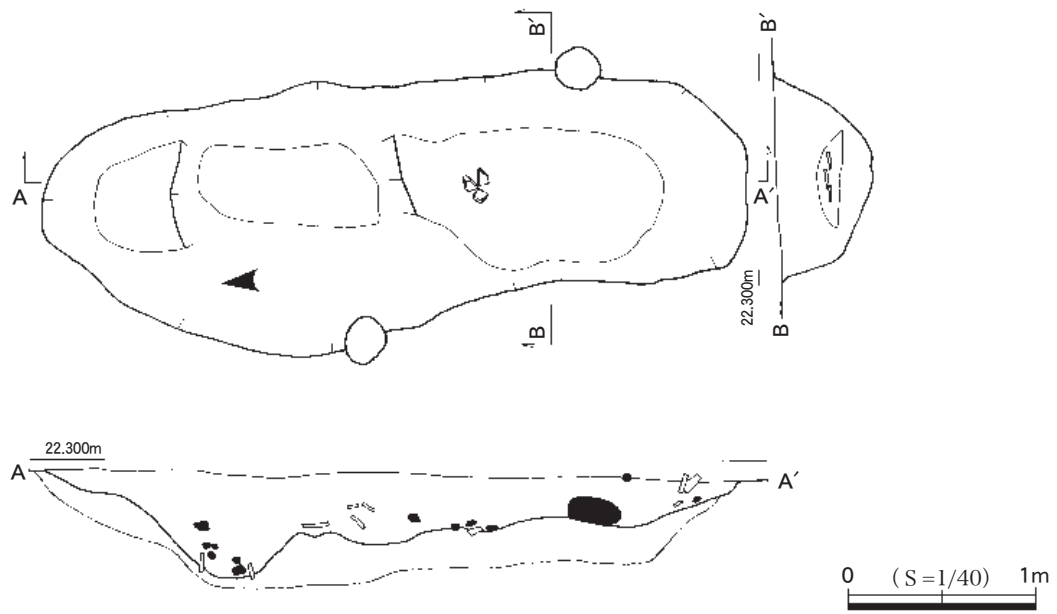
709～712は石町式であろうか。711・712は巻貝擬似縄文を施す。

#### SK57 (第173図)

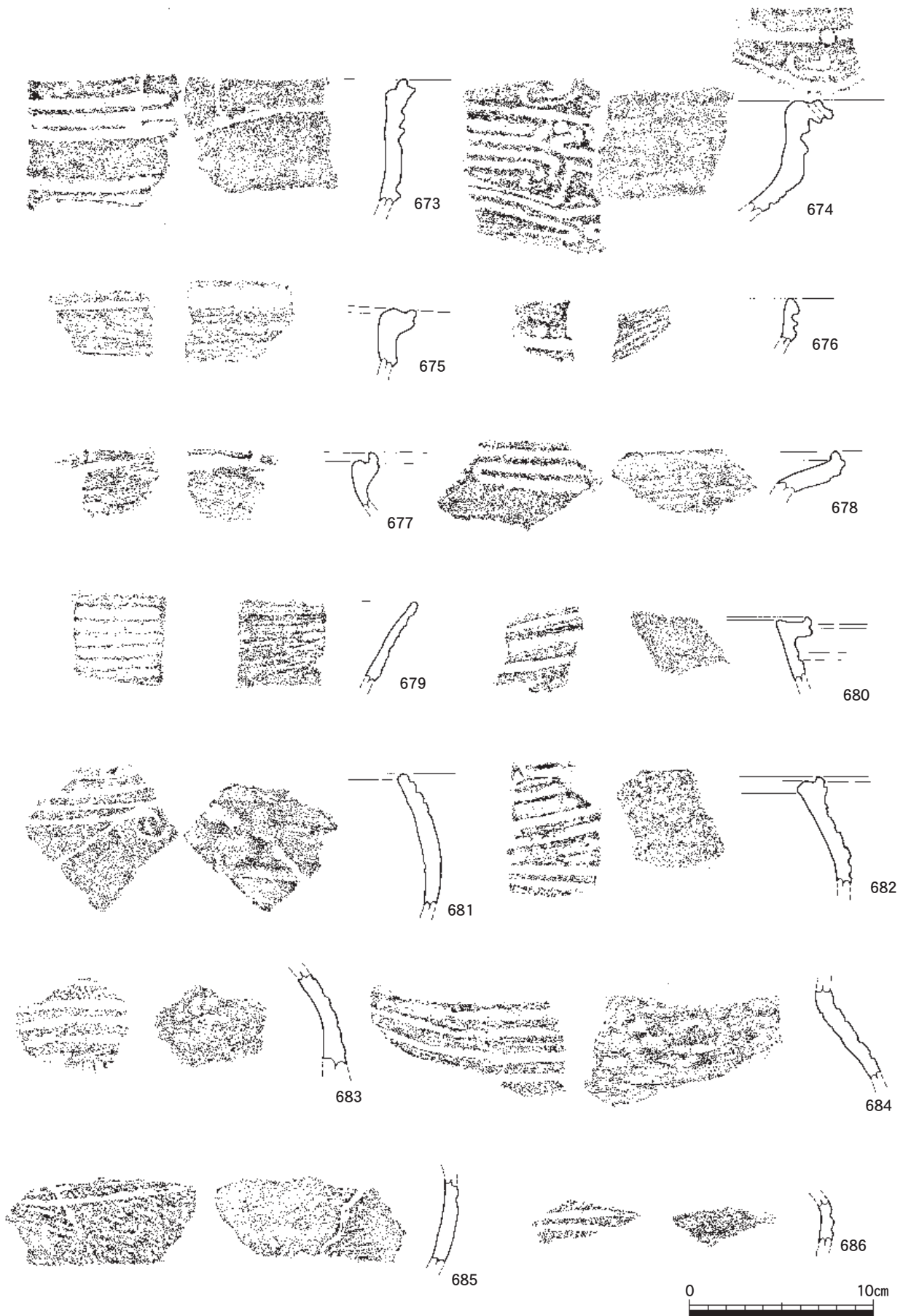
第5調査区H-20で検出した不定形土坑である。最大長1.6m、最大幅90cmの大きさである。深さは調査時にレベルを未計測のため不明である。

#### 出土遺物 (第173図)

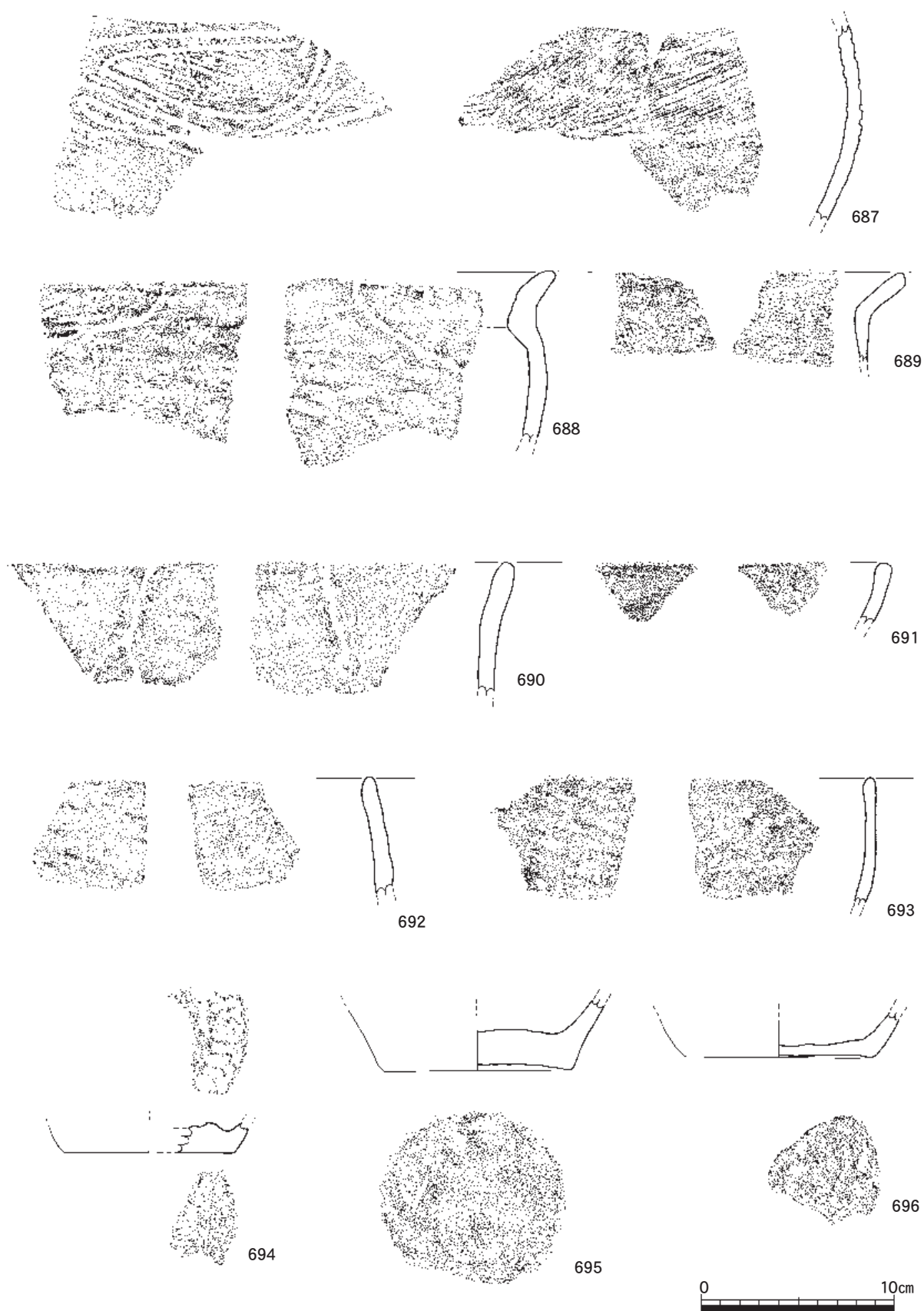
713は太郎迫式に位置づけられる。714は胎土に滑石を多く含み、爪形文に似た刻みを入れる。715は底部の接地部が肥厚している。



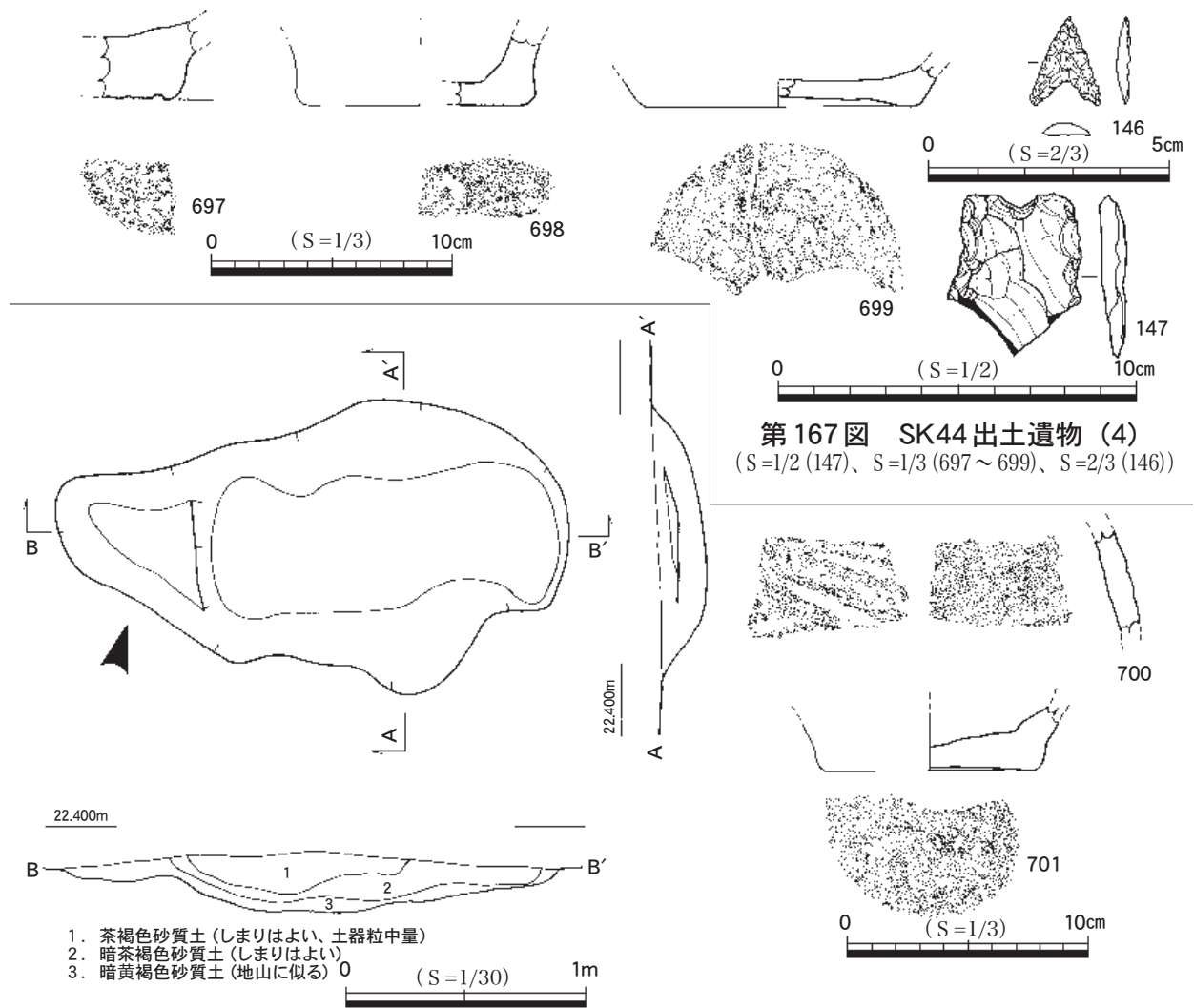
第164図 SK44平・断面図 (S=1/40) 出土遺物 (1) (S=1/3)



第165図 SK44出土遺物(2) (S=1/3)

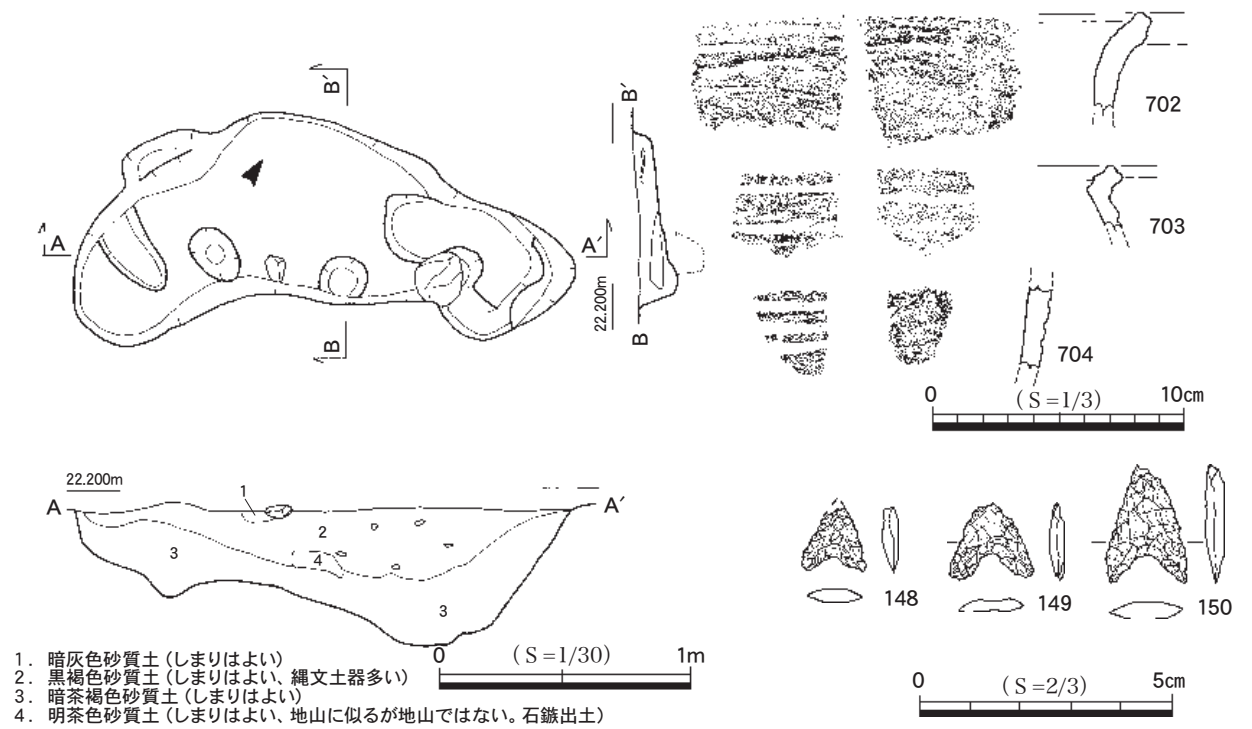


第 166 図 SK44 出土遺物 (3) (S=1/3)

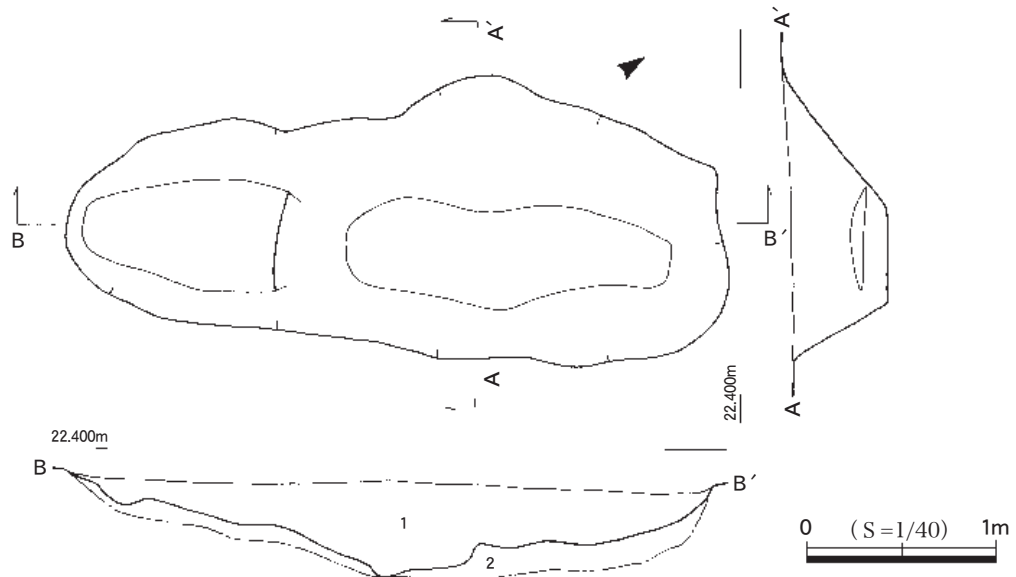


第167図 SK44出土遺物(4)  
 (S=1/2 (147)、S=1/3 (697~699)、S=2/3 (146))

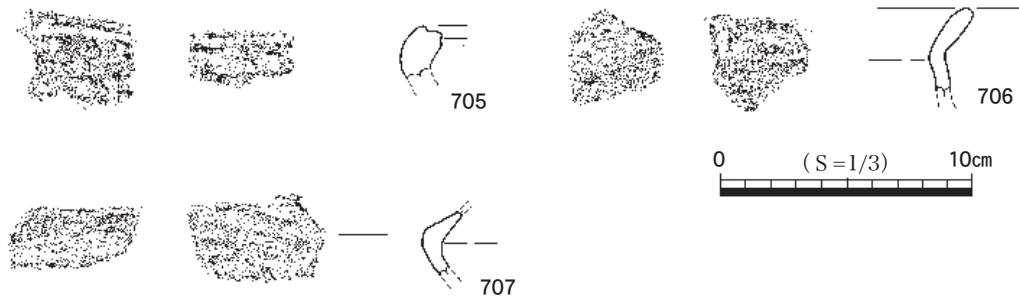
第168図 SK45平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



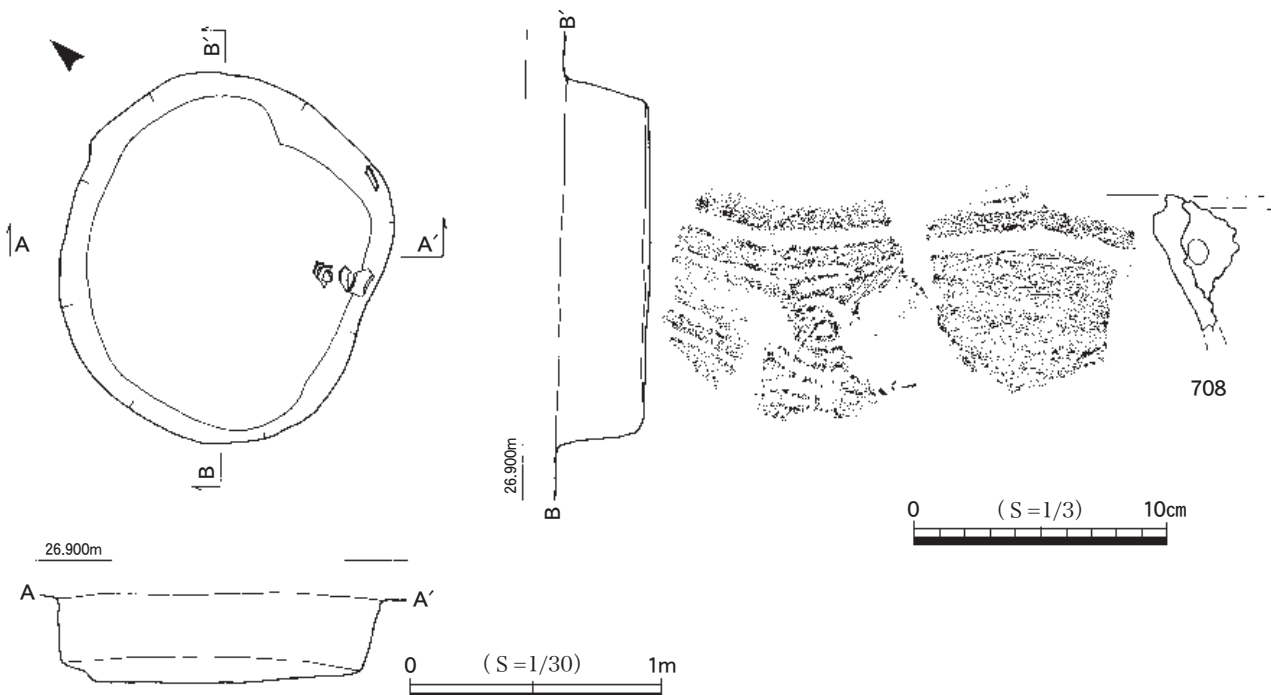
第169図 SK46平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=2/3 (148~150)、S=1/3 (702~704))



1. 暗茶褐色砂質土(よくしまる。縄文土器片多量。小石中量)  
 2. 明茶褐色砂質土(よくしまる。地山か)



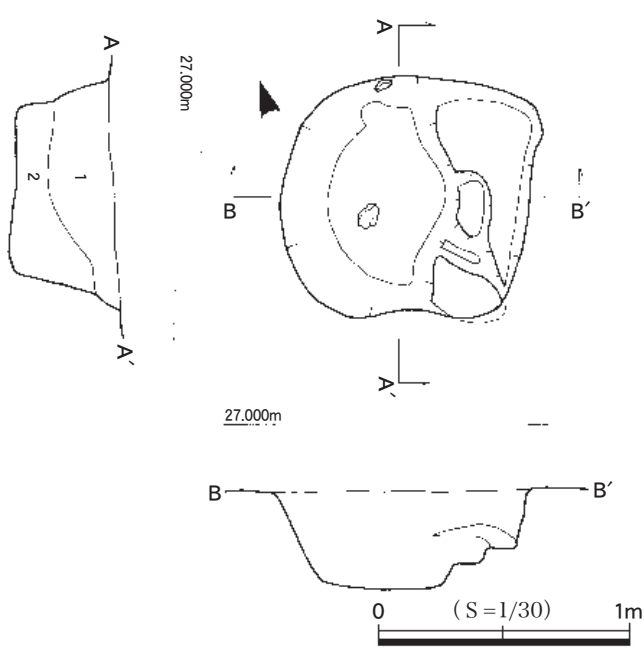
第170図 SK47平・断面・土層図 (S=1/40) 出土遺物 (S=1/3)



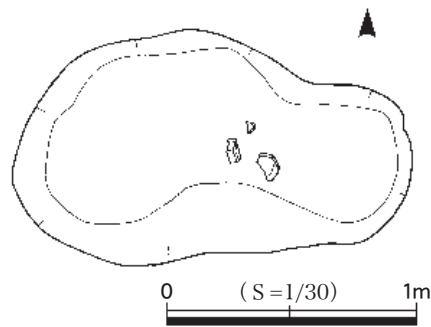
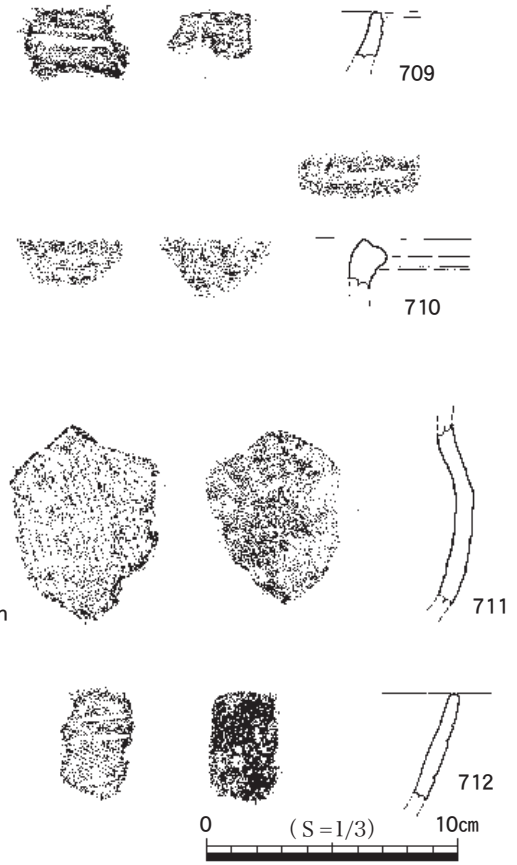
第171図 SK53平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



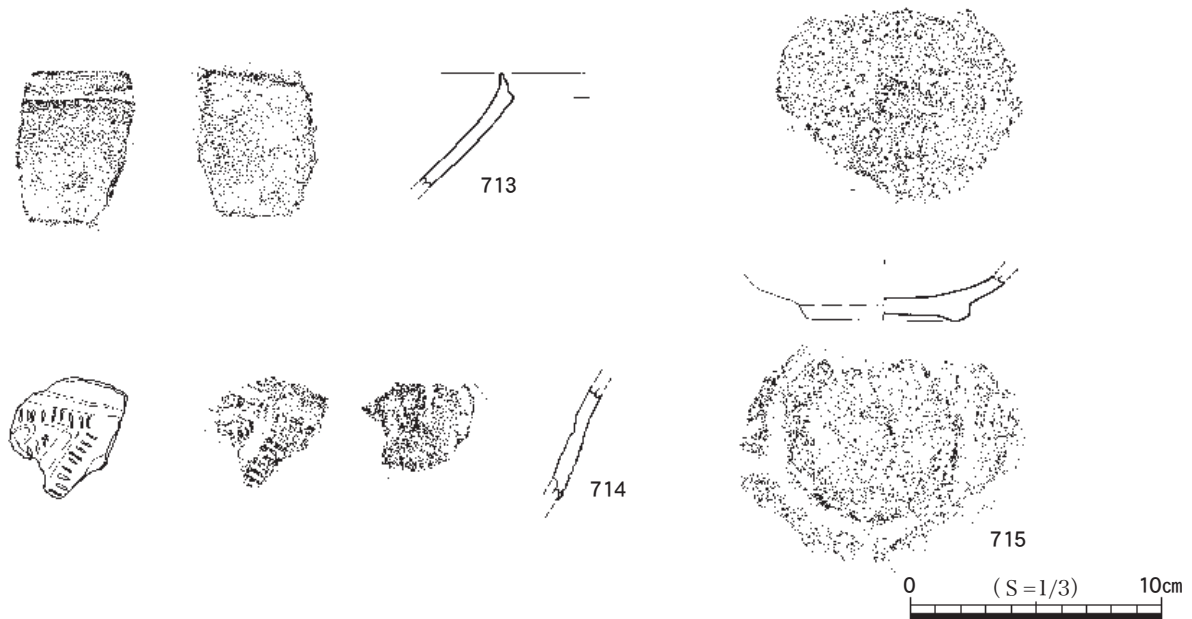
- 1. 黒褐色土 (焼土塊、炭化物を多く含み中礫石若干含む。しまりよく粘性ややあり)
- 2. 暗褐色土 (焼土塊を多く含む。しまりよく粘性割合あり)

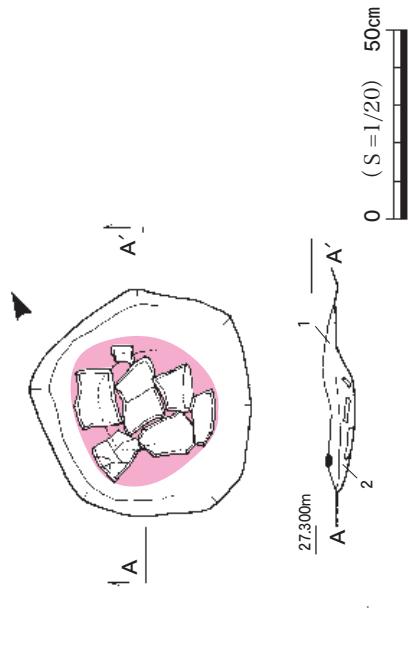


第172図 SK56平・断面・土層図 (S=1/30)  
出土遺物 (S=1/3)

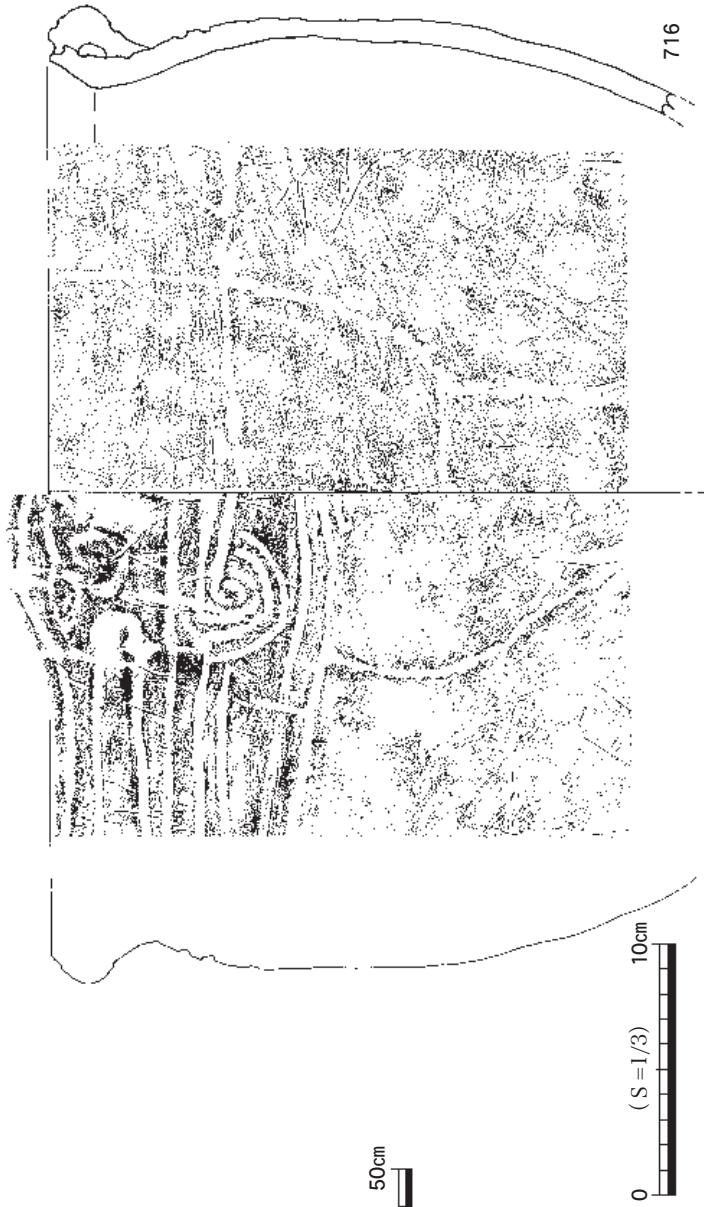


第173図 SK57平面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

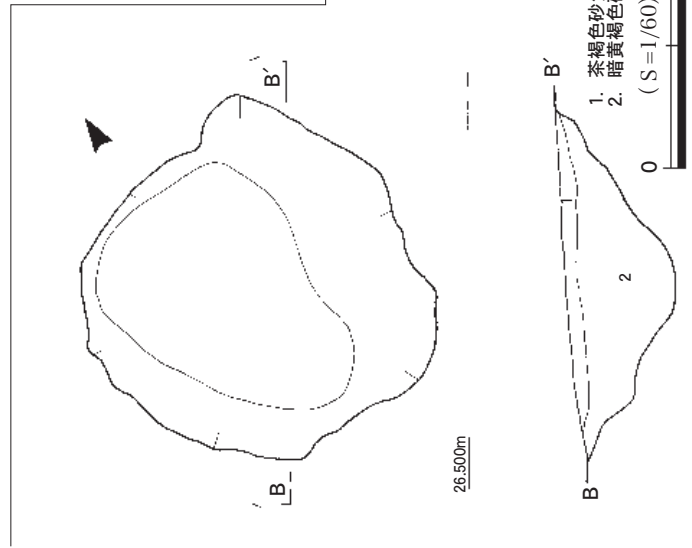




1. 黒褐色砂質土(しまりは弱く炭、焼土粒多量)
2. 暗赤褐色砂質土(しまりは弱く、焼土多量)



第174図 SK64平・断面・土層図 (S=1/20) 出土遺物 (S=1/3)



1. 茶褐色砂質土(しまりは強い)
2. 暗黄褐色砂質土(しまりは強い)



第175図 地層横転1平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

#### SK64 (第174図)

第4調査区P-11で検出した不定形土坑である。最大長60cm、最大幅58cm、深さ約10cmの大きさである。本遺構からはカラスザンショウを大量に含有した土器(716)が出土している。土器の約半位が並ぶような状態で遺存していたことから、本来は完形に近い土器が遺棄されていたが、削平を受けもう半分は後世に失われた可能性がある。土器を除去すると底面に焼土面が確認できた。土坑を掘り、火を焚いた後に716の土器を遺棄したものと推測する。

#### 出土遺物 (第174図)

716は、波頂部下位に渦巻文が描かれ多重に区画する。鐘崎Ⅲ式～最新相に位置づけられる。後述する小畑教授の報告によると多量の種実圧痕が検出されている。詳細は小畑教授の論考を参考にされたい。

#### 地層横転(風倒木痕) 1 (第175図)

第1調査区B-27で検出した。形状は土坑であるが、埋土と地山の区別が非常につきにくく、どこが底面か不明確であった。よって倒木により樹木が横転し地山が攪乱された痕跡と判断した次第である。最大長3m、最大幅2.7m、深さ70cmの大きさである。

#### 出土遺物 (第175図)

717は縄文時代中期の並木式と考えられる。胎土に滑石の粉末を多く含む。波頂部に突起が見られ、口縁部や口唇部に幅の広い沈線を描く。殻頂部を押し引きしたのであろうか、列点が明瞭に残る。

## 2. 古墳時代の遺構と遺物

### 竪穴住居跡

#### 3次SH1 (第176図)

3次調査区で検出した竪穴住居跡である。平面形態はほぼ正方形、カマドは住居外側に張り出さないタイプである。主柱穴はP1～4である。N24°W方向に軸線に向ける。南北3.7m、東西3.8m、面積約14m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さ約20cmである。土器はパンケース1箱分出土した。

カマドは住居西壁に敷設されている。住居の主柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は22～55cm、深さ24～44cm、P1・2間約2.4m、P2・3間約2.2m、P3・4間約2.3m、P4・1間約2.4mである。

#### カマド (第176図)

住居西壁中央に構築される。焚口54cm、最大幅77cm、奥行き1.1m、高さ42cmの規模で検出した。焚口に黄白色の岩状の固まりがあり、両サイドの袖にも同質の部材を埋め置いている。土師器の破片が燃焼部奥より出土した。

#### 出土遺物 (第176図)

718は縄文時代後期の太郎迫式土器の口縁部である。混入品であろう。719～723は土師器である。719は観察表では甕としたが、甑の可能性もある。720・721は球形の胴部をもつ甕。胴部外面をケズリで調整する。いずれも古墳時代後期の所産であろう。722・723は土師器の小皿。底部はヘラ切り後ナデを施す。10世紀代の所産か。石器は1点を図示した。151は姫島産黒曜石製の石鏃。周縁に細かい剥離が施され、裏面に素材となる面がある。

### 3次SH2 (第177図)

3次調査区で検出した竪穴住居跡である。後述する3次SH3を切る。平面形態は隅丸方形、カマドは検出されていない。支柱穴はP1～4である。N37°E方向に軸線を向ける。南北4.5m、東西5.2m、面積約23㎡、検出面から床面までの深さ約10cmである。土器はパンケース1箱分出土した。

支柱穴の直径は36～70cm、深さ20～26cm、P1・2間約2m、P2・3間約2m、P3・4間約2.1m、P4・1間約2.2mである。

### 出土遺物 (第177図)

土器10点を図示した。724は縄文土器鉢の底部。観察表の土師器は誤り。725～728、730・731は須恵器。725は蓋で天井部と口縁部の境に稜が付くが口縁端部内面の段は消失している。TK43段階、6世紀末～7世紀初頭の所産か。726は蓋と考えたが、坏身の可能性もある。727は坏身。短い口縁部が付くためTK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。728は高坏。729は壺の口縁部か。730・731は口縁部。731は埴か。732・733は土師器で甕の口縁部である。小片のため時期比定は困難である。石器は1点を図示した。152は姫島産黒曜石製の石匙。表面の下部に刃部があり、裏面には右半分の周縁部に細かい調整がみられる。

### 3次SH3 (第178図)

3次調査区で検出した竪穴住居跡である。3次SH2に切られる。平面形態は方形。支柱穴はP1・2のみ検出した。N37°E方向に軸線を向ける。南北5.2m、東西4.8m+ $\alpha$ 、検出面から床面までの深さ約10cmである。支柱穴の直径は40～48cm、深さ33～50cmである。

### 出土遺物 (第178図)

734は復元最大胴径16.6cmを測る長胴タイプの甕である。古墳時代後期の所産であろう。

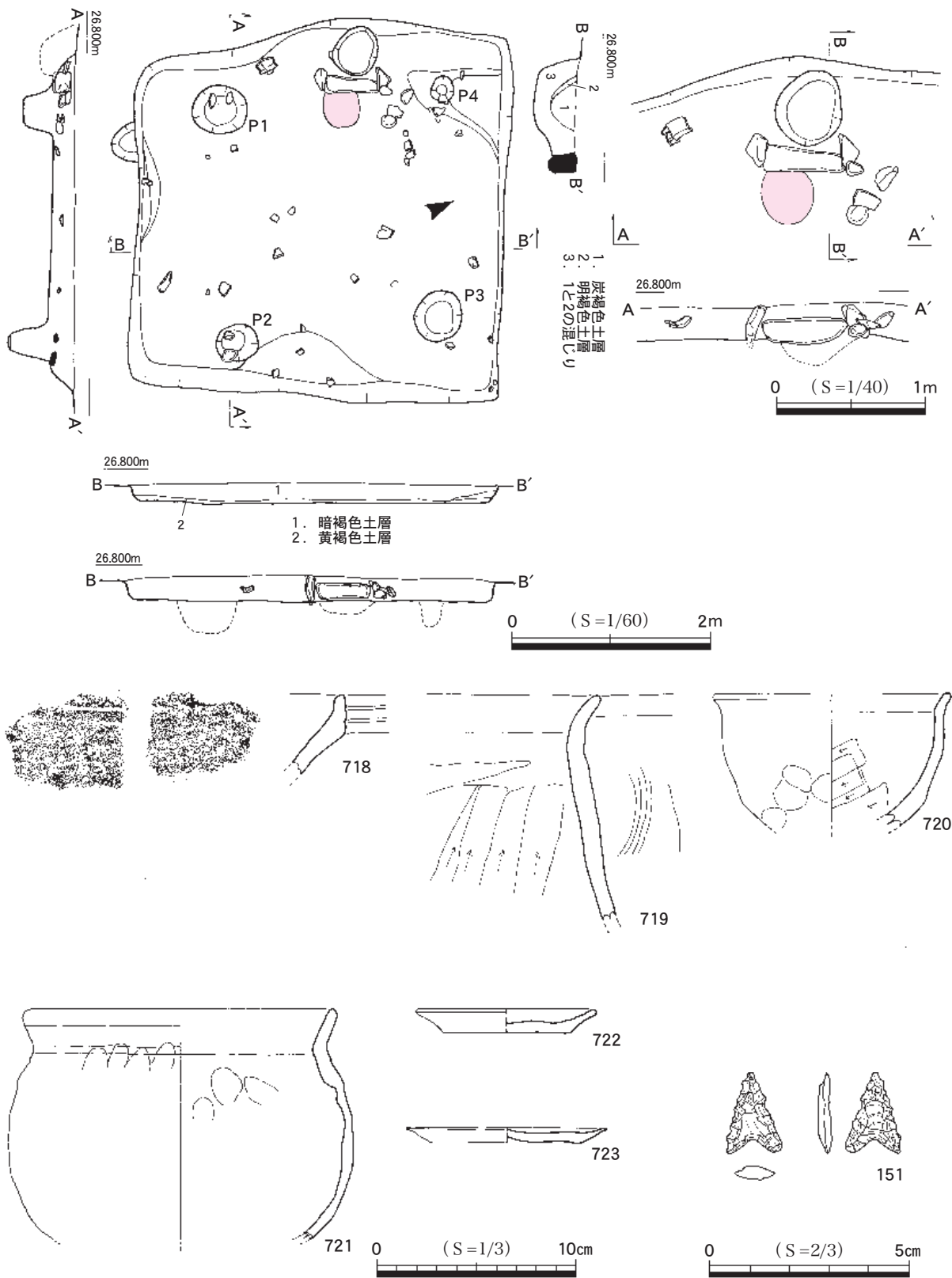
### SH1 (第179図)

第2調査区H-6で検出した竪穴住居跡である。東側の残りは悪く深さが5cm程しか残らない部分がある。平面形態は隅丸方形で、N41°W方向に軸線を向ける。南北4.4m、東西3.9～4.2m、面積約20㎡、検出面からの深さ約13cmで床面に至る。床面は所々安山岩と思われる円礫が顔を覗かせる。壁の立ち上がりは西辺以外やや急である。埋土は2層からなり、廃絶後暗茶褐色土が堆積し、次に茶褐色砂質土が堆積する。土器はパンケース1箱分出土した。

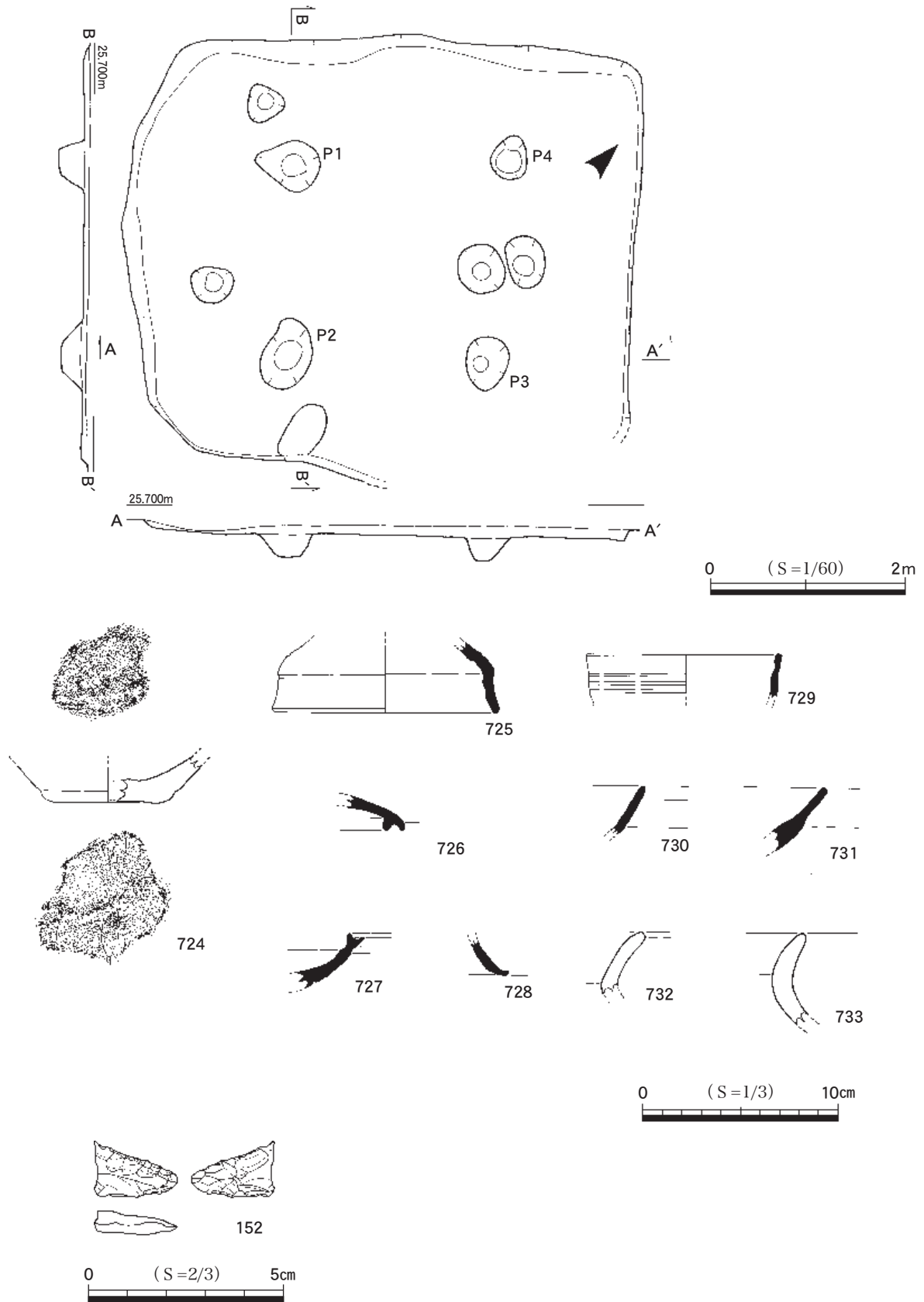
カマドは住居北壁に敷設されている。支柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は30～50cm、深さ17～24cm、P1・2間約1.8m、P2・3間約1.5m、P3・4間約1.9m、P4・1間約1.6mを測る。柱穴は浅いため東側の住居の残り具合の悪さと合せ見て後世にかなりの地下げが本住居付近で行われたことが想像される。他の柱穴P5～10は、直径13～32cm、深さ16cmと支柱穴より規模が小さい。支柱穴の補助穴であろうか。壁溝は認められない。

### カマド (第179図)

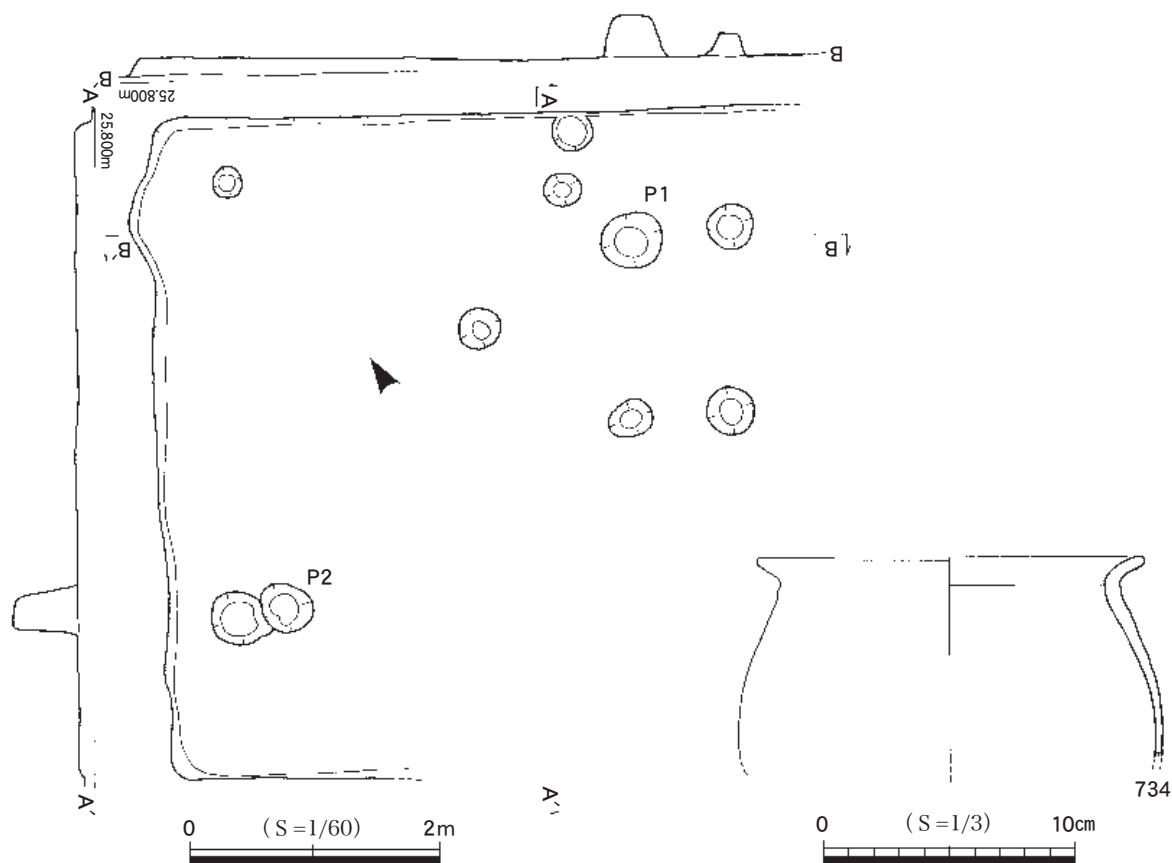
住居北壁中央に構築される外側に張り出さないタイプである。カマドは、焚口90cm、最大幅1.3m、奥行き78cmの規模である。高さは14cmと残りが悪い。中央部の床面に赤色の被熱硬化面が認められるが、後世の柱穴により一部損壊している。被熱硬化面の左右に袖石を埋めていたと思われる穴があり、東側の穴には安山岩の袖石の残欠が残る。一方、西側の穴には石などは確認できず、住居廃絶の際に抜き取られた可能性がある。埋土は、被熱硬化面直上に焼土を多量に含む暗茶褐色砂



第176図 3次SH1平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/40)  
出土遺物 (S=1/3 (718~723)、S=2/3 (151))



第177図 3次SH2平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3 (724~733)、S=2/3 (152))



第178図 3次SH3平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

質土(1・2層)が堆積する。4層の灰白色砂質土はカマドの袖を構成していた部位であると思われるが、袖下位の部分がそのまま遺存していたかどうかは残存状況が悪く明確ではない。

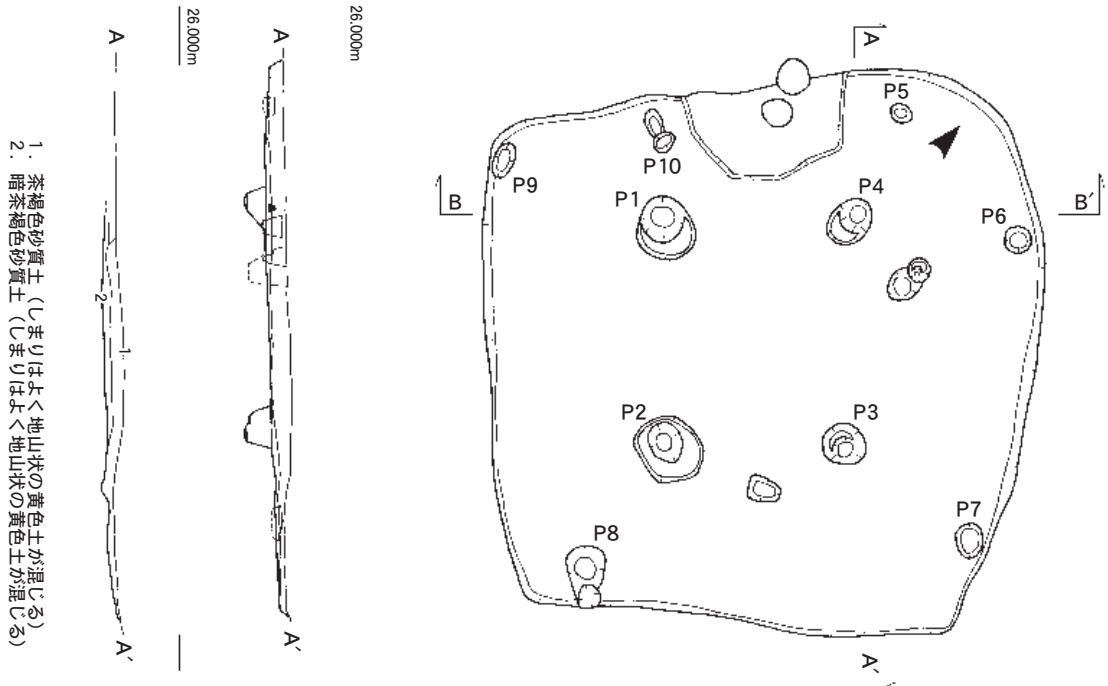
#### 出土遺物 (第180図)

土器6点を図示した。735～737、740は須恵器である。735～737は坏身。短い口縁部が付くTK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。740は大甕の口縁部。739は甑の取手であろう。

#### SH3 (第181図)

第2調査区J-9で検出した竪穴住居跡である。近代の耕作溝により住居上部が損壊している。平面形態は長方形で、N20°W方向に軸線に向ける。南北4.5m、東西4.6m、面積約21㎡、検出面から床までの深さ約15cm、貼り床は約10cmの厚さで施されている。壁の立ち上がりは急である。貼り床は暗茶褐色砂質土で、床面から検出面までは茶褐色砂質土の単層である。

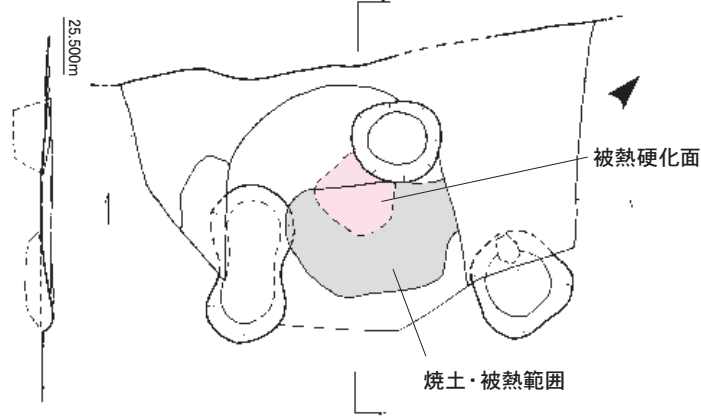
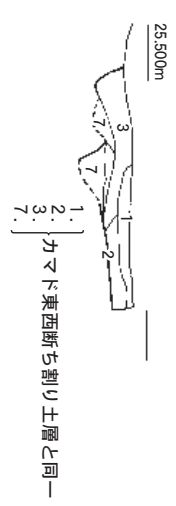
カマドは住居北壁中央に敷設されている。住居主柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は20～44cm、深さ44～48cm、P1・2間約2m、P2・3間約2m、P3・4間約2m、P4・1間約2.1mを測る。他の柱穴の役割については不明であるがいずれも主柱穴より浅いため、主柱穴の補助穴もしくは後世の切り込みと考えられる。



0 (S=1/60) 2m

26.000m  
B B'

26.000m 1. 茶褐色砂質土 (しまりはよく地山状の黄色土が混じる)  
2. 暗茶褐色砂質土 (しまりはよく地山状の黄色土が混じる)

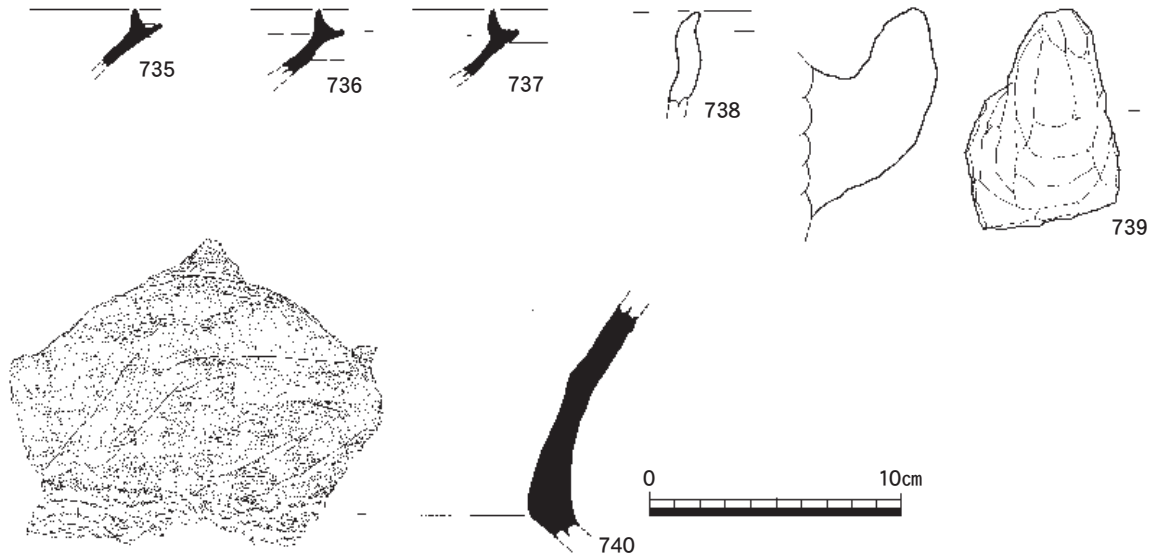


25.500m  
0 (S=1/20) 50cm

- 1. 暗茶褐色砂質土 (焼土多量、炭少量燃焼部)
  - 2. 1層より炭の混入率が高い (燃焼部)
  - 3. 暗茶褐色砂質土2 (土器片少量、炭混じり)
  - 4. 灰白色砂質土 (カマド袖。固くしめる)
  - 5. 茶褐色砂質土 (暗茶褐色ブロック土混入。貼床か)
  - 6. 赤褐色砂質土 (被熱硬化面)
  - 7. 暗灰色砂質土 (袖石埋め込みピット。袖石抜き取り済)
- 基本的に暗茶褐色砂質土で構成され、内包物により分層

第179図 SH1平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/20)





第180図 SH1出土遺物 (S=1/3)

#### カマド (第182図)

住居北壁中央に構築される外側に張り出すタイプである。焚口30cm、最大幅46cm、奥行き1.5m、高さ14cmの規模で検出した。ほとんどを白色の粘土で覆うような状態であった。白色の粘土を除去すると、須恵器や土師器の破片、円礫が一定量出土した。中央部に被熱による黄白色の硬化面が認められ、その下位に赤褐色の焼土面が確認できた。硬化面の両サイドには小穴があり、袖石などのカマド焚口部の部材が埋められていたものと推測する。埋土は白色粘土で覆われていたことから、カマド祭祀行為が行われたものと推測する。

#### 出土遺物 (第182図)

土器9点を図示した。741～746は住居内から出土した遺物である。741は須恵器の蓋。低平な天井部と口縁部の境に稜を有するTK209段階でも古相の資料。6世紀末～7世紀初頭に属する。742～746は土師器。742は甕か甑の口縁部。743は甑。744は鉢か。745は壺。746は住居中央東で出土したミニチュア土器。壺を表現したものであろう。747～749はカマド付近から出土した一群。747～749は須恵器口縁部。747・748は坏蓋。器高の低平化がみられる。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。749は坏身。観察表では土師器としたが、須恵器の可能性もある。短い立ち上がりが付く。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。

#### SH6 (第183図)

第3調査区L-2で検出した竪穴住居跡である。北東部分が床面近くまで削平され、北壁中央部分が後世の土坑に切り込まれている。平面形態は長方形で、N12°W方向に軸線を向ける。南北4.3m、東西3.9m、面積約17m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さ約20cm、貼り床は約5～10cmの厚さで施される。壁の立ち上がりは急であり、壁下に最大幅25cm、深さ10cmの周溝がある。貼り床は粘性のある暗黄褐色土で構築され、埋土は焼土や炭化物を含む暗褐色や黒褐色土が堆積する。土器は少量出土した。

カマドは袖など明確なものが確認されていないが、住居北壁付近に焼土範囲を確認した。住居主柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は20～44cm、深さ44～48cm、P1・2間約2m、P2・3間約2m、P3・4間約2m、P4・1間約2.1mである。他の柱穴の役割については不明である。

#### カマド (第183図)

住居北壁付近で焼土範囲を確認している。住居外側への張り出しの有無は不明である。カマド本体は削平を受け残存しない。カマド下部構造とみられる約56×40cmの浅い土坑だけが認められる。埋土は焼土を多く含む硬くしまるため、被熱硬化面である可能性が高い。焼土東側の小穴は袖石などカマド部材を据える穴であったかもしれない。

#### 出土遺物 (第183図)

750は須恵器の蓋である。天井部が低平なため6世紀末～7世紀初頭の所産であろうか。

#### SH7 (第184図)

第3調査区K-3で検出した竪穴住居跡である。平面形態はほぼ正方形で、N62°E方向に軸線に向ける。南北6.6m、東西6m、面積約40㎡、検出面から床面までの深さ約15cm、貼り床は約10cmの厚さで施されている。壁の立ち上がりは急であり、北側を除く壁下に最大幅25cm、深さ約13cmの周溝が認められる。貼り床は粘性のある暗黄褐色土で構築され、埋土は焼土や炭化物を含む暗褐色土が堆積する。土器はパンケース3箱分出土した。

カマドは住居西壁付近に敷設されている。住居主柱穴はP1～4と思われる。柱穴直径は36～44cm、深さ48cm、P1・2間約1.5m、P2・3間約1.7m、P3・4間約1.5m、P4・1間約1.4mである。住居内から他に多くの柱穴が検出されているが、本住居の機能していた時代のものであるかは不明。規則的な配置をとらないため後世に切り込まれたものが大半と思われる。

#### カマド (第185図)

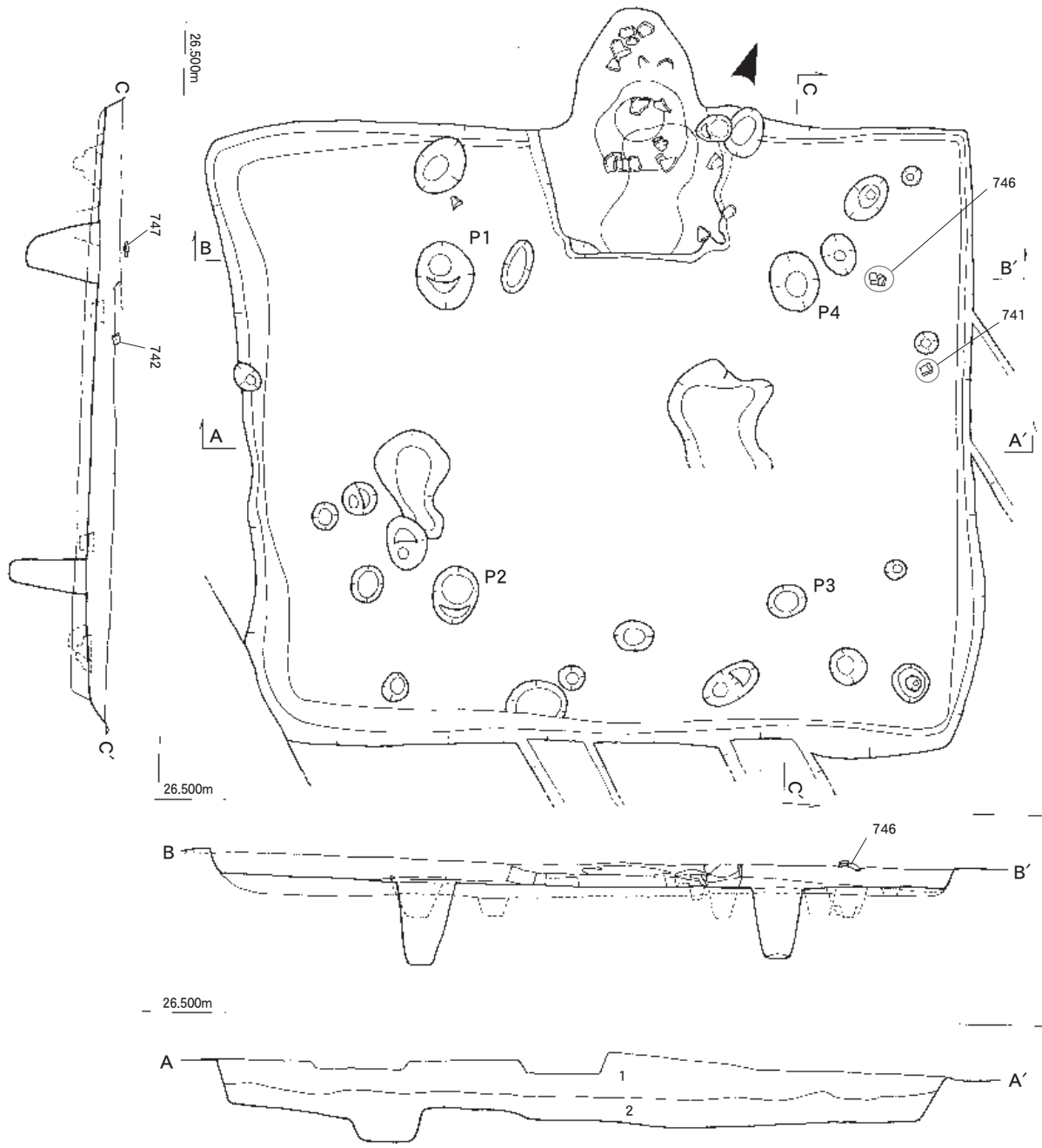
住居西壁中央に構築される。カマド本体とそれに接続する煙道部が北側に伸びている。後世の切り込みにより損壊が激しいが、いわゆるオンドル式カマドと考える。

本体の焚口約60cm、最大幅約1m、奥行き約1.7m、高さ24cmの規模で検出した。表面の暗褐色土を除去すると、焼土粒子を非常に多く含む暗赤褐色土が検出される。この層位からは須恵器や土師器が多く検出されている。カマド機能停止の際のカマド祭祀の痕跡であろう。この層を除去すると幅70×50cmの硬くしまる被熱硬化面が現れる。硬化面南側は袖石などの部材を差し込んだとみられる小穴がある。硬化面中央部には甕が天地逆さにして据え置かれ支脚として代用されていた。

カマド本体の北側は住居壁に沿う形で煙道が敷設されている。煙道部は長さ2.45m、幅60cmを測る。明確に筒状の煙道跡を保持しておらず潰れたような状態であったが、上層にカマド埋土と同じ土が堆積していた点、袖石などを差し込んだ小穴の対になる穴が存在しない点、煙道部との接続部付近にカマド部材が認められない点などから、煙道跡と判断した次第である。

#### 出土遺物 (第186～188図)

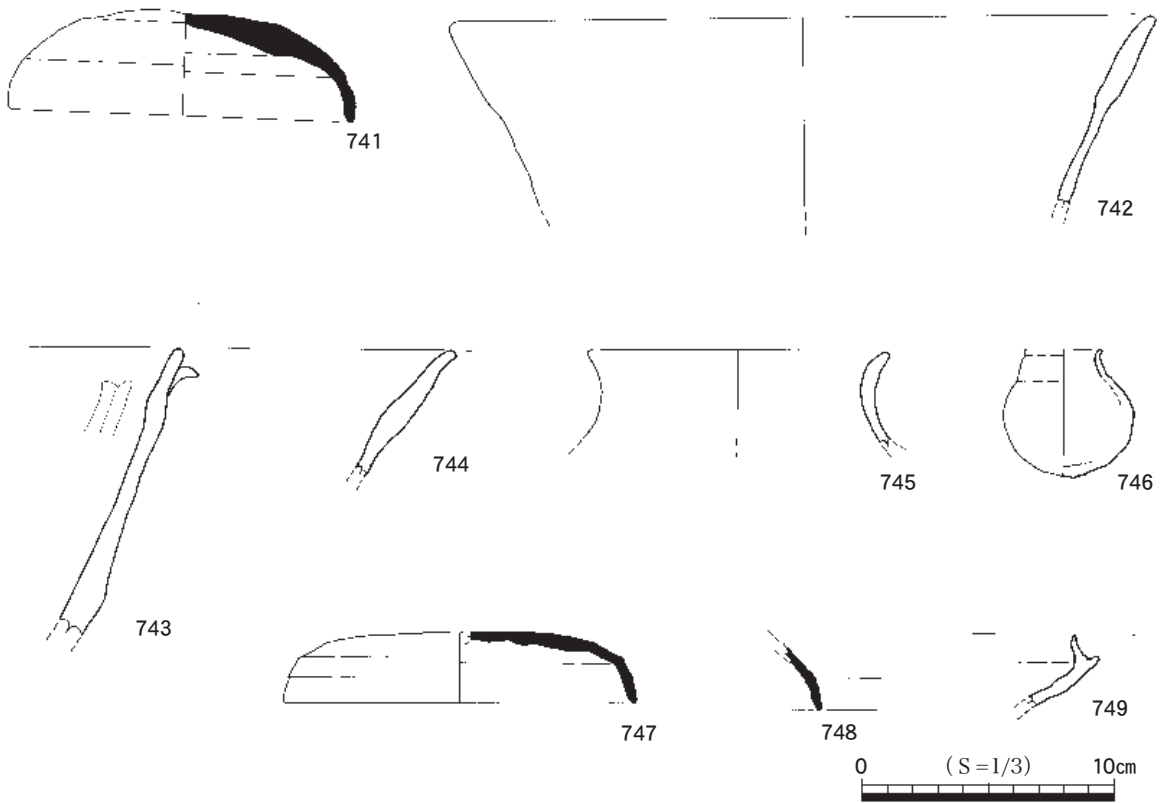
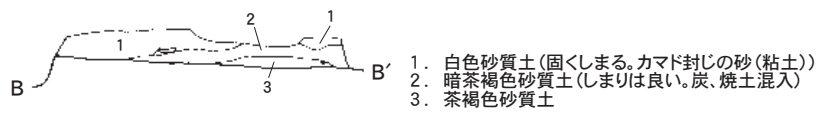
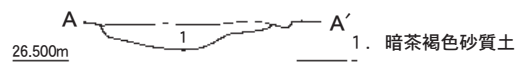
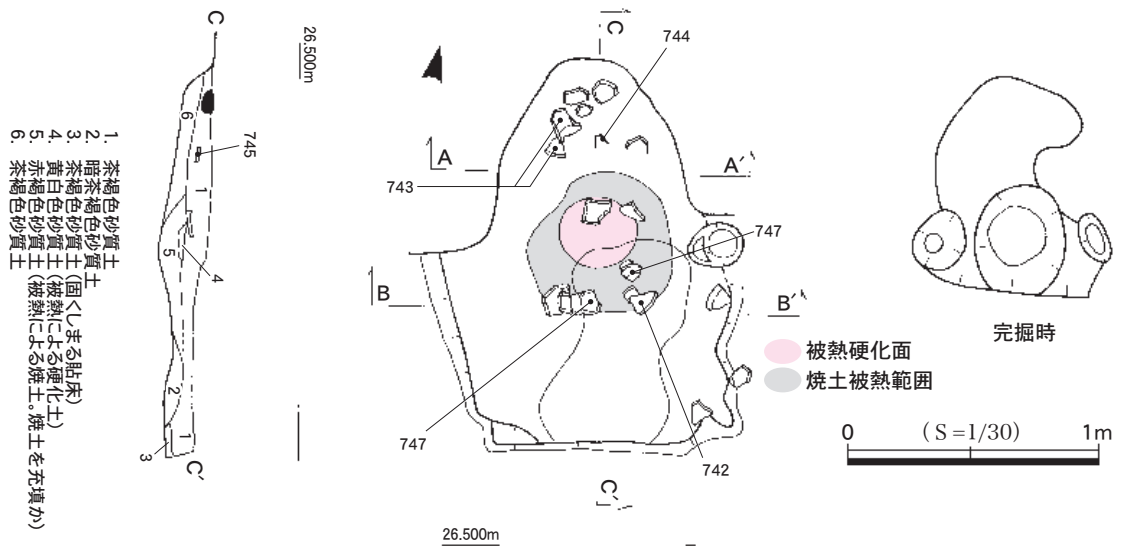
土器13点を図示した。756・759、766～768はカマド出土資料。それ以外は住居内から出土した。751は形式不明の縄文土器口縁部。752～765は須恵器。752～756は蓋で器高がやや高く、755は胴部と口縁部の境に稜がある。756は器高の高い蓋。天井部にヘラ記号状の痕跡があり、口縁部内面に段を有する。TK43段階、6世紀後半～末の資料と思われる。757～759は坏身。口縁部が受け部からやや長く立ち上がるTK43段階、6世後半～末の資料。758は観察表では底部を糸切りとしてい



- 1. 茶褐色砂質土 (ミニチュア土器、須恵器蓋出土)
- 2. 暗茶褐色砂質土 (1層より暗い。貼床)



第181図 SH3平・断面・土層図 (S=1/40)



第182図 SH3カマド平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

るがヘラ切りの誤り。761～763は高坏。761は760などと同じ形状の口縁部を持つため、同じ時期の所産。764は短頸壺。胴部最大径部に沈線を施す。765は甕の口縁部。766～771は土師器。766はやや長い口縁部が付く壺。768～770は観察表では壺としているが甕でもよい。768はカマドの支脚として利用された資料。771は甗の取手であろう。鉄製品は、772の1点が出土した。刀子と思われる。

石器は3点を図示した。153は搔器。流紋岩製の使用痕を有する剥片。表面に一部礫面を残す縦長剥片を素材とし、左右側縁下半に使用痕が顕著に認められる。154は打製石斧。周縁部に敲打痕が認められる。基部は欠損する。155は敲石である。

#### SH8 (第189図)

第3調査区J-2で検出した竪穴住居跡である。平面形態はほぼ正方形で、北や北西部が床面まで削平を受け壁の立ち上がりが認められない。N10°W方向に軸線に向ける。南北4.5m、東西4.4m、面積約20m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さは残りの良い箇所約20cm、貼り床は約10cmの厚さで施されている。壁の立ち上がりは急であり、東と南壁下に最大幅25cm、深さ約13cmの周溝が認められる。貼り床は粘性のある褐色土で構築され、埋土は焼土や炭化物を含む暗褐色土が堆積する。土器は少量出土した。

カマドは住居北壁付近に敷設されている。削平を受け上部構造は遺存せず、被熱硬化面とその下位の小土坑のみを検出した。主柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は40～66cm、深さ60～75cm、P1・2間約2.3m、P2・3間約1.8m、P3・4間約2.3m、P4・1間約1.8mである。その他住居壁付近に柱穴があるが、壁溝を切るため後世の所産と考えられる。

#### カマド (第189図)

住居北壁付近で確認した。外側への張り出しの有無は不明。上部構造はすでに失われている。本住居やSH6も削平が著しく、さらに昭和63年度に大分県教委が行った調査でも被熱硬化面だけを検出することが多いことから調査地北側はある時期に大規模な地下げが行われていることが想像される。硬化範囲は60×45cm、中心部の直径30cmの範囲が楕円形状に特に硬化していた。硬化範囲の下はわずかにくぼんでいる。カマドの燃焼部であろう。袖石などの部材を差し込む際に構築する小穴は検出できなかった。削平されたことも考えられる。

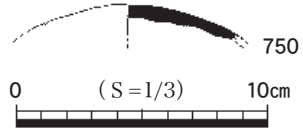
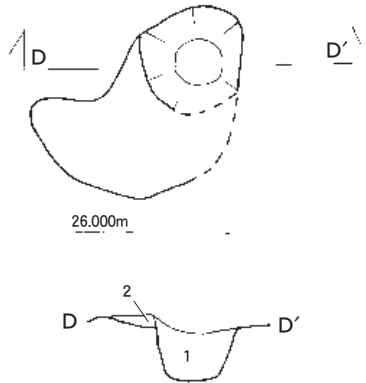
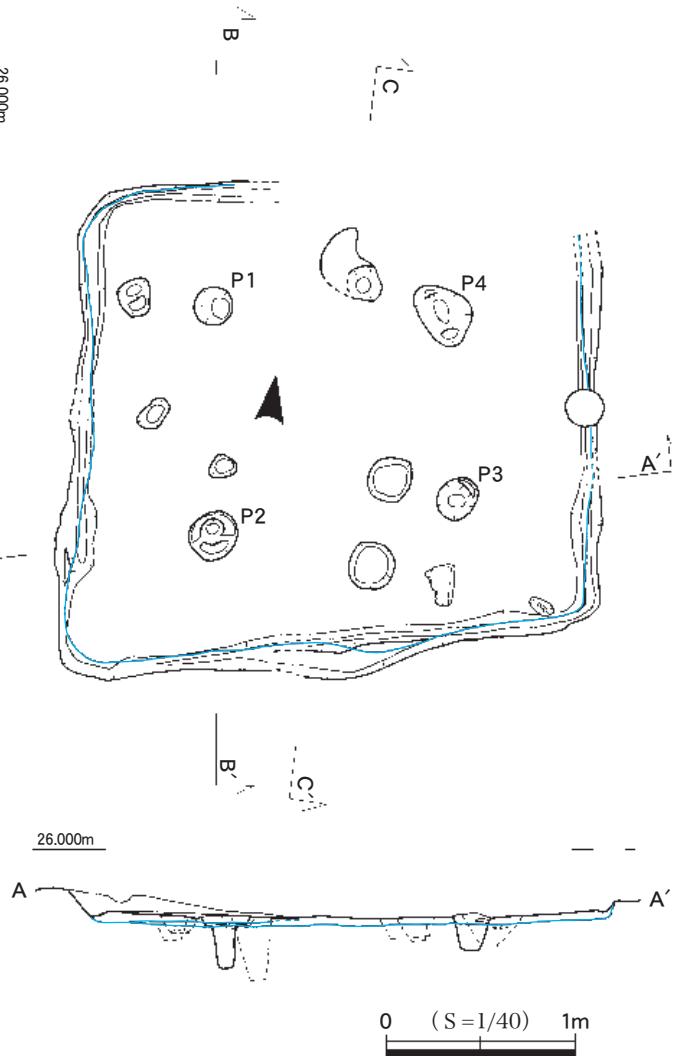
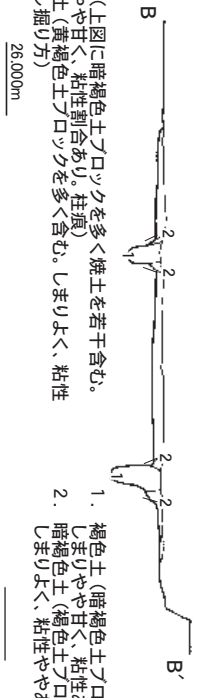
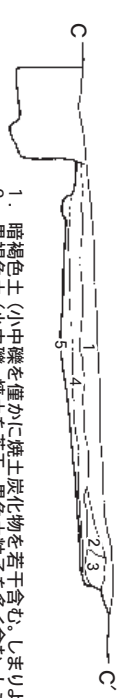
#### 出土遺物 (第190図)

土器7点を図示した。773～777は須恵器。773・775は坏蓋。774は坏蓋か高坏の脚端部の可能性がある。776は坏身で口縁部の立ち上がりは短い。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。778・779は土師器。778は高坏。779は壺か甕の口縁部。石器は1点を図示した。156は台石である。表面に擦痕が認められる。

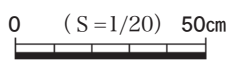
#### SH10 (第191図)

第3調査区J-3で検出した竪穴住居跡である。平面形態はほぼ正方形である。N25°W方向に軸線に向ける。南北5.5m、東西5.8m、面積約32m<sup>2</sup>、検出面から床面までの深さ約20cm、貼り床は約5cmの厚さで施されている。壁の立ち上がりは急であり、壁下に幅15cm、深さ約10cmの周溝が認められる。貼り床は暗褐色土で構築され、埋土は焼土や炭化物を含む暗褐色土が堆積する。土器はパンケース1箱分出土した。

1. 褐色土(上部に暗褐色土ブロックを多く焼土を若干含む。しまりやや甘く粘性割合あり。柱痕)
2. 暗褐色土(黄褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性余りなし)
1. 暗褐色土(暗褐色土ブロックを多く、焼土炭化物を若干含む。しまりよく、粘性余りなし)
2. 暗褐色土(焼土を若干、黒色土粒子を多く含む。しまり非常によく、粘性余りなし)
3. 暗褐色土(焼土、炭化物を若干、黒色土粒子を若干含む。しまりよく、粘性ややあり)
4. 暗黄褐色土(黒色土ブロック、粒子を多く含む。しまりよく、粘性ややあり。貼床)
5. 黄褐色土(小中礫をやや多く含む。しまり非常によく、粘性あり。地山)

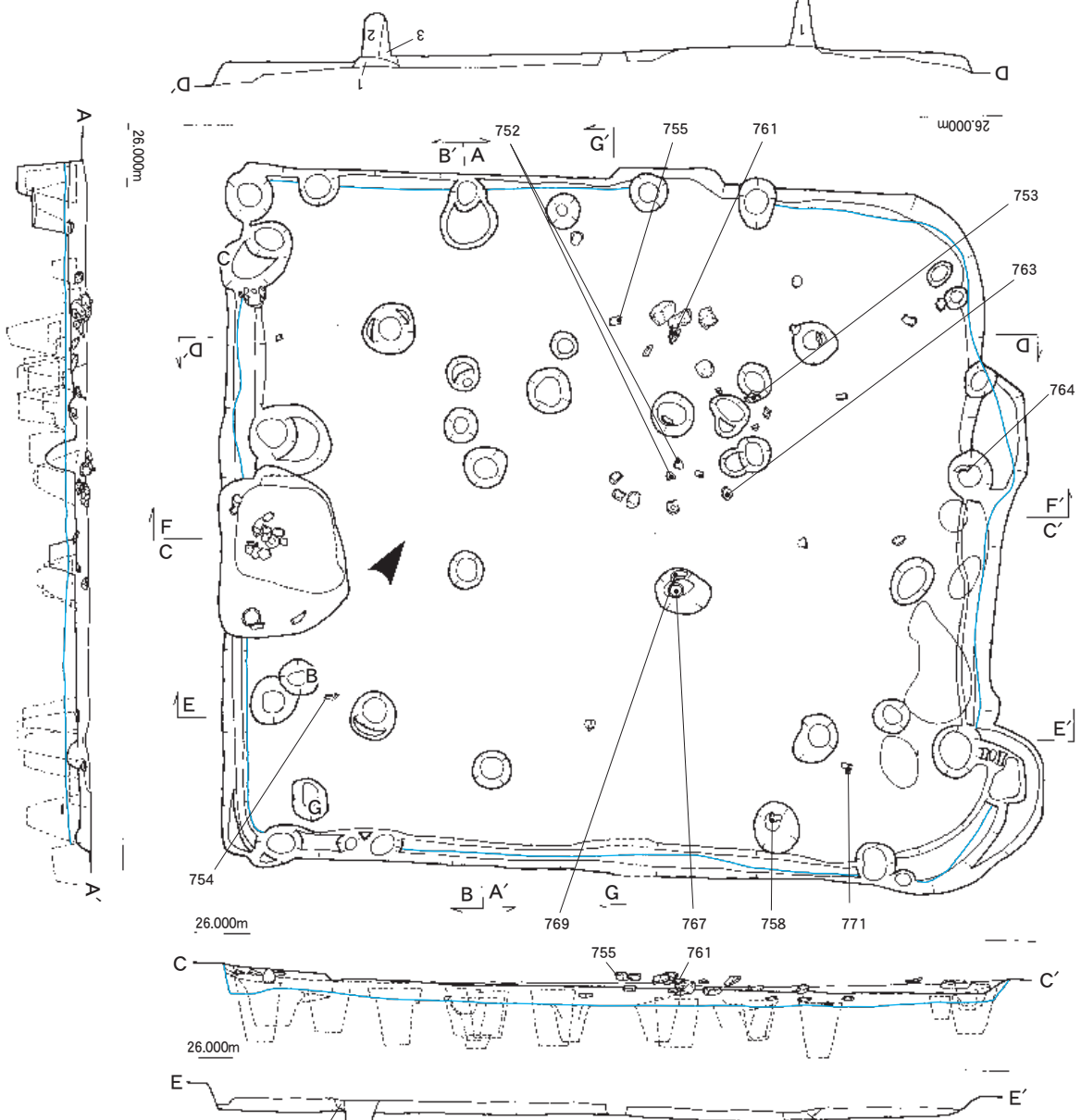


1. 暗褐色土(焼土を若干、炭化物を僅かに含む。しまりよく、粘性ややあり)
2. 暗黄褐色土(焼土を多く炭化物を若干含む。しまり非常によく、粘性余りなし)



第183図 SH6平・断面・土層図 (S=1/40) カマド平・断面・土層図 (S=1/20) 出土遺物 (S=1/3)

1. 暗褐色土 (褐色土ブロックを多く含む。しまりやや甘く、粘性あり。柱痕)
2. 暗褐色土 (褐色土ブロックを若干含む。しまり大きく、粘性あり。柱痕)
3. 黄褐色土 (黒色土ブロックを、やや多く含む。しまり大きく、粘性あり。掘り方)



1. 暗褐色土 (焼土、黒褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性割合あり。柱痕)
2. 暗褐色土 (炭化物、黄褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性ほとんどなし。掘り方)

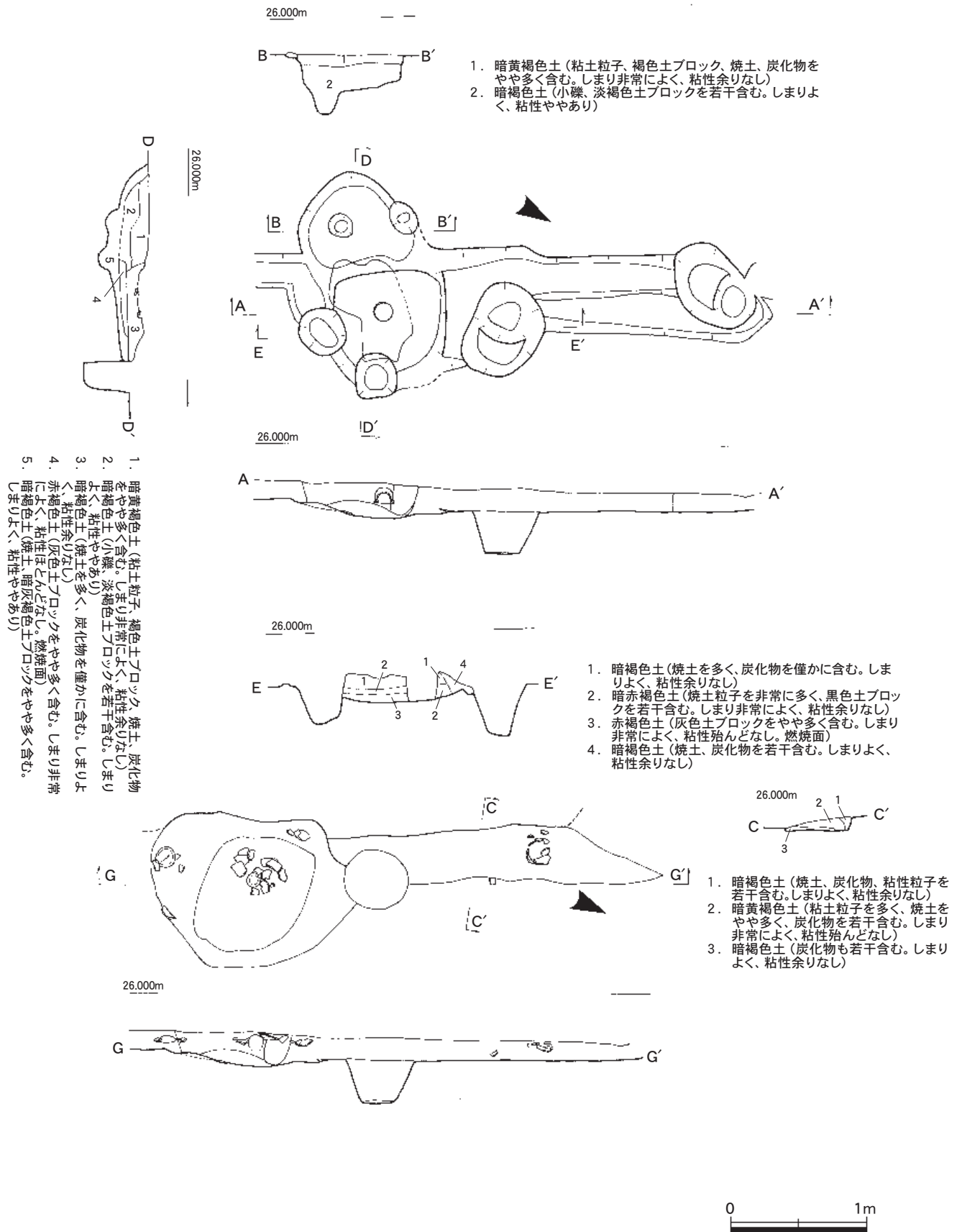
1. 暗褐色土 (焼土を若干含む。しまりよく、粘性殆どなし。貼床)
2. 褐色土 (黄褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性あり。柱痕)

1. 暗褐色土 (黄褐色土ブロックをやや多く、炭化物、焼土を若干含む。しまりよく、粘性ややあり)
2. 暗黄褐色土 (暗褐色土ブロックを若干、炭化物をわずかに含む。しまりよく、粘性あり。貼床)

1. 暗茶褐色砂質土 (しまりはやや弱い。遺物を含む)
2. 暗橙色砂質土 (3層に似るが、やや暗い)
3. 橙褐色砂質土 (暗茶褐色土が斑に入る。貼床)

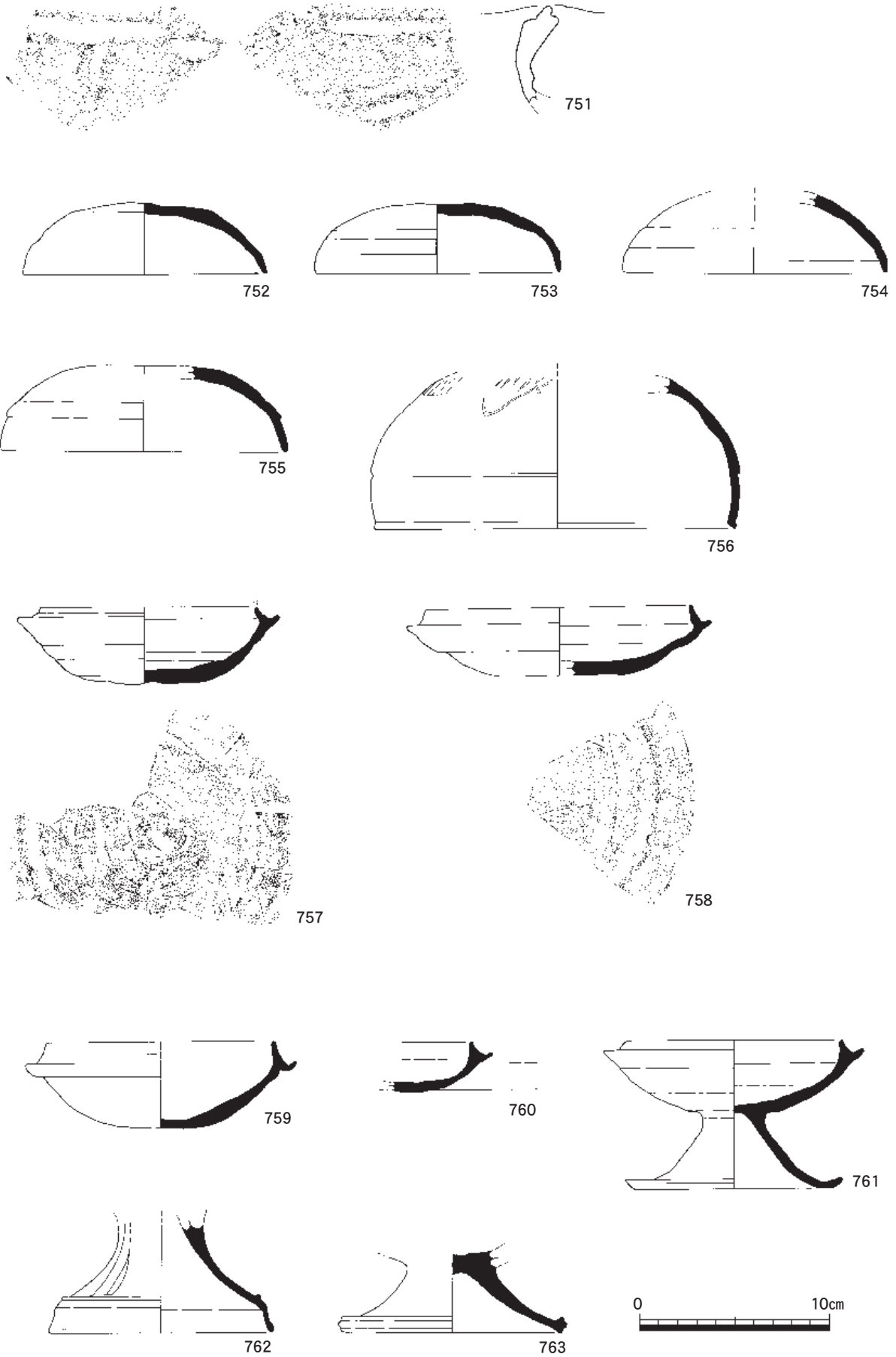


第184図 SH7平・断面・土層図 (S=1/60)

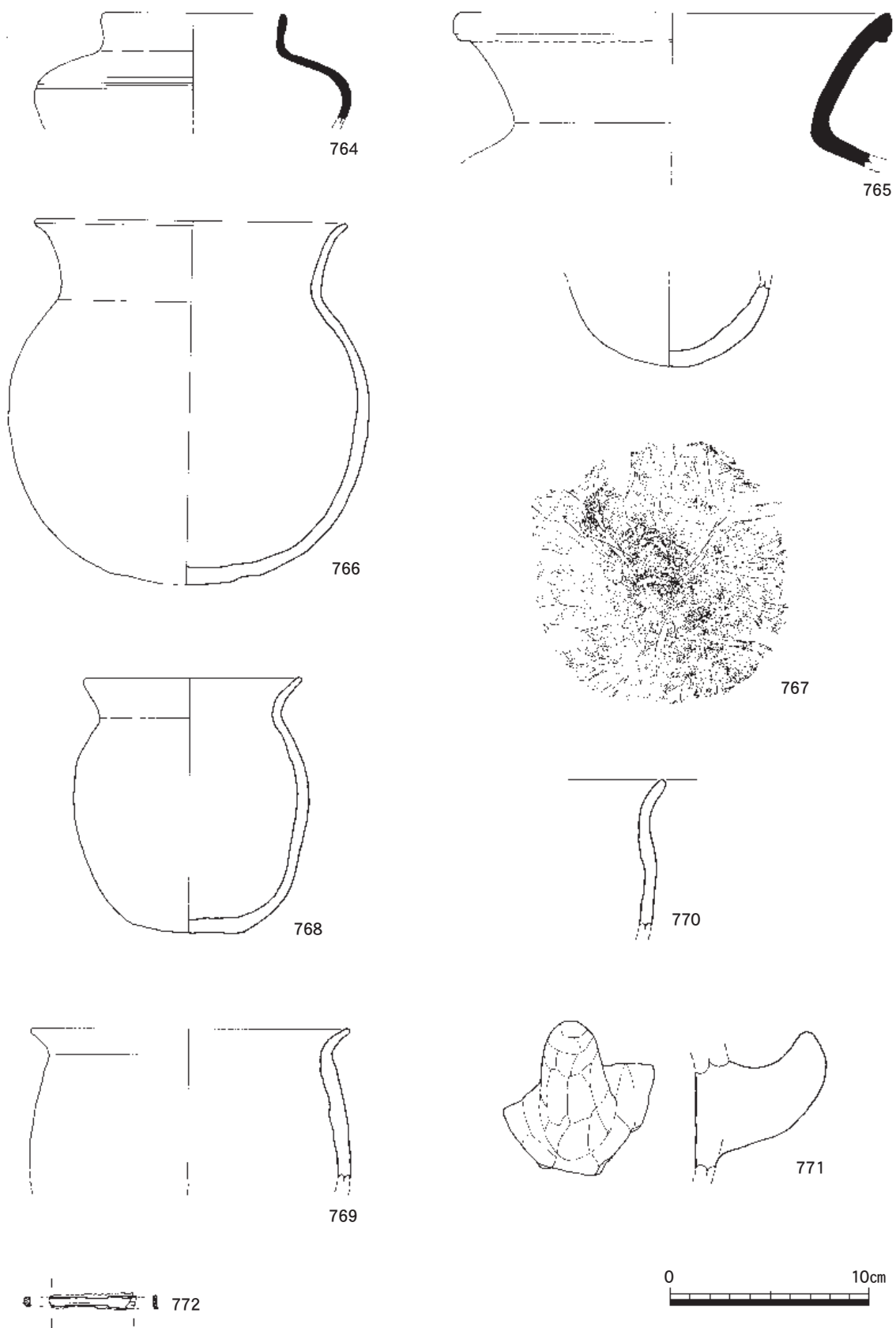


第185図 SH7カマド平・断面・土層図 (S=1/40)

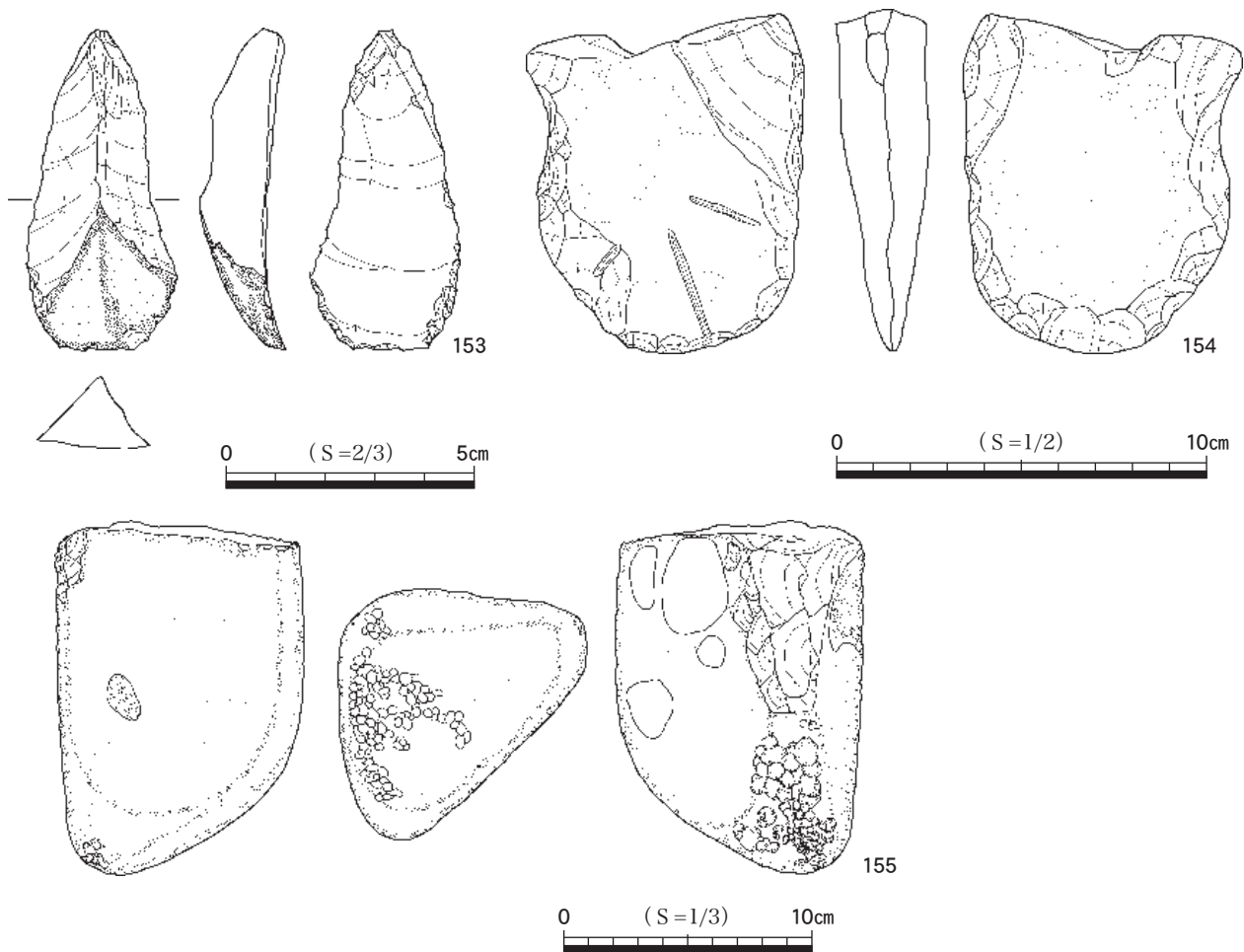




第186図 SH7出土遺物(1) (S=1/3)



第187図 SH7出土遺物(2) (S=1/3)



第188図 SH7出土遺物(3) (S=1/2 (154)、S=2/3 (153)、S=1/3 (155))

カマドは住居北壁に敷設されている。暗黄灰褐色土の粘土塊と焼土層が確認できた。住居南側にも粘土塊を確認したがこの部位にカマドは発見できていない。土器作りに用いる粘土溜まりであろうか。住居の主柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は44～66cm、深さ44～50cm、P1・2間約3.2m、P2・3間約3m、P3・4間約3m、P4・1間約3mである。柱痕跡はP1～3で確認でき、直径約15cmの大きさである。その他住居壁内に多くの柱穴が確認できるが、本住居に伴わない後世の遺構と考える。

#### カマド (第192図)

住居北壁中央に構築される外側に張り出すタイプである。検出した際は焼土を多く含む暗褐色土を囲むように暗黄灰褐色土の粘土塊が確認できた。当初、粘土塊をカマド本体の部材と考えたが袖構造を形成しておらず、カマド廃棄の際にカマド本体を覆う祭祀の痕跡と考えた。暗褐色の焼土層を除去すると、下位から土師器の甕(遺物No.784)が天地を逆さにした状態で出土した。支脚として利用されたものと考えられる。その他、土器の小片の散布も認められた。カマド祭祀の痕跡であろう。この支脚の南側は燃焼部と考えられ被熱し硬化していた。下位は浅い凹みが認められた。燃焼部横に小穴が認められた。部材を差し込んだ穴であろうか。

#### 出土遺物 (第192・193図)

土器6点を図示した。780～783は須恵器。783は観察表では土師器としているが須恵器の誤り。低温焼成のため色調が黄褐色を呈する。780・783は坏蓋で低平な天井部が特徴的。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。781は坏身口縁部。受け部からやや長く立ち上がる口縁部をもつ。TK43段階、6世紀後半～末の資料。784は観察表では壺としたが甕でもよい。カマドの支脚として利用された遺物。785は土師器の甕。外面に煤が付着する。

石器は3点を図示した。157は姫島産黒曜石製の石核。上端を調整打面とし、正面を作業面として剥離している。158は姫島産黒曜石製の石錐。小型の幅広剥片を素材とし、左右側縁に裏面から急斜度な加工を施して先端を形成しており、その先端を若干欠損している。159は台石。最大長約42cmの大きさである。裏面は平坦で据えるのに適している。

#### SH11 (第194図)

第3調査区L-3で検出した竪穴住居跡である。平面形態は隅丸長方形である。近世の溝(SD38)に住居中央部を削られ、北東域も後世に削平を受け削られている。N35°W方向に軸線に向ける。南北6.5m、東西5.6m、面積約36㎡、検出面から床面までの深さ約12cm、貼り床は約27cmの厚さで施されている。壁の立ち上がりは急であり、北東を除く壁下に幅25cm、深さ約20cmの周溝が認められる。貼り床は黄褐色土で構築され、埋土は焼土や炭化物を含む暗褐色土が堆積する。土器は少量出土した。

カマドは住居北壁で被熱硬化面を確認したためこの部分に敷設されていたと考える。住居の支柱穴はP1～4と思われる。柱穴の直径は40～58cm、深さ36～50cm、P1・2間約3m、P2・3間約3.7m、P3・4間約2.8m、P4・1間約3.6mである。柱痕跡はP4で確認でき、直径約15cmの大きさである。P3は柱穴壁を掘り過ぎたため大型に見えている。住居内に支柱穴以外の柱穴が確認できるが、本住居に伴わない後世の遺構と考える。

本住居跡は出土遺物が少ないため時期判断が困難であったが、4本の支柱穴とカマドの位置が本遺跡の他の古墳時代後期住居と類似するため当該期の遺構と推定している。

#### カマド (第194図)

住居北壁中央に構築される外側に張り出さないタイプである。削平によりカマド本体の殆どは失われている。被熱硬化面と少量の粘土塊のみを確認した。硬化面は赤褐色を呈する。硬化面を除去すると浅い土坑を呈したが、元々この部分に浅い土坑が存在したのか、熱反応により床面が変色した部分を掘り下げただけなのか調査時点では把握できていない。

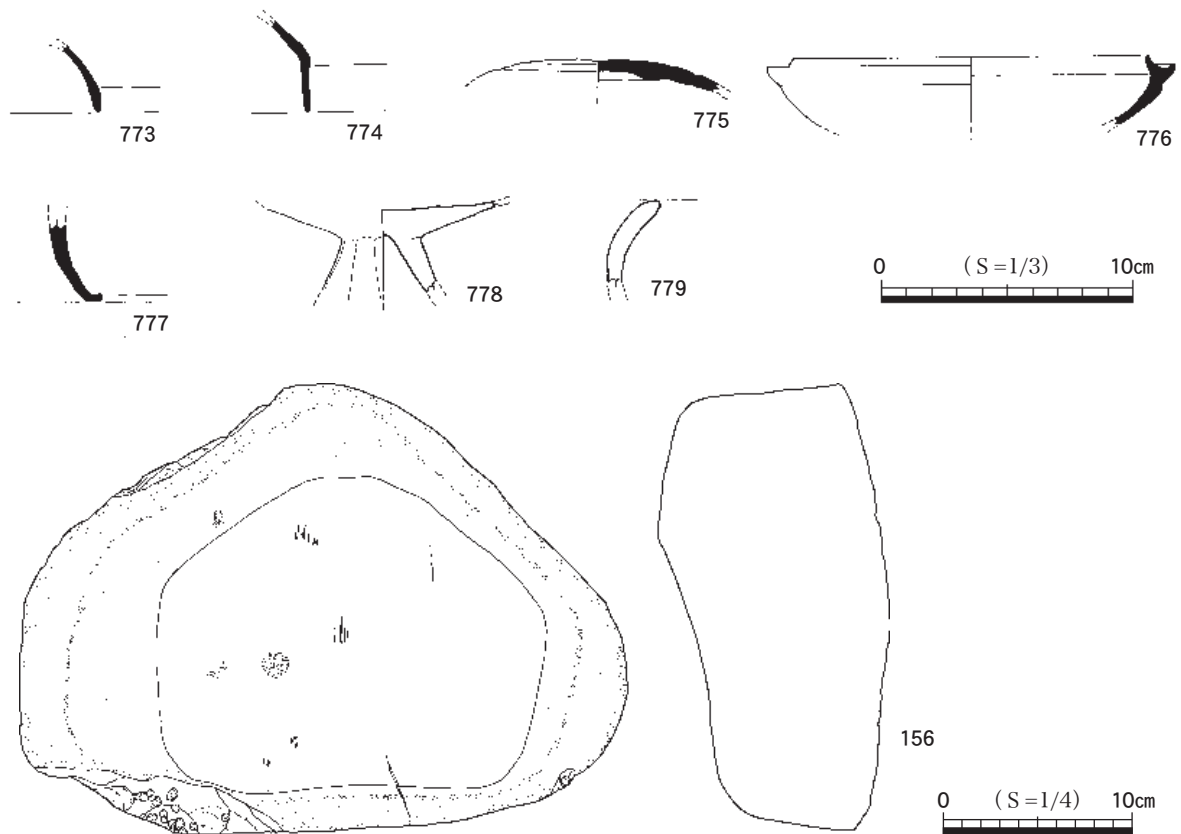
#### 出土遺物 (第194図)

出土遺物が少なく土器2点の図示に留まる。786は瓦質土器鍋の口縁部。混入品であろう。787は土師器の壺か鉢。

#### SH12 (第195図)

第3調査区O-4で検出した竪穴住居跡である。この付近は後世の削平が著しく、住居の形はほとんど失われている。残された部分から推定すると平面隅丸方形か長方形であったと考えられる。N10°W方向に軸線に向ける。南北2m、東西6.6mが遺存する。検出面から床面までの深さは約10cm、貼り床は約10cmの厚さで施されている。壁の立ち上がりは急であり、壁下に幅20cm、深さは約





第190図 SH8出土遺物 (S=1/3 (773~779)、S=1/4 (156))

10cmの周溝が認められる。貼り床は暗黄褐色土で構築され、埋土は焼土や炭化物を含む暗褐色土が堆積する。土器は少量出土した。

カマドは住居北壁で検出している。上部構造は既に失われている。住居の主柱穴はP1・2の2基検出した。柱穴の直径は35~40cm、深さ24~27cm、P1・2間4.5mを測る。柱痕跡はP1で確認でき、直径約15cmの大きさである。住居内に主柱穴以外の柱穴が確認できるが、本住居に伴わない後世の遺構と考える。

#### カマド (第195図)

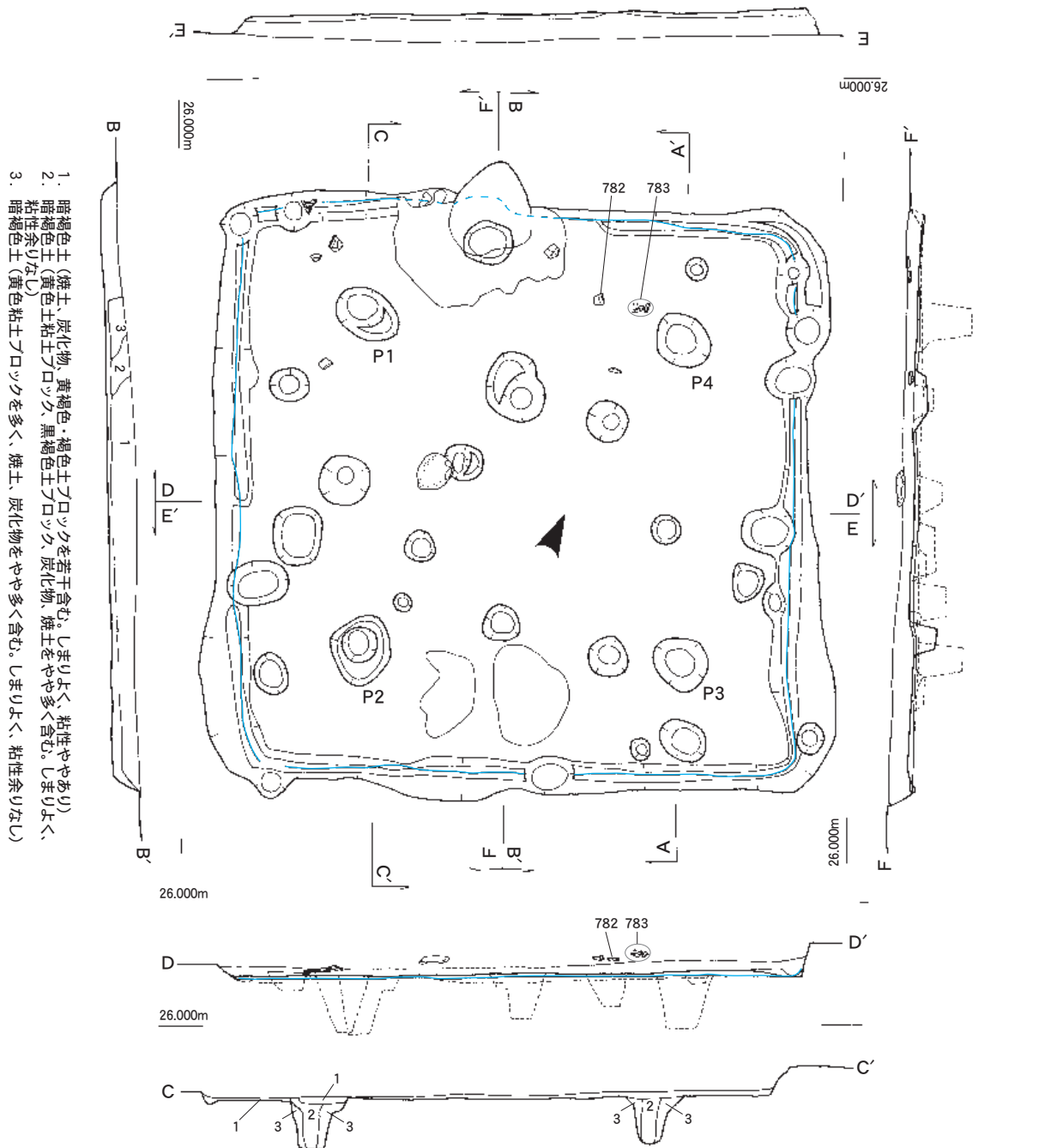
住居北壁中央に構築される外側にやや張り出すタイプである。住居北壁付近で支脚部と被熱硬化面を確認した。焚口75cm、最大幅1.05m、奥行き1.1mである。支脚部は土師器の甕(遺物No.790)が天地を逆さにした状態で出土している。硬化面両サイドは小穴が存在する。カマド部材を据えた遺構の可能性が高い。土器の破片が点在していることから、カマド祭祀を行ったものと考えられる。カマド下位は最大長1.1m、幅1m、深さ12cmの小土坑が確認されている。

#### 出土遺物 (第196図)

土器4点を図示した。全て土師器である。788は甕の口縁部。口径23cmの大型の資料。789~791は壺。790はカマドの支脚として利用された資料。

#### SH14 (第197図)

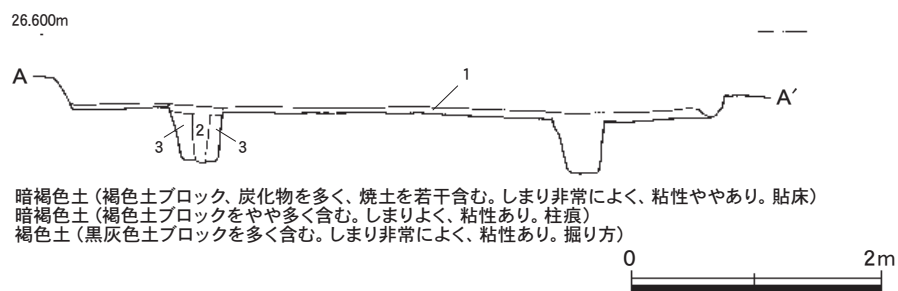
第3調査区M-9で検出した竪穴住居跡である。この付近も後世の削平や遺構の構築が著しく、



1. 暗褐色土 (黒褐色土ブロックを非常に多く、褐色土ブロック、炭化物、焼土を若干含む。しまり非常によく、粘性あまりなし)
2. 暗褐色土 (褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性わりとある。柱痕)
3. 褐色土 (黒灰色土ブロックを多く含む。しまり非常によく、粘性わりとある。掘り方)

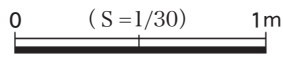
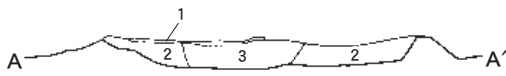
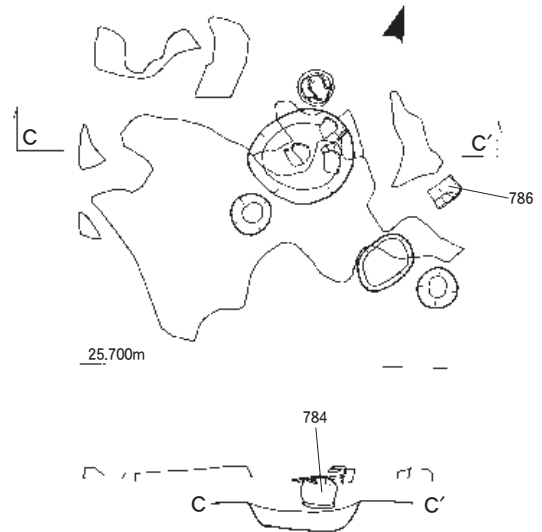
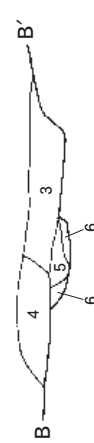
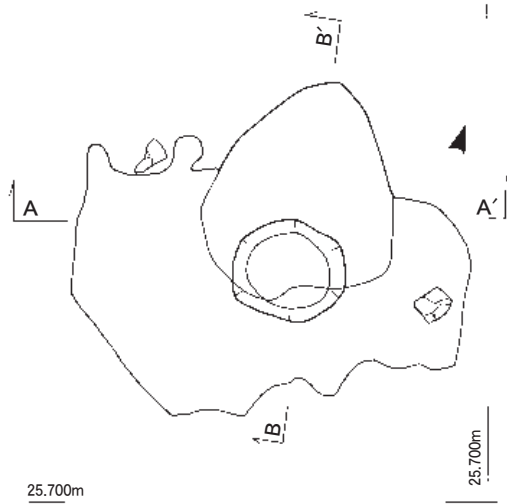
1. 暗褐色土 (黒褐色土ブロックを非常に多く、褐色土ブロック、炭化物、焼土を若干含む。しまり非常によく、粘性あまりなし)
2. 暗褐色土 (褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性わりとある。柱痕)
3. 褐色土 (黒灰色土ブロックを多く含む。しまり非常によく、粘性わりとある。掘り方)

1. 暗褐色土 (黒褐色土ブロックを非常に多く、褐色土ブロック、炭化物、焼土を若干含む。しまり非常によく、粘性あまりなし)
2. 暗褐色土 (褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性わりとある。柱痕)
3. 褐色土 (黒灰色土ブロックを多く含む。しまり非常によく、粘性わりとある。掘り方)



1. 暗褐色土 (褐色土ブロック、炭化物を多く、焼土を若干含む。しまり非常によく、粘性ややあり。貼床)
2. 暗褐色土 (褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性あり。柱痕)
3. 褐色土 (黒灰色土ブロックを多く含む。しまり非常によく、粘性あり。掘り方)

第191図 SH10平・断面・土層図 (S=1/60)



1. 赤褐色土（焼土を非常に多く含む。しまりよく、粘性余りなし）
2. 暗黄灰褐色土（焼土を若干、炭化物をやや多く、粘土粒子を多く含む。しまり非常によく、粘性殆どなし）
3. 暗褐色土（焼土、炭化物を多く含む。しまりよく、粘性余りなし）
4. 暗黄灰褐色土（暗褐色土ブロック、褐色土ブロックを多く、黄色土ブロック、小礫を若干含む。しまりよく、粘性あまりなし。粘土塊）
5. 赤褐色土（黒灰色土ブロックをやや多く含む。しまり非常によく、粘性余りなし。燃焼面）
6. 暗赤褐色土（黒灰色土ブロックをやや多く、炭化物を若干含む。しまりよく、粘性割合あり）



780



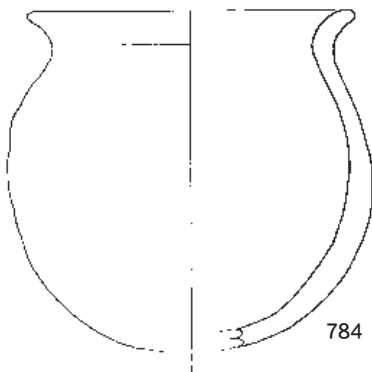
781



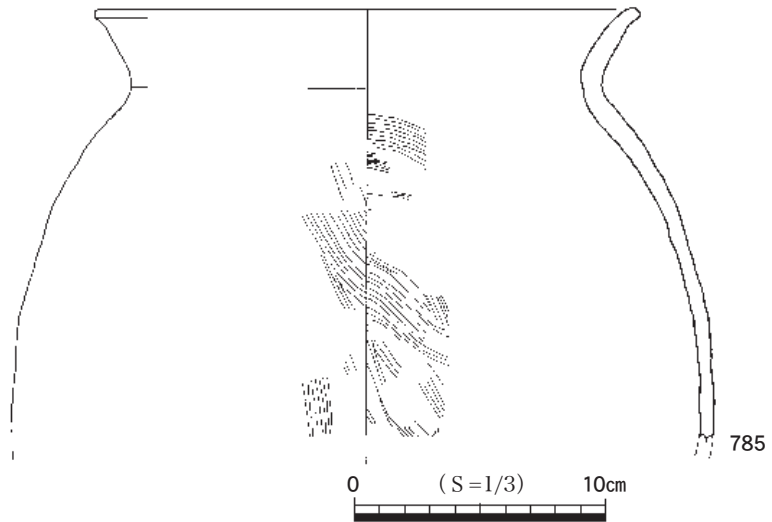
782



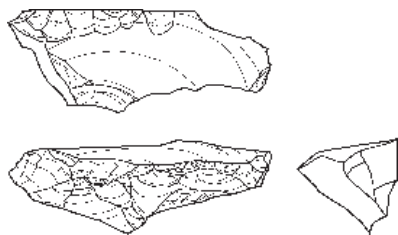
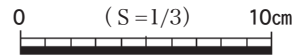
783



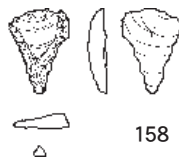
784



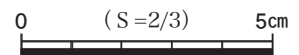
785



157

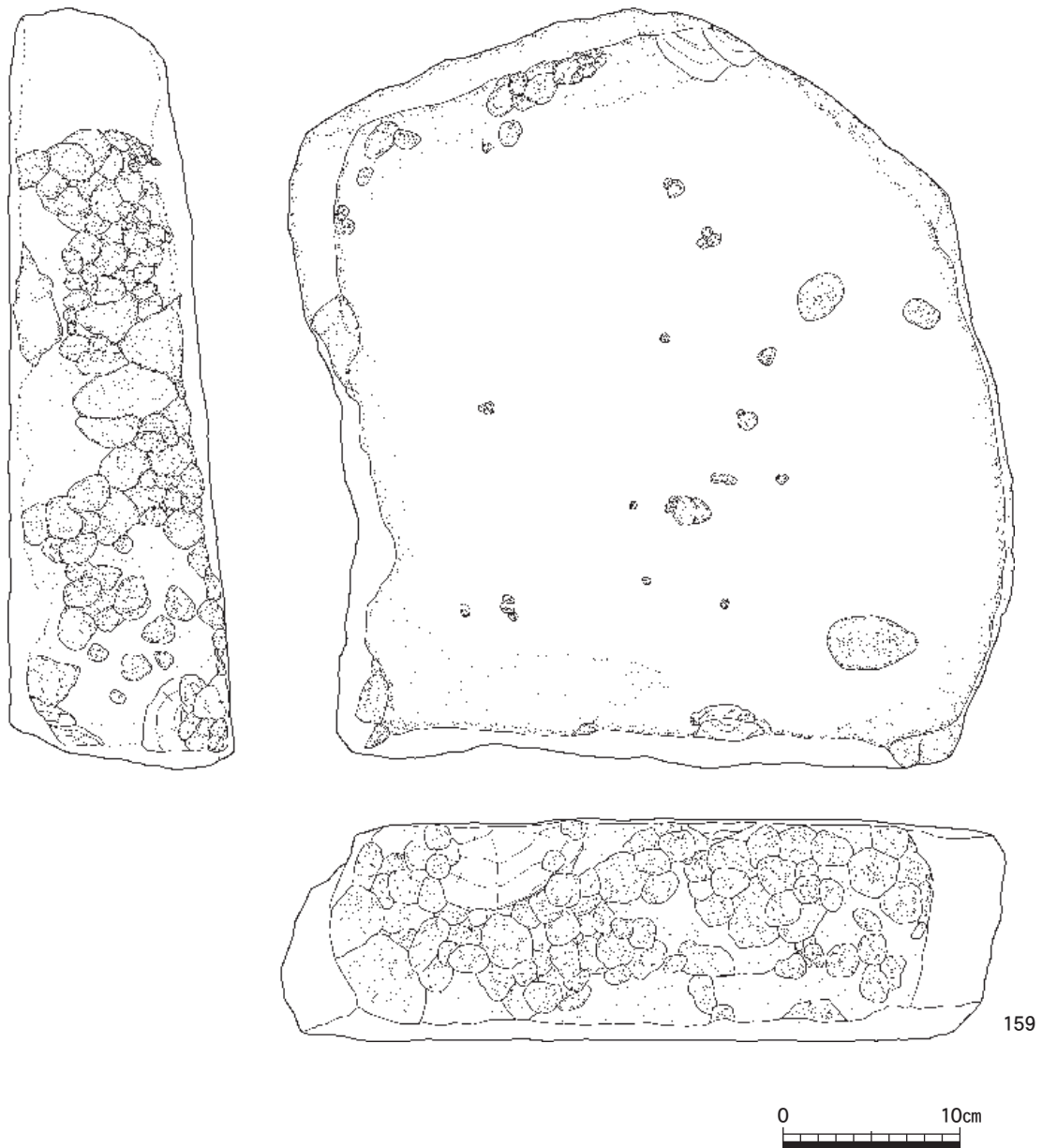


158



第192図 SH10カマド平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (1) (S=1/3 (780~785)、S=2/3 (157、158))





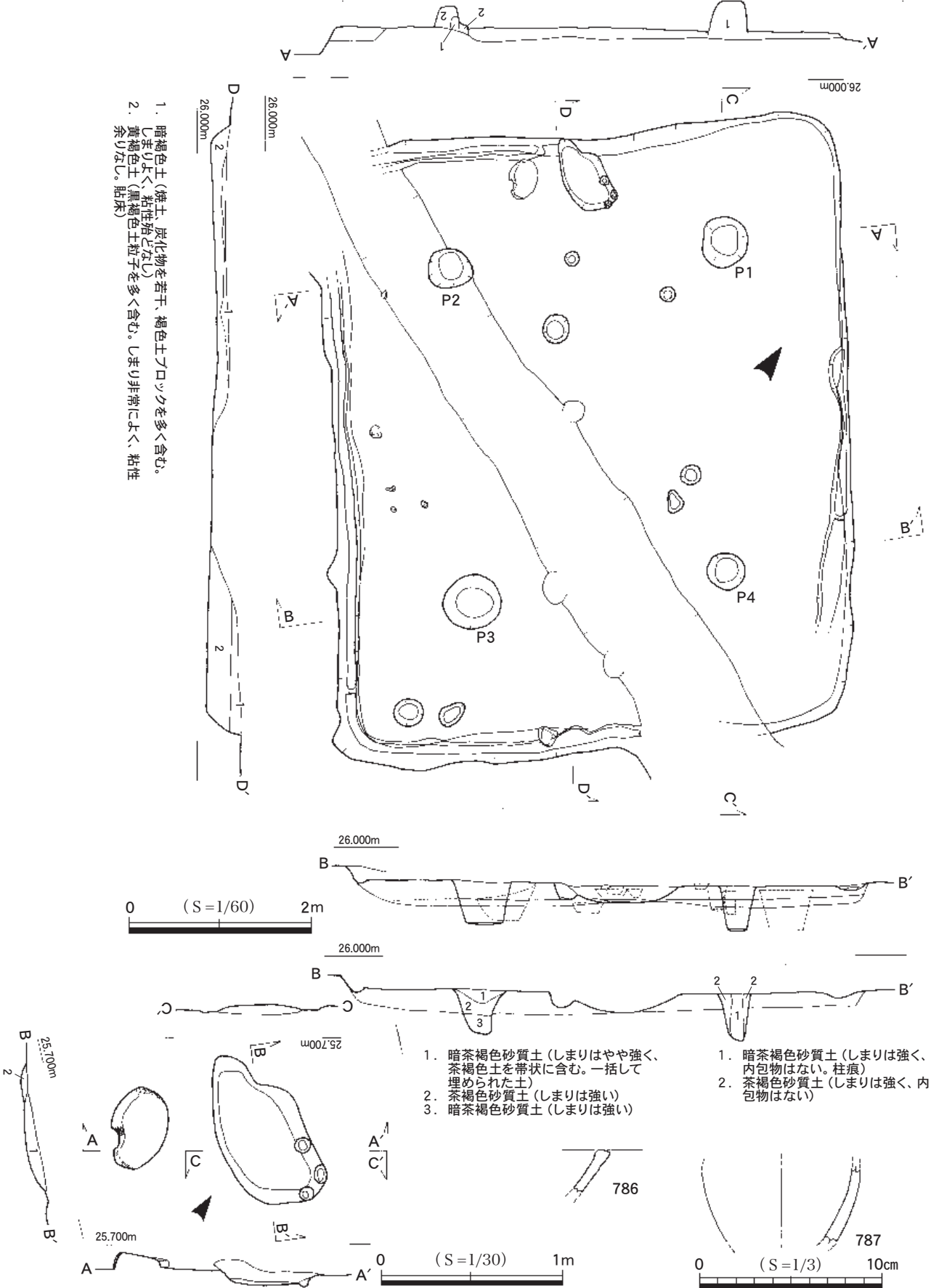
第193図 SH10出土遺物(2) (S=1/4)

住居の形はほとんど失われている。かろうじて住居北壁やカマド部分、柱穴が残されていた。平面隅丸方形か長方形であったと考えられる。N40°W方向に軸線に向ける。南北4m、東西3.5mが遺存する。検出面から床面までの深さ約15cm、貼り床は部分的に施されており、約5cmの厚みがある箇所もある。壁の立ち上がりはやや緩やかで、壁下に幅20cm、深さ約4cmの周溝が認められる。貼り床は茶褐色土で所々地山に露出している礫を覆う役割があったと推測する。埋土は土器粒や炭化粒を少量含む黒褐色砂質土が堆積する。土器は少量出土した。

カマドは住居北壁で検出している。住居の主柱穴はP1・2の2基検出した。柱穴の直径は25～32cm、深さ27～36cm、P1・2間2.5mを測る。住居内に主柱穴以外の柱穴が確認できるが、本住居に伴わない後世の遺構と考える。

- 1. 暗茶褐色砂質土 (しまりはやや強く、茶褐色土を帯状に埋入)
- 2. 1層より明るい (しまりは強い)

- 1. 暗褐色土 (焼土、炭化物を若干、褐色土ブロックを多く含む。しまり強く、粘性弱)
- 2. 黄褐色土 (黒褐色土粒子を多く含む。しまり非常に強く、粘性余りなし、粘床)



第194図 SH11平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

### カマド (第197図)

住居北壁付近で外側に張り出すように構築されている。一部後世の柱穴により破壊されている。検出時は黄白色砂質土で覆われていた。面的に少し掘り下げると、燃焼部と支脚を確認することができた。支脚には先がやや尖る被熱した安山岩と思われる石が用いられている。焚口85cm、最大幅1.13m、奥行き1.4mの大きさである。支脚前面は赤褐色の被熱硬化面がある。掘り下げの際に土器の破片が点在していたことから、カマド祭祀を行ったものと考えられる。カマド下位は最大長36cm、幅24cm、深さ5cmの小土坑を確認している。

### 出土遺物 (第198図)

土器5点を図示した。792～794は須恵器。792・793は受け部から立ち上がる口縁部が長い。TK43段階、6世紀後半～末の資料。794は壺か甕の胴部。795・796は土師器。観察表では壺としているが甕としてもよい。

### SH15 (第199図)

第3調査区L-6で検出した竪穴住居跡である。当初住居跡と認識していなかったが、地山に被熱箇所が認められ、その周囲を精査した結果、古代の溝(SD42)を挟んで長方形プランを確認したため、住居跡と判断した。SD42に切られており遺存状態は良くない。残された部分から推定すると隅丸長方形プランと考えられる。N63°W方向に軸線に向ける。南北4.3m、東西3.8m、検出面から床面までの深さ約16cmの大きさである。壁の立ち上がりは東側が急で西側が緩やかである。壁下の周溝、貼り床は認められない。土器は少量出土した。

カマドは住居北壁で検出している。上部構造は削平により既に失われている。住居の支柱穴はP1のみ検出した。柱穴の直径は26cm、深さ12cmの大きさである。住居内の支柱穴以外の柱穴は、本住居に伴うものか不明であるが大半が後世の遺構であろう。

### カマド (第200図)

住居北壁付近で外側に張り出すように構築されている。被熱硬化面と支脚に使われたと思われる石を検出した。石は安山岩の円礫で被熱している。上体をやや斜めに向けるため、原位置を保っていないと思われる。支脚の周囲はカマド燃焼部の被熱硬化面が認められる。当初カマドと認識しておらずトレンチをカマド本体を切断する形で設定したため焚口の法量は不明。残存部位で最大幅90cm、奥行き1.5mを測る。

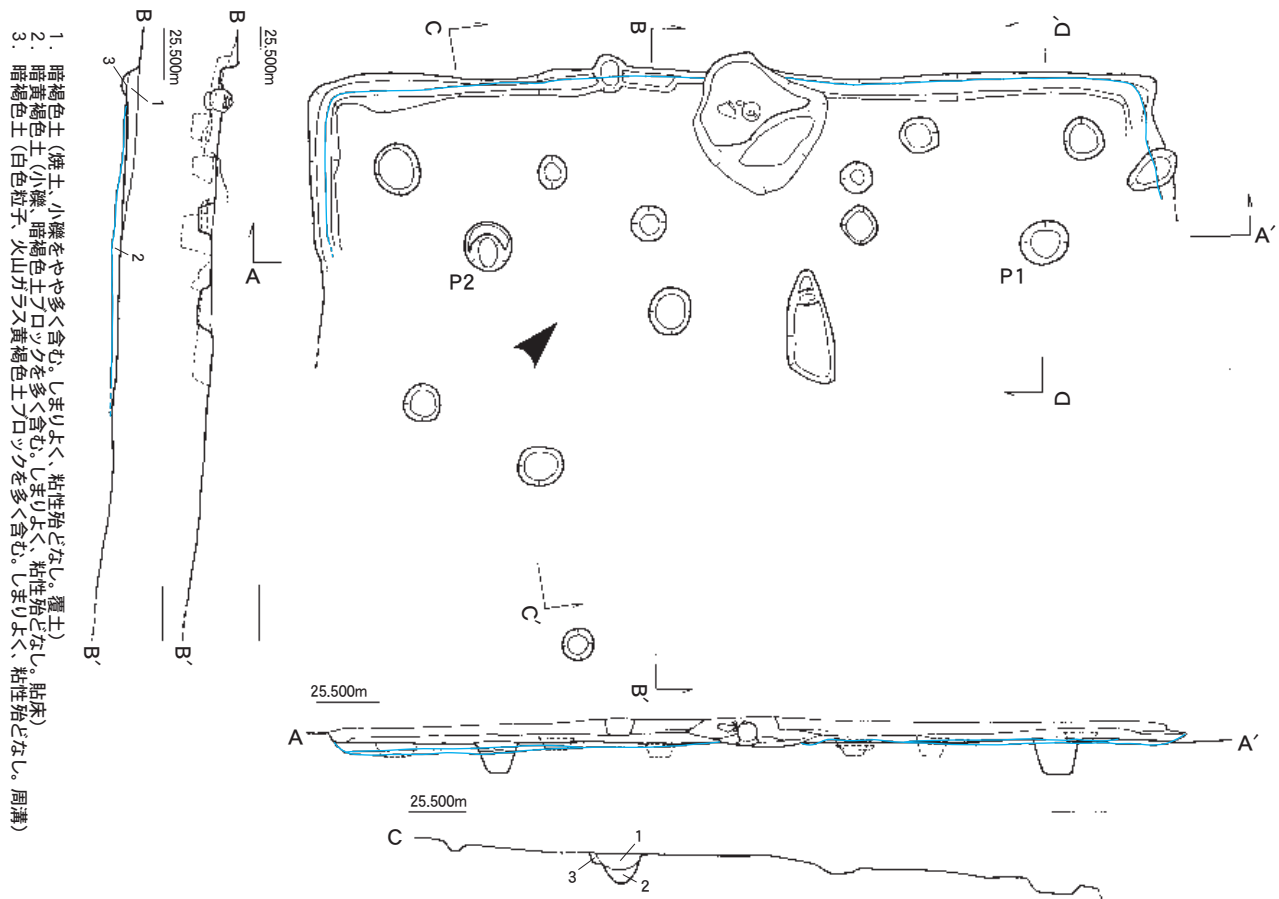
### 出土遺物 (第200図)

土器1点を図示した。797は須恵器の坏身。受け部からやや短い口縁部が立ち上がる。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。石器3点を図示した。160は磨石兼敲石。161・162は台石。両資料共に底面が平坦をなす。161は中央部が若干くぼむ。

### SH16 (第201図)

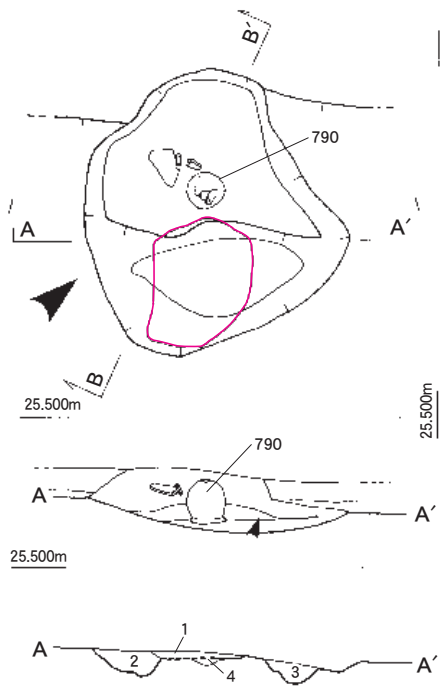
第3調査区I-5で検出した竪穴住居跡である。SH17廃絶後に構築されている。隅丸方形プランを呈す。N48°E方向に軸線に向ける。南北5m、東西5.4m、検出面から床面までの深さ約15cm、貼り床は約25cmの厚みで面的に施されている。壁の立ち上がりは東辺が緩やかで他辺は急である。壁下の周溝は部分的に巡らされている。土器はパンケース4箱分出土した。

カマドは住居西壁で検出している。住居の支柱穴としてP1～4を調査した。柱穴の直径は26～



1. 暗褐色土 (焼土、小礫をやや多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。覆土)
2. 暗黄褐色土 (小礫、暗褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。貼床)
3. 暗褐色土 (白色粒子、火山ガラス黄褐色土ブロックを多く含む。しまりよく、粘性殆どなし。周溝)

1. 暗褐色土 (小中礫を多く中礫若干含む。しまりよく、粘性あり。柱痕)
2. 暗黄褐色土 (中大礫を若干含む。しまり非常によく、粘性ややあり。柱痕)
3. 暗褐色土 (白色粒子、小中礫を多く含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。掘り方)



1. 暗褐色土 (焼土、小礫白色粒子を若干含む。しまりよく、粘性ややあり)
2. 赤褐色土 (黒灰色土ブロック、炭化物を多く含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。燃焼面)
3. 暗褐色土 (小礫黒褐色土ブロックを若干含む。しまりよく、粘性割合あり)

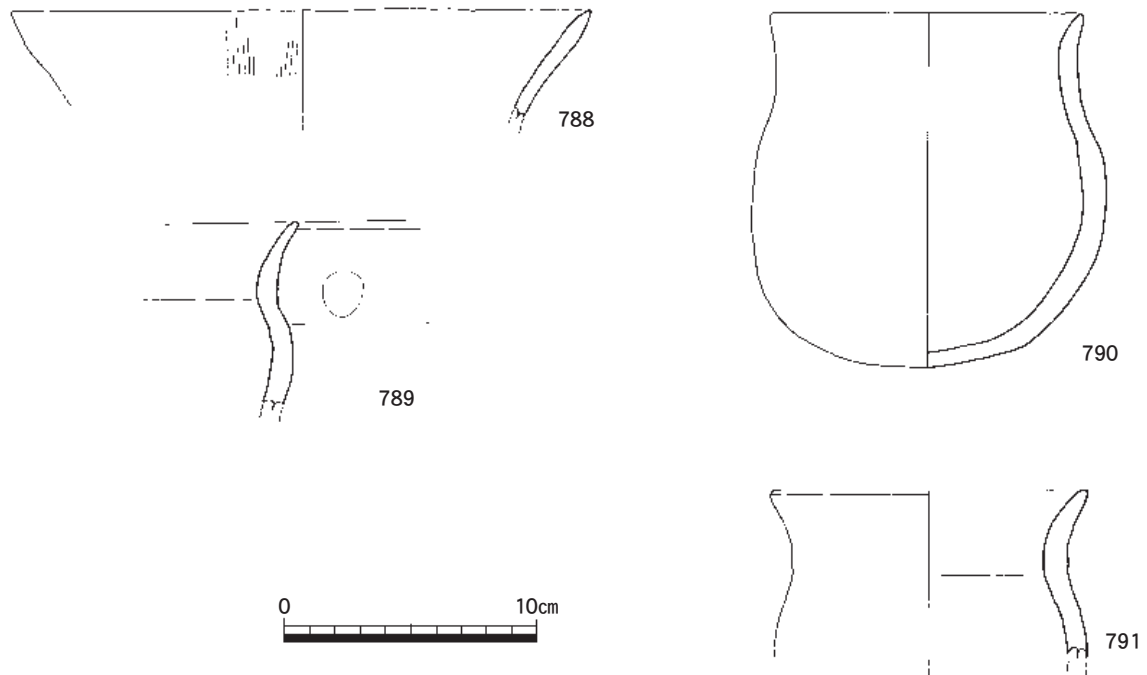
1. 暗褐色土 (小礫を多く中礫焼土を若干含む。しまりよく、粘性もあり。柱痕)
2. 暗褐色土 (小中礫炭褐色土ブロックをやや多く含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。掘り方)

0 (S=1/60) 2m

0 (S=1/30) 1m

1. 暗褐色土 (焼土、白色粒子を多く含む。しまりよく、粘性殆どなし)
2. 暗褐色土 (小中礫を多く含む。しまりよく、粘性あまりなし)
3. 暗褐色土 (小中礫をやや多く、焼土白色粒子を若干含む。しまりよく、粘性ややあり)
4. 赤褐色土 (黒灰色土ブロック、炭化物を多く含む。しまり非常によく、粘性殆どなし。燃焼面)

第195図 SH12平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/30)



第 196 図 SH12 出土遺物 (S=1/3)

56cm、深さ16～41cm、P1・2間2.4m、P2・3間3.1m、P3・4間2.3m、P4・1間2.8mを測る。支柱穴以外のP5から須恵器坏蓋（遺物No.810）が天地を逆さにして出土している。本住居から出土した他の遺物の時期と同時期であることや支柱穴のほぼ中央で検出されていることから本住居に伴う柱穴である可能性が高い。他の柱穴については本住居に伴うものか不明であるが大半が後世の遺構と考える。

本住居構築前の遺構として住居北西隅でSX1を確認している。本住居床面と同レベルで鐘崎式土器を検出したため、周辺を精査したが遺構のプランは明確にできていない。一定量の鐘崎式土器が検出されているため縄文時代後期の何らかの遺構が存在したものと考えられる。本住居構築の際に大半が破壊され、下位の遺物だけが残されたものであろう。

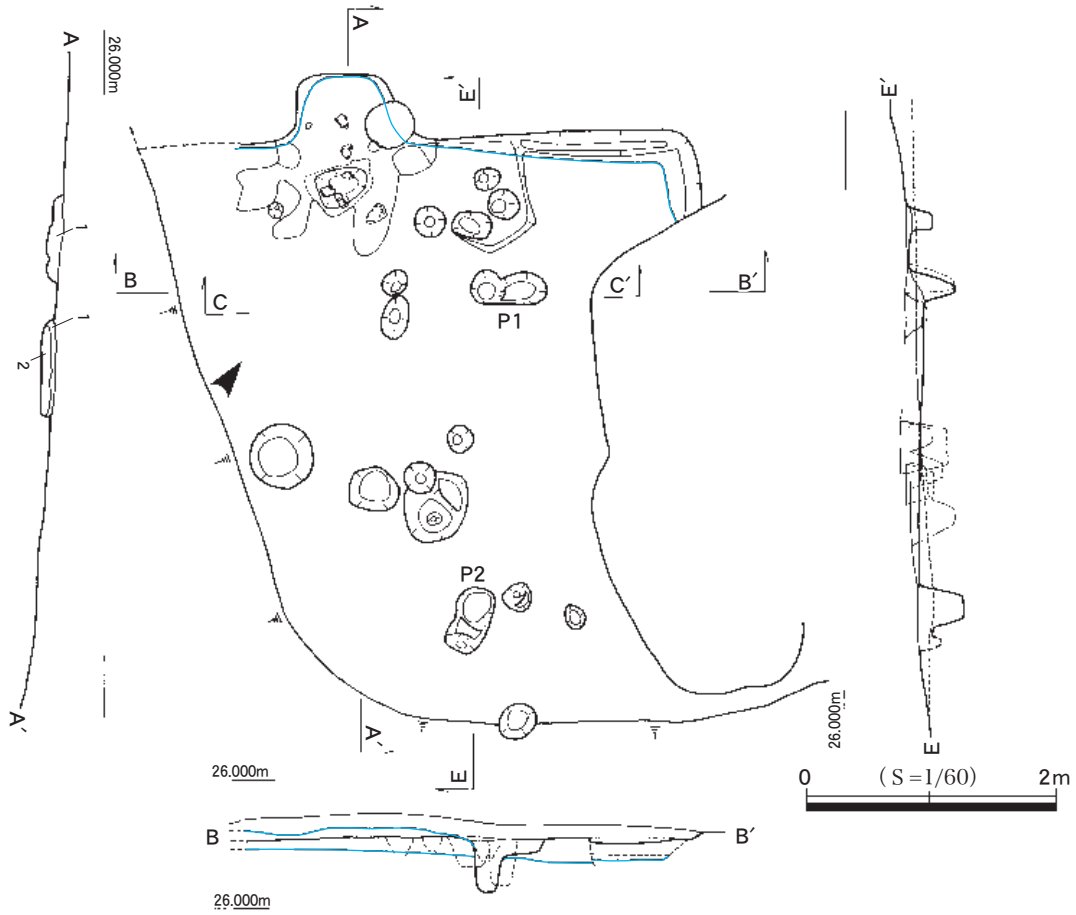
#### カマド (第201図)

住居西壁中央に構築される外側に張り出さないタイプである。本調査で確認された住居において西壁に敷設された唯一のカマドである。カマド廃棄後、粘土で覆うような行為は認められない。検出面を一段掘り下げると、土器の散布と柱状の硬質粘土部材、焼土面が確認できた。トレンチを縦横に設定し、堆積状況及びカマド下部構造の確認を行った結果、硬質粘土部材はカマド本体の左袖部であることが分かり、その横に被熱硬化面と支脚に転用された天地を逆に向けた甕を発見した。甕は被熱による赤褐色を呈する。カマドは焚口1m、最大幅2m、奥行き95cm、高さ56cmの大きさが遺存していた。

#### 出土遺物 (第202～204図)

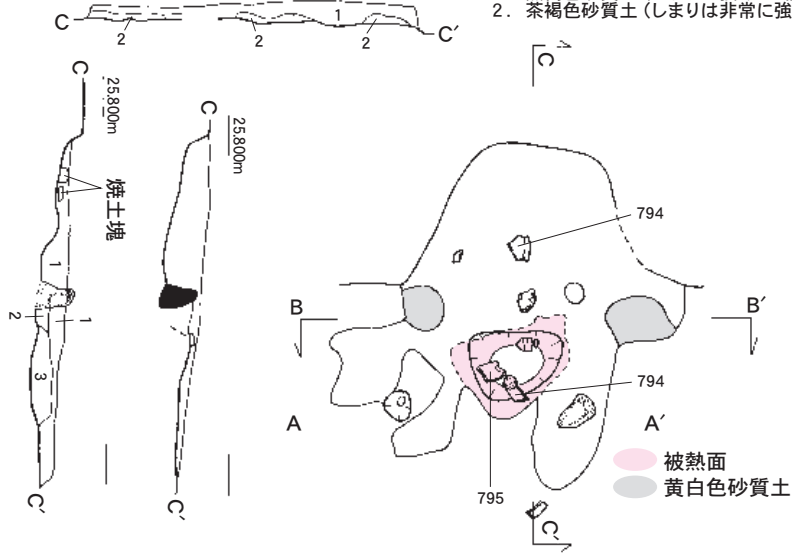
土器22点を図示した。798～814はカマドを除く住居内から出土した資料。798～807は縄文土器。その内798～805は鐘崎式土器である。800は渦文が比較的明瞭に施されており、鐘崎Ⅲ式の範疇であろう。798・801・802は、沈線の口縁部上方への集約化、S字状沈線の施文など鐘崎式最

1. 黒褐色砂質土 (しまりは強く、炭粒少量)
2. 茶褐色砂質土 (しまりは非常に強い。小石多量。貼床)



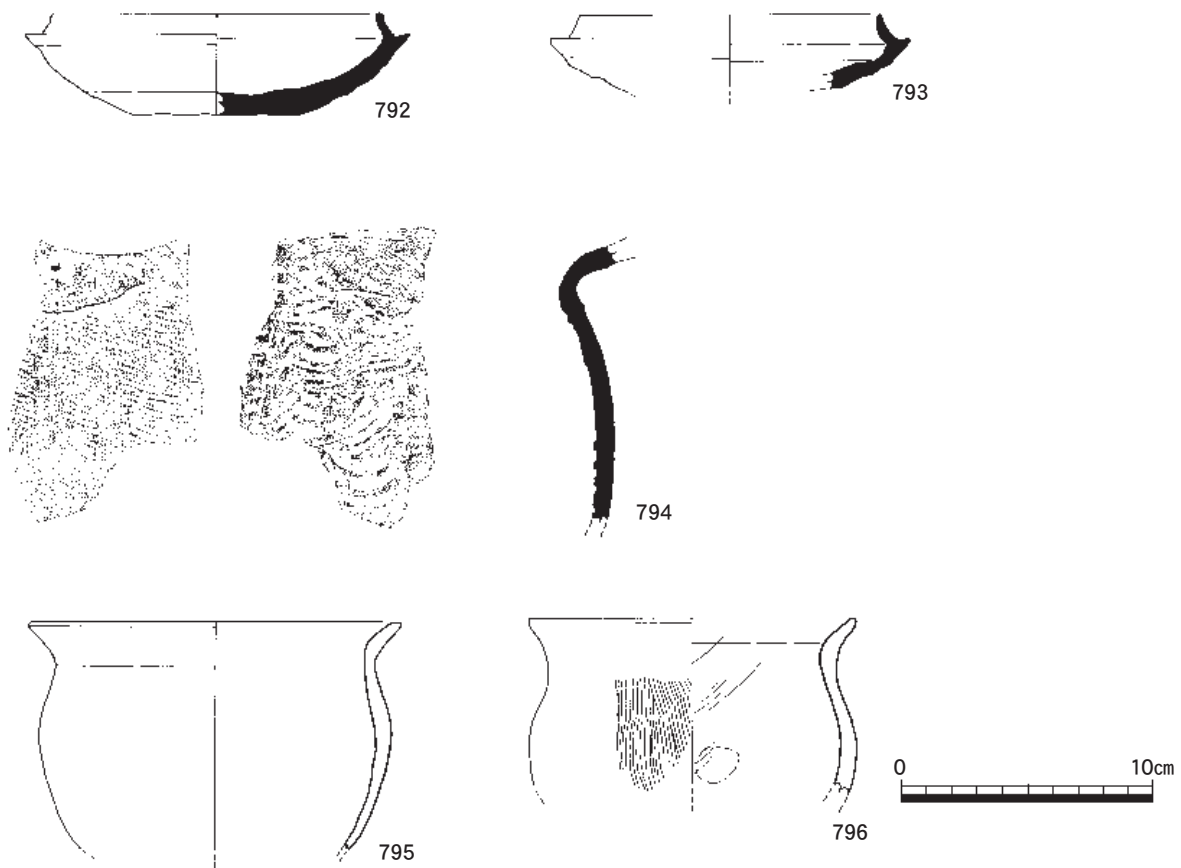
1. 黒褐色砂質土 (しまりは強く、土器粒、炭粒少量含む)
2. 茶褐色砂質土 (しまりは非常に強い。貼床)

1. 黒褐色砂質土 (黄白色砂質土が混じる。焼土、炭を微量に含む。遺物も含む。しまりは強い)。
2. 茶褐色砂質土 (焼土、炭を多量に含む。しまりは強い。支脚石の下半を埋め支えた層)。
3. 被熱面、赤褐色砂質土 (しまりは非常に強い)



1. 黒褐色砂質土 (黄白色砂質土が混じる。焼土、炭を微量に含む。遺物も含む。しまりは強い)
2. 茶褐色砂質土 (焼土、炭を多量に含む。しまりは強い)
3. 黄白色砂質土 (しまりは非常に強い。カマドの部材か)
4. 被熱面、赤褐色砂質土 (しまりは非常に強い)

第197図 SH14平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/30)



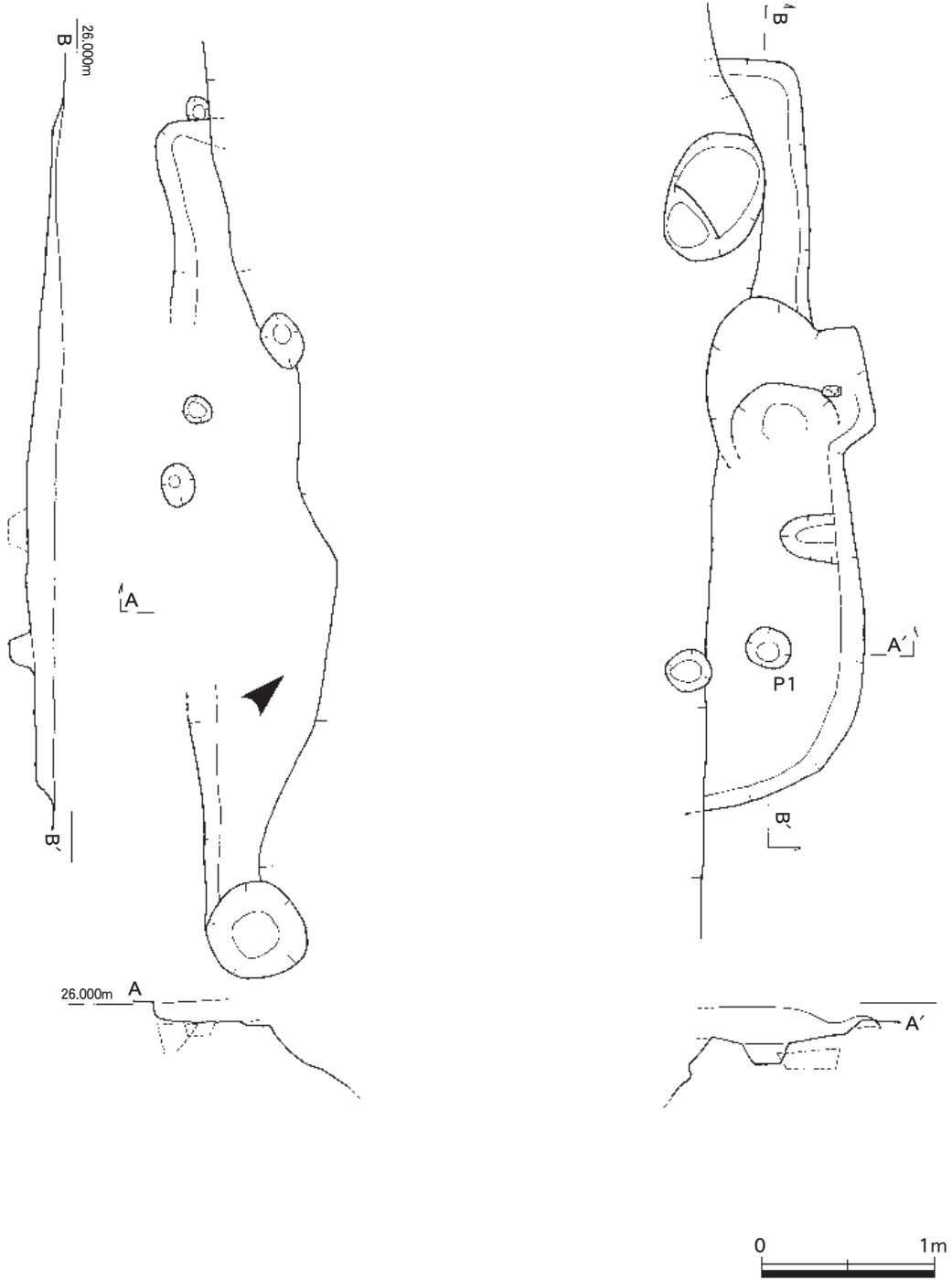
第198図 SH14出土遺物 (S=1/3)

新相に属する。806は器壁の薄い口縁部が短く外傾しており、石町式に位置づけられるだろうか。808～813は須恵器。808は高坏の脚。809～811は坏蓋。器高が高く、809は口径13.8cm、口縁端部内面に形骸化した段を有する。TK43段階、6世紀後半～末の資料。812は胴部から外反する口縁部が付く資料。丸底の壺であろうか。813は甗。胴部と頸部の境に爪形文風の刻みを連続して施す。814は土師器の碗。浅い鉢状を呈する。815～819はカマドから出土した資料。815は鐘崎Ⅲ式土器。カマド外からの混入であろう。816は須恵器の坏蓋。口径12.8cm、器高は高い。TK43段階、6世紀後半～末の資料。817～819は土師器。817は浅鉢。818は壺。819は丸底壺か甗の底部。

石器3点を図示した。163・164は姫島産黒曜石製の石鏃。163は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでおり、左右側縁は鋸歯縁状に整形して二等辺三角形状に仕上げている。基部には浅い抉りが入られている。左右の脚部を欠損している。164は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、基部には深い抉りが入る。先端を僅かに、右脚を完全に欠損している。165は磨石。中央部は平坦をなし、欠損している。

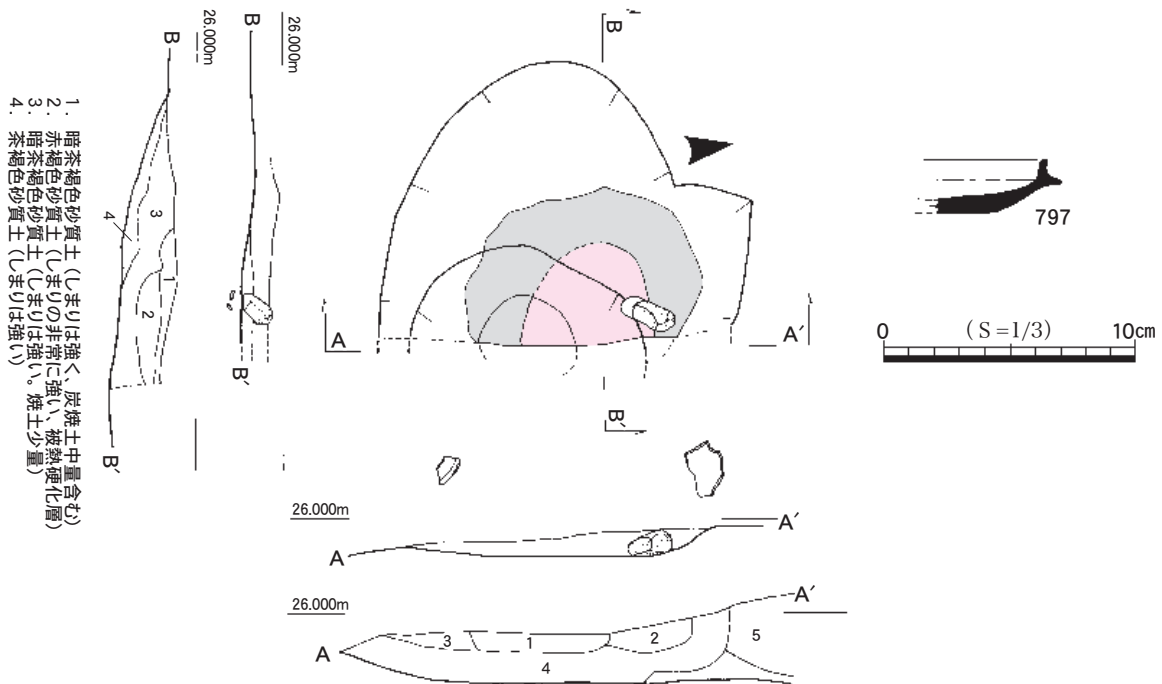
#### SH17 (第205図)

第3調査区I-5で検出した竪穴住居跡である。SH16に東壁を、近代の溝に西壁と北壁の一部を切られており、南壁の一部がかろうじて遺存する。北壁は3.5m程度遺存し、検出面からの深さ13cmで生活面に至る。住居北東部に炭化した木材片が出土している。壁の立ち上がりは急で、北壁下



第199図 SH15平・断面図 (S=1/40)





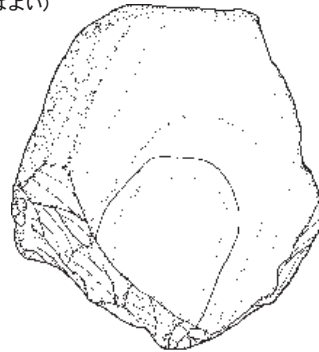
1. 暗茶褐色砂質土 (しまりは強く、炭焼土中量含む)
2. 赤褐色砂質土 (しまりの非常に強い、被熱硬化層)
3. 暗茶褐色砂質土 (しまりは強い、焼土少量)
4. 茶褐色砂質土 (しまりは強い)

1. 赤褐色砂質土 (非常に固くしまる被熱硬化層。焼土多量)
2. 赤茶色砂質土 (固くしまる。焼土中量)
3. 暗茶褐色砂質土 (固くしまる。炭焼土中量)
4. 茶褐色砂質土 (固くしまる。土器片少量)
5. 暗茶褐色砂質土 (カマドに切られる別遺構。しまりはよい)

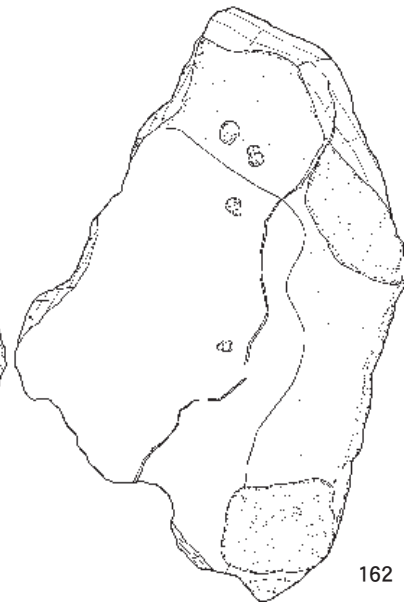
0 (S=1/30) 1m



160



161



162

0 (S=1/4) 10cm

第200図 SH15カマド平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (797)、S=1/4 (160~162))

に幅8cm、深さ約15cmの周溝が巡る。貼り床は面的に厚さ約30cm施されていると思われるが、やや掘り過ぎている可能性がある。土器は少量出土した。

カマドは検出していない。支柱穴の可能性のある柱穴はP1で直径28×45cm、深さ45cmを測る。その他の柱穴については性格不明である。

#### 出土遺物 (第205図)

土器1点を図示した。820は須恵器の坏身。やや短い口縁部が受け部から立ち上がる。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。

#### SH18 (第206図)

第3調査区I-4で検出した竪穴住居跡である。SD42に南壁を切られ、北と西壁のほとんどは調査区外となる。残された形状から判断すると隅丸長方形プランの住居と考えられる。N30°W方向に軸線に向ける。南北7m、東西6.4m、検出面から床面までの深さ約20cmである。貼り床は認められない。壁の立ち上がりは急である。壁下は幅約15cm、深さ約5cmの周溝が巡るが、東壁は一部途切れている。土器は少量出土した。

カマドは検出されていない。住居の支柱穴はP1～3を調査した。柱穴の直径は36～50cm、深さ28～40cmの大きさである。P1・2間1.6m、P2・3間1.4mを測る。遺物は床面から5～10cm程浮いた状態で出土し、住居北東床面に土師器の高坏(遺物No.828)や甕(遺物No.829)が割れた状態で遺存していた。住居中央部は浅い土坑が検出されている。

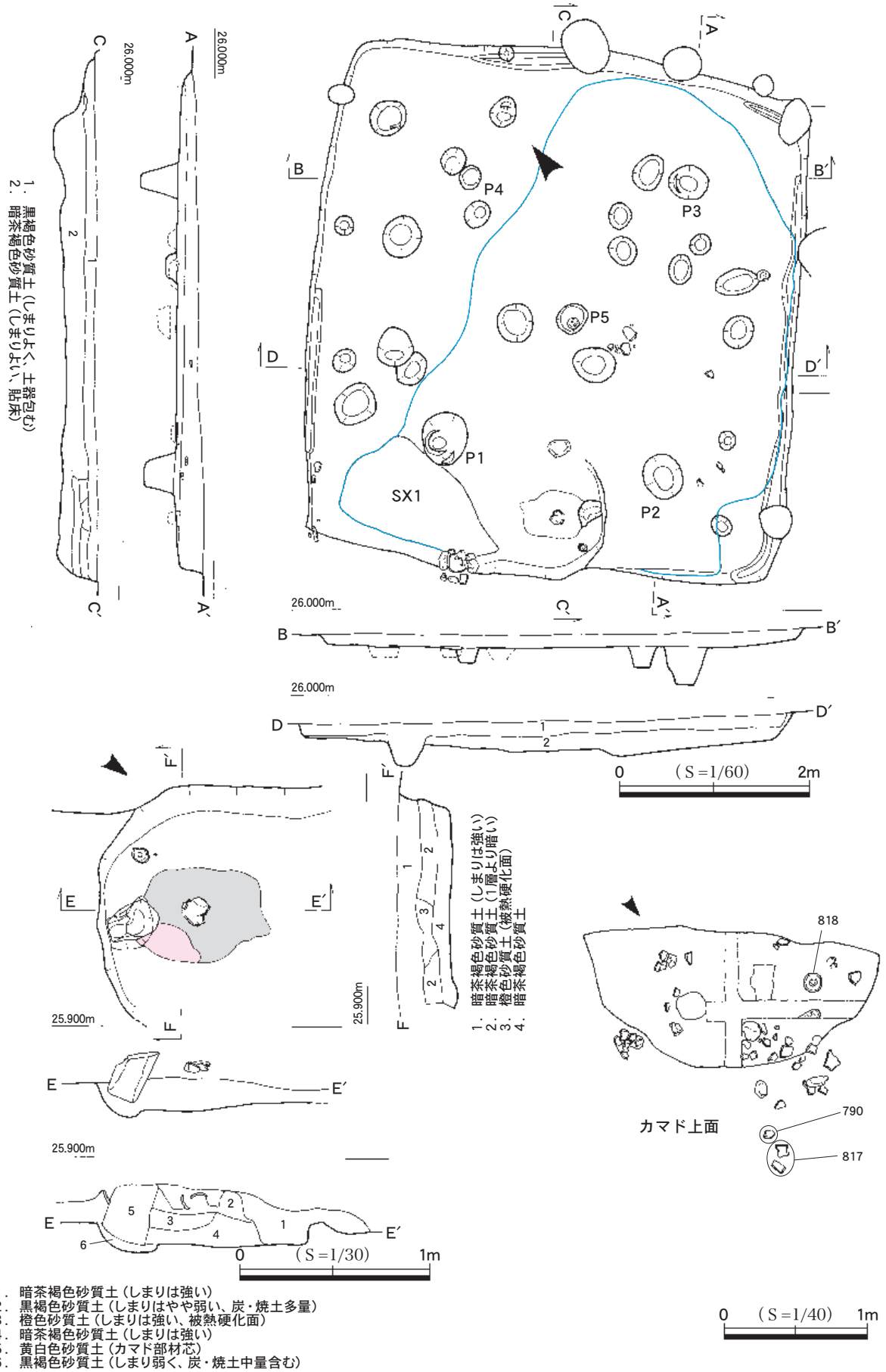
#### 出土遺物 (第207図)

土器9点を図示した。821～824は須恵器。821は坏蓋。口径15.4cmを測る。TK43段階、6世紀後半～末資料。822・823は坏蓋。822は立ち上がりがやや短く、口径が小さい。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。823は822より立ち上がりが長く、TK43段階に近い形状を呈する。824は高坏。825～829は土師器。825は甗。826は鉢で口縁部が肥厚する。827・829は観察表に壺としているが甕の形状に近い。829は丸底の長胴タイプである。828は高坏の坏部。石器1点を図示した。166は姫島産黒曜石製の石核。表面がほぼ全面礫面の分割礫を素材とし、裏面には大柄で面的な加工を施して平坦化し、周縁部に急斜度な調整を入れて整形している。基部・刃部を欠損している。

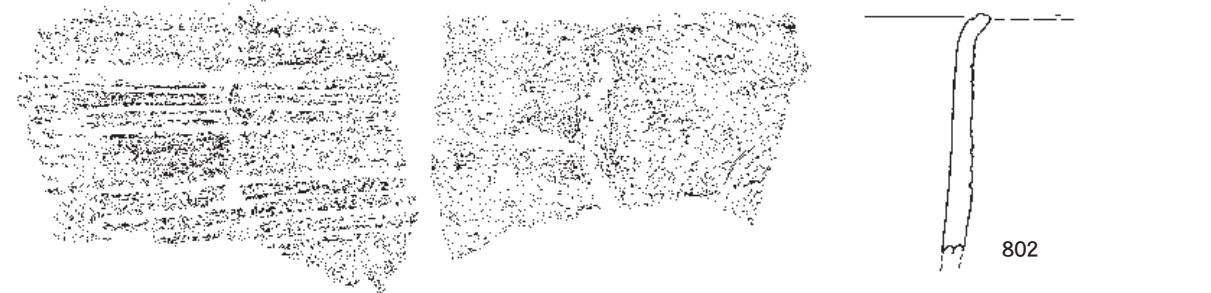
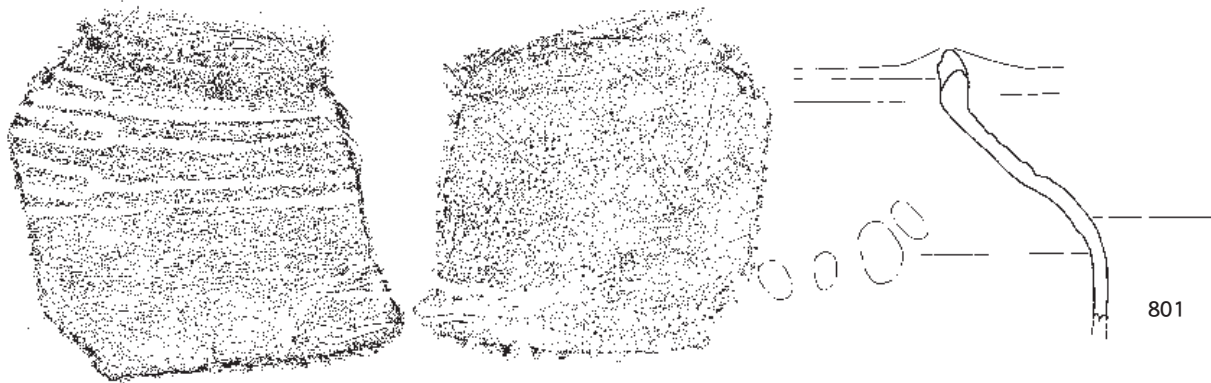
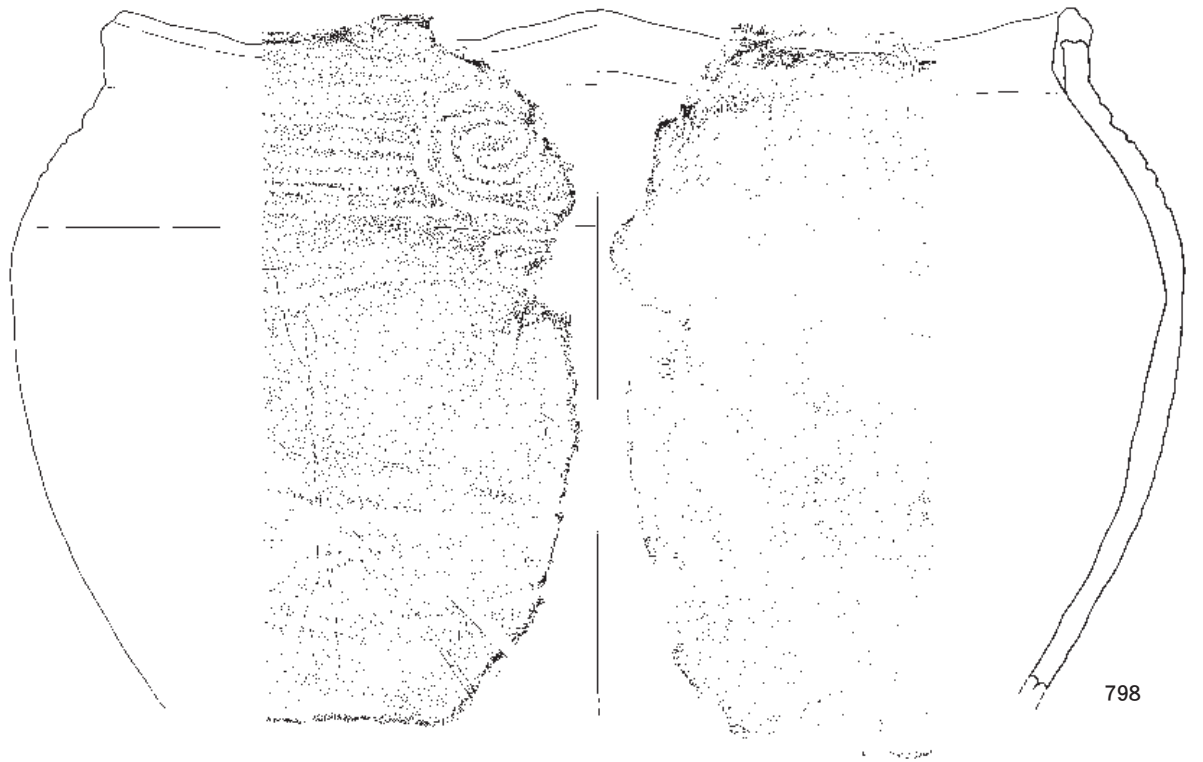
#### SH19 (第208図)

第3調査区K-7で検出した竪穴住居跡である。隅丸長方形プランを呈す。N67°E方向に軸線に向ける。南北3.8m、東西5.3m、面積約20㎡。検出面から床面までの深さ約15cm、貼り床は約10cmの厚みで面的に施されている。床面までの深さは浅いため、削平を受けていると思われる。壁の立ち上がりは急である。壁下の周溝は敷設されていない。土器はパンケース2箱分出土した。

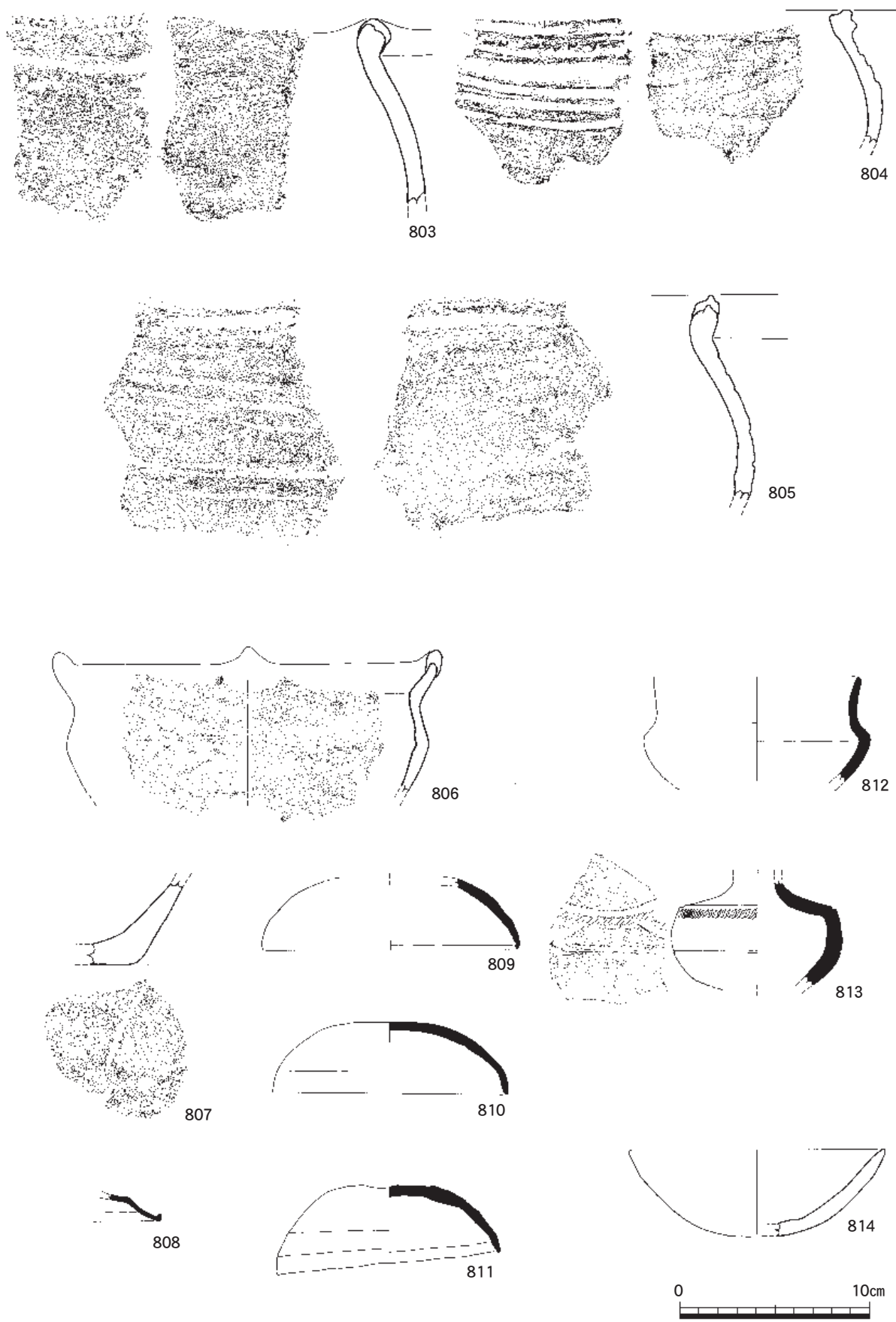
カマドは住居北壁で検出している。住居の支柱穴としてP1～4を調査した。柱穴の直径は25～46cm、深さ30～34cm、P1・2間1.7m、P2・3間2.6m、P3・4間1.9m、P4・1間2.5mを測る。床面中央部では須恵器の大甕(遺物No.840)が押しつぶされた状態で出土している。この下位には直径65～77cm、深さ36cmの土坑が構築されている。接合状況から完形品もしくはそれに近い状態の遺物を遺棄したと推測する。他の柱穴については本住居に伴うものか不明であるが大半が後世の遺構と考える。



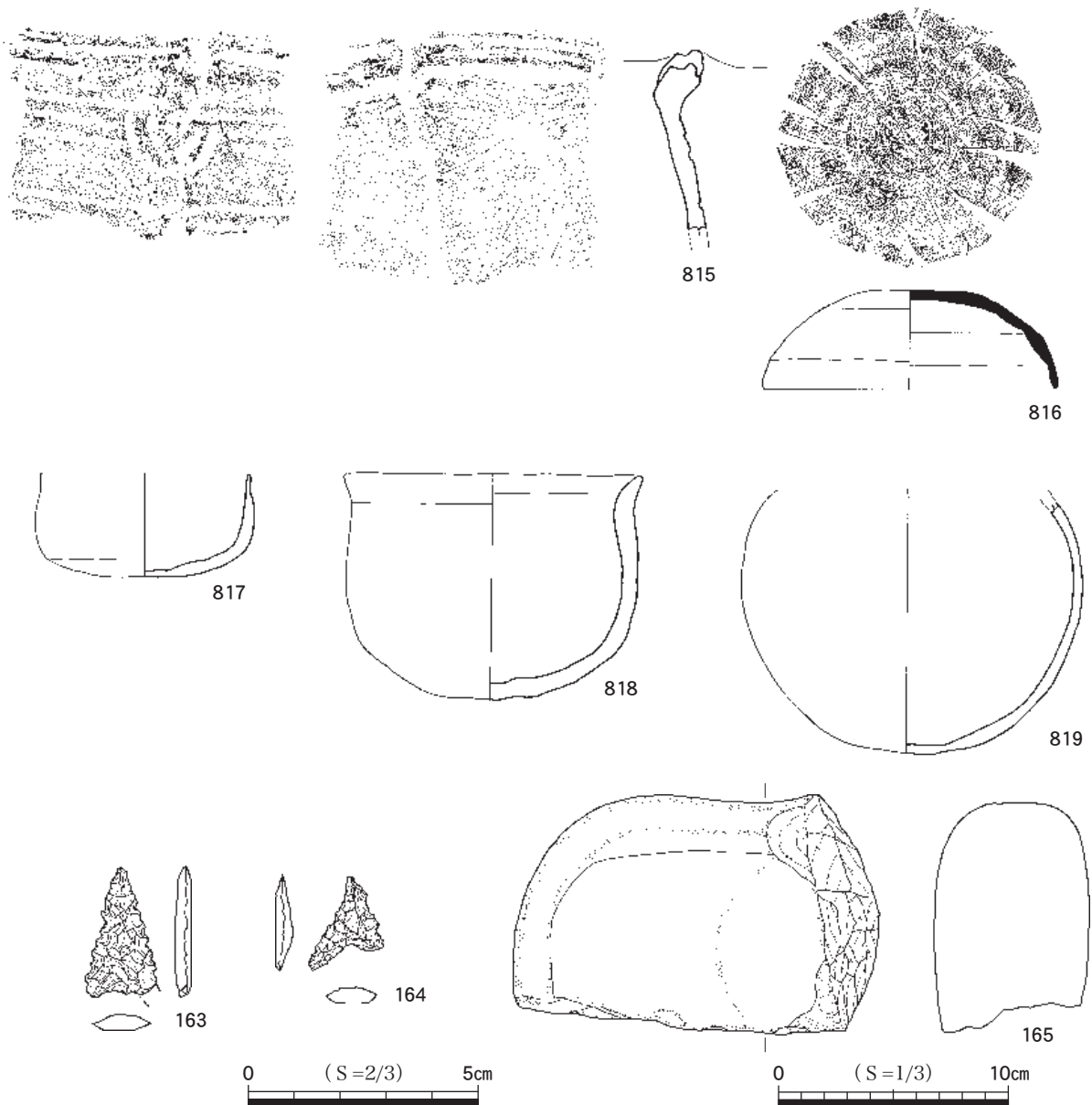
第201図 SH16平・断面・土層図 (1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/30) (S=1/40)



第202図 SH16出土遺物 (1) (S=1/3)



第203図 SH16出土遺物(2) (S=1/3)



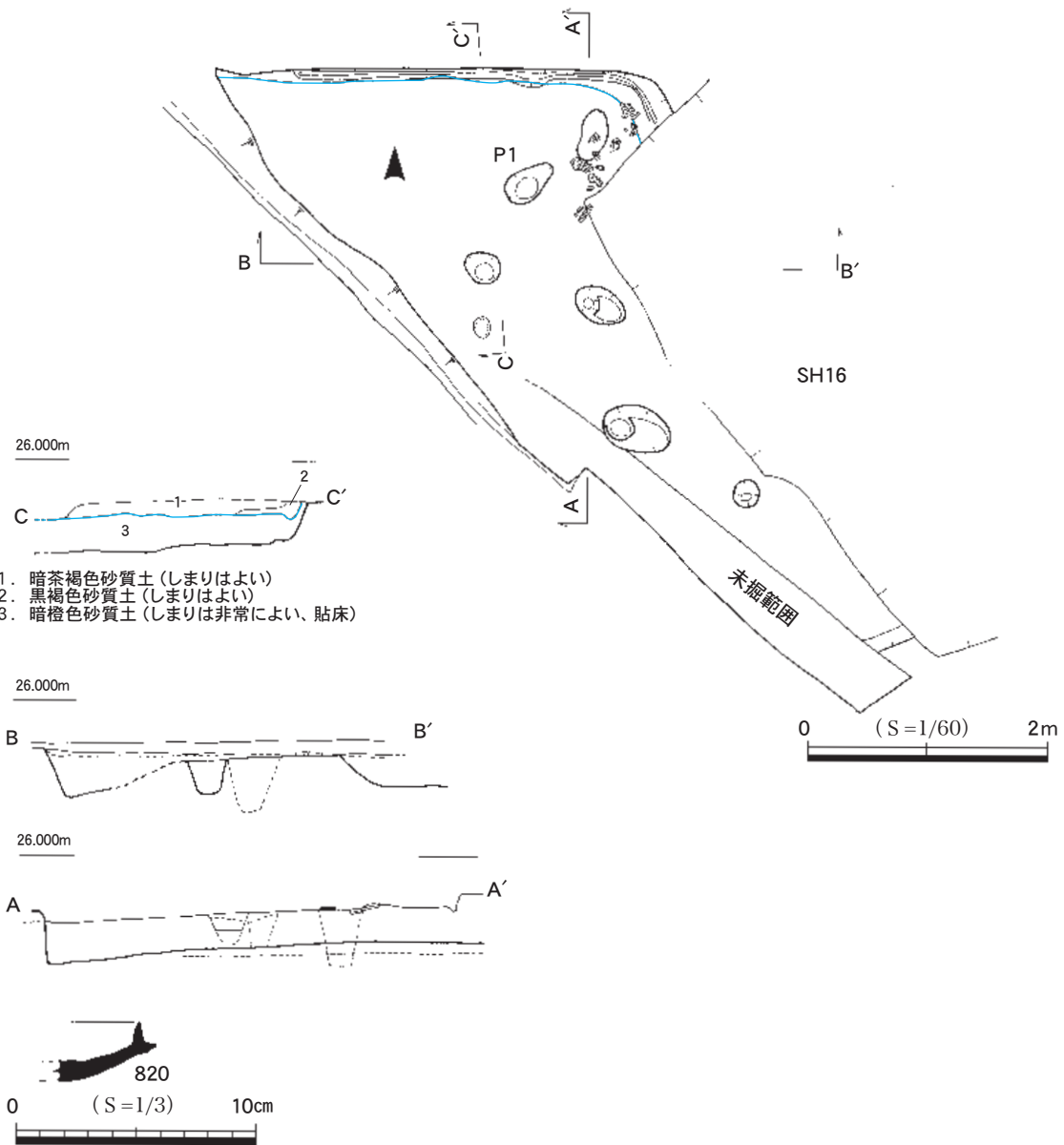
第204図 SH16出土遺物(3) (S=1/3 (815～819、165)、S=2/3 (163、164))

### カマド (第208図)

住居北壁中央に構築される外側に張り出すタイプである。一部を後世の柱穴により破壊されている。検出段階では焼土と黄白色粘土範囲、黒褐色土が検出された。トレンチを縦横に設定し、堆積状況及びカマド下部構造の確認を行った結果、支脚石と被熱硬化面、効果面の両サイドにカマド袖部の硬質粘土を確認した。支脚石と袖部は小柱穴を掘り据え置いている。カマドは焚口70cm、最大幅1.05m、奥行き1.12m、高さ13cmの大きさである。被熱硬化面を小土坑状に掘り下げたが、床面の被熱による温度変化部を掘削した可能性がある。

### 出土遺物 (第209～210図)

土器17点を図示した。830～840は須恵器。830は復元口径が15cmと大き目の坏蓋であるが、器高の低平化が進む。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。831～834は坏身。口縁部の立ち

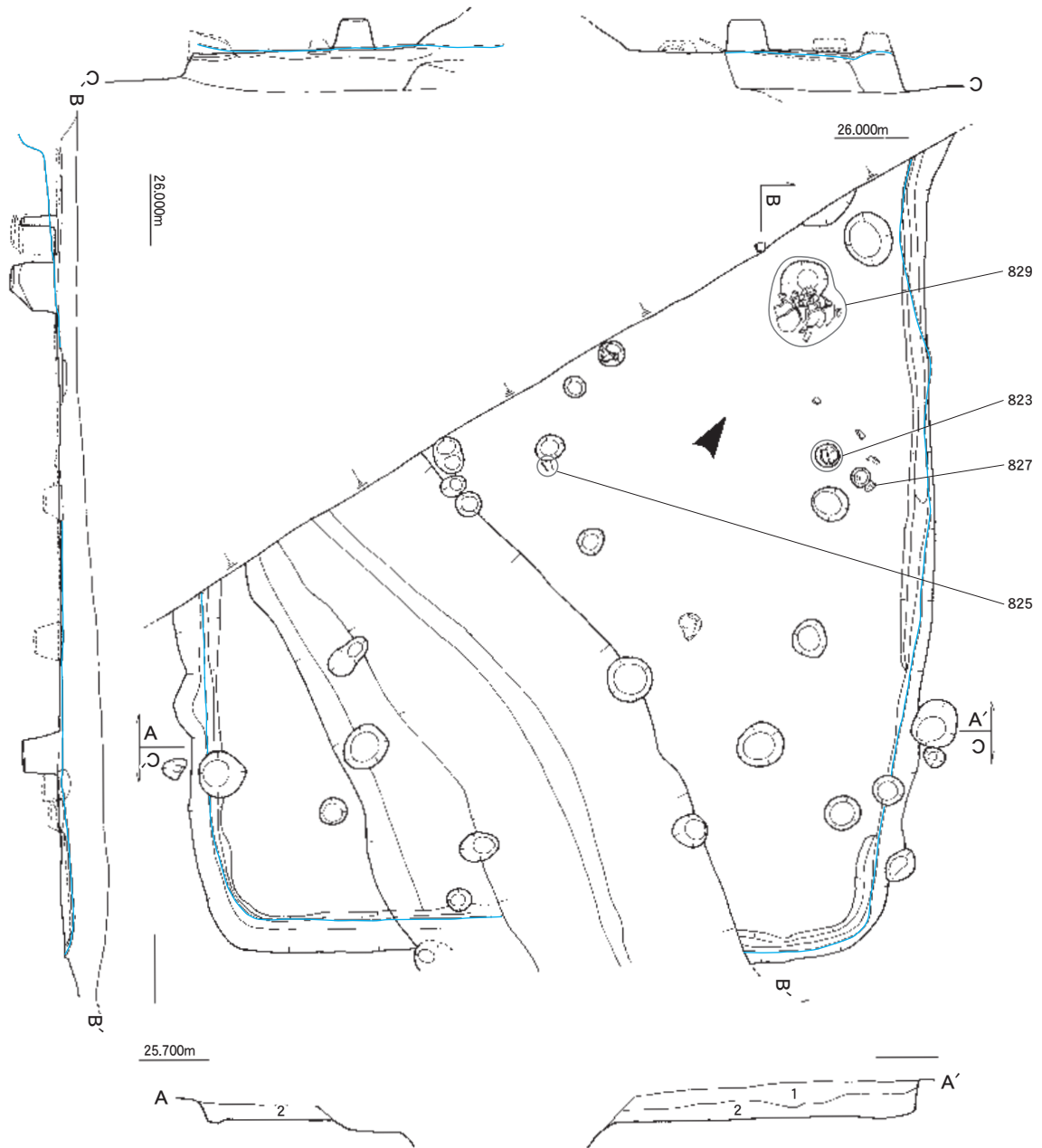


第205図 SH16平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

上がりがやや長いものとやや短いものがみられるが概ねTK43段階、6世紀後半～末の資料であろう。835～837は高坏。837は長方形の透かしが上下2段に施される。838は壺の頸部。839は須恵器の底部。塼であろうか。840は口縁部を欠く須恵器の大甕。住居中央付近で出土している。841～846は土師器。841は高坏の脚部。842・843は甑である。844・845は観察表に壺としているが甕の方がよいであろう。846は甕か壺の口縁部。土師器としているが須恵器の可能性もある。847は鉄製品。釘と思われる。石製品は2点を図示した。167は台石である。表面に小さな敲打痕が認められる。168は凹み石。中央部は僅かにくぼむ。

#### SH20 (第211図)

第3調査区M-6で検出した竪穴住居跡である。隅丸長方形プランを呈す。住居中央東側を古代の

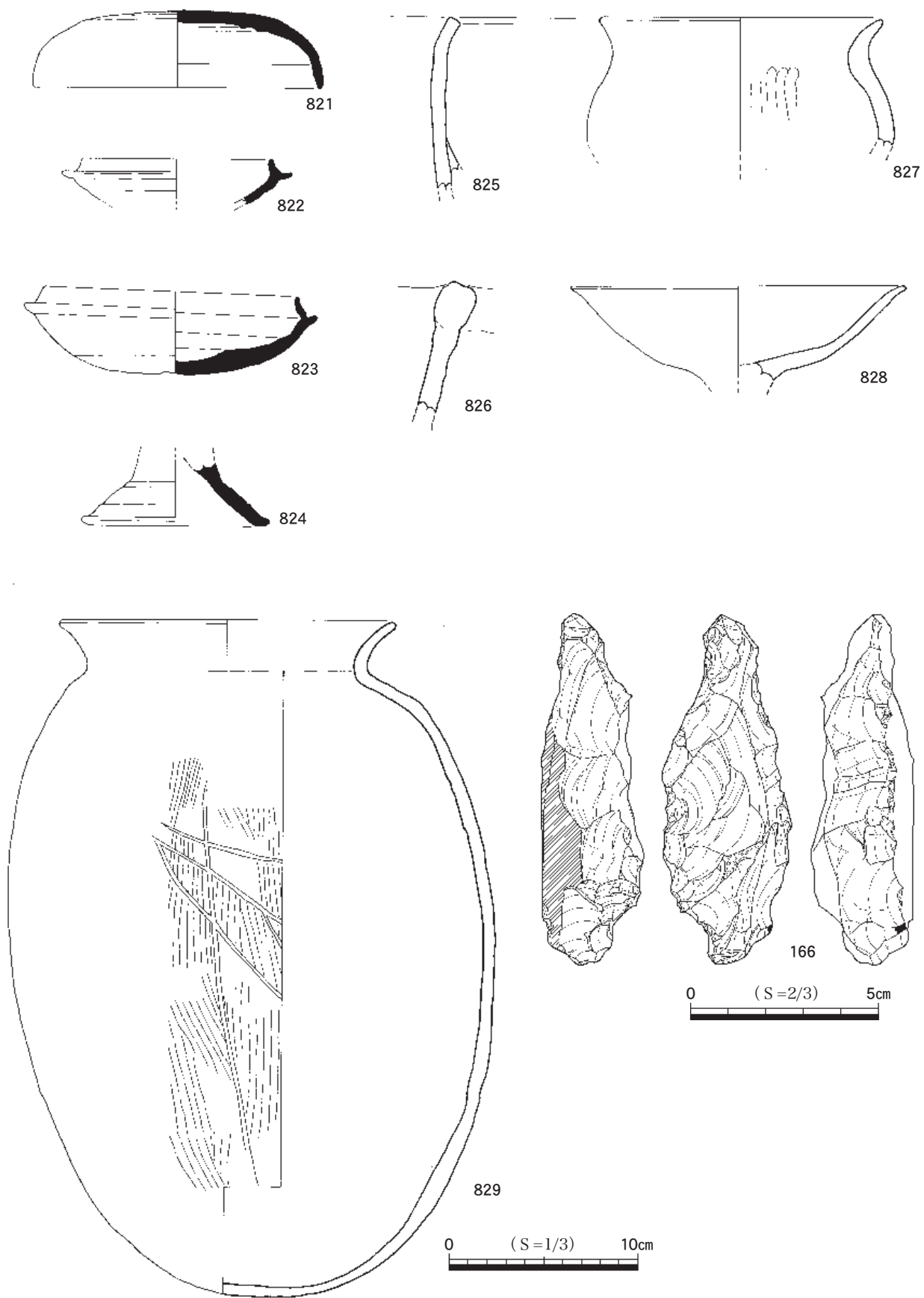


- 1. 黒褐色砂質土 (しまりはよい、炭・焼土あり)
- 2. 暗茶褐色砂質土 (しまりはよい)



第206図 SH18平・断面・土層図 (S=1/60)





第207図 SH18出土遺物 (S=1/3 (821~829)、S=2/3 (166))

溝 (SD42) により破壊されている。また、全体的に削平も著しく検出面から床面もしくは貼り床除去面までの深さは8cmと浅い。N37°E方向に軸線に向ける。南北4.5m、東西7.8m、面積約35㎡の大きさである。東西の長さが長すぎるため、SD42を挟んだ西壁の立ち上がりは別遺構の可能性もあるが、一応本報告ではこの規模の住居跡としておく。壁下の周溝は敷設されていない。土器は少量出土した。

カマドは住居北壁で検出している。住居の支柱穴としてP1～4を調査した。柱穴の直径は30～45cm、深さ21～23.5cm、P1・2間2m、P2・3間3m、P3・4間2.1m、P4・1間3mを測る。遺物は床面から約5cm浮いた状態で出土している。他の柱穴については本住居に伴うものか不明であるが大半が後世のものとする。

#### カマド (第211図)

住居北壁中央に構築される外側に張り出さないタイプである。検出段階では焼土と黄白色粘土塊、暗黄褐色土が検出された。一段掘り下げたところ、遺物の点在、被熱硬化面、袖部・支脚部に岩状の黄褐色砂質土を確認した。袖部の岩状の物質は小穴に埋置されていた。支脚部の岩状の物質は、下位の茶褐色土の上に貼り付けられたような状態であり、その下位には小穴が確認できた。さらに袖部小穴の前面は、もう一つ同規模の小穴を検出した。カマドの作り直しが行われた可能性を指摘しておく。カマドは焚口50cm、最大幅70cm、奥行き1.04m、高さ18cmの大きさである。被熱硬化面は小土坑状に掘り下げたが、床面の被熱による変化部を掘削した可能性もある。

#### 出土遺物 (第212図)

土器3点を図示した。848・849は須恵器。848は天井部と口縁部の境に段を有し、やや古式を呈する坏蓋。TK43段階、6世紀後半～末の資料。849はやや長い口縁部が立ち上がる坏身。TK43段階、6世紀後半～末の資料。850は観察表で壺としているが甕の方がよい。

#### SH23 (第213図)

第5調査区M-18で検出した竪穴住居跡である。隅丸長方形プランを呈す。住居南西部は削平のため失われている。N55°W方向に軸線に向ける。南北4.8m、東西4.3m、面積約21㎡の大きさである。壁下の周溝は敷設されていない。土器は少量出土した。

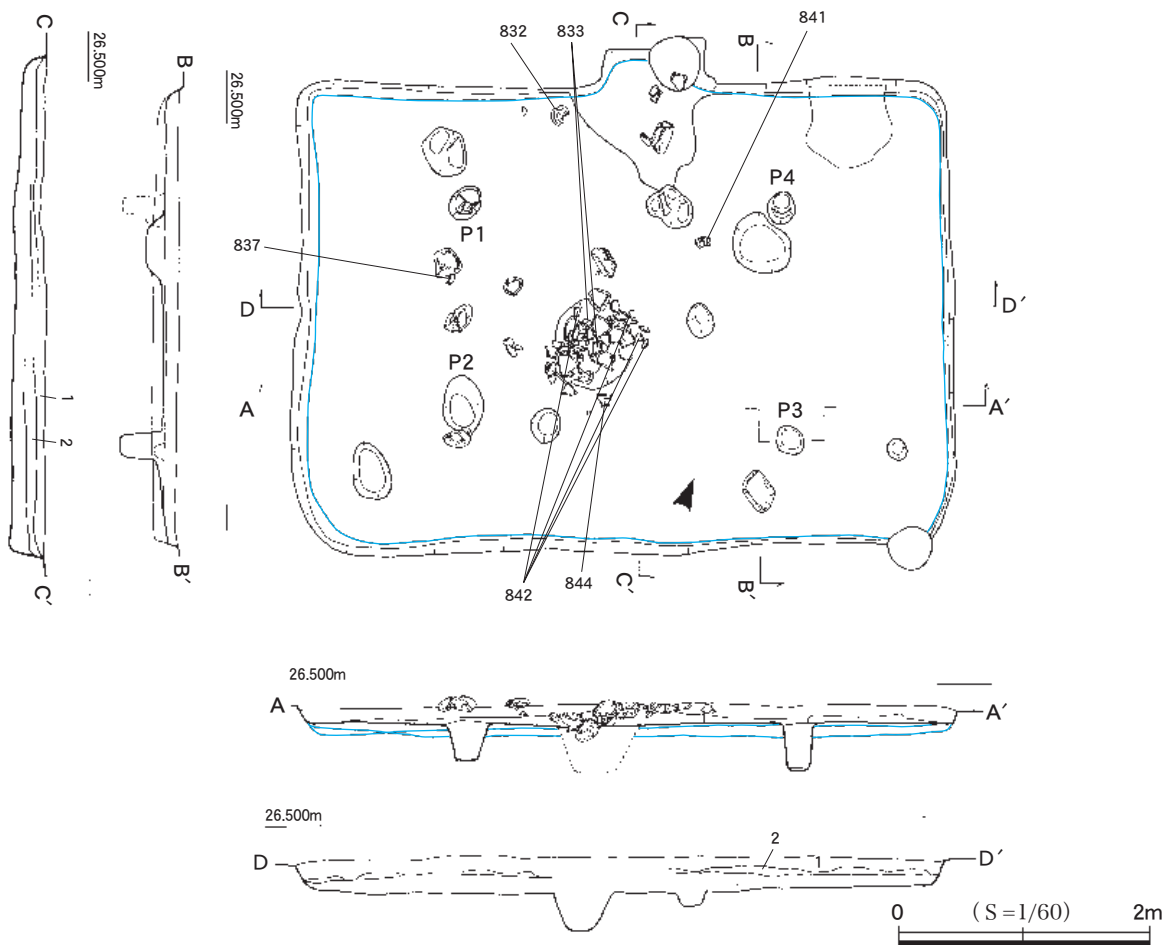
カマドは住居北壁で検出している。住居の支柱穴はP1～4と考える。柱穴の直径は35～50cm、深さ36～47cm、P1・2間2m、P2・3間2.2m、P3・4間2m、P4・1間2.2mを測る。支柱穴以外の柱穴は大半が後世のものとする。本住居は出土遺物が少ないが、カマドや支柱穴の位置から古墳時代後期の遺構と判断している。

#### カマド (第213図)

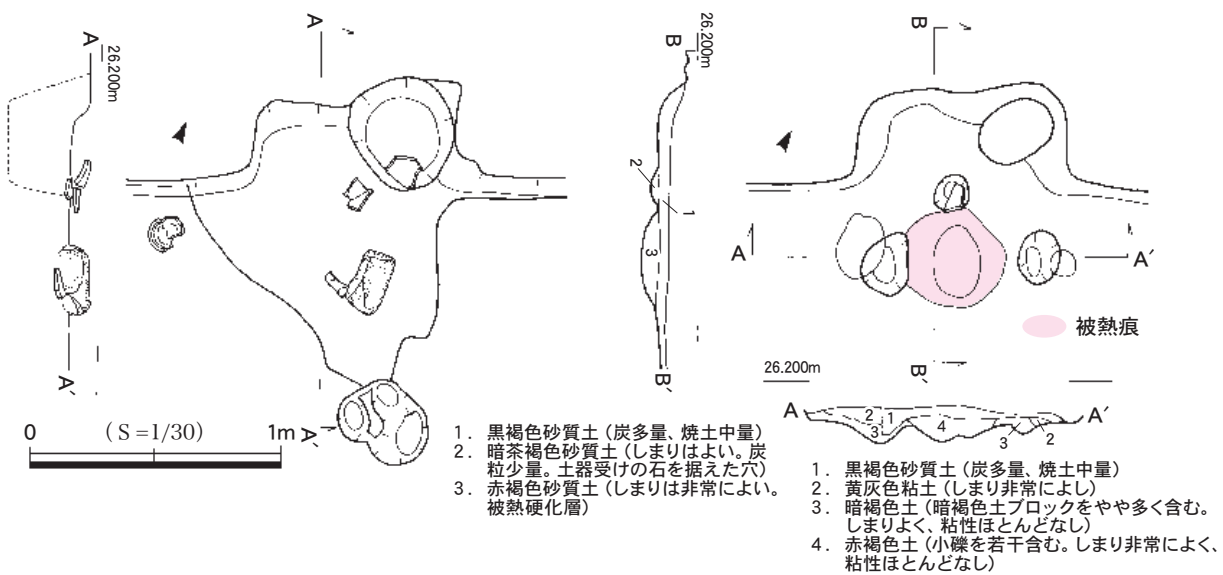
住居北壁中央に構築される外側に張り出さないタイプである。検出段階では表面に支脚と思われる安山岩の礫が少し顔を覗かせていた。一段掘り下げたところ、真っ赤な被熱硬化面が検出でき、その両サイドに小穴が確認できた。小穴前面にも同様の小穴が確認できたため、カマドの作り替えが行われたものと推測する。カマドは焚口35cm、最大幅95cm、奥行き70cm、高さ10cmの大きさで検出した。支脚の石は、先が尖り小穴の中に据え置かれている。被熱硬化面は小土坑状に掘り下げたが、床面の被熱による変色部を掘削した可能性もある。

#### 出土遺物 (第214図)

土器5点を図示した。852・855は型式不明の縄文土器。851は須恵器の胴部。853・854は土師器。

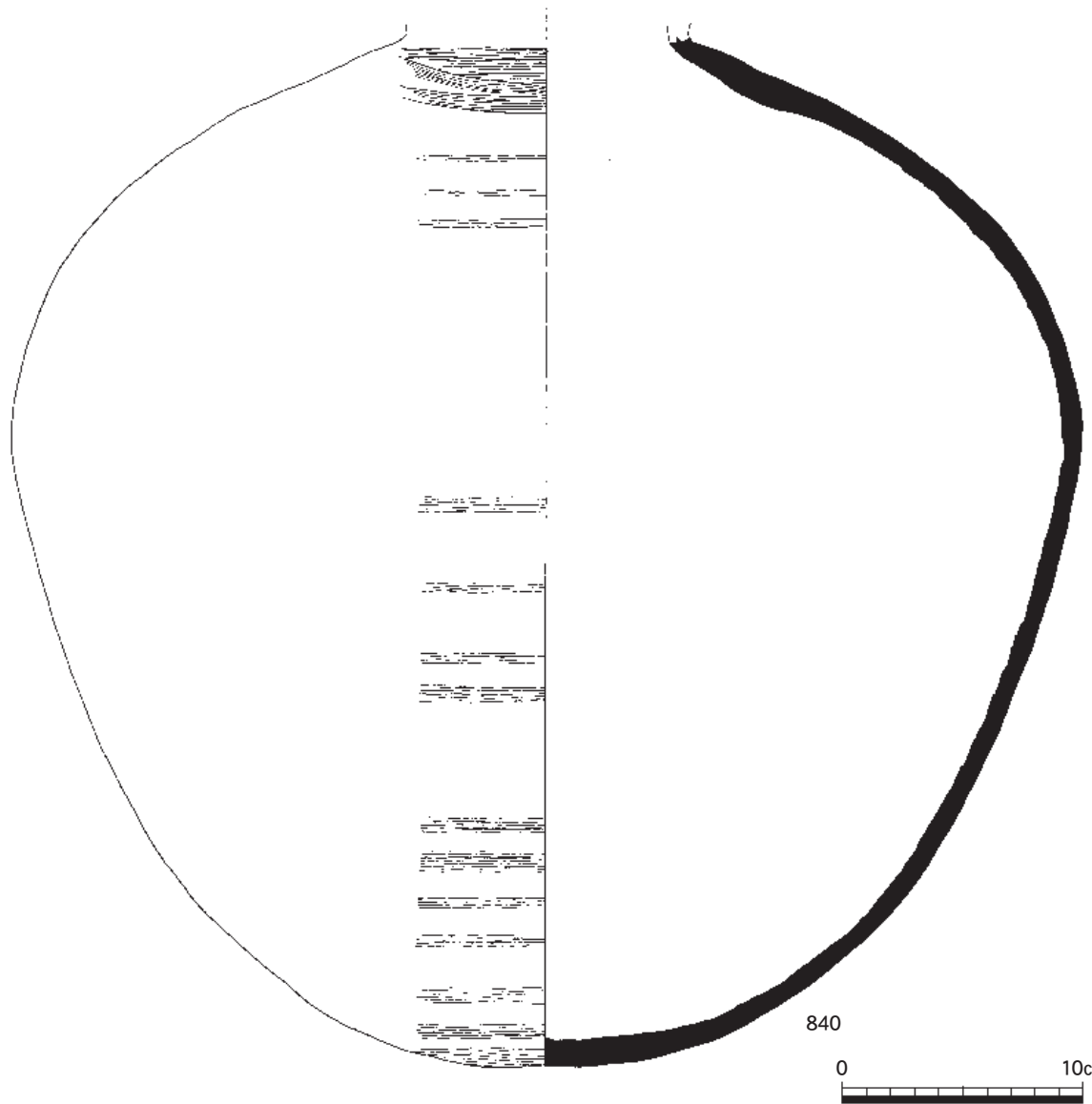
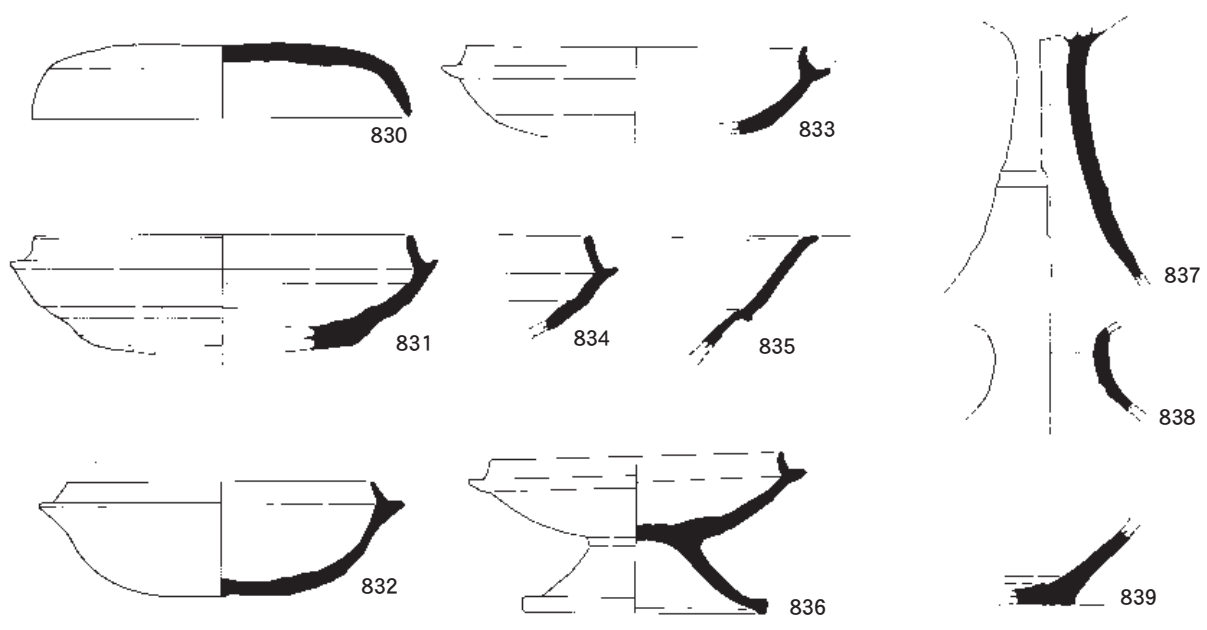


東西・南北ベルト共通  
 1. 黒褐色砂質土 (しまりはよく、遺物中量内包)  
 2. 茶褐色砂質土 (しまりはよい。遺物少量)

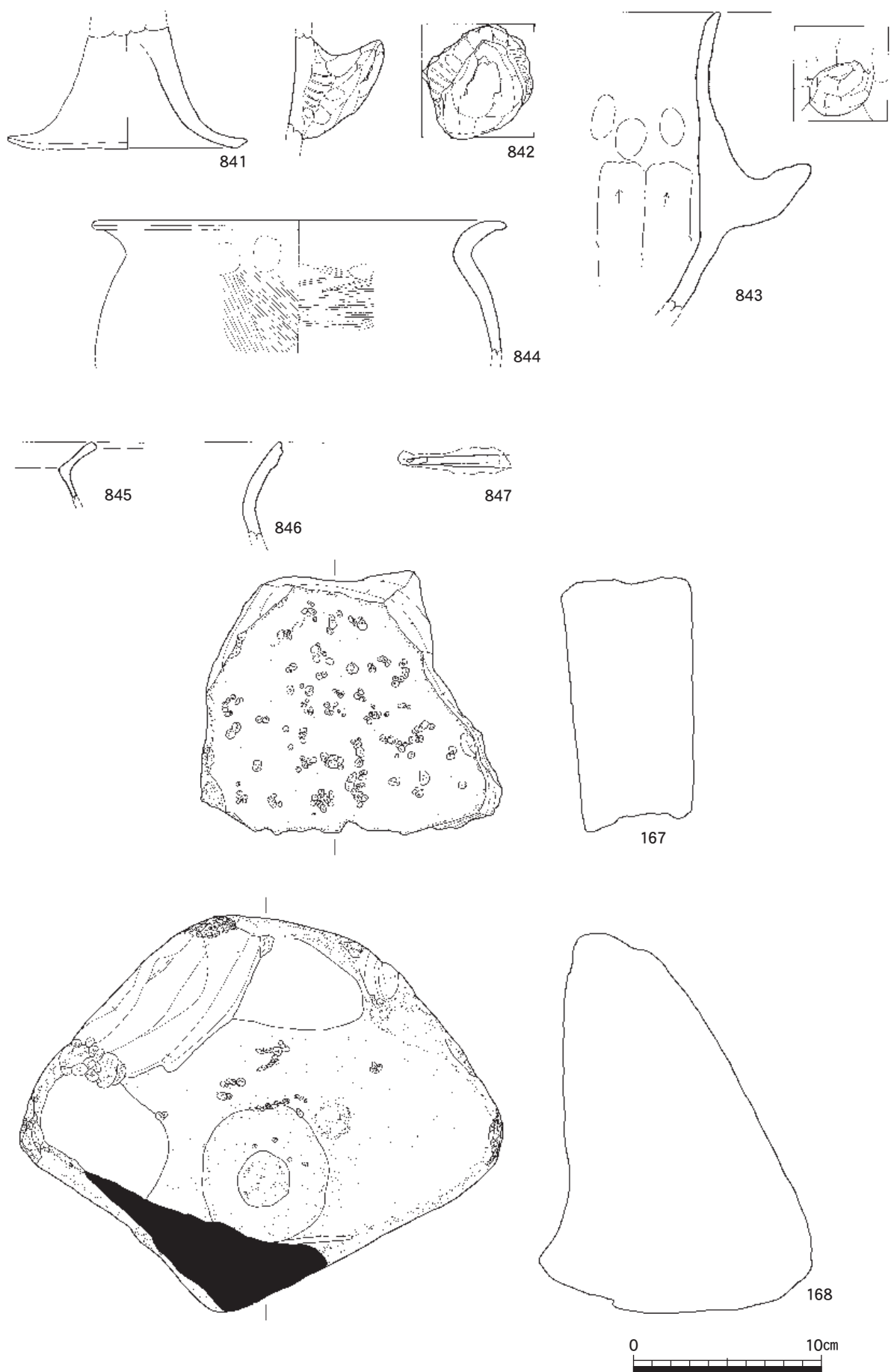


1. 黒褐色砂質土 (炭多量、焼土中量)  
 2. 暗茶褐色砂質土 (しまりはよい、炭粒少量。土器受けの石を据えた穴)  
 3. 赤褐色砂質土 (しまりは非常によい。被熱硬化層)  
 4. 黒褐色砂質土 (炭多量、焼土中量)  
 2. 黄灰色粘土 (しまり非常によし)  
 3. 暗褐色土 (暗褐色土ブロックをやや多く含む。しまりよく、粘性ほとんどなし)  
 4. 赤褐色土 (小礫を若干含む。しまり非常によく、粘性ほとんどなし)

第208図 SH19平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/30)



第209図 SH19出土遺物 (1) (S=1/3)



第210図 SH19出土遺物 (2) (S=1/3)

853は口縁部片。854は底部。石器は1点を図示した。169は台石である。側辺部は欠損している。

#### SH25 (第230図)

第5調査区H-17で検出した竪穴住居跡である。隅丸方形プランを呈し、N60°E方向に軸線に向ける。南北3.1m、東西2.6m、面積約8㎡、検出面から床面までの深さ約10cmである。貼り床厚は約25cmと想定し掘削しているが、掘り過ぎの可能性はある。壁下の周溝は北西角下以外に敷設されている。幅13cm、深さ5cmを測る。

カマドは住居北壁で検出した。住居内の柱穴直径は13～30cm、深さ6～16cmである。いずれも主柱穴とするには規模が小さいため、住居外主柱穴の存在を想定し住居周辺を精査したが、確認できていない。本住居からは土師器小片が出土している。後述のSH26も主柱穴が検出できず本住居と構造が類似し、古代以降と考えられる遺物が出土しているため、中津市2017では両住居跡を古代の所産として掲載した。しかし、昭和60年度に本調査区北側で行われた大坪遺跡の調査の際、主柱穴が検出できない同類の竪穴住居(SH8)から古墳時代の遺物が一定量出土し、当該期と報告されていることを刊行後に知った(1988大分県)。よって、本報告ではSH25とSH26を古墳時代の遺構に訂正し、報告することとする。

#### カマド (第230図)

住居北壁中央に構築される外側に張り出すタイプである。検出段階では白色の粘土層が面的に存在した。一段掘り下げると少量の遺物と被熱硬化面を確認した。硬化面の両サイドはカマド袖の部材を入れたであろう小穴を確認している。焚口60cm、奥行き88cm、最大幅90cm、高さ18cmの大きさであった。

#### 出土遺物 (第230図)

土器2点を図示した。901・902は土師器で901は壺であろうか。902は胴部片である。

#### SH26 (第231図)

第5調査区G-18で検出した竪穴住居跡である。隅丸方形プランを呈し、N28°W方向に軸線に向ける。南北3.2m、東西2.3m、面積約7㎡、検出面から床面までの深さ約10cm、貼り床厚は6～10cmを測る。壁下の周溝は、幅20cm、深さ約10cmの規模でカマド部を除き全周する。

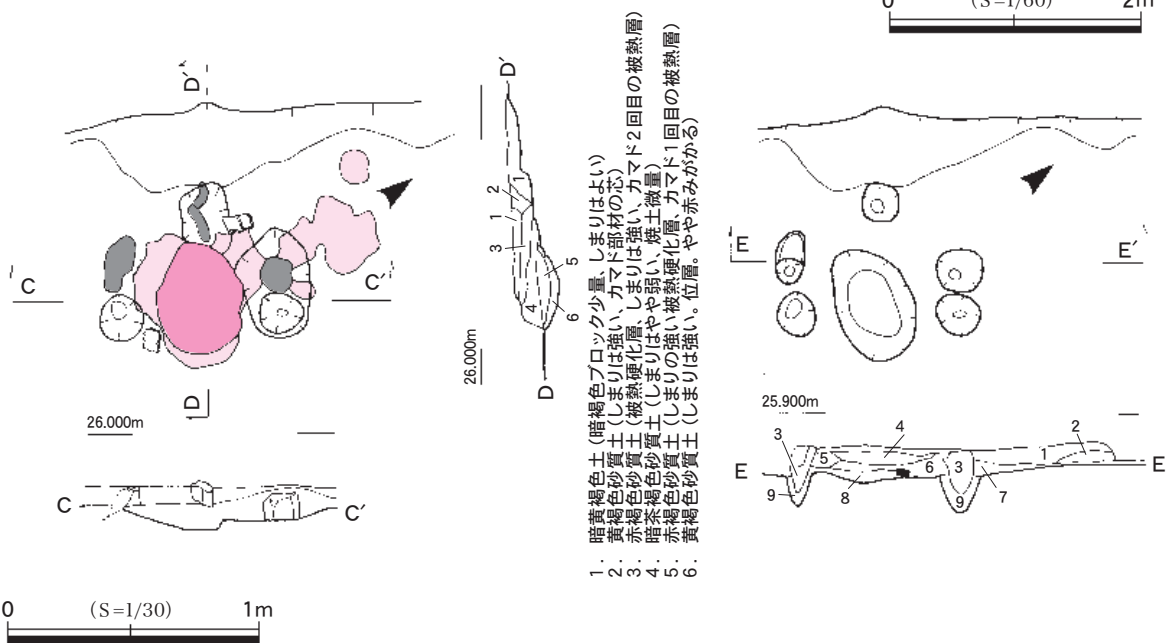
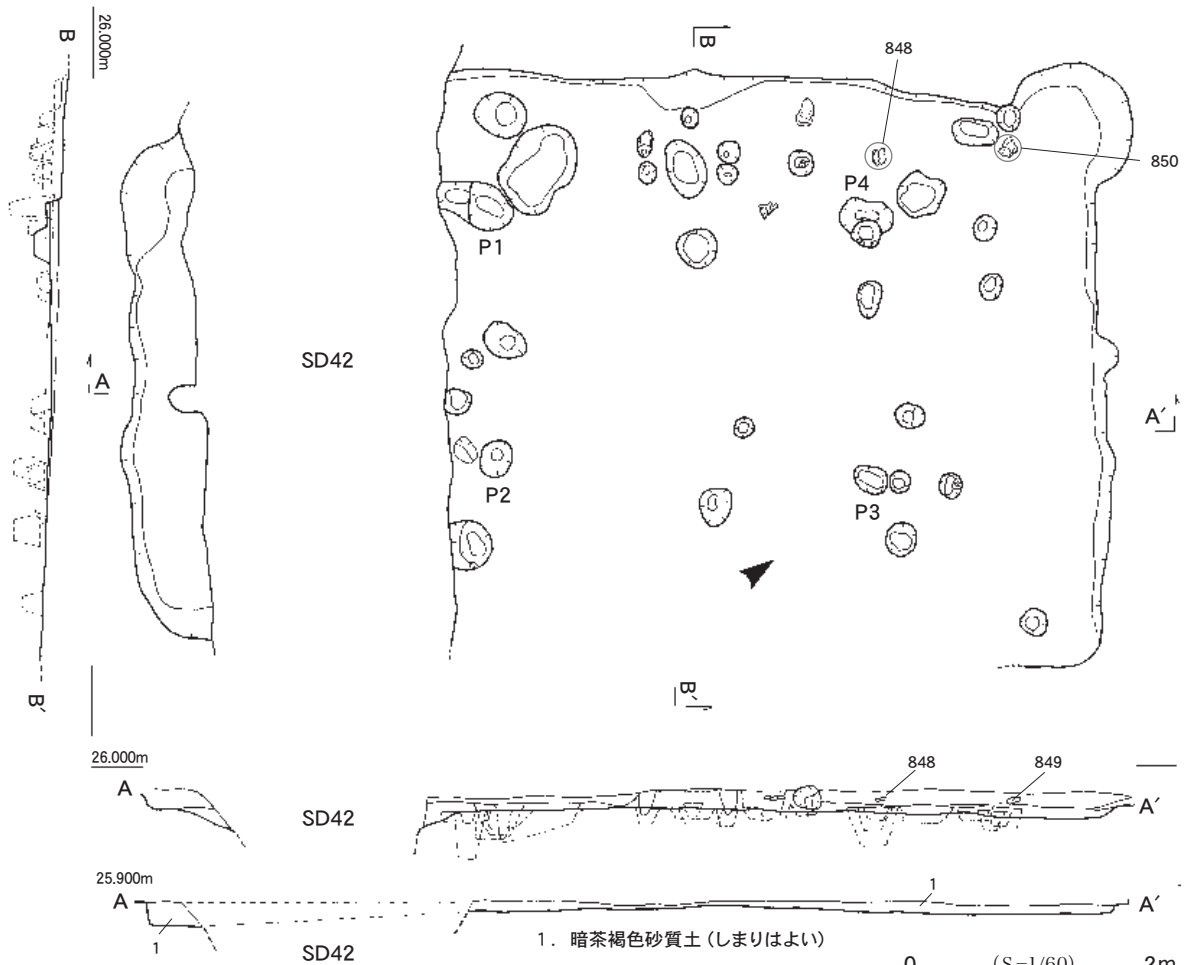
カマドは住居北壁で検出している。住居内から柱穴を10基確認したが、直径16～50cm、深さ8～27cmと幅がある。いずれも本遺跡の古墳時代後期住居のように4本柱の配置をとらない。住居外にて精査を行ったものの、主柱穴などの柱穴は確認できていない。本住居からは、903・905など古代以降の可能性のある遺物が出土している。混入したと考えられる。

#### カマド (第231図)

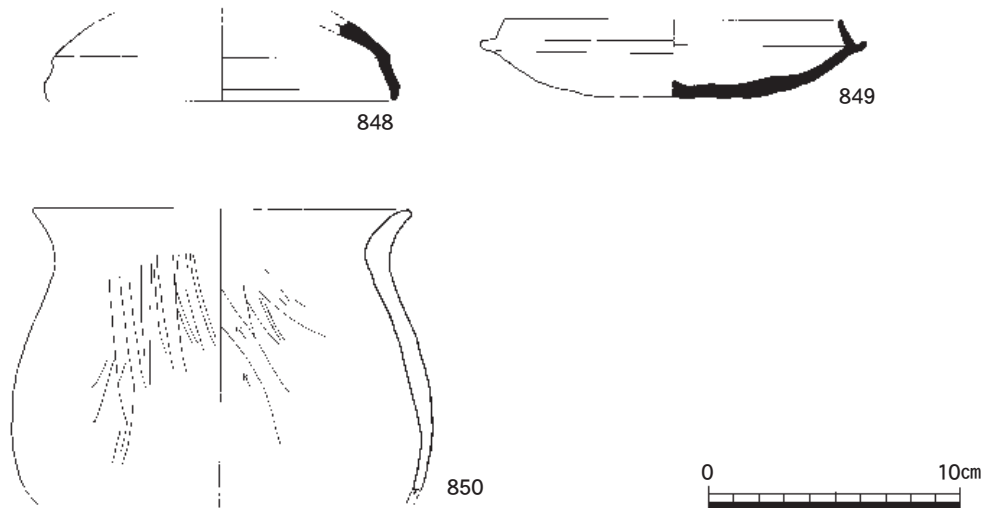
住居北壁中央に構築される外側に張り出すタイプである。一段掘り下げると土師器と被熱硬化面を確認した。硬化面中央は黄白色化し、縁辺部は赤変している。硬化面両サイドにはカマド袖部材を配置していたであろう小穴が確認できる。焚口50cm、奥行き75cm、最大幅75cm、高さ14cmの大きさであった。

#### 出土遺物 (第231図)

土器4点を図示した。903・904・905は土師器である。903は外縁部に高台を貼り付けている。9世紀代か。904は甕の胴部。905は観察表で両黒としたが瓦器塚の可能性が高い。低平な高台を付



第211図 SH20平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/30)



第212図 SH20出土遺物 (S=1/3)

ける。906は瓦器塚の口縁部。石器は1点出土した。175は腰岳系黒曜石製の楔形石器。縦長に近い剥片を素材とし、主要剥離面＝裏面に平坦な加工を施して厚みを取り、上端・下端付近に表・裏面から調整を入れて刃部状に整形している。左右側面を槌状に欠損している。

#### 掘立柱建物跡

##### SB4 (第215図)

第3調査区I-3で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(1.3m)、桁行3間～4間(3.2m)、身舎面積約4.2㎡、N45°E方向に軸線に向ける。掘方直径は20～30cm、柱穴の深さは10～25cmである。柱穴の芯心距離はほとんど60～90cmであるが、西側桁行北西角と次の柱穴の間に、東列と対応する位置に柱穴が無く、1.76mの距離を空ける。柱穴より1点遺物が出土した。

##### 出土遺物 (第215図)

土器1点を図示した。856は土師器。塚か甕の口縁部。

##### SB5 (第217図)

第3調査区K-4付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(3.5m)、桁行4間(7.3m)、身舎面積約25.6㎡、N39°W方向に軸線に向ける。掘方直径は35～80cm、柱穴の深さは38～55cm、柱痕跡を確認できた柱穴は2つあり直径約15cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.5～1.8m、桁行間1.3～2.4mである。

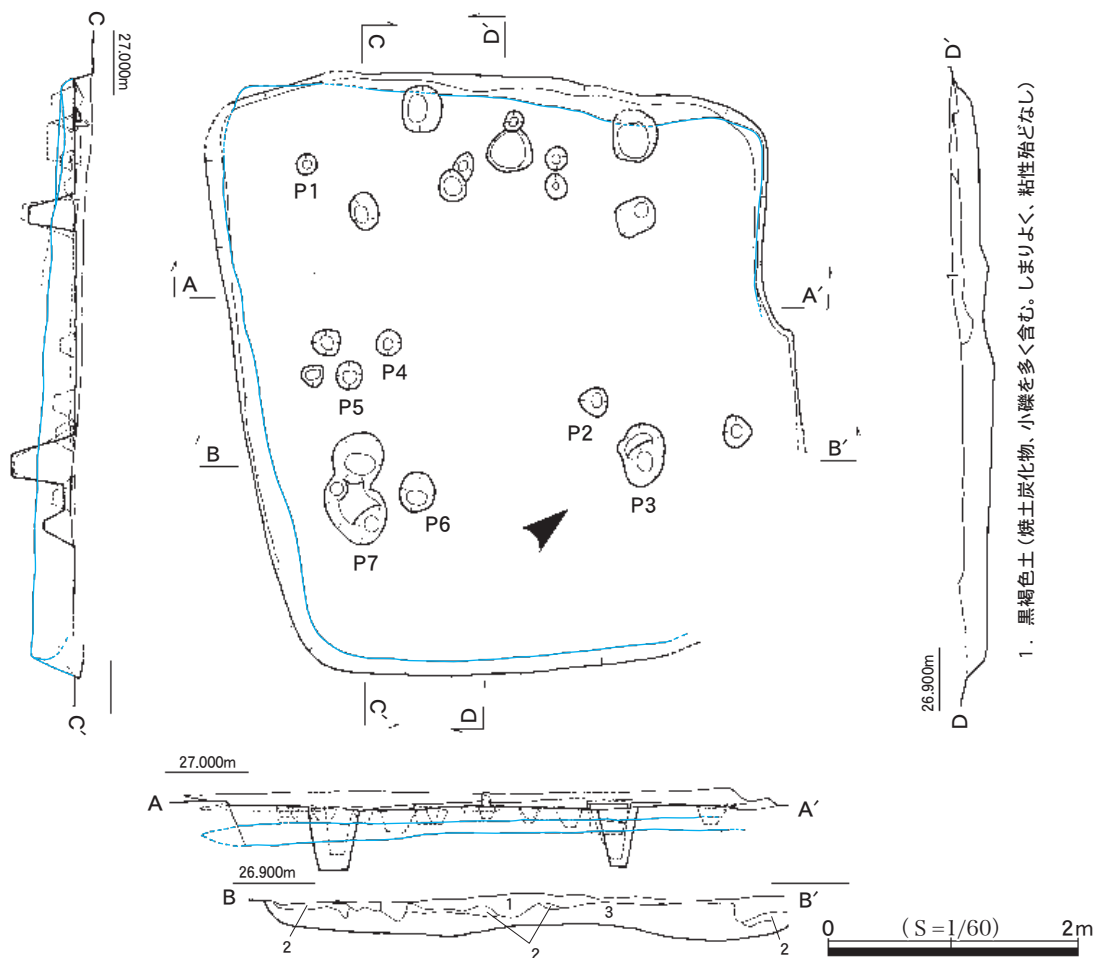
##### 出土遺物 (第217図)

土器5点を図示した。全て須恵器の坏蓋である。860は器高の低平化が進むTK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料と思われる。

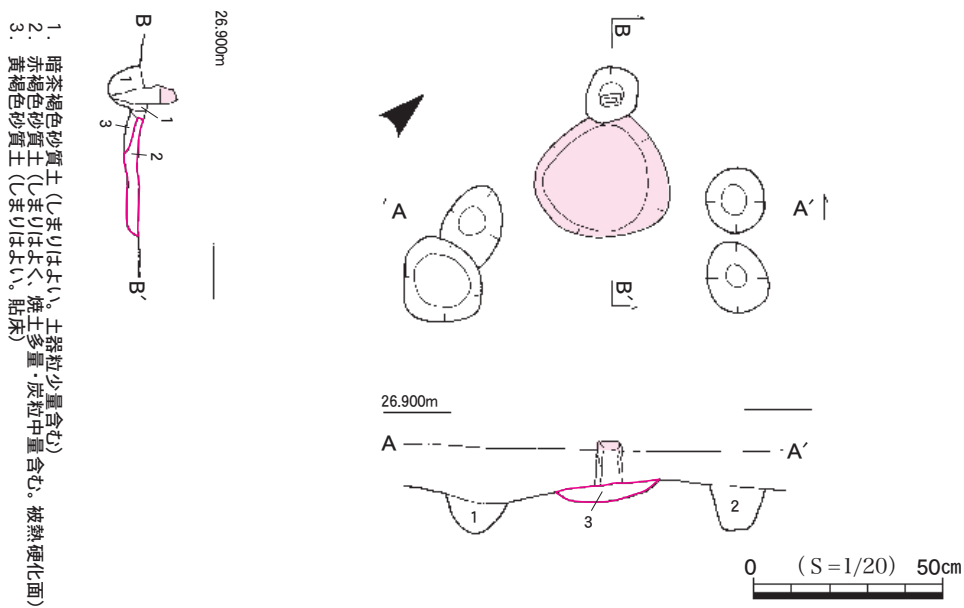
##### SB7 (第216図)

第3調査区M-7付近で検出した総柱建物である。規模は2間(3.4m)×2間(3.6m)、身舎面



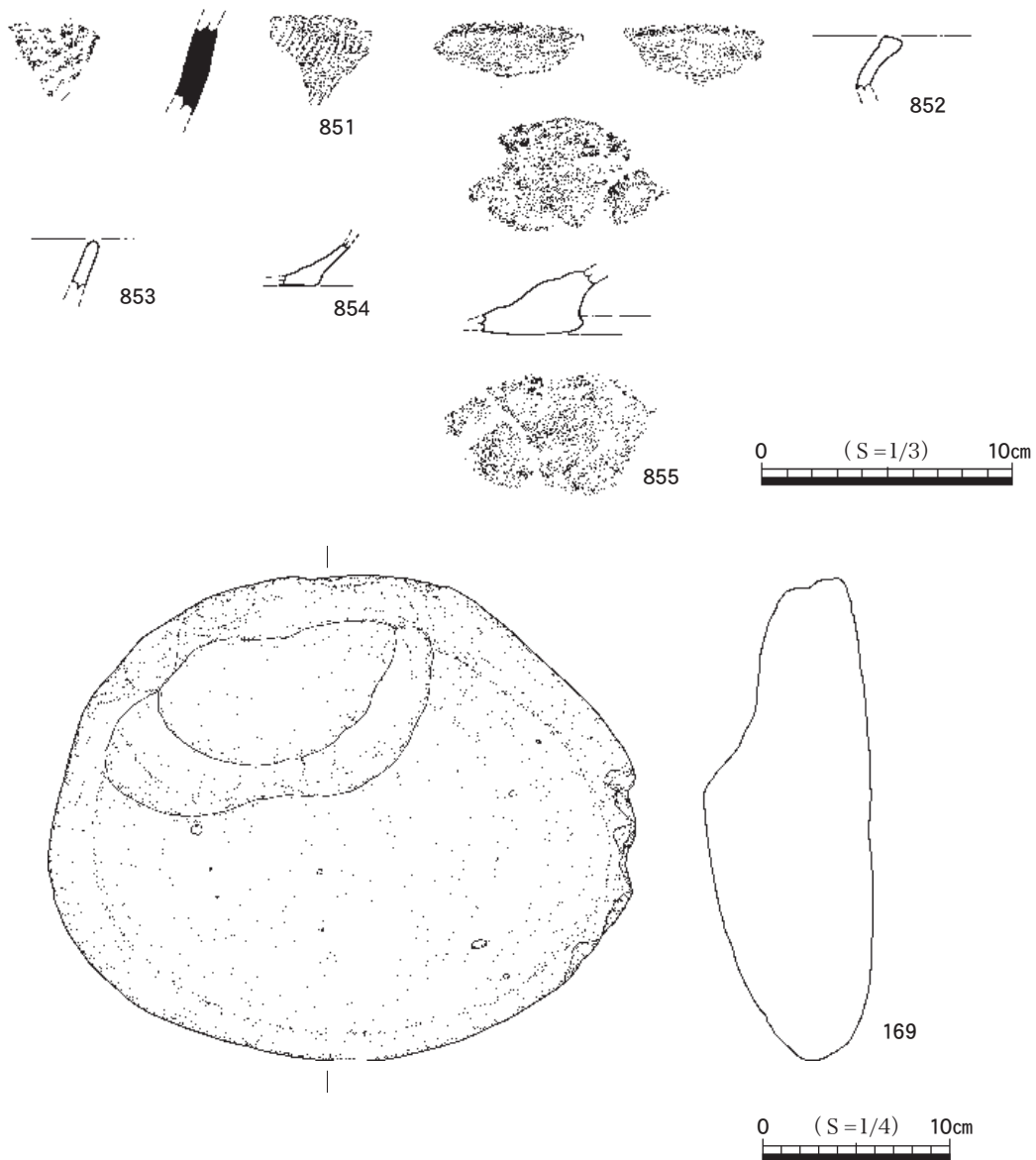


1. 黒褐色土 (小礫を多く、焼土炭化物をやや多く含む。しまりよく、粘性殆どなし)
2. 黄褐色土 (小中礫を多く含む。しまり非常によく、粘性ややあり)
3. 小礫 (暗灰褐色土ブロックを多く、炭化物をやや多く含む。しまりは非常によく、粘性あり。貼床か)



1. 暗茶褐色砂質土 (しまりはよい。土器粒少量含む)
2. 赤褐色砂質土 (しまりはよく、焼土多量・炭粒中量含む。被熱硬化面)
3. 黄褐色砂質土 (しまりはよい。貼床)

第213図 SH23平・断面・土層図 (S=1/60) カマド平・断面・土層図 (S=1/20)



第214図 SH23出土遺物 (S =1/3 (851～855)、S =1/4 (169))

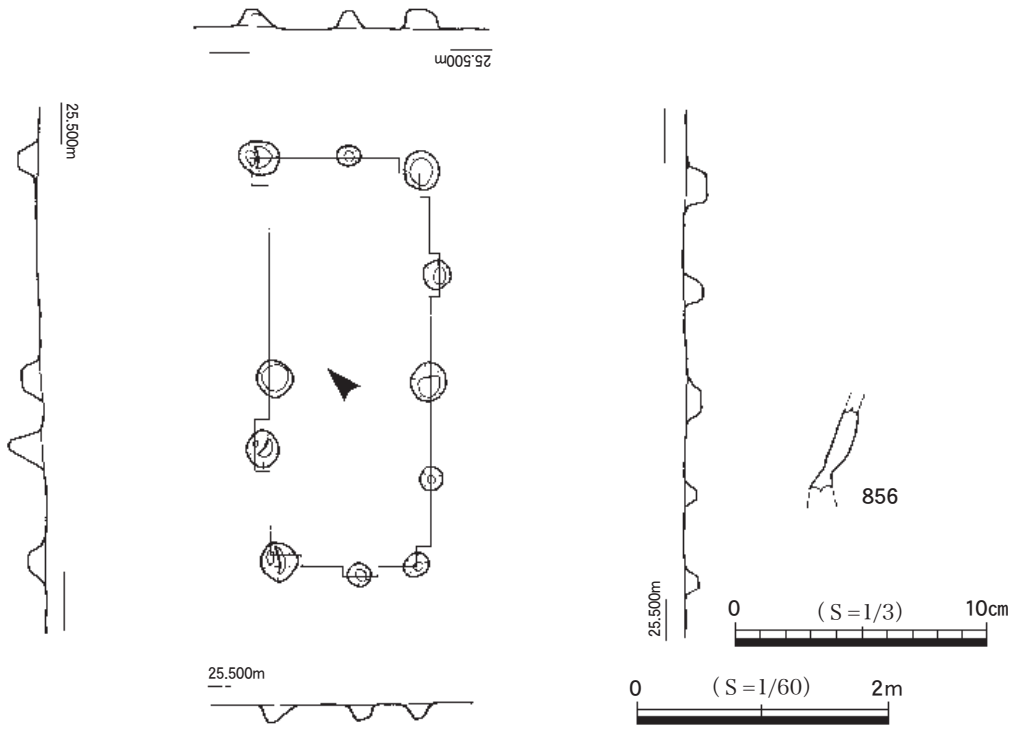
積約12.2㎡、N 20°E方向に軸線を向ける。掘方直径は35～60cm、柱穴の深さは30～46cm、柱痕跡を確認できた柱穴は2つあり直径約15cmを測る。柱穴の芯心距離は、南北列1.5～1.8m、東西列1.7～1.8mである。

**出土遺物 (第216図)**

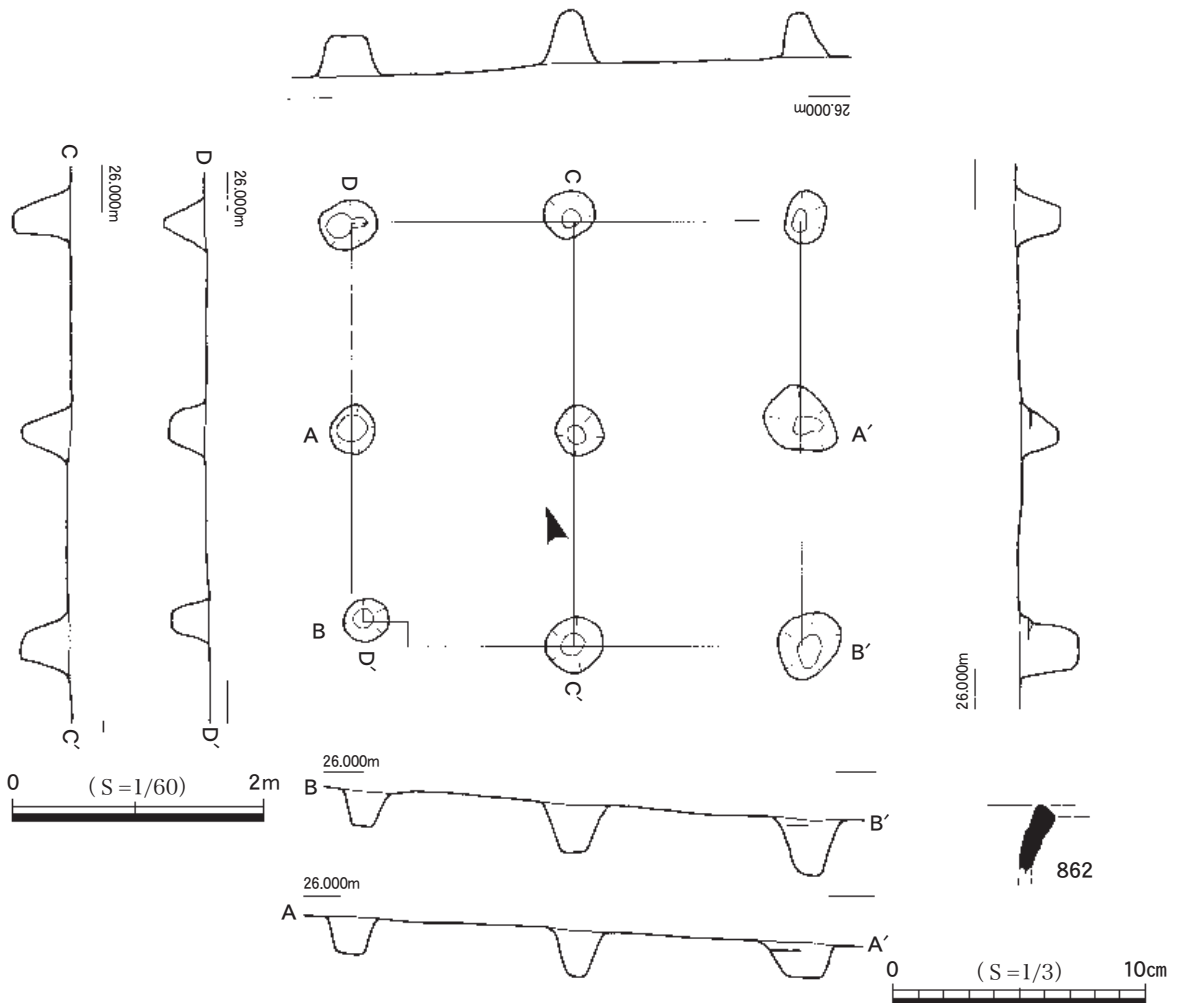
土器1点を図示した。862は須恵器で甕か壺の口縁部。

**SB8 (第218図)**

第3調査区M-8付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4.2m)、桁行3間(6.1m)、身舎面積約25.6㎡、N 5°E方向に軸線を向ける。掘方直径は35～65cm、柱穴の深さは15～40cm、柱痕跡を確認できた柱穴は2つあり直径約15cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間2～2.2m、桁行間1.5～3mである。桁行中央の柱穴間隔は3m前後あり広い。柱穴の芯心距離は、梁行間



第215図 SB4平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第216図 SB7平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



1.5～1.8m、桁行間1.3～2.4mである。

**出土遺物** (第218図)

土器2点を図示した。**863**は須恵器で胴部。**864**は瓦質土器の胴部片。外面に平行タタキが認められる。

**SB9** (第219図)

第3調査区L-6付近で検出した側柱建物である。規模は梁行3間(4.7m)、桁行4間(6.9m)、身舎面積約32㎡、N45°E方向に軸線に向ける。掘方直径は34～54cm、柱穴の深さは15～35cm、柱痕跡を確認できた柱穴は3つあり直径約10～15cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.4～1.8m、桁行間1.4～2.1mである。

**出土遺物** (第219図)

土器3点を図示した。**865**は縄文土器。穴のある乳頭状の突起が4つ認められる。**866・867**は須恵器。**867**は坏蓋。受け部から先の口縁端部は失われている。TK217段階以降、7世紀中頃以降と推定する。

**SB10** (第220図)

第3調査区M-6で検出した総柱建物である。規模は2間(3.7m)、2間(3.9m)、身舎面積約14㎡、N20°E方向に軸線に向ける。掘方直径は32～48cm、検出面から柱穴の深さは10～46cmを測る。柱穴の芯心距離は、南北列1.7～2m、東西列1.8～2.1mである。

**出土遺物** (第220図)

土器2点を図示した。**868・869**は須恵器。**868**は坏蓋。受け部からやや長いかえりが認められる。つまみは存在したと思われるが欠落する。TK217新段階、7世紀中頃の資料。

**SB16** (第221図)

第5調査区I-16付近で検出した側柱建物である。規模は梁行1間(1.3m)、桁行2間(3m)、身舎面積約4㎡、N55°W方向に軸線に向ける。掘方直径は34～52cm、柱穴の深さは10～34cm、柱痕跡を確認できた柱穴は3つあり直径約18～25cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間0.9～1.3m、桁行間1.4～1.5mである。調査区外の建物北側に遺構が展開する可能性もある。

**出土遺物** (第221図)

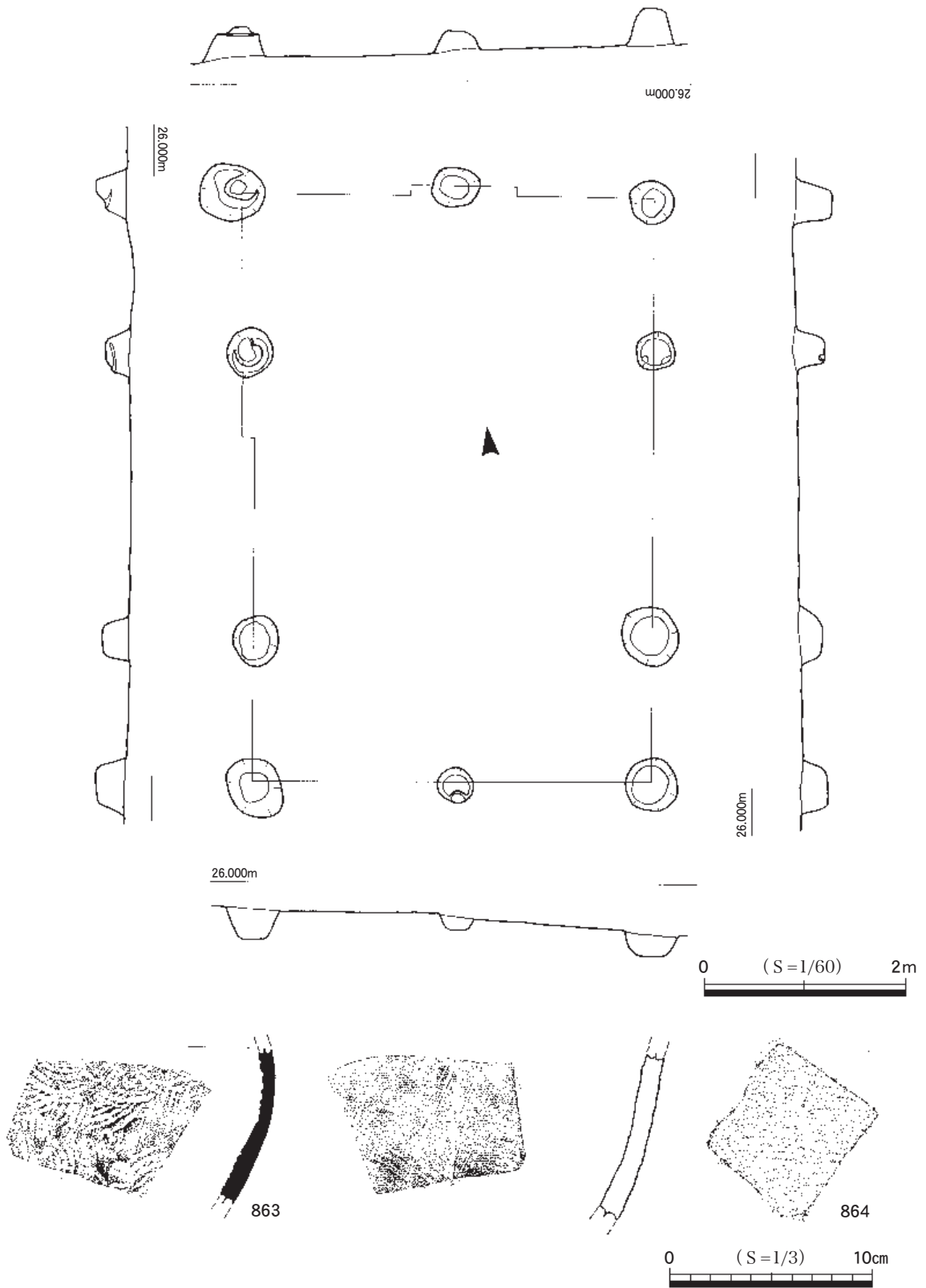
土器2点を図示した。**870**は須恵器の坏身。立ち上がりはやや長い。TK43段階、6世紀後半～末の資料。**871**は土師器で内黒埴。

**SB18** (第222図)

第5調査区I-19付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(2m)、桁行5間(10.3m)、身舎面積約20㎡、N55°E方向に軸線に向ける。掘方直径は18～48cm、柱穴の深さは10～22cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間0.8～1m、桁行間1～2.5m、桁行東列の柱穴間隔が西列よりも広い。

**出土遺物** (第222図)

土器1点を図示した。**872**は土師器で甕。長胴タイプと思われる。古墳時代後期に属するものか。



第218図 SB8平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

## 土 坑

### SK1 (第223図)

第1調査区C-22で検出した。平面隅丸長方形の遺構で、時期不明の溝状遺構を切っている。最大長1.34m、最大幅1.24m、深さ10～20cmの大きさである。埋土上層は暗褐色土で長さ約30cmの安山岩の円礫を含む。底面は小礫が露出する。特筆すべきは馬具の出土である。底面から5cm程浮いた状態で出土している。馬具以外の遺物は発見されていない。

### 出土遺物 (第223図)

鉄製品2点を図示した。873・874は馬具の轡である。873は環状鏡板。連結していたと思われる引手の円環部が残る。874は観察表では銜としているが、引手部位の方が妥当であろう。873の円環部とは接合しない。

### SK5 (第224図)

第2調査区I-7で検出した不定形土坑である。最大長6.38m、最大幅2.5m、深さ10～40cmの大きさである。北側の削平が激しく立ち上がりはわずかである。遺物は底面から5～10cm浮いた状態で出土している。須恵器・土師器などが混在して出土しており、古墳時代後期の廃棄土坑と考えられる。床面に点在する柱穴は他の時代の構築と思われる。

### 出土遺物 (第225・226図)

土器20点を図示した。875・876は時期不明の縄文土器。877～880は須恵器。877は坏蓋。878は短い立ち上がりが付く。TK217古段階、7世紀前半～中頃の所産。879・880は高坏。低平なタイプ。881～894は土師器。881は蛸壺である。882～888、890・891は観察表では壺としたが、甕の方が望ましいのかもしれない。892～894は甗。892・893は底部つつぬけタイプ。底部付近に棧渡しなどの穿孔は見られない。893外面には横方向のヘラ削りが認められる。古墳時代後期に属するものであろう。石器は5点を図示した。170・171は石鏃である。170は姫島産黒曜石製。裏面を主要剥離面とし、右側縁側を打面とする幅広剥片を素材とし、打面部を裏面から表面に向けて折断した後、周縁部の最低限の位置にブラガンティング的な加工を施して整形・先端形成を行っている。そのため、表・裏面の中央部には大きく素材の面が残る。左脚部はあまり精美ではなく、先端は僅かに欠損している。171は腰岳系黒曜石製。小型の縦長剥片を素材とし、表・裏面から周縁部にのみ加工を施し、二等辺三角形に近い形状に整形している。基部にはやや深い抉りが入れられ、表・裏面の中央部には素材の面残り、先端・右脚を欠損している。172は緑泥片岩製の扁平打製石斧。表・裏面に大柄で平坦な加工を施し厚みを取った後、周縁部に急斜度な調整を入れて、撥形に整形し、刃部形成を行っている。173は磨石。174は磨石兼敲石。

### SK6 (第227図)

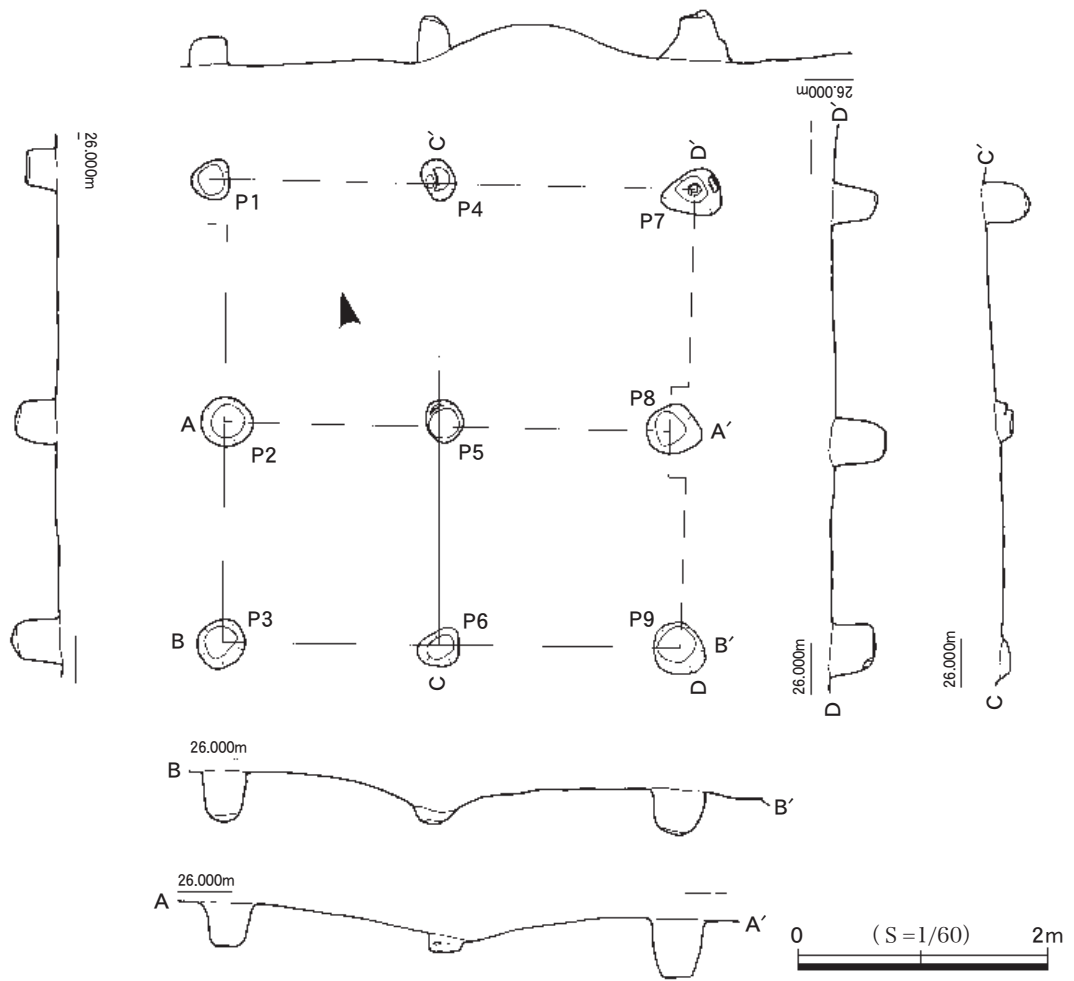
第2調査区G-8で検出した不定形土坑である。最大長1.8m、最大幅80cm、深さ10cmの大きさである。壁面の立ち上がりはやや急である。遺物は底面から5～10cm浮いた状態で出土している。遺物は須恵器の小片のみ出土している。

### 出土遺物 (第227図)

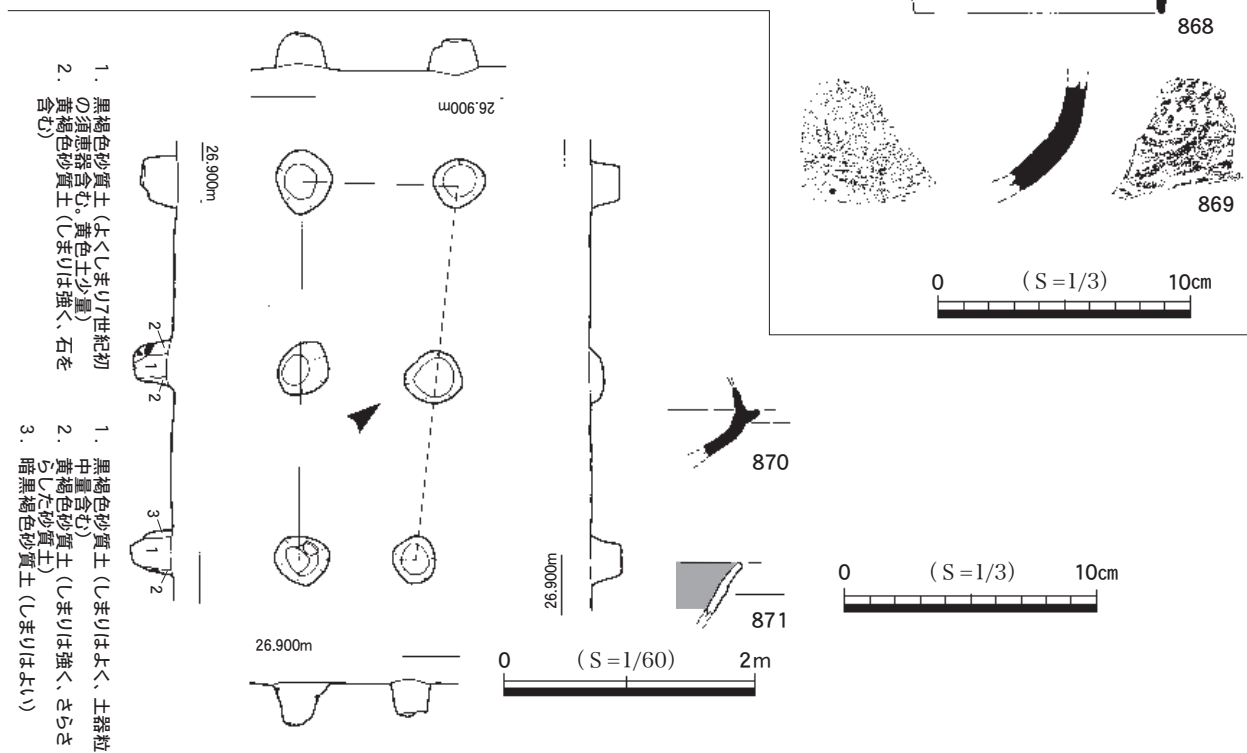
土器1点を図示した。895は淡黄橙色の胴部片。土師器の甕と思われるが須恵器の低温焼成資料の可能性もある。





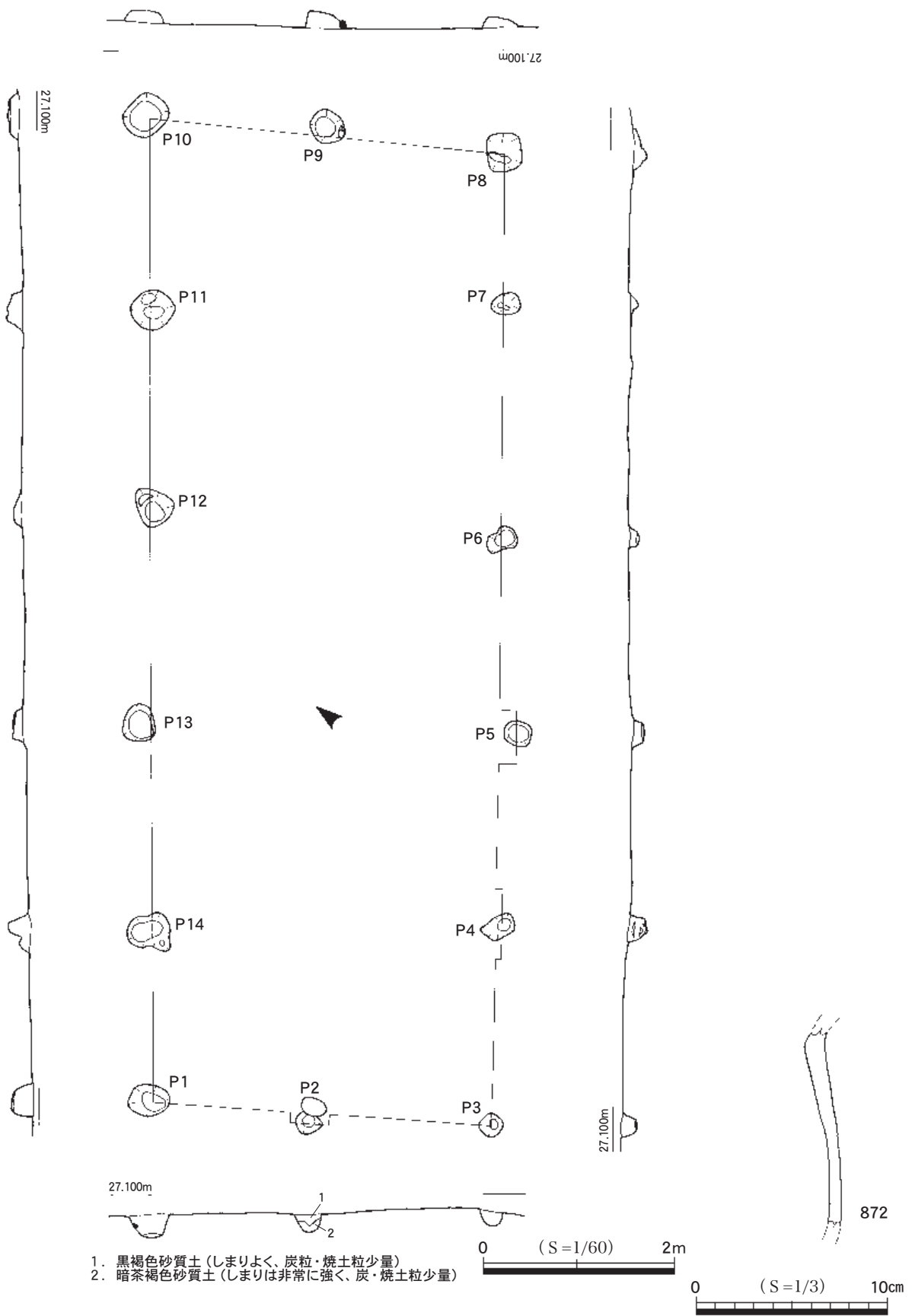


第220図 SB10平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

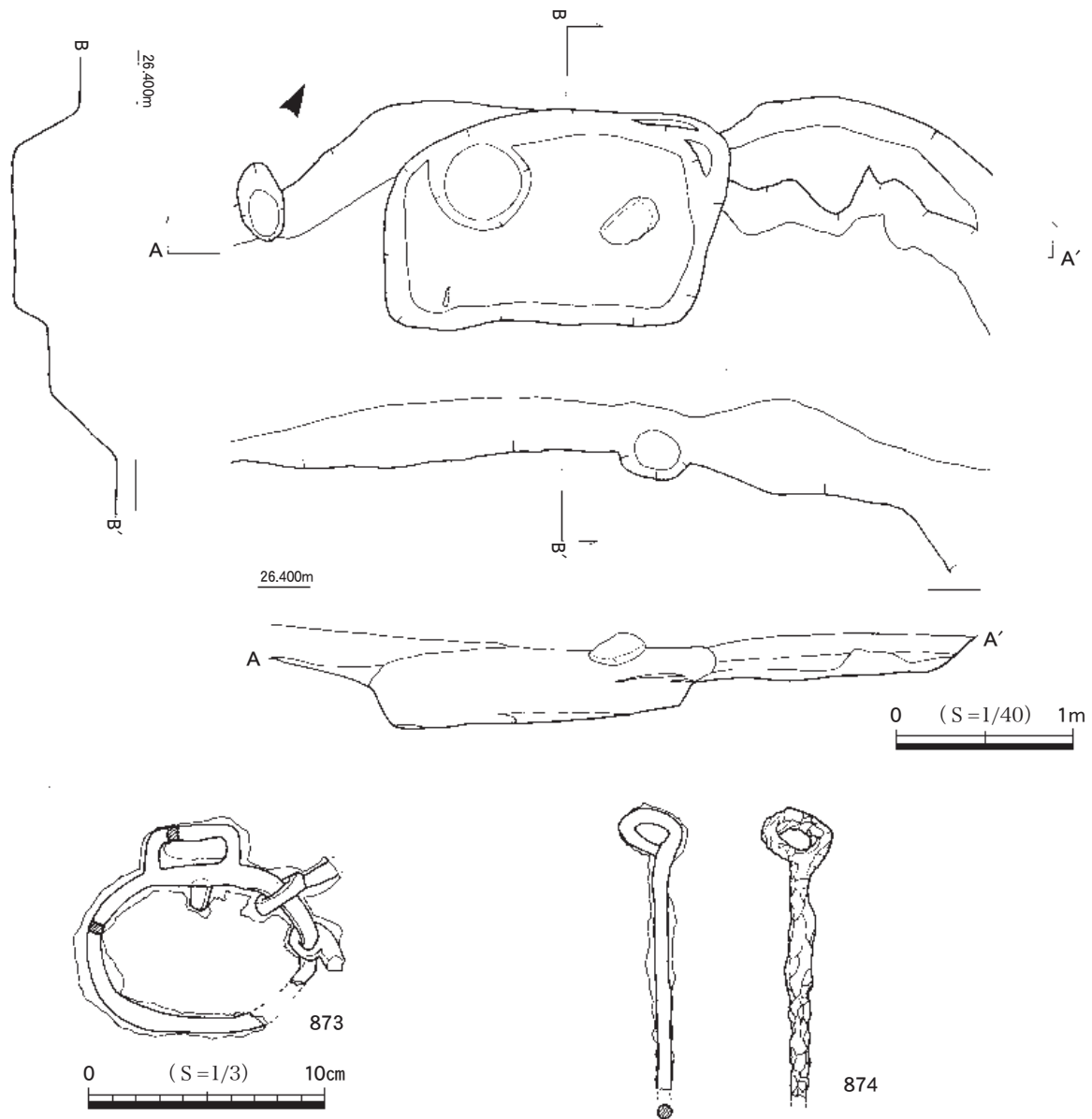


- 1. 黒褐色砂質土 (よくしまり7世紀初  
の須恵器含む、黄色土少量)
- 2. 黄褐色砂質土 (しまりは強く、石を  
含む)
- 3. 暗黒褐色砂質土 (しまりはよい)

第221図 SB16平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第222図 SB18平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第223図 SK1平・断面図 (S=1/40) 出土遺物 (S=1/3)

SK27 (第228図)

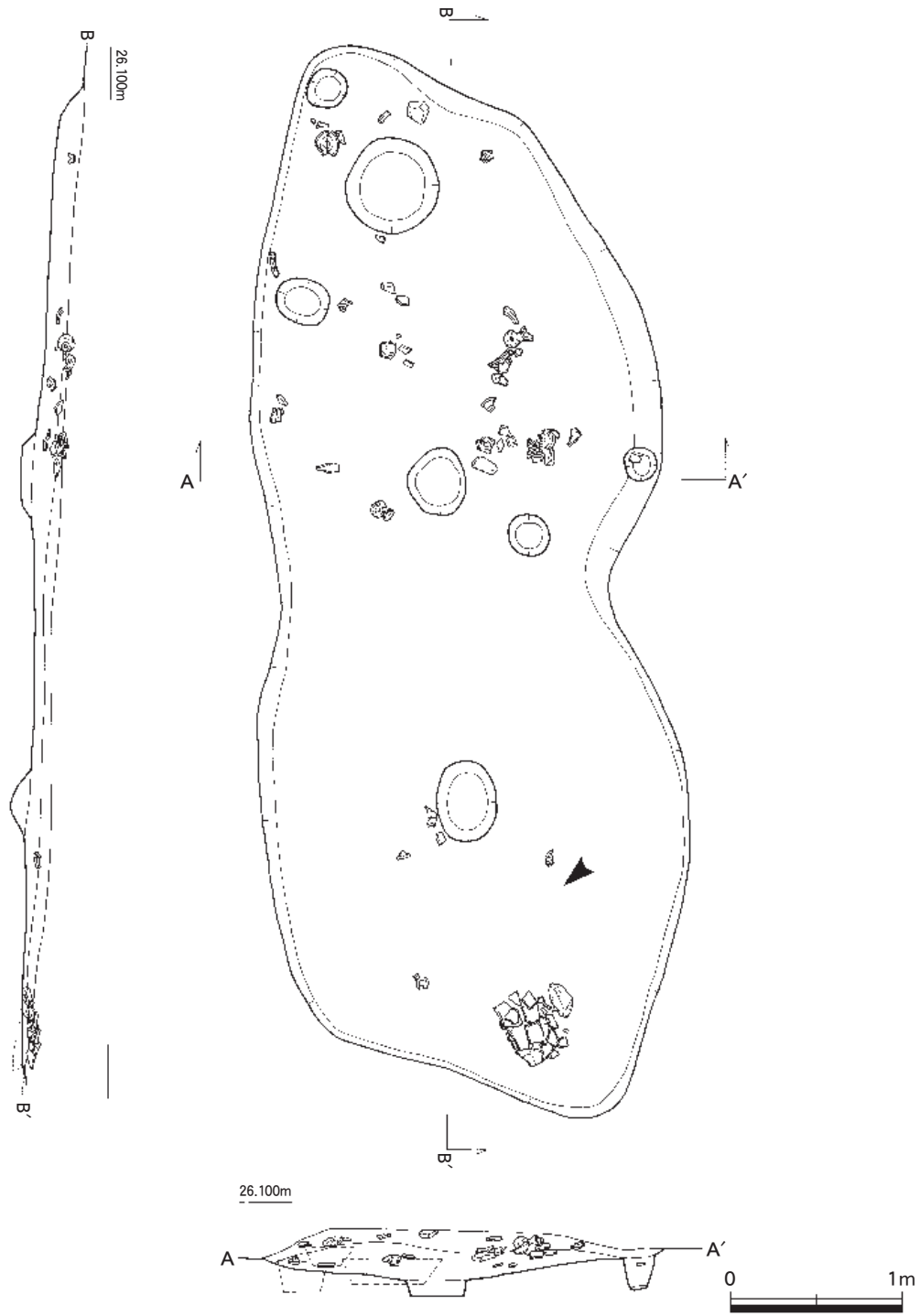
第3調査区N-3で検出した円形土坑である。直径38cm、深さ55cmの大きさである。壁面から礫が顔を覗かせている。土坑より柱穴と報告してよいサイズである。遺物は数点出土した。

出土遺物 (第228図)

土器4点を図示した。896は縄文土器の鉢。897～899は須恵器で坏身。898はやや長い短めの口縁部が立ち上がる。TK43段階、もしくはTK209段階の資料。899は長い口縁部が付く。TK43段階、6世紀後半～末の資料。

SK32 (第229図)

第3調査区K-4で検出した円形土坑である。最大長70cm、最大幅60cm、深さ14cmの大きさであ

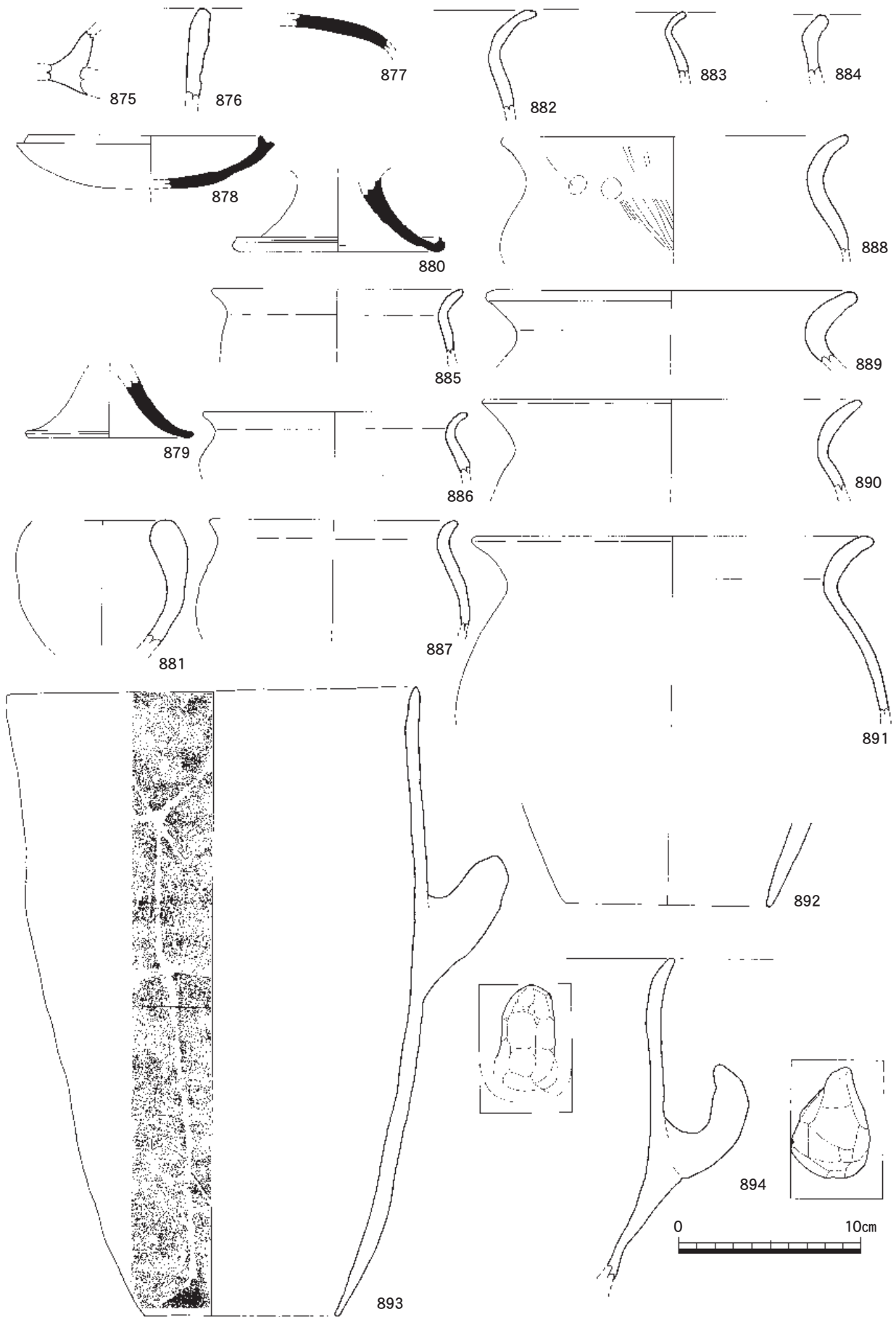


第224図 SK5平・断面図 (S=1/40)

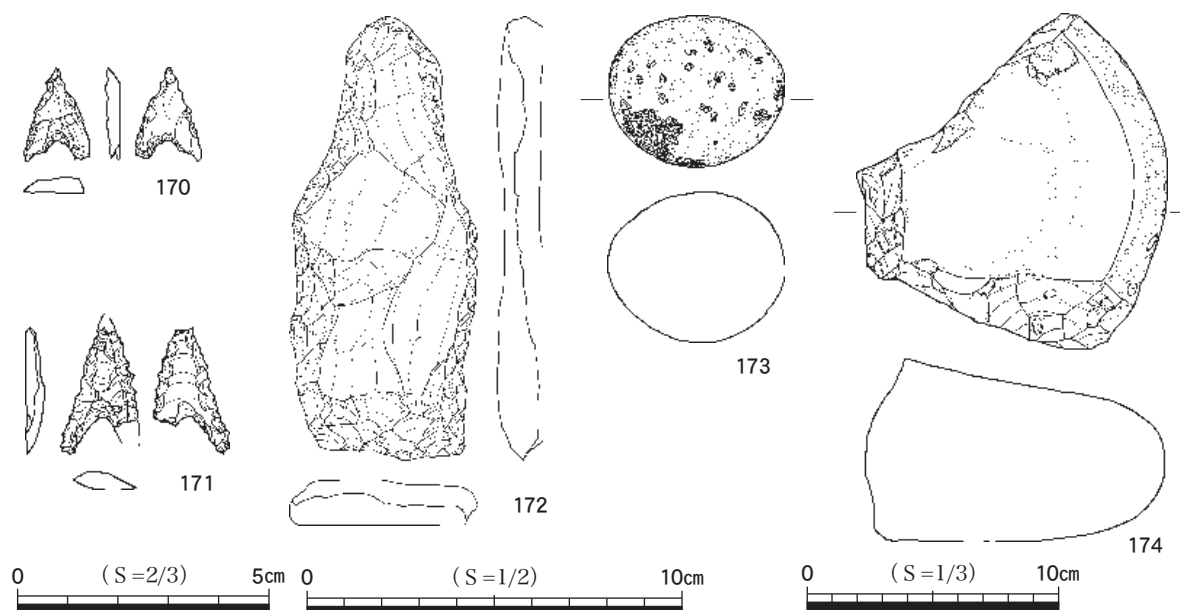
る。壁面と底面の境に礫がある。遺物は須恵器が出土した。

**出土遺物 (第229図)**

土器1点を図示した。900は低平な天井部の須恵器坏蓋。古墳時代後期に属する。



第225図 SK5出土遺物 (1) (S=1/3)



第226図 SK5出土遺物(2) (S=2/3 (170、171)、S=1/3 (173、174)、S=1/2 (172))

### 3. 古代の遺構と遺物

古代の遺構は、掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・井戸を検出している。観察表では内黒や両黒の土器を土師器として掲載したが、黒色土器の方が適当である。遺構は大きく9世紀前後のもの、10世紀後半～11世紀前半のものに分かれる。

#### 掘立柱建物跡

掘立柱建物は10棟を古代の所産と推定した。出土遺物が少量の遺構は、古代と推定できる3次SB2などの遺構と軸線や規模などを比較し、近似するものを同時期に推定している。

#### 3次SB1 (第232図)

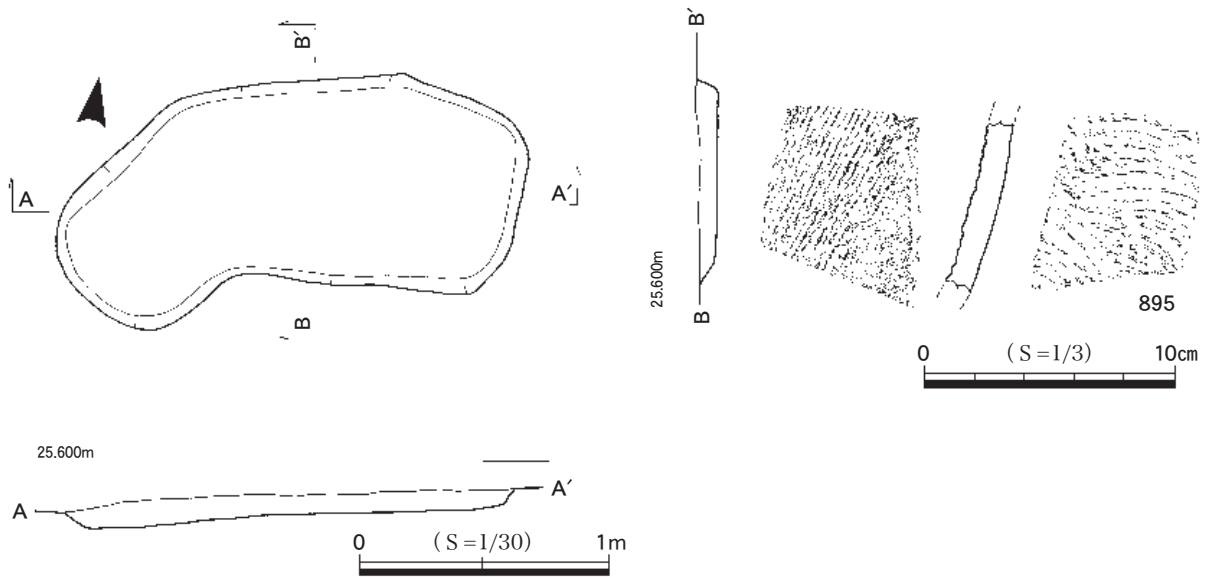
3次調査区で検出した側柱建物である。規模は梁行3間(3.8m)、桁行4間(5.5m)、身舎面積約21m<sup>2</sup>、N30°E方向に軸線を向ける。掘方直径は27～64cm、柱穴の深さは14～40cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.1～1.4m、桁行間1.2～1.5mである。

#### 出土遺物 (第232図)

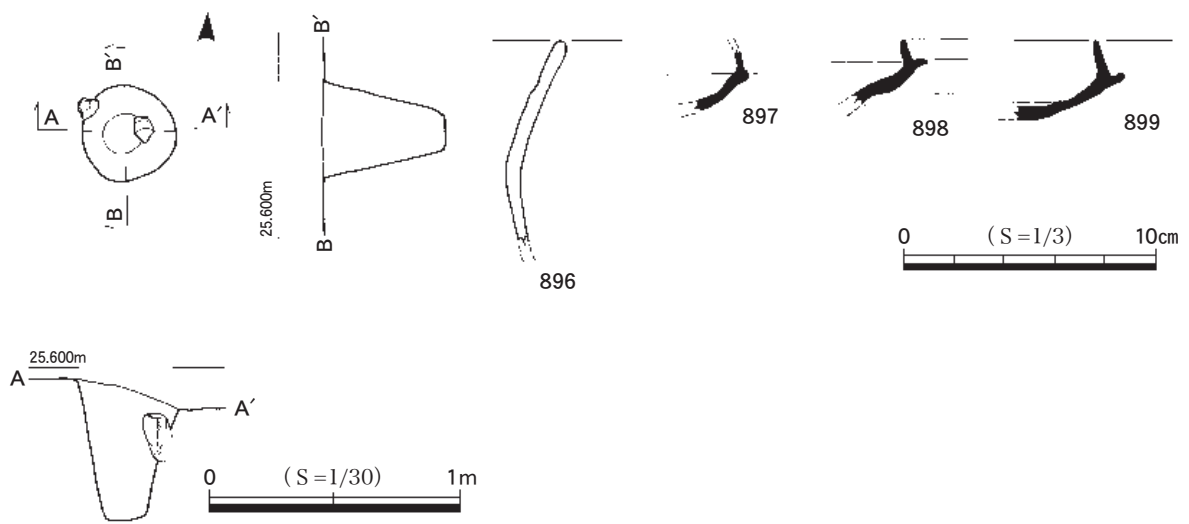
土器5点を図示した。907・908は縄文時代後期の土器で鉢の口縁部。908は太郎迫式段階。909は須恵器の底部。皿であろうか。910・911は土師器の壺。910は淡茶色。911は淡橙色を呈す。9世紀前後の所産か。

#### 3次SB2 (第233図)

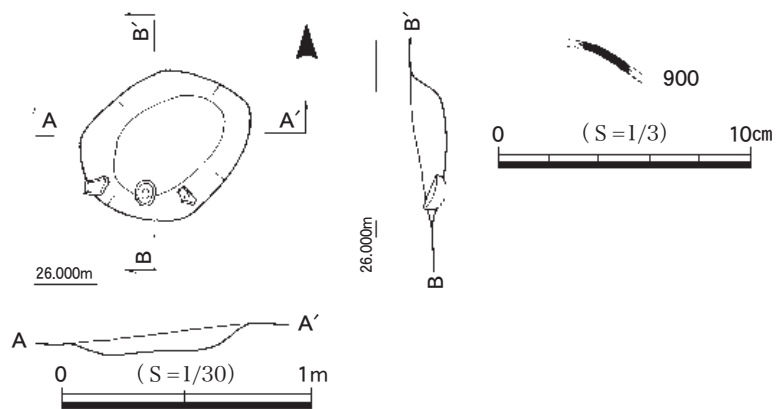
3次調査区で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4.6m)、桁行4間(7.8m)、身舎面積約36m<sup>2</sup>、N28°E方向に軸線を向ける。ほとんどの柱穴で重複が確認されることから、少なくとも2回の建て直しが観察できる。2回目の掘方直径は40～70cm、柱穴の深さは16～32cm、1回目の掘



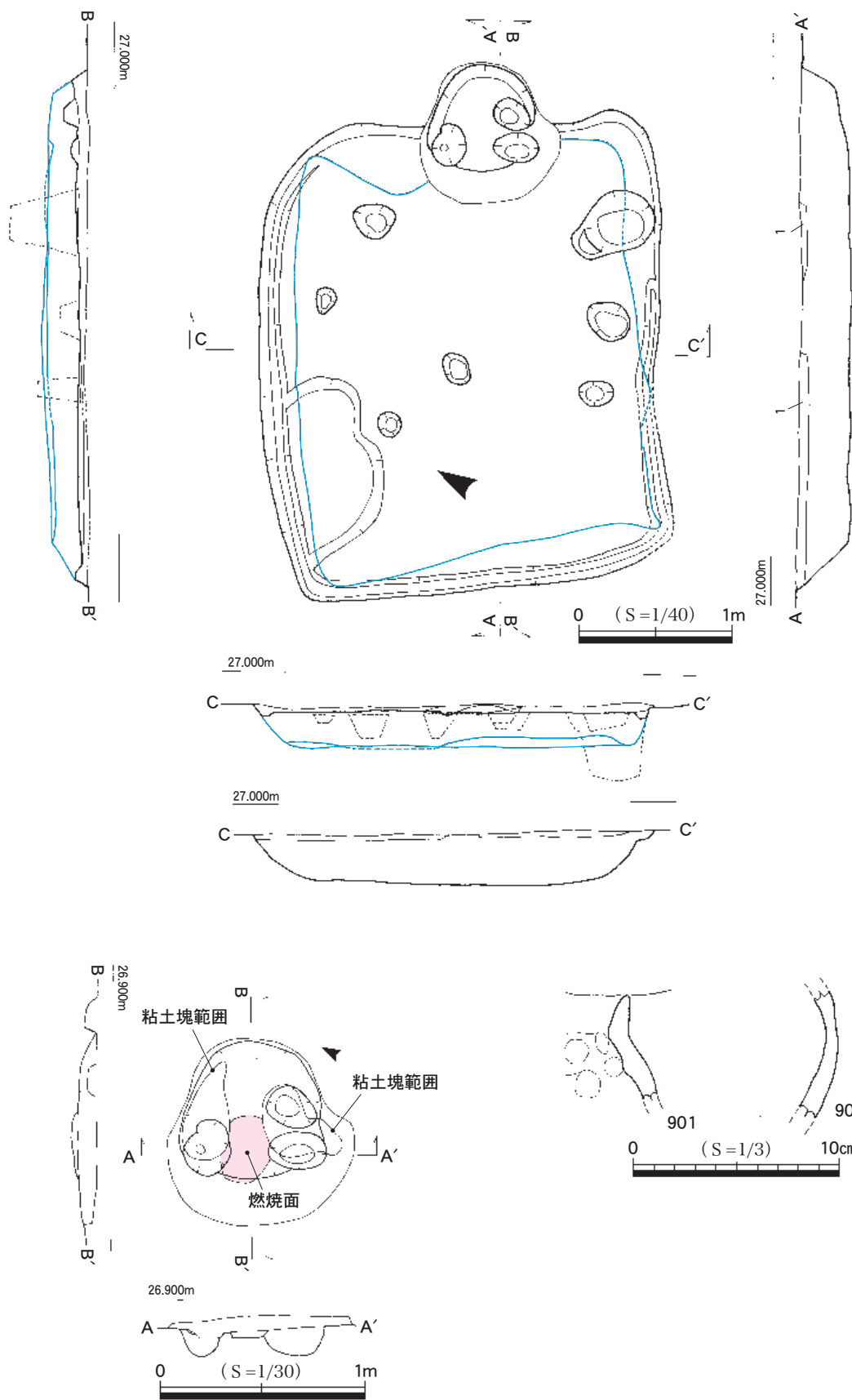
第227図 SK6平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



第228図 SK27平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

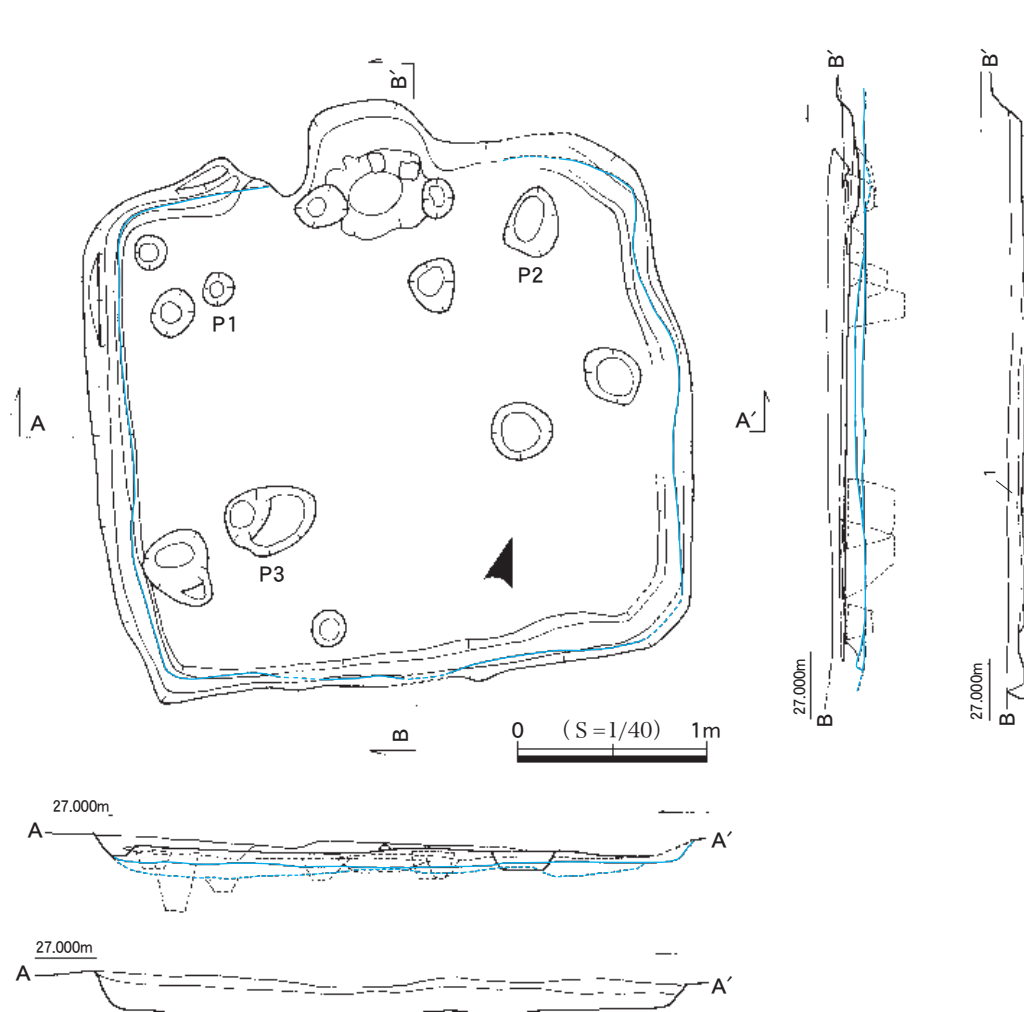


第229図 SK32平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

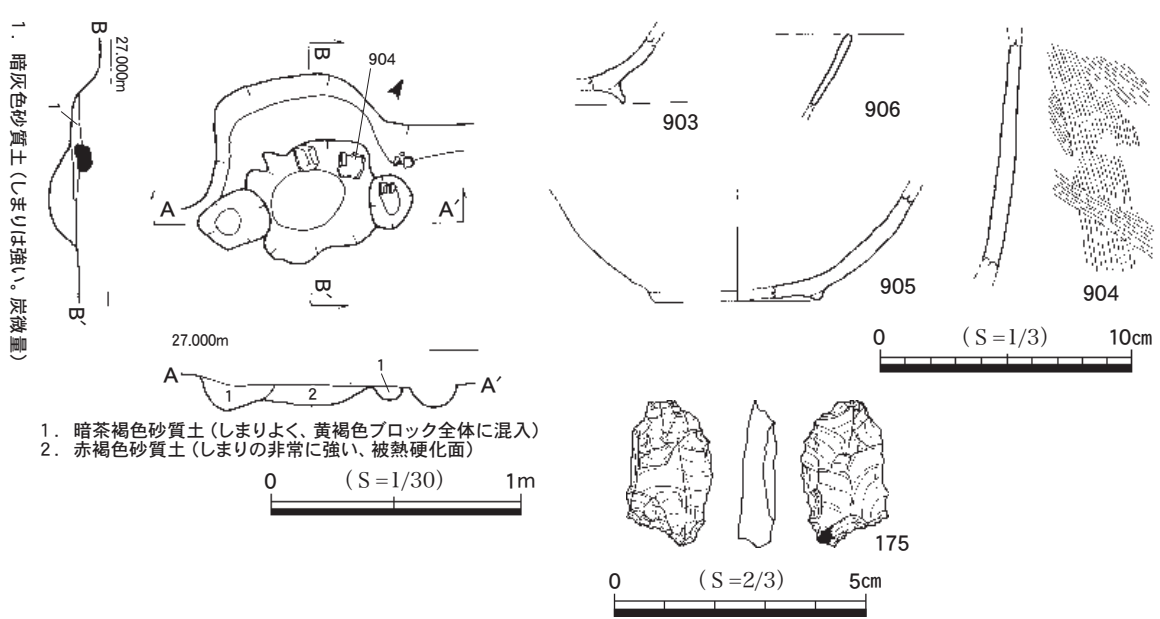


第230図 SH25平・断面・土層図 (S=1/40) カマド平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)





1. 暗褐色土 (褐色土ブロックを多く、小礫、燧土、炭化物を若干含む。しまりよく、粘性ややあり)



1. 暗茶褐色砂質土 (しまりよく、黄褐色ブロック全体に混入)  
 2. 赤褐色砂質土 (しまりの非常に強い、被熱硬化面)

第231図 SH26平・断面・土層図 (S=1/40) カマド平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (903~906)、S=2/3 (175))

方直径は36～66cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間2.2～2.4m、桁行間1.5～2mである。

#### 出土遺物 (第233図)

土器11点を図示した。912～915は須恵器である。912・913は蓋。913は口縁端部のZ字状への変化の兆しが認められる。TK7段階、8世紀中頃～後半の資料であろう。916～922は土師器。914・915、917～919は埴。916は底部。917は幅のある高台が外縁に付くのが特徴。920・921は甕の口縁部。922は蛸壺。胴部に穿孔が一つ認められる。

#### 3次SB4 (第234図)

3次調査区で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4.6m)、桁行3間(5.9m)、身舎面積約27㎡、N39°E方向に軸線を向ける。掘方直径は36～80cm、柱穴の深さは10～45cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.9～2.7m、桁行間1.8～2.1mである。

#### 出土遺物 (第234図)

土器1点を図示した。923は土師器埴の口縁部である。8世紀代の所産か。

#### 3次SB6 (第235図)

3次調査区で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(3.3m)、桁行3間(4.4m)、身舎面積約15㎡、N31°E方向に軸線を向ける。掘方直径は28～64cm、柱穴の深さは12～35cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.6～1.9m、桁行間1.2～2mである。遺物は出土していない。

#### SB15 (第236図)

調査区I-16付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4.2m)、桁行4間(7m)、身舎面積約29㎡、N25°E方向に軸線を向ける。掘方直径は55～80cm、柱穴の深さは19～40cm、柱痕跡を確認できた柱穴は7基あり直径約20cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.9～2.3m、桁行間1.6～2.0mである。南東角は柱穴が重複している。

#### 出土遺物 (第236図)

土器3点を図示した。924は須恵器の胴部。925・926は土師器。925は埴の口縁部。9世紀前後の所産か。926は甕か壺の口縁部である。

#### SB17 (第237図)

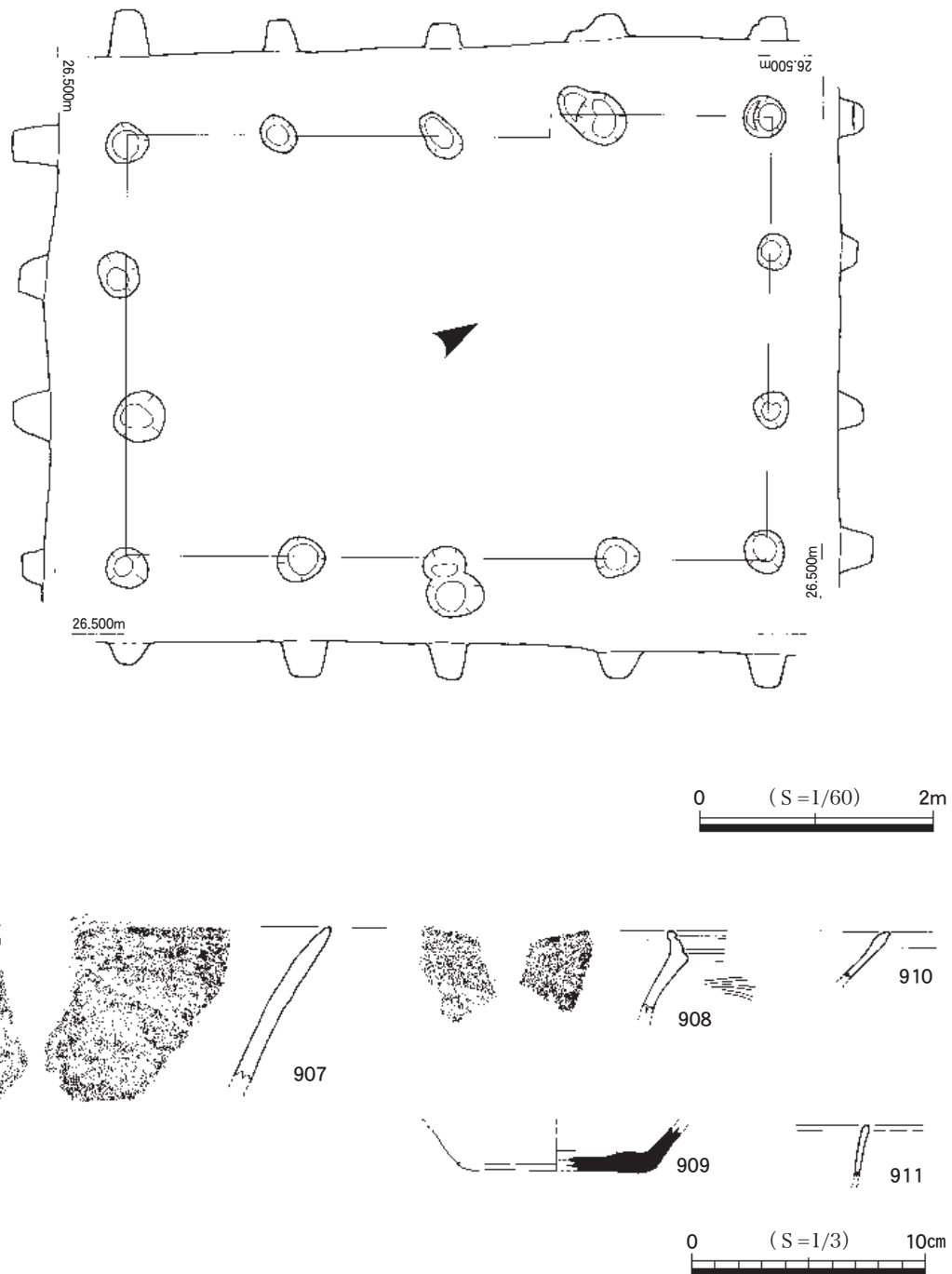
第5調査区I-17付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4.2m)、桁行4間(7.1m)、身舎面積約30㎡、N40°E方向に軸線を向ける。掘方直径は30～52cm、柱穴の深さは20～57cm、柱痕跡を確認できた柱穴は7基あり直径約17cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.8～2.2m、桁行間1.3～2.0mである。

#### 出土遺物 (第237図)

土器1点を図示した。927は黒色土器A類の埴である。

#### SB19 (第238図)

第5調査区H-16付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(3.7m)、桁行5間(10.8m)、南側梁行辺に庇を付属する。身舎面積約40㎡、N35°E方向に軸線を向ける。掘方直径は30～



第232図 3次SB1平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

60cm、柱穴の深さは26～46cm、柱痕跡を確認できた柱穴は4基あり直径約15～20cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.8～1.9m、桁行間1.4～2.6mで、底部の桁行間が他より広い。

出土遺物 (第238図)

土器3点を図示した。928・930は土師器で、928は甕の口縁部。930は皿の底部。929は黒色土器A類の底部。低平な高台が付く。石器1点を図示した。176は姫島産黒曜石製の楔形石器。やや分厚い幅広剥片を素材とし、表面の上下端からと、裏面の下端から平坦な加工を施して、上下端に端部を形成している。上下端及び右側縁に使用痕が顕著に認められる。

#### SB20 (第239図)

第5調査区I-17付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4m)、桁行4間(7m)、身舎面積約28㎡、N31°E方向に軸線を向ける。掘方直径は35～90cm、柱穴の深さは11～40cm、柱痕跡を確認できた柱穴は3基あり直径約20cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.9～2m、桁行間1.4～1.7mである。

#### 出土遺物 (第239図)

土器2点を図示した。931は黒色土器A類の埴。口縁端部が玉縁状を呈す。11世紀代の所産。932は土師器の小皿。

#### SB22 (第240図)

第5調査区H-18付近で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(4.4m)桁行3間(6.3m)、身舎面積約27㎡、N43°E方向に軸線を向ける。掘方直径は35～75cm、柱穴の深さは12～38cm、柱痕跡を確認できた柱穴は3基あり直径約15～25cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間2.2～2.3m、桁行間2.1～2.2mである。

#### 出土遺物 (第240図)

土器4点を図示した。933・934は須恵器。933は杯身で古墳時代の所産。934は埴で、高台が外側につく。8世紀中頃～末の所産。935・936は土師器の埴。淡橙色を呈す。

#### SB23 (第241図)

第5調査区H-17付近で検出した側柱建物である。規模は2間(3.8m)×2間(4.1m)、身舎面積約16㎡、N25°E方向に軸線を向ける。掘方直径は54～70cm、柱穴の深さは32～55cm、柱痕跡を確認できた柱穴は4基あり直径約27～30cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.8～2.1mである。

#### 出土遺物 (第241図)

土器4点を図示した。937は須恵器の胴部片。938は瓦器碗の口縁部。混入か。939は土師器の坏か。底部はへら切り。940は小型の土師器の鉢で口縁部。

### 土 坑

#### SK4 (第242図)

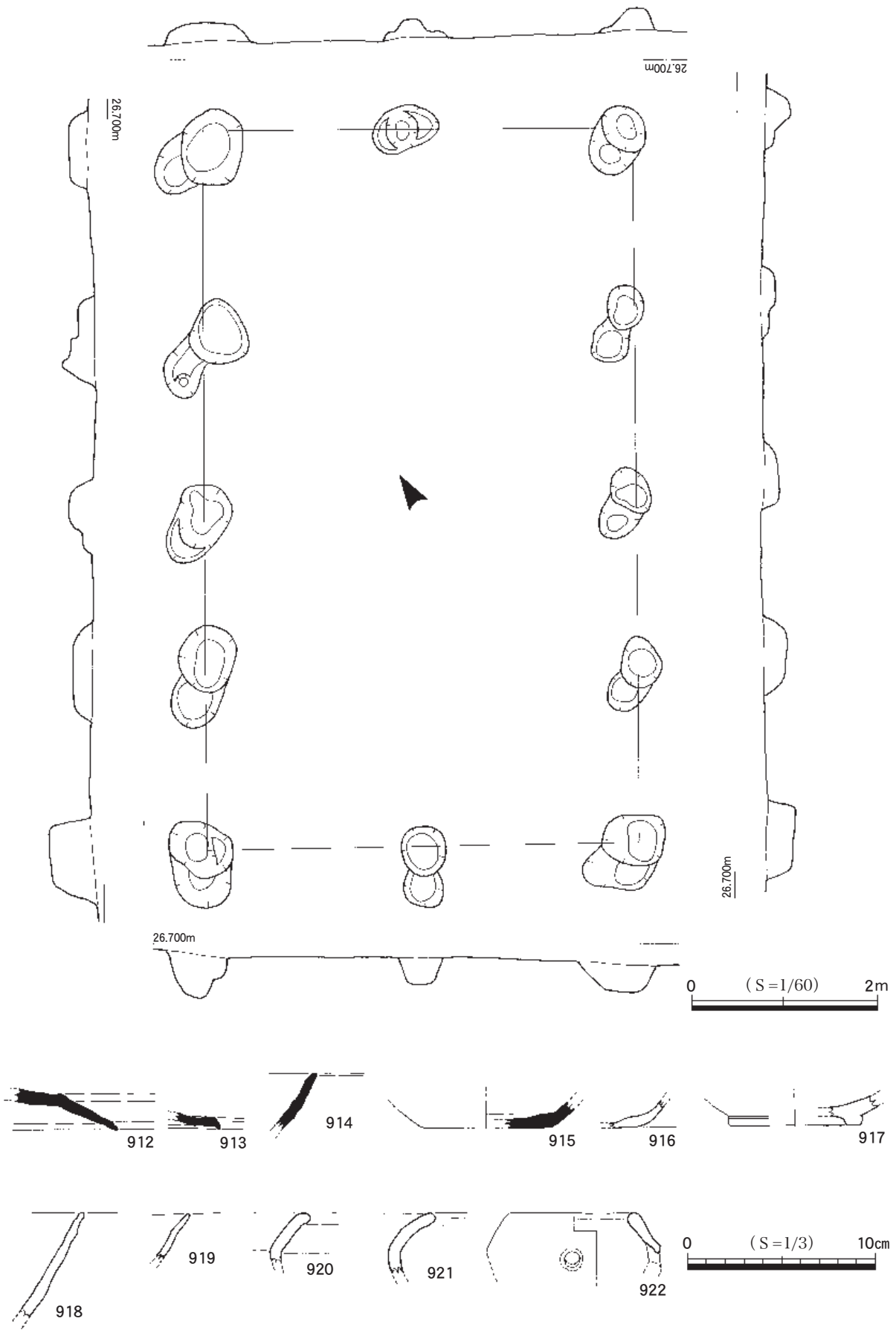
第1調査区B-22付近で検出した楕円形土坑である。最大長3.7m、最大幅1.7m、深さ10～30cmの大きさである。壁面の立ち上がりは比較的急で、遺物は須恵器や瓦質土器が出土した。

#### 出土遺物 (第242図)

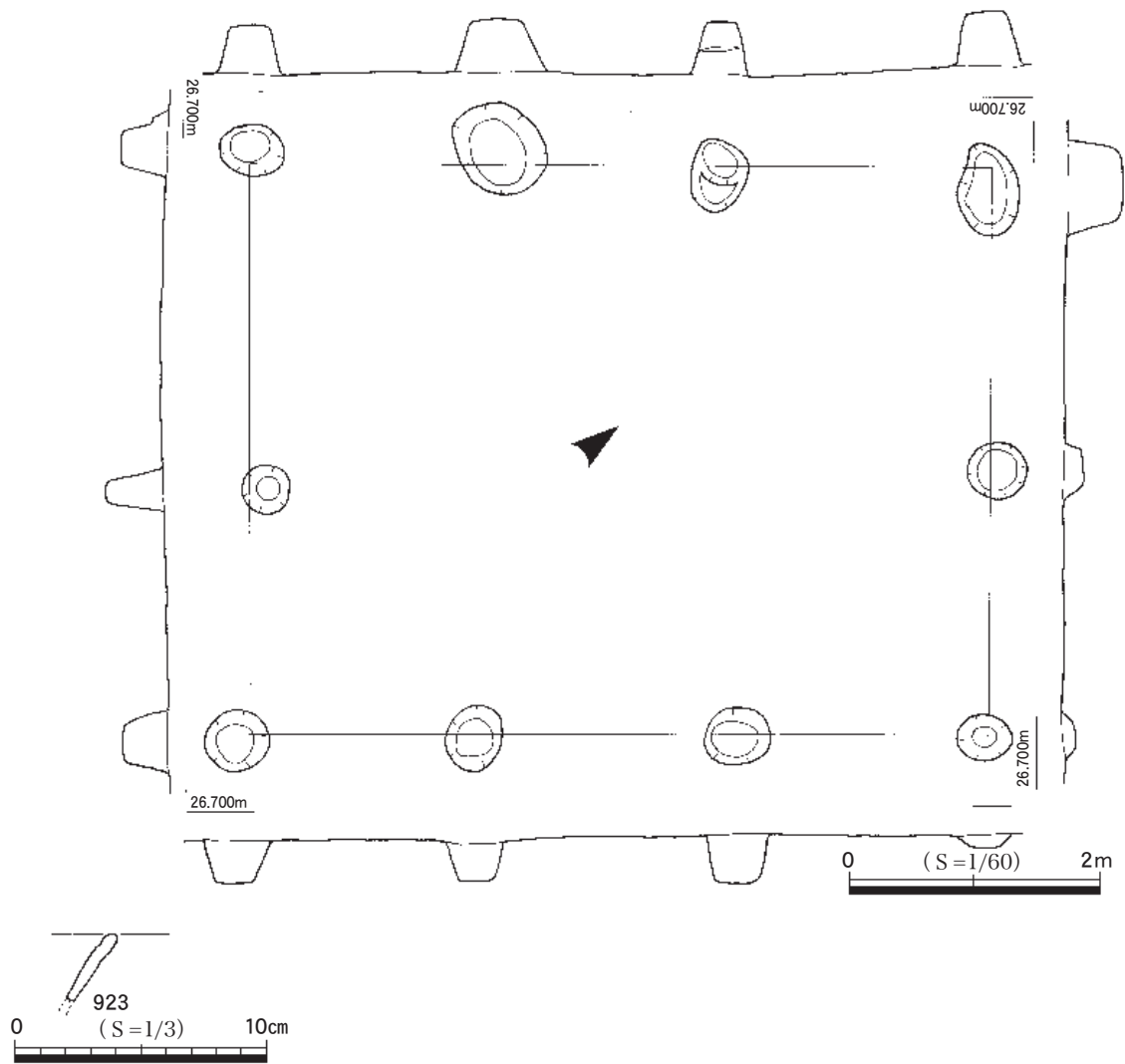
土器9点を図示した。941は須恵器。甕の胴部か。白色気味。942～945は土師器。942・943は皿か。944・945は埴の底部。回転ヨコナデし底部はへら切りとする。946～948は鍋の口縁部。観察表では瓦質土器としたが、土鍋の方が適当かもしれない。11世紀の所産であろう。949は白磁埴の口縁部。

#### SK20 (第243図)

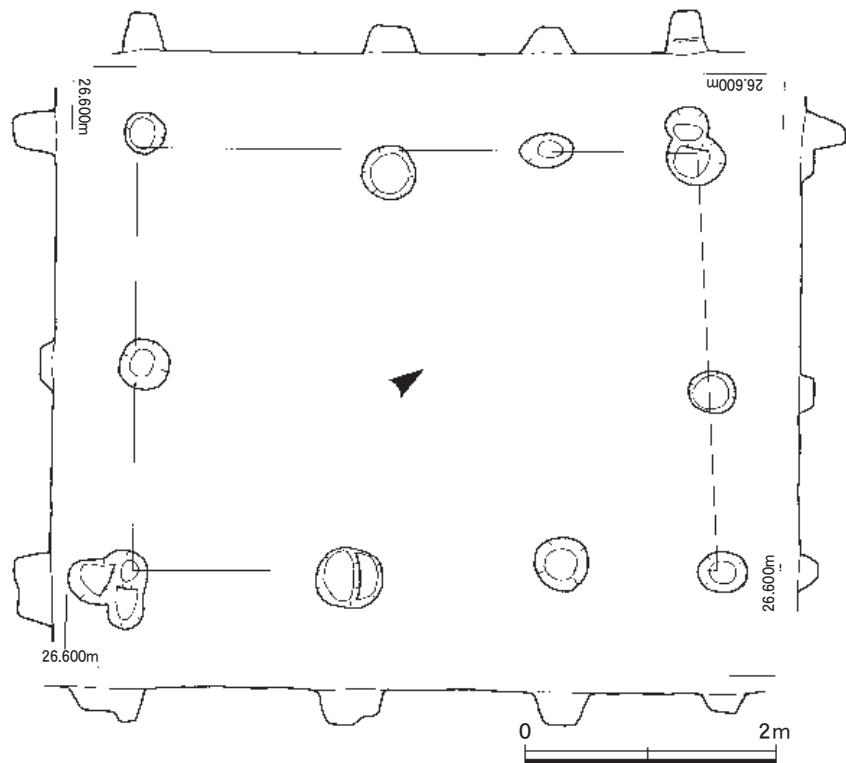
第2調査区H-11付近で検出した楕円形土坑である。最大長80cm、最大幅67cm、深さ10cmを測



第233図 3次SB2平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第234図 3次SB4平・断面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第235図 3次SB6平・断面図 (S=1/60)



る。壁面の立ち上がりは急で、古代の遺物や礫がまとまって出土した。

#### 出土遺物 (第243図)

土器8点を図示した。950～952は土師器皿。951・952はへら切りとする。953は土師器碗。しっかりとした高台を付す。954・955は黒色土器A類。内外面ともナデ調整とする。956は黒色土器B類。957は土師器の口縁部。甕であろうか。いずれの資料も11世紀代の範疇に収まると思われる。

#### SK26 (第244図)

第3調査区O-3で検出した円形土坑である。最大長・幅共に1.12m、深さ1.6mを測る。壁面の立ち上がりは急で、遺構上位で炭化した木杵を検出している。平面形、深さの形態と木杵の存在から本遺構は井戸跡の可能性もある。須恵器や黒色土器が出土している。

#### 出土遺物 (第244図)

土器7点を図示した。958～960は須恵器。958は断面四角の高台が底部中位に張り付く。8世紀中頃か。959は底部で碗か。960は甕などの口縁部。961は黒色土器A類の碗。短い高台を張り付ける。962～964は土師器。962は碗の底部であろう。963は甕か鍋の口縁部。964は三足鍋の脚。両端を欠損する。965は鉄製品。鎌の破片か。

#### SK30 (第245図)

第3調査区M-7で検出した楕円形土坑である。最大長1.7m、最大幅1.5m、深さ5cmを測る。後世の溝に切られ、また削平も受けていると考えられる。

#### 出土遺物 (第245図)

土器1点を図示した。966は土師器。皿か碗の底部。

#### SK34 (第246図)

第3調査区M-9で検出したL字形の土坑である。最大長5.1m、最大幅1.8m、深さ40～70cmである。壁面はテラスを有しており、底面は箱型になる。立ち上がりは急である。埋没後、後述するSX2に切り込まれていることがわかる。用途は全く不明である。後出の時期不明遺構SX2により南東部は切られ、平面形は張り出しを有する。

#### 出土遺物 (第246・247図)

土器6点を図示した。967～972は土師器。967・968は皿。967の底径は12cm近くある。968は器高1.1cm。糸切り痕が残る。969・971・972は碗。ナデで仕上げる。970は碗か皿の高台片。973・974は黒色土器A類の碗。厚い低平な高台が付き、やや湾曲しながら立ち上がる。975・976は羽釜。13世紀代の所産か。977は鍋の口縁部。11世紀代か。SK34出土遺物は11世紀代の所産を示す遺物が多い。石器は1点を図示した。177は安山岩製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部にやや浅い抉りが入る。先端・左右脚・左右側縁など、若干ずつ欠損している。

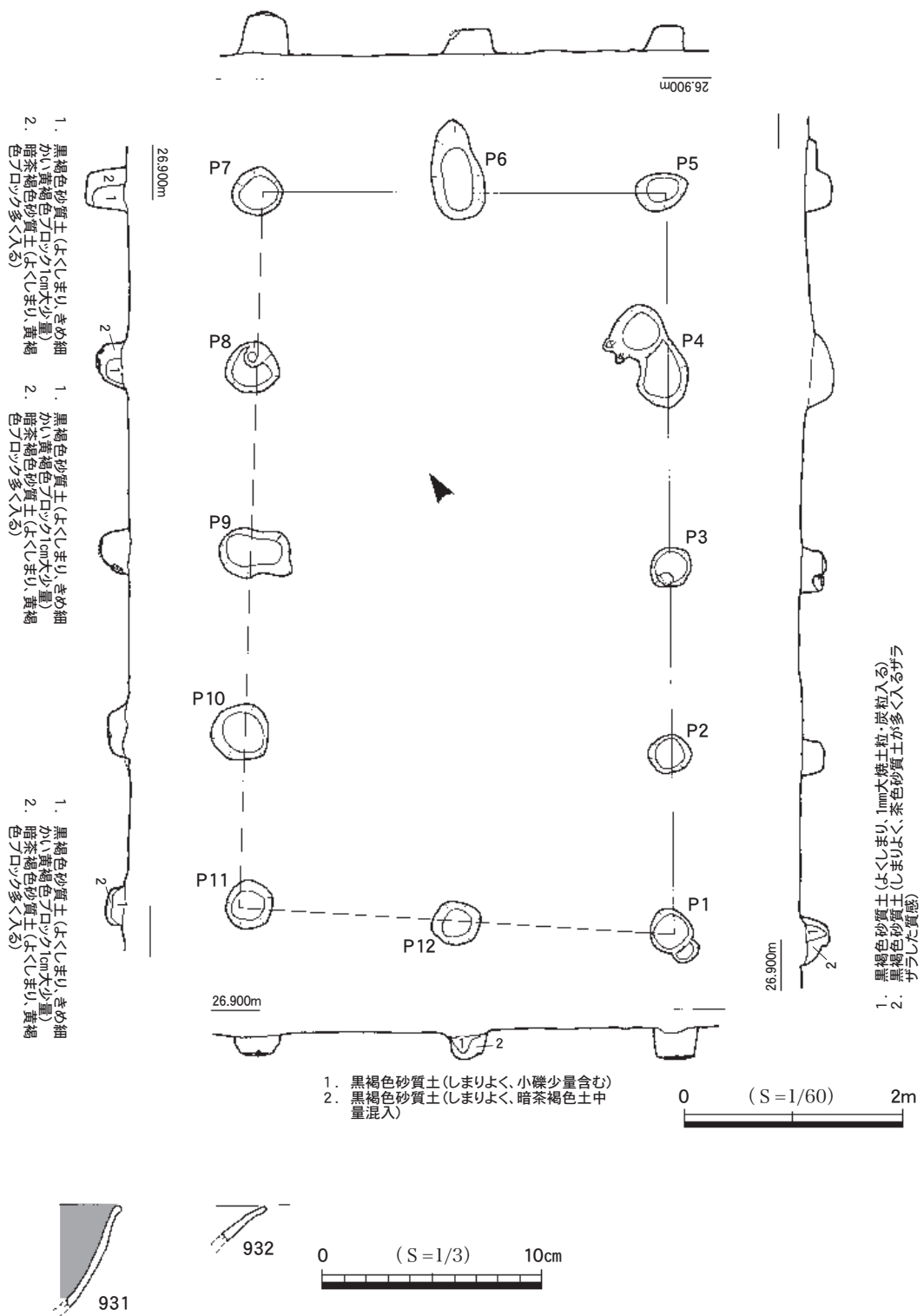
#### SK35 (第248図)

第3調査区K-5で検出した楕円形土坑である。最大長75cm、最大幅50cm、深さ40cmを測る。壁面の立ち上がりは急で、北側にテラスをもつ。遺物の出土量は少ない。

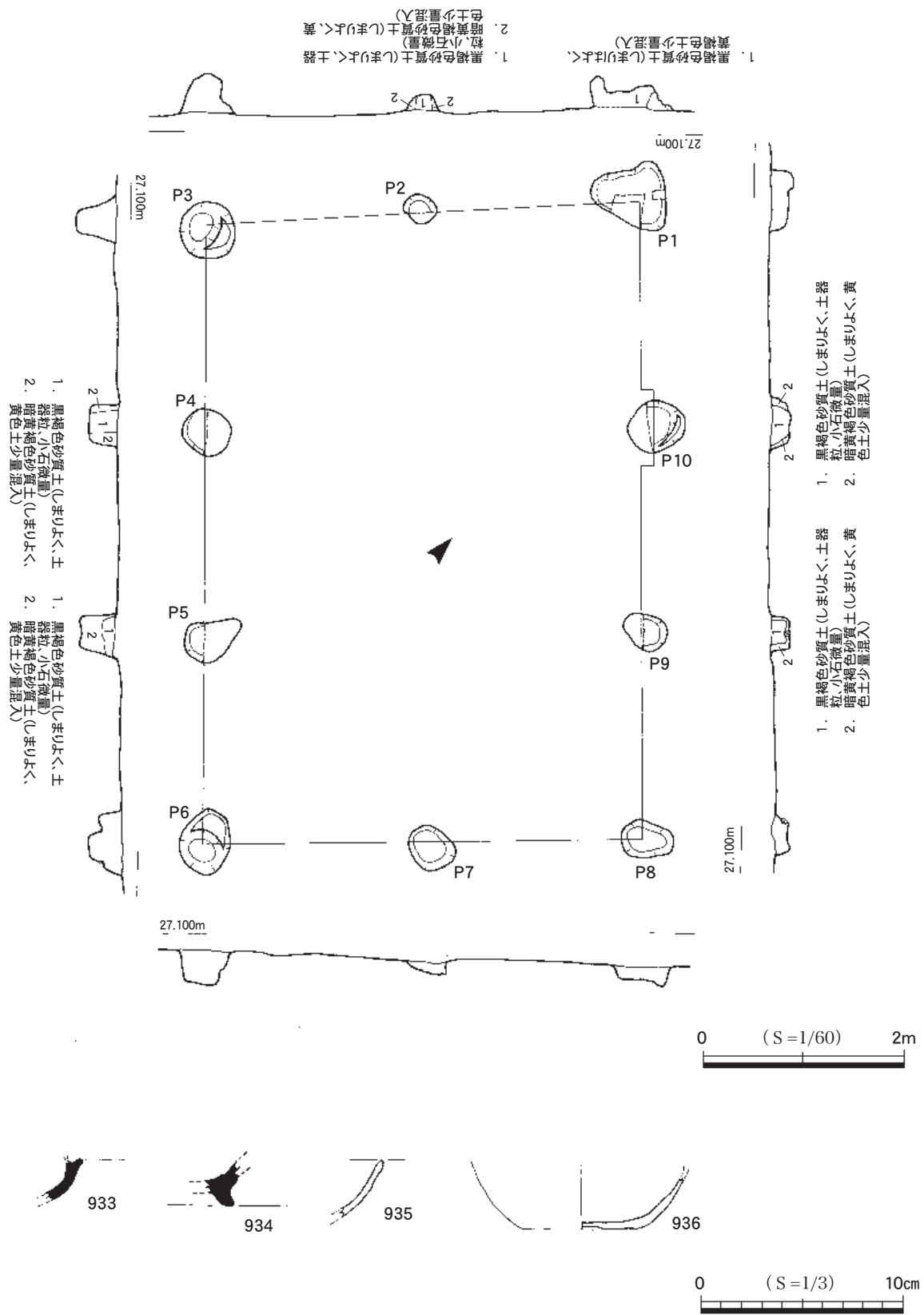




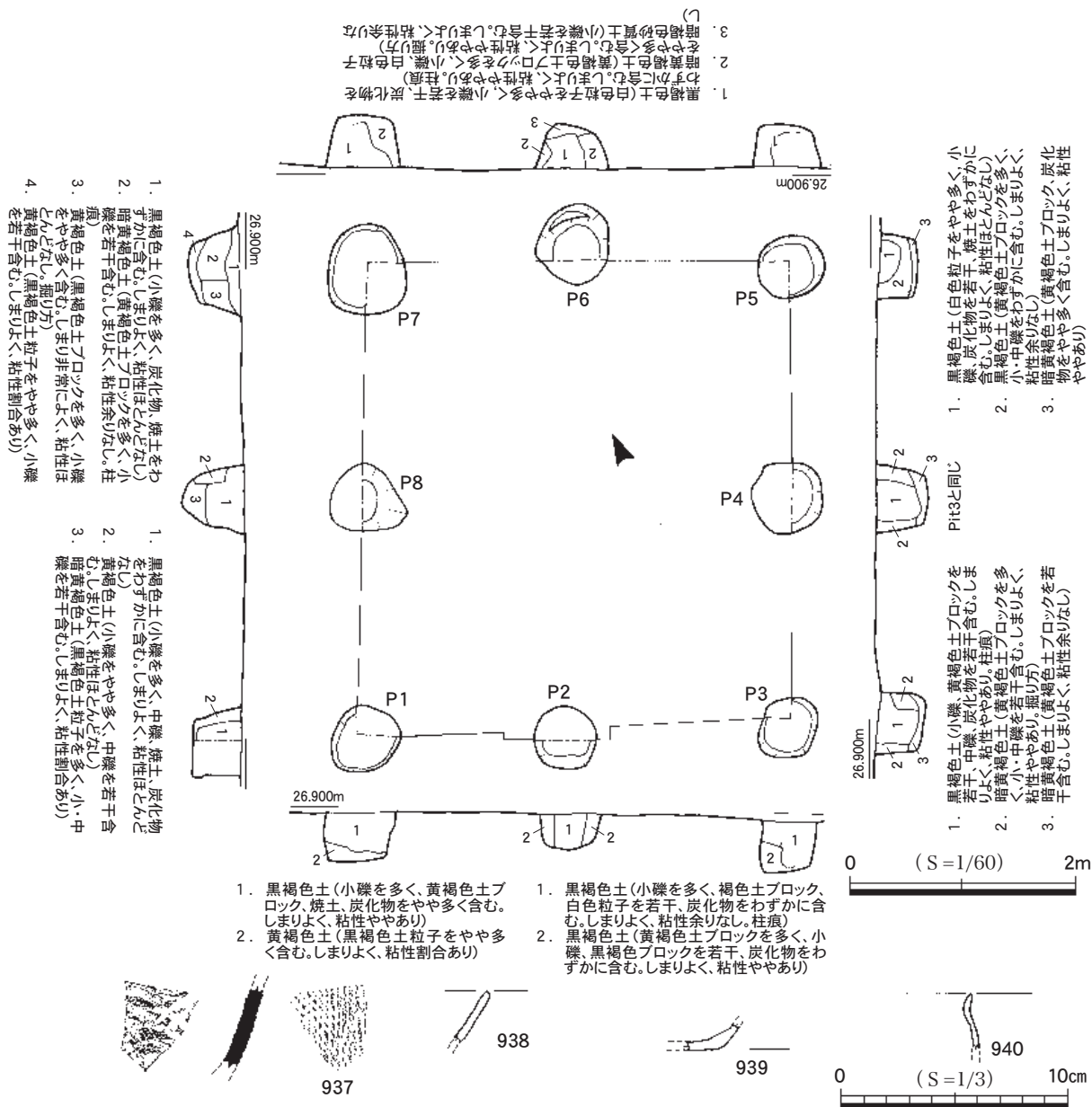




第239図 SB20平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第240図 SB22平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第241図 SB23平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)

出土遺物 (第248図)

土器1点を図示した。978は土師器の底部。坑であろう。

SK38 (第249図)

第3調査区K-4付近で検出した楕円形土坑である。最大長94cm、最大幅48cm、深さ24cmを測る。壁面の立ち上がりは急である。遺物の出土量は少ない。

出土遺物 (第249図)

土器3点を図示した。979~981は土師器。979・980は皿。979はヘラ切り後丁寧にナデを行う。981は底部片。坑であろう。

#### SK41 (第250図)

第3調査区M-8で検出した楕円形土坑である。最大長1.6m、最大幅0.75m、深さ8cmを測る。壁面の立ち上がりは急である。遺物の出土量は少ない。

#### 出土遺物 (第250図)

土器2点を図示した。982・983は土師器。982は観察表では埴としたが、坏の方が適当であろう。底部はへう切り痕が残る。983は埴。口径14.8cmを測る。

#### SK48 (第251図)

第4調査区Q-6付近で検出した楕円形土坑である。西側は調査区外へ広がる。最大長1.12m、深さ70cmを測る。壁面の立ち上がりは急で、内部より人頭大の礫が多数出土し、底面直上で瓦器埴が出土した。

#### 出土遺物 (第251図)

土器1点を図示した。984は瓦器の埴。低平な高台が付き、外面にユビオサエ痕がある。12世紀代か。

#### SK50 (第252図)

第5調査区G-18で検出した隅丸方形土坑である。最大長1.7m、深さ6cmを測る。壁面の立ち上がりは緩やかである。調査の際に、平面図に遺構の下端を図示できていない。

#### 出土遺物 (第252図)

土器4点を図示した。985～987は土師器。985・986は皿。器高は1cm前後である。987は埴の口縁部。988は黒色土器A類の埴。石器1点を図示した。178は多久産と考えられるサヌカイト製石鏃。表・裏面ともに内奥部まで押圧剥離が及び、基部にはやや深い抉りが入られている。先端から左側縁上半部は欠損の後、リダクションされて形状がやや歪で、先端はなお尖りきっていない。

#### SK54 (第253図)

第5調査区H-16で検出した不定形土坑である。最大長1.64m、最大幅1.3m、深さ16cmを測る。壁面の立ち上がり緩やかである。

#### 出土遺物 (第253図)

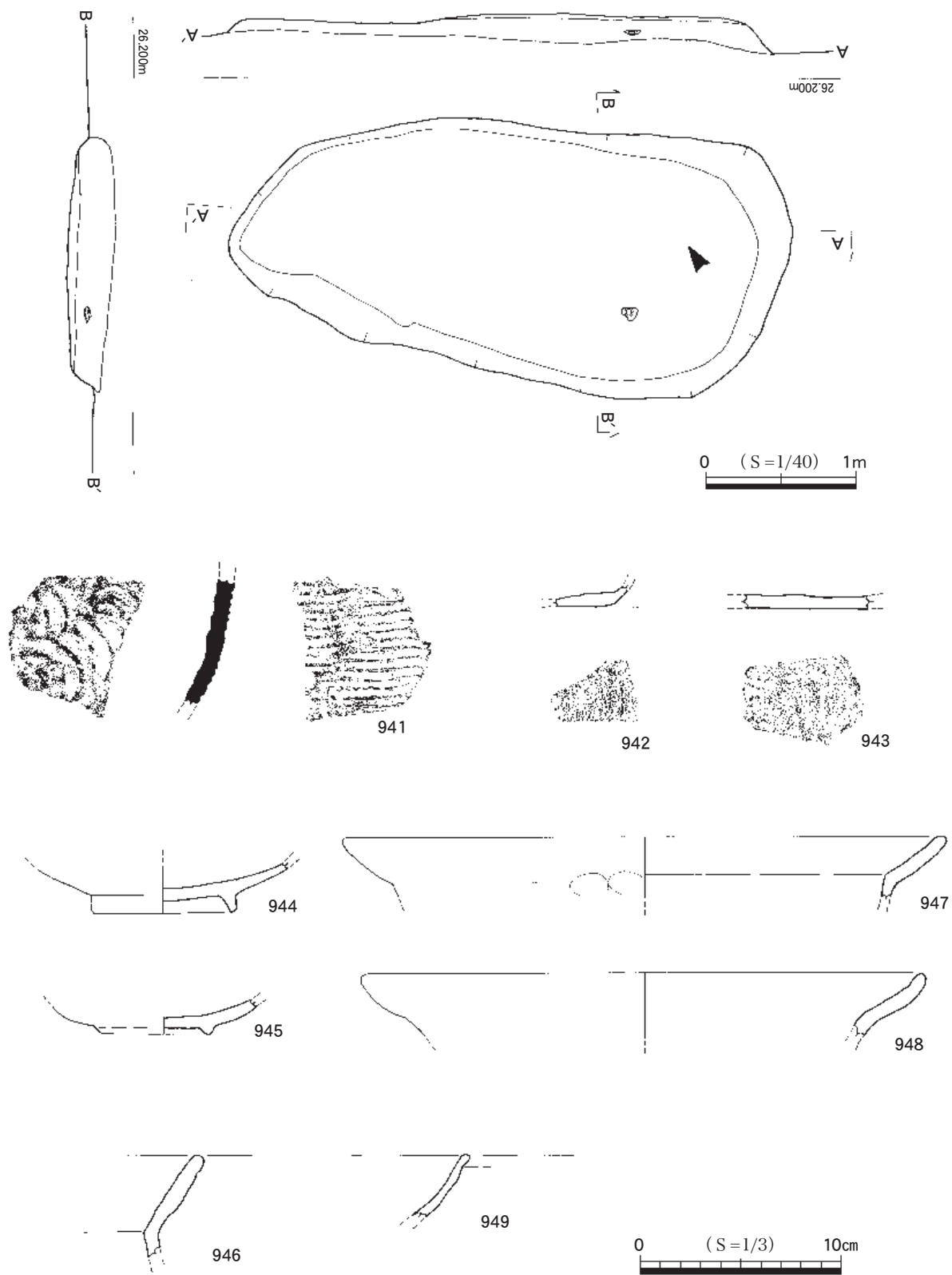
土器10点を図示した。989～998は土師器。989～991は埴。992・993は甕の口縁部。994～996は土錘。997・998は埴か。器壁は厚く、白みがかかった茶色を呈す。石器1点を図示した。179は姫島産黒曜石製の抉入削器。幅広剥片を素材とし、左側縁下半に急斜度の加工を施して抉入状の刃部を形成し、素材の打面＝上端にも急斜度の調整を入れて、手持ち部を形成している。上端付近の裏面には手擦れによる薄い剥離痕が認められる。

#### SK55 (第254図)

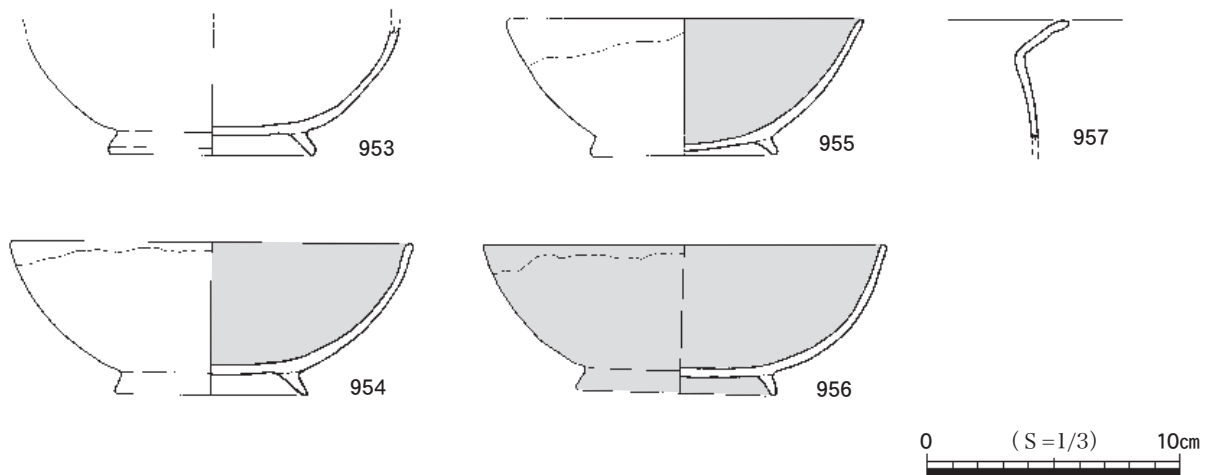
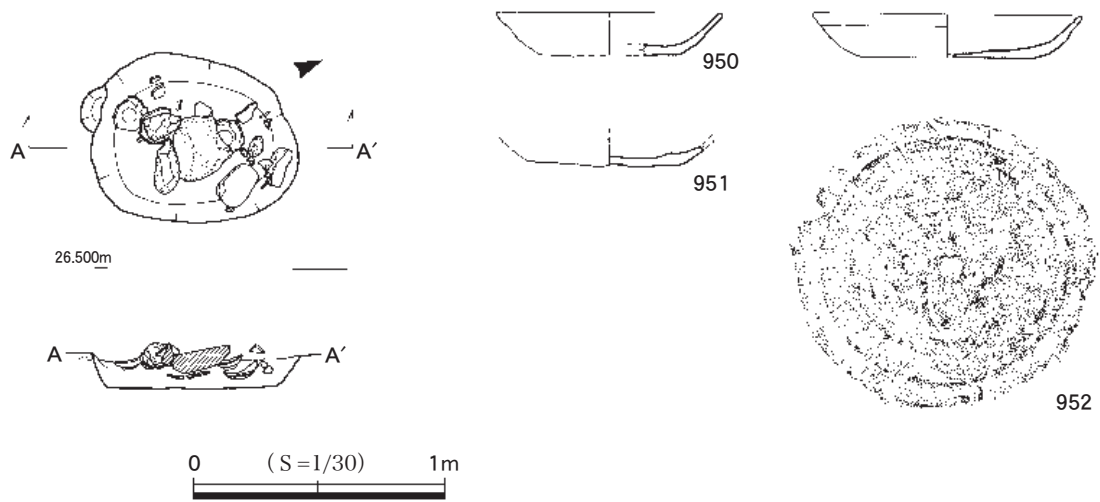
第3調査区H-16で検出した楕円形土坑である。最大長2.38m、最大幅1.58m、深さ30cmを測る。壁面の立ち上がりは西側で緩やかである。中央に深さ12cmの楕円形の落ち込みがある。

#### 出土遺物 (第254図)

土器8点を図示した。999・1000は須恵器。999は短頸壺か。1000は壺の底部か。1001～1005



第242図 SK4平・断面・土層図 (S=1/40) 出土遺物 (S=1/3)



第243図 SK20平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)

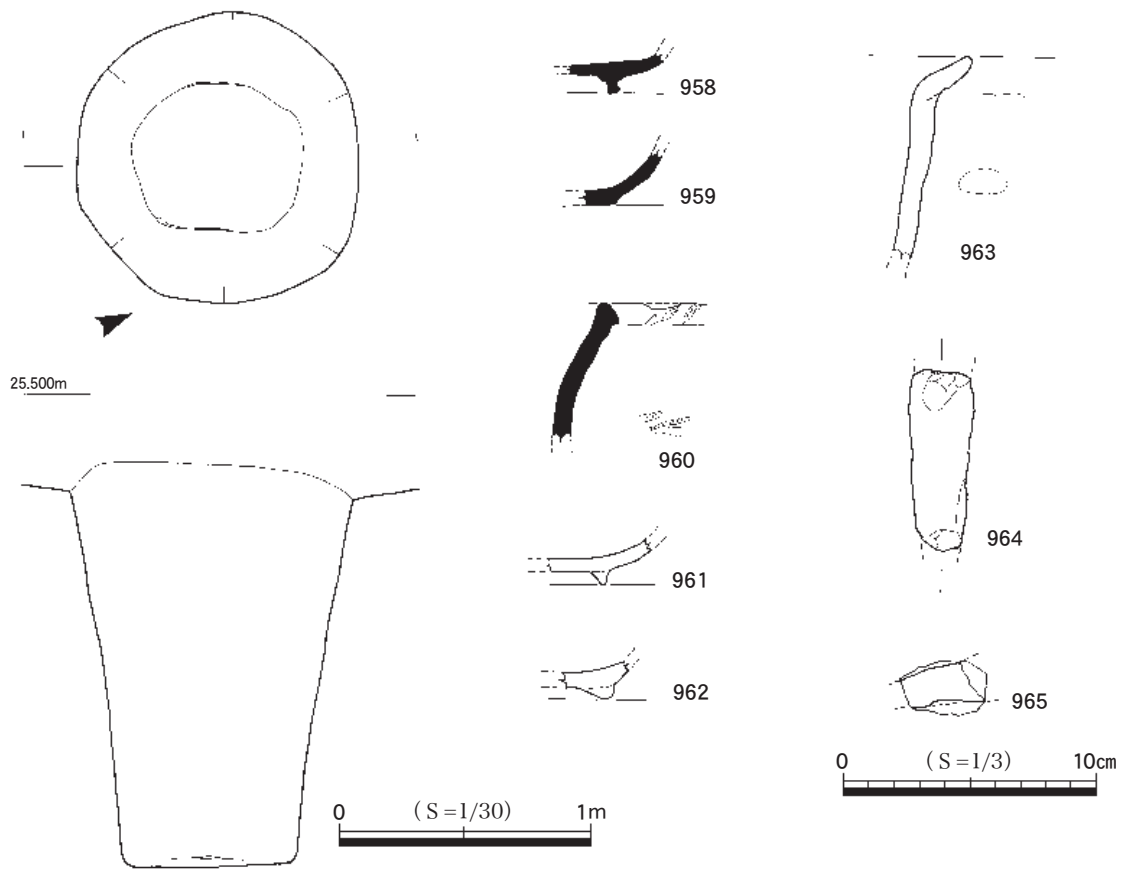
は土師器。1001・1003・1004は塚の底部。1002は坏の底部。1006は平瓦片。布目痕をナデ消す。石器は3点を図示した。180は磨石。181は凹み石。182は台石である。

### 溝状遺構

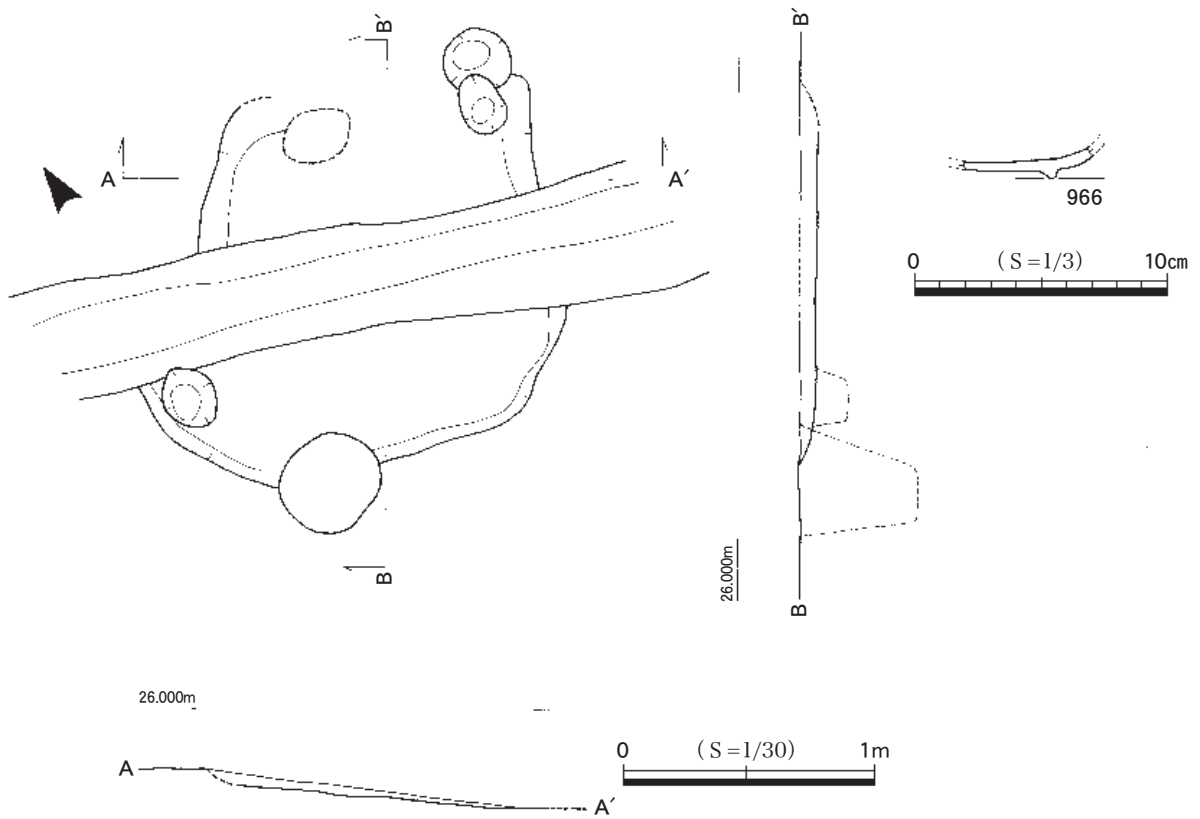
#### SD42 (第255図)

第3調査区を横断する形で検出した溝状遺構である。西端でSH18を、中央付近でSH15・20を切る。長さ64m、最大幅3m、最大深1.9mを測る。遺構は緩やかに蛇行している。底面のレベルは東側が高く、西側で若干低い。壁面の立ち上がりは急で、地山に含まれる拳大より小さい礫が表出する。底面付近は両足を揃えて立つことが困難なほど狭かった。本遺構を発掘するのに作業員約10人で13日を要した。遺構中央部b区の断面はY字状を、東側a区は箱形を呈する。土層を見ると、遺構は完全埋没後か、もしくは埋没の途中、新たに溝状の遺構を構築していることがわかる。多量

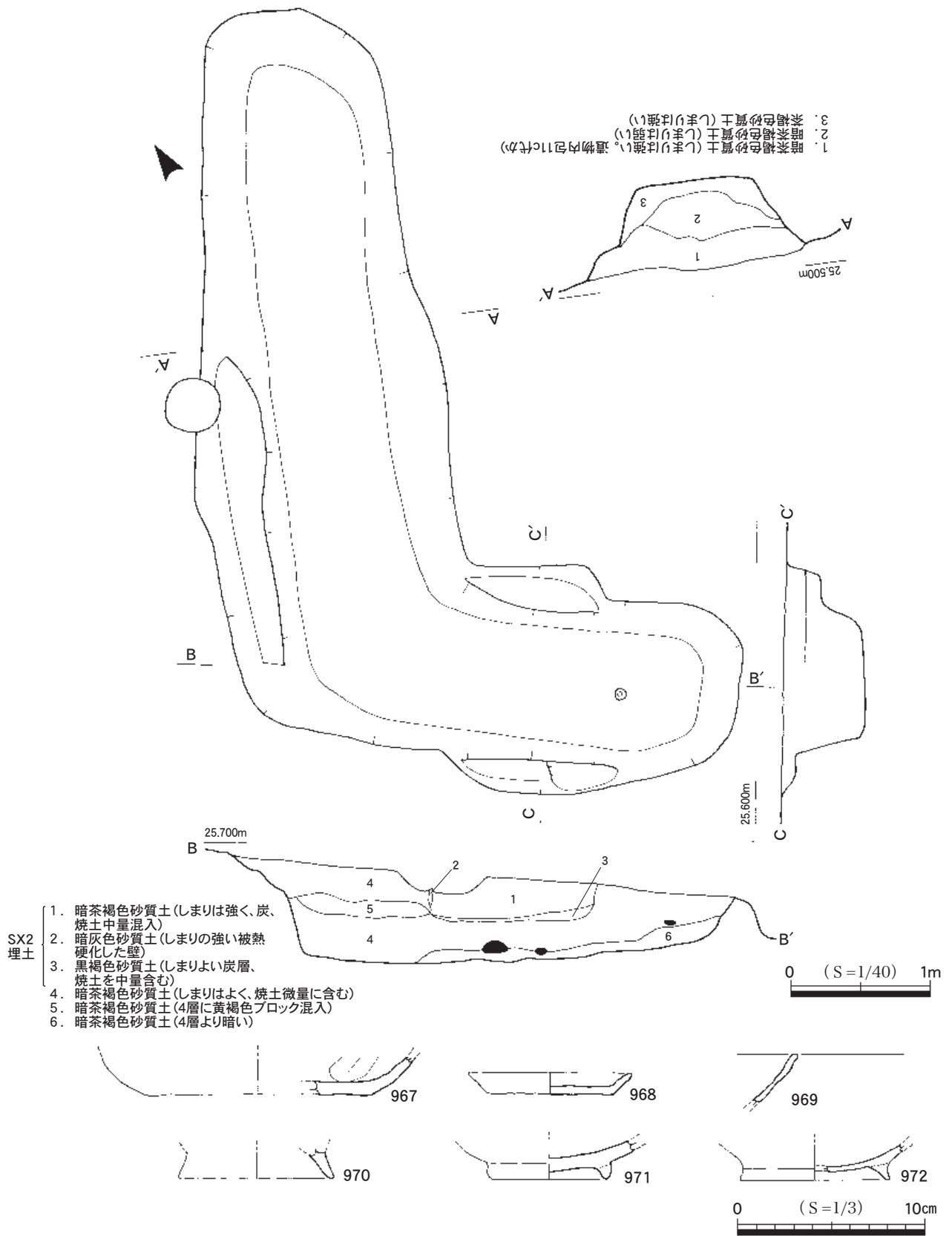




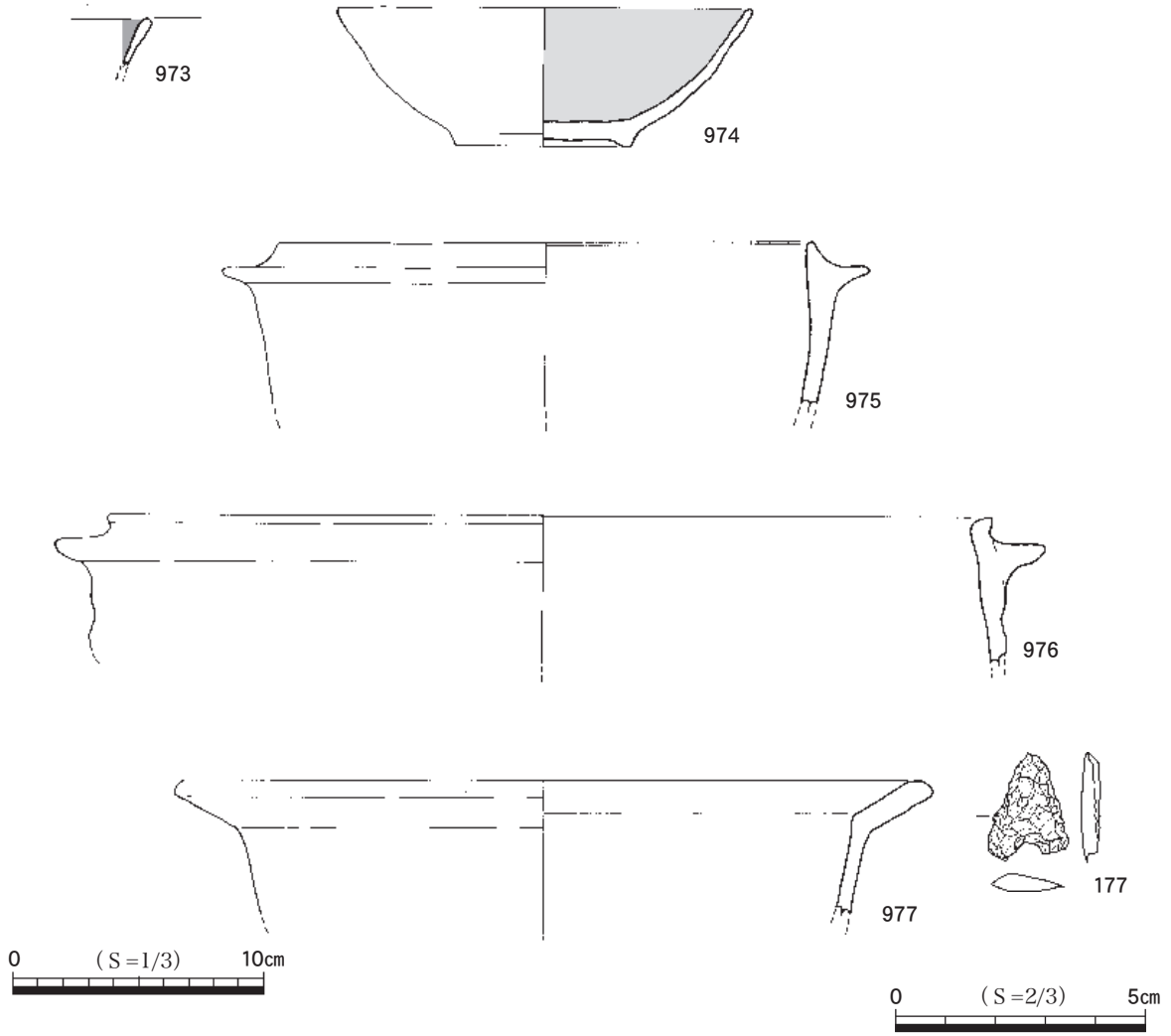
第244図 SK26平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



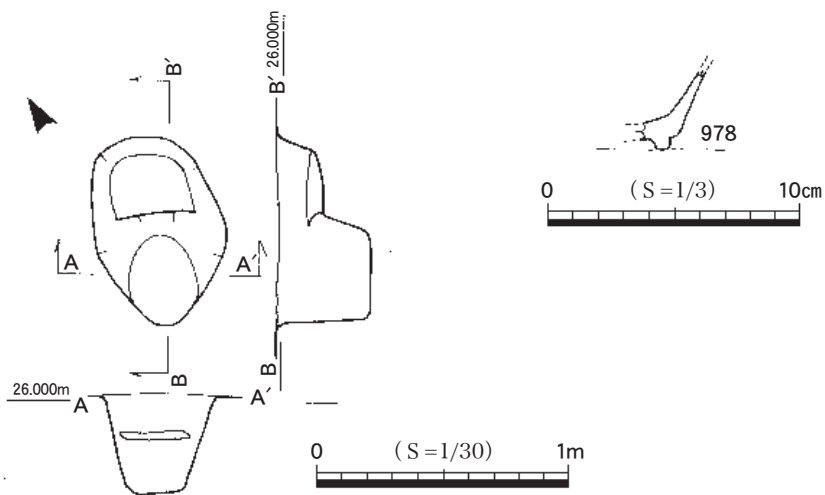
第245図 SK30平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



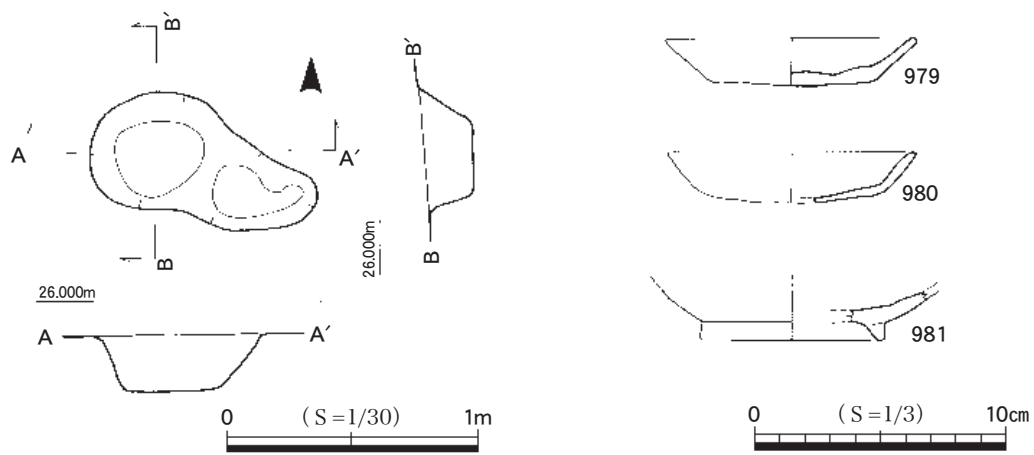
第246図 SK34平・断面・土層図 (S=1/40) 出土遺物 (1) (S=1/3)



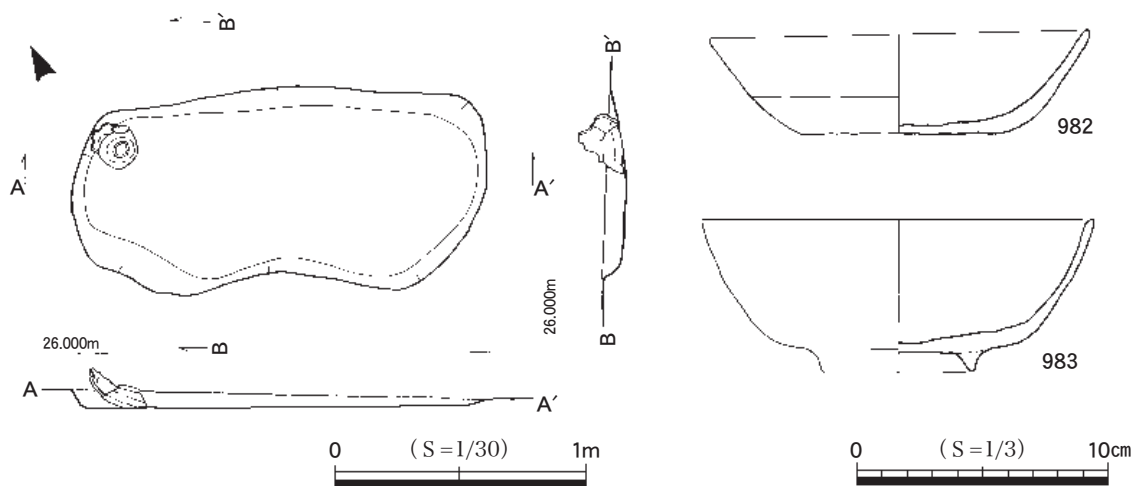
第247図 SK34出土遺物(2) (S=1/3 (973~977)、S=2/3 (177))



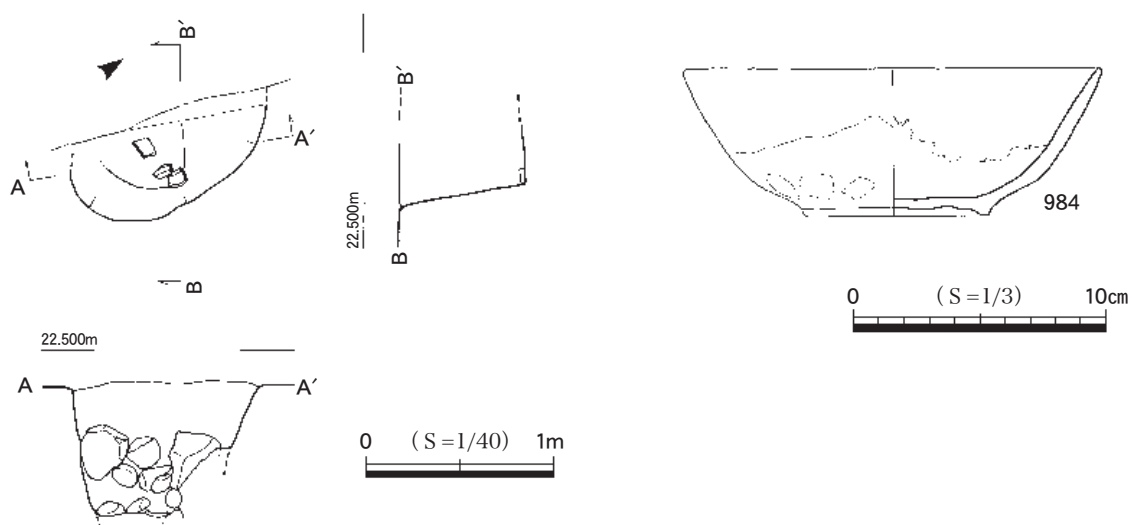
第248図 SK35平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



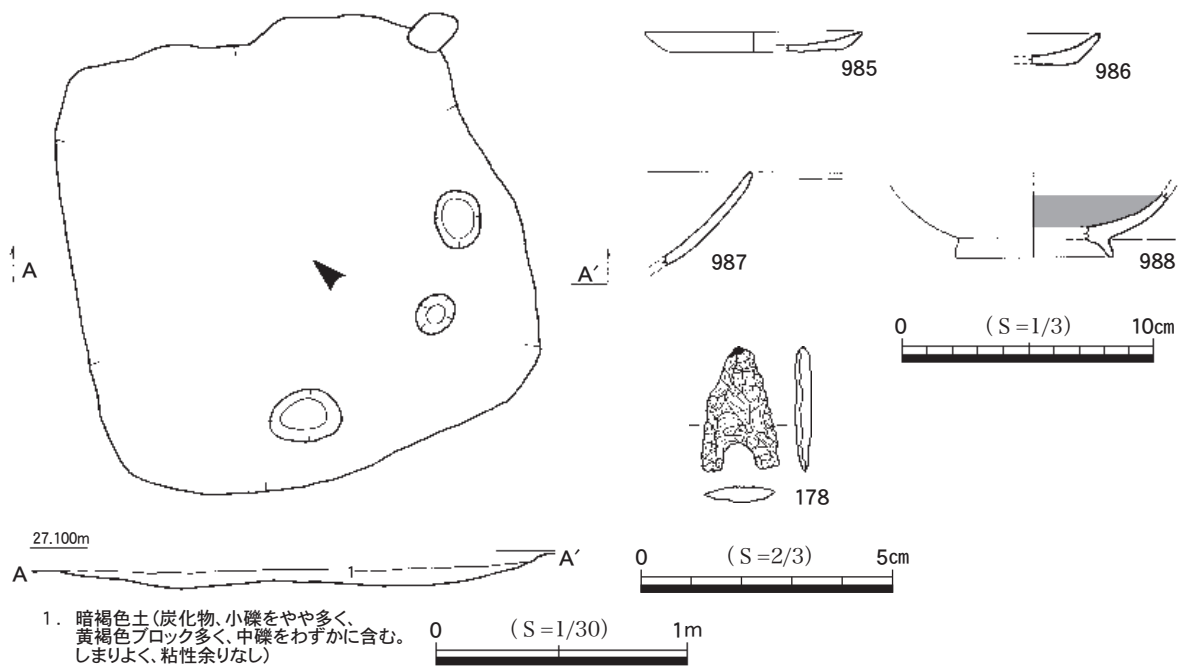
第249図 SK38平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



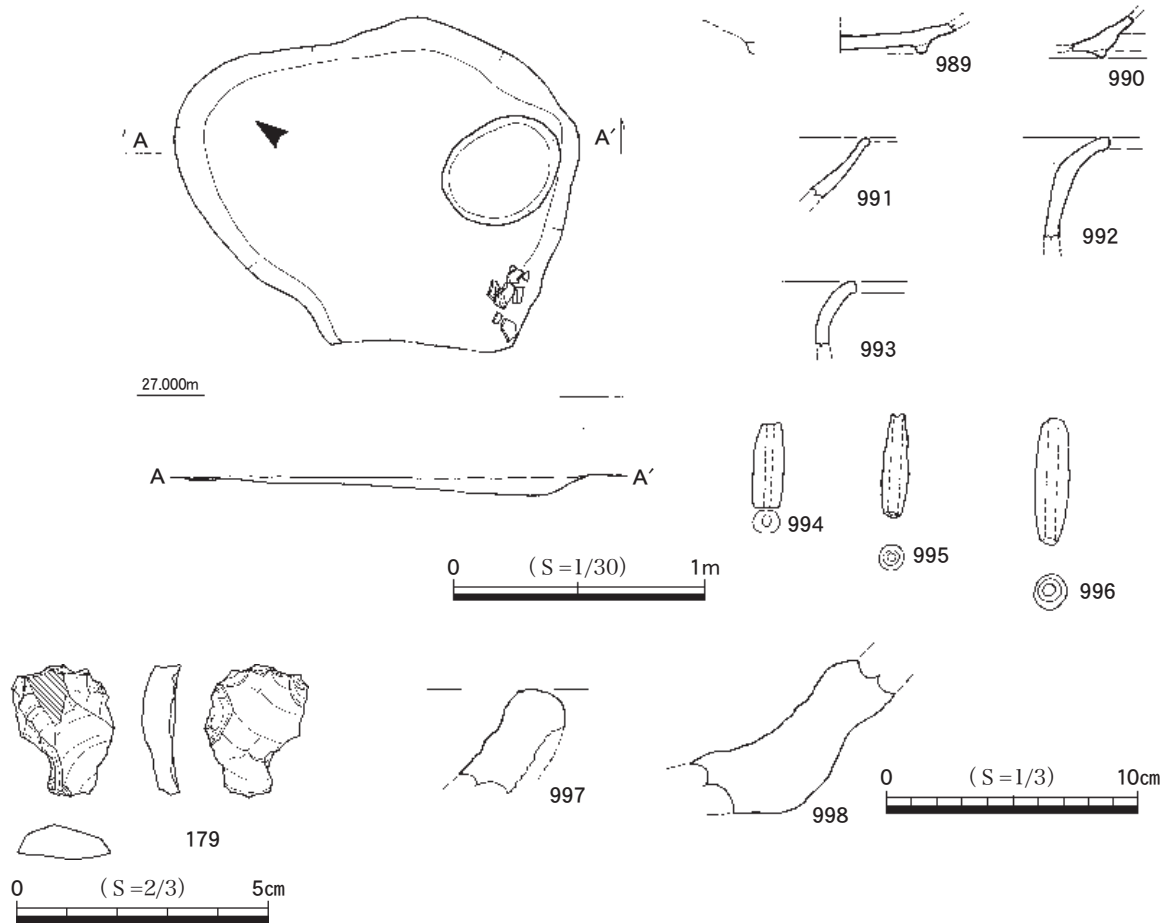
第250図 SK41平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



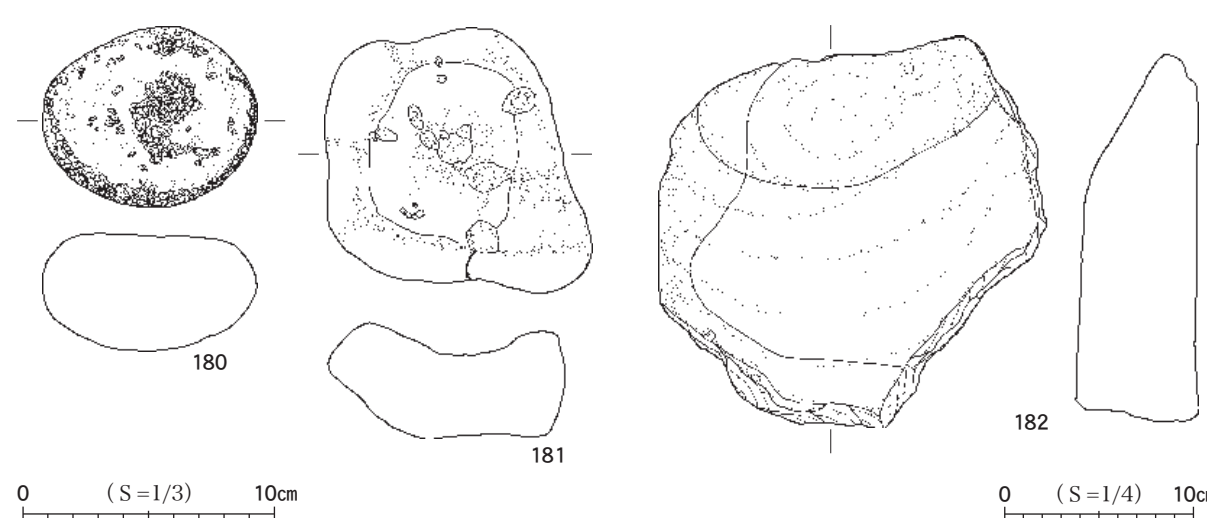
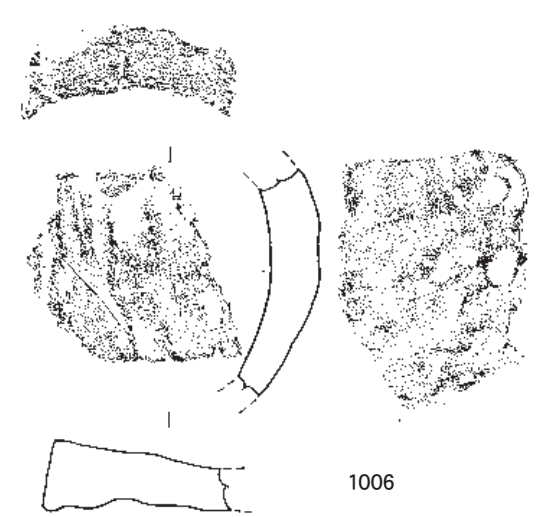
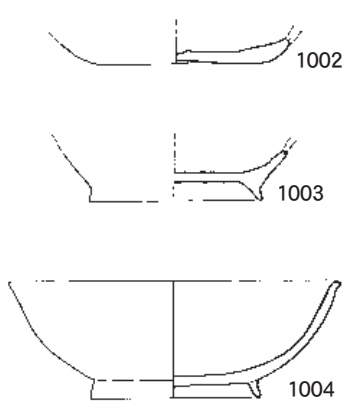
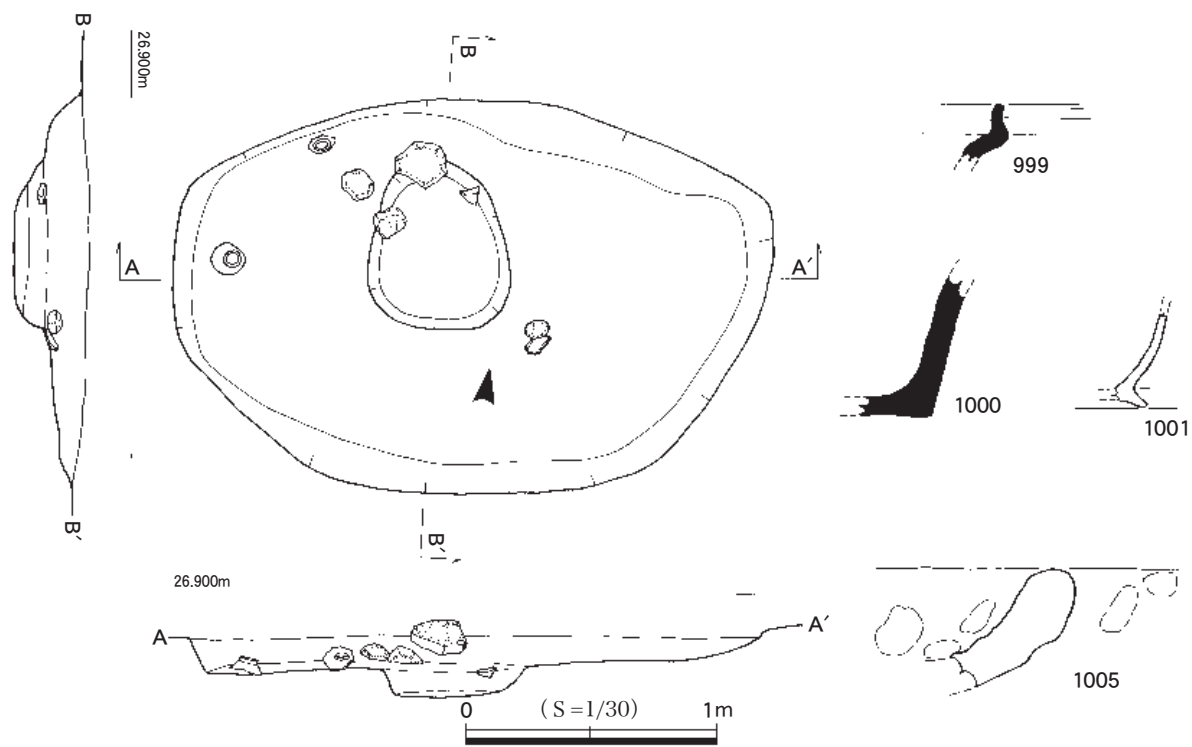
第251図 SK48平・断面・土層図 (S=1/40) 出土遺物 (S=1/3)



第252図 SK50平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (985~988)、S=2/3 (178))



第253図 SK54平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (989~998)、S=2/3 (179))



第254図 SK55平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3 (999~1006, 180, 181), S=1/4 (182))

に出土した遺物の多くがこの掘り直しの溝の底面付近や埋土中から出土している。遺物出土密度はb・c区が高い。土師器や皿、鍋などの雑器類が多く出土したが、比較的完形に近いものが多いことが特徴である。人頭大の礫も一定量出土した。土器類は溝の両側から投げ込まれたかのような状態で出土している。遺物の時期は縄文時代から12世紀後半までと多様であり、出土量は10世紀後半～11世紀前半代のものが他を圧倒する。一定量8世紀後半～9世紀代の遺物と12世紀中頃～後半の遺物も出土した。よって、本遺構は長期間にわたって開口していた可能性が高い。8世紀後半～9世紀代に構築され、まもなく埋没が始まり、11世紀前半頃に溝の掘り返しがあり、完全に埋没したのは12世紀後半と考えられる。特筆すべき遺物として猿投窯の短頸壺がある。

#### 出土遺物 (第256～268図)

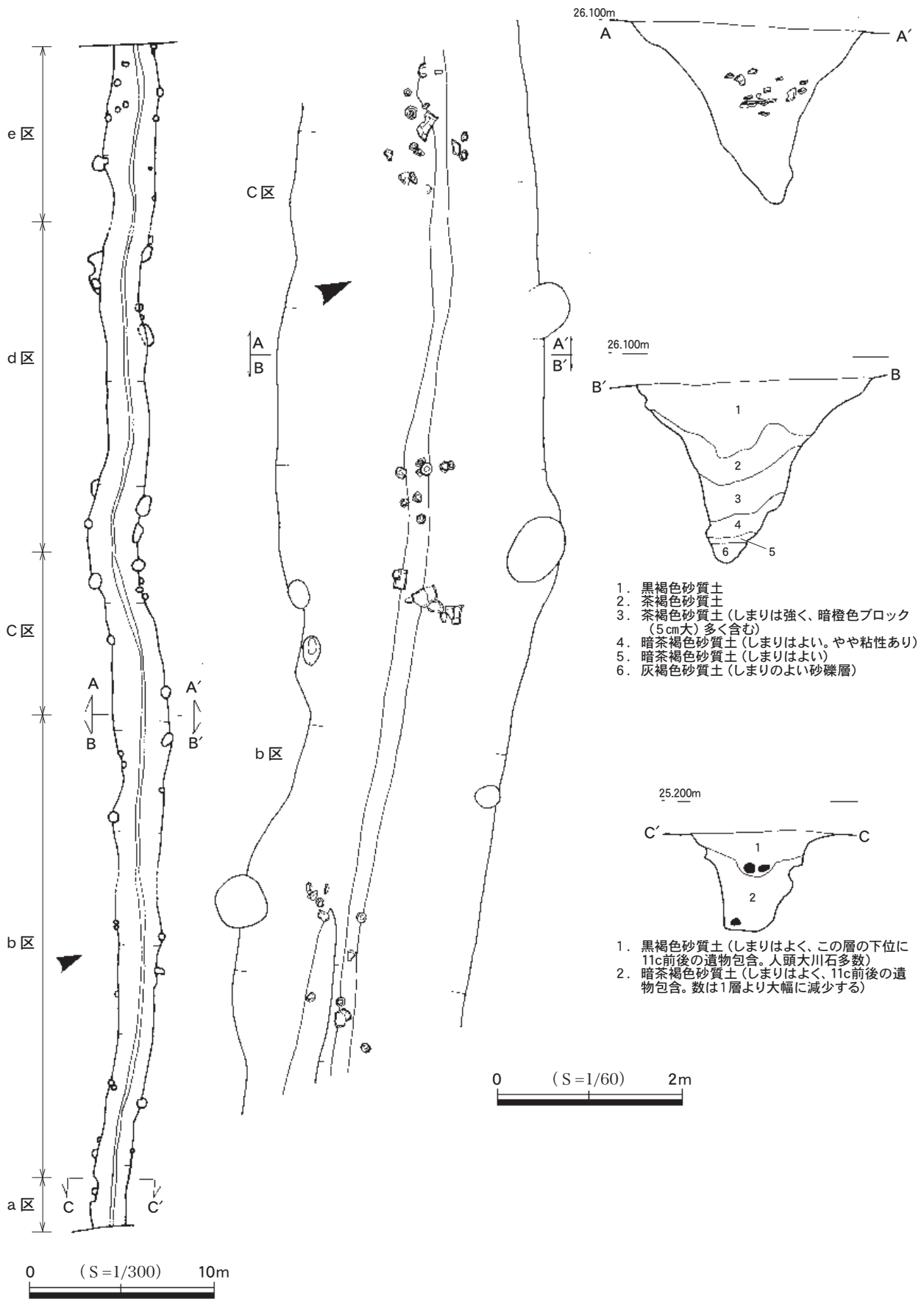
1007～1086、1088～1115は土師器。1087は須恵器。1007～1053は皿。皿は器高2cm未満の底部と胴部の境が明瞭なものを皿a(1007～1029)、器高2.1～2.5cmのものを皿b(1030～1053)に分類する。皿はa・b類共に底部仕上げはへら切りが大半を占め、1031のみ糸切りである。1053は脚付き皿。1054～1077は坏類。器高4cm未満を坏a(1054～1060、1062・1066・1067、1070～1073)、器高4cm以上を坏b(1068・1069、1072～1077)に分ける。1061・1063～1065は底部片である。図示した坏類の内、底部仕上げが確認できた資料はすべてへら切りであった。1071は観察表では糸切りとしているがへら切りの誤り。1078～1115は埴。低い高台が付くもの(1078～1091)、高い高台が付くもの(1092～1112)に分けられる。図示した埴類の内、底部仕上げが確認できた資料はすべてへら切りである。1095は板状圧痕がみられる。1116～1141は黒色土器。A類(1116～1139)と内外面黒色のB類(1140・1141)がある。図示した黒色土器の内、底部仕上げが確認できた資料はすべてへら切りである。1141は外面にへらミガキが残る。1142～1147、1165～1168は三足鍋の脚部。いずれの資料も指頭圧・ユビオサエで成形している。1168は観察表では甌としたが三足鍋の脚部でよい。1148・1149は中空部を有し、焙烙の取手などの性格が考えられる。1150～1153は埴。鉄が融着する。1154・1155は甗の羽口。1156～1164は鍋。観察表で羽釜とした資料もある。1156～1160は内湾する口縁部下に鏝を巡らせる。1161は観察表では把手としたが、鍋の鏝部であろう。1163・1164は口縁部が外反し鏝が付かないタイプ。土師器類は10世紀後半～11世紀前半代の所産と考える。

1169～1178は陶磁器類。1169は猿投窯産の短頸壺。やや外反する口縁部から強く肩が張り球形の胴部を形成し高台に至る。分厚い断面四角の高台は口縁部に比べ径が大きい。調整は外面をへらケズリ後ナデ、内面は肩部付近に同心円タタキ痕を残す。底部内面は指頭で整形する。色調は灰色を基調とし、灰釉を塗布した部分は暗緑色を呈す。9世紀初頭の所産と考えられる。1170は同安窯系青磁碗。外面に縦の櫛目文、内面に櫛の先で押圧した点描文を描く。山本編年の椀I-1b類、12世紀中頃～後半の資料。1171・1172は白磁碗の口縁部片。1171は器壁が薄く、口縁部にわずかに段を有し内面が少しくぼむ。山本編年の椀VIIかVIII類、12世紀中頃～後半の資料か。1172は玉縁口縁を有する。1173は越州窯系青磁碗。蛇ノ目高台で内湾気味に胴部が立ち上がる。高台畳付の釉は削られている。山本編年の椀I-1a類、8世紀末～10世紀中頃の資料。1174は同安窯系青磁碗。外面に縦の櫛目文を有する。山本編年の椀I-1b類、12世紀中頃～後半の資料。1175は白磁碗の底部。厚い高台が特徴。山本編年の椀I-4類か。8世紀末～10世紀中頃の資料。1176は同安窯系青磁碗。観察表では陶器・蓋としたが磁器・底部の誤り。櫛目文を有し、底部は露胎とする。山本編年の椀I-1b類、12世紀中頃～後半の資料。1177・1178は白磁の合子。小さな受け部を有し外面

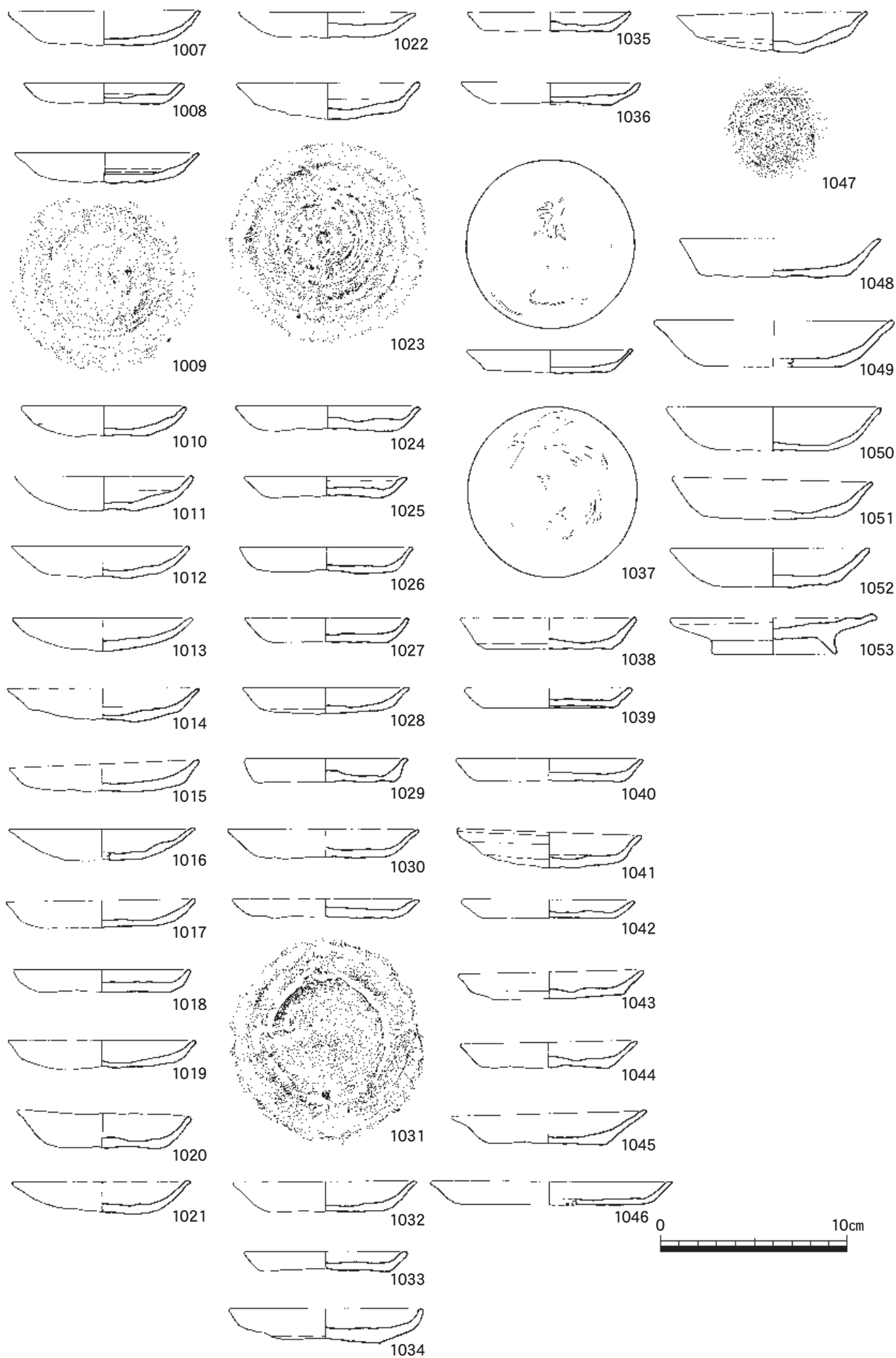
は蓮弁状に凹凸させる。12世紀中頃～後半の資料か。1179～1181は縄文土器。1179・1180は鐘崎式土器。1181は磨消縄文を有する石町式土器。1182は弥生中期土器の底部。1183～1210は須恵器。1183～1187・1190は坏蓋。1183はTK43段階、6世紀後半～末の資料。1184は断面逆三角形のかえりを有する。1186・1187は平らな天井部が特徴。8世紀中頃の資料。1188は口縁部がやや長く立ち上がり、1189は短く立ち上がる。6世紀末前後の所産。1190は短いかえりが付く。TK46段階、7世紀中頃～後半の資料。1191～1196は埴。1191～1193は高台が付き、1191～1193は端部付近に付けられる。8世紀中頃～後半の資料。1197・1199は壺。1200～1202は壺か甕の口縁部。1203～1207は底部で、1203・1204は壺の底部。1207は高坏の底部であろう。1208～1210は甕か壺の胴部片である。1211～1230は土師器。1211～1223、1225・1226は甕。口縁部は如意状を呈するものが多く、T字状になるものも少数存在する。1224は鉢であろうか。内湾する胴部が特徴。1228は甑の口縁部。1229は高坏の脚部。1230はメンコ状遺物。1231～1237は鉄製品。1231は長さ27cmの小刀。先端部を欠損する。1232・1233は鎌と思われる。1234～1236は刀子。1237は袋状鉄斧の先端部である。

石器は21点を図示した。183は姫島産黒曜石製の石鏃未成品。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈していたと考えられ、浅い抉りもあったようである。先端・両脚を欠損している。184～187は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、基部にやや広い抉りが入る。先端・左脚を若干欠損している。185は姫島産黒曜石製の石鏃未成品。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでいるが、厚みを取り切れなかったためか、途中で製作を中断している。但し、右側縁に使用痕らしき剥離が認められ、搔器として使った可能性がある。186は姫島産黒曜石製。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、基部にはやや深い抉りが入る。左側縁は欠損後にリダクションしており、先端・左脚を若干欠損している。187は姫島産黒曜石製の未成品。左側縁周辺の表・裏面に加工が及ばず、右脚の形状が完成していない。188は石核である。189～193は打製石斧。189～191は緑泥片岩製。表・裏面に大柄で平坦な加工を施して厚みを取り、周縁部に急斜度な調整を入れて整形している。裏面から表面への折れによって刃部を欠損している。190は扁平な剥片を素材とし、内部に厚みを一定とする大柄な加工を施した後、周辺部に細かな調整を施して整形・刃部形成を行っている。基部・刃部は少なくとも一度はリダクションにより再生している。191は扁平な剥片ないしは礫片を素材とし、薄平で大柄な加工を施して扁平化した後、周縁部への細かな加工で中央部に抉入状の整形及び刃部形成を行っている。刃部には若干の刃毀れが見られ、基部は裏面からの折れによって欠損している。192は角閃石安山岩製の打製石斧。やや分厚い剥片ないしは礫片を素材とし、内奥部にまで及ぶ大柄で扁平な加工を施した後、周縁部にやや細かい調整を入れて整形・刃部を形成している。裏面にはやや大きな自然面が残る。刃部と右側縁のごく一部に欠損が認められる。193は安山岩製。先端部を細かく剥離し、調整する。194は敲石。195は台石。196は結晶片岩製の紡錘車。上端から下端にかけて厚みが大きく変っている。表・裏面ともに擦痕が顕著に認められ、中央の孔は両面から穿孔を施しており、右半を欠損している。197～203は滑石製の石鍋。197は表面の右半のみ研磨された面で、裏面も剥落した痕である。198は底部と胴部の境目付近。内面は若干の磨き残しが認められるものの丁寧な研磨が見られ、外面は鍋の縦向きの研磨の単位が顕著に残るやや荒い磨きとなっている。199は底部付近の一部だけが残る。底部内面には研磨による擦痕が若干残り、胴部の断面には欠損後に研磨し直した痕跡が認められ、石鍋が壊れた後、浅い皿状の容器とした可能性も考えられる。胴部外面には磨きの面取りと、

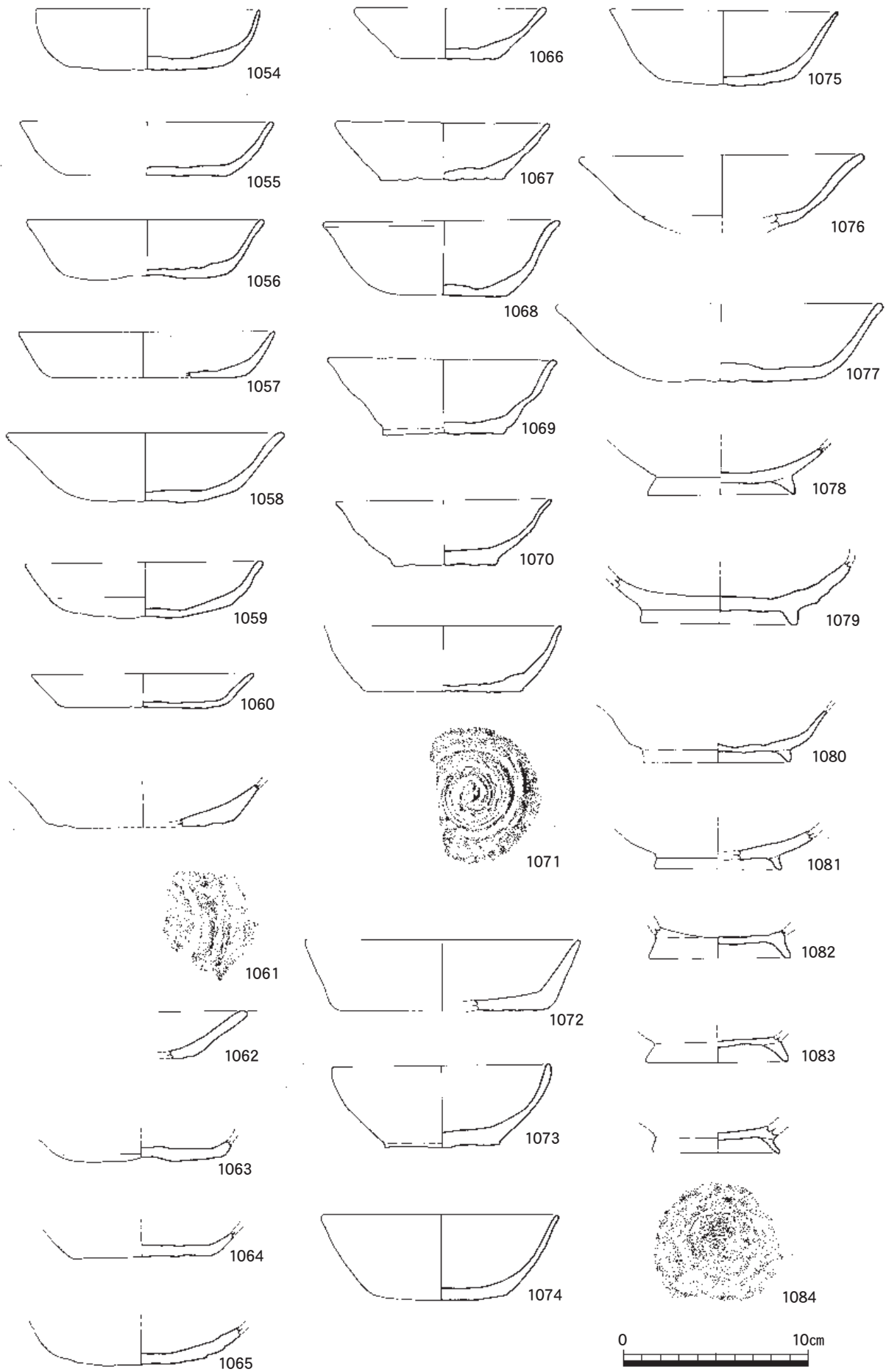




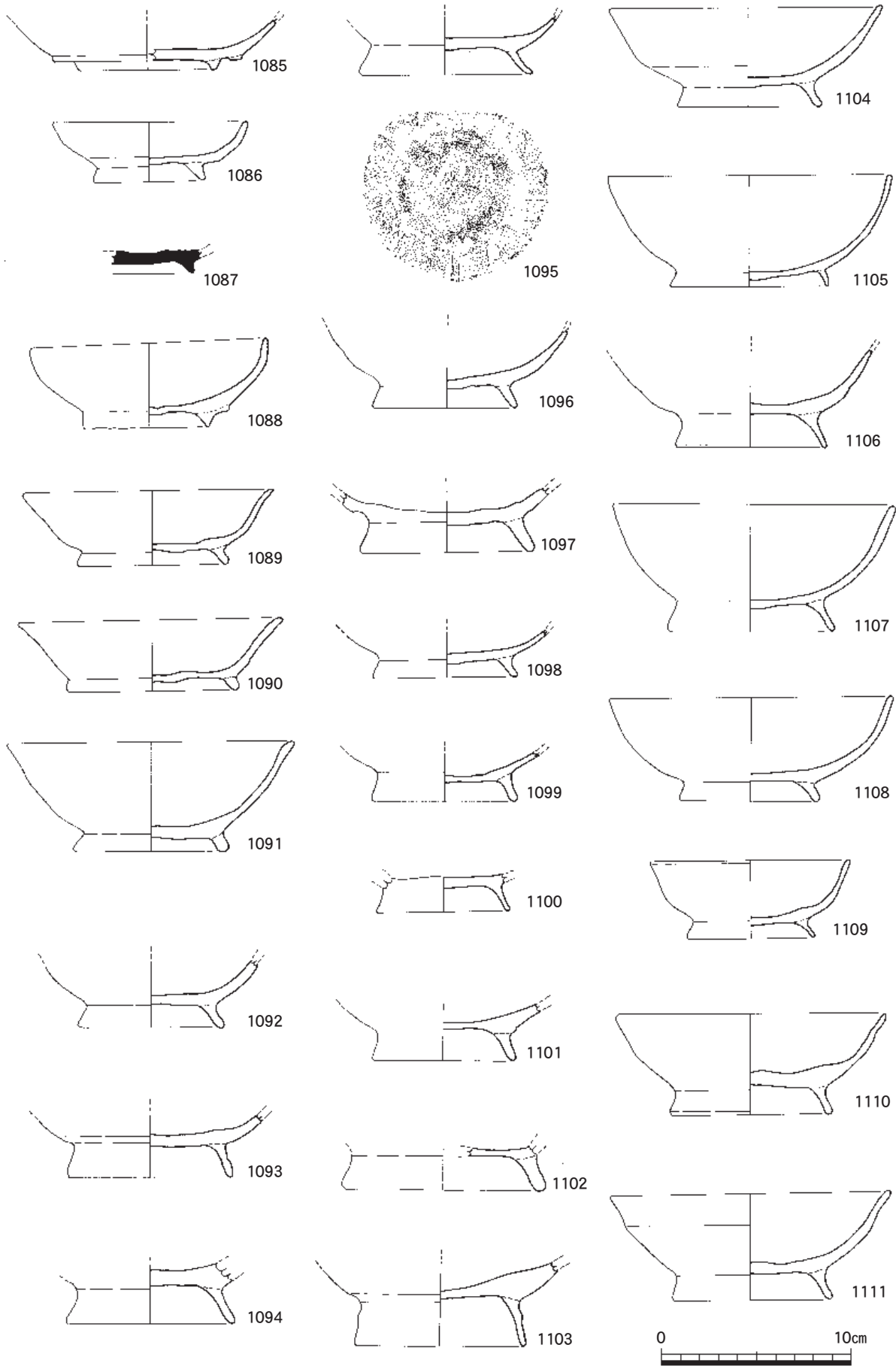
第255図 SD42平・断面・土層図 (S=1/60) (S=1/300)



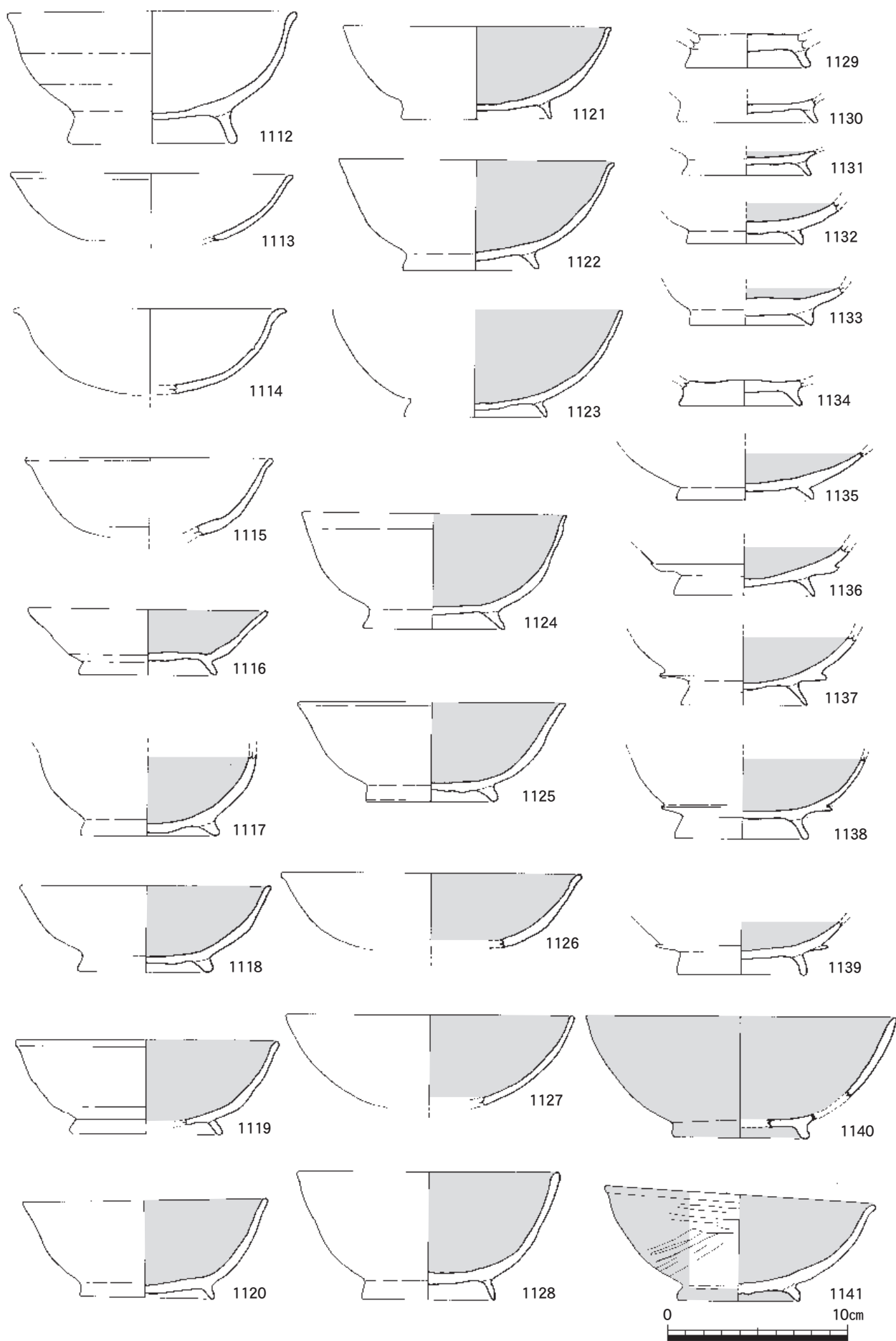
第256図 SD42出土遺物(1) (S=1/3)



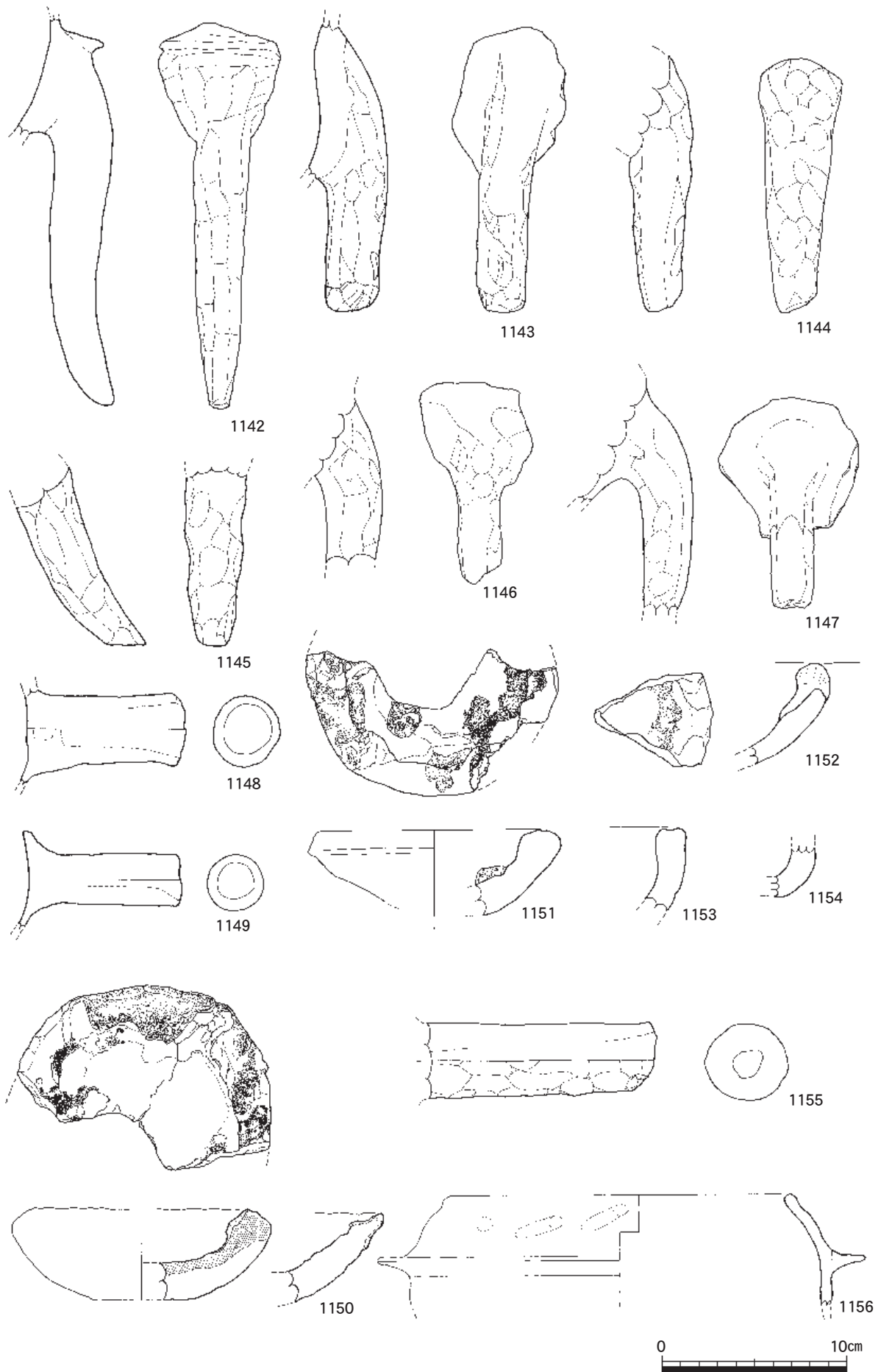
第257图 SD42出土遺物(2) (S=1/3)



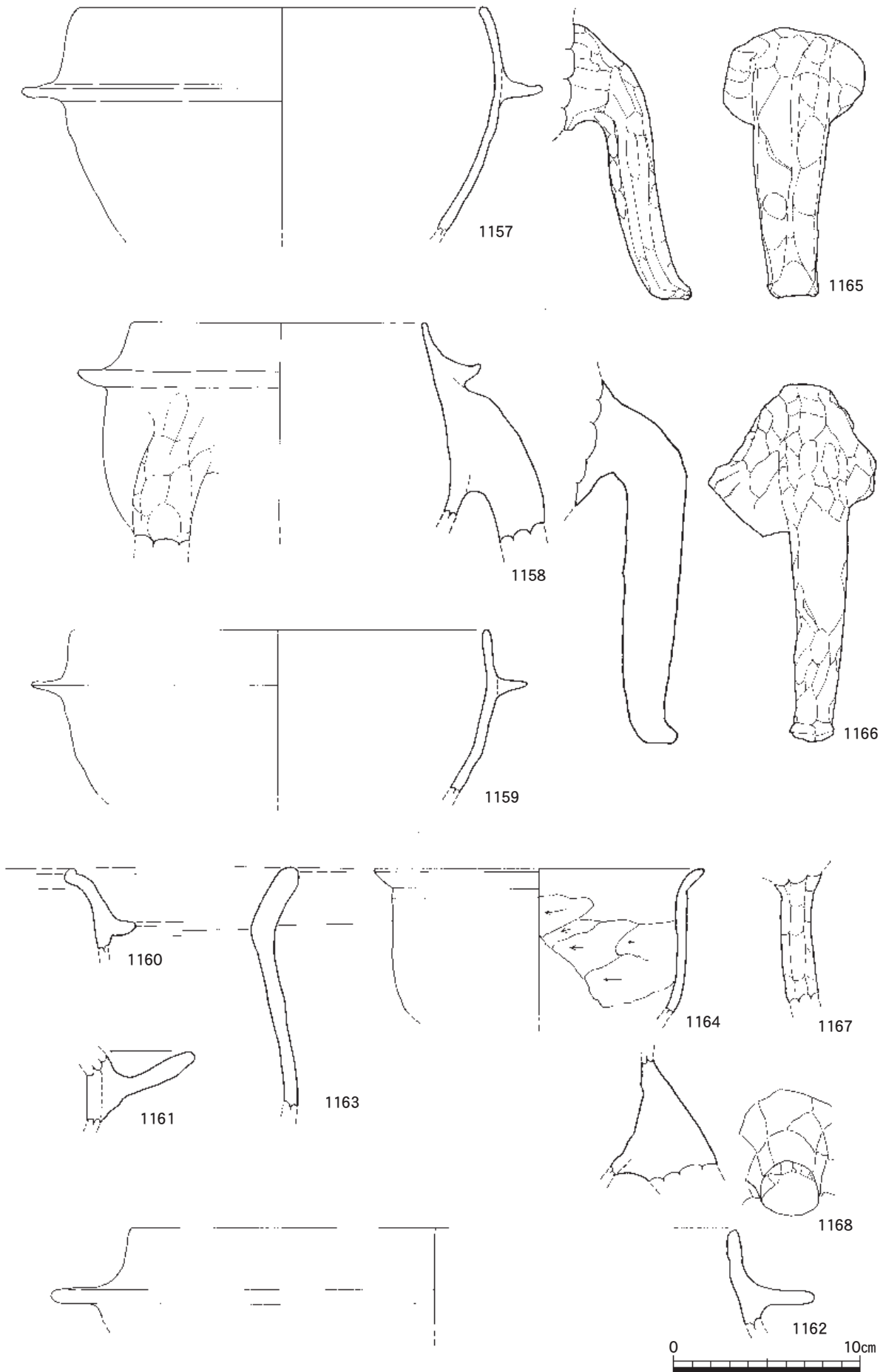
第258図 SD42出土遺物(3) (S=1/3)



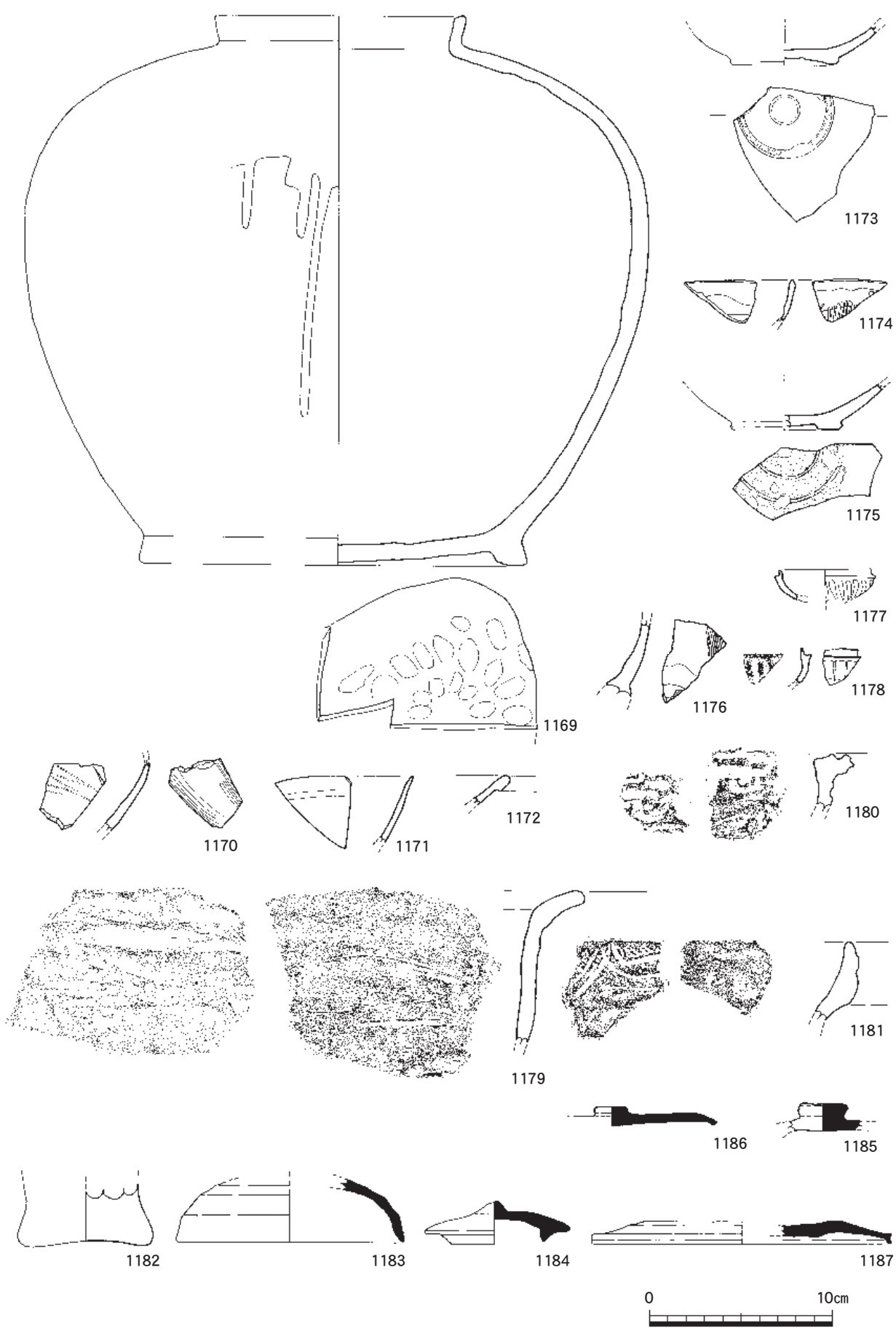
第259図 SD42出土遺物(4) (S=1/3)



第260図 SD42出土遺物 (5) (S=1/3)

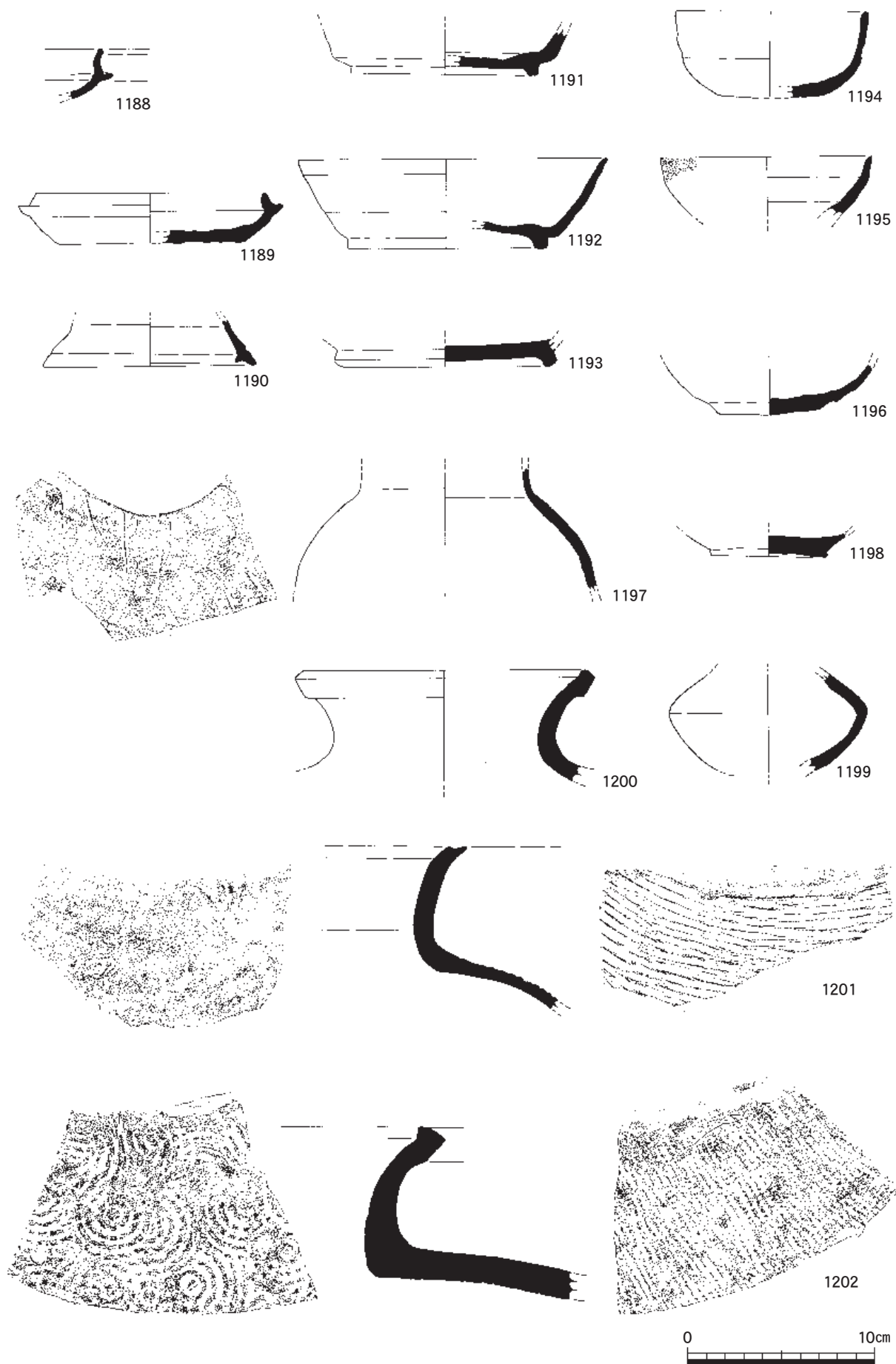


第261图 SD42出土遺物(6) (S=1/3)

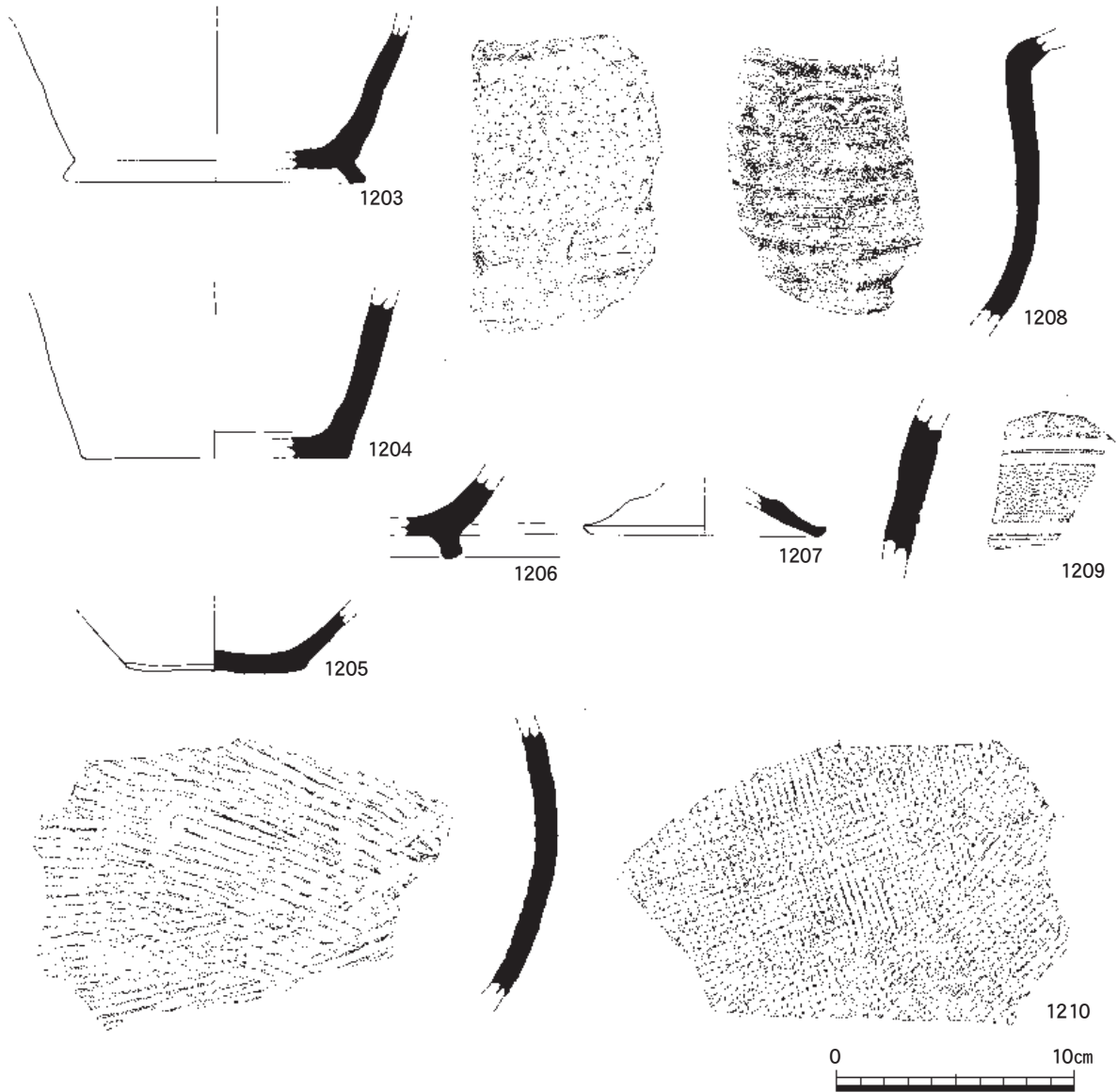


第262図 SD42出土遺物(7) (S=1/3)

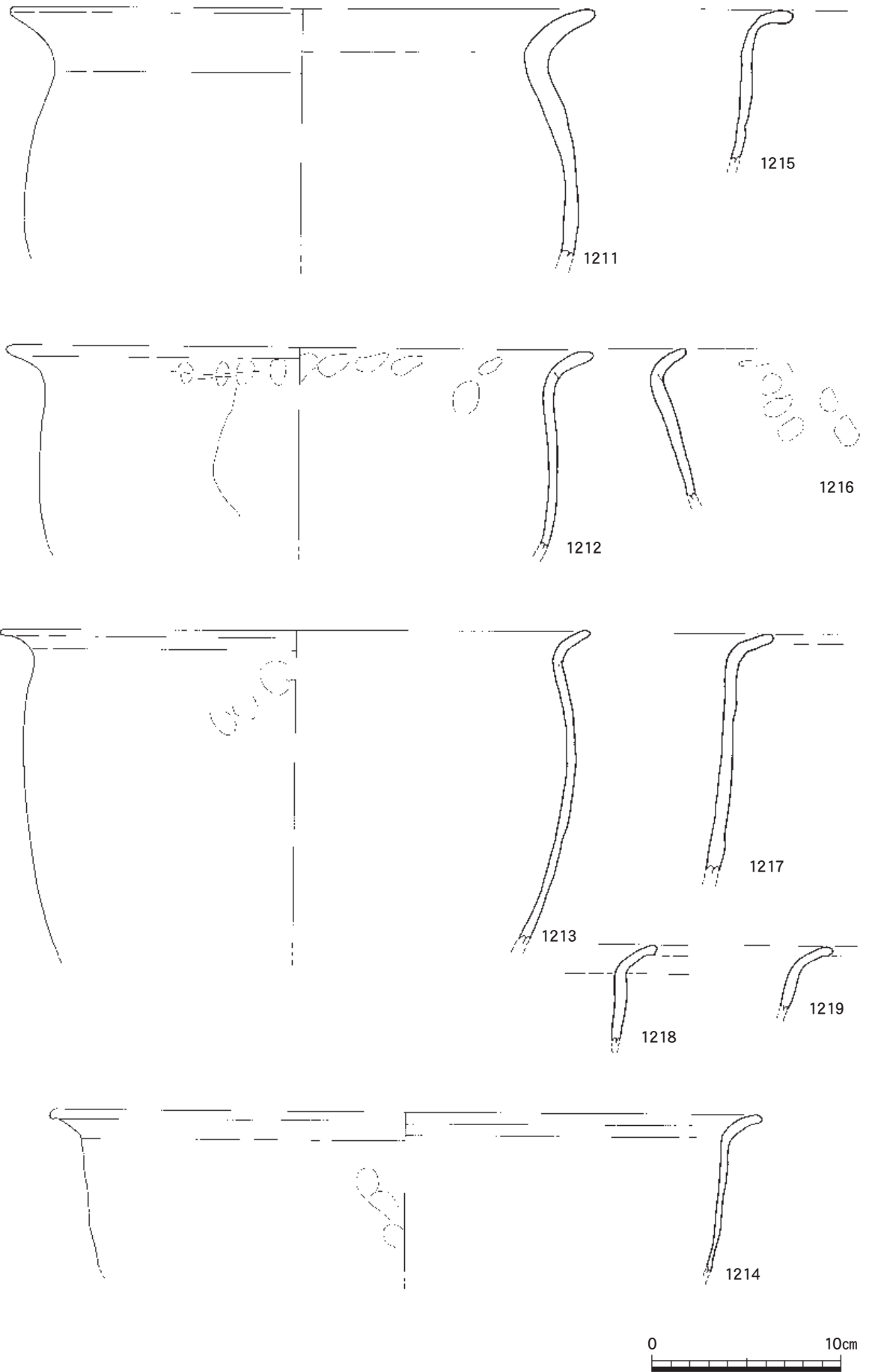




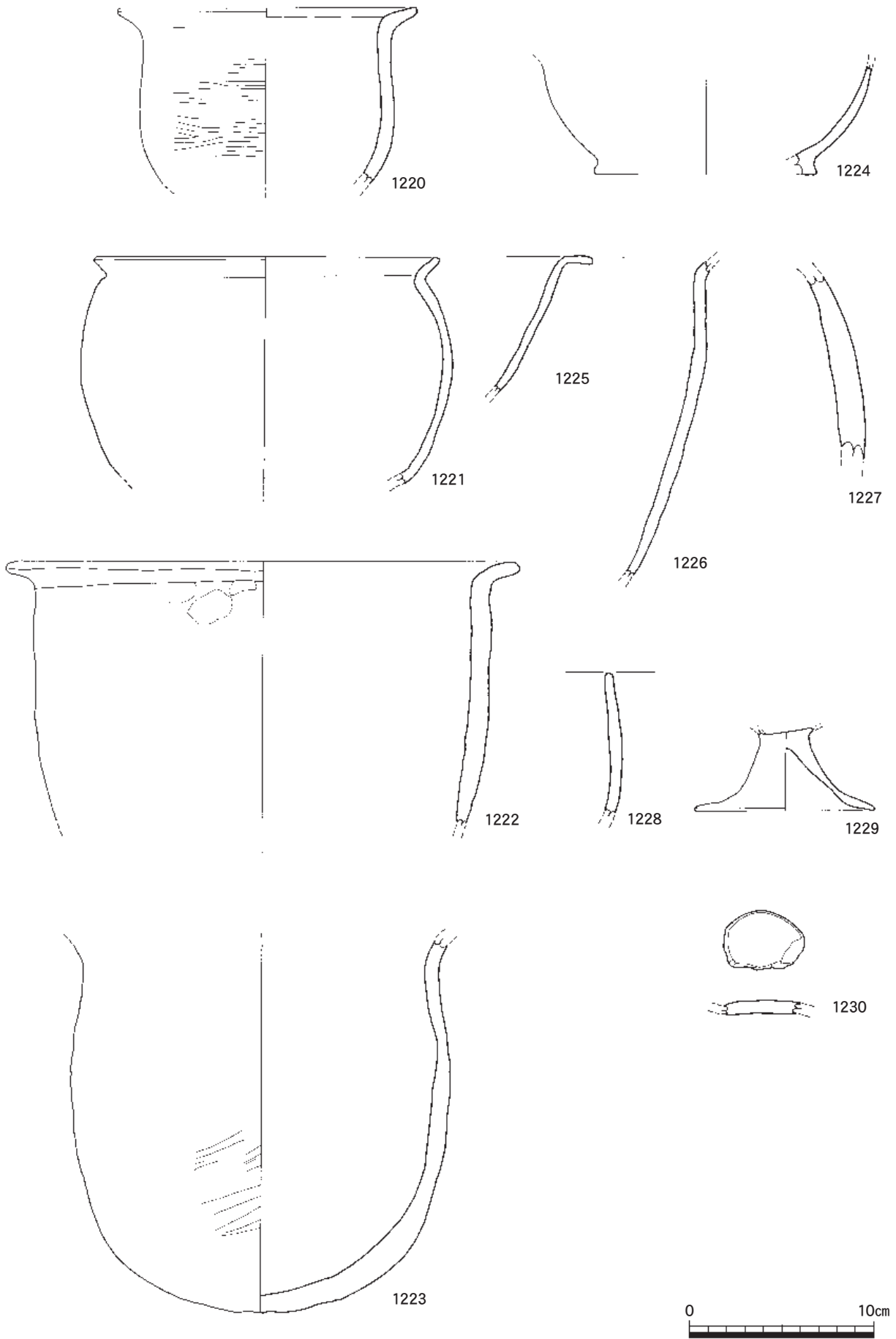
第263图 SD42出土遺物(8) (S=1/3)



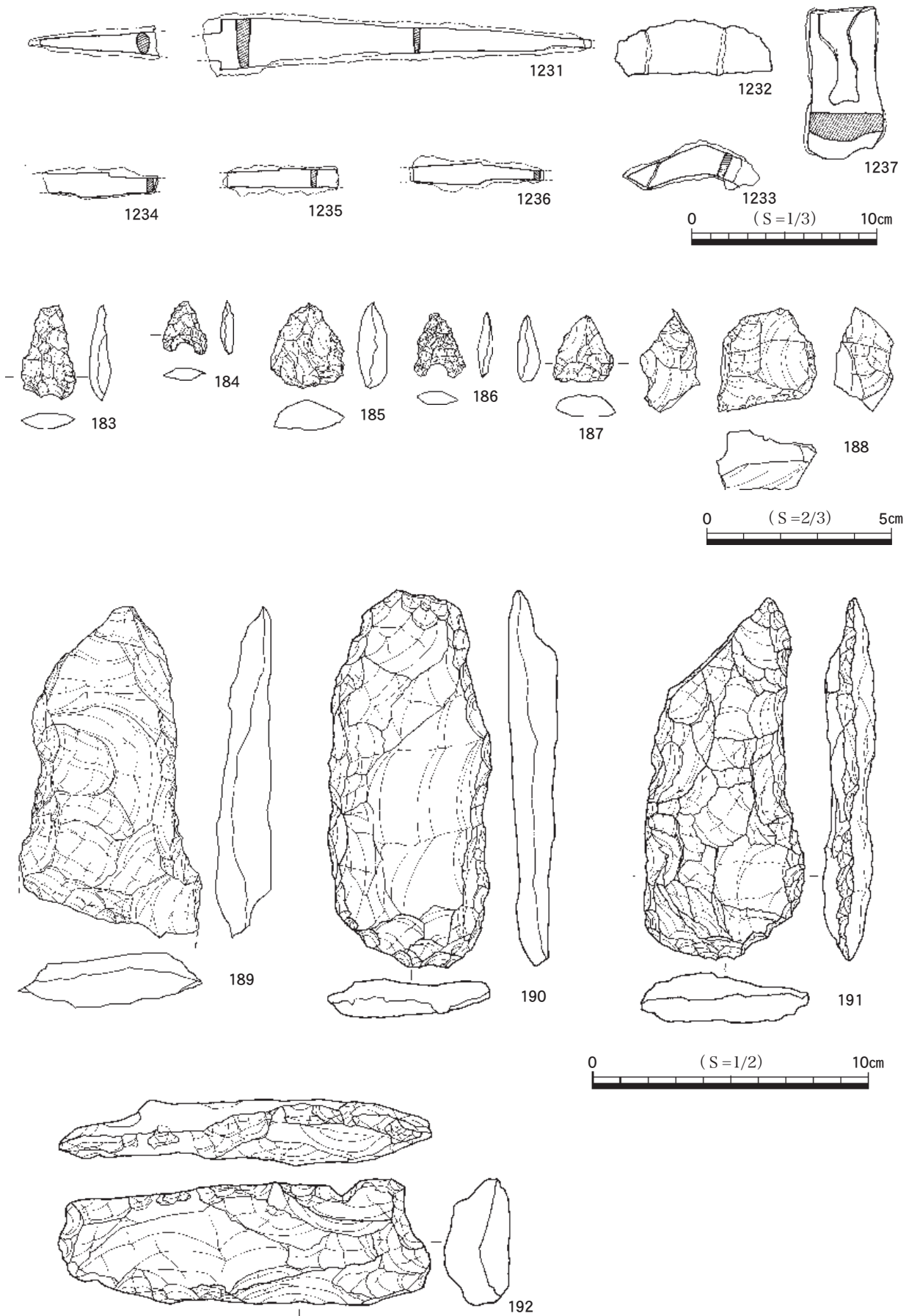
第264图 SD42出土遺物(9) (S=1/3)



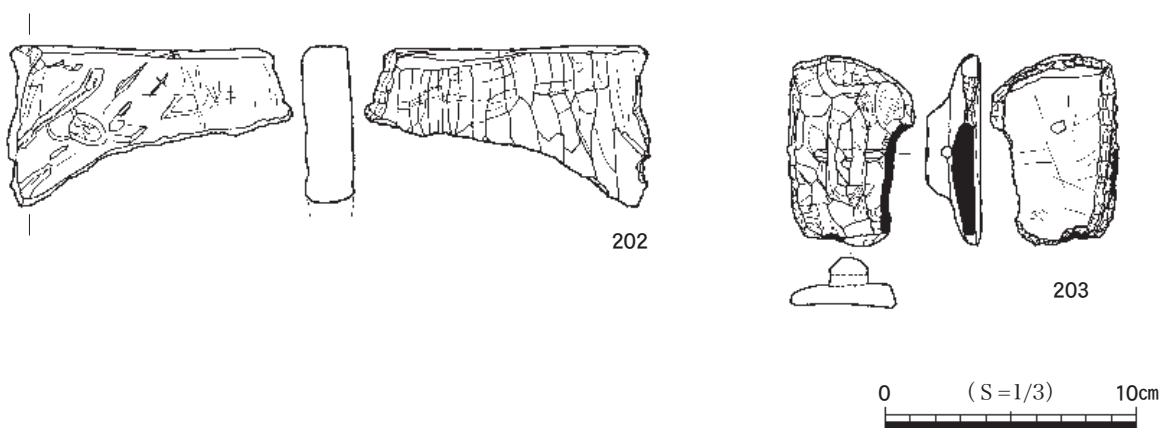
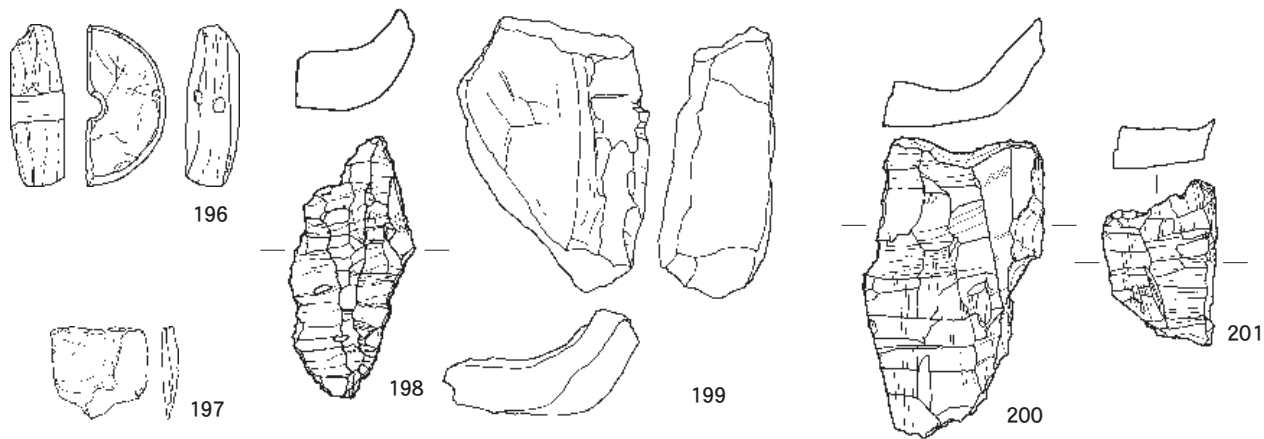
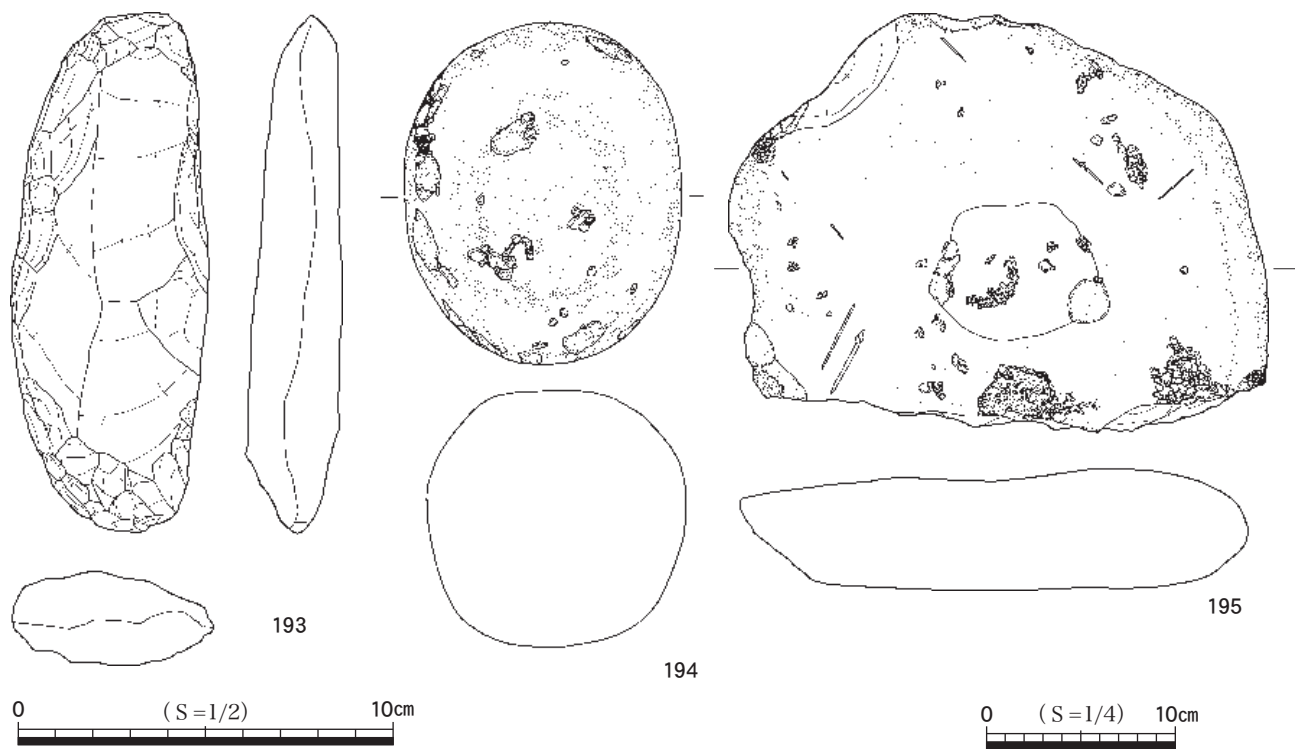
第265図 SD42出土遺物(10) (S=1/3)



第266図 SD42出土遺物(11) (S=1/3)



第267図 SD42出土遺物(12) (S=1/3 (1231~1237)、S=2/3 (183~188)、S=1/2 (189~192))



第268図 SD42 出土遺物 (13) (S=1/2 (193)、S=1/3 (194、196~203)、S=1/4 (195))

荒い擦痕が顕著に観察される。また底部外面にも磨きの面取りがみられる。底部は最大厚1.7cm、胴部の最大厚は2cmを測る。200は底部と胴部の境界辺りが若干残存している。内面は研磨が丁寧だが、若干加工痕が残り、顕著な擦痕が認められる。外面は研磨が粗く、その単位が多く残り、顕著な擦痕が認められる。201は底部と胴部の境界辺りが若干残存している。内面は研磨が丁寧だが、若干加工痕が残り、顕著な擦痕が認められる。外面は研磨が粗く、その単位が多く残り、顕著な擦痕が認められる。202は口縁部片。上端はよく研磨されており、内面もかなり研磨されており、加工痕も顕著に残る。外面は研磨が粗く、磨きの単位が縦長に残存する。また、上端には煮沸による煤が認められる。203は把手部分を転用したバレン状石製品。裏面から加工を施し、更に平坦な加工を入れて、長方形に近い形状に整形している。右側縁と下端の一部は使用によって若干欠損している。表面と裏面の一部に煤が付着している。

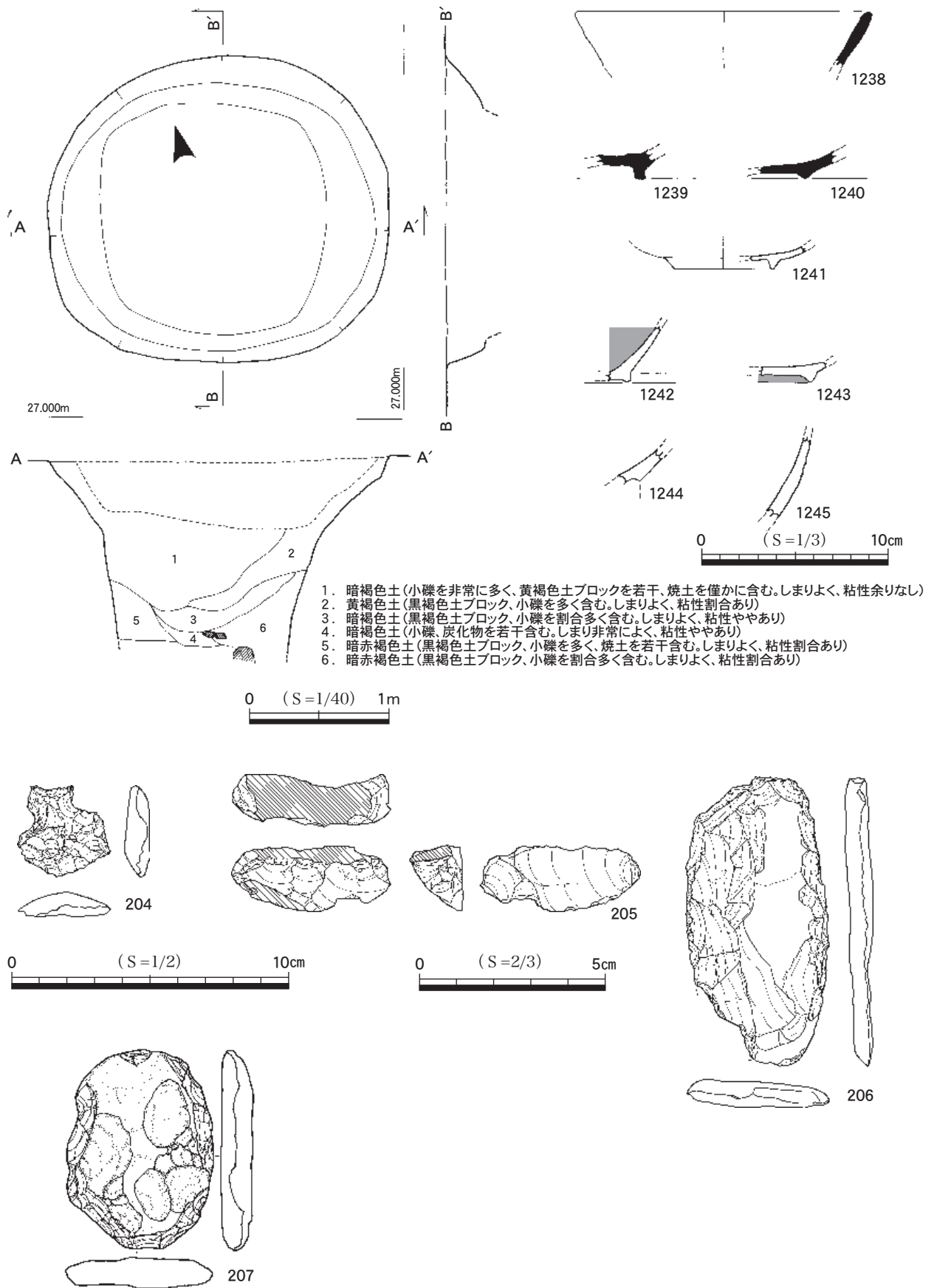
## 井戸

### SE1 (第269図)

第5調査区F-17で検出した楕円形の大型の井戸跡である。最大長2.45m、最大幅2.2m、崩落防止のため深さ1.4mまでしか掘り下げていない。断面は上位が朝顔形に広がり、下位は90度近い角度で落ちる。8世紀末のものや古代末と思われる遺物が出土しているが、完掘していないため時期の特定は避ける。

### 出土遺物 (第269図)

土器8点を図示した。1238・1239は須恵器の埴か。1240は観察表では須恵器としたが土師器の埴か。1241は土師器の埴の底部。1242は黒色土器A類埴。1243は黒色土器B類埴。1244・1245は陶器。1244は内外面に薄い緑釉状の釉薬がかかる。1245は外面は露胎でヘラケズリ状の痕跡が残り、内面は薄い緑釉状の釉薬がかかる。両資料共に緑釉陶器かどうか判断できていない。石器は4点を図示した。204は姫島産黒曜石製の石匙。表・裏面の内奥部にまで平坦な加工を施して横形の石匙に整形している。また、上端付近の両側縁に表・裏面から抉りを入れ、その上の摘み部分は刃部と平行せず斜行する。下半の左右に伸びる部分は欠損しており、その後リダクションして使用を続けている。205は姫島産黒曜石製の石核。おそらく石核片を素材としており、ほとんど節理面の上端を打面とし、正面を作業面として剥離している。裏面には素材剥片とは考えられない剥片を剥がした痕跡があり、右側面の細かな剥離痕は、大きな石核であった時の痕と推測される。206は緑泥片岩製の局部磨製石斧。薄平な幅広剥片を素材とし、表・裏面に大柄で平坦な加工を施して、大まかな整形と厚みの除去を行い、周縁部にやや細かで急斜度な調整を入れて、整形・刃部形成を為し、表面の刃部付近のみは研磨をして刃部を仕上げている。扁平打製石斧と同様の用途をされたものと考えられる。刃部には使用痕が観察され、刃部の左半は欠損している。207は凝灰岩製の台石。平坦で楕円形を呈する自然礫を素材とし、表・裏面から周縁部に加工を施して整形し、表・裏両面を機能面としており、顕著な潰れ痕が認められる。



第269図 SE1平・断面・土層図 (S=1/40) 出土遺物 (S=1/2 (204・206)、S=1/3 (1238~1245、207)、S=2/3 (205))



## 4. 中世の遺構と遺物

### 溝状遺構

#### SD39 (第270図)

第3調査区M-4付近で検出した溝状遺構である。南で古代のSD42を切り、北で近世のSD38に切られる。長さ47m、最大幅2.1m、最大深48cmを測る。埋土は暗褐色土で人為的な堆積が想定される。遺構は直線を指向するため、何らかの施設を画する性格を有していたのかもしれない。本遺構の時期は古代の可能性もあるが、SD42を切ることや1250・1251など中世の遺物も含むため中世としておく。

#### 出土遺物 (第270図)

土器6点を図示した。1246は須恵器で杯身の受け部付近。1247～1249は土師器。1247は皿。底部はへら切りとする。11世紀代か。1248は甕などの口縁部か。1249は観察表では甕としたが坑であろうか。高台の形状に特徴がある。1250は瓦質土器の鉢か鍋。1251は青磁碗。外面に弁の中心に稜をもつ鎬蓮弁文を描く。13世紀前後～14世紀前後、山本編年の椀Ⅱ・Ⅲ類か。石器は1点を図示した。208は緑泥片岩製の磨製石斧。左半と基部を欠損している。表面には横向きの擦痕が顕著に認められる。

#### SD50 (第271図)

第4調査区Q-11付近で検出した溝状遺構である。長さ44m、最大幅150cm、最大深80cmを測り、断面は「U」字形を呈す。試掘トレンチで削られた中央付近で角度を変える。埋土は、上層と下層で大きく分かれ、下層は自然堆積層、上層は一括堆積層である。上層に人頭大の川石が多く検出されている。埋め戻しの際に混ぜ込まれたものであろう。

#### 出土遺物 (第271・272図)

土器15点を図示した。1252～1263は縄文土器の鉢。鐘崎式土器で最新層の様相をもつ。1262は浅鉢か。1255と1257は橋状取手を有す。1264・1265は瓦質土器。1264は鉢。1265は火鉢。口縁部に巡る二条の突帯間にスタンプ上の痕跡が残る。1266は陶磁器片。青磁か。如意状の口縁部が特徴的である。石器は1点を図示した。209は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部に押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部に浅い抉りが入る。先端は欠損後リダクションしたようで、左脚は僅かに、右脚は完全に欠損している。

### 性格不明遺構

#### SX4 (第273図)

第5調査区G-15付近で検出した楕円形遺構である。最大長5.4m、最大幅4.9mを測る。この付近は後世の削平が著しく当時の状態を保持していないと思われる。中央部を囲うように幅30～70cm、深さ20cmの溝が楕円形に巡る。西側長側辺の一部が尖頭形に長さ1m、幅1.2m程張り出す。この部位は近世のSD51に一部切られている。周囲の溝からは小礫が確認され、一部被熱していた。島状の中央部で小ピットを検出しているが本遺構に付属するものか遺物が出土していないため不明である。調査当初、溝から縄文土器が出たため縄文遺構の可能性が高いと考えたが、瓦質土器も一定量出土したため、本報告では中世の遺構として報告する。性格・用途については不明である。

### 出土遺物 (第274図)

土器6点を図示した。1267～1269は縄文土器の鉢。1267・1268は太郎迫式の口縁部。1269は鐘崎式であろう。1270～1272は瓦質土器。1270は鉢。口縁部外面に指頭が残る。1271は鍋。外面はケズリで調整する。14世紀代か。1272は挿鉢。内面に挿り目を有する。石器は2点を図示した。210は磨石。211は磨石兼敲石。

## 5. 近世の遺構と遺物

### 溝状遺構

#### SD1・2・3 (第275図)

第1調査区G-13付近で検出した溝状遺構である。長さ25～30m、最大幅50cm、最大深10cmを測り、断面は逆台形を呈す。SD3より近世所産の遺物が出土しており、SD1・2とともに同時期の遺構と考えられる。耕作痕であろう。

#### 出土遺物 (第275図)

土器3点を図示した。1273～1275は陶磁器。1273は碗。1274は小皿。紅皿か。1275は唐津系の陶器碗。石器は1点を図示した。212は多久産と考えられるサヌカイト製の石鏃。表・裏面の内奥部まで丁寧な押圧剥離が及び、基部にはやや深い抉りが入る。先端を若干欠損しており、左右の脚部の長さが違うのは、短い左脚を欠損しリダクションしたか。

#### SD8 (第276図)

第1調査区A-28付近で検出した溝状遺構である。長さ8.2m、最大幅54cm、最大深14cmを測り、断面は逆台形を呈す。性格は不明である。

#### 出土遺物 (第276図)

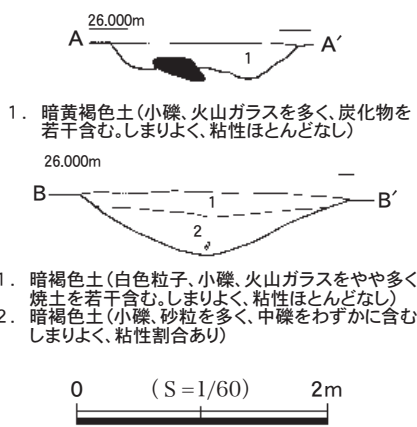
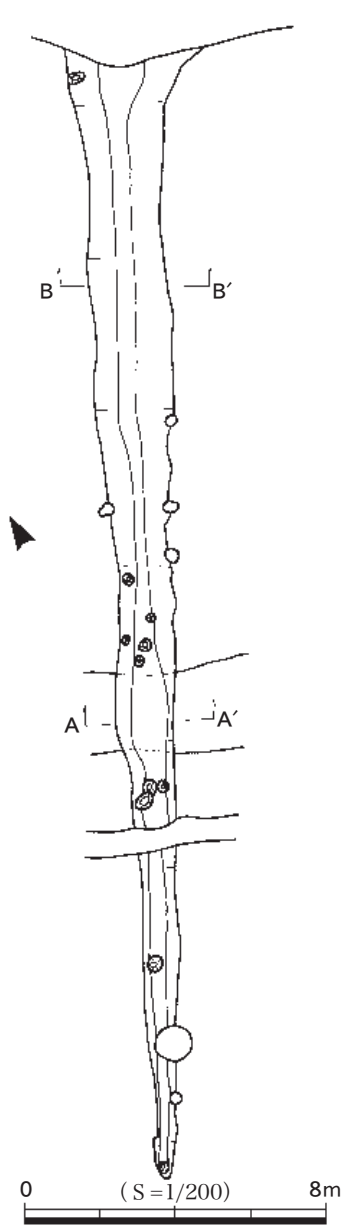
土器3点を図示した。1276は土師器の皿か。1277は肥前系磁器で皿もしくは碗。1278は土錘である。

#### SD11 (第277図)

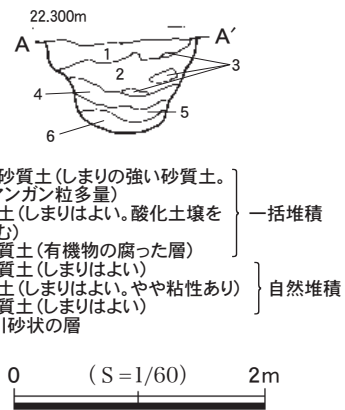
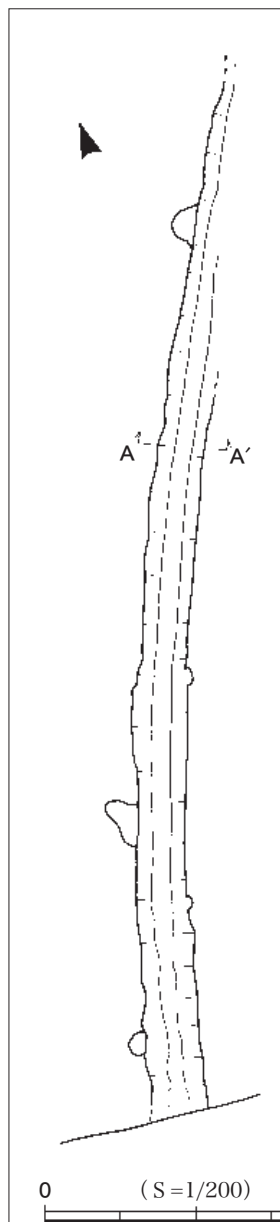
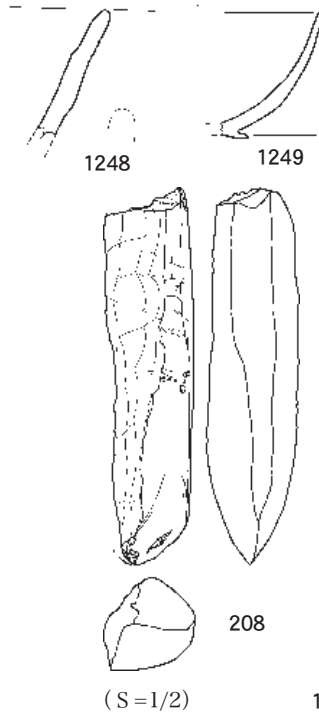
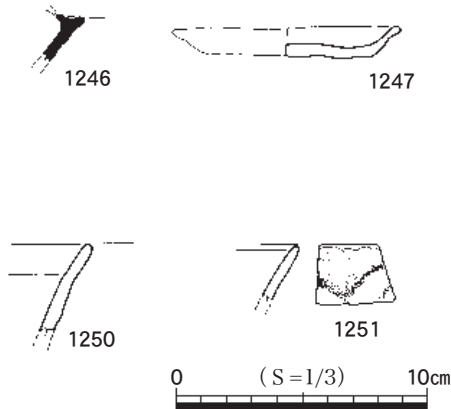
第2調査区を横断する溝状遺構である。長さ35m、最大幅2.4m、最大深30cmを測る。東側の壁面はテラスを有し緩やかに底面に至る。底面から10cm程度浮いた位置において、約80cmの幅で拳大の川原石の集石を検出した。道路状遺構であろうか。

#### 出土遺物 (第277図)

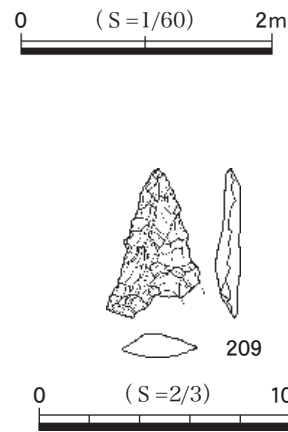
土器8点を図示した。1279は須恵器の杯身。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。1280～1282は土師器。1280は高坏か。1281は短頸壺の口縁部。1282は観察表では皿としたが坏の方がよい。1283～1285は瓦質土器。1283・1284は鍋。1284は13世紀後半～14世紀前半の資料であろうか。1285は火鉢。外面に2つスタンプ紋を施す。1286は肥前系磁器碗。1287は寛永通宝。新寛永である。石器は3点を図示した。213・214は打製石斧。213は緑泥片岩製。扁平な幅広剥片を素材として、表・裏面に大柄で平坦な加工を施して厚みを取り、周縁部に急斜度な調整を入れて整形している。裏面から表面への折れによって、刃部を欠損している。214は角閃石安山岩製。表・裏面への大柄で平坦な加工によって厚みを取り、周縁部への急斜度な調整によって整形している。



1. 暗黄褐色土(小礫、火山ガラスを多く、炭化物を若干含む。しまりよく、粘性ほとんどなし)
2. 暗褐色土(白色粒子、小礫、火山ガラスをやや多く、焼土を若干含む。しまりよく、粘性ほとんどなし)
2. 暗褐色土(小礫、砂粒を多く、中礫をわずかに含む。しまりよく、粘性割合あり)

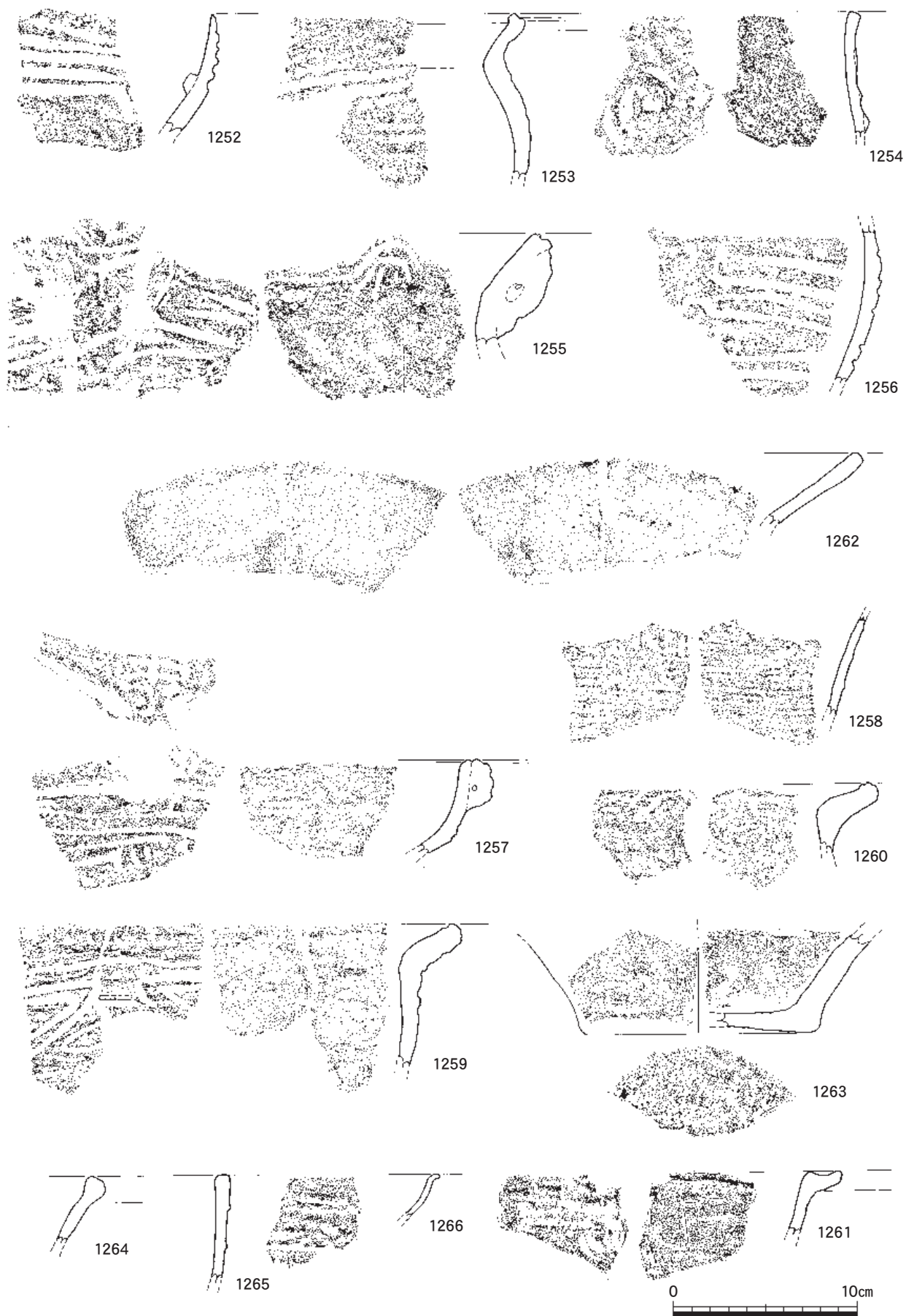


1. 暗茶褐色砂質土(しまりの強い砂質土。土器粒、マンガン粒多量)
  2. 灰色砂質土(しまりはよい。酸化土壌を帯状に含む)
  3. 黒褐色砂質土(有機物の腐った層)
  4. 暗灰色砂質土(しまりはよい)
  5. 灰色粘質土(しまりはよい。やや粘性あり)
  6. 暗灰色砂質土(しまりはよい)
- ※2・4・6層は川砂状の層

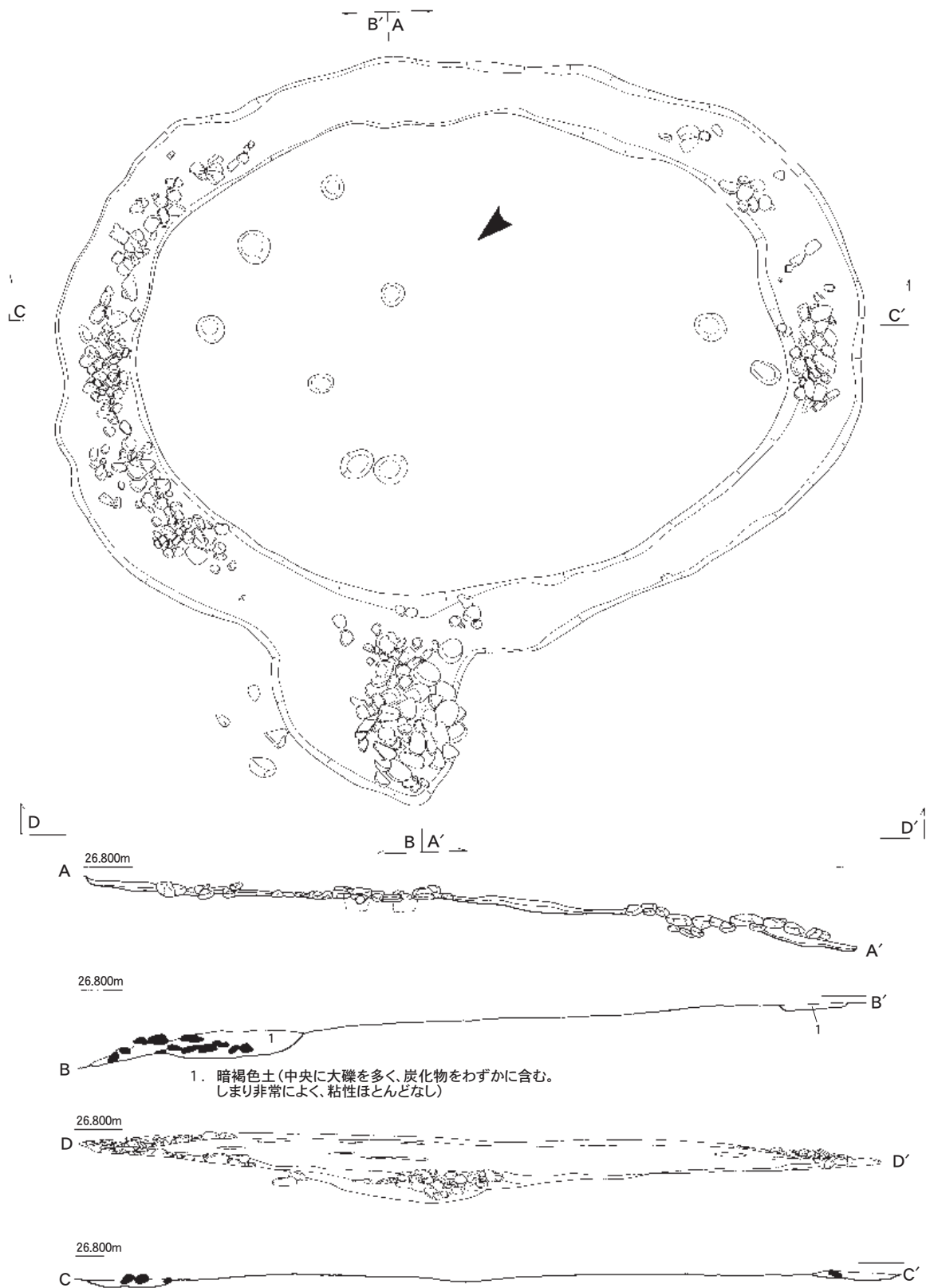


第270図 SD39平・断面・土層図 (S=1/200) (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3 (1246~1251), S=1/2 (208))

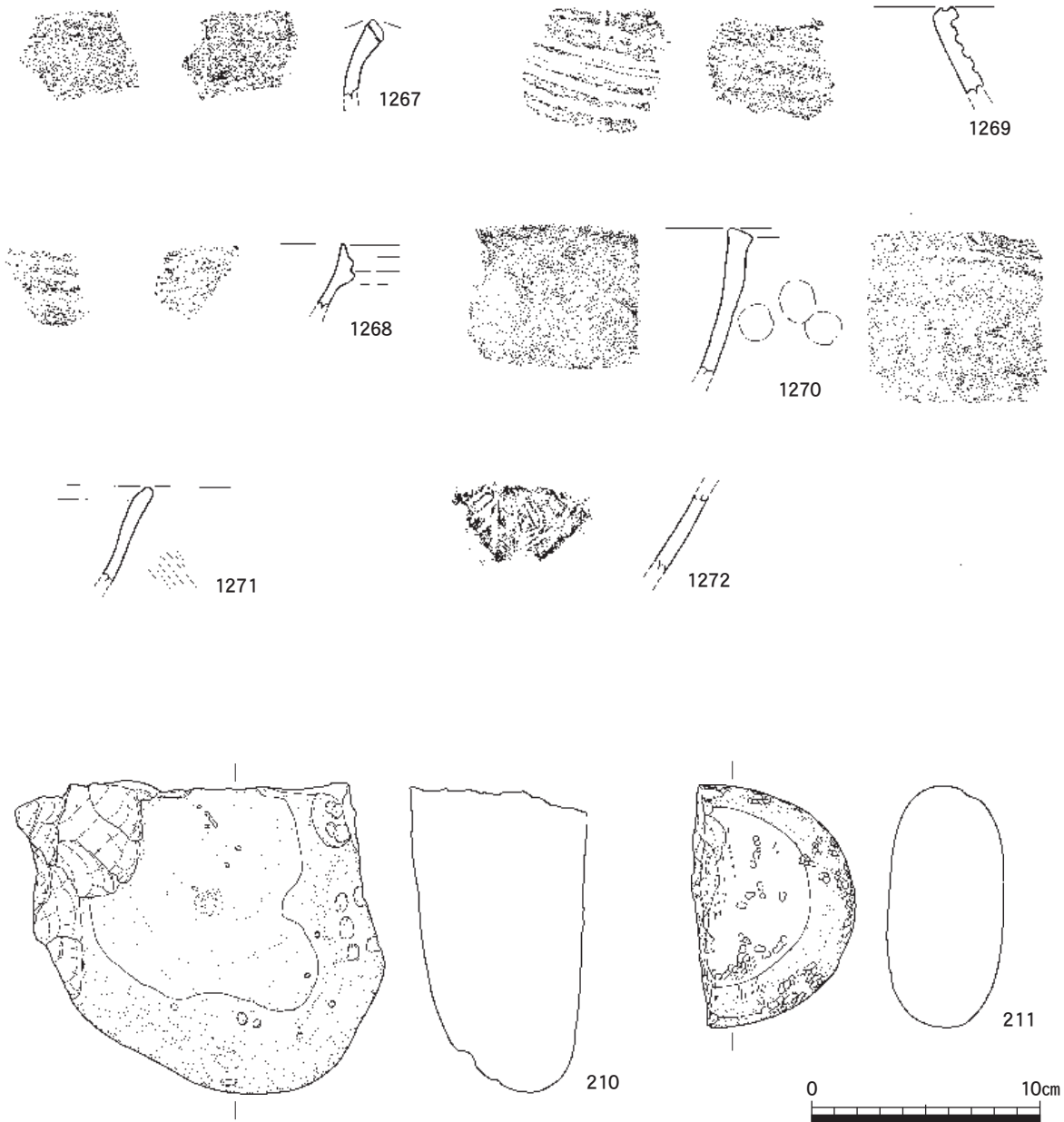
第271図 SD50平・断面・土層図 (S=1/200) (S=1/60) 出土遺物 (1) (S=2/3)



第272図 SD50出土遺物(2) (S=1/3)



第273図 SX4平・断面・土層図 (S=1/40)



第274図 SX4出土遺物 (S=1/3)

裏面から表面への折れによって刃部側の半分を欠損している。215は角閃石安山岩製の砥石。裏面が全面自然面の分割礫を素材とし、上・下端の表・裏面の一部にはつりを入れて整形している。表面には左上-右下とほぼ横方向の、裏面には右上-左下とほぼ横方向の擦痕が顕著に認められる。

#### SD38 (第278図)

第3調査区北側を横断する溝状遺構である。長さ47m、最大幅2m、最大深20cmを測る。中世の溝SD39を切る。直線を指向し、断面は壁の立ち上がりが緩やかな逆台形を呈す。何らかの区画溝であろうか。

#### 出土遺物 (第278図)

土器13点を図示した。1288・1289は須恵器。1288は8世紀前半の資料か。1289は杯身。1290～1297・1299は瓦質土器。1290は碗か鉢。1291は搗鉢。搗り目が密に入る近世の資料。1292～1294は鉢。1295は杯身か。底部内面に突帯を巡らす。1296は観察表では皿としたが、鉢の誤り。搗り目の間隔が空いていることから16世紀代の資料か。1298は磁器で碗。観察表では陶器としたが磁器の誤り。1299は火鉢の底部。1300は磁器で碗。石器は1点を図示した。216は姫島産黒曜石製の石鏃未成品。表・裏面に丁寧な押圧剥離が施されているが、先端・脚部ともに形状は甘く、厚さも取りきれていない。

#### SD45 (第279図)

第3調査区F-7付近で検出した溝状遺構である。長さ17m、最大幅70cm、最大深40cmを測る。中世の溝SD39を切り、SD42付近で終息する。断面は壁の立ち上がりが急な逆台形を呈す。遺物は流れ込みのものが多し。

#### 出土遺物 (第279図)

土器8点を図示した。1301は縄文土器。口縁部の切り込み状の凹みが特徴。1302は須恵器で杯身。1303～1306は土師器。1303は甕。1304は皿か。1305は高坏の脚。1306は皿。1307は磁器で碗か。1308は観察表では鉢としたが、鍋の誤り。

#### SD48 (第280図)

第3調査区O-4付近で検出した溝状遺構である。長さ21m、最大幅1.8mを測る。底面は調査時に未作成のため図示できていない。近世の畑の痕跡である可能性もある。

#### 出土遺物 (第280図)

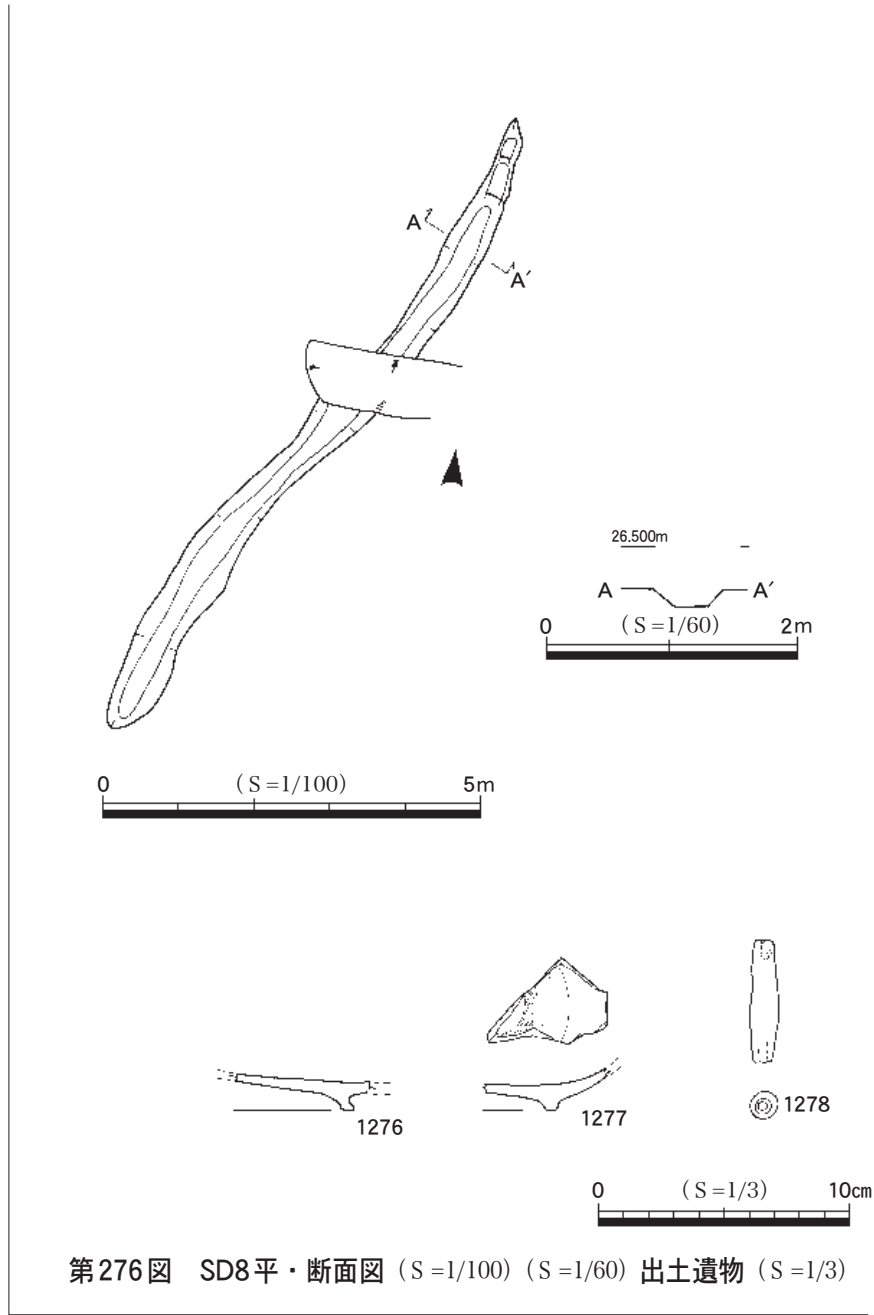
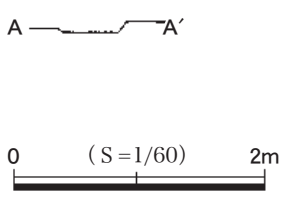
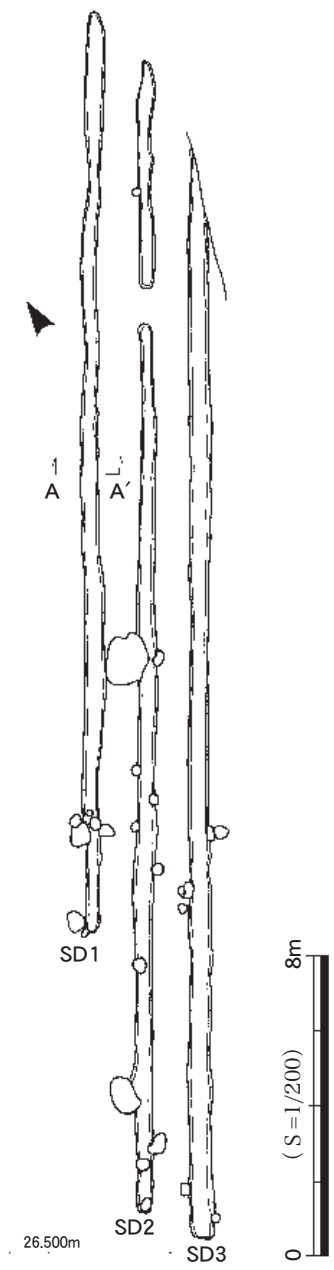
土器2点を図示した。1309は搗鉢。観察表では土師器としたが陶器かもしれない。1310は瓦質土器の鉢。石器は2点を図示した。217は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、先端と右脚を欠損している。218は結晶片岩製の砥石。表面に擦痕が認められる。

#### SD51 (第281図)

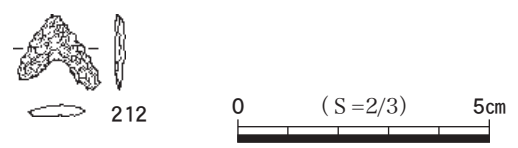
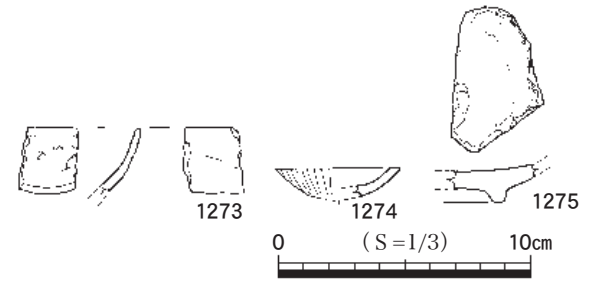
第1調査区と第5調査区の境で検出した溝状遺構である。北端部で中世のSX4を切る。長さ52m、最大幅2.6m、深さ30cmを測る。

#### 出土遺物 (第281図)

土器3点を図示した。1311は土師器で高坏。1312は瓦質土器で鍋の口縁部。1313は肥前系磁器碗。18世紀後半代の所産であろう。



第276図 SD8平・断面図 (S=1/100) (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3)



第275図 SD1・2・3平・断面図 (S=1/200) (S=1/60) SD3出土遺物 (S=1/3 (1273~1275)、S=2/3 (212))



## 6. 時期不明の遺構

### 掘立柱建物

#### 3次SB3 (第282図)

3次調査区で検出した側柱建物である。規模は梁行2間(3.4m)、桁行3間(4.3m)、身舎面積約15m<sup>2</sup>、N31°E方向に軸線に向ける。掘方直径は24～50cm、柱穴の深さは8～28cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.6～1.8m、桁行間1.2～1.6mである。遺物は出土していない。

#### 3次SB5 (第283図)

3次調査区で検出した側柱建物である。規模は梁行3間(3.4m)、東桁行5間(3.4m)、西桁行2間(6.6m)、身舎面積約22m<sup>2</sup>、N43°E方向に軸線に向ける。掘方直径は25～70cm、柱穴の深さは18～42cmを測る。柱穴の芯心距離は、梁行間1.1～1.4m、東桁行間1.2～1.4m、西桁行間2.4～4mである。遺物は出土していない。

#### SB2 (第284図)

第2調査区H-10付近で検出した側柱建物である。規模は2間(3.2m)×3間(4.6m)、身舎面積約14.7m<sup>2</sup>、N45°E方向に軸線に向ける。掘方直径は16～48cm、柱穴の深さは20～50cm、柱痕跡を確認できた柱穴は8基あり直径約20cmを測る。柱穴の芯心距離は、南北列1.5～1.7m、東西列1.4～1.7mである。遺物は出土していない。

#### SB3 (第285図)

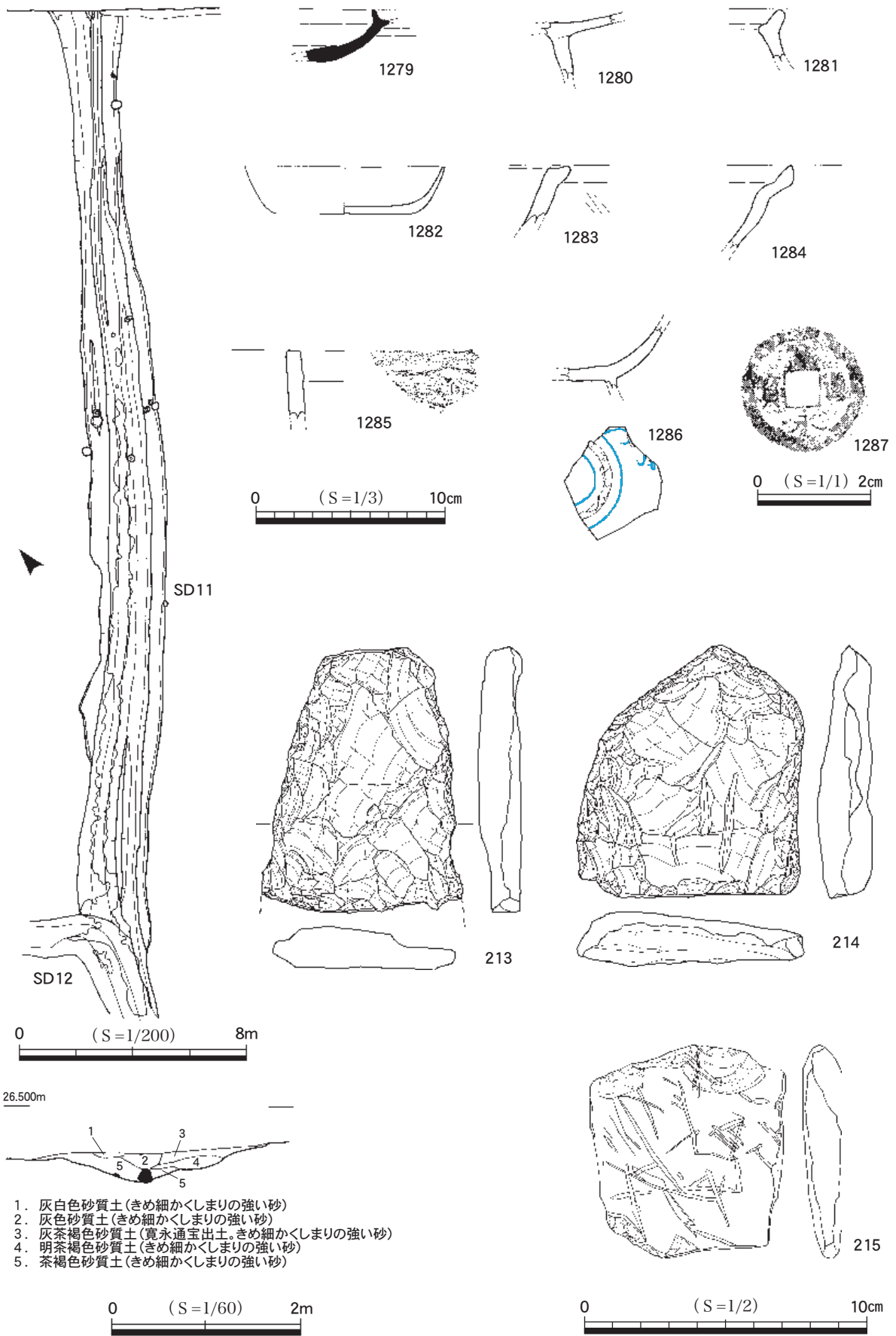
第3調査区K-3付近で検出した側柱建物である。規模は3間(4.1m)×3間(5.5m)、身舎面積約23m<sup>2</sup>、N55°E方向に軸線に向ける。掘方直径は25～40cm、柱穴の深さは18～55cm、柱痕跡を確認できた柱穴は2基あり直径約12cmを測る。柱穴の芯心距離は、南北列0.9～2m、東西列1.6～2.1mである。遺物は出土していない。

#### SB6 (第286図)

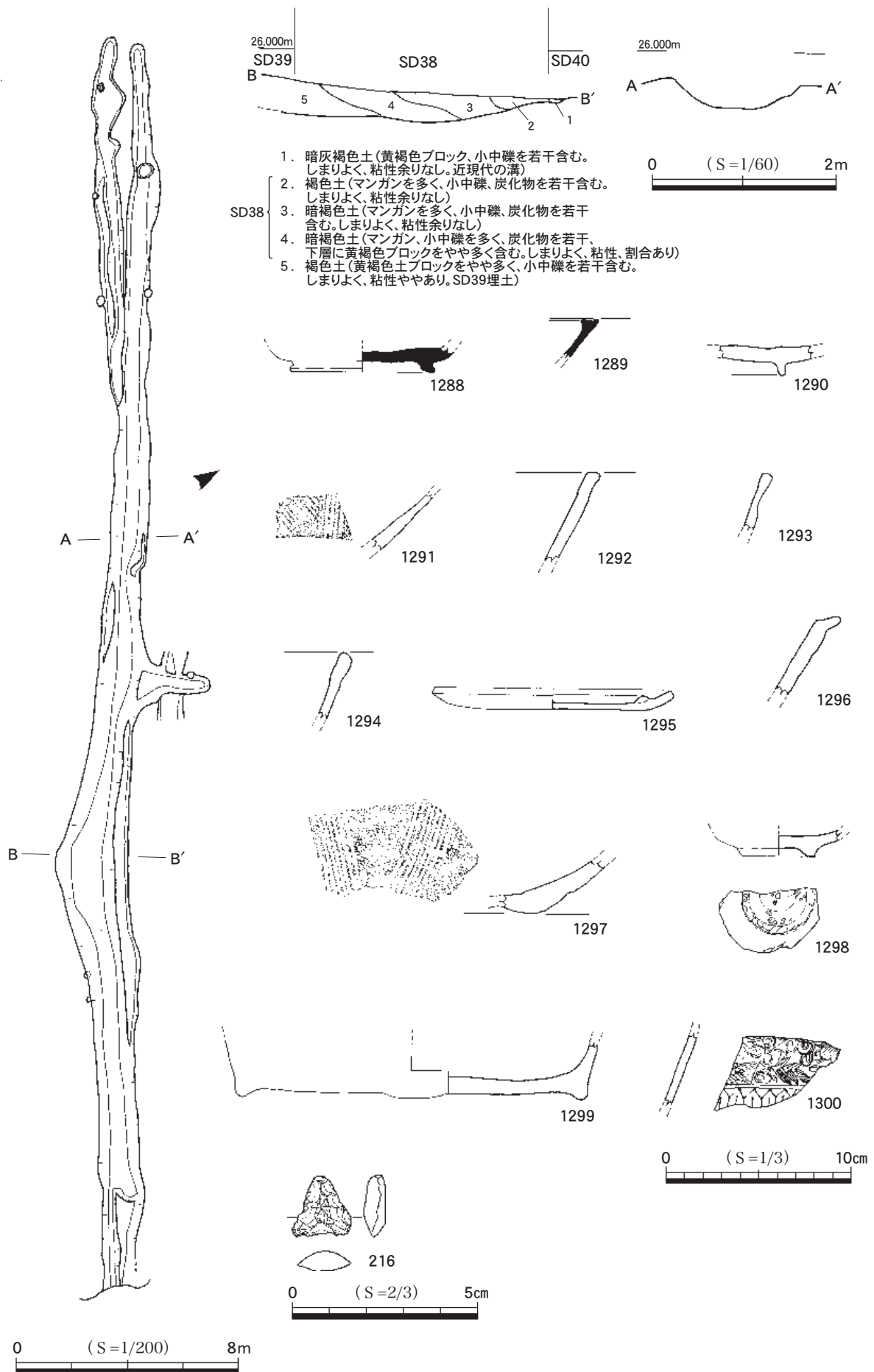
第3調査区N-5で検出した総柱建物である。規模は2間(3.5m)×2間(4.4m)、身舎面積約15m<sup>2</sup>、N38°E方向に軸線に向ける。掘方直径は20～55cm、柱穴の深さは10～20cm、柱痕跡を確認できた柱穴は12基あり、直径10～15cmを測る。柱抜き取り痕を確認できた柱穴も1基ある。柱穴の芯心距離は、南北列2～2.4m、東西列1.6～1.9mである。遺物は出土していない。

#### SB11 (第287図)

第3調査区I-18で検出した総柱建物である。規模は2間(3.5m)×2間(4.4m)、身舎面積約11m<sup>2</sup>、N40°E方向に軸線に向ける。掘方直径は18～46cm、柱穴の深さは14～24cm、柱痕跡を確認できた柱穴はない。柱穴の芯心距離は、南北列1.6～1.7m、東西列1.4～1.6mである。遺物は出土していない。



第277図 SD11平・断面・土層図 (S=1/200) (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3 (1279~1286)、S=1/1 (1287) S=1/2 (213~215))



第278図 SD38平・断面・土層図 (S=1/200) (S=1/60) 出土遺物 (S=1/3 (1288~1300)、S=2/3 (216))

## 土 坑

### SK21 (第288図)

第2調査区J-11で検出した不定形土坑である。最大長92cm、最大幅55cm、深さ24cmの大きさである。北側の壁面にテラスを有し、急角度で立ち上がる。

石器1点が出土した。219は角閃石安山岩製の扁平打製石斧。幅広剥片を素材とし、裏面は平坦で大柄な加工で厚みを取り、周縁部に浅くやや細かい調整を施して分銅形に整形し、刃部を形成している。右半を欠損している。

### SK49 (第289図)

第5調査区G-20で検出した隅丸長方形の陥し穴遺構である。最大長1.3m、最大幅56cm、深さ70cmの大きさである。底面中央に直径15cm、深さ6cmの小穴がある。小穴内に礫などは確認していない。壁の立ち上がりは急である。遺物は出土していない。

### SK59 (第290図)

第5調査区E-19で検出した不定形土坑である。最大長2.1m、最大幅1.7cm、深さ12cmの大きさである。調査の際に遺構の下端を未記入である。

石器1点が出土した。220は安山岩製の石匙。周辺部を細かく調整し、刃部とする。

### SK60 (第291図)

第5調査区G-21で検出した隅丸長方形土坑である。最大長1.3m、最大幅68cm、深さ33cmの大きさである。壁面の立ち上がりは急である。

石器1点が出土した。221は姫島産黒曜石製の石錐。幅広剥片を素材とし、表面は左側縁下半の周縁に、裏面は下端付近に細かな加工を施して先端を形成している。先端を僅かに欠損している。

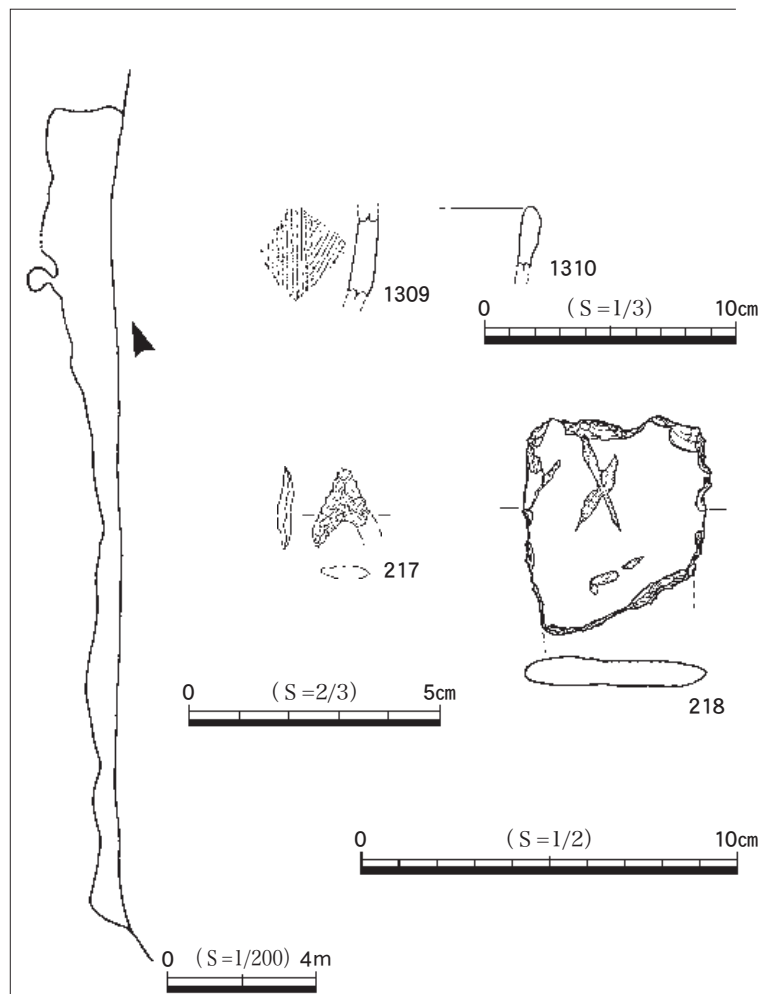
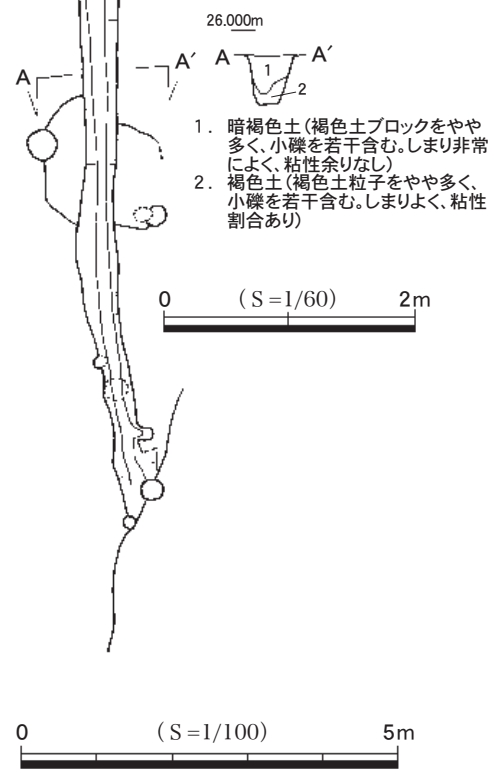
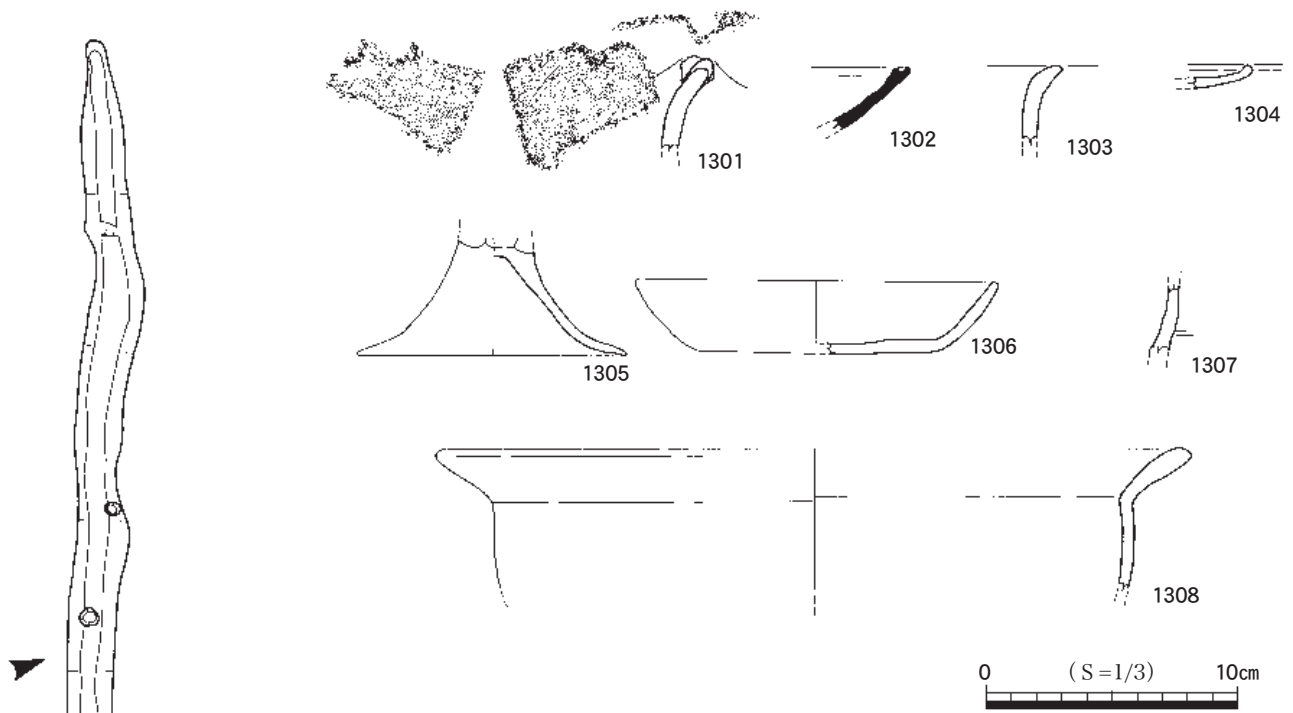
## 性 格 不 明 遺 構

### 3次SX1 (第292図)

3次調査区で検出した楕円形土坑である。最大長4m、最大幅1.3m、深さ25cmを測る。壁面の立ち上がりはやや急である。礫とともに縄文土器、弥生土器、須恵器が混在して出土している。本報告では時期不明として報告する。

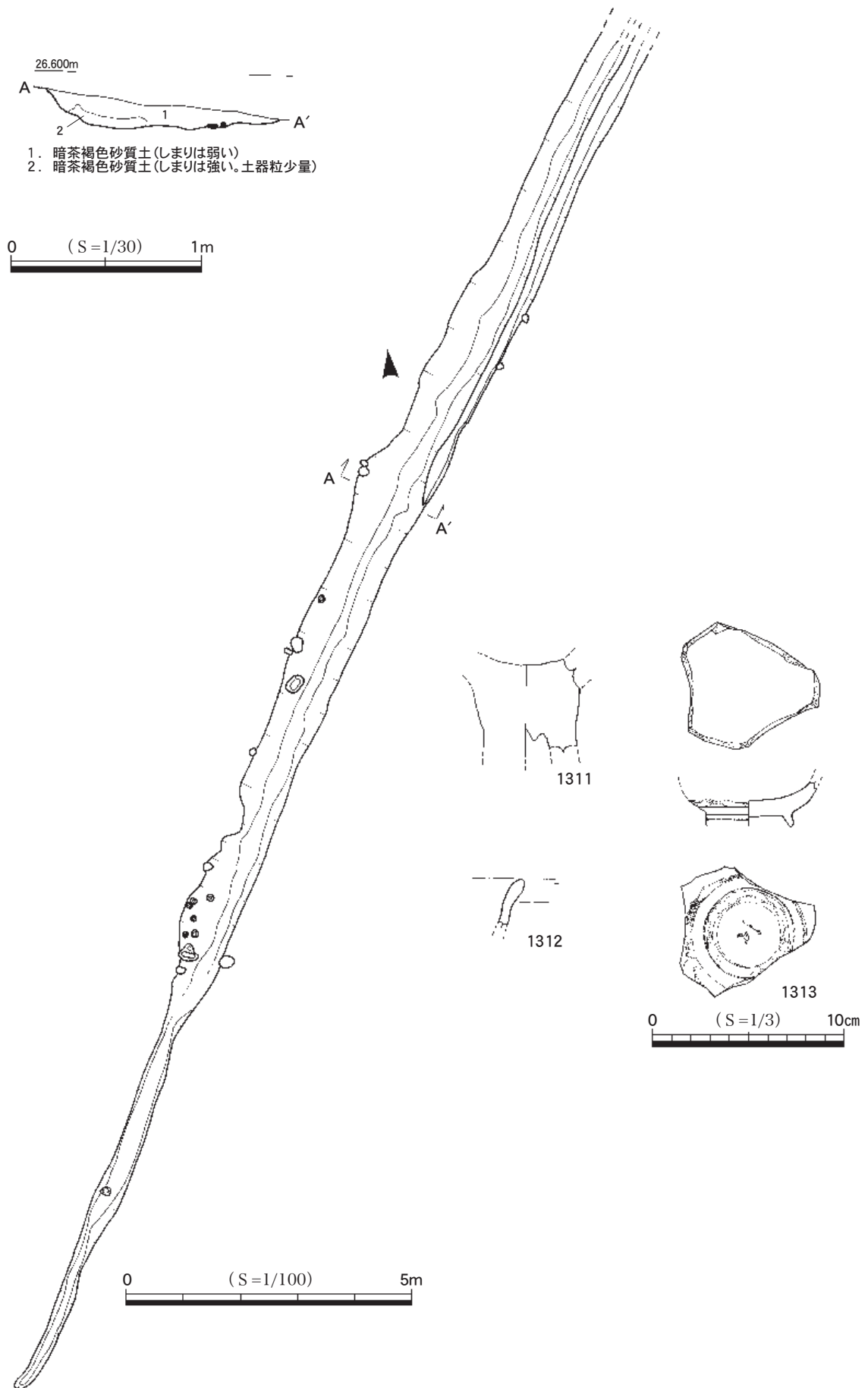
### 出土遺物 (第292・293図)

土器10点を図示した。1314～1318は縄文土器。1314は橋状取手をもつ鐘崎式土器。1315～1317は太郎迫式土器。1318は底部。1319～1321は弥生土器の底部。縦方向のハケ目がみられる。1322は観察表では弥生土器の底部としたが、縄文土器の可能性もある。1323は須恵器で坏蓋の口縁部片。石器は5点を図示した。222は緑泥片岩製の打製石斧。裏面は主要剥離面で、刃部は中程度の剥離をしており、末端がステップ状になっている。表面は中程度の剥離を側面からされており、刃部が小さな剥離で終えている。左側面は節理面がみられ、それを中程度の剥離が切っている。基部破損。223は凝灰岩製の砥石である。表面を使用している。また左上面と下部、左下部に微細な剥離がみられる。224・225は姫島産黒曜石製の石核。224は表面の左側面を打面として剥離し作業面にしており、また上面を頭部調整をして、上から剥離して終えている。裏面も上面から剥離してお

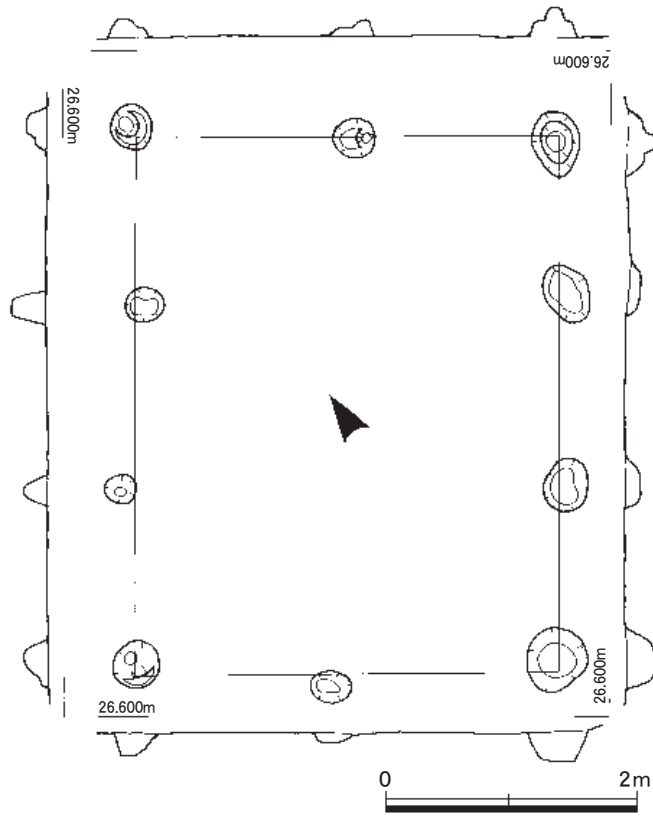


第279図 SD45平・断面・土層図 (S=1/100) (S=1/60)  
出土遺物 (S=1/3)

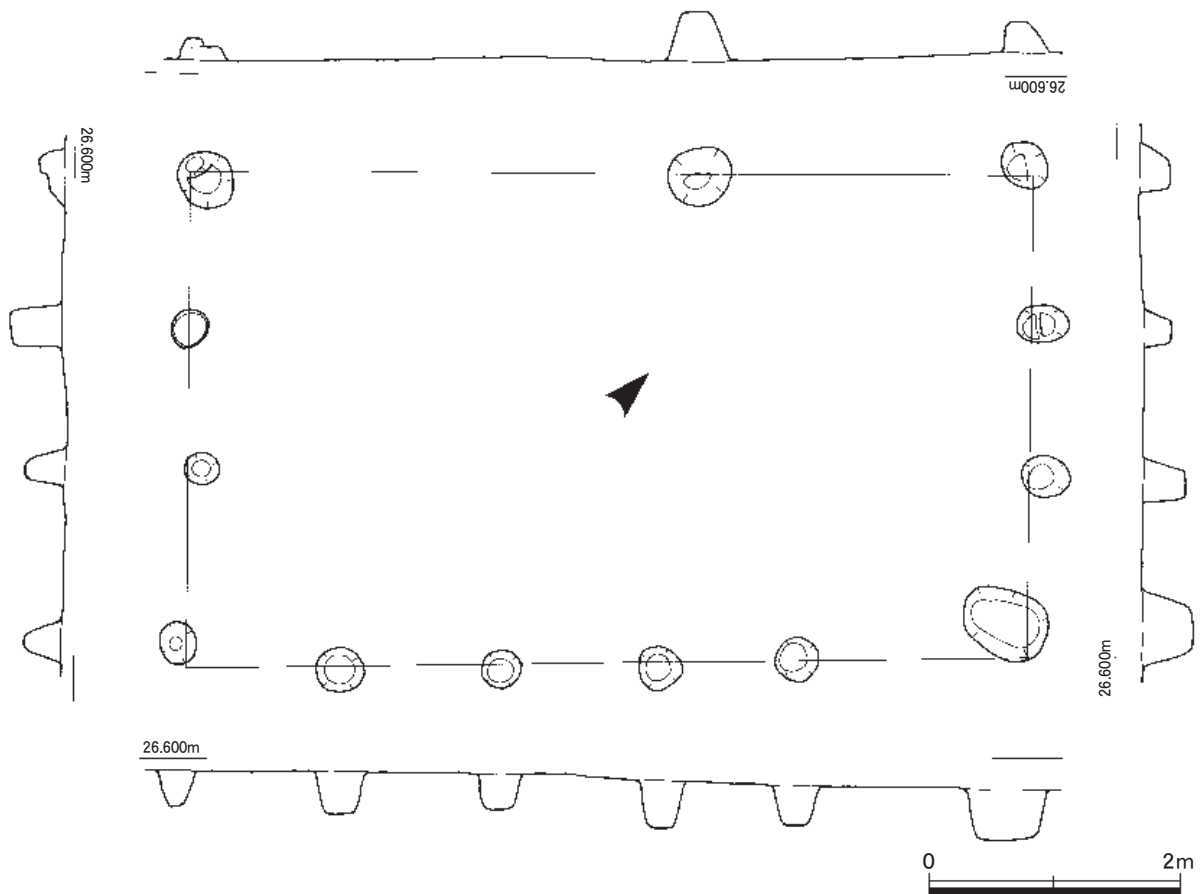
第280図 SD48平面図 (S=1/200)  
出土遺物 (S=1/3 (1309、1310)、S=2/3 (217)、S=1/2 (218))



第281図 SD51平・断面・土層図 (S=1/100) (S=1/30) 出土遺物 (S=1/3)



第282図 3次SB3平・断面・土層図 (S=1/60)



第283図 3次SB5平・断面・土層図 (S=1/60)

り、その際頭部調整をしている。裏面の下部に頭部調整がみられる。225は表・裏面の大きな剥離はそれぞれ右、左からなされ、同一方向からされている。その後、裏面は斜め右から剥離され、最後に表面では上面を頭部調整を行なって、上から打撃を加え剥離している。226は緑泥片岩製の打製石斧。下部には刃部がみられ、細かい剥離を伴う使用痕がみられる。上部破損。刃部のみ残存。

#### SX1 (第294図)

第3調査区L-2で検出した不定形土坑である。最大長4.8m、最大幅2m、深さは未計測のため不明である。

#### 出土遺物 (第294図)

石器1点を図示した。227は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、五角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りが入る。左脚は欠損している。

#### SX2 (第295図)

第3調査区M-9で検出した隅丸方形土坑である。最大長1.7m、最大幅1.2m、深さ32cmの大きさである。壁面の立ち上がりは急である。古代のSK34を切るように構築されていた。底面は炭により黒色に、壁面は被熱のため赤色を呈していた。何らかの物を焼いた遺構と考えられるが性格は不明である。遺物は出土していない。

#### 柵 列

#### SA1 (第296図)

第5調査区G-16付近で検出した柵列状遺構である。長さ4.5m、柱穴間隔は80～104cm、深さ35～42cmを測る。西端は縄文時代のSH24に重複する。東端の柱穴で直径15cmの柱痕跡を確認している。遺物は出土していない。

#### 地層横転 10 (第297図)

第5調査区G-20で検出した不定形土坑である。最大長1.7m、最大幅78cm、深さ18cmの大きさである。壁面の立ち上がりは急である。

#### 出土遺物 (第297図)

石器1点が出土した。228は安山岩製の三稜尖頭器。分厚い幅広剥片を素材とし、表面の左右側面に、裏面から加工を施して整形・先端形成をした後、稜上からも調整を入れて厚みを取り除いている。左右側縁と裏面に若干の使用痕が認められる。

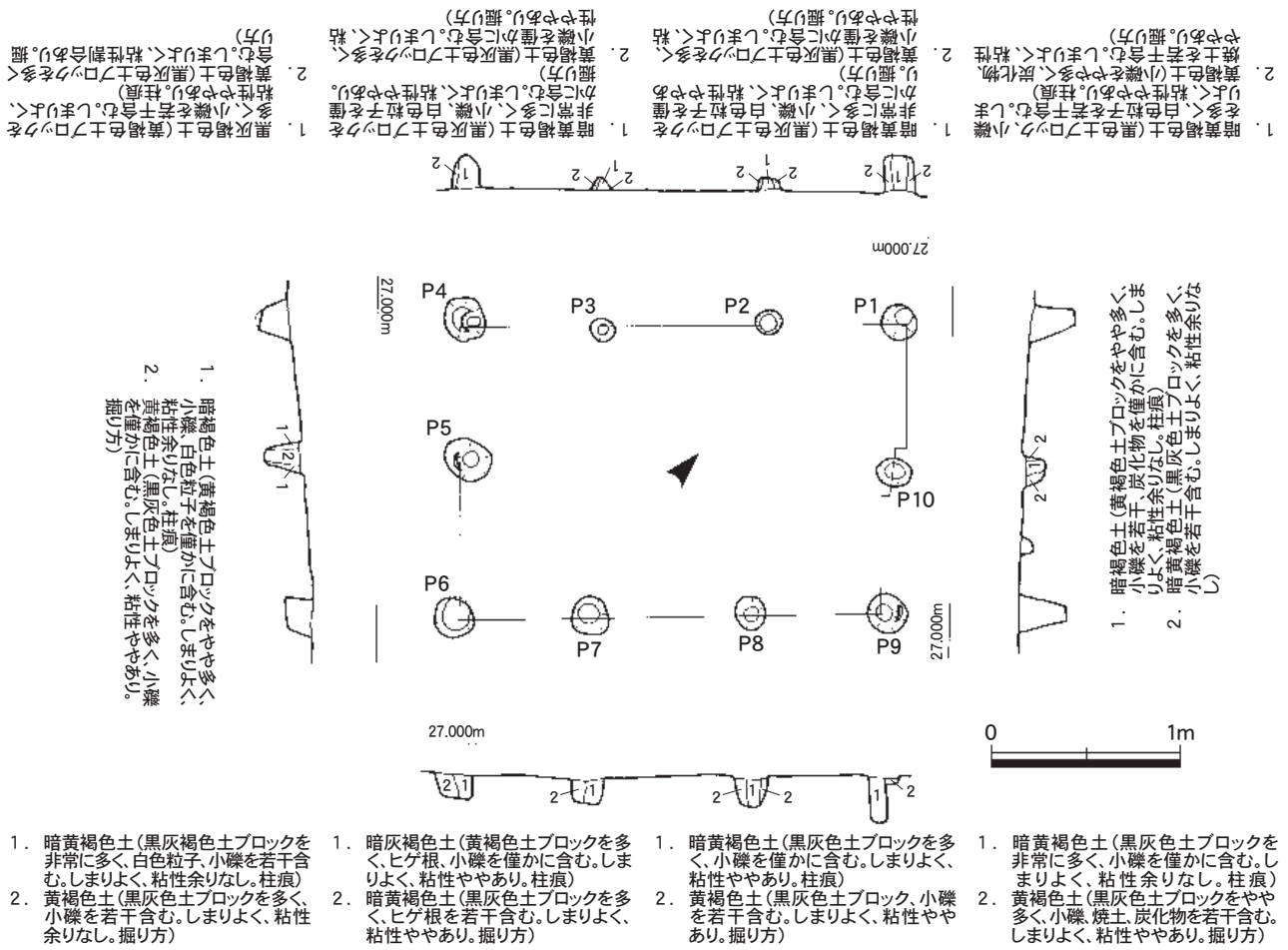
#### 地層横転 11 (第298図)

第5調査区F-17で検出した不定形土坑である。最大長1m、最大幅90cm、深さ26cmの大きさである。壁面の立ち上がりは急である。

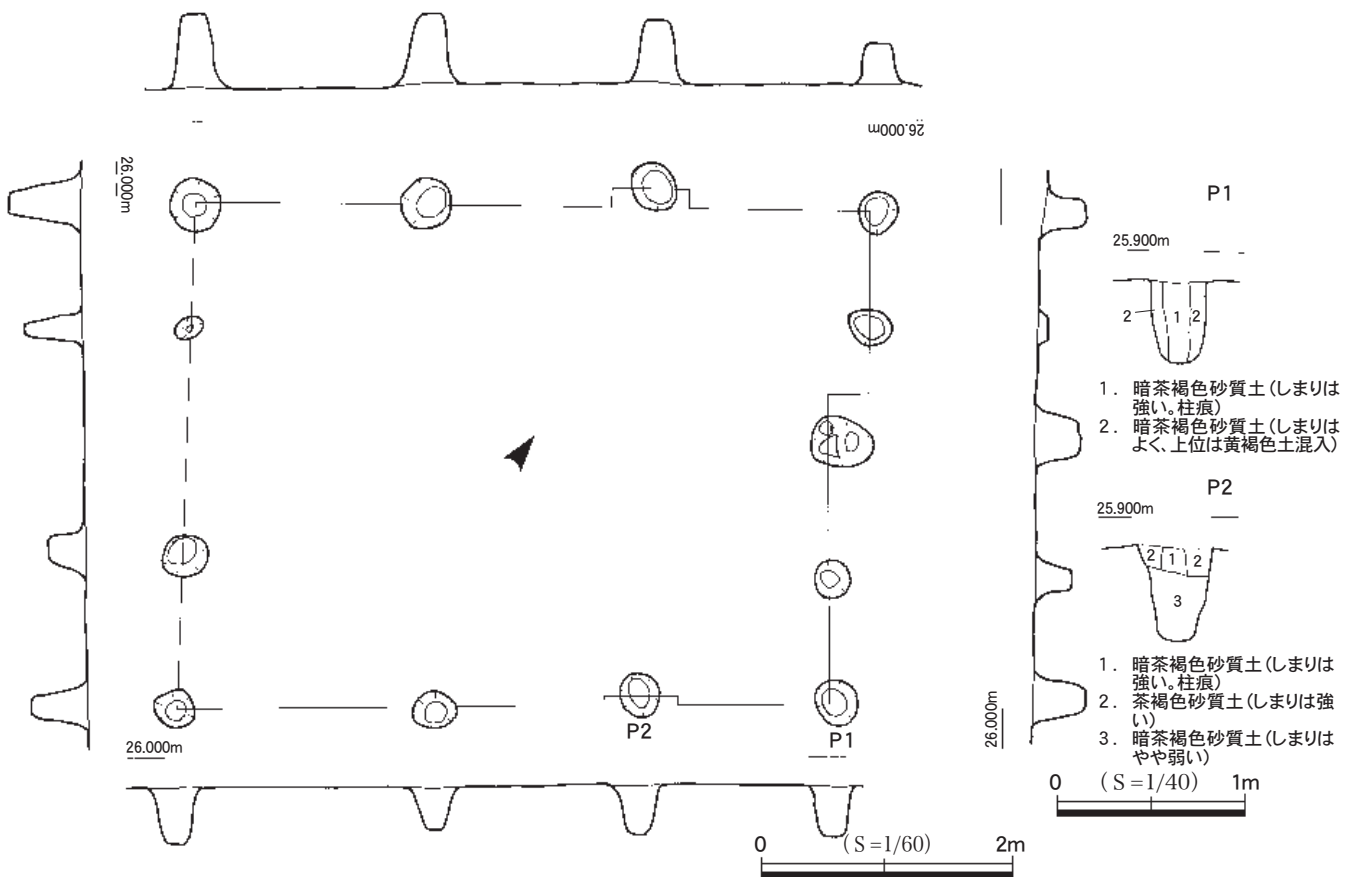
#### 出土遺物 (第298図)

石器2点を図示した。229は姫島産黒曜石製の石鏃。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部に深い抉りが入る。先端を僅かに、左脚を完全に欠損している。230は安山岩製の石錐。表・裏面から周縁部に加工を施して整形・先端形成を行っている。

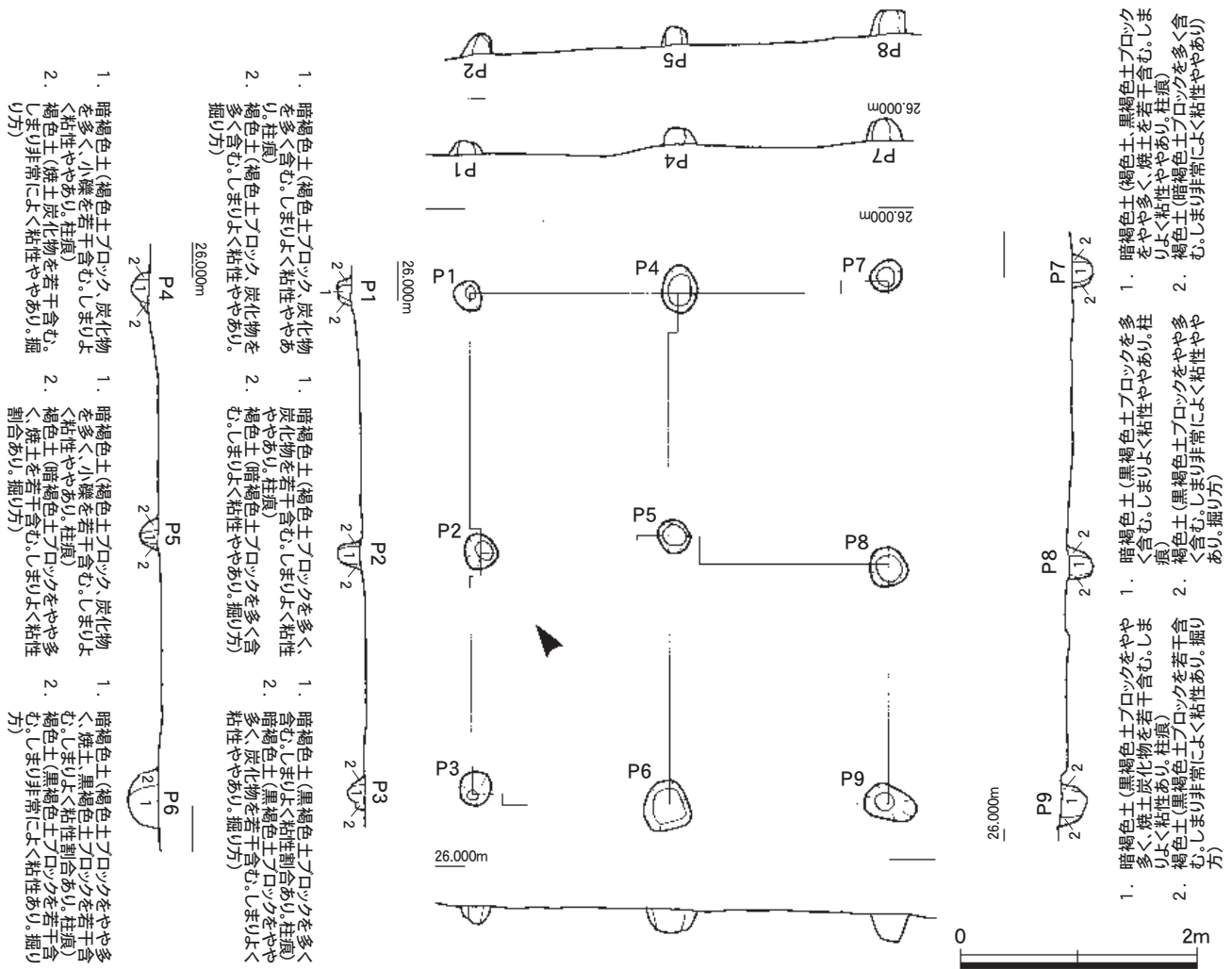




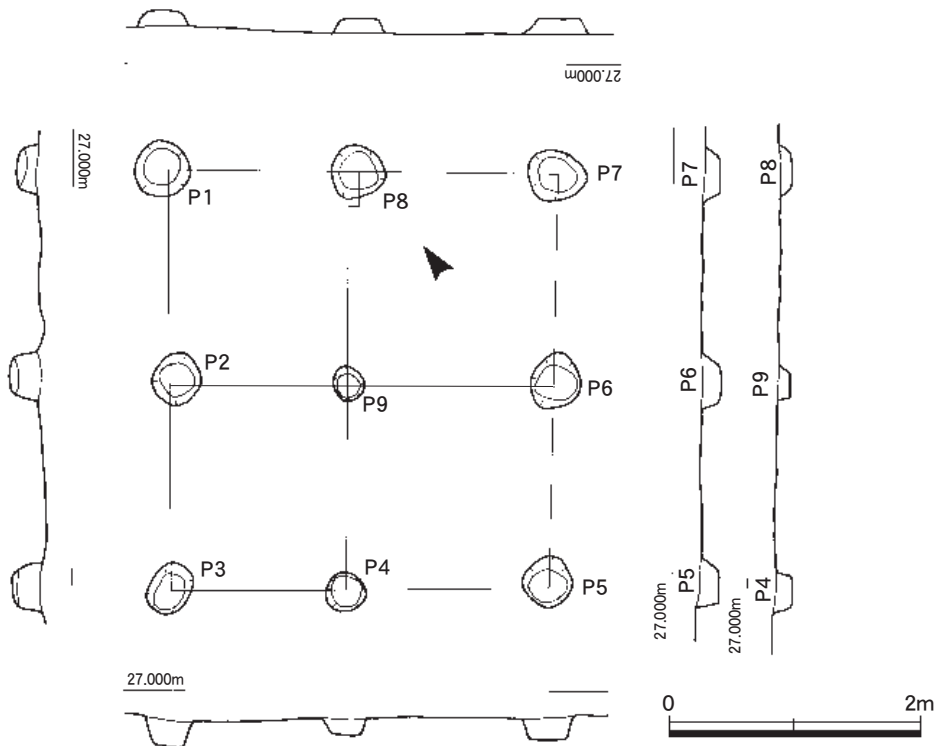
第284図 SB2平・断面・土層図 (S=1/40)



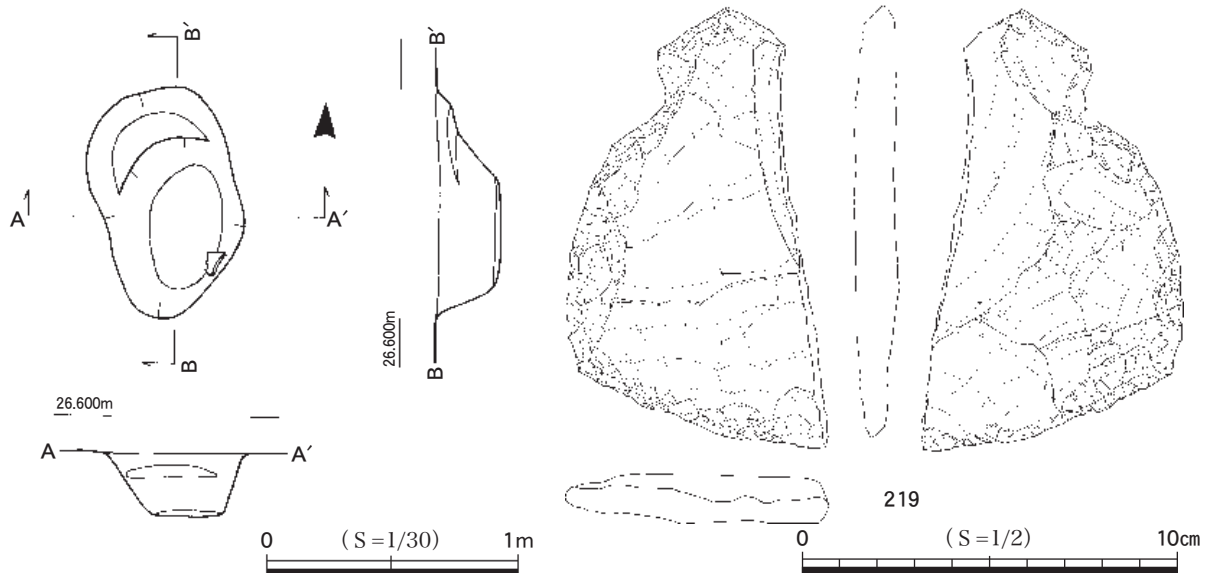
第285図 SB3平・断面・土層図 (S=1/40) (S=1/60)



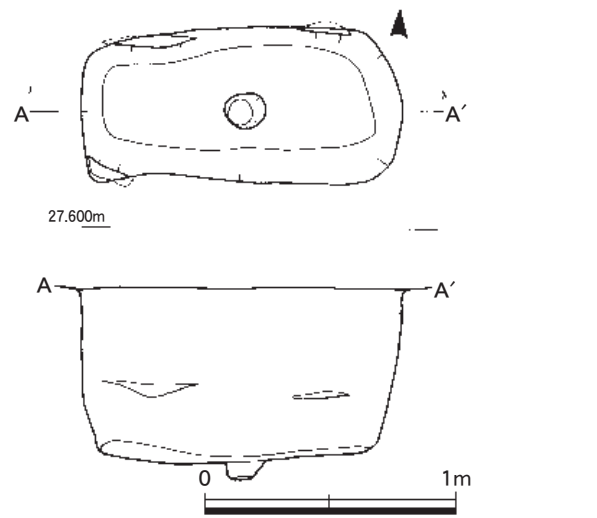
第286図 SB6平・断面・土層図 (S=1/60)



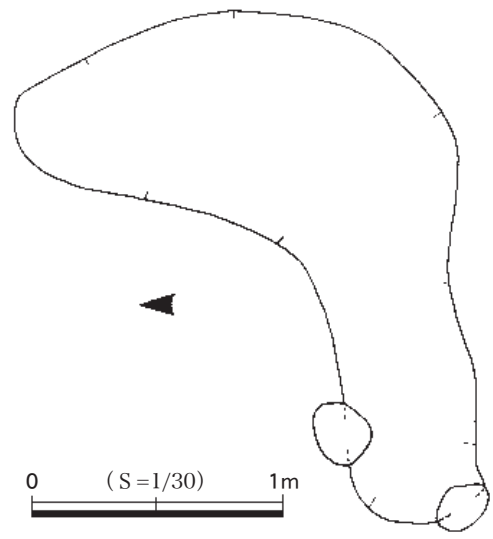
第287図 SB11平・断面・土層図 (S=1/60)



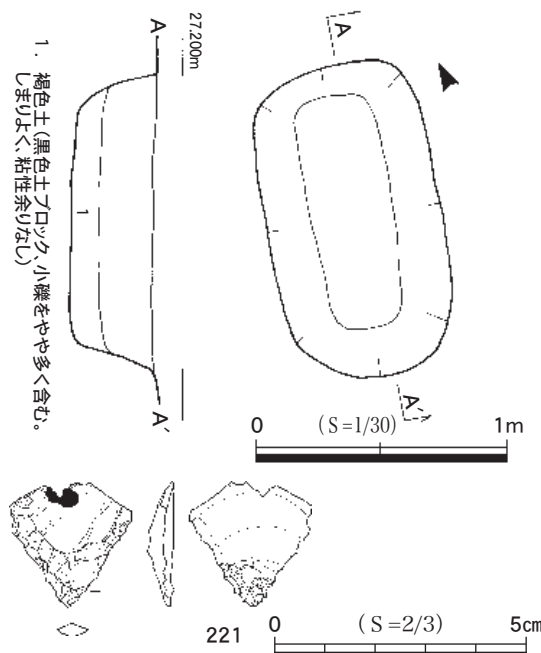
第288図 SK21平・断面図 (S=1/30) 出土遺物 (S=1/2)



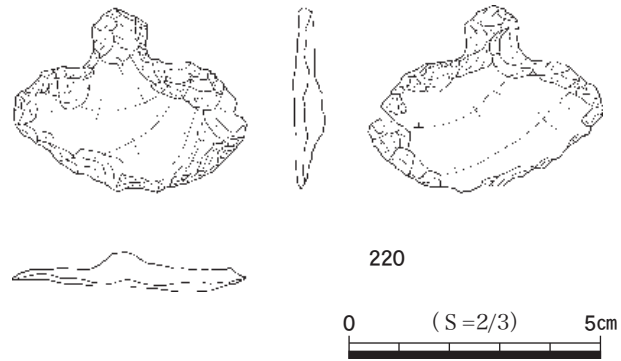
第289図 SK49平・断面図 (S=1/30)



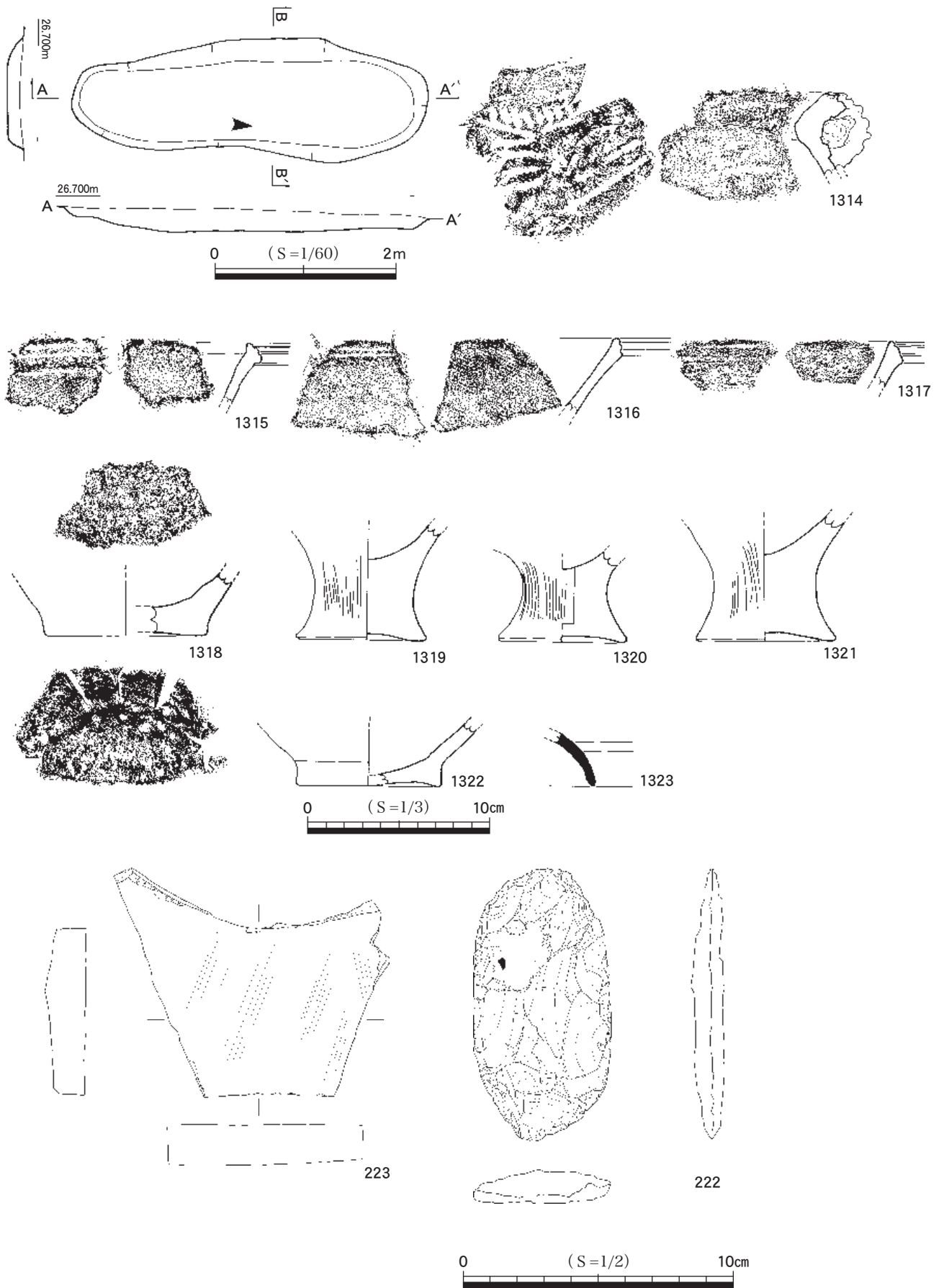
1. 暗褐色土(小礫を割合多く、炭化物を若干含む。しまりよく粘性殆どなし)



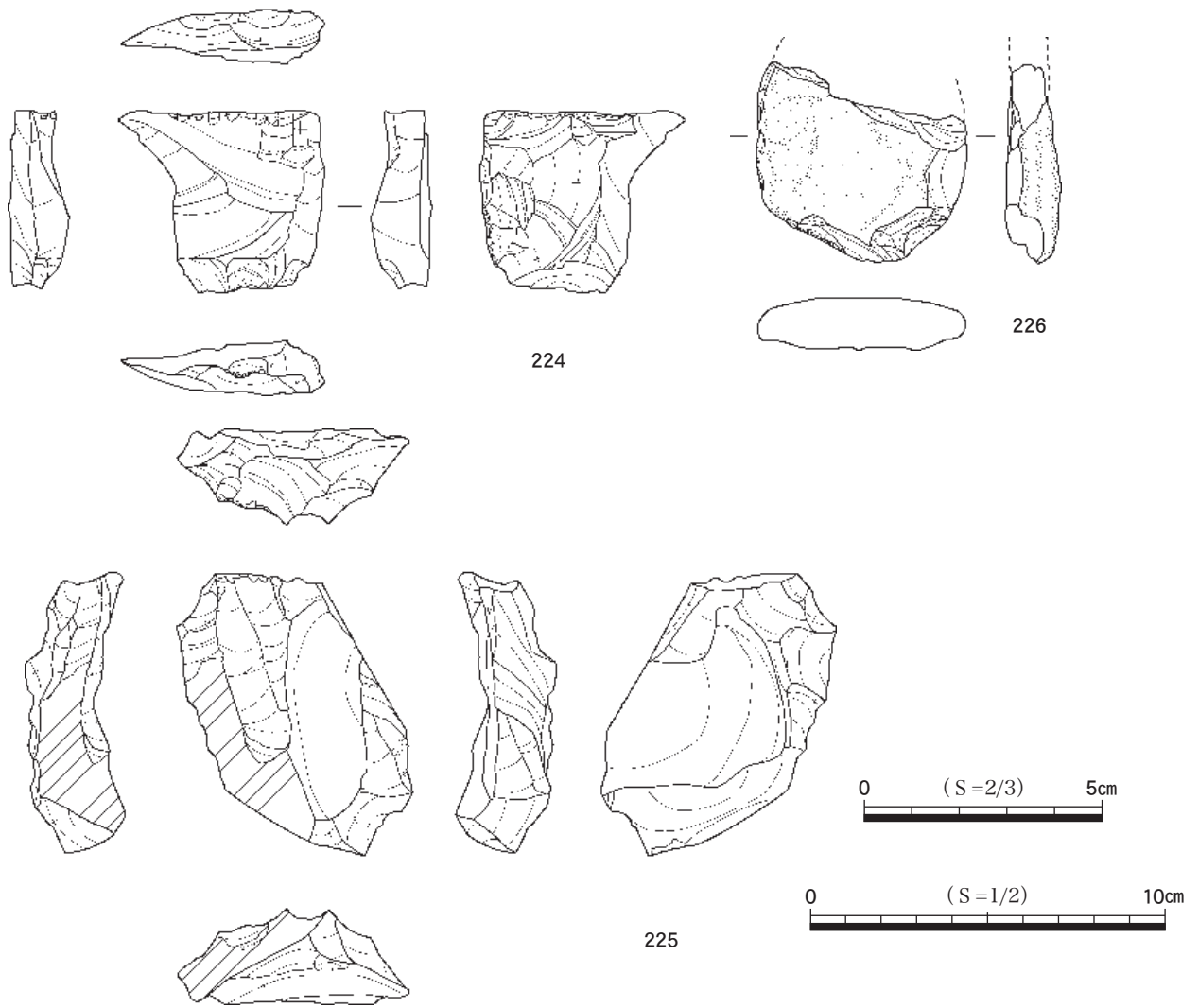
第291図 SK60平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=2/3)



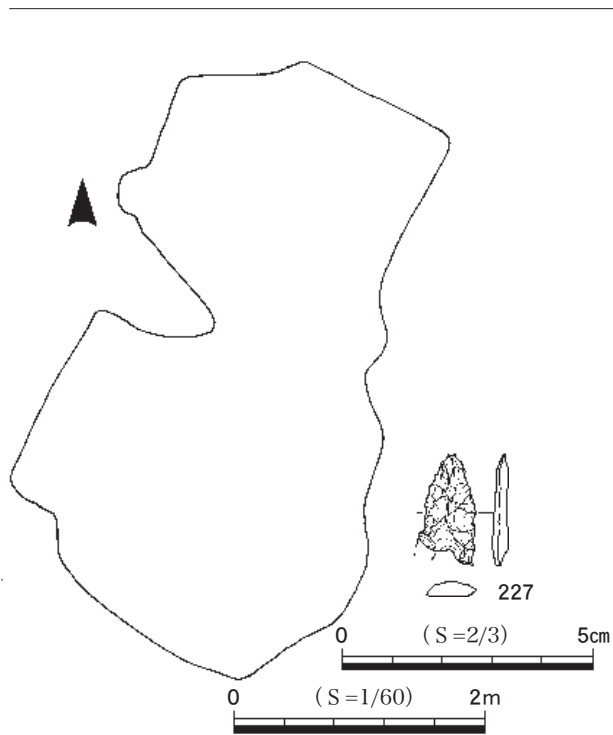
第290図 SK59平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=2/3)



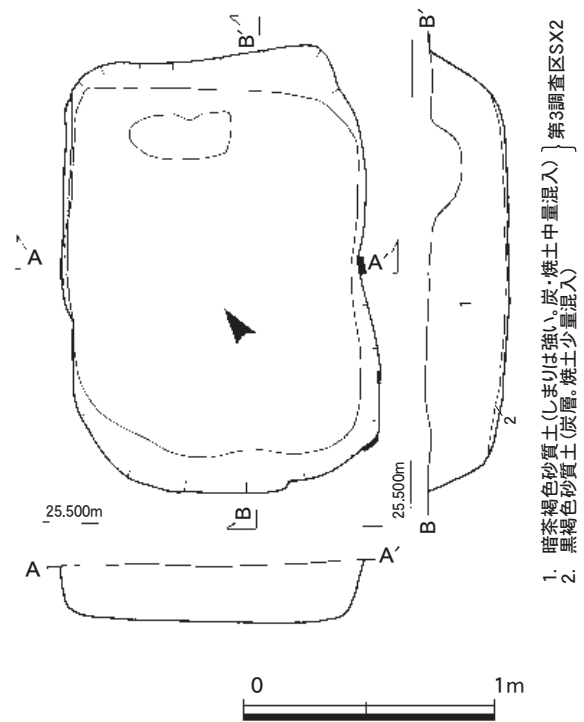
第292図 3次SX1平・断面・土層図 (S=1/60) 出土遺物 (1) (S=1/3 (1314~1323)、S=1/2 (222、223))



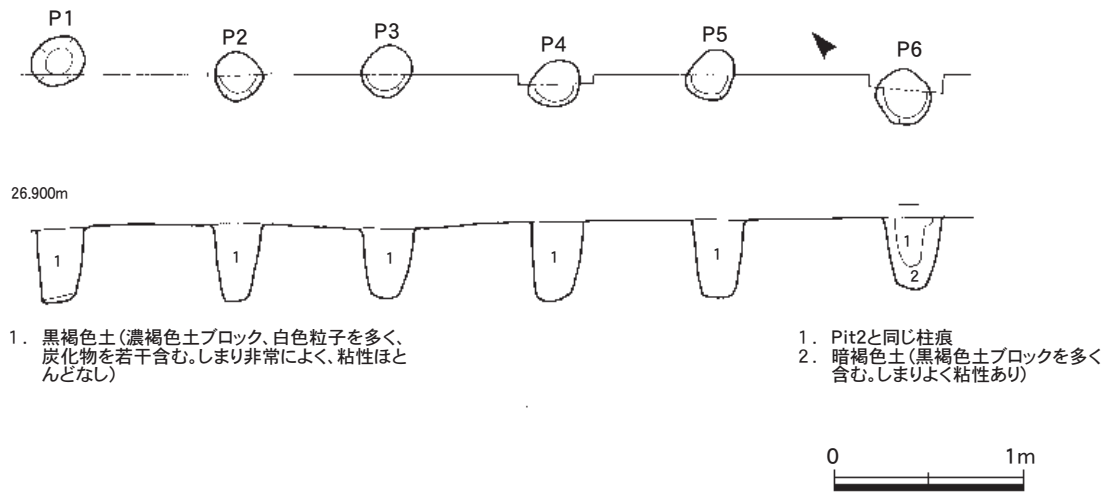
第293図 3次SX1出土遺物(2) (S=1/2 (226)、S=2/3 (224、225))



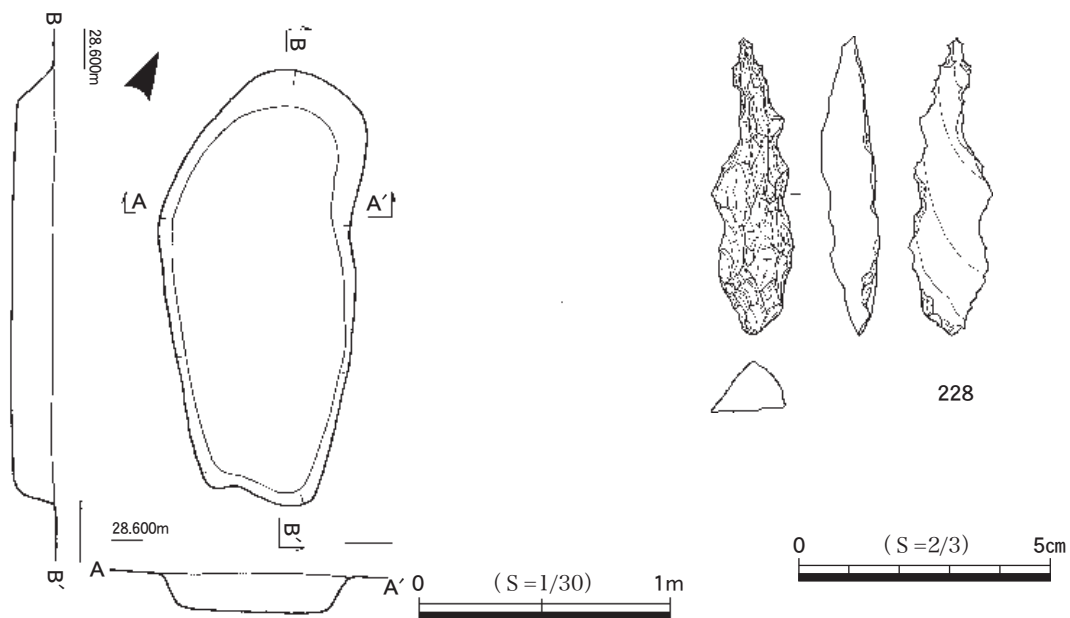
第294図 SX1平面図 (S=1/60) 出土遺物 (S=2/3)



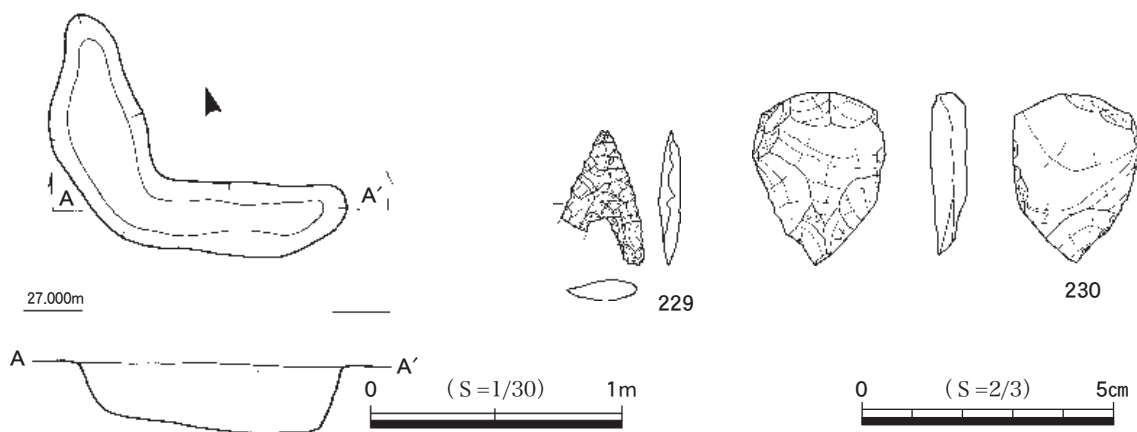
第295図 SX2平・断面・土層図 (S=1/30)



第296図 SA1平・断面・土層図 (S=1/40)



第297図 地層横転 10平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=2/3)



第298図 地層横転 11平・断面・土層図 (S=1/30) 出土遺物 (S=2/3)

## 7. 柱穴出土遺物

ここでは、柱穴より出土した遺物を報告する。(第299～303図)

1324～1336は縄文土器の鉢である。1325・1332は西平式か太郎迫式。1332は磨消縄文とする。1326は口縁部を短く跳ね上げる。1327は鐘崎式の口縁部か。1328は滑石を含む胴部片。1329～1331は鐘崎式の口縁部。1333は渦巻文をもつ鐘崎式の胴部片。1334は底部。1335は鐘崎式土器。最新相か。1336は胴部片。1337～1344は須恵器。1337は端部が外反する坏蓋。坏身の可能性もある。1338・1339・1341は坏身。TK209段階、6世紀末～7世紀初頭の資料。1340は蓋。8世紀中頃の資料であろう。1342は甕の口縁部か。1343は壺の口縁部。ほぼ完形の口縁部のみが柱穴から出土している。1344はフラスコ状を呈する。壺であろうか。1345～1354は土師器。1345は甑。1346～1349は皿。底部をへら切りとする。1350は脚付の坏。観察表では皿としたが坏の方がよい。1351は坏。1352は内外面に煤が付着する。とりあえず壺としておく。1353は底部から延びる脚部と思われる。1354は土錘。1355・1356は埴。観察では土師器としたが黒色土器A類の方がよい。1357は瓦質土器で鍋の口縁部。1358～1360は磁器。1358・1359は白磁の口縁部。1360は同安窯系青磁皿。底部以外に施釉され、内面にへらと点描を描く。山本編年の皿I-2類、12世紀中頃～後半の資料であろう。1361・1362は鉄製品。1361は刀子の中茎と刃部部分。1362は釘。

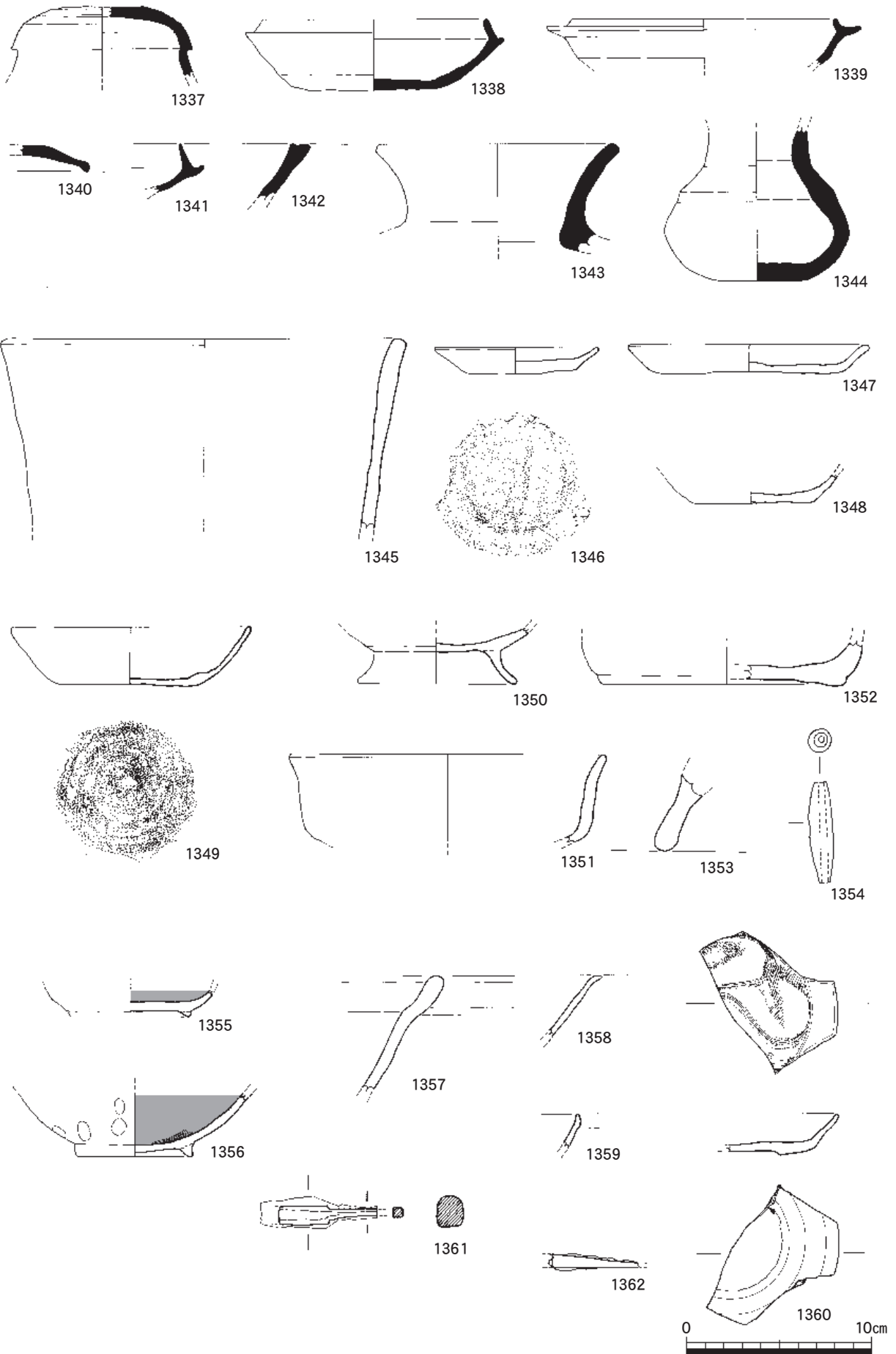
石器は40点を図示した。231～247は石鏃。231～233・235～237・239・240・242・245～247は姫島産黒曜石製、234・238・241はサヌカイト製、244は安山岩製。231は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部にはやや深い抉りが入る。左脚部を僅かに欠損している。232は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、基部にはやや深い抉りが入る。右側縁・両脚は不整形なことから、欠損後にリダクションした可能性が高く、左側縁の形状から、左右に肩が張り出す形状をしていたと推測される。233は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでおり、両側縁には鋸歯縁になるように仕上げられ、基部には浅い抉りが入る。左側縁は若干欠損しており、鋸歯が一部失われている。234は多久産か。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、二等辺三角形に近い形状に仕上げられており、基部には深い抉りが入る。右脚を僅かに欠損している。235は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、両側縁をやや内湾させ、基部に浅い抉りを入れている。先端と左脚を若干欠損している。236は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでおり、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部にやや浅い抉りが入る。先端を僅かに、右脚を完全に欠損している。237は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、基部にやや深い抉りが入る。先端を若干欠損している。238は金山産か。表・裏面にも内奥まで押圧剥離が及び、基部にも抉りが施されている。左脚を欠損している。239は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでおり、基部にやや深い抉りが入る。先端を若干、右脚を完全に欠損している。240は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、五角形に近い形状をして、基部に浅い抉りが入れている。先端を欠損している。241は多久産か。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部に深い抉りが入る。先端を僅かに、右脚を完全に欠損している。242は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部に浅い抉りが入る。243は腰岳系黒曜石製。内奥部にまで押圧剥離が及び、脚部の上に最大幅を持ち、脚部は若干内側に曲る。先端を僅かに、右脚を完全に欠損している。244は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈する。やや広い抉りが入り、先端と右脚を僅

かに欠損している。245は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、先端から若干下がった場所に両肩が張り出してから、脚部が外湾して広がっており、深い抉りも入れられている。246は未成品で裏面は内奥部にまで押圧剥離が及び、右脚はほぼ整形が進んでいるが、表面中央は素材面が大きく残り、左脚部は整形途上で、先端が折れた時点で遺棄されたと考えられる。247は丁寧な押圧剥離が表・裏面の内奥部にまで及び、二等辺三角形に近い形状を呈する。先端を僅かに、左脚を完全に欠損している。248～250は姫島産黒曜石製の石錐。248は小型の縦長に近い剥片を素材とし、主に裏面の周縁に加工を施して整形・先端形成を行っている。先端を僅かに欠損しており、上端には手擦れ痕が認められる。249は裏面には丁寧で平坦な加工を及ぼした後、表面の左右側縁の下半に急斜度な調整で先端を形成している。先端は若干欠損しており、基部側の上端には手擦れ痕が認められる。250は左側縁の下半部に微細な加工を施して、先端を形成している。先端を欠損し、基部の上端には手擦れ痕が認められる。251は金山産と考えられるサヌカイト製の横刃削器。幅広剥片を素材とし、素材の末端に表・裏面から加工を施して刃部を形成している。刃部には使用痕が顕著に認められ、基部を欠損しており、基部の残った部分には手擦れ痕がみられる。252は姫島産黒曜石製の搔器。幅広剥片を素材とし、素材の打面に近い部分に急斜度な加工を施して刃部を、素材の末端を折断して基部を形成している。刃部には使用痕が、基部には手擦れ痕が顕著に認められる。253・254は姫島産黒曜石製の削器。253は幅広剥片を素材とし、右側縁に裏面から加工を施して刃部形成している。使用痕が顕著に認められる。254は抉入削器。表面の右側部を裏面の左側部をノッチ状に剥離して刃部を形成している。255は安山岩製の削器。縁辺部に細かな調整を施す。256は流紋岩製の使用痕剥片。複剥離打面を有する縦長状の剥片を素材とし、右側縁の大部分に使用痕が顕著に認められる。左側縁には大きなガジリが生じている。257は金山産と考えられるサヌカイト製の縦長の石匙。横長剥片を素材としており、周縁部にのみ加工を施して整形しており、下端は若干欠損している。258は腰岳系黒曜石製の搔器。刃部は細かい調整で作られている。装着痕が上部端部にみられる。259・260は石核。259は腰岳系黒曜石製。上端の単剥離打面を利用し、正面を作業面として剥離している。裏面には大きく自然面が残る。260は姫島産黒曜石製。右側面を打面に、正面右半を作業面として剥離→上端面を打面に、正面を作業面として剥離している。261は姫島産黒曜石製の石核。裏面は左方向からの打撃により、作業面としており、上面から左側面と右側面を剥離しており、その後表面と右側面から剥離して、最後に上部を頭部調整して剥離を行っている。262は安山岩製の打ち欠き石錘。方形に近い扁平な自然礫を素材とし、裏面から上下端に加工を施して抉りを形成している。263は安山岩製の扁平打製石斧。表・裏面の内奥部にまで平坦な加工が及んだ後、周縁部に急斜度な調整を施して整形している。刃部と基部には若干の使用痕が認められる。264～266は緑泥片岩製の磨製石斧。264は少なくとも、表・裏面、左・右側面の4つの研磨の単位が認められる。表・裏面ともに磨き残しによる加工痕が若干残っている。刃部は欠損の後、打製によって再生している。265は表面・左右側面・基部上端という少なくとも4面の研磨単位が認められる。表面には若干の磨き残しによる加工痕が見られ、刃部を欠損している。全面の赤化から使用後に被熱したと考えられ、裏面を欠損し、表面に剥落が生じている。266は撥状に整形されたもので、左右側面は表・裏面からの研磨で仕切られ、両刃に形成されている。表面は刃部付近を、裏面は基部付近を欠損しており、使用痕・装着痕が顕著に認められる。鑿状に使用されたか。267・268は角閃石安山岩製の磨石。267は円形に近い形状の自然礫を利用し、全周縁に使用によると考えられる磨痕と潰れ痕が顕著に残る。268は楕円形の自然礫を利用し、全周縁に使用によると考えられる磨痕と潰れ痕が顕著に残る。

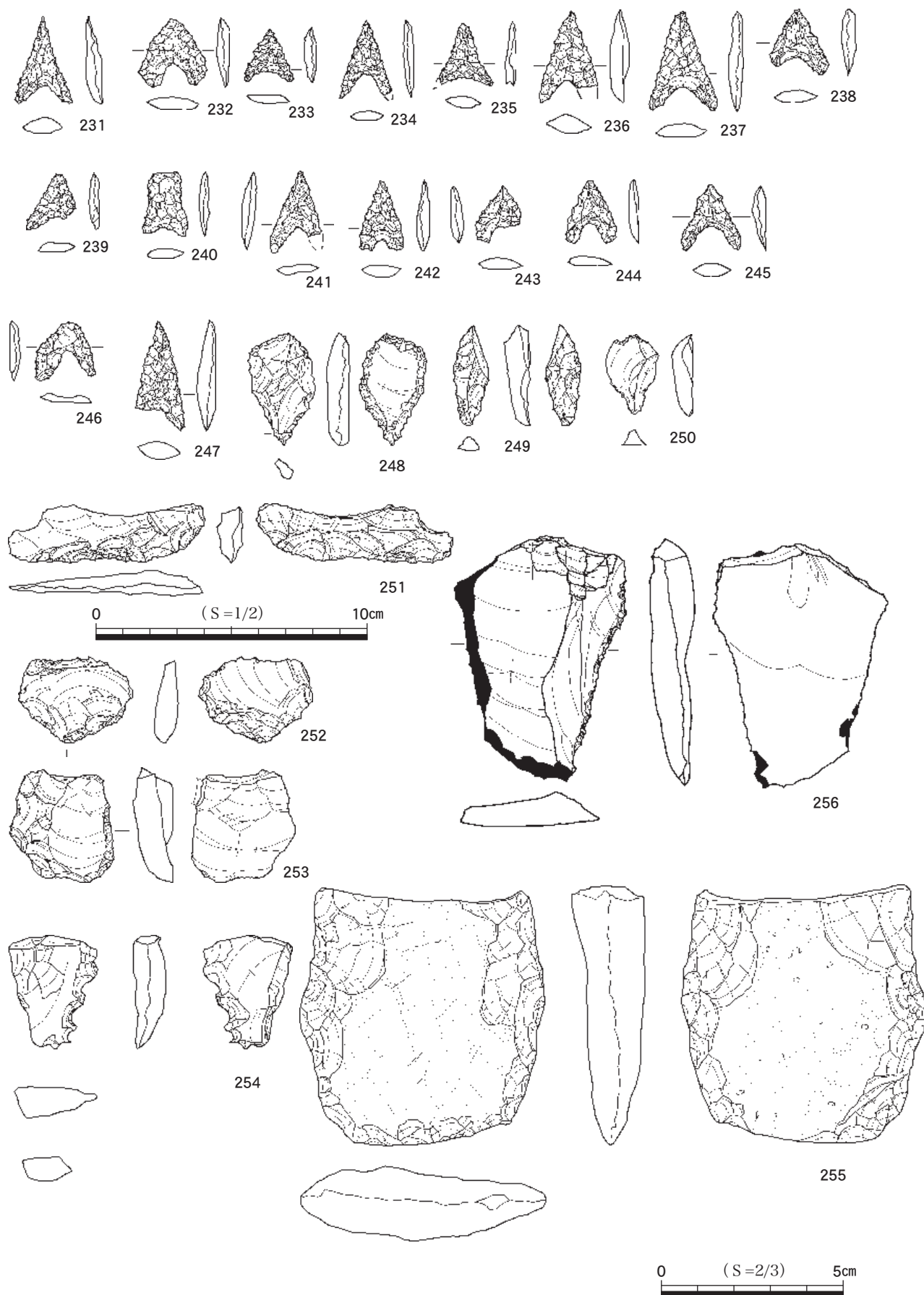




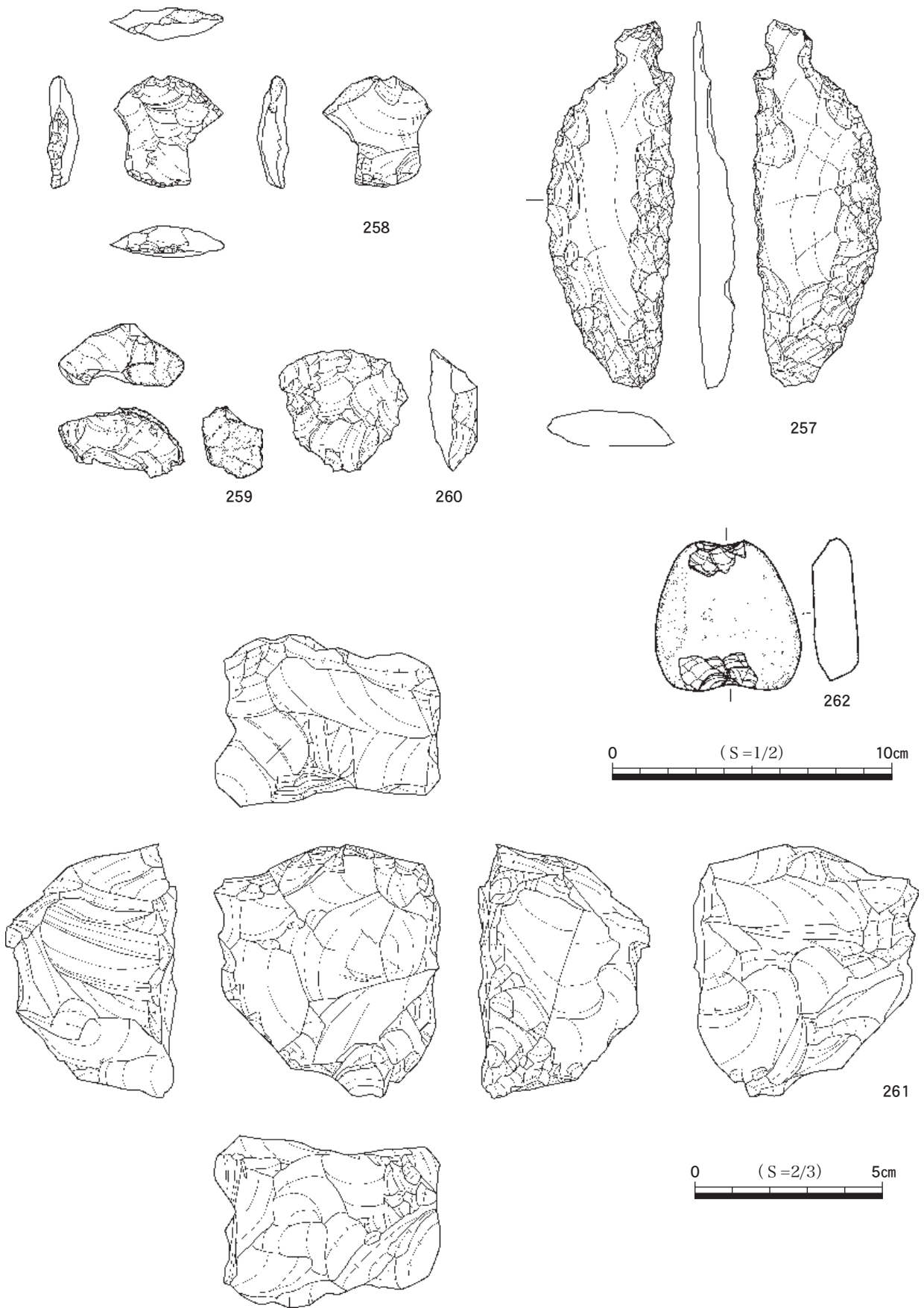
第299図 柱穴出土遺物 (1) (S=1/3)



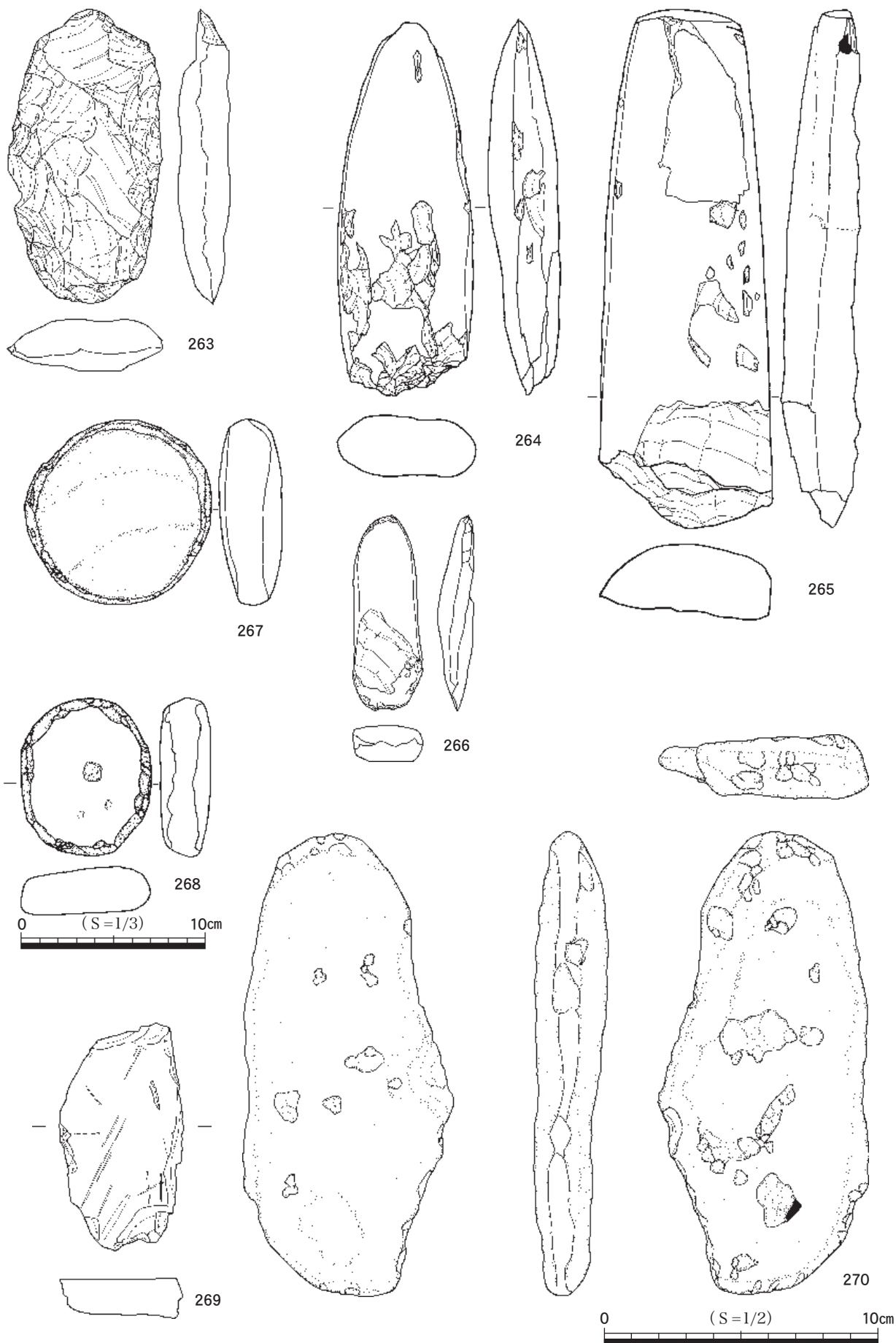
第300図 柱穴出土遺物(2) (S=1/3)



第301図 柱穴出土遺物(3) (S=1/2 (251)、S=2/3 (231~250、252~255))



第302図 柱穴出土遺物(4) (S=2/3 (257~261)、S=1/2 (262))



第303図 柱穴出土遺物 (5) (S=1/2 (263~266、269、270)、S=1/3 (267、268))

269は角閃石安山岩製の砥石。表面は研磨により全体的にツルツルしている。また明確な線状痕が主に斜めにみられる。270は角閃石安山岩製の台石。表面と側面に敲打痕が残る。

## 8. 一括遺物

表土剥ぎや遺構検出の際に出土した遺物について報告する。(第304～308図)

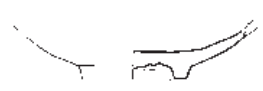
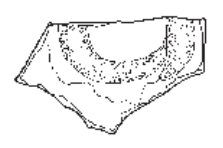
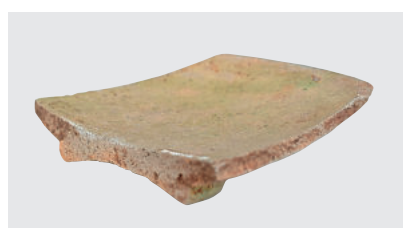
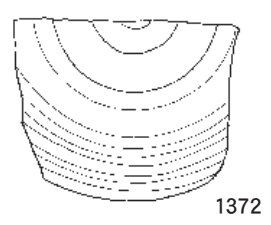
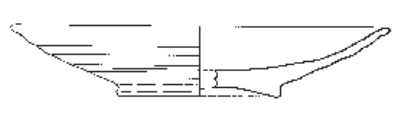
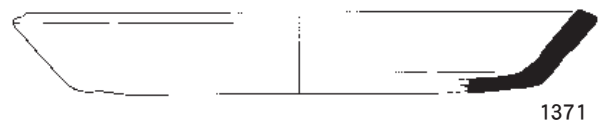
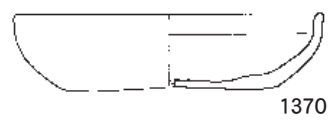
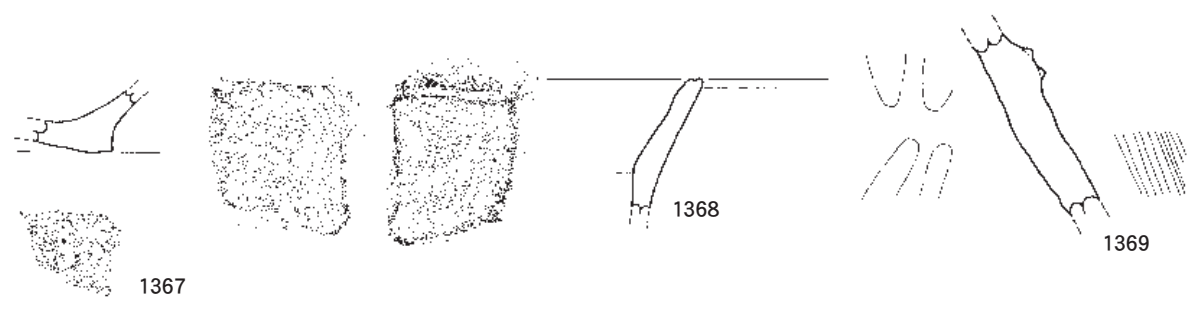
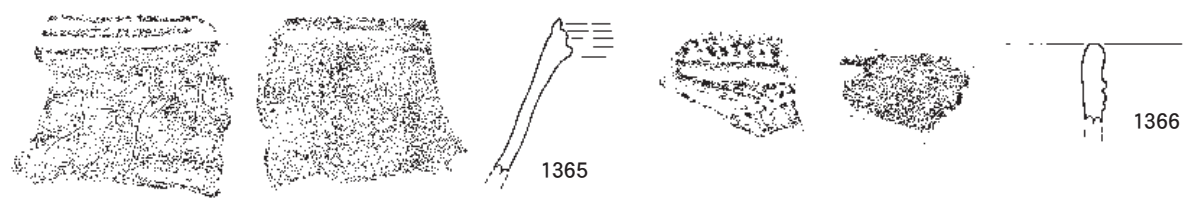
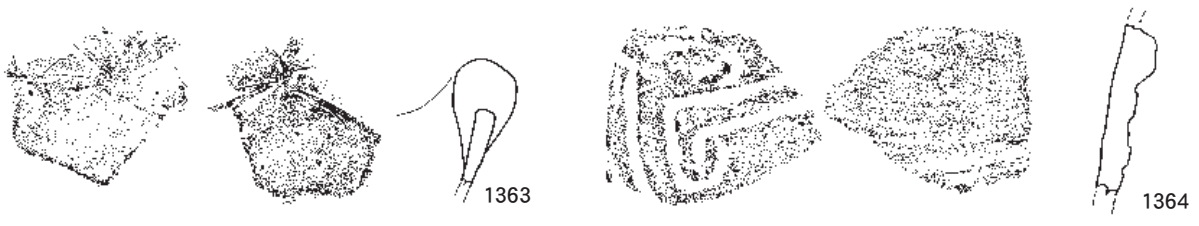
1363～1368は縄文土器。1363～1368は鉢。1363は石町式の縦位隆帯部。1364は口縁部を渦文風に施文する。1365は太郎迫式の口縁部。1366は胎土に滑石を含み光沢があり、口縁部に半裁竹管文を施文する。1368は口唇部にわずかに凹みを有す。1369は弥生土器の甕か壺の胴部。小さな突帯を2条巡らす。1370は土師器の埴。口縁部が直立する。1371は須恵器。皿か。1372～1374は陶磁器。1372は京都産の緑釉陶器皿。口縁部が緩やかに外反し、円盤状に高台を削り出す。明るい釉薬をもつ良好なもので、量産されていく中では古手のもの。9世紀中頃の所産と考えられる。1373は肥前系磁器碗。観察表の青磁碗は誤り。1374は磁器の小皿。紅皿であろうか。

石器は79点を図示した。271・272は腰岳系黒曜石製のナイフ形石器。271は先端部が折れており、下端部は装着により、折れてからリダクションを行っている。272は小型で基部加工を行い、二側縁加工を施している。先端部・基部欠損。273～312は石鏃。273・275・276・278～280・282・285・286・288～290・292～310は姫島産黒曜石製、274・277・284・287・291はサヌカイト製、281・311は腰岳系黒曜石製、283は姫島産黒曜石製、312は目のう製。273は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでいるが、左側縁付近の厚みを取り切れておらず、基部には浅い抉りが入る。先端と右脚部を僅かに欠損している。274は金山産か。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、基部にはやや深い抉りが入る。先端を完全に、右脚を僅かに欠損している。275は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状に仕上げ、基部に浅い抉りが入る。先端の右脚を若干欠損している。276は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及び、正三角形に近い形状に整形され、やや浅い抉りが入る。左脚を僅かに欠損している。277は多久産。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、正三角形に近い形状を呈し、基部にやや深い抉りが入る。先端と右脚を若干欠損している。278は幅広剥片を素材とし、周縁部にのみ加工を施して正三角形に近い形状に仕上げている。先端と左脚を僅かに欠損している。279は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部にやや深い抉りが入る。先端・右脚・右側縁上半に欠損が認められる。280は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、逆V字状に近い形状に仕上げられており、基部には深い抉りが入る。281は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部に深い抉りが入る。先端と左脚を欠損している。282は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、基部にはやや深い抉りが入る。先端は欠損後にリダクションしたようだが、両側縁とも内湾しており、精美ではない。283は正三角形に近く、基部には浅い抉りが施されている。裏面は丁寧な押圧剥離が為されているが、表面はやや粗く、素材の主要剥離面の一部が残る。284は金山産。表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、基部にやや深い抉りが入る。右脚は欠損後にリダクションしたと考えられる。285は表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでおり、二等辺三角形に近い形状に仕上げられ、基部にやや深い抉りが入る。先端を僅かに欠損している。286は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、左半の厚みが若干残るが、二

等辺三角形に近い形状に仕上げられている。先端と右脚を若干欠損している。287は多久産か。表・裏面に押圧剥離が内奥部まで及んでいる。先端と右脚を若干欠損している。288は未成品。表面は全面に、裏面は素材面の残る中央部を除いて、押圧剥離が及んでおり、基部にも浅い抉りが入るが、厚みを取りきれなかったからか、製作を放棄したようで、全体的に歪である。289は縦長に近い剥片を素材とし、表・裏面の周縁部に、表面は急斜度の、裏面は平坦な加工を施して整形している。先端を僅かに欠損している。290は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、左右側縁は内湾し、基部にやや深い抉りが入る。先端と右脚を欠損しており、左脚はリダクションしている。291は多久産。表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでおり、二等辺三角形に近い形状に仕上げられており、基部にやや深い抉りが入る。左脚を若干欠損して、リダクションしている。292は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及び、二等辺三角形に近い形状を呈し、やや深い抉りが入る。先端を僅かに、右脚を完全に欠損している。293は表・裏面とも押圧剥離している。294は表・裏面とも周りに細かい押圧剥離が施されている。裏面に主要剥離面がみられ、素材の面が残っている。295は周りを押圧剥離している。ノッチは浅い。先端部欠損。296は周りを押圧剥離している。左脚部欠損。297は未成品。周りを押圧剥離している。凹み部は浅くしている。298も未成品。周りを押圧剥離している。裏には主要剥離面がある。299は周りを粗く押圧剥離している。先端部と右脚部欠損。300は表・裏面に押圧剥離を内奥部にまで施しており、先端を欠損しているが五角形に近い形状を呈していたと考えられ、基部にも抉りがみられない。301は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、二等辺三角形に近い形状にし、基部に浅い抉りを入れている。先端・左脚を僅かに欠損している。302は未成品。やや厚い幅広剥片を素材とし、表・裏面の周縁部に加工を施して細かな整形を行い、基部への抉りも始めているが、表・裏面の中央には素材の面が残る。基部付近の厚みを取りきれなかったためか、その時点で製作を中断している。303は未成品。幅広剥片を素材とし、表・裏面の左側縁を主体的に加工を施し、基部の抉りも入れ始めているが、先端を欠損したからか、左半の厚みを取り切れなかったかで製作を放棄しており、裏面の左半は素材の面が大きく残る。304は未成品。幅広剥片を素材とし、表面→裏面の順で周縁部に浅い加工を施して、三角形に近い形状に整形すると共に基部に浅い抉りを入れている。先端が折れた時点で製作を放棄している。305は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、五角形に近い形状を呈し、浅い抉りが入る。先端は弧状となっており、欠損後のリダクションによると考えられる。306は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、正三角形に近い形状に仕上げられており、基部にはやや浅い抉りが入る。先端の若干の歪さと左脚の短さから、両箇所は欠損後にリダクションされていると考えられ、右脚は僅かに欠損している。307は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及ぶが、裏面は平坦で、表面は盛り上がり、断面がやや歪である。先端・左脚を若干欠損している。308は表・裏面の内奥部にまで押圧剥離が及んでおり、五角形に近い形状に仕上げられており、基部にはやや深い抉りが入る。但し、両肩の張り出す箇所が違っており、右側縁の欠損時にリダクションしたためと考えられ、右脚も左脚に比して細くなっている。309は幅広剥片を素材とし、表面は全面に加工が及んでいるが、裏面は基部の抉り部分にのみ調整が施されている。表面への加工も押圧剥離ではないため、平坦化しておらず、分厚い仕上がりとなっている。先端を若干欠損している。310は未成品。ポジティブの主要剥離面が裏にみられ、押圧剥離を周りにしている。右半欠損。311は小型の縦長剥片を素材として、表・裏面の内奥部にまで丁寧な押圧剥離が及んでいるが、裏面中央に素材の面が一部残る。両肩を張り出した下部を若干内湾させているが、五角形に近い形状を呈する。312はロケット鏃。表・裏面の内奥部にまで

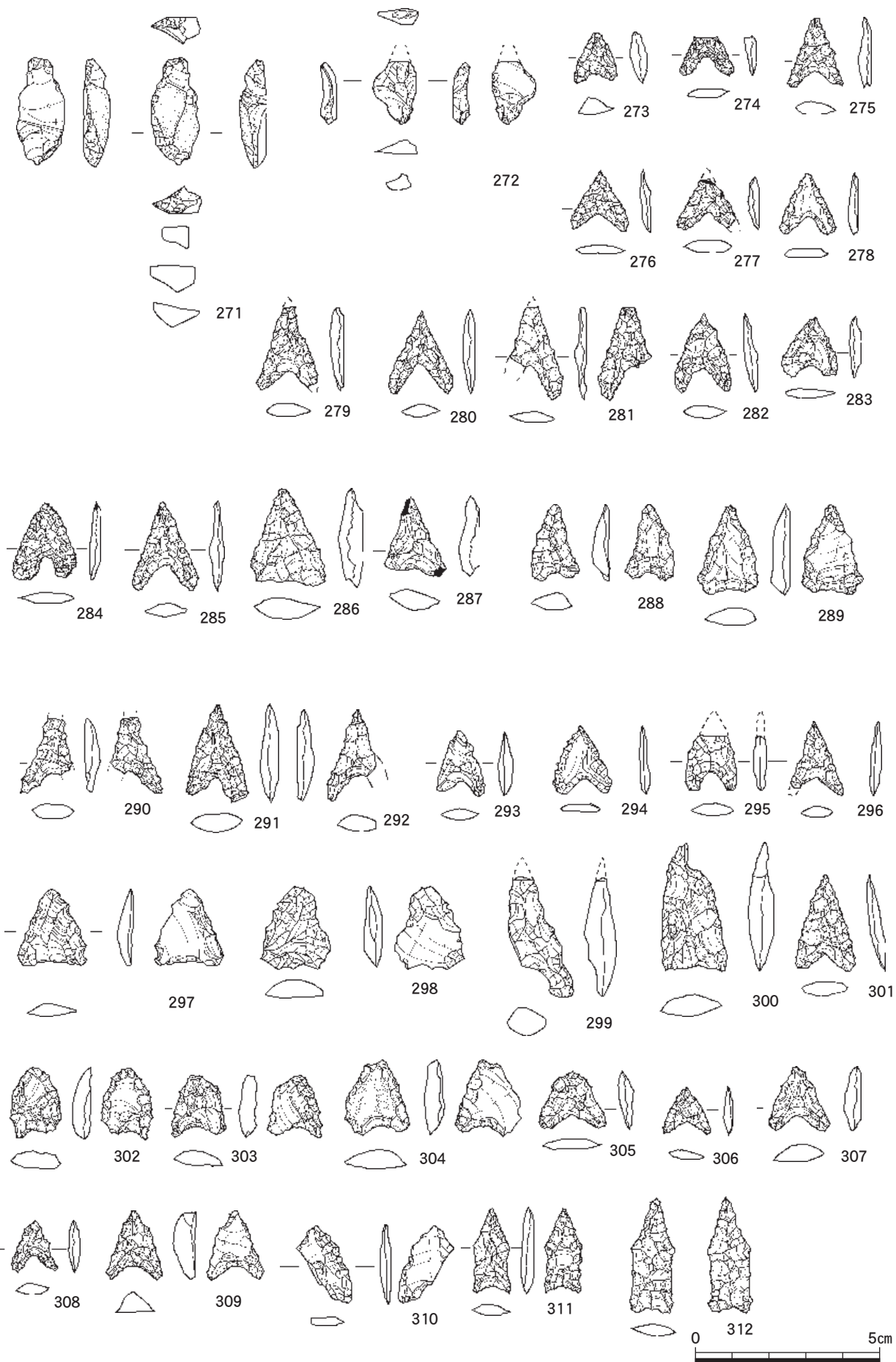
丁寧な押圧剥離が及び、中央に近い位置に両肩が張り出し、基部に浅い決りが入り、五角形に近い形状を呈する。先端を僅かに欠損している。313～319は石錐。313・314～316・318・319は姫島産黒曜石製、317はサヌカイト製。上端が折れた幅広剥片を素材とし、左側縁には裏面から、右側縁には表面から加工を施して先端を形成している。先端を欠損しており、上端には手擦れ痕が若干認められる。314は表・裏面の周縁部に急斜度な加工が施され、整形・先端形成を行っている。先端を若干欠損している。315は錐部が両端の先端部にみられ、細かく調整されている。316はやや分厚い幅広剥片を素材とし、左右側縁に折断に近い急斜度な加工を施した後、細かな調整を施して先端を形成している。先端を若干欠損しており、上端には手擦れ痕が認められる。317は表・裏面に押圧剥離に近い加工を施した後、左右側面の下半に裏面→表面からの順で急角度の調整で先端を作り出している。先端は若干欠損している。318は幅広剥片を素材とし、周縁部に微細な調整を施して末端に先端を形成している。先端を若干欠損し、上端には手擦れ痕が認められる。319は幅広剥片を素材とし、裏面の左右側縁の下半に加工を施して先端を形成しており、表面の左右側縁の上半にも調整が認められ、手持ちのための刃潰しが作られたと考えられる。表面右側縁には使用痕がみられ、上端は欠損している。320～322は石匙。320・322は姫島産黒曜石製。320は表面の下部に刃部があり、裏面には右半分の側縁部に細かい調整がみられる。321は安山岩製。表・裏面のほぼ全面に加工を施しているが、中央部に若干素材の面が残る。下端の刃部には顕著な使用痕が認められ、左右の頂部は若干欠損している。322は下端部に刃部が形成され、つまみが折れたのでリダクションがされている。323～327は石核。323～325は姫島産黒曜石製。323は裏面の左方向からの打撃が古く、その後表面の上部からの剥離を施している。上部は頭部調整をしている。324は下端部を断面にして、作業面になっている。325の表面は上部からの剥離を行っており、頭部調整がされている。裏面は右側からの打撃により、剥離されている。326は水晶製。左側面を打面、裏面の右半を作業面として剥離→90度転回して、上端面を打面、正面を最終作業面として剥離している。327は鉄石英製。正面右半を打面、裏面を作業面として剥離→裏面を打面、正面右半を作業面として剥離→上端を打面、正面上半を最終作業面として剥離しているが、正面左下を作業面とした剥離も存在している。328は多久産と考えられるサヌカイト製の横刃削器。表面を主要剥離面とするやや分厚い幅広剥片を素材とし、主要剥離面に幾枚かの平坦で大柄な加工を施して厚みを取った後、表面の下端に細かでやや急斜度な調整を施して刃部を形成している。裏面下端に使用痕が認められ、右半は表面から裏面への折れによって欠損している。329は金山産サヌカイト製の削器。幅広剥片を素材とし、下端に表・裏面から加工を施して、整形・刃部形成を行っている。上端を欠損している。330は姫島産黒曜石製の削器。幅広剥片の上半を欠損したものを素材としており、裏面に平坦な加工を施した後、左右側縁に裏面から調整を入れて刃部を形成している。左右側縁に使用痕が、上端付近に手擦れ痕が認められる。331は安山岩製の削器。幅広剥片を素材としており、下端に裏面から加工を施して、整形・刃部形成を行っている。刃部には使用痕が認められ、上端にも微細な剥離痕がみられる。また、右半を欠損している。332は姫島産黒曜石製の搔器。幅広剥片を素材とし、素材の打面部付近に急斜度な加工を施して刃部を形成している。基部の上端付近には手擦れ痕が顕著に認められる。333は腰岳系黒曜石製の削器。表面の大半が自然面である幅広剥片を素材とし、右側縁の裏面に加工が施され、その表面に使用痕が認められる。また、上端には手擦れ痕がみられる。334～340は打製石斧。341～344は磨製石斧。334・336～338・342・344は緑泥片岩製。334は刃部。幅広剥片を素材とし、表面は全面に平坦な加工と周縁部に急斜度な調整が及ぶが、裏面は周縁部への加工のみである。335



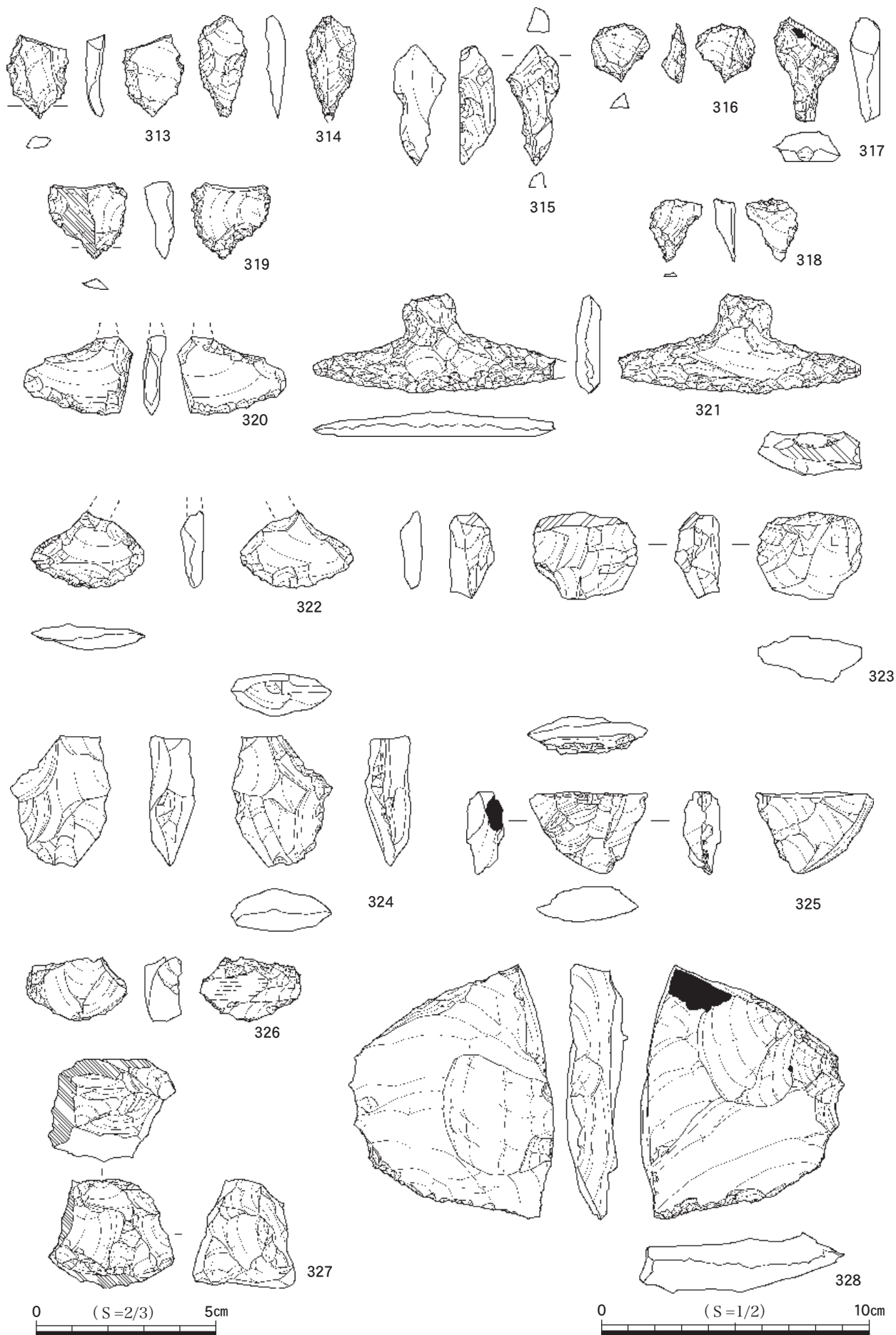


第304図 包含層出土遺物 (S=1/3)

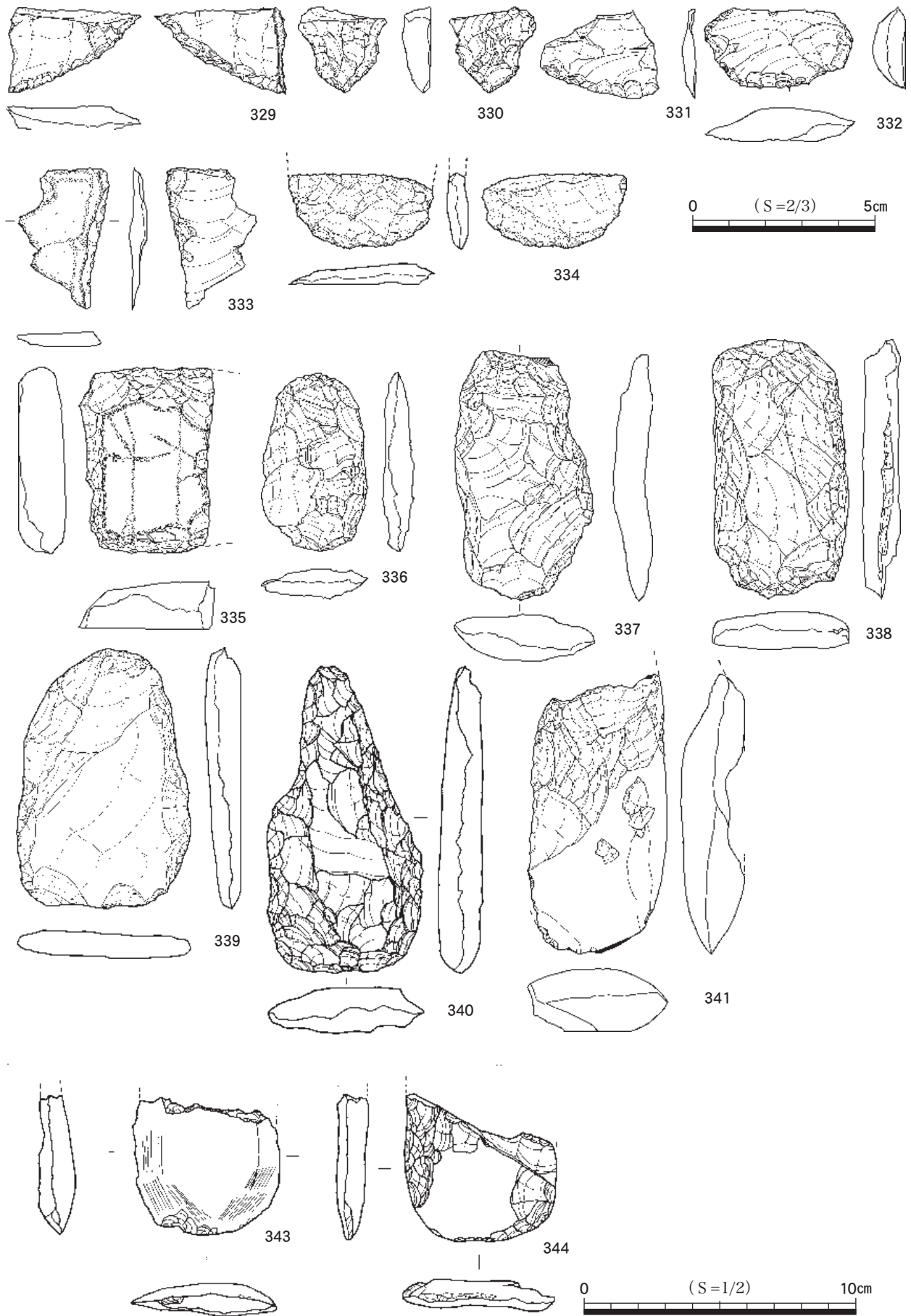
は安山岩製。基部のみ表面のほぼ全面が礫面と考えられる礫片を素材とし、周縁部に表・裏面からやや深い加工を施して整形している。裏面から表面への折れによって、刃部側の大半を欠損している。336は表・裏面に平坦で大柄な加工を施して、厚みを取り、大まかな整形を行った後、周縁部にやや細かで急斜度な調整を施して、仕上げの調整と刃部・基部形成を為している。小型で厚みを残していることから、工具的な器種か。337は表・裏面に大柄で面的な加工を施して厚みを取った後、周縁部に急斜度な調整を入れて整形・刃部形成をしている。基部を僅かに欠損している。338は扁平な幅広剥片を素材とし、大柄な平坦剥離を表・裏面に施して厚みを減らし、周縁部にやや細かで急斜度な加工を入れて整形・刃部形成を為し、ほぼ長方形に近い形状に仕上げている。刃部は裏面を欠損しているが、使用を続けていたようで、使用痕が顕著に認められる。339は角閃石安山岩製。ほぼ全面自然面の幅広剥片を素材とし、表・裏面の周縁部に浅い加工を施して、整形・刃部形成を行っている。刃部は若干の欠損後にリダクションしたと考えられる。340は凝灰岩製。薄平な剥片を素材とし、薄く大柄な加工を表・裏面に施して扁平にした後、周縁部に細かな調整を入れて整形・刃部形成をしている。刃部に擦痕が認められる。右側縁上半の欠損の後、リダクションしたと考えられ、基部は不整形である。341は蛇紋岩製。若干の磨き残しがみられるが、よく研磨され断面レンズ状に整形されている。刃部には使用痕が顕著に認められる。裏面のほぼ全面、表面の左半及び基部を大きく欠損している。342は刃部は欠損する。343は蛇紋岩製の刃部片。胴部～基部、裏面のほとんどを欠損している。刃部には若干の使用痕が観察され、裏面も刃部のみ研磨された部分が残る。344は薄平な剥片を素材とし、周縁部に加工を施して整形・刃部形成を行った後、表・裏面に研磨整形を施している。裏面から表面への折れによって基部側を欠損している。刃部には若干の使用痕が認められる。345は砂岩製の敲石及び磨石。表・裏面とも中央に敲打痕がある。ただし、凹みは顕著ではない。また、右側縁にも敲打痕がある。被熱を受けている。左部欠損。346は凝灰岩製の台石。表面に敲打痕がある。347は砂岩製の砥石。頂部から側面に敲打痕がある。その右隣に何かを砥いだ溝がみられる。裏面には磨面がある。下部欠損。348は滑石製の石皿。表面に擦痕が認められる。349は蛇紋岩製の紡錘車。半ばを欠損している。研磨により側面にはほぼ水平方向の、中央の孔には垂直方向の擦痕が顕著に認められる。中央の孔は上方からの片面穿孔で形成されている。



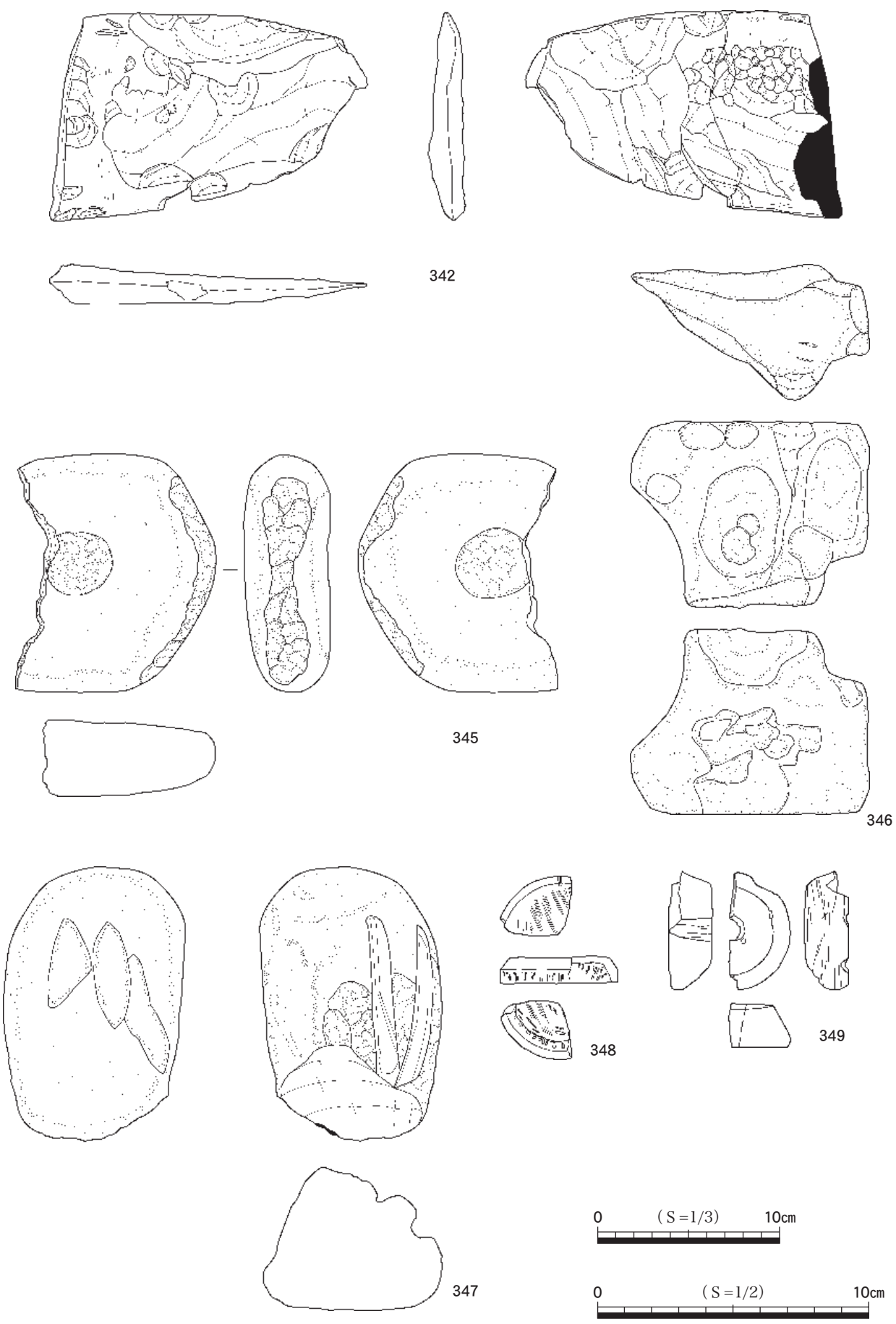
第305図 一括出土遺物 (1) (S=2/3)



第306図 一括出土遺物(2) (S=2/3 (313~327)、S=1/2 (328))



第307図 一括出土遺物(3) (S=2/3 (330~333)、S=1/2 (329、334~341、343、344))



第308図 一括出土遺物(4) (S=1/3 (346、348)、S=1/2 (342、345、347、349))

表1 法垣遺跡出土石器観察表

図版	掲載番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
23	1	SH2	石鏃	姫島産黒曜石	1.55	1.35	0.25	0.3	
23	2	SH2	石鏃	多久産サヌカイト	1.35	1.15	0.20	0.3	
23	3	SH2	横刃削器	緑泥片岩	5.20	(6.70)	0.60	24.4	左半欠損
23	4	SH2	打製石斧	緑泥片岩	11.75	5.80	1.40	101.2	右側に基部欠損
23	5	SH2	打製石斧	緑泥片岩	(12.10)	5.95	2.00	214.5	刃部欠損
23	6	SH2	打製石斧	緑泥片岩	(12.45)	6.60	1.50	208.7	基部・刃部欠
23	7	SH2	打製石斧	結晶片岩	(12.50)	9.50	1.35	174.6	刃部欠損
23	8	SH2	打製石斧	緑泥片岩	14.75	6.10	2.50	290.2	
23	9	SH2	打製石斧	緑泥片岩	(14.95)	7.80	1.40	208.7	基部欠損
23	10	SH2	磨石兼敲石	角閃石安山岩	8.20	7.36	2.80	236.0	
27	11	SH5	石鏃	安山岩	(1.60)	1.50	0.40	0.6	先端・左脚欠
27	12	SH5	石鏃	チャート	1.15	1.20	0.40	0.3	
27	13	SH5	石鏃	姫島産黒曜石	(2.05)	1.50	0.40	1.1	右脚欠損
27	14	SH5	石鏃	姫島産黒曜石	(2.20)	2.10	0.50	1.5	先端微欠
27	15	SH5	石鏃	姫島産黒曜石	(1.85)	1.40	0.35	0.5	右脚微欠
27	16	SH5	石鏃	姫島産黒曜石	2.70	(1.50)	0.45	1.1	右脚欠損
27	17	SH5	石鏃	姫島産黒曜石	1.80	1.70	0.30	0.5	
27	18	SH5	石匙	姫島産黒曜石	1.65	2.15	0.45	1.0	
28	19	SH5	打製石斧	緑泥片岩	(8.25)	4.50	(1.95)	79.3	刃部・基部欠
28	20	SH5	打製石斧	緑泥片岩	(7.70)	4.90	0.70	39.9	基部欠損
28	21	SH5	打製石斧	角閃石安山岩	12.19	7.83	2.51	324.5	
28	22	SH5	台石	角閃石安山岩	37.01	27.10	9.15	11857.0	
28	23	SH5	台石	角閃石安山岩	12.40	11.60	2.70	616.0	
28	24	SH9	石鏃	姫島産黒曜石	1.85	1.60	0.35	0.6	
38	25	SH9	石錐	サヌカイト	2.35	2.10	0.50	2.5	
38	26	SH9	横刃削器	緑泥片岩	7.40	9.80	0.85	70.1	
38	27	SH9	磨石	角閃石安山岩	13.60	9.90	3.85	694.0	
38	28	SH9	磨石兼敲石	角閃石安山岩	17.83	9.94	6.53	2003.0	
38	29	SH9	磨石兼敲石	角閃石安山岩	14.25	12.81	5.01	1193.0	
38	30	SH9	敲石	角閃石安山岩	16.91	15.32	7.65	2286.0	石皿、赤化スス付
38	31	SH9	凹み石	角閃石安山岩	15.70	12.35	4.95	1463.0	赤化
39	32	SH9	台石	角閃石安山岩	17.95	38.35	10.50	9995.0	
39	33	SH9	台石	角閃石安山岩	20.95	13.80	8.85	3850.0	
44	34	SH13	石鏃	姫島産黒曜石	2.40	1.30	0.40	0.9	先端・両脚欠
44	35	SH13	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.20	1.50	0.45	1.5	
44	36	SH13	搔器	泥岩	2.20	(5.30)	1.15	10.4	左半欠損
44	37	SH13	削器	姫島産黒曜石	4.60	8.60	4.30	72.4	
44	38	SH13	打製石斧	角閃石安山岩	13.55	8.20	1.80	239.0	
44	39	SH13	打製石斧	緑泥片岩	(11.35)	6.85	2.15	203.1	基部欠損
44	40	SH13	打製石斧	角閃石安山岩	(7.85)	7.00	2.20	187.3	基部・刃部欠
44	41	SH13	打製石斧	泥岩	13.25	6.60	2.10	256.9	
44	42	SH13	磨石	角閃石安山岩	11.10	8.70	2.50	443.0	
44	43	SH13	磨石兼敲石	角閃石安山岩	19.80	13.00	4.60	1916.0	
44	44	SH13	磨石兼敲石	角閃石安山岩	17.62	15.45	10.55	4170.0	
45	45	SH13	凹み石	角閃石安山岩	23.90	39.50	11.10	12995.0	
45	46	SH13	台石	角閃石安山岩	25.70	19.35	6.30	4734.0	
45	47	SH13	砥石	花崗岩	(8.00)	5.80	4.00	121.4	
47	48	SH21	磨石	角閃石安山岩	23.10	17.05	8.20	4293.0	
55	49	SH22	ナイフ形石器	腰岳系黒曜石	(2.30)	0.95	0.40	0.9	先端側欠損
55	50	SH22	石核	玉髓	2.60	4.10	1.10	9.2	
55	51	SH22	削器	姫島産黒曜石	4.35	4.20	1.20	18.6	
55	52	SH22	使用痕剥片	姫島産黒曜石	4.90	1.85	0.85	4.6	
56	53	SH22	台石	角閃石安山岩	(43.75)	39.40	5.90	11650.0	
57	54	SH22	磨製石斧	蛇紋片岩	12.80	5.90	2.10	273.1	裏面欠損
57	55	SH22	磨製石斧	結晶片岩	9.60	4.55	1.90	111.4	
57	56	SH22	磨石	角閃石安山岩	8.40	3.72	3.15	131.5	
119	57	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	1.85	1.95	0.60	1.2	
119	58	SH24	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.20	1.80	0.70	2.5	
119	59	SH24	石鏃	多久産サヌカイト	1.90	1.50	0.40	0.5	左肩部欠損

表2 法垣遺跡出土石器観察表

図版	掲載番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
119	60	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	1.80	1.75	0.45	0.7	
119	61	SH24	石錐	姫島産黒曜石	1.95	1.75	0.55	1.6	
119	62	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	1.85	1.50	0.30	0.7	
119	63	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	1.60	1.45	0.40	0.5	先端微欠
119	64	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	3.20	2.25	0.50	2.1	先端・右脚欠
120	65	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	(1.70)	(1.40)	0.35	0.6	左脚欠損
120	66	SH24	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.90	1.70	0.55	1.5	
120	67	SH24	石鏃	多久産サヌカイト	(2.15)	1.55	0.30	0.9	先端・右脚欠
120	68	SH24	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.95	1.35	0.40	1.0	
120	69	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	(1.50)	1.45	0.30	0.4	左脚微欠
120	70	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	(1.70)	1.40	0.30	0.4	先端微欠
120	71	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	2.20	(1.50)	0.35	0.8	右脚欠損
120	72	SH24	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.05	1.90	0.40	1.1	
120	73	SH24	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.05	1.30	0.40	1.2	
120	74	SH24	石鏃	姫島産黒曜石	1.50	1.20	0.30	0.3	右脚微欠
120	75	SH24	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.20	2.00	0.70	2.0	
120	76	SH24	搔器	姫島産黒曜石	2.30	1.35	0.45	1.0	
120	77	SH24	搔器	姫島産黒曜石	2.15	1.75	0.60	1.9	
120	78	SH24	使用痕剥片	姫島産黒曜石	5.25	4.85	1.70	35.8	
120	79	SH24	石核	多久産サヌカイト	2.05	6.05	3.10	35.2	
120	80	SH24	石核	鉄石英	2.70	3.60	2.80	33.9	
120	81	SH24	石核	針尾系黒曜石	1.65	3.55	1.10	5.8	
120	82	SH24	使用痕剥片	姫島産黒曜石	4.90	2.95	0.85	10.4	
121	83	SH24	削器	姫島産黒曜石	2.80	4.10	1.75	12.4	
121	84	SH24	横刃削器	多久産サヌカイト	6.25	15.30	2.00	135.0	
121	85	SH24	縦長剥片	姫島産黒曜石	(6.00)	3.10	1.10	10.3	打面部欠損
121	86	SH24	削器	姫島産黒曜石	4.00	5.90	1.50	27.7	右側縁欠損
121	87	SH24	削器	姫島産黒曜石	3.25	4.30	0.95	10.0	
121	88	SH24	削器	姫島産黒曜石	5.40	3.35	1.20	16.1	
121	89	SH24	削器	姫島産黒曜石	(4.75)	2.45	0.80	8.9	末端欠損
121	90	SH24	石匙	多久産サヌカイト	3.80	6.00	0.75	16.3	
121	91	SH24	石匙	姫島産黒曜石	3.20	4.30	0.95	9.2	
122	92	SH24	磨製石斧	蛇紋岩	(7.70)	(5.20)	2.65	150.9	基部・刃部欠
122	93	SH24	打製石斧	角閃石安山岩	14.80	8.00	1.60	210.7	
122	94	SH24	打製石斧	安山岩	(12.75)	8.45	1.40	173.8	刃部欠損
122	95	SH24	打製石斧	角閃石安山岩	13.50	7.40	2.50	283.9	
122	96	SH24	打製石斧	角閃石安山岩	(12.90)	7.50	1.25	141.9	基部微欠
122	97	SH24	打製石斧	角閃石安山岩	15.40	6.00	1.80	200.1	
122	98	SH24	打製石斧	角閃石安山岩	16.75	9.05	3.10	548.4	基部微欠
122	99	SH24	磨製石斧	硬砂岩	(10.70)	(5.80)	2.30	197.8	刃部欠損
122	100	SH24	石製円盤	角閃石安山岩	8.50	8.20	1.70	160.9	左右側縁欠損
123	101	SH24	磨石	角閃石安山岩	10.88	11.89	3.70	639.0	
123	102	SH24	磨石	角閃石安山岩	9.06	10.53	1.53	1935.0	
123	103	SH24	磨石	安山岩	10.63	21.14	8.79	2558.0	
123	104	SH24	凹み石	角閃石安山岩	19.09	17.60	10.50	5491.0	
123	105	SH24	凹み石		20.60	19.71	7.42	5792.0	
124	106	SH24	台石	角閃石安山岩	9.10	6.90	2.80	209.4	
124	107	SH24	台石	角閃石安山岩	12.92	22.73	9.35	4350.0	
124	108	SH24	台石	角閃石安山岩	39.33	36.65	6.71	11237.0	
125	109	SH24	砥石	花崗岩	(9.05)	7.85	4.30	238.0	
125	110	SH24	块状耳飾	滑石	4.80	1.45	0.40	4.7	
131	111	SH27	削器	姫島産黒曜石	2.50	2.20	1.00	3.7	
131	112	SH27	横刃削器	安山岩	4.05	8.20	0.55	23.0	右側縁欠損
131	113	SH27	凹み石	角閃石安山岩	22.30	21.75	8.95	5748.0	
133	114	SB12	石鏃	姫島産黒曜石	(2.60)	2.00	0.50	2.1	先端欠損
133	115	SB12	台石	安山岩	21.15	19.40	11.75	8688.0	
134	116	SB13	磨石	角閃石安山岩	7.45	6.60	3.05	221.0	
134	117	SB13	磨石兼敲石	角閃石安山岩	17.70	13.95	4.70	1740.0	
138	118	SB14	石鏃	姫島産黒曜石	2.40	1.80	0.40	1.2	右脚欠損



表3 法垣遺跡出土石器観察表

図版	掲載番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
138	119	SB14	円鏃	角閃石安山岩	25.18	29.82	19.35	14111.0	
146	120	3次SK1	石鏃	姫島産黒曜石	(2.00)	1.90	0.35	1.4	先端部欠損
146	121	3次SK1	石鏃	姫島産黒曜石	(1.55)	1.55	0.35	0.6	先端・右脚欠損 左脚微欠
146	122	3次SK1	石鏃	姫島産黒曜石	(2.70)	2.20	0.70	1.8	先端部欠損
146	123	3次SK1	石鏃	姫島産黒曜石	2.80	(1.60)	0.50	0.9	左脚欠損
146	124	3次SK1	石鏃	姫島産黒曜石	2.20	1.40	0.45	1.0	
146	125	3次SK1	石鏃	姫島産黒曜石	(2.60)	1.50	0.35	1.1	先端部欠損
146	126	3次SK1	搔器	サヌカイト	6.20	8.40	2.00	72.7	
146	127	3次SK1	剥片	サヌカイト	6.80	9.30	1.50	52.3	
147	128	3次SK1	剥片	サヌカイト	6.20	9.30	1.70	72.0	
147	129	3次SK1	剥片	サヌカイト	8.50	11.50	1.70	128.6	
147	130	3次SK1	剥片	サヌカイト	7.70	11.00	1.40	128.5	
147	131	3次SK1	石核	姫島産黒曜石	4.30	3.80	2.90	46.0	
147	132	3次SK1	石包丁	泥岩	4.90	10.00	0.50	32.2	
148	133	3次SK1	打製石斧	角閃石安山岩	(5.10)	4.60	1.50	51.4	基部欠損
148	134	3次SK1	打製石斧	角閃石安山岩	(8.80)	5.50	0.80	51.9	基部微欠
148	135	3次SK1	打製石斧未成品	サヌカイト	14.00	16.60	2.80	493.9	
148	136	3次SK1	打製石斧	緑泥片岩	(4.80)	6.20	1.40	67.0	左刃部欠損
148	137	3次SK1	打製石斧未成品	サヌカイト	10.60	14.00	2.30	245.3	
148	138	3次SK1	打製石斧	角閃石安山岩	11.90	5.75	0.70	72.8	
150	139	3次SK3	石鏃	姫島産黒曜石	(1.50)	1.30	0.20	0.3	小型
150	140	3次SK3	石核	姫島産黒曜石	2.70	3.40	2.20	17.8	
151	141	3次SK6	石鏃	姫島産黒曜石	1.95	1.40	0.30	0.6	小型
152	142	SK2	石鏃	姫島産黒曜石	1.85	1.10	0.30	0.6	左脚欠損
153	143	SK7	石鏃未成品	腰岳系黒曜石	1.95	1.30	0.55	1.2	
157	144	SK14	石匙	金山産サヌカイト	4.00	(3.35)	0.70	8.7	左側縁欠損
162	145	SK37	削器	姫島産黒曜石	2.00	2.75	0.65	3.0	
167	146	SK44	石鏃	姫島産黒曜石	2.85	1.45	0.25	0.3	
167	147	SK44	打製石斧	金山産サヌカイト	(4.45)	(3.70)	0.70	12.3	基部のみ
169	148	SK46	石鏃	姫島産黒曜石	(1.25)	1.25	0.30	0.3	先端欠損
169	149	SK46	石鏃	姫島産黒曜石	(1.50)	1.65	0.25	0.5	先端欠損
169	150	SK46	石鏃	姫島産黒曜石	2.30	1.60	0.35	1.0	
176	151	3次SH1	石鏃	姫島産黒曜石	(1.50)	1.35	0.40	0.5	先端部欠損
177	152	3次SH2	石匙	姫島産黒曜石	(2.10)	1.40	0.50	1.3	先端部のみ
188	153	SH7	使用痕剥片	流紋岩	6.40	3.00	1.75	22.3	
188	154	SH7	打製石斧	角閃石安山岩	9.18	7.63	2.47	215.0	
188	155	SH7	敲石	角閃石安山岩	(14.90)	10.50	10.55	2202.0	
190	156	SH8	台石	角閃石安山岩	32.60	24.00	12.40	13135.0	
192	157	SH10	石核	姫島産黒曜石	1.85	5.15	1.95	13.4	
192	158	SH10	石錐	姫島産黒曜石	(1.65)	1.20	0.35	0.5	先端微欠
193	159	SH10	台石	角閃石安山岩	44.65	39.89	12.95	35115.0	
200	160	SH15	磨石兼敲石	角閃石安山岩	15.41	14.00	6.65	2146.0	
200	161	SH15	台石	角閃石安山岩	19.40	17.30	6.10	3250.0	
200	162	SH15	台石	角閃石安山岩	32.15	21.41	8.39	5250.0	
204	163	SH16	石鏃	姫島産黒曜石	(2.80)	(1.55)	0.33	1.2	左右脚欠損
204	164	SH16	石鏃	姫島産黒曜石	(2.00)	1.60	0.35	0.6	
204	165	SH16	磨石	安山岩	16.60	10.50	7.00	1979.0	
207	166	SH18	石核	姫島産黒曜石	3.45	9.20	2.70	74.5	
210	167	SH19	台石	角閃石安山岩	14.66	16.75	7.21	2293.0	
210	168	SH19	凹み石	角閃石安山岩	22.06	27.18	15.31	7380.0	
214	169	SH23	台石	角閃石安山岩	26.61	32.11	9.75	10816.0	
226	170	SK5	石鏃	姫島産黒曜石	1.80	1.30	0.30	0.5	先端微欠
226	171	SK5	石鏃	腰岳系黒曜石	(2.45)	(1.50)	0.35	0.8	右脚欠損
226	172	SK5	打製石斧	緑泥片岩	11.75	5.00	1.20	98.3	
226	173	SK5	磨石	角閃石安山岩	6.15	7.12	6.15	336.5	
226	174	SK5	磨石兼敲石	角閃石安山岩	13.30	12.15	7.20	1452.0	
231	175	SH26	楔形石器	腰岳系黒曜石	2.85	1.70	0.70	3.2	
238	176	SB19	楔形石器	姫島産黒曜石	2.55	2.10	1.05	4.7	

表4 法垣遺跡出土石器観察表

図版	掲載番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
247	177	SK34	石鏃	安山岩	(2.15)	1.60	0.35	1.0	先端・両脚欠
252	178	SK50	石鏃	多久産サヌカイト	2.45	1.50	0.30	1.0	
253	179	SK54	抉入削器	姫島産黒曜石	2.60	2.00	0.75	3.2	
254	180	SK55	磨石	角閃石安山岩	7.52	8.91	4.95	462.0	
254	181	SK55	凹み石	角閃石安山岩	11.02	10.95	3.39	731.0	
254	182	SK55	台石	角閃石安山岩	20.60	6.50	19.90	3998.0	
267	183	SD42	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.50	1.50	0.50	1.6	
267	184	SD42	石鏃	姫島産黒曜石	(1.40)	1.20	0.30	0.4	先端・左脚欠
267	185	SD42	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.30	1.95	0.80	3.5	
267	186	SD42	石鏃	姫島産黒曜石	(1.75)	1.35	0.40	0.6	先端・両脚欠
267	187	SD42	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.75	1.65	0.55	1.4	
267	188	SD42	石核	姫島産黒曜石	2.70	2.75	1.60	12.1	
267	189	SD42	打製石斧	緑泥片岩	(12.10)	6.65	2.00	163.3	刃部欠損
267	190	SD42	打製石斧	緑泥片岩	13.50	5.80	1.80	186.4	
267	191	SD42	打製石斧	緑泥片岩	(13.00)	5.85	1.80	169.2	基部欠損
267	192	SD42	打製石斧	角閃石安山岩	13.40	4.50	2.30	163.8	刃部欠損
268	193	SD42	打製石斧	角閃石安山岩	14.05	5.35	2.55	273.0	
268	194	SD42	敲石	角閃石安山岩	14.46	11.19	10.88	2431.0	
268	195	SD42	台石	角閃石安山岩	28.65	22.70	6.75	7557.0	
268	196	SD42	紡錘車	結晶片岩	4.20	(0.75)	1.40	20.4	半分欠損
268	197	SD42	石鍋	滑石	(3.65)	(3.85)	(0.70)	11.8	
268	198	SD42	石鍋	滑石	(10.35)	(4.95)	2.40	147.6	
268	199	SD42	石鍋	滑石	(10.80)	(7.70)	(4.40)	297.4	底部付近のみ
268	200	SD42	石鍋	滑石	(11.30)	(8.20)	(1.90)	266.2	
268	201	SD42	石鍋	滑石	(6.60)	(4.00)	1.80	63.8	
268	202	SD42	石鍋	滑石	(6.25)	(11.15)	2.10	188.8	
268	203	SD42	石鍋	滑石	7.40	5.00	2.10	71.1	バレン状石製品
269	204	SE1	石匙	姫島産黒曜石	3.25	3.30	0.90	8.5	
269	205	SE1	石核	姫島産黒曜石	1.75	4.25	1.40	9.2	
269	206	SE1	局部磨製石斧	緑泥片岩	10.30	5.15	1.00	66.3	刃部左半欠
269	207	SE1	台石	凝灰岩	10.60	7.75	1.60	131.5	
270	208	SD39	磨製石斧	緑泥片岩	(14.85)	(3.55)	3.60	293.4	基部・左半欠
271	209	SD50	石鏃	姫島産黒曜石	2.90	(1.85)	0.50	1.6	両脚欠損
274	210	SX4	磨石	角閃石安山岩	(16.90)	(14.35)	(8.15)	2834.0	
274	211	SX4	磨石兼敲石	角閃石安山岩	(7.42)	11.20	5.25	659.0	
275	212	SD1	石鏃	多久産サヌカイト	(1.45)	1.60	0.20	0.3	
277	213	SD11	打製石斧	緑泥片岩	(9.30)	7.10	1.50	143.6	刃部欠損
277	214	SD11	打製石斧	角閃石安山岩	(8.80)	7.95	1.90	165.7	刃部欠損
277	215	SD11	砥石	角閃石安山岩	7.50	6.90	1.35	105.6	
278	216	SD38	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.60	1.60	0.55	1.2	
280	217	SD48	石鏃	姫島産黒曜石	(1.55)	(1.15)	0.30	0.3	先端・右脚欠
280	218	SD48	砥石	結晶片岩	(5.80)	4.90	0.75	35.4	
288	219	SK21	打製石斧	角閃石安山岩	11.55	(6.90)	1.25	117.9	左半欠損
290	220	SK59	石匙	安山岩	3.65	4.69	5.50	11.5	
291	221	SK60	石錐	姫島産黒曜石	2.40	2.40	0.50	1.6	
292	222	3次SX1	打製石斧	緑泥片岩	9.90	5.30	12.00	85.6	
292	223	3次SX1	砥石	凝灰岩	(8.45)	(9.80)	(1.50)	150.5	
293	224	3次SX1	石核	姫島産黒曜石	3.80	4.30	1.10	16.7	
293	225	3次SX1	石核	姫島産黒曜石	5.90	5.90	2.00	40.4	
293	226	3次SX1	打製石斧	緑泥片岩	(4.60)	5.80	1.60	68.9	刃部のみ
294	227	SX1	石鏃	姫島産黒曜石	2.15	(1.15)	0.30	0.6	左脚欠損
297	228	地層横転10	三稜尖頭器	安山岩	5.85	1.60	1.15	10.0	
298	229	地層横転11	石鏃	姫島産黒曜石	2.65	1.60	0.40	1.1	先端・左脚欠
298	230	地層横転11	石錐	安山岩	3.49	2.70	0.69	6.5	
301	231	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	2.40	1.55	0.33	0.8	
301	232	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	1.85	1.85	0.35	0.9	
301	233	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	1.50	1.35	0.30	0.3	
301	234	柱穴	石鏃	多久産サヌカイト	2.10	1.40	0.25	0.4	右脚微欠
301	235	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	1.20	1.45	0.30	0.4	先端・左脚欠

表5 法垣遺跡出土石器観察表

図版	掲載番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
301	236	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	2.50	1.65	0.50	1.2	先端・右脚欠
301	237	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	2.70	1.85	0.40	1.1	先端欠損
301	238	柱穴	石鏃	金山産サヌカイト	1.75	1.60	0.35	0.6	
301	239	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	(1.50)	(1.35)	0.35	0.3	先端・右脚欠
301	240	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	28.65	22.70	6.75	7.6	
301	241	柱穴	石鏃	多久産サヌカイト	2.20	(1.40)	0.35	0.6	右脚欠損
301	242	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	1.90	1.20	0.30	0.5	
301	243	柱穴	石鏃	腰岳系黒曜石	1.55	1.25	0.30	0.4	右脚欠損
301	244	柱穴	石鏃	安山岩	1.70	1.40	0.30	0.5	
301	245	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	1.75	1.60	0.40	0.5	
301	246	柱穴	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.65	1.65	0.25	0.4	
301	247	柱穴	石鏃	姫島産黒曜石	(2.95)	(1.35)	0.50	1.4	左脚欠損
301	248	柱穴	石錐	姫島産黒曜石	3.00	1.85	0.60	3.0	先端微欠
301	249	柱穴	石錐	姫島産黒曜石	2.70	1.00	0.70	1.5	
301	250	柱穴	石錐	姫島産黒曜石	2.15	1.40	0.55	1.3	
301	251	柱穴	横刃削器	金山産サヌカイト	2.10	7.15	0.90	11.4	基部欠損
301	252	柱穴	搔器	姫島産黒曜石	2.30	3.10	0.75	5.1	
301	253	柱穴	削器	姫島産黒曜石	3.10	2.85	1.10	8.4	
301	254	柱穴	削器	姫島産黒曜石	3.10	2.40	0.80	5.6	
301	255	柱穴	削器	角閃石安山岩	(7.00)	(6.75)	(2.05)	102.0	
301	256	柱穴	使用痕剥片	流紋岩	6.70	4.75	1.25	36.6	ガジリ多し
302	257	柱穴	石匙	金山産サヌカイト	9.70	3.40	1.10	34.9	
302	258	柱穴	搔器	腰岳系黒曜石	2.90	2.90	0.80	5.6	
302	259	柱穴	石核	腰岳系黒曜石	1.85	3.30	1.60	8.9	
302	260	柱穴	石核	姫島産黒曜石	3.20	3.40	1.30	11.7	
302	261	柱穴	石核	姫島産黒曜石	6.00	6.60	4.50	191.9	
302	262	柱穴	石錘	安山岩	(5.30)	(5.15)	(1.85)	69.6	
303	263	柱穴	打製石斧	安山岩	10.60	5.60	1.90	117.7	
303	264	柱穴	磨製石斧	緑泥片岩	(13.50)	4.95	2.60	271.3	
303	265	柱穴	磨製石斧	緑泥片岩	(18.70)	6.25	(2.80)	414.3	刃部・裏面欠
303	266	柱穴	磨製石斧	緑泥片岩	7.10	2.50	1.30	26.4	
303	267	柱穴	磨石	角閃石安山岩	9.95	10.05	3.35	516.0	
303	268	柱穴	磨石	角閃石安山岩	8.55	7.00	2.65	241.3	
303	269	柱穴	砥石	角閃石安山岩	8.25	4.45	1.45	59.8	
303	270	柱穴	台石	角閃石安山岩	16.85	7.60	2.60	327.9	両面に敲打痕
305	271	一括	ナイフ形石器	腰岳系黒曜石	2.90	1.30	0.70	2.4	
305	272	一括	ナイフ形石器	腰岳系黒曜石	(1.60)	1.15	0.45	0.7	先端・基部欠損
305	273	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.40	1.20	0.45	0.5	先端・右脚欠
305	274	一括	石鏃	金山産サヌカイト	(1.05)	1.40	0.30	0.3	先端欠損
305	275	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.90	1.55	0.35	0.6	先端・右脚欠
305	276	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.55	0.30	0.4	
305	277	一括	石鏃	多久産サヌカイト	(1.40)	1.60	0.30	0.4	先端・右脚欠
305	278	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.60	1.50	0.30	0.4	
305	279	一括	石鏃	姫島産黒曜石	(2.20)	1.65	0.40	0.9	先端・右脚欠
305	280	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.25	1.20	0.30	0.5	
305	281	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	(2.45)	(1.45)	0.30	0.6	先端・左脚欠
305	282	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.10	1.50	0.40	0.7	
305	283	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.55	1.50	0.30	0.6	
305	284	一括	石鏃	金山産サヌカイト	2.10	1.70	0.30	0.8	
305	285	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.40	1.75	0.40	0.8	先端微欠
305	286	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.60	2.00	0.70	2.5	先端・左脚欠
305	287	一括	石鏃	多久産サヌカイト	(2.15)	(1.65)	0.55	1.4	両脚欠損
305	288	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.00	1.30	0.45	0.8	
305	289	一括	石鏃	姫島産黒曜石	3.40	1.70	0.50	1.5	先端微欠
305	290	一括	石鏃	姫島産黒曜石	(2.05)	(1.40)	0.40	0.7	先端・右脚欠
305	291	一括	石鏃	多久産サヌカイト	2.60	1.65	0.50	1.5	左脚欠損
305	292	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.40	(1.25)	0.45	0.9	右脚欠損
305	293	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.70	1.30	0.35	0.5	小型
305	294	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.80	1.60	0.30	0.5	小型

表6 法垣遺跡出土石器観察表

図版	掲載番号	出土遺構	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
305	295	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.50	1.40	0.35	0.7	先端部欠損
305	296	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.00	1.40	0.30	0.4	左脚微欠
305	297	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.10	1.80	0.35	0.9	完形
305	298	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.20	1.90	0.50	1.6	
305	299	一括	石鏃	姫島産黒曜石	3.10	(1.30)	0.70	2.5	先端・右脚欠損
305	300	一括	石鏃	姫島産黒曜石	4.50	1.80	0.65	3.6	先端欠損
305	301	一括	石鏃	姫島産黒曜石	2.55	1.60	0.35	1.1	
305	302	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.90	1.40	0.50	1.3	
305	303	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	1.65	1.50	1.48	1.0	
305	304	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.00	1.75	0.50	1.7	
305	305	一括	石鏃	姫島産黒曜石	(1.50)	1.30	0.40	0.7	先端欠損
305	306	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.30	1.30	0.25	0.2	
305	307	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.70	1.65	0.35	0.8	
305	308	一括	石鏃	姫島産黒曜石	1.35	1.25	0.30	0.3	
305	309	一括	石鏃	姫島産黒曜石	(1.80)	1.50	0.60	1.1	先端微欠
305	310	一括	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.10	1.50	0.30	0.6	右半欠損
305	311	一括	石鏃	腰岳系黒曜石	2.25	1.00	0.30	0.7	
305	312	一括	石鏃	メノウ	3.05	1.20	0.30	1.0	先端微欠
306	313	一括	石錐	姫島産黒曜石	2.20	1.70	0.49	1.9	
306	314	一括	石錐	姫島産黒曜石	(2.65)	1.35	0.53	2.0	先端・基部欠
306	315	一括	石錐	姫島産黒曜石	3.30	1.40	0.95	3.6	
306	316	一括	石錐	姫島産黒曜石	1.60	1.60	0.65	1.6	
306	317	一括	石錐	多久産サヌカイト	(2.80)	1.80	0.80	3.5	先端欠損
306	318	一括	石錐	姫島産黒曜石	1.75	1.45	0.60	0.8	先端微欠
306	319	一括	石錐	姫島産黒曜石	(2.10)	2.15	0.80	2.4	上端欠損
306	320	一括	石匙	姫島産黒曜石	(2.75)	(2.30)	0.45	3.1	持ち手・右半欠損
306	321	一括	石匙	安山岩	2.70	6.70	0.70	9.3	
306	322	一括	石匙	姫島産黒曜石	3.15	2.10	0.60	3.6	
306	323	一括	石核	姫島産黒曜石	2.40	2.90	1.10	7.6	
306	324	一括	石核	姫島産黒曜石	3.60	2.80	1.20	10.3	
306	325	一括	石核	姫島産黒曜石	2.30	3.30	0.95	6.6	
306	326	一括	石核	水晶	1.75	2.80	1.00	4.9	
306	327	一括	石核	鉄石英	3.00	3.50	2.80	27.9	
306	328	一括	横刃削器	多久産サヌカイト	9.45	(7.55)	2.20	133.3	右半欠損
307	329	一括	削器	金山産サヌカイト	(3.10)	4.85	0.80	10.7	上端欠損
307	330	一括	削器	姫島産黒曜石	2.30	2.40	0.75	3.7	
307	331	一括	削器	安山岩	2.50	(3.20)	0.50	3.6	右半欠損
307	332	一括	搔器	姫島産黒曜石	2.20	4.00	0.90	7.0	
307	333	一括	削器	腰岳系黒曜石	3.95	2.50	0.40	2.9	
307	334	一括	打製石斧	緑泥片岩	(2.70)	5.35	0.75	11.9	刃部のみ
307	335	一括	打製石斧	安山岩	(4.90)	(6.75)	1.70	80.6	基部のみ
307	336	一括	打製石斧	緑泥片岩	6.50	3.85	1.10	33.3	
307	337	一括	打製石斧	緑泥片岩	9.25	5.10	1.70	110.5	基部微欠
307	338	一括	打製石斧	緑泥片岩	9.40	4.95	1.35	102.2	刃部欠損
307	339	一括	打製石斧	角閃石安山岩	9.30	6.25	1.30	82.3	
307	340	一括	打製石斧	凝灰岩	11.30	5.70	1.60	117.8	
307	341	一括	磨製石斧	蛇紋岩	(10.15)	(5.10)	2.30	154.8	裏面・基部欠
308	342	一括	磨製石斧	緑泥片岩	7.51	11.42	1.45	188.0	
307	343	一括	磨製石斧	蛇紋岩	(4.95)	5.30	(1.20)	47.9	刃部のみ
342	344	一括	磨製石斧	緑泥片岩	(5.30)	5.00	1.10	38.2	基部欠損
308	345	一括	敲石	砂岩	8.50	(6.30)	2.80	283.0	被熱
308	346	一括	台石	凝灰岩	12.90	10.10	6.60	89.2	
308	347	一括	砥石	砂岩	(10.00)	10.00	6.20	430.8	
308	348	一括	石皿	滑石	(径6.81)	-	1.55	18.5	完形の1/4
308	349	一括	紡錘車	蛇紋岩	4.25	(0.90)	1.60	20.9	左欠損

表 7 法垣遺跡出土石器器種別石材別組成表

器種	石材	姫島産 黒曜石	腰岳 系Ob	針尾 系Ob	Sn	多久 産Sn	金山 産Sn	チャ ート	玉髓	水晶	鉄石 英	安山岩	角閃石 安山岩	緑泥 片岩	蛇紋 岩	結晶 片岩	硬砂 岩	砂岩	凝灰 岩	泥岩	花崗 岩	滑石	メノウ	合 計
石 鏃		79	4			10	3	1				3											1	101
		73.7	2.5			7.3	1.7	0.3				2.1											1.0	88.6
石鏃 未成品		19	1																					20
		26.8	1.2																					28.0
削 器		12	1				1					1	1											16
		190.5	2.9				10.7					3.6	102.0											309.7
搔 器		4	1		1													1						7
		15.0	5.6		72.7													10.4						103.7
横刃削器						2	1					1		2										6
						268.3	11.4					23.0		94.5										397.2
抉入削器		1																						1
		3.2																						3.2
石 匙		6				1	2					2												11
		26.7				16.3	43.6					20.8												107.4
磨 石												2	11											13
												4537.0	12052.3											16589.3
敲 石													3					1						4
													6919.0					283.0						7202.0
磨石兼 敲石													10											10
													16209.0											16209.0
凹 石												1	6											7
												5792.0	33808.0											39600.0
台 石												1	18						2					21
												8688.0	140240.3						220.7					149149.0
打製石斧							1					3	17	20		1			1	1				44
							12.3					372.1	3329.6	2585.8		174.6			117.8	256.9				6849.1
打製石斧 未成品					2																			2
					739.2																			739.2
磨製石斧														7	4	1	1							13
														1297.9	626.7	111.4	197.8							2233.8
石 核		13	1	1		1			1	1	2													20
		458.2	8.9	5.8		35.2			9.2	4.9	61.8													584.0
剥 片					4																			4
					381.4																			381.4
使用痕 剥片		3													2									5
		50.8													58.9									109.7
縦長剥片		1																						1
		10.3																						10.3
石 錐		12			1	1						1												15
		21.8			2.5	3.5						6.5												34.3
楔形石器		1	1																					2
		4.7	3.2																					7.9
石製円盤													1											1
													160.9											160.9
砥 石													2			1		1			2			7
													165.4			35.4		430.8	150.5		238.0			1020.1
石包丁																				1				1
																				32.2				32.2
石 鐘												1												1
												69.6												69.6
石 皿																						1		1
																						18.5		18.5
球状耳飾																						1		1
																						4.7		4.7
三稜 尖頭器												1												1
												10.0												10.0
ナイフ形 石 器		3																						3
		4.0																						10.0
石 鍋																						7		7
																						1046.7		1046.7
紡錘車														1	1									2
														20.9	20.4									41.3
円 磔													1											1
													14111.0											14111.0
合 計		151	12	1	8	15	8	1	1	1	2	17	70	29	7	4	1	3	4	2	2	9	1	349
		881.7	28.3	5.8	1195.8	330.6	79.7	0.3	9.2	4.9	61.8	19524.7	227097.5	3978.2	706.5	341.8	197.8	724.2	489.0	289.1	238.0	1069.9	1.0	257255.8

## 第4章 自然科学分析

### 放射性炭素年代測定 (1)

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・黒沼保子

#### 1. はじめに

中津市に所在する法垣遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

試料は、いずれも掘立柱建物から出土した炭化材である。SB14ではPit4の掘方最下層から1点と、Pit5の掘方上層と柱痕の覆土から各1点、SB21ではPit3の柱痕の覆土と掘方から各1点、SB24ではPit1の柱痕の覆土と掘方から各1点とPit2の掘方から1点、SB25ではPit5の柱痕の覆土と掘方から各1点の、合計10点である。考古学的な所見では、時期は縄文時代後期と推定されている。

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、図1と図2に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-25940	遺構：SB14 位置：Pit4 層位：掘方最下層 試料No.66	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25941	遺構：SB14 位置：Pit5 層位：掘方上層 試料No.71	種類：炭化材（不明） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い
PLD-25942	遺構：SB14 位置：Pit5 層位：柱痕 試料No.76	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い
PLD-25943	遺構：SB21 位置：Pit3 層位：柱痕 試料No.なし	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25944	遺構：SB21 位置：Pit3 層位：掘方 試料No.59	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25945	遺構：SB24 位置：Pit1 層位：柱痕 試料No.81	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25946	遺構：SB24 位置：Pit1 層位：掘方 試料No.60	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25947	遺構：SB24 位置：Pit2 層位：掘方 試料No.61	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） 処理備考：状態悪い
PLD-25948	遺構：SB25 位置：Pit5 層位：柱痕 試料No.62	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-25949	遺構：SB25 位置：Pit5 層位：掘方 試料No.52	種類：炭化材（不明） 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

#### 4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して、遺構ごとに結果を整理する。縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2008）を、弥生時代については藤尾（2009）を参照した。

SB14では、Pit4の掘方最下層から出土した炭化材No.66 (PLD-25940) は、2013-1999 cal BC(3.1%)および1979-1882 cal BC(92.3%)であった。これは縄文時代後期前葉に相当する。Pit5の掘方上層から

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-25940 SB14Pit4 試料No.66	-27.81 $\pm$ 0.31	3574 $\pm$ 21	3575 $\pm$ 20	1945BC(68.2%)1894BC	2013BC( 3.1%)1999BC 1979BC(92.3%)1882BC
PLD-25941 SB14Pit5 試料No.71	-22.99 $\pm$ 0.32	3448 $\pm$ 26	3450 $\pm$ 25	1869BC(13.7%)1846BC 1775BC(34.2%)1733BC 1719BC(20.3%)1693BC	1879BC(19.1%)1838BC 1830BC(11.1%)1791BC 1786BC(65.1%)1687BC
PLD-25942 SB14Pit5 試料No.76	-28.59 $\pm$ 0.31	3468 $\pm$ 22	3470 $\pm$ 20	1875BC(25.6%)1843BC 1817BC(12.1%)1799BC 1780BC(30.5%)1744BC	1880BC(89.0%)1738BC 1714BC( 6.4%)1697BC
PLD-25943 SB21Pit3 試料No.なし	-26.20 $\pm$ 0.27	3531 $\pm$ 22	3530 $\pm$ 20	1909BC(32.7%)1875BC 1842BC(20.8%)1819BC 1798BC(14.8%)1780BC	1935BC(45.8%)1860BC 1854BC(49.6%)1772BC
PLD-25944 SB21Pit3 試料No.59	-26.60 $\pm$ 0.30	3558 $\pm$ 22	3560 $\pm$ 20	1935BC(68.2%)1886BC	1971BC(86.2%)1875BC 1844BC( 5.8%)1817BC 1798BC( 3.4%)1780BC
PLD-25945 SB24Pit1 試料No.81	-30.69 $\pm$ 0.18	3628 $\pm$ 20	3630 $\pm$ 20	2022BC(68.2%)1957BC	2112BC( 1.5%)2102BC 2036BC(93.9%)1925BC
PLD-25946 SB24Pit1 試料No.60	-26.93 $\pm$ 0.18	3634 $\pm$ 21	3635 $\pm$ 20	2027BC(68.2%)1966BC	2120BC( 5.1%)2096BC 2041BC(90.0%)1937BC 1932BC( 0.3%)1930BC
PLD-25947 SB24Pit2 試料No.61	-28.28 $\pm$ 0.16	3696 $\pm$ 20	3695 $\pm$ 20	2134BC(20.2%)2112BC 2102BC(22.4%)2077BC 2064BC(25.6%)2036BC	2190BC( 1.4%)2181BC 2143BC(94.0%)2026BC
PLD-25948 SB25Pit5 試料No.62	-26.57 $\pm$ 0.30	3559 $\pm$ 23	3560 $\pm$ 25	1937BC(68.2%)1886BC	1974BC(86.1%)1875BC 1844BC( 5.8%)1817BC 1798BC( 3.4%)1780BC
PLD-25949 SB25Pit5 試料No.52	-24.83 $\pm$ 0.30	2268 $\pm$ 20	2270 $\pm$ 20	392BC(57.6%)359BC 272BC(10.6%)262BC	398BC(61.0%)353BC 291BC(34.4%)231BC

出土した炭化材No.71 (PLD-25941) は、1879-1838 cal BC(19.1%)および1830-1791 cal BC(11.1%)、1786-1687 cal BC(65.1%)であった。これは縄文時代後期前葉～中葉に相当する。同じくPit5の柱痕から出土した炭化材No.76 (PLD-25942) は、1880-1738 cal BC(89.0%)および1714-1697 cal BC(6.4%)であった。これは縄文時代後期前葉～中葉に相当する。

SB21では、Pit3の柱痕から出土した炭化材 (PLD-25943) は、1935-1860 cal BC(45.8%)および1854-1772 cal BC(49.6%)であった。これは縄文時代後期前葉～中葉に相当する。同じくPit3の掘方から出土した炭化材No.59 (PLD-25944) は、1971-1875 cal BC(86.2%)および1844-1817 cal BC(5.8%)、1798-1780 cal BC(3.4%)であった。これは縄文時代後期前葉～中葉に相当する。

SB24では、Pit1の柱痕から出土した炭化材No.81 (PLD-25945) は、2112-2102 cal BC(1.5%)および2036-1925 cal BC(93.9%)であった。これは縄文時代後期前葉に相当する。同じくPit1の掘方から出土した炭化材No.60 (PLD-25946) は、2120-2096 cal BC(5.1%)および2041-1937 cal BC(90.0%)、1932-1930 cal BC(0.3%)であった。これは縄文時代後期前葉に相当する。Pit2の掘方から出土した炭化材No.61 (PLD-25947) は、2190-2181 cal BC(1.4%)および2143-2026 cal BC(94.0%)であった。こ



れは縄文時代後期前葉に相当する。

SB25では、Pit5の柱痕から出土した炭化材No.62 (PLD-25948) は、1974-1875 cal BC(86.1%)および1844-1817 cal BC(5.8%)、1798-1780 cal BC(3.4%)であった。これは縄文時代後期前葉～中葉に相当する。同じくPit5の掘方から出土した炭化材No.52 (PLD-25949) は、398-353 cal BC(61.0%)および291-231 cal BC(34.4%)であった。これは弥生時代前期後葉～中期前葉に相当し、考古学的な推定年代よりも新しい暦年代範囲を示した。炭化材No.52 (PLD-25949) が上層から混入した試料である可能性、もしくは同じくPit5の柱痕から出土した炭化材No.62 (PLD-25948) が他の層から混入した試料である可能性も考えられるため、考古学的な推定年代の根拠となった遺物の出土状況とあわせ検討する必要がある。

SB25のPit5の炭化材No.62 (PLD-25948) のみ弥生時代前期後葉～中期前葉の暦年代範囲を示したが、それ以外は縄文時代後期前葉もしくは後期前葉～中葉であり、考古学的な所見による推定時期の縄文時代後期とも整合的であった。また、SB25以外は、同一遺構内およびPit内における試料の暦年代範囲は近い値を示した。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料では、いずれの試料も最終形成年輪を欠いており、年代測定の結果が古木効果の影響を受けて木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性があるが、古木効果影響は少ないと推測される。

## 引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－」: 257-269, 同成社.

藤尾慎一郎 (2009) 弥生時代の実年代. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54, 雄山閣.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

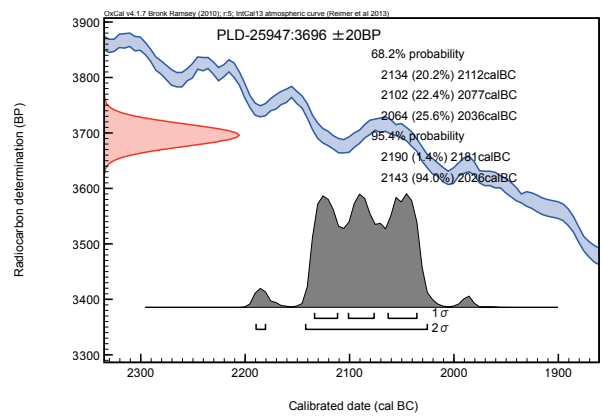
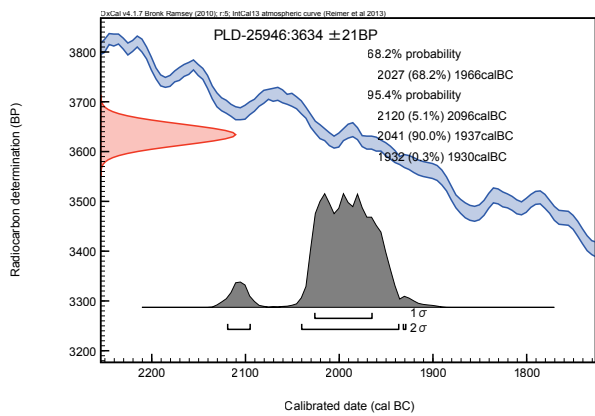
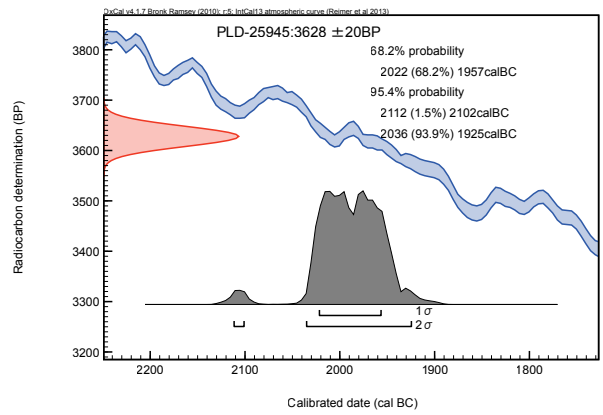
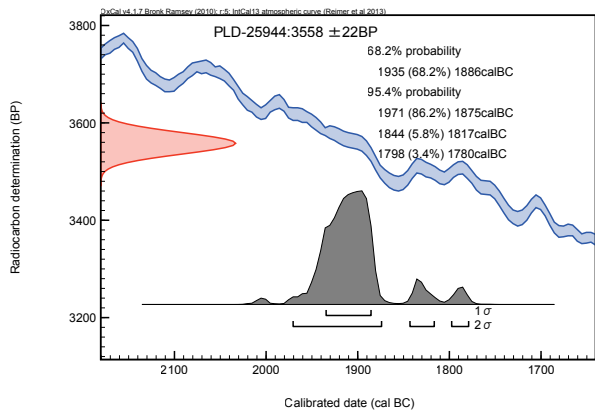
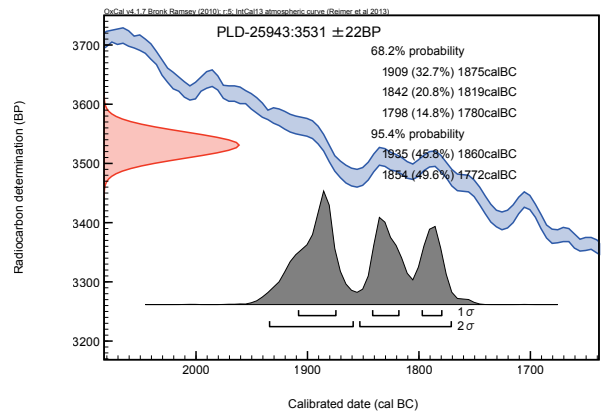
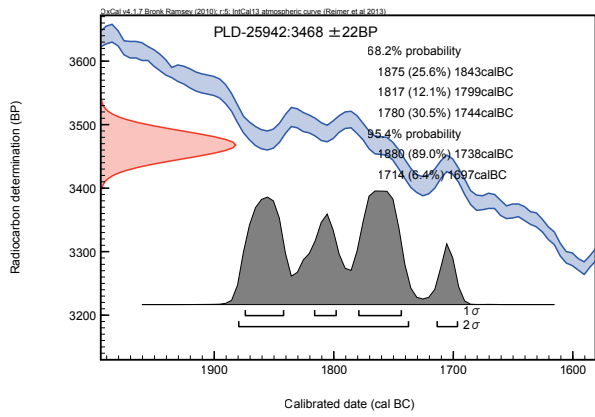
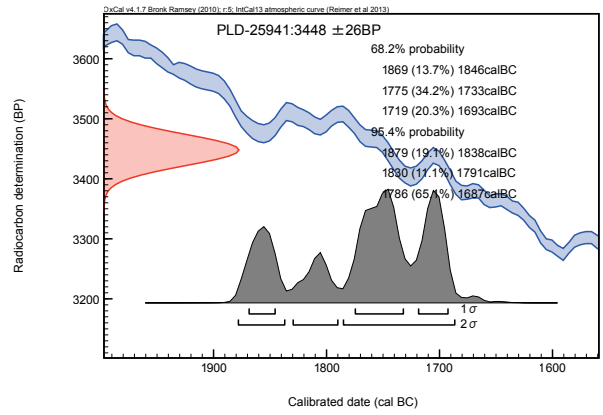
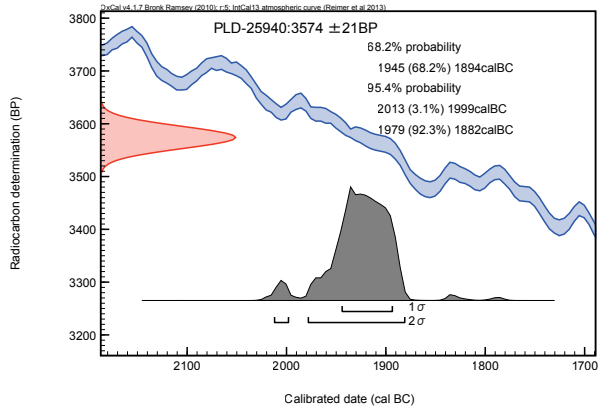


図1 暦年較正結果 (1)

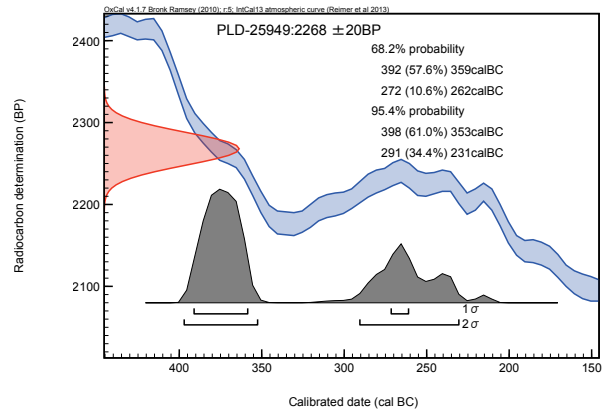
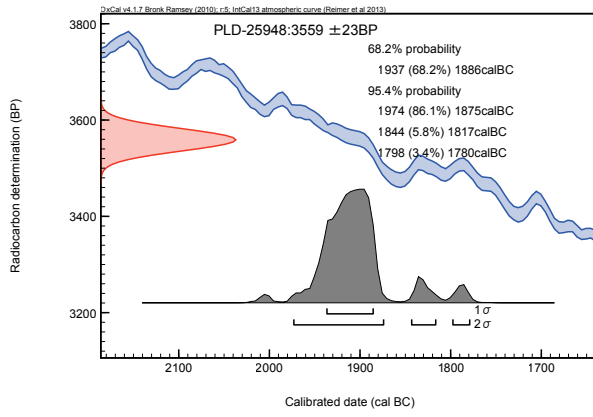


図2 暦年較正結果 (2)

## 放射性炭素年代測定 (2)

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

小林紘一・Zaur Lomtadze・小林克也

### 1. はじめに

大分県中津市に位置する法垣遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

試料は掘立柱建物跡であるSB21のPIT4柱根から出土した、炭化したカラスザンショウ種子 (試料No.1: PLD-30727) と、炭化したコムギ種子 (試料No.2: PLD-30728)、SB24のPIT1掘方から出土した、炭化したカラスザンショウ種子 (試料No.3: PLD-30729) と、炭化したイネ種子 (試料No.4: PLD-30730)、竪穴住居跡であるSH24の南北ベルト南半から出土した、炭化したカラスザンショウ種子 (試料No.5: PLD-30731)、SB14のPIT5柱根から出土した、炭化したカラスザンショウ種子 (試料No.6: PLD-30732) の、計6点である。発掘調査所見では、いずれの遺構も縄文時代後期中葉頃と考えられている。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30727	遺構: SB21PIT4柱根 試料No.1	種類: 炭化種実 (カラスザンショウ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30728	遺構: SB21PIT4柱根 試料No.2	種類: 炭化種実 (コムギ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30729	遺構: SB24PIT1掘方 試料No.3	種類: 炭化種実 (カラスザンショウ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30730	遺構: SB24PIT1掘方 試料No.4	種類: 炭化種実 (イネ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30731	遺構: SH24南北ベルト南半 試料No.5	種類: 炭化種実 (カラスザンショウ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30732	遺構: SB14PIT5柱根 試料No.6	種類: 炭化種実 (カラスザンショウ種子) 試料の性状: 種実 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って

暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代 (yrBP) の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い (<sup>14</sup>Cの半減期  $5730 \pm 40$ 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$  暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	<sup>14</sup> C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-30727 SB21PIT4柱根 カラスザンショウ種子 試料No.1	-25.85 $\pm$ 0.21	3522 $\pm$ 19	3520 $\pm$ 20	1893-1873 cal BC (19.6%) 1844-1814 cal BC (27.9%) 1801-1778 cal BC (20.7%)	1917-1771 cal BC (95.4%)
PLD-30728 SB21PIT4柱根 コムギ種子 試料No.2	-22.32 $\pm$ 0.23	351 $\pm$ 17	350 $\pm$ 15	1483-1522 cal AD (32.2%) 1575-1625 cal AD (36.0%)	1466-1527 cal AD (44.1%) 1555-1634 cal AD (51.3%)
PLD-30729 SB24PIT1掘方 カラスザンショウ種子 試料No.3	-26.04 $\pm$ 0.19	3494 $\pm$ 22	3495 $\pm$ 20	1879-1862 cal BC (12.7%) 1851-1837 cal BC (10.2%) 1831-1772 cal BC (45.4%)	1886-1750 cal BC (95.4%)
PLD-30730 SB24PIT1掘方 イネ種子 試料No.4	-25.38 $\pm$ 0.16	1174 $\pm$ 17	1175 $\pm$ 15	778-791 cal AD (13.8%) 805-842 cal AD (27.1%) 861-889 cal AD (27.2%)	774-894 cal AD (93.8%) 932-937 cal AD (1.6%)
PLD-30731 SH24南北ベルト南半 カラスザンショウ種子 試料No.5	-25.58 $\pm$ 0.17	3505 $\pm$ 20	3505 $\pm$ 20	1882-1870 cal BC (10.5%) 1845-1810 cal BC (31.5%) 1804-1776 cal BC (26.2%)	1890-1756 cal BC (95.4%)
PLD-30732 SB14PIT5柱根 カラスザンショウ種子 試料No.6	-24.74 $\pm$ 0.19	3433 $\pm$ 20	3435 $\pm$ 20	1754-1692 cal BC (68.2%)	1871-1844 cal BC (6.8%) 1812-1803 cal BC (1.1%) 1776-1682 cal BC (86.8%) 1674-1667 cal BC (0.8%)

#### 4. 考察

以下、 $2\sigma$  暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して結果を整理する。なお、暦年代と縄文土器との対応については、小林 (2008)、工藤 (2012)、水之江 (2008) を参照した。

SB21のPIT4柱根から出土した試料No.1 (カラスザンショウ種子: PLD-30727) は1917-1771 cal BC (95.4%)の暦年代を示した。これは、縄文時代後期中葉に相当する。また同一遺構から出土した試料No.2(コムギ種子: PLD-30728) は1466-1527 cal AD (44.1%)および1555-1634 cal AD (51.3%)

の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。発掘調査所見では、SB21は縄文時代後期中葉と考えられており、発掘調査所見と試料No.1の測定結果は整合的である。しかし試料No.2は大きく時期が離れており、試料No.2は後世の種実が混入した可能性が高い。なお、いずれの試料も種実であり、測定結果は結実年代を示す。

SB24のPIT1掘方から出土した試料No.3（カラスザンショウ種子：PLD-30729）は1886-1750 cal BC (95.4%)の暦年代を示した。これは、縄文時代後期中葉に相当する。また同一遺構から出土した試料No.4（イネ種子：PLD-30730）は774-894 cal AD (93.8%)および932-937 cal AD (1.6%)の暦年代を示した。これは、奈良時代～平安時代中期頃に相当する。発掘調査所見では、SB24は縄文時代後期中葉と考えられており、発掘調査所見と試料No.3の測定結果は整合的である。しかし試料No.4は大きく時期が離れており、試料No.4は後世の種実が混入した可能性が高い。なお、いずれの試料も種実であり、測定結果は結実年代を示す。

SH24の南北ベルト南半から出土した試料No.5（カラスザンショウ種子：PLD-30731）は1890-1756 cal BC (95.4%)、SB14のPIT5柱根から出土した試料No.6（カラスザンショウ種子：PLD-30732）は1871-1844 cal BC (6.8%)、1812-1803 cal BC (1.1%)、1776-1682 cal BC (86.8%)、1674-1667 cal BC (0.8%)の暦年代を示した。これは縄文時代後期中葉に相当する。発掘調査所見では、SH24およびSB14は縄文時代後期中葉と考えられており、発掘調査所見と測定結果は整合的である。なお、いずれの試料も種実であり、測定結果は結実年代を示す。

## 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史. 373p, 新泉社.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.
- 水之江和同 (2008) 九州磨消縄文系土器. 小林達雄編「総覧 縄文土器」: 666-673, アム・プロモーション.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliadason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

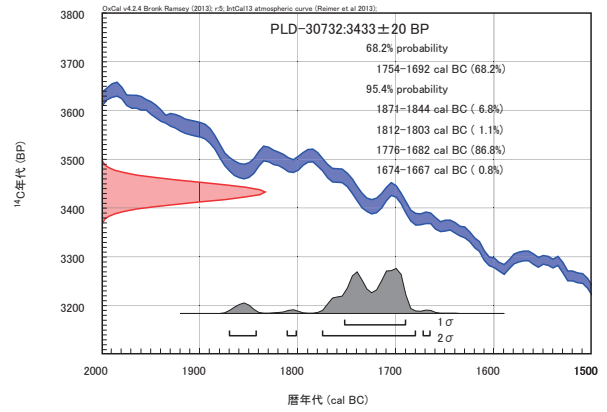
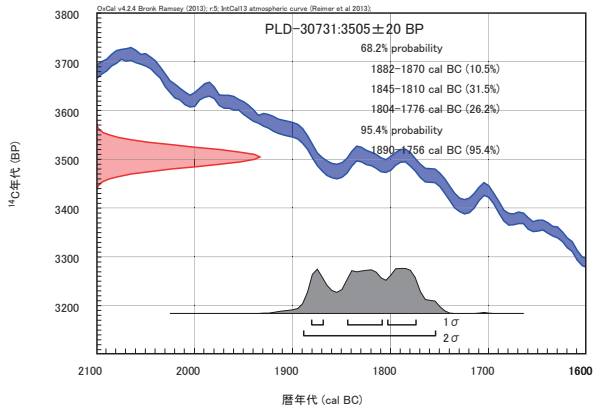
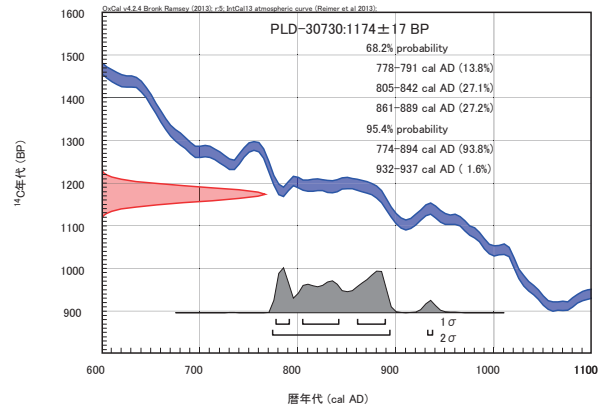
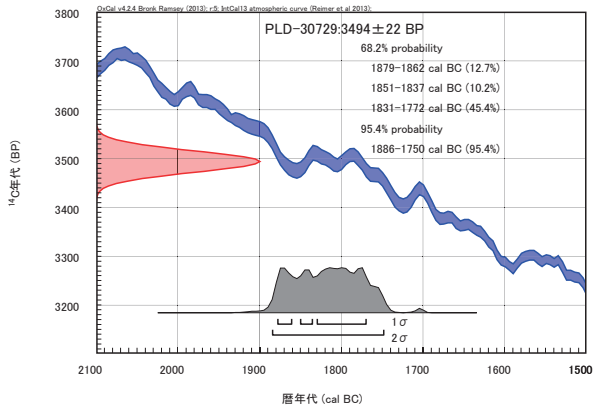
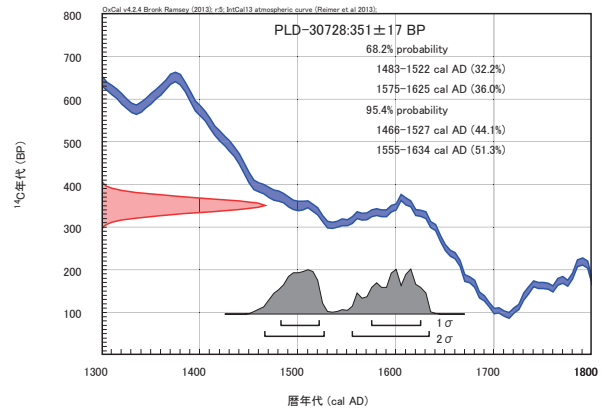
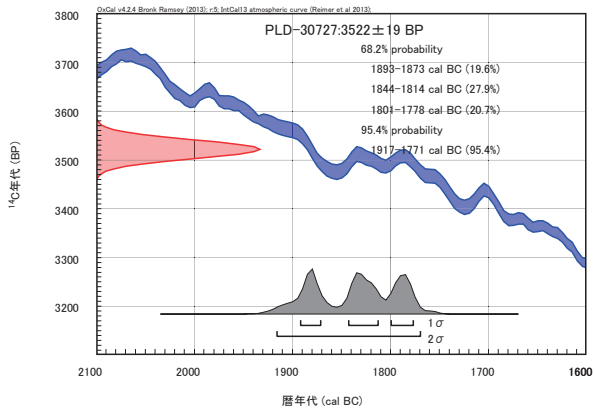


圖 1 曆年較正結果

# 法垣遺跡遺構埋土のリン・カルシウム分析

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

## 1. はじめに

法垣遺跡で検出された遺構より採取した土について、蛍光X線分析によるリン・カルシウム分析を行い、骨の痕跡が残っていないかを調査した。

## 2. 試料と方法

分析対象となる試料は、24号住居跡より出土した土器内の埋土 (No.1)、No.1の比較試料である24号住居跡埋土 (No.2)、14号掘立柱建物の柱痕跡埋土 (No.3)、No.3の比較試料である14号掘立柱建物の掘方埋土 (No.4) 計4点である (表1)。

表1 分析対象一覧

No.	遺構	層位	水洗量	備考
1	24号住居跡	土器内埋土	500cc	
2		埋土	300cc	比較試料
3	14号掘立柱建物	柱痕跡埋土	800cc	
4		掘方埋土	300cc	比較試料

分析は、藤根ほか (2008) の方法に従って行った。この方法は、元素マッピング分析によりリン、カルシウムを多く含む箇所を面的に検出し直接測定できるという利点がある。測定試料は、乾燥後、極軽く粉碎して塩化ビニル製リングに充填し、油圧プレス機で20t・1分以上プレスしたものを作製、使用した。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置である(株)堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1.00mAのロジウム (Rh) ターゲット、X線ビーム径が100 μ mまたは10 μ m、検出器は高純度Si検出器 (Xerophy) で、検出可能元素はナトリウム (Na) ~ウラン (U) である。また、試料ステージを走査させながら測定することにより元素の二次元的な分布画像を得る、元素マッピング分析も可能である。

本分析では、まず元素マッピング分析を行い、元素の分布図を得た上で、リン (P) のマッピング図において輝度の高い箇所を選び、ポイント分析を行った。測定条件は、元素マッピング分析では50kV、1.00mA、ビーム径100 μ m、測定時間2000sを5回走査、パルス処理時間P3に、ポイント分析では50kV、0.10 ~ 0.34mA (自動設定)、ビーム径100 μ m、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定して行った。定量計算は、装置付属ソフトによる標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法で行っており、半定量値である。

また、4点の試料について、0.25mmの篩で埋土の水洗篩分けを別途行った。水洗量を表1に示す。

## 3. 結果

試料のリンおよびカルシウムの各マッピング図にポイント分析を行った各5ヶ所の位置を示した図を図版1に、ポイント分析結果より酸化物の形で表した各元素半定量値を表2に示す。なお、元素マッピング図は、元素ごとに輝度を相対的に比較できるように、各試料のブライトネスとコントラストを調整した。

分析の結果、24号住居跡土器内埋土 (No.1) はリン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が16.58 ~ 30.27%、カルシウム (CaO) が10.78 ~ 32.53%の値を示した。

24号住居跡埋土 (No.2) は、リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が16.16 ~ 35.40%、カルシウム (CaO) が12.22 ~ 27.62%の値を示した。



14号掘立柱建物の柱痕跡埋土 (No.3) は、リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が0.82～13.02%、カルシウム (CaO) が0.56～13.22%の値を示した。

14号掘立柱建物の掘方埋土 (No.4) は、リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) が0.74～2.43%、カルシウム (CaO) が0.36～2.10%の値を示した。

また、水洗選別の結果、No.1～No.3からは骨とみられる小破片を検出した。この小破片について蛍光X線分析を実施した結果を、図1に示す。いずれもほぼリンとカルシウムからなる化学組成であった。

表2 半定量分析結果 (mass%)

No.	遺構	ポイント	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO <sub>2</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	Y <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZrO <sub>2</sub>
1	24号住居跡	a	2.86	12.91	33.13	<b>26.74</b>	0.18	0.86	<b>14.36</b>	0.78	0.25	7.84	0.02	0.03	0.01	0.04
		b	1.10	17.05	36.33	<b>22.26</b>	0.14	0.85	<b>12.03</b>	0.80	0.31	9.04	0.02	0.03	0.01	0.05
		c	2.66	9.19	20.97	<b>30.27</b>	0.19	0.36	<b>32.53</b>	0.54	0.13	3.00	0.01	0.10	0.02	0.03
		d	0.98	15.41	42.97	<b>16.58</b>	0.16	1.33	<b>10.78</b>	1.46	1.48	8.73	0.02	0.03	0.01	0.04
		e	1.50	16.41	39.00	<b>17.43</b>	0.08	0.86	<b>16.81</b>	0.71	0.36	6.70	0.01	0.08	0.01	0.04
2	24号住居跡	a	0.68	8.20	37.42	<b>26.57</b>	0.06	0.91	<b>19.65</b>	0.72	0.43	5.26	0.02	0.03	0.01	0.03
		b	0.66	6.23	15.49	<b>35.40</b>	0.19	0.32	<b>27.62</b>	1.18	0.39	12.40	0.01	0.05	0.01	0.04
		c	1.31	16.79	41.48	<b>16.16</b>	0.25	0.88	<b>14.46</b>	1.07	0.71	6.69	0.01	0.04	0.01	0.14
		d	1.61	12.86	32.71	<b>22.53</b>	0.13	0.88	<b>16.74</b>	0.83	1.19	10.43	0.02	0.03	0.01	0.03
		e	1.11	14.55	36.63	<b>23.24</b>	0.20	1.08	<b>12.22</b>	1.06	1.33	8.43	0.01	0.07	0.01	0.04
3	14号掘立柱建物	a	1.19	15.64	47.70	<b>13.02</b>	0.13	0.93	<b>13.22</b>	0.78	0.91	6.38	0.01	0.03	0.01	0.04
		b	0.73	21.80	60.27	<b>0.82</b>	0.33	0.93	<b>0.56</b>	0.78	0.18	13.52	0.02	0.03	0.01	0.03
		c	0.74	18.91	55.53	<b>8.97</b>	0.08	1.70	<b>1.21</b>	1.41	0.18	11.13	0.02	0.07	0.01	0.04
		d	0.12	22.73	46.26	<b>10.44</b>	0.20	0.94	<b>4.49</b>	1.07	0.99	12.63	0.02	0.05	0.01	0.04
		e	0.74	24.04	60.59	<b>5.06</b>	0.21	1.00	<b>1.33</b>	0.94	0.06	5.85	0.02	0.12	0.01	0.03
4	14号掘立柱建物	a	0.74	23.64	58.85	<b>2.43</b>	0.19	1.18	<b>1.05</b>	0.91	0.39	10.53	0.02	0.04	0.00	0.04
		b	2.05	23.71	56.00	<b>1.04</b>	0.26	1.10	<b>2.10</b>	1.27	0.16	12.15	0.02	0.06	0.01	0.05
		c	0.67	27.73	53.30	<b>1.34</b>	0.30	0.69	<b>0.64</b>	1.53	0.11	13.60	0.01	0.03	0.01	0.04
		d	0.91	19.36	69.31	<b>0.74</b>	0.19	1.42	<b>0.36</b>	0.61	0.65	6.38	0.01	0.01	0.01	0.04
		e	0.75	22.90	57.19	<b>1.24</b>	0.30	1.12	<b>0.52</b>	1.72	0.14	14.03	0.01	0.03	0.01	0.05

#### 4. 考察

骨や歯は、ハイドロキシアパタイト Ca<sub>5</sub>(PO<sub>4</sub>)<sub>3</sub>OHが主成分であり、すなわち蛍光X線分析ではリン (P) とカルシウム (Ca) が共に高く検出される。ただし、土壌中のリンとカルシウムは鉱物由来の可能性も考慮する必要があり、特にカルシウムは一般的にもともと土砂中に多く含まれている元素で、注意を要する。さらに、貝殻はもちろん、炭化材なども蛍光X線分析では高いカルシウム含有量を示す。このように、カルシウムのみを検出では骨由来であるか骨以外のもの由来であるかを判断し難いため、分析ではリンを中心に検討した。また、埋没した時には骨が存在していたが、埋没中に分解拡散が進行し、現状ではほとんどリンが検出されない場合や、骨からビビアナイト Fe<sub>3</sub>(PO<sub>4</sub>)<sub>2</sub>・8H<sub>2</sub>Oが析出しているケースのように骨由来のリンが多く検出される箇所でもカルシウムが少ないという場合もある。

今回分析した試料からは、いずれもリンが1%を超える箇所が複数箇所検出された。特にNo.1～No.3はリン、カルシウムともに極めて多く含まれており、これらは骨・歯に由来する可能性が高い。一方、No.4はリン、カルシウムともにやや多く含まれている箇所があるが、No.1～No.3のような極めて多く含まれる箇所は検出されなかった。

また、水洗選別によりNo.1～No.3から検出された小破片は、リンとカルシウムからなる化学組成で

あり、骨と考えられた。以上より、少なくともNo.1～No.3にはほぼ確実に骨が存在していたと考えられる。

また、マッピング図をみると、24号住居跡埋土（No.2）と土器内埋土（No.1）における分布はよく似ていた。土器内埋土（No.1）は、骨が確認されているものの比較試料（No.2）とほとんど分布状況に差がないため、埋土の由来について検討の余地がある。一方、14号掘立柱建物柱痕跡埋土（No.3）と比較試料の掘方埋土（No.4）においては、マッピング図におけるリンの分布に差があり、柱痕跡埋土（No.3）の方が掘方埋土（No.4）より明らかに輝度の高い箇所が多い。マッピング図、ポイント分析、水洗選別、いずれの結果においても柱痕跡埋土（No.3）と比較試料（No.4）との間に差がみられた。

## 5. おわりに

遺構より採取した土壌について分析を行った結果、24号住居跡土器内埋土と14号掘立柱建物柱痕跡埋土ともに骨・歯の存在が確認された。ただし、24号住居跡土器内からは、骨・歯は検出されたもののマッピングの分布状況は比較対象である住居内埋土と差がなく、由来に検討の余地が残った。遺構の性格については、遺物の出土状況や類例など考古学的所見も併せた総合的な判断が望まれる。

## 引用文献

藤根 久・佐々木由香・中村賢太郎（2008）蛍光X線装置を用いた元素マッピングによるリン・カルシウム分析。日本文化財科学会第25回大会研究発表要旨集，108-109。

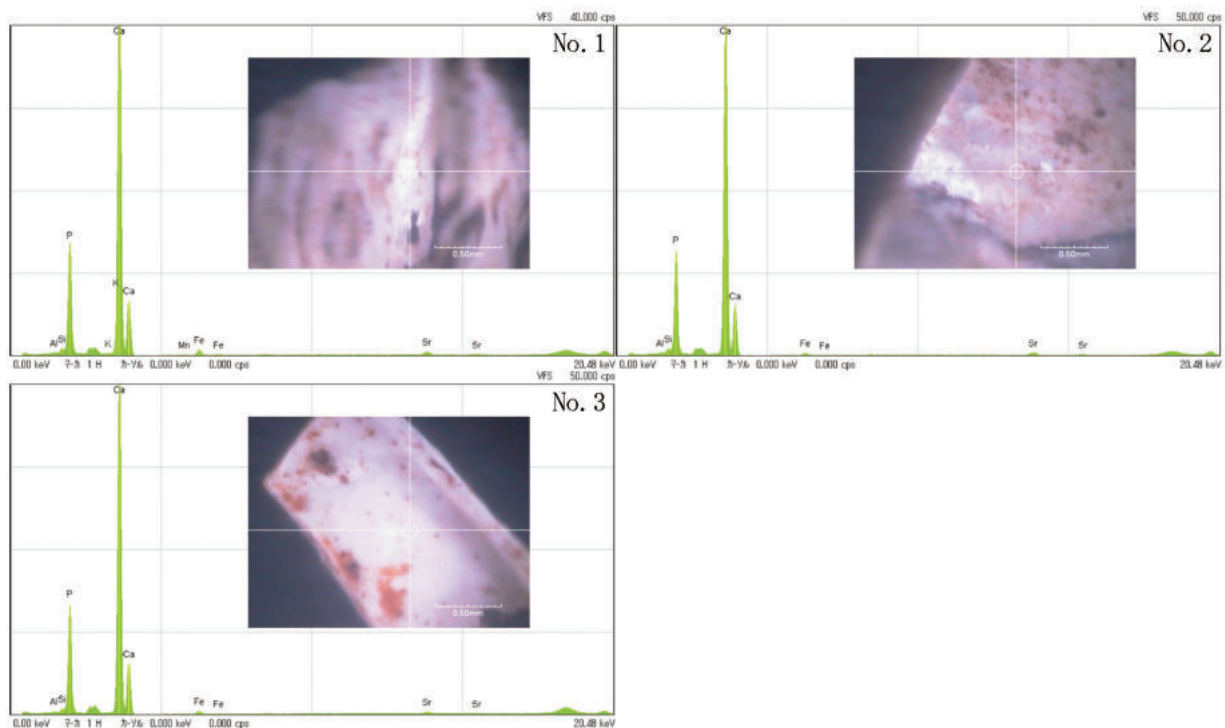
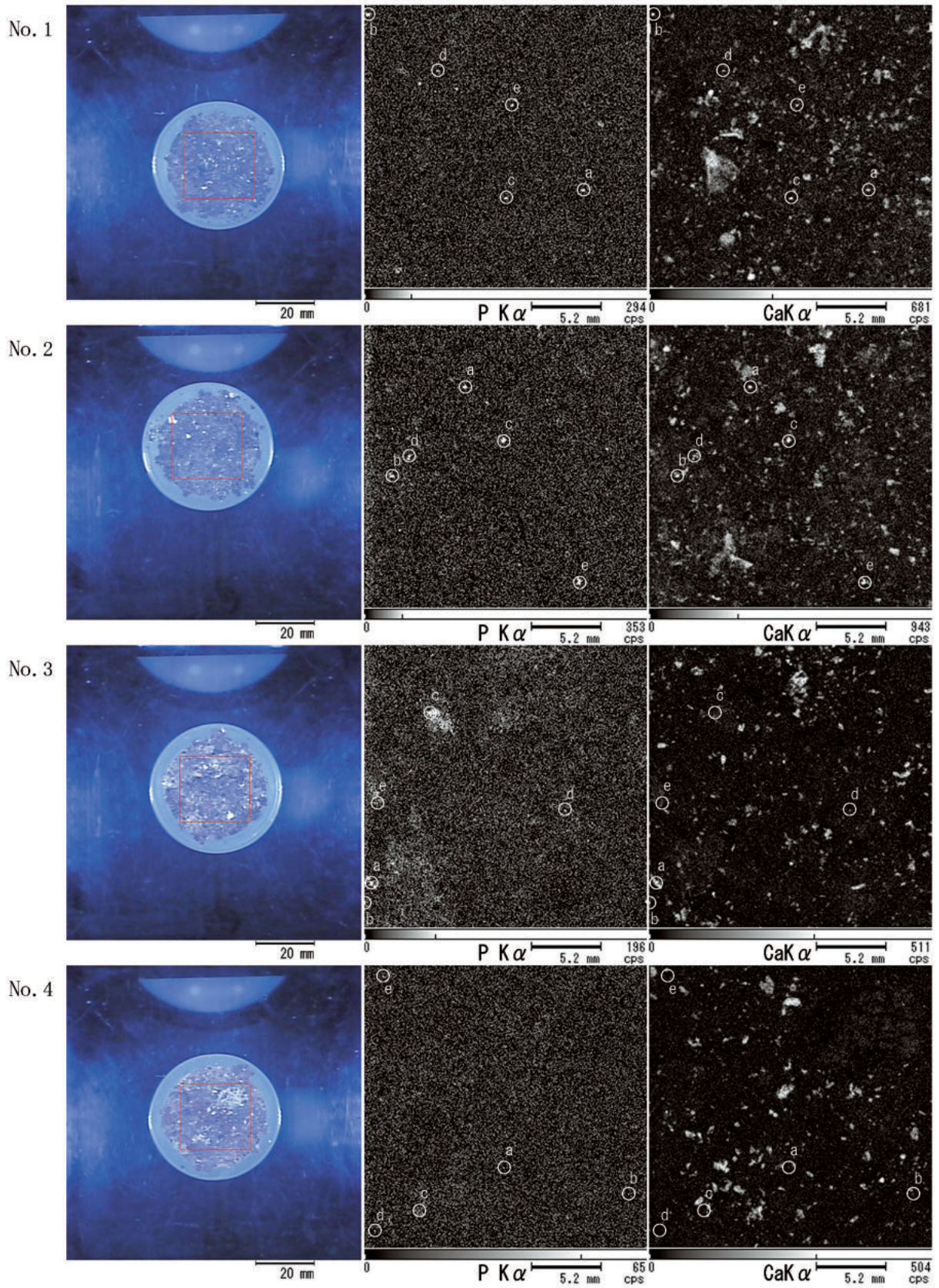


図1 土壌選別抽出物の蛍光X線分析によるリン（P）とカルシウム（Ca）の検出状況



図版1 プレス試料およびリンとカルシウムの元素マッピング図

## 第5章 特 論

### 中津市法垣遺跡周辺の地質と地形、および法垣遺跡立地との関連

竹村恵二・山田圭太郎（京都大学理学研究科附属地球熱学研究施設）

#### I. はじめに

中津市法垣遺跡は、中津平野の西側山地の八面山を源流とした犬丸川左岸、山国川の東方に広がる台地状地形の南端付近に位置している。この台地状地形の形成と山国川による浸食地形の形成、八面山から流れ出す中小河川による谷の形成、さらに完新世の海水準変動による海進・海退などを含めた地形形成が法垣遺跡の立地と大きく関係していると考えられる。ここでは、中津市法垣遺跡の立地に関連した遺跡周辺の地質と地形についてまとめる。

#### II. 大分県北部の地形と地質：中津平野の地形・地質と法垣遺跡の立地と関連して

大分県の北部に位置し、北を瀬戸内海の周防灘に面している中津市、宇佐市、豊後高田市から構成される「県北広域都市圏」は、福岡県に隣接する大分県北部は山国川（流路延長56.00km、流域面積540.0km<sup>2</sup>）を県境にする中津平野と、大分県国東半島の付け根に位置する宇佐平野が広がっており、その中央部を駅館川（流路延長14.10km、流域面積15.0km<sup>2</sup>）が周防灘に注いでいる（図1）。

この沖積平野には犬丸川（流路延長23.81km、流域面積27.8km<sup>2</sup>）、伊呂波川（流路延長18.51km、流域面積43.7km<sup>2</sup>）、寄藻川（流路延長17.12km、流域面積33.1km<sup>2</sup>）および桂川（流路延長29.46km、流域面積63.6km<sup>2</sup>）の二級河川があり、これらは周防灘に直接注いでいる。本地域は大部分が山地で占められており、全般的に平野が少ない特徴がみられ、上流部の山間地から運ばれた大量の土砂が下流部に堆積し、沖積平野を形成している。ここでは、主に中津地域の山国川および犬丸川の流域について立石・竹村（2015）を参考に記述する。なお、地質に関する内容は、産業技術総合研究所によって編集された20万分の1地質図幅「中津」（石塚ほか、2009）によるまとめを参考とした。

##### 1. 山国川流域の地形・地質概要等（図2、図3）

山国川は福岡県側の英彦山（標高1,200m）をはじめ犬ヶ岳、黒岳等の山地に囲まれ、耶馬日田英彦山国定公園及び名勝耶馬溪に指定を受けた景勝地の一部が流域に位置している。同市山国町、耶馬溪町を流下し、山移川・跡田川等の支川を合わせ、同市三光土田にて中津平野に出て、福岡県の友枝川・黒川等と合流し、山国橋下流で中津川を分派して周防灘に注いでいる。

山国川流域は福岡県と大分県の県境に位置しており、その流域面積は540km<sup>2</sup>、土地利用は山地が約91%、農地が約7%、市街地が約2%を占めている。山国川は幹川流路延長56kmの一級河川であり、河床勾配は上中流で1/200以上、下流部で1/500～1/1,000程度の急流河川である。

下宮永堰下流は感潮区間で、汽水・海水性である。大井手堰より上流は、『名勝耶馬溪山国川筋の景』に指定されており、兎跳び岩、蕨野の滝、鮎婦の滝等の奇岩、瀑布が点在し、美しい河川景観を呈している。さらに、河川周辺には、中津城、青の洞門、競秀峰等の景勝地が点在している。上流部から中流部の英彦山・宮園・金吉・三尾母・曾木・青の洞門・八面山・秣～深水・森山～下秣にかけての地質は、耶馬溪火山岩類（旧名称：耶馬溪層、耶馬溪層群など）で後期中新世－鮮新世－前期更新世（170万年前～700万年前）に噴火した非アルカリ苦鉄質火山岩類（安山岩・玄武

岩類)が広く分布している。河川沿いには同年代に形成された非海成堆積岩類の地層が分布している。凝灰角礫岩を主とする火山性碎屑岩からなり、河川沿いに分布し、現在は競秀峰に代表される侵食地形を形成している。更に耶馬溪火砕流が前期更新世の火山岩類として分布し、約100万年前に爆発的噴火により高速で流れ下った軽石や火山灰からなる火砕流である。また、鮎婦の滝付近の丘陵部には、阿蘇カルデラを形成した約9万年前の噴火によってもたらされた火砕流堆積物(この付近では非溶結火砕流堆積物)が分布している。また、鮎婦の滝付近の左岸には、後期白亜紀の花崗岩類も露出している。下流部は開析扇状地と段丘で中津平野の台地部分を形成しており、(豊前)中津層(首藤、1962:坂本・長谷、1972)と呼ばれる礫層・火山砂層が主体となっている。この地層と地形が、法垣遺跡周辺の立地環境として重要である。

海岸や河川沿いの中津平野は山国川によって運ばれる大量の土砂などによる沖積平野で、豊前一帯の中心の平野である。この沖積平野が形成されると、その広大な低湿原に条里が設定される。この条里(名称:沖代条里)は宇佐平野のものと方位が同じであるところから、この二つは同じ時期のものと推定されている。

## 2. 犬丸川流域の地形・地質概要等

犬丸川は、その源を大分県中津市三光の八面山、櫛峠に発し、はじめは西北西の方向に流下し、途中、小袋川の合流する三光森山地域で北東に大きく流向を変え、下流部において最大支川である五十石川と合流して、中津市今津において周防灘に注ぐ二級河川である。気象は瀬戸内型気候区に属し、年平均気温は16°C、年平均降雨量は1,500mm前後と安定している。流域の地質は中流域より上流一帯において、全般的にみて角閃安山岩質の火山噴出物よりなる成層の凝灰角礫岩となっている。下流の川筋は泥の沖積層で平野部は第四紀の段丘礫層である。法垣遺跡はこのような場所に位置している。

犬丸川は、山地部の丘陵地を抜けると、広々とした穀倉穀物地帯や市街部をゆったりと流下する。田園の中を流れる中流部は、河床が砂・砂利となっており、流れの緩い箇所では、砂利等の堆積地に繁茂している。穀倉地帯や市街部がある中津平野を貫流する下流部は、河床が砂・砂利であり、感潮区間となっている。谷沿いには、完新世の海進に伴った堆積物とともに、貝塚の分布が知られ、当時の海岸線が谷に沿って上流の法垣遺跡付近まで到達していたことがわかる(浦井、2016など)。

## Ⅲ. 法垣遺跡周辺の地形・立地・堆積物

法垣遺跡は、前述のように、八面山を源流とした犬丸川左岸、山国川の東南方に広がる台地状地形の東南端付近に位置している。この章ではこの場所の地形・立地に関する考察や堆積物中の火山ガラスの分析結果等をまとめる。

### 1. 法垣遺跡周辺の地形・立地

20万分の1図幅「中津」(石塚ほか、2009)によれば、法垣遺跡が位置する山国川と犬丸川に挟まれた地域は、中位段丘層(tm2)として陸域での堆積層であると考えられている。河岸段丘堆積物と記載される場合もあるが、基本的には台地を形成する扇状地性の地形である。中津台地の地層は、礫層や火山灰層が分布し、首藤(1962)により、豊前中津層とよばれ、首藤・亀山(1971)の表層地質図や坂本・長谷(1972)の地質記載等に引用された。その後、亀山・下山(1979)によって追加調査報告が行われている。それらによれば、従来、ひとつの古扇状地堆積物とされていた豊

前中津層は、下位の豊前中津層と上位の諫山層に区分され、時代の異なる二つの古扇状地堆積物によって構成されると考えられた（亀山・下山、1979）。その後の調査等の結果を踏まえて考察すると、亀山・下山（1979）論文の豊前中津層は中位段丘礫層と阿蘇4火砕流堆積物で、諫山層は阿蘇4火砕流堆積物の再堆積（ラハール）を含む砂礫層と考えることができる。その後の浸食により、谷沿いに低位段丘堆積物が、犬丸川流域に堆積し、また完新世の海進により、谷筋に海進時の堆積物が保存されていると考えられる。

現在の道の駅中津の位置は厳密には豊前中津層が作る中津台地ではない。従ってこの地点の地山は豊前中津層でも諫山層でもないと考えられる。この地点は首藤・亀山（1971）の中津図幅では「沖積層」とされているが、周辺の地形（図4、図5）や地形断面（図6、図7）からは中津台地より低い段丘面上にあるので、沖積面ではなく低位段丘面のうちのどれかに対応すると推定できる。地層は河川成の砂礫層で、上位には風積土（黄砂+降下火山灰）が薄く載っていると考えられる。その地形的な部分を利用して、法垣遺跡地点での生活が展開されたと考えられる。

## 2. 堆積物中の火山ガラスの分析結果：

遺跡断面及び周辺の地層から採取した堆積物中の火山灰起源物質の調査として、火山ガラスの含有率や屈折率の測定を実施した。この結果から、火山灰起源物質の含有の状況や火山ガラスの分布状況、地層の年代等についての情報を得ることができる。分析方法および結果の考察について報告する。

### （1）分析方法

- (a) サンプルの一部を取り出し、乾燥・計量を行った。
- (b) 計量したサンプルに5%以下の過酸化水素水を加えた。
- (c) 発泡が落ち着くまで反応させたのちに、超音波洗浄を行った。
- (d) 上澄み液が透明になるまで水を入れ替え、超音波洗浄を繰り返した。
- (e) 茶漉しに4φメッシュを挟み、試料を流し入れた。
- (f) 4φメッシュを通過する粒子は流水で流し、メッシュ上の残留物を容器に取り出し、乾燥させた。
- (g) 乾燥後、3φメッシュを用いて、粗粒試料と細粒試料に分けた。
- (h) 細粒試料を光硬化剤で封入し、偏光顕微鏡を用いて、重鉱物、軽鉱物、火山ガラス、その他の含有率を計数した。
- (i) 温度変化型屈折率測定装置(RIMS)を用いて、細粒試料中の火山ガラスの屈折率を測定した。測定は20粒子以上、屈折率分布の広いサンプルについては30粒子以上について行った。

### （2）分析結果

試料採取位置は図8に示す。まず、試料中の粒子組成分析を行った。結果は表1に示す。火山ガラスの含有率は黒ボクを除き、約10%以下と低く、明確なテフラ層準は認定できない。また、後背地が火山地帯であることを反映し、重鉱物及び軽鉱物の含有率が高い。重鉱物は角閃石類を主体とし、軽鉱物は石英・長石を主体とする。

次に、試料中の火山ガラスの屈折率測定を行った。西側断面の結果は図9に示す。火山ガラスの屈折率はすべてのサンプルにおいて1.500付近で明瞭なピークが観察された。また、黒ボクからは1.510付近でも明瞭なピークが検出された。

特にバブルウオールタイプの火山ガラスに注目すると、1.500付近に屈折率ピークを持つ火山ガラ

スは、3万年前ころに南九州の始良カルデラ起源のATテフラ（町田・新井、2003）に由来する火山ガラスと考えられる。若干ながら色硝子を含むことから少なくともAso-4起源の火山ガラスを含んでいると考えられる。特に試料005では色硝子が多く含まれる。一方で、黒ボク中の1.510付近に屈折率ピークを持つ火山ガラスは九州南方海上の鬼界カルデラ起源のK-Ahテフラ（町田・新井、2003）と考えられる。また、試料002、004、006中にも1.510付近の屈折率を持つ火山ガラスが検出された。サンプリング時のコンタミネーションの可能性がないならば、reworkによる影響があまり観察されないことから、生物によるK-Ahテフラの上位層準からの混交、あるいはK-Ahとは異なる小規模なテフラ起源の火山ガラスの可能性が考えられる。

#### IV. おわりに

中津台地周辺には、種々の時代の多くの遺跡が存在する。その立地環境は、地山や表層の地層・地形に大きく影響を受けて展開されてきたと考えられる。より詳細な人間活動と自然の関連の考察のために、詳細な調査をもとに、中津台地と沖積平野・海岸平野の自然変遷を明らかにしていくことは重要な視点である。たとえば、台地部の関係では、阿蘇4火砕流堆積物のオリジナルな地層の確認や堆積面を確定することで、この地域の中位段丘層・低位段丘層の区分等を確立することは重要である。また、完新世の海進・海退と沖積平野の成立過程も研究と人類による土地利活用の観点での調査・研究も望まれる。

なお、本報告をまとめるにあたり、元九州大学の下山正一博士および立正大学の岡順直博士に協力いただいた。記して感謝いたします。

#### 引用文献

- 石塚吉浩・尾崎正紀・星住英夫・松浦浩久・宮崎一博・名和一成・実松健造・駒澤正夫（2009）：20万分の1地質図幅「中津」。産業技術総合研究所・地質調査総合センター。
- 亀山徳彦・下山正一（1979）：大分県中津市に分布する豊前中津層の再検討，北九州大学文学部紀要 B系列（12），pp.83～91。
- 町田 洋・新井房夫（2003）：新編火山灰アトラス「日本列島とその周辺」。東大出版会。
- 坂本 亨・長谷紘和（1972）：大分県北部，中津平野の第四系。地質調査所月報，23，35-40。
- 首藤次男・亀山徳彦（1971）：5万分の1表層地質図，「中津」，福岡県。
- 首藤次男（1962）：九州の最新統諸層の吟味。－対比の基礎（九州の最新統の地史学的研究II）。地質学雑誌，68，301-312。
- 立石義孝・竹村恵二（2015）：最新の地質学体系に基づく大分県北部地域の地質～山国川流域を中心とした層序学～。GET九州（日本応用地質学会九州支部会報），No.36，2-21。
- 浦井直幸（2016）：縄文遺跡の立地から見た往時の景観・人々の動態について～大分県中津市域を中心に～。考古学は科学か、田中良之先生追悼論文集。

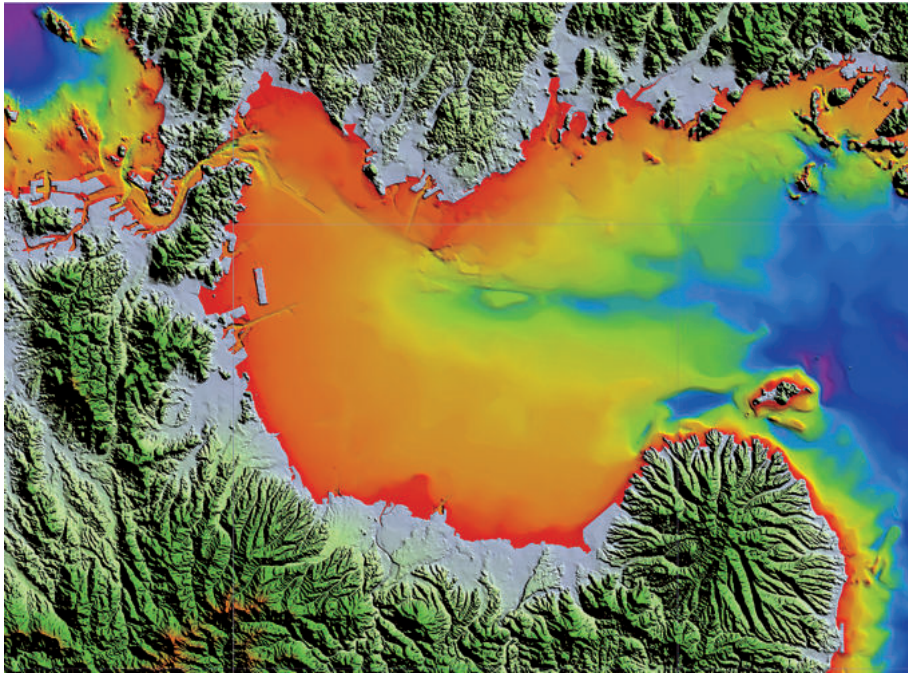


図1 周防灘周辺の陸域・海域地形と中津平野

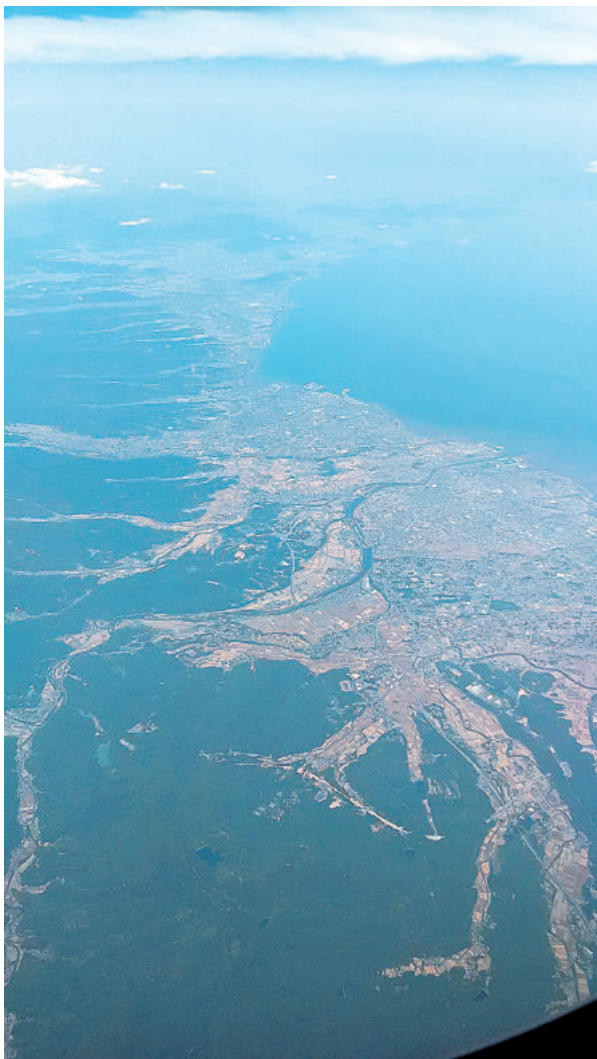


図2 中津平野から八面山までの空撮写真：中央に蛇行する山国川、上部に周防灘の瀬戸内海がみられる。

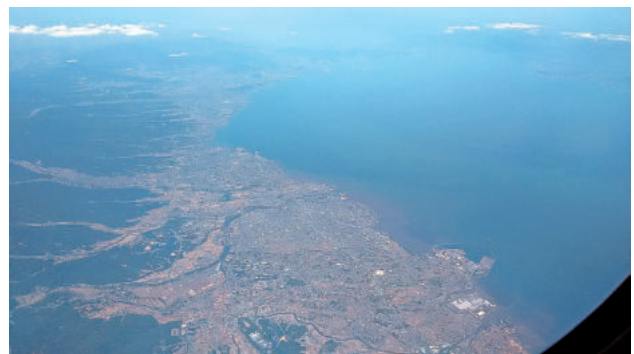


図3 山国川と中津平野部分の拡大写真





図4 八面山から山国川、犬丸川流域のDEMによる段彩図、傾斜強度図に水系分布を重ね合わせた図

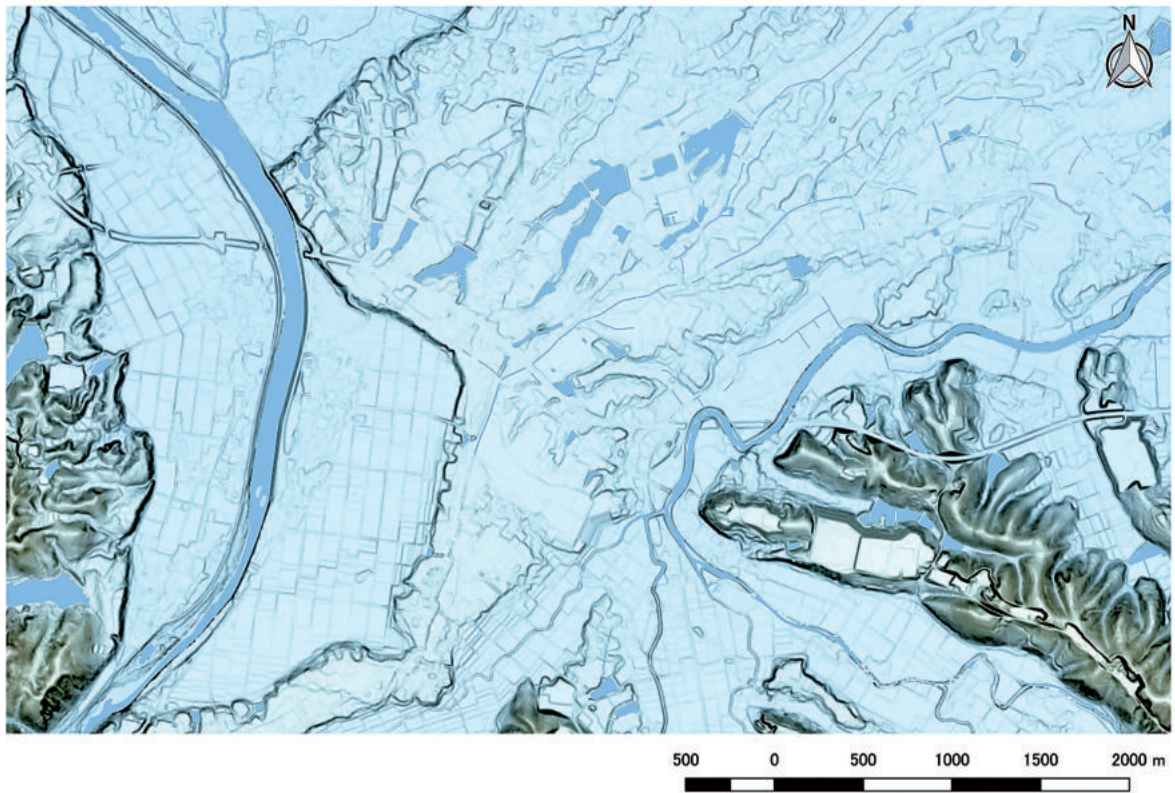


図5 法垣遺跡付近のDEMによる段彩図、傾斜強度図に水系分布を重ね合わせた図

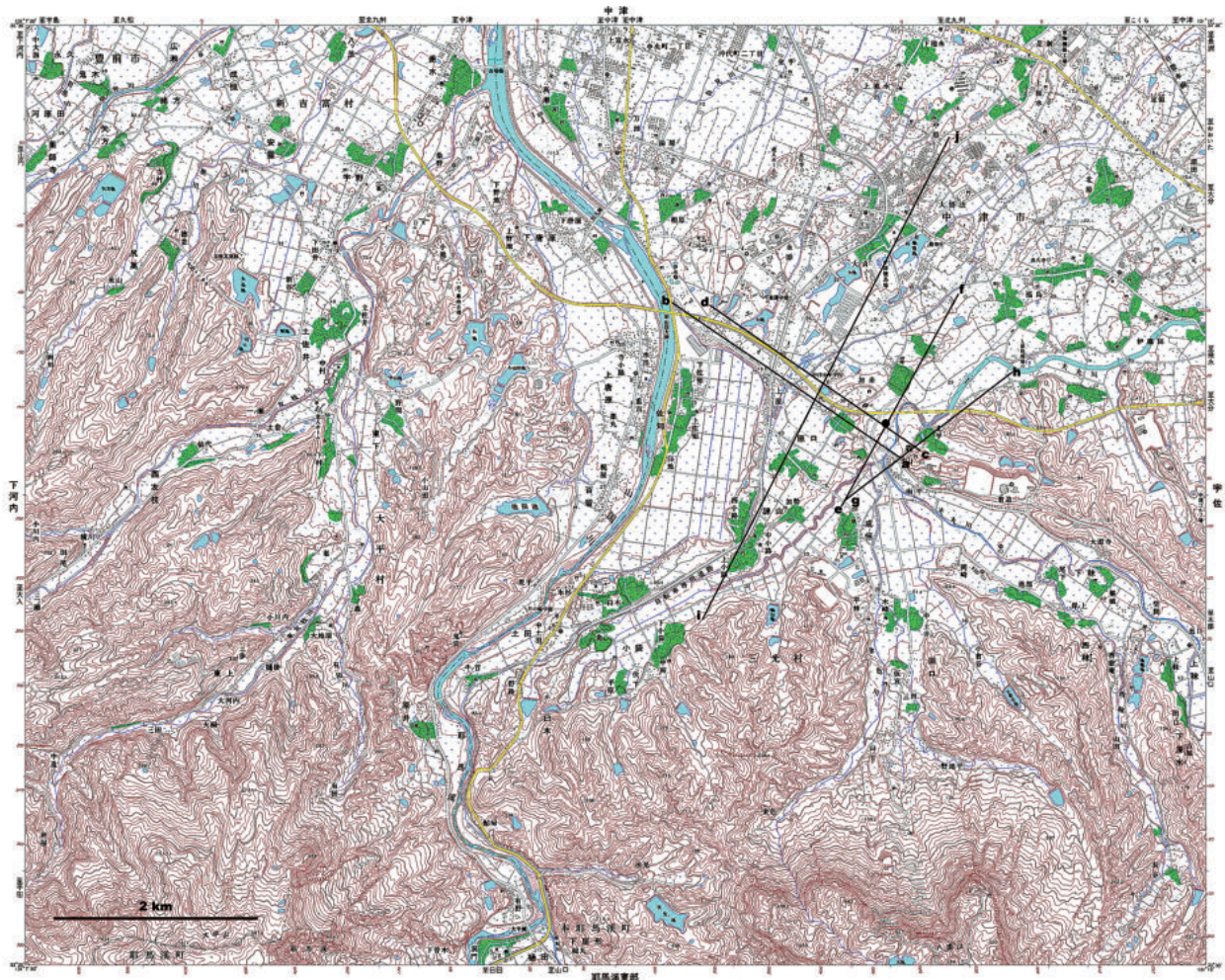


図6 法垣遺跡付近の地形と断面図測線位置

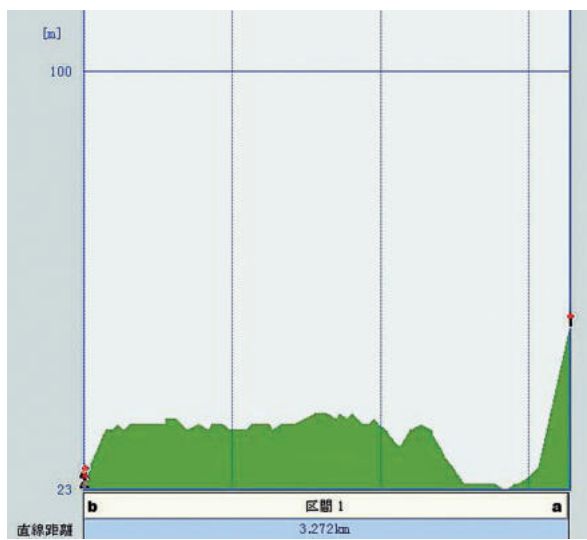


図7-1 ab地形断面 (abの標高差は28 m)



図7-2 cd地形断面 (cdの標高差は11 m)

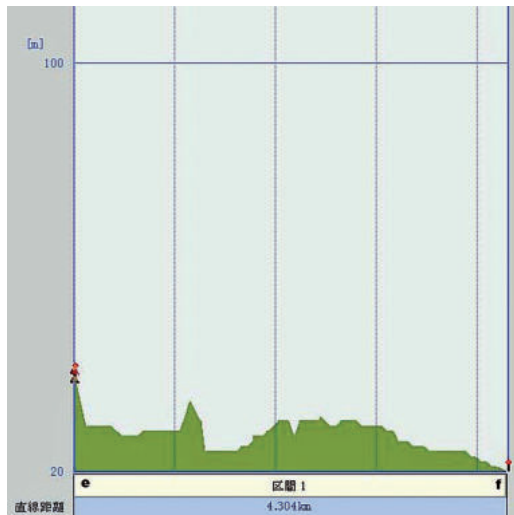


図 7-3 ef地形断面 (efの地形段差は19 m)



図 7-5 ij地形断面 (ijの地形段差は20 m)

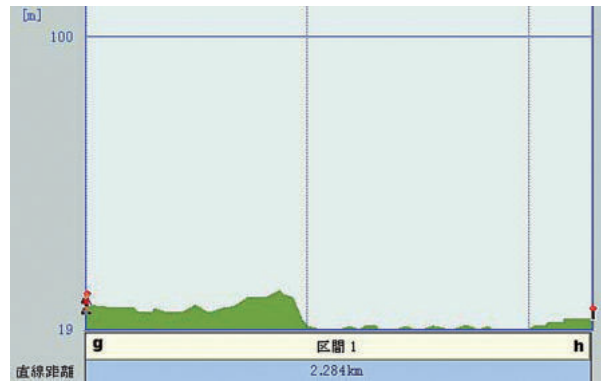


図 7-4 gh地形断面 (ghの地形段差は4 m)

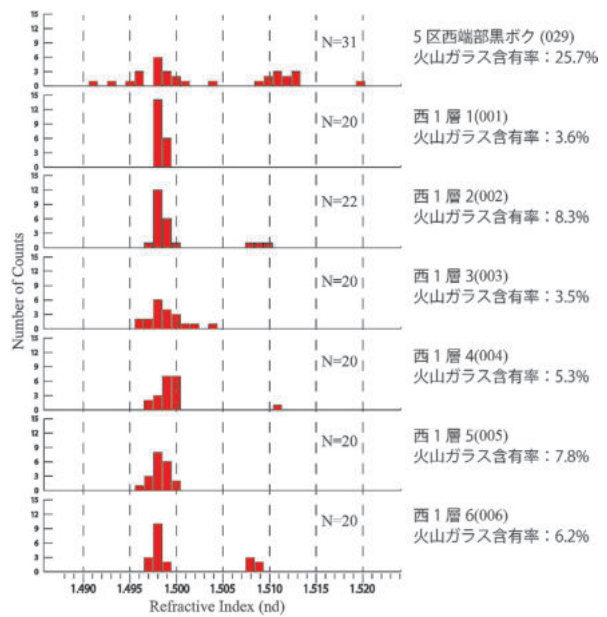


図 9 西断面および最上部黒色土に含まれる火山ガラスの屈折率ヒストグラム



図 8 試料採取位置図 (赤○ 断面での試料採取位置)

No.	サンプル名	処理量(g)	洗浄後総量(g)	極粗砂以上(g)	細砂(g)	極細砂(g)	シルト以下(g)	極細砂含有率	Hm	Lm	VG	Others	火山ガラス含有率
001	西1層1	2.10	0.20	#N/A	0.16	0.03	#N/A	1.4%	22	59	8	135	3.6%
002	西1層2	2.11	0.13	0.07	0.03	0.10	1.91	4.7%	22	72	20	128	8.3%
003	西1層3	2.09	0.13	#N/A	0.10	0.02	#N/A	1.0%	25	76	8	118	3.5%
004	西1層4	2.00	0.14	0.07	0.02	0.12	1.79	6.0%	23	61	11	112	5.3%
005	西1層5	1.99	0.15	0.06	0.02	0.13	1.78	6.5%	18	51	16	120	7.8%
006	西1層6	2.04	0.23	#N/A	0.03	0.20	#N/A	9.8%	15	71	13	111	6.2%
007	西2層1	2.07	0.28	0.09	0.04	0.24	1.70	11.6%	23	55	15	121	7.0%
008	西2層2	2.19	0.34	0.18	0.05	0.28	1.67	12.8%	22	43	8	169	3.3%
009	西4層1	2.12	0.66	0.44	0.09	0.57	1.02	26.9%	31	67	12	113	5.4%
010	西4層2	2.09	0.83	0.47	0.10	0.73	0.79	34.9%	34	94	11	92	4.8%
011	西4層3	2.15	0.48	0.28	0.08	0.40	1.39	18.6%	24	76	8	152	3.1%
012	西4層4	2.30	0.53	0.77	0.07	0.46	1.00	20.0%	28	111	13	88	5.4%
013	東4層1	2.44	0.49	0.40	0.08	0.41	1.55	16.8%	13	52	6	152	2.7%
014	東4層2	2.49	0.62	0.51	0.08	0.54	1.36	21.7%	11	40	3	148	1.5%
015	東4層3	2.31	0.54	0.42	0.07	0.47	1.35	20.3%	9	96	16	112	6.9%
016	東4層4	2.23	0.51	0.45	0.05	0.46	1.27	20.6%	28	93	9	72	4.5%
017	東4層5	2.25	0.48	0.40	0.07	0.41	1.37	18.2%	32	114	8	61	3.7%
018	東5層1	2.32	0.60	0.37	0.06	0.53	1.35	22.8%	40	111	13	36	6.5%
019	東5層2	2.28	0.48	0.50	0.06	0.42	1.30	18.4%	33	130	17	45	7.6%
020	東5層3	2.36	0.65	0.50	0.08	0.57	1.21	24.2%	40	108	21	40	10.0%
021	東5層4	2.58	0.80	0.48	0.08	0.72	1.30	27.9%	44	124	8	34	3.8%
022	東5層5	2.46	0.73	0.53	0.06	0.67	1.20	27.2%	50	123	17	37	7.5%
023	東5層6	2.25	0.56	0.53	0.05	0.51	1.16	22.7%	41	135	15	35	6.6%
024	東5層7	2.24	0.59	0.49	0.06	0.53	1.16	23.7%	47	173	7	20	2.8%
025	東6層1	2.41	0.63	0.58	0.06	0.57	1.20	23.7%	37	135	22	22	10.2%
026	東6層2	2.46	0.60	0.65	0.06	0.53	1.21	21.5%	43	131	20	32	8.8%
027	東6層3	2.59	0.72	0.45	0.08	0.64	1.42	24.7%	38	129	10	32	4.8%
028	東6層4	2.22	0.47	0.55	0.06	0.41	1.20	18.5%	37	115	15	60	6.6%
029	5区西端部黒ボク	2.51	0.46	0.12	0.10	0.36	1.93	14.3%	49	127	74	38	25.7%
030	pit 2647	2.37	0.69	0.53	0.06	0.63	1.15	26.6%	37	147	20	21	8.9%

表1 法垣遺跡の試料粒度分析と鉱物組成 Hm：重鉱物、Lm：軽鉱物、VG：火山ガラス



## 法垣遺跡4次調査出土人骨

舟橋京子・田中良之

九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

### 1. はじめに

大分県中津市法垣遺跡4次調査において、縄文時代のSH24号住居址から人骨が1体出土し、調査を担当した中津市教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に調査の依頼があった。そこで、同講座の田中と舟橋が現場に赴き人骨の調査および取り上げを行った。取り上げた人骨は後日、九州大学へと搬入され、本講座および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターにおいて、整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、歯牙の咬耗は枋原(1957)を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』(九州大学医学部第二解剖学教室編、1988)記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人は20歳以上(詳細は不明)とする。

なお、人骨資料は現在、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

### 2. 人骨出土状態

本人骨は、方形の住居内から頭位を東にし下肢を屈した仰臥屈葬の状態出土している。

上肢は肩関節側を東にしている。右上肢は肘関節を伸展し、左上肢は肘関節を屈した状態で出土している。右肘関節は関節状態である。左上腕骨内側からは肋骨片が出土している。右上腕骨の遠位側内側付近からは左手の指骨が長軸を揃えた状態で出土している。右上腕骨遠位の直上からは、頭蓋が左側頭部を上、右側頭部を下にした状態で出土している。下顎骨は頭蓋骨の南側から出土している。上半身の西側からは、下肢が、股関節を屈し、膝関節を強屈し、膝を左側に倒した状態で出土している。

以上の出土状況をみると、下顎骨に関しては、左右上腕骨の残存部位から推定される本来の位置と大きく矛盾しない位置から出土している。ただし、頭蓋骨に関しては、右上腕骨遠位付近という解剖学的位置関係とは異なる位置から出土しており、埋葬後に移動されたと推定される。また、頭蓋およびその直下から出土した上腕骨の間にはほとんど土を挟んでいない。加えて、指骨の長軸に乱れが見られない。以上の点から、下顎に関しては、動かされているかどうかは不明であるものの、頭蓋は、遺体を住居内に埋置後それほど時間の経過を経ない段階、少なくとも指骨の靭帯が完全に腐朽する前に右肘関節付近に移動されたと推定される。

### 3. 人骨所見

〔保存状態〕

保存状態はあまり良好でない。

頭蓋は、左右側頭骨の乳様突起付近および後頭骨片が遺存している。また、下顎骨は右臼歯部付近および前歯付近の下顎体片が遺存しており、歯槽窩が少なくとも1歯分閉鎖している。歯牙は左右不明下顎犬歯が遺存している。歯牙咬耗度は、枋原(1957)の2°bである。

上肢は、左右上腕骨骨体部、右上腕骨遠位端、左右尺骨・橈骨の骨体部片および左手の中節骨など指骨が数点遺存している。

下肢は、左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨の骨体部片および左膝蓋骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は遺存状態が良くないため不明である。年齢は歯咬耗度から熟年と推定される。

#### 4. 埋葬行為

上述のように、本個体は頭部が右上腕遠位すなわち右肘付近から出土している。このような遺体の移動の要因として、a)動物による移動、b)軟部組織腐朽時の移動、c)人為的移動が想定される。まず、a)に関しては、動物による移動の可能性を考えた場合、頭蓋直下の指骨は長軸を揃えた状態で乱れは見られないという矛盾点がある。加えて、可食部となるような大腿部が全く移動させられていない点も不自然である。大きく遺体が乱れないようなネズミなどの小型齧歯類による局所的な遺体の移動に関しても、観察可能な残存部位の頭蓋内面、下顎骨に噛み傷が見られないことから、その可能性は低いと考えられる。b)に関しては、本事例のように棺の使用の痕跡が見られない場合でも、遺体の埋葬時に菰で巻くなどしていれば身体の周辺に空隙が存在し、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋の位置が動く可能性が考えられる。そのような頭蓋の移動は古くは津雲貝塚出土人骨に見られ、遺体周辺に棺があった可能性が指摘されている（清野1920）。ただし、本個体は、住居壁際から住居中心に向かって低くなっているすり鉢状に堆積した埋土直上から、頭蓋を住居中心側、足を壁側に向けた状態で出土している。したがって、レベル的に頭蓋側よりも足元側が5センチ程度高く、レベルの低い頭部側からレベルの高い足下方向に頭蓋が転落した可能性は考えにくい。

最後にc)に関して検討してみよう。上述のように、本個体は、埋葬後少なくとも遺体の軟部組織が完全に腐朽していない段階で、頭蓋骨が右肘関節付近に動かされている。下顎骨に関しては動かされているか否かの判断が困難なため、その両方を考慮に入れた上で頭部が移動された理由を検討したい。頭蓋骨の人為的離断の理由としては、①さらすための頭部離断、②処刑による頭部離断、③儀礼が想定されよう。このうち①に関しては、上述のように観察可能な頭蓋表面にネズミなどの齧歯類による噛み傷が認められないことからその可能性は低い。②に関してはこのような慣習自体が縄文社会と同じ部族段階の社会において認められるか否かが問題となるが、仮に処刑目的の場合離断された頭部はさらされる場合が多く、①と同じ理由でその可能性は低い。ただしさらされない場合はこの限りではない。

最後に③の儀礼について検討しよう。本例は下顎の移動については判断が出来ないが、頭蓋を動かすタイミングを遅く見積もった場合、すなわち顎関節が腐朽して外れるような段階で頭蓋骨のみが動かされている場合でも、頭蓋直下の指骨の状態から、完全に軟部組織が腐朽する以前に頭部の移動が行われたと推定される。列島先史社会においては、縄文時代以来古墳時代まで遺体の毀損行為が散見される。特に、本例のような埋葬後軟部組織腐朽以前に行われたと推定される遺体の毀損行為は、頭部、胸部、脚部といった離断部位に反映されるように死者の蘇りを阻止するための断体儀礼行為であったと推定されている（田中2008）。本例の離断部位も、頭部という死者の機能を完全に無に帰すと考えるに足る部位であり、同様な考えに基づく儀礼行為であった可能性が高いと考えられる。以上のことから、本事例は死者の蘇りを阻止するための人為的遺体毀損行為であったと推定される。一方で、同様な遺体毀損事例は東日本の中期後半～後期においても散見される（石川

2014 ; Ishikawa2016 )。軟部組織の残存した状態での遺体の毀損や頭部の離断という、遺体毀損のタイミング・部位が本例とほぼ類似する例も見られる。

加えて、本個体の埋葬は通常の土壙墓ではなく、廃絶後の住居のプランを意識して埋葬されたいわゆる廃屋墓である。本遺跡近在のボウガキ遺跡においては1980年に行われた調査で同様な時期の、廃絶後まもない住居址内への埋葬が確認されており(村上1992)、千葉県姥山貝塚事例との埋葬観念の類似性が指摘されている(賀川1992)。このような廃絶直後或いは廃絶後やや時間を経た段階での、住居床面直上あるいは住居埋土上への埋葬行為、いわゆる廃屋墓は関東を中心とした東日本中期・後期においてしばしば確認されている(山本1985 : 2015 ; 小杉1995など)。西日本では当該期の人骨出土例自体がそれほど多くないとはいえ、このような事例はほぼ皆無であり、縄文時代後期の東日本からの情報の伝播を考える上でボウガキ遺跡および本事例の存在は非常に重要である。

以上のように、本遺跡の埋葬行為に見られる2つの特徴、断体儀礼、廃屋墓は東日本を中心に見られる。したがって、後期中葉という本遺跡の時期や同時期の隣接地域に所在する福岡県山鹿貝塚出土人骨の断体儀礼などと合わせると、本遺跡の例は、東日本から西日本に伝播した縄文「文化複合体」(渡邊1966)に断体儀礼・廃屋墓が含まれていたことを示唆するものであろう。これに関しては紙幅の都合上後日別項で詳述したい。

## 5. まとめ

縄文時代後期の廃絶したSH24号住居から人骨が1体出土した。出土状況から、頭部を離断した断体儀礼の可能性が考えられた。加えて、縄文時代後期中葉という時期と西日本縄文時代では特異な埋葬事例であることから、本遺跡に見られる断体儀礼および廃屋への埋葬行為が東日本からの影響を受けたものであると考えた。

## 謝辞

発掘調査・本報告を行うにあたり、中津市教育委員会の浦井直幸氏、村上久和氏をはじめ、各位に多くのご助力・ご配慮を賜りました。深謝いたします。なお、本報告のもとになった人骨出土所見および儀礼に関する見解は2014年にご逝去された田中良之教授と舟橋の発掘現場での議論を元に、舟橋が執筆したものである。完成した文章に関してご本人に許可を取ることが出来ないが、共著とさせて頂いた。了とされたい。

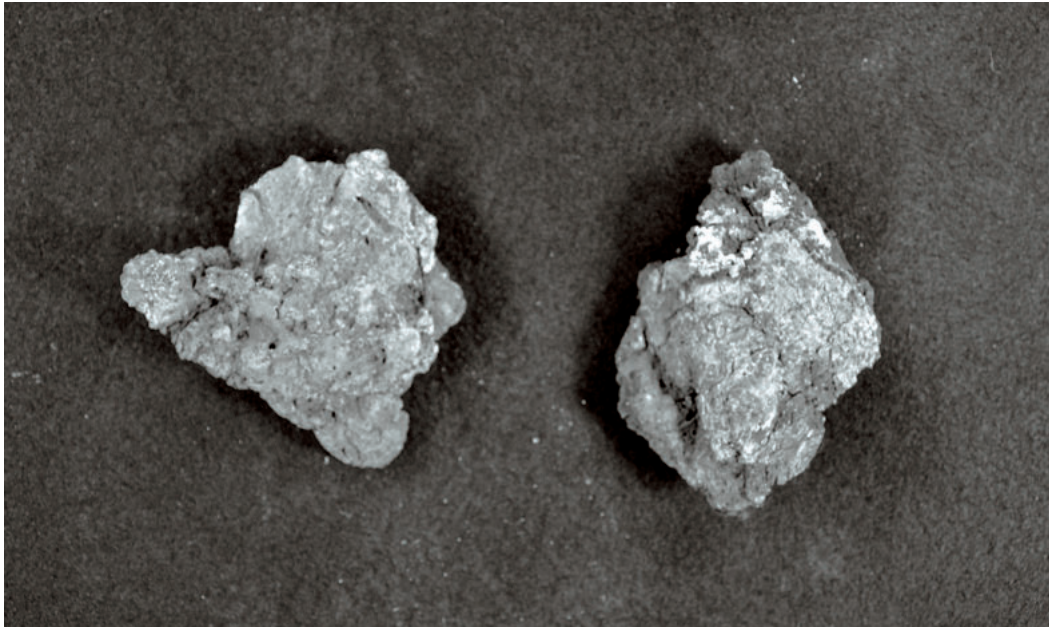
## 参考文献

- 石川健 2014 「房総半島における縄文時代の遺体毀損事例」『東アジア古文化論攷』2, 高倉洋彰編, 中国書店。  
賀川光夫 1992 「ボウガキ遺跡の問題点」『ボウガキ遺跡』三保の文化財を守る会・中津市教育委員会  
清野謙二 1920 「津雲貝塚における人骨出土状況」『京都帝國大学文学部考古学研究報告』5, 京都帝國大学。  
九州大学医学部解剖学第二講座編 1988 「日本民族・文化の生成」2, 『九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成』六興出版。  
小杉康 1995 「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立」『駿台史学』93  
田中良之 2008 「断体儀礼考」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室  
栃原博 1957 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学研究』31. 補冊4。  
村上久和 1992 「1号住居址」「土壙墓」『ボウガキ遺跡』三保の文化財を守る会・中津市教育委員会  
山本暉久 1985 「縄文時代の廃屋墓」『古代』80  
山本暉久 2015 「廃屋墓」『季刊考古学』130

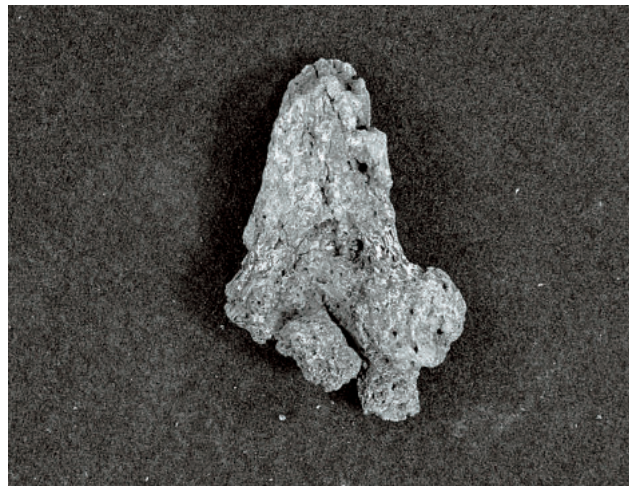


渡邊誠 1966 「縄文文化における抜歯風習の研究」『古代学』12.

Ishikawa Takeshi, 2016 : Visualised denial of rebirth of the dead in the mortuary process: Ritual disarticulation during the Middle Jomon Period in Japan. Theoretical Archaeology Group conference, Southampton, U.K.



左右側頭骨（岩様部付近片）



右上肢片（後面觀）  
（上腕遠位部・尺骨肘頭片）



# 大分県中津市法垣遺跡出土の土器圧痕および種実・動物遺体調査報告

小畑 弘己

(熊本大学大学院人文社会科学研究所)

## はじめに

2012年11月8日、筆者は中津市教育委員会より依頼を受け、中津市大字加来810-1他所在の法垣遺跡の第4次調査の現地指導を行った際、縄文時代の掘立柱建物址の柱穴中に炭化物を含む土壌を発見し、これら縄文時代の遺構の土壌および炭化物層のフローテーション調査を行うよう、調査者に進言した。その結果、縄文時代後期中葉の鐘崎Ⅱ式期の住居址（SH24）の土壌中から多量のカラスザンショウが検出された。この重要性に鑑み、悉皆的なフローテーション試料の分析を中津市教育委員会に依頼するとともに、遺跡出土の縄文土器の圧痕調査を実施した。この結果、カラスザンショウを中心とした種実圧痕を多数検出することができた。本報告はそれら調査の成果報告である。

なお、フローテーション試料のソーティングは2015年7月より2016年1月まで中津市教育委員会整理室において整理作業員の方々によって実施された。圧痕調査は真邊彩氏（鹿児島県埋蔵文化財センター）の協力を得て、2015年7月3日から3日間実施した。

## I. 土器圧痕調査

### 1. 調査対象資料と方法

今回調査の対象とした資料は法垣遺跡第3・4次調査出土の報告書掲載分433点（総重量98,809g）である。

圧痕調査および調査後の作業手順は、以下のとおりである。なお、この手法は基本的に、印象材以外は、福岡市埋蔵文化財センター方式（比佐・片多2005）と同じものである。

- ① 土器を1点ずつ観察し、植物種実・昆虫・貝などの圧痕の可能性があるものを肉眼と実体顕微鏡で抽出する。
- ② 圧痕部を水で洗浄し、土器全体写真および実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真を撮影する。
- ③ 離型剤（パラロイドB-72 5%アセトン溶液）を圧痕部に塗布し、シリコーンゴム：アグサジャパン株式会社製ブルーミックスソフトを圧痕部に充填する。
- ④ やや硬化したシリコーンゴムをマウント（走査型電子顕微鏡用ピンタイプ試料台）に盛り、圧痕部と接合して硬化させる。
- ⑤ 硬化後、レプリカを取り外し、圧痕部の離型剤をアセトンで洗浄する。
- ⑥ 作製したレプリカを走査型電子顕微鏡（日本電子製JCM-5700型）で観察・撮影・同定する。
- ⑦ デジタルマイクロスコープ（KEYENCE VHX-2000）の2点間計測機能を用いて種実の長さ・幅・厚さを計測する。
- ⑧ 潜在圧痕の可能性のある土器についてSOFTEX社製EMT-Jによる軟X線撮影を行い潜在圧痕を検出し、X線CT撮影（委託）断層画像により3D像復元を行う。

今回は、カラスザンショウ果実の表出圧痕8点を検出したHGK 0012土器について、軟X線機器およびその一部をX線CTスキャナーで潜在圧痕の有無を確認し、表出圧痕との形状の比較を行い、潜在圧痕数の推定の手掛かりとした。

## 2. 調査結果

圧痕調査の結果、19点の縄文時代後期土器からカラスザンショウ果実18点、同果皮2点、堅果類（コナラ属）果皮片6点、ツブラジイ子葉1点、木の芽？1点、不明種実3点、不明（ネズミの糞？）3点の、総計34点の表出圧痕を検出した。

### （1）表出圧痕

#### カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides*

側面観がD字形をし、側辺全体に縦溝をもち、外表面には亀甲形の窪みをもつ3～4mm前後の圧痕である。

カラスザンショウは「種子の長さ $3.1 \pm 0.1$ mm、幅 $3.6 \pm 0.1$ mm、厚さ $2.7 \pm 0.1$ mm、重さ10個163.5mg。種子は横楕円形（やや扁平）。広い線形の深い溝状のへそは、腹面の正中線上にある。種子は平滑。種子は漆黒。光沢は普通。果実の分果数は3個。分果の種子数は1個」（中山ら2000）とあるが、種実の大きさや分果数などはよく似ている。これらは、へその形が、広線状（カラスザンショウ・イヌザンショウ）と卵形（サンショウ *Zanthoxylum schinifolium* Siebold et Zucc.・フユザンショウ *Zanthoxylum armatum* DC. var. *subtrifoliatum* (Franch.) Kitam.）で、その大きさや位置が、大型で腹面の正中線上（カラスザンショウ・イヌザンショウ）と卵形で腹面の先端（サンショウ・フユザンショウ）というように大きく二つのグループに分類が可能である。このへその形や位置の違いは、全体的な形態にも表れており、その側面観が、前2者がDの字形、後2者がラグビーボール形とである。これ以外の区別点として、種子表面で観察される網目状の組織の形状と大きさの違いがある。遺跡出土の種子は黒く薄い外表皮が剥離している場合がほとんどであり、図鑑などにみられる平滑な表面は観察されず、亀甲形の窪みが観察される。カラスザンショウ果実は、サンショウ果実やイヌザンショウ果実に比べずんぐりとしたプロポーションをもち、側面観はへそを左においてD字形を呈する。イヌザンショウ果実と比べると、へそが腹面全体に及んでおり、側面の亀甲形の窪みも大きい（幅0.7mm）という特徴がある（真邊・小畑2017）。

この果実に該当するものは、図1：1～3・6・7、図2：8～10・12・13、図3：16・17・19、図4：23・27、図5：29～31の圧痕（うち2点は炭化物が残存している）である。また、その外皮と思われる圧痕2点（図2：14、図4：24）も検出されている。

#### ツブラジイ子葉および堅果類（コナラ属・シイ属）果皮

図4：22は長さ8mmほどの雨滴形をした平面形をもち、一面が平坦である。先端部がわずかにU字形に窪んでおり、子葉先端にある幼根部が欠落したもので、その形状と大きさから、ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* と考えられる。図1：5、図2：11、図3：15・20・21、図4：28は厚さが1mmに満たない湾曲した形状をもち、コナラ属 *Quercus* sp. もしくはシイ属 *Castanopsis* sp. などの堅果類の果皮の断片と思われる。

#### 木の芽？

図5：34は4mmほどの細い雨滴形をしたもので、側面には数枚の皮が重なった状況が観察でき、種は不明であるが、木の芽と判断した。

#### 不明種実

図1：4は長さ5mmほどの幅広の雨滴形をした表面球面の圧痕である。種実の一部と思われ、ツブラジイ子葉にも似るが決め手となる特徴がなく、種は特定できなかつた。図3：18は長さ4mmほどの三角形で、中央から一編にかけて窪みがあり、逆V字状を呈する。何等かの種実と思われる

表1 法垣遺跡出土土器圧痕の種類および属性

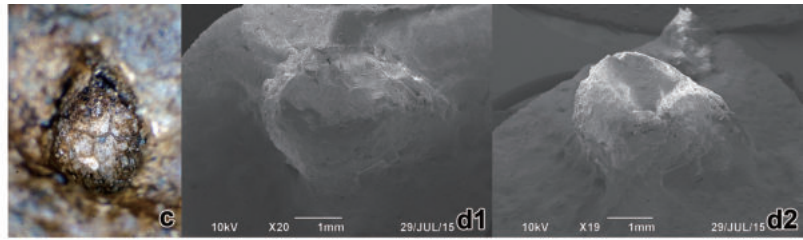
図	番号	登録番号	注記	精粗	器形	型式/時期	部位	検出面	圧痕の種類	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
1	1	HGK 0001	オオツボSH20NE区1層、 オオツボSH24NE区1層	精	深鉢	鐘崎Ⅱ式	胴部	内面	カラスザンショウ果実	4.00	2.90	2.43+α	
	2	HGK 0002	オオツボSH24南北ベルト 南半1区他	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	口唇部	内面	カラスザンショウ果実	3.17	2.67	1.96+α	
	3	HGK 0003-1	オオツボSH24NW区1尺	精	深鉢	鐘崎式	底部	内面	カラスザンショウ果実	3.78	3.10	2.40+α	図版336
	4	HGK 0008	オオツボSH24 0-7他	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	内面	不明種実	5.04	4.31	2.31	図版401
	5	HGK 0009	オオツボSH24 P94・96	粗	深鉢	鐘崎式	胴部	内面	堅果類果皮片	9.15+α	7.43+α	0.68	図版320
	6	HGK 0011	オオツボSH24SW区	精	深鉢	鐘崎最新相式	胴部	内面	カラスザンショウ果実	圧痕内に炭化物残る(未計測)			図版377
	7	HGK 0012-1	オオツボPit2143 P1	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	外面	カラスザンショウ果実	3.18	2.49	2.74	図版716
2	8	HGK 0012-2	オオツボPit2143 P1	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	外面	カラスザンショウ果実	3.27	2.55	2.45	図版716
	9	HGK 0012-3					胴部	外面	カラスザンショウ果実	4.11	3.19	2.47	
	10	HGK 0012-4					口縁部	外面	カラスザンショウ果実	4.09	3.33	2.61+α	
	11	HGK 0012-5					胴部	内面	堅果類果皮片	7.59+α	5.86+α	0.60	
	12	HGK 0012-6					胴部	内面	カラスザンショウ果実	3.64	3.05	2.79	
	13	HGK 0012-7					胴部	内面	カラスザンショウ果実	3.58	2.86	2.48+α	
	14	HGK 0012-8					口縁部	内面	カラスザンショウ果皮	3.50+α	2.89+α	0.61	
3	15	HGK 0012-9	オオツボPit2143 P1	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	内面	堅果類果皮片	7.51+α	4.50+α	0.80	図版716
	16	HGK 0012-10					胴部	内面	カラスザンショウ果実	3.90	3.27	1.89+α	
	17	HGK 0012-11					胴部	内面	カラスザンショウ果実	3.96	3.29	1.93+α	
	18	HGK 0013	オオツボSH24SW区	精	深鉢	鐘崎Ⅲ?式	口縁部	外面	不明種実	3.97	4.10	2.53	図版422
	19	HGK 0014-2	オオツボSH24SE区	精	深鉢	鐘崎式	口縁部	断面	カラスザンショウ果実	3.28	2.56	2.01+α	
	20	HGK 0017-1	オオツボSH24 NW区	粗	深鉢	鐘崎Ⅲ?式	胴部	内面	堅果類果皮片	6.31+α	4.74+α	0.57	図版318
	21	HGK 0017-3					胴部	内面	堅果類果皮片	6.42+α	5.28+α	0.38	
4	22	HGK 0017-6	オオツボSH24 NW区	粗	深鉢	鐘崎式	胴部	外面	ツブラジイ子葉(片側)	7.81	6.19	3.40	図版318
	23	HGK 0018-2	オオツボSH24 P14	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	断面	カラスザンショウ果実	圧痕内に炭化物残る(未計測)			図版219
	24	HGK 0018-4					胴部	外面	カラスザンショウ果皮	2.38+α	1.91+α	0.22	
	25	HGK 0019	オオツボSH24SE区	粗	深鉢	鐘崎式	胴部	外面	不明種実	3.21	3.01	2.59	図版317
	26	HGK 0020	オオツボSX4	精	深鉢	鐘崎Ⅱ式	胴部	内面	不明(ネズミ糞?)	3.56	1.51	1.10+α	図版1269
	27	HGK 0021	オオツボSH25SB14Pit5内部 土坑P3	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	外面	カラスザンショウ果実	3.27	2.88	2.33	図版516
	28	HGK 0023	オオツボSH16P10	粗	深鉢	鐘崎Ⅲ?式	口縁部	外面	堅果類果皮片	7.10+α	5.33+α	0.50	
5	29	HGK 0024-1	オオツボSH9P2	粗	深鉢	不明	口縁部	内面	カラスザンショウ果実	3.24	2.81	2.02+α	
	30	HGK 0024-3					胴部	内面	カラスザンショウ果実	3.42	2.68	2.17+α	
	31	HGK 0025	オオツボSH24NS区1層	精	深鉢	鐘崎Ⅲ式	胴部	外面	カラスザンショウ果実	3.69	2.73	2.38	図版191
	32	HGK 0026-1	オオツボSH24NE区1層	精	深鉢	鐘崎Ⅱ式	胴部	外面	不明(ネズミ糞?)	6.30	3.37	2.90	図版301
	33	HGK 0026-2					胴部	内面	不明(ネズミ糞?)	4.02	2.08	1.76+α	
	34	HGK 0027	オオツボSH24SW区2層、他	粗	深鉢	鐘崎最新相式	胴部	外面	木の芽?	3.87	2.21	2.05	図版351

が、種を特定できなかった。図4：25は直径3mmほどの厚目の算盤形をした圧痕であり、外表面に小さな丸みを帯びた突起がある。種実と思われるが、種を特定できなかった。

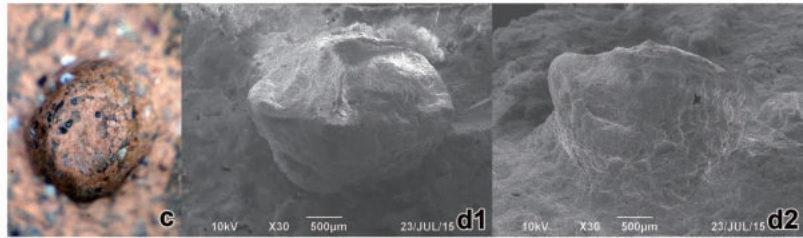
不明(ネズミの糞?)

図4：26、図5：32・33は長さ4～6mmほどの先端が細くなる長紡錘形の圧痕である。ネズミの糞に似るが、先端部が尖る特徴を見出すことができず、決め手を欠いている。

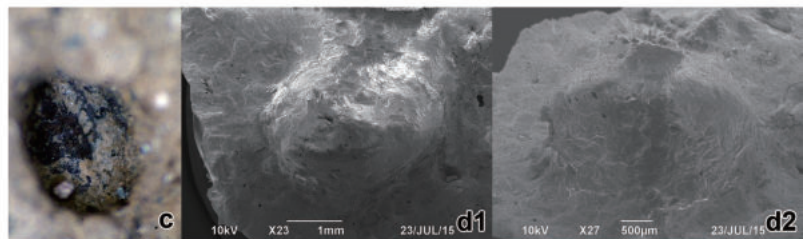
1. HGK 0001



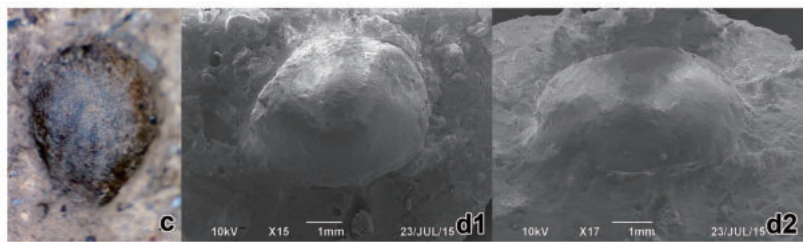
2. HGK 0002



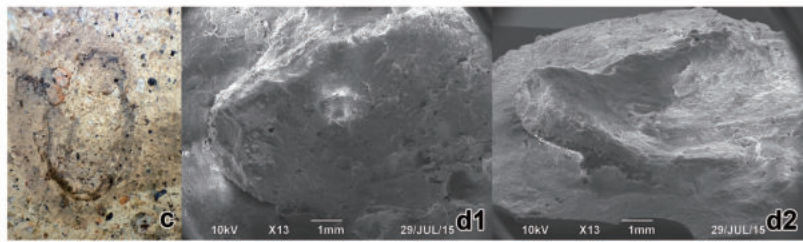
3. HGK 0003-1



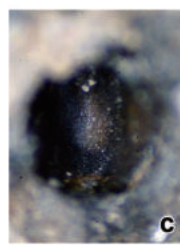
4. HGK 0008



5. HGK 0009



6. HGK 0011



※炭化物残存のためレプリカ作製せず

7. HGK 0012-1

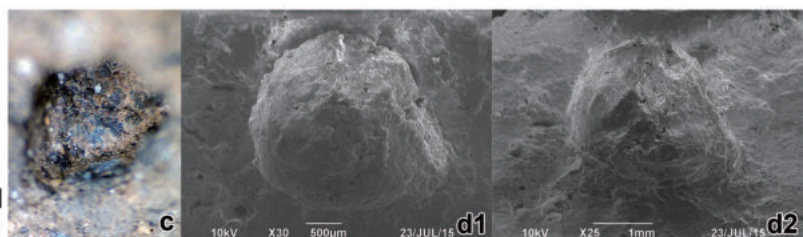
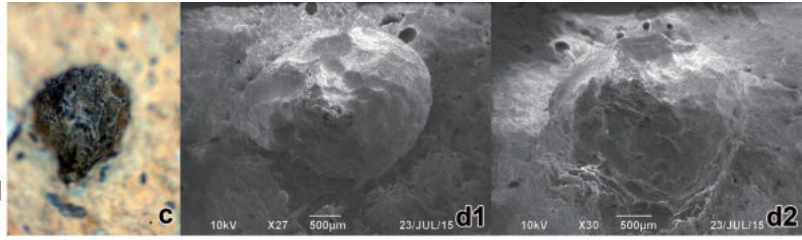
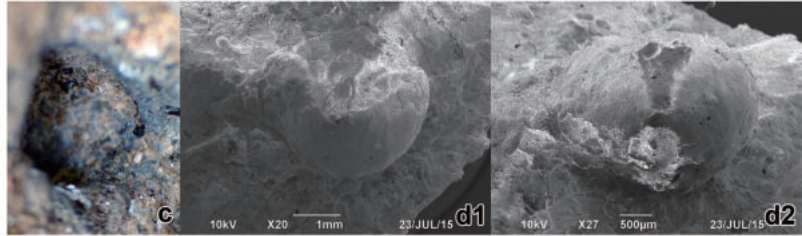


図1 法垣遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像1

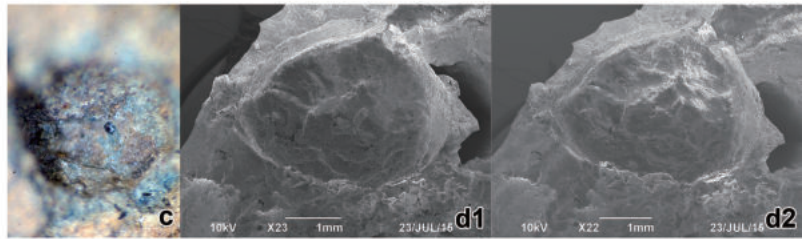
8. HGK 0012-2



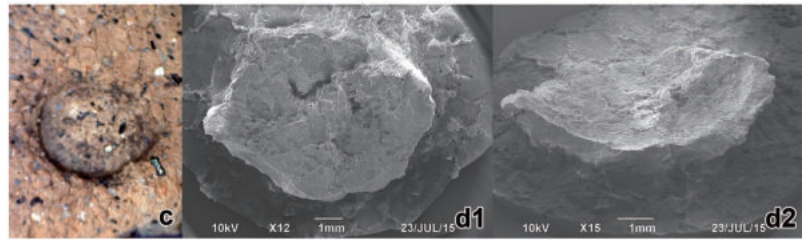
9. HGK 0012-3



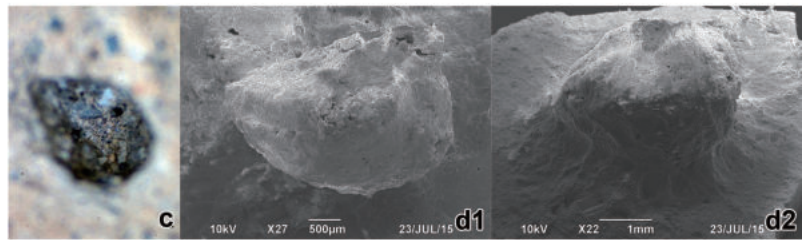
10. HGK 0012-4



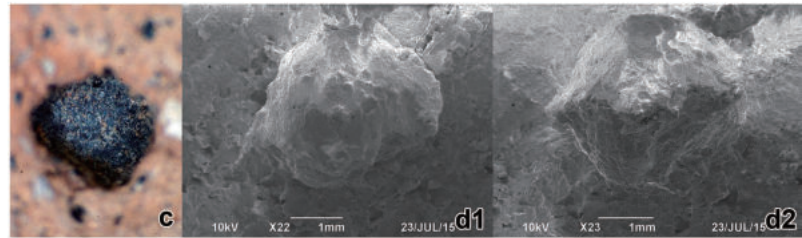
11. HGK 0012-5



12. HGK 0012-6



13. HGK 0012-7



14. HGK 0012-8

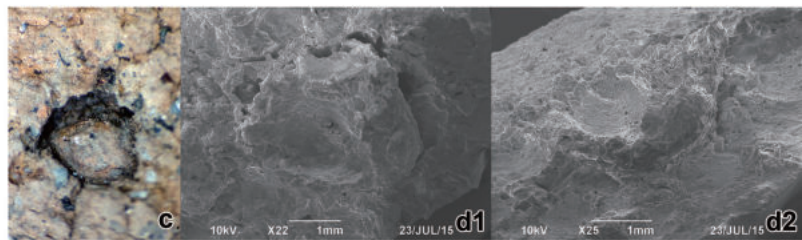
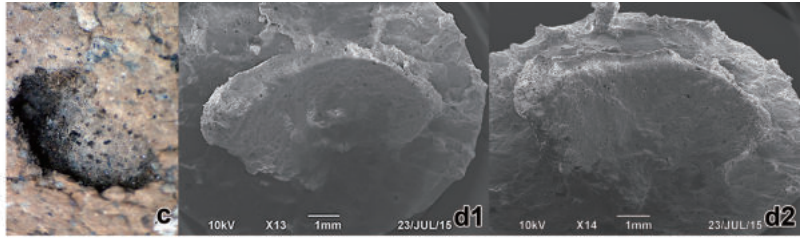


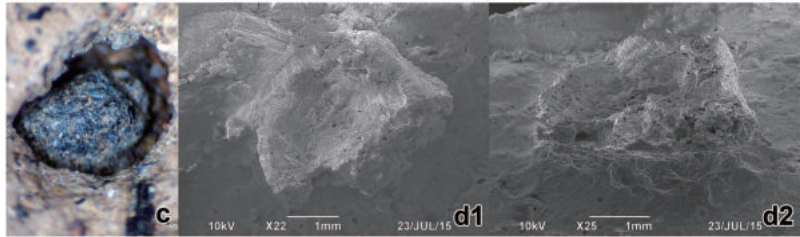
図2 法垣遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像2



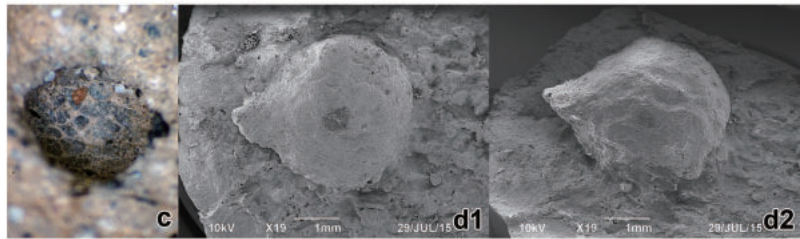
15. HGK 0012-9



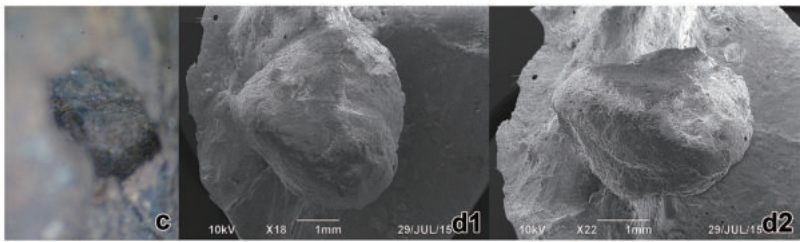
16. HGK 0012-10



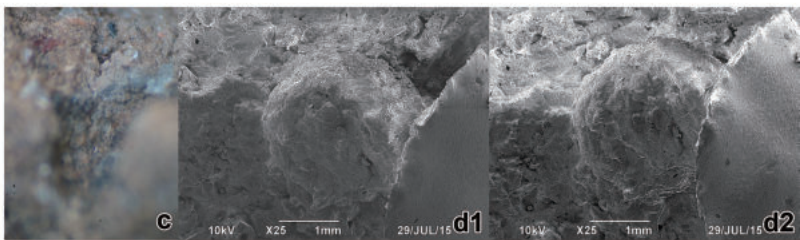
17. HGK 0012-11



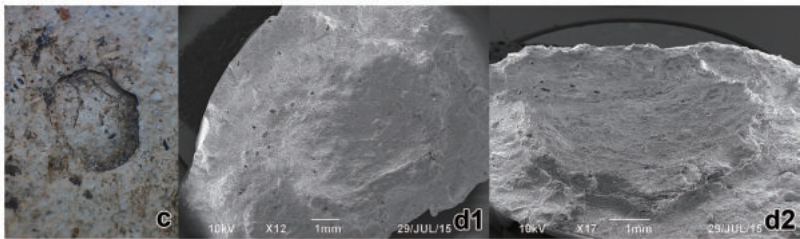
18. HGK 0013



19. HGK 0014-2



20. HGK 0017-1



21. HGK 0017-3

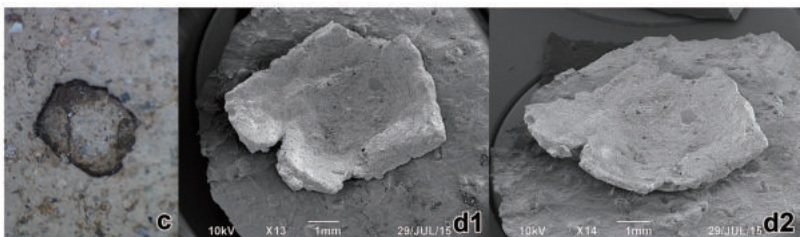
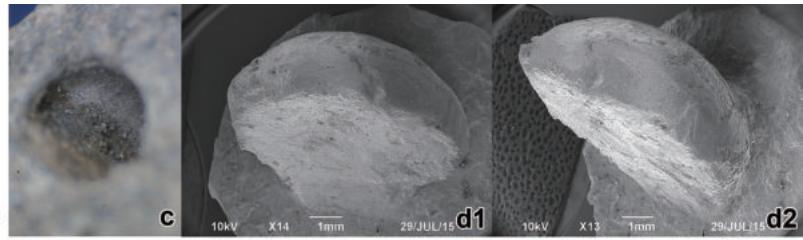
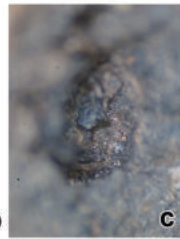


図3 法垣遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像3

22. HGK 0017-6

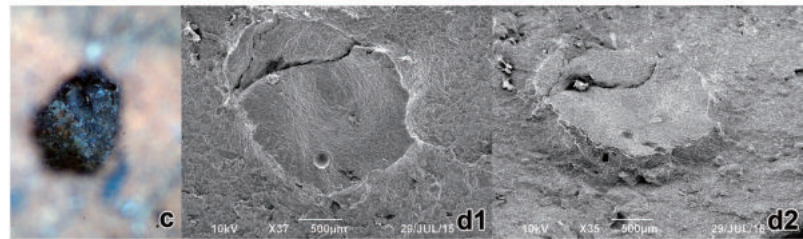


23. HGK 0018-2

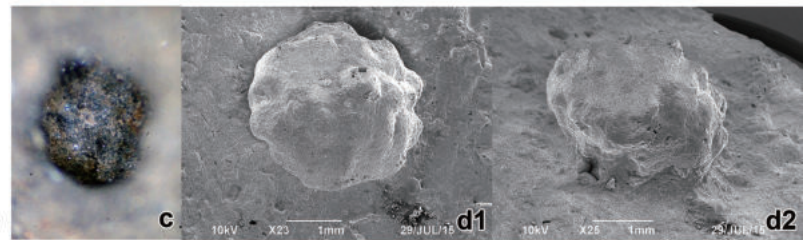
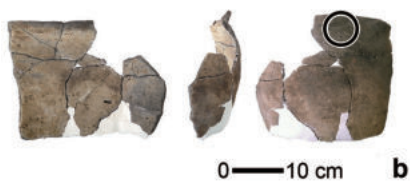


※炭化物残存のためレプリカ作製せず

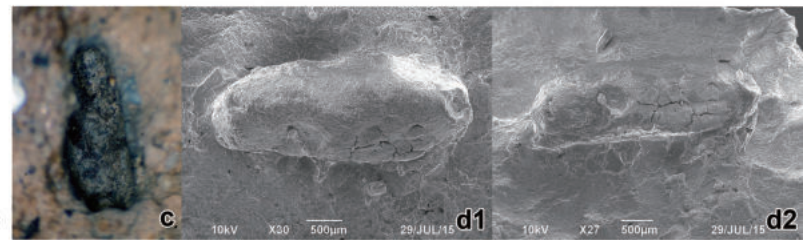
24. HGK 0018-4



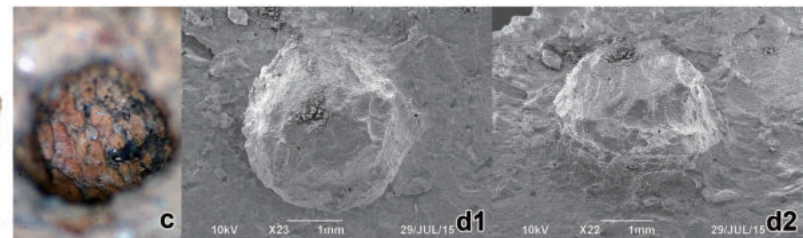
25. HGK 0019



26. HGK 0020



27. HGK 0021



28. HGK 0023

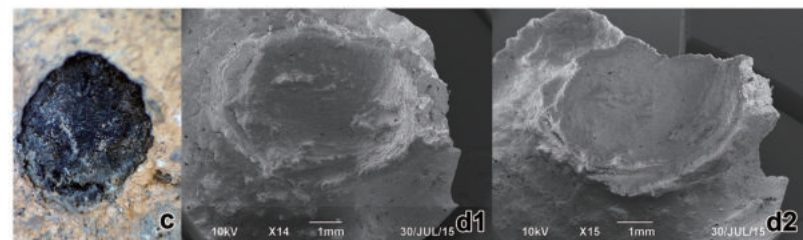


図4 法垣遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像4

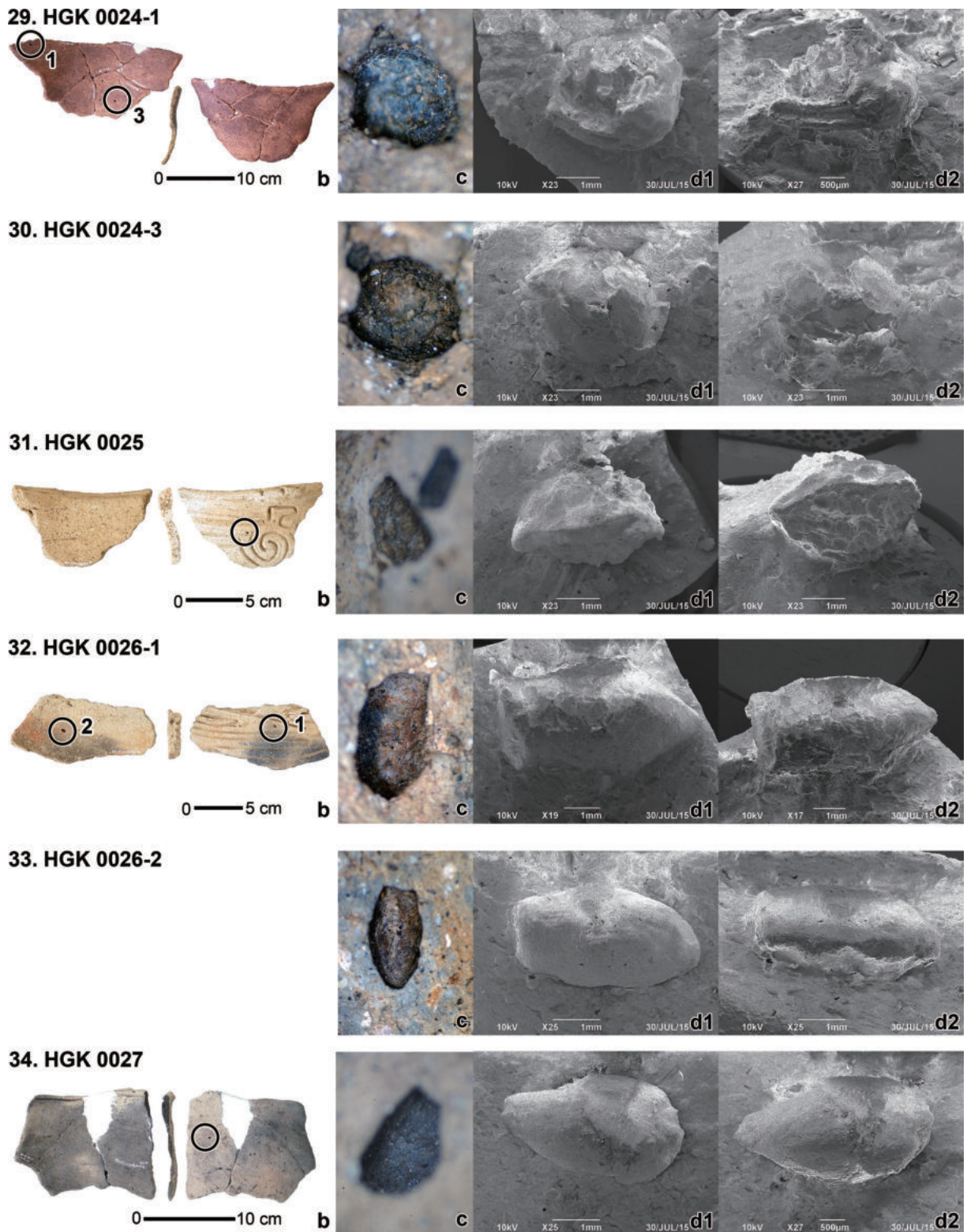


図5 法垣遺跡土器圧痕・レプリカSEM画像5

(2) HGK 0012土器の潜在圧痕

HGK 0012土器からはカラスザンショウの果実8点、同果皮1点、堅果類果皮片2点の計11点の表出圧痕が検出された。そこで、土器片（7点が接合）全体を軟X線機器によって観察し、内部の潜在圧痕を検出・撮影し、表出圧痕のX線画像と比較しながら、その形状から種実の特定を行っ

た。その根拠として、土器片AのX線CT画像と断層画像から復元した3D画像を基準とした。

軟X線画像では、長さ3～4mmほどの楕円形（一端が尖るものもある）の画像（aタイプ）が特徴的である。また、ほぼ同じ大きさで中央部が空洞の輪状のもの（b1タイプ）やそれが半分のもの（b2タイプ）なども含まれる。それ以外のものは形状はさまざま、cタイプとした。図7の土器Aの潜在圧痕のシルエット像で示すと、aタイプがS1・S2・S3・S5・S6・S10・S12、b1タイプがS7・S16、b2タイプがS8・S101・S105・S106である。S102とS104はb1タイプと同じ形状をもつが、2mm以下とb1タイプより小さい。cタイプはS9・S11・S14・S107などがあるが、S11はb1タイプと同じく腕形の形状に復元できるが、直径7～8mmとかなり大きい（図7上段右側）。

これらを土器片A上の表出圧痕（H7）のシルエットと比較すると、aタイプは大きさや形状から

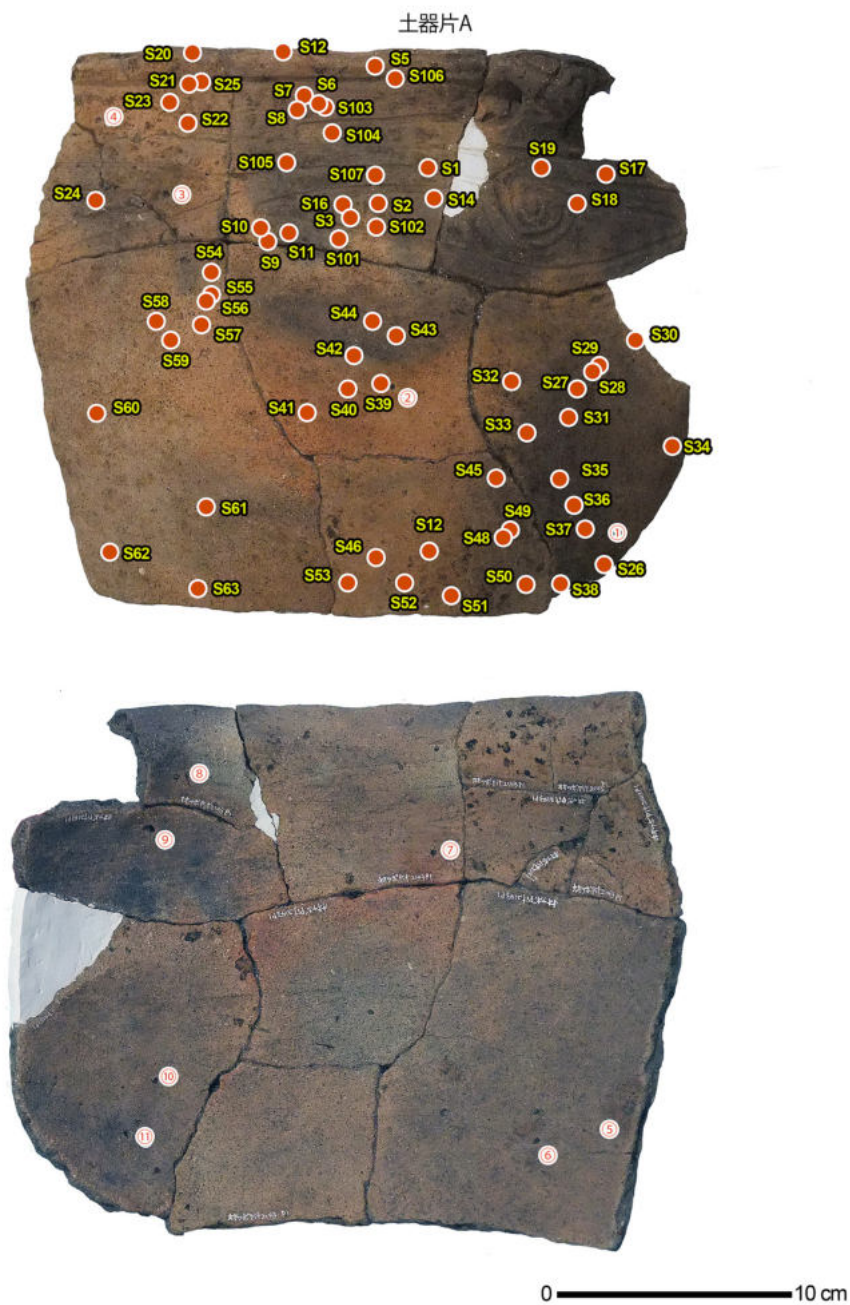
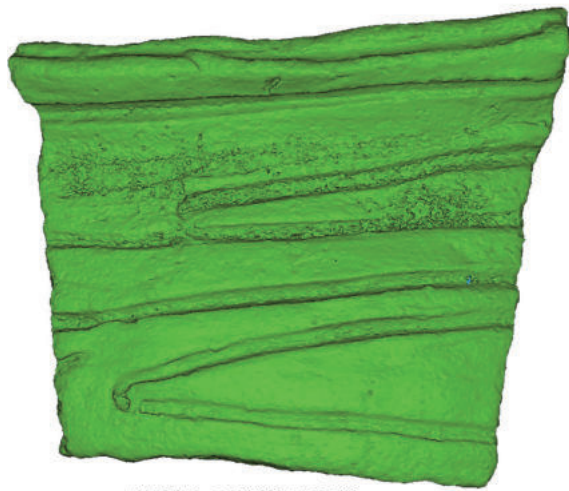
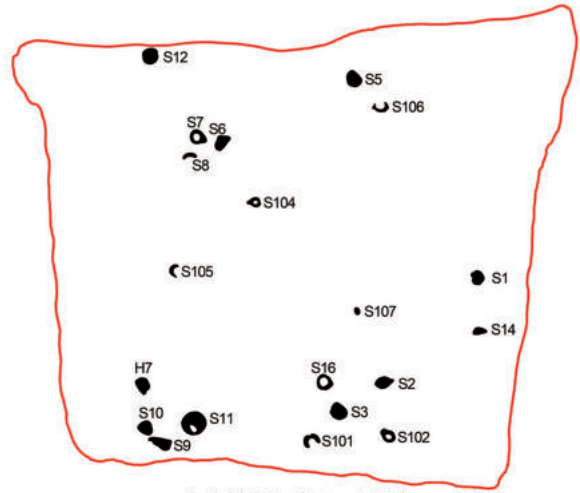


図6 法垣遺跡・土器HGK 0012片の表出圧痕と潜在圧痕の位置



土器片AのX線CT3D画像



同圧痕のシルエット画像

0 5 cm

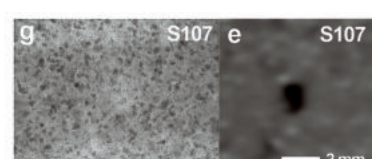
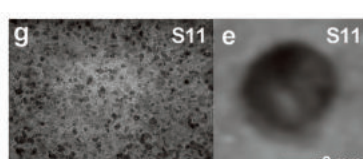
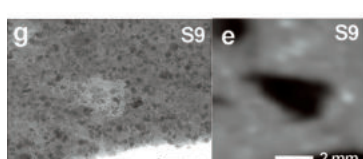
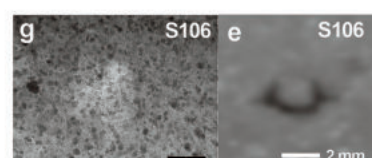
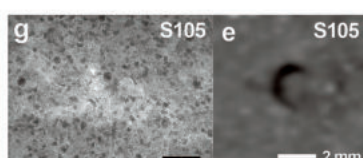
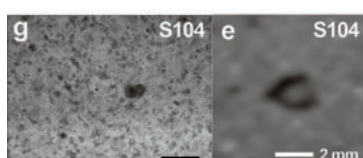
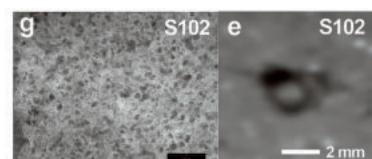
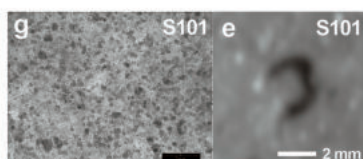
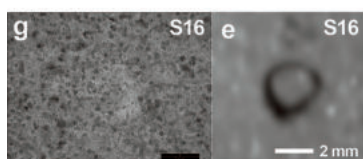
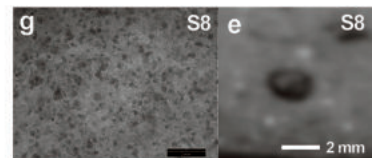
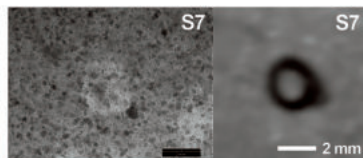
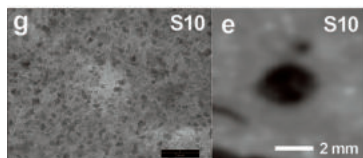
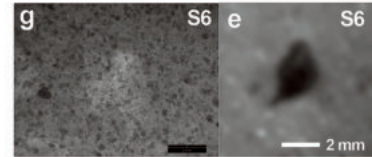
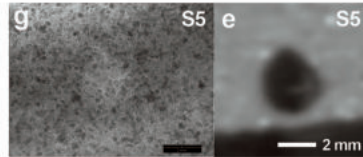
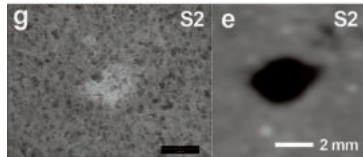
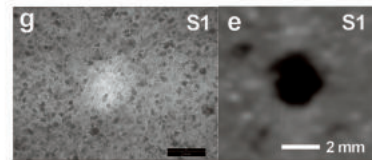
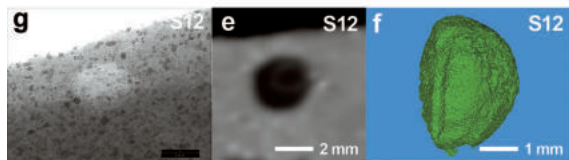
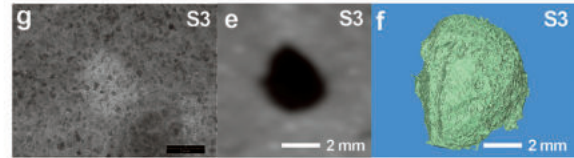
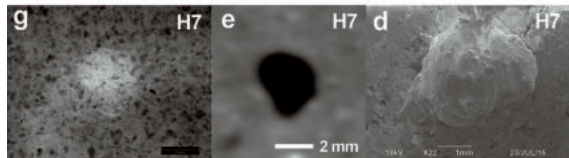


図7 法垣遺跡・土器片Aの表出圧痕と潜在圧痕の軟X線画像 (g)・X線CT画像 (e・f)

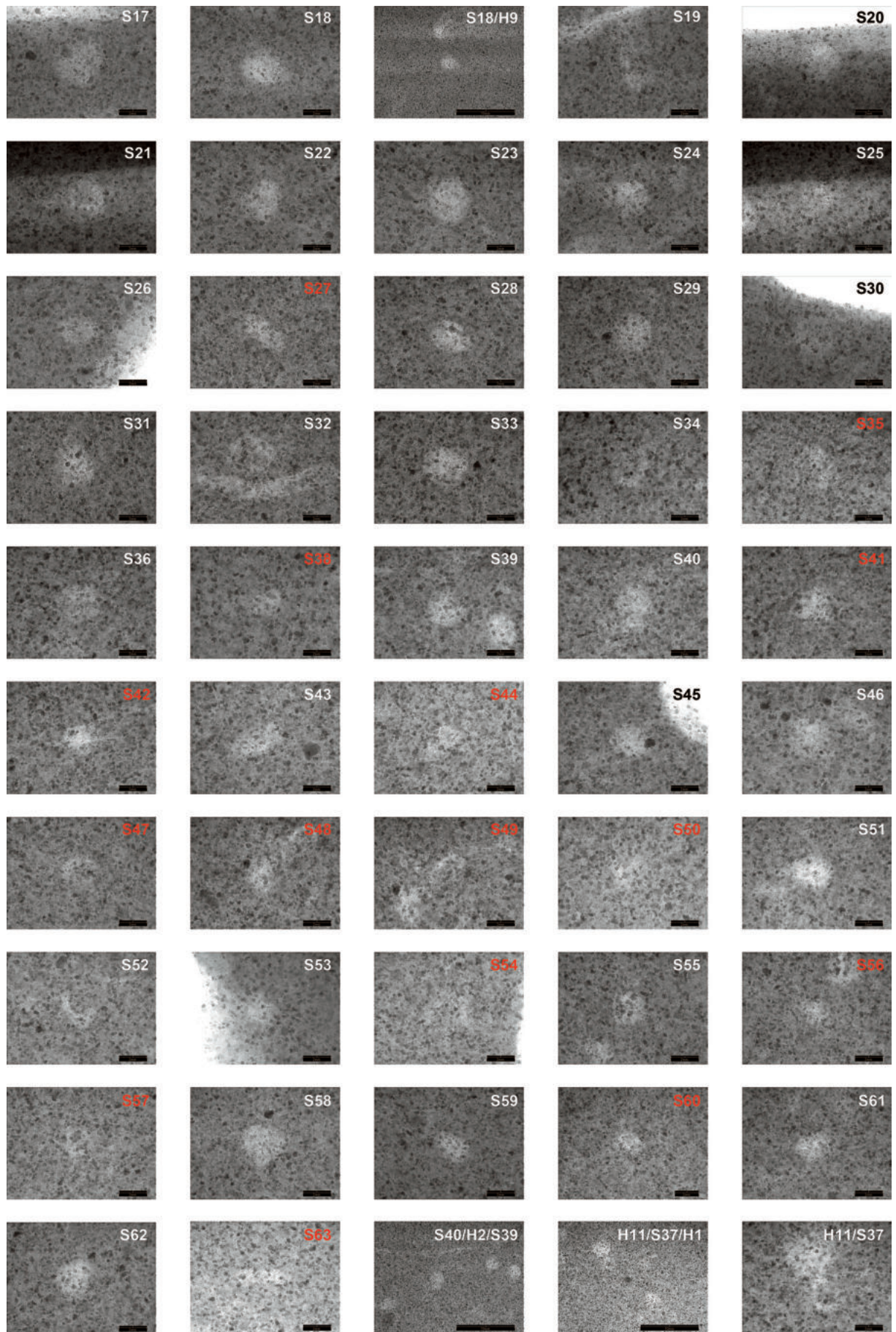


図8 法垣遺跡・土器HGK 0012の表出圧痕と潜在圧痕の軟X線画像（土器片Aを除く）

みてカラスザンショウ果実と推定される。その証拠に、土器片A上のaタイプの潜在圧痕2点(S3・S12)をX線CTで拡大撮影して3D像に復元すると、カラスザンショウ果実であることが確認できた(図7)。同様のaタイプの軟X線画像は他の破片内にも27点ほど確認でき、b1タイプ(S37)とb2タイプ(S52)も確認できた(図8)。このbタイプはその大きさと椀形の形状からみて、果皮と思われ、HGK 0012の表出圧痕としても検出されているカラスザンショウの外果皮である可能性が高い。これらから、同土器内部には、カラスザンショウ果実34点とその果皮8点が潜在圧痕として含まれていることになる。ただし、果皮については薄いため、未確認のものが存在する可能性もある。S11はその大きさと形状からみて、HGK 0012の表出圧痕として検出されている堅果類の果皮と推定される。なお、図8中の潜在圧痕番号(S)が灰色表示されたものは、形状が不鮮明であり、ここでは種実として認定していない。

よって、HGK 0012土器には、カラスザンショウの果実42点と同果皮9点が含まれていたと推定される。またそれ以外に確認できたもので、3点の堅果類果皮も含まれていた。土器の表面積(781cm<sup>2</sup>)から算定した単位面積(100cm<sup>2</sup>)当たりのカラスザンショウ果実・果皮の推定数は5.4点である。

## II. フローテーション試料検出の種実・動物遺体調査

### 1. 調査対象と方法

今回、フローテーションを行った土壌は、第5調査区の第24号住居址(SH214)を中心とする縄文時代の遺構中の土壌および炭化物包含層である。試料は2mmメッシュの篩で浮遊物を、沈殿物は1mmメッシュの篩で回収した。試料の採取位置と採取(洗浄)量については、表2に記している。総数で89ユニット、2535.4リットルの土壌を洗浄した。対象とした遺構は、第24号住居址(1946リットル)、第14号掘立柱建物址(328リットル)、第21号掘立柱建物址(202リットル)、第24号掘立柱建物址(40リットル)、第25号掘立柱建物址(19リットル)である。回収した浮遊物・沈殿物は乾燥後、それぞれの試料中から種実、木炭、黒曜石片、骨片、魚類歯などをピックアップした。また、回収された種実のうち、カラスザンショウと穀物類については、年代を得るためにその一部を放射性炭素年代測定にかけた(4章参照)。

### 2. 分析結果

#### (1) 植物遺体

4科6属6種の植物種実537点(果皮含む)を同定した。その種類は、木本類としてカラスザンショウ、コナラ属、草本類としてヤエムグラ、コムギ、オオムギ、イネがある。

#### カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides*

同定根拠については、先に示した。今回の試料中でもっとも多数検出できたもので、すべて黒く炭化した果実である。長さは3.5～2.5mmほどである。第25号掘立柱建物址を除くすべての遺構から検出されている。果皮は検出していない(図9:1、3・4)。

#### 堅果類(コナラ属 *Quercus* sp.もしくはシイ属 *Castanopsis* sp.)

試料72(第24号竪穴住居址NW区南北ベルト2層)から破損の著しいツブラジイ *Castanopsis cuspidata*の子葉と思われる破片1点が検出されている。堅果類の果実の果皮片と思われる炭化した緩い湾曲をもつ厚さ1mm以下の果皮の破片が第24号竪穴住居址から100点あまり検出されており、シイ属果実もしくはコナラ属果実の果皮片ものである可能性が高い(図9:2)。

表2 法垣遺跡におけるフローテーション試料と検出資料の内訳

採取地点	採取量(ℓ)	検出したもの							種実の内訳			備考
		種実	木炭	黒曜石	昆虫	骨	魚類歯	カラスザンショウ	その他	堅果類皮片		
SH24 南北ベルト 南半	97	65						65			カラスザンショウ4点年代測定(PLD-30731)	
SB21 Pit4 柱痕	15	3						3				
SB25 Pit5 掘方	9											
SB21 Pit4 柱痕	16	6						4	コムギ1	1	カラスザンショウ4点年代測定(PLD-30727) コムギ1点年代測定(PLD-30728)	
SB21 Pit4 掘方	66	1						1				
SB21 Pit4 掘方	32	2							不明2			
SH24 東西ベルト 西半	11			245		7	6					
SH24 東西ベルト 東1	43	8						8				
SH24 東西ベルト 西半3	25	14						12		2		
SH24 東西ベルト 西1	53	7						7				
SB14 Pit5 掘方下層	36											
SB14 Pit5 柱痕	25	2						2			カラスザンショウ1点年代測定(PLD-30732)	
SH24 NW区 1層	13	3						2	オオムギ1			
SB21 Pit3 掘方	73		3	57								
SB24 Pit1 掘方	23	5		16				5			カラスザンショウ5点年代測定(PLD-30729)	
SB24 Pit1 掘方	15		34	2					イネ1		イネ1点年代測定(PLD-30730)	
SB25 Pit5 柱痕	10		59	31								
SB24 Pit2 柱痕	2		3	1								
SB14 Pit5 掘方下層	15		32	14								
SB14 Pit5 掘方下層	36		2									
SB14 Pit4 3層	12			9		9						
SH24 Pit6 埋土	18		98	15								
SH24 Pit6	13	3	7	7				3				
SH24 東西ベルト 東2層	10	1	5	43		27	1	1				
SH24 Pit5	7		4									
SH24 NW区 1層墓下	8	5	19	7		91	2	2		3		
SH24 Pit3	3		3									
SH24 Pit2 埋土	13	4	61	15		1	1	3		1		
SB14 Pit5 掘方上層	204		16	50		2	1					
SH24 NW区 1層下層	196	52	(21.3g)	167		246	13	38		14		
SH24 東西ベルト 西半1層	216	51	(16.6g)	490		452	53	31		20		
SH24 東西ベルト 東半	333	90	(21.8g)	430	1	122	36	83	不明1	6	コクゾウムシ胸1点	
SH24 南北ベルト 南1	42	11	(6.5g)	101		19	2	11				
SH24 南北ベルト 北1	84	56	58	176	1	37	30	50	オオムギ2	4	コクゾウムシ1点	
SH24 南北ベルト 南半	74	6	224	31				4	オオムギ1	1		
SH24 南北ベルト 北半	106	84	169	194		287	43	66		18		
SH24 南北ベルト 南2	22	6	143	8		3	2	2		4		
SH24 NW区 1層墓下	116	46	914	84		222	33	3		43		
SH24 床面	331		360	26								
SH24 SW区 2層	3.4	6	51	1		1		4		2		
SH24 NW区 南北ベルト2層	33	3	87	14		40	3	3				
SH24 Pit4 埋土	18	1	23	1				1				
SH24 Pit4	10		14	1								
SH24 貼床	48	1	1						ヤエムグラ1			
合計	2535.4	542	2390	2236	2	1566	226	414	10	119		

表3 法垣遺跡における遺構別の検出資料の内訳

遺構	洗浄量(ℓ)	カラスザンショウ	堅果類皮片	穀類	動物骨片	魚類歯	黒曜石片
第24号竪穴住居址	1946.4	399	118	4	1555	225	2056
第14号掘立柱建物址	328	2	0	0	11	1	73
第21号掘立柱建物址	202	8	1	1	0	0	57
第24号掘立柱建物址	40	5	0	1	0	0	19
第25号掘立柱建物址	19	0	0	0	0	0	0

ヤエムグラ *Galium spurium* var. *echinospermon*

長径2mmほどの楕円形で腹面に円い穴がある。ヤエムグラの分果であろう。図9：5は試料41(第24号竪穴住居址貼床土)から検出され、長さ1.8×幅1.5×厚さ1.3mmである。

コムギ *Triticum aestivum* L.

長楕円形で、腹面の正中線には深い縦溝があり、背面下部に円形の胚がある。側面観はしもぶくれの楕円形。コムギの瘦果である。図9の6は試料56(第21号掘立柱建物址Pit4柱痕)から検出さ



れ、長さ3.4×幅2.2×厚さ2.1mmである。図9の7は試料48・49（第24号竪穴住居址南北ベルト北半）から検出され、長さ3.2×幅2.3×厚さ2.1mmである。

#### オオムギ *Hordeum vulgare* L.

平面形は幅広の長い紡錘形で、側面観はやや狭い紡錘形を呈する。腹面には太く深い縦溝がある。オオムギの瘦果である。図9：8は試料46（第24号竪穴住居址南北ベルト南半）から検出され、長さ3.7×幅2.6×厚さ2.1mmである。図9の9は試料33（同NW区1層）から検出され、長さ4.1×幅2.4×厚さ1.8mmである。また図9：10は試料47から検出され、長さ4.2×幅2.4×厚さ2.3mmである。

#### イネ *Oryza sativa* L.

長楕円形を呈し、側面部下部が直線状にえぐれている。この部分が胚であり、本品はイネの玄米である。図9：11は試料61（第24号掘立柱建物址Pit1掘方）から検出されたもの、長さ5.3×幅2.5×厚さ1.9mmである。

### （2）動物遺体

16ユニットの試料から哺乳動物や魚類の骨と思われる小破片（図10：12～14）を多数回収した。第24号住居址と第14号掘立柱建物址からの出土である。うち魚類の脊椎骨（13）とマダイなどの円錐歯（14）があり、一部は火を受けて黒化しているものも見受けられた。

### （3）昆虫遺体

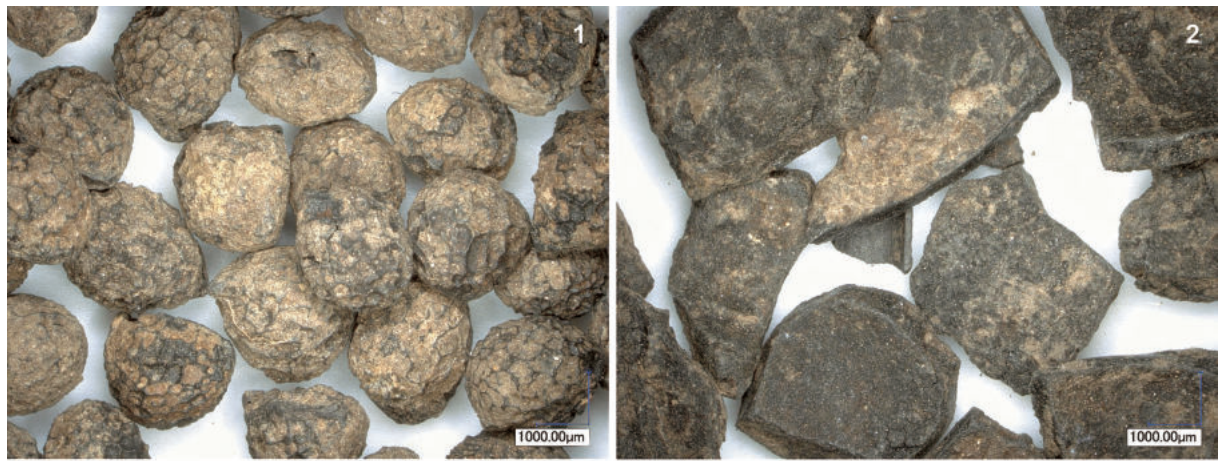
図10：15と16は24号竪穴住居址の土壌サンプル試料47と試料11～19中から検出した甲虫およびその前胸部である。1点（15）は脚を3本失うが、ほぼ完形であり、もう1点（16）は1点の脚を残す胸部である。

15は、触角は球桿部の先端のみに微毛が密集し、中間部は6節。腹背尾端節は露出することからRHYNCHOPHORIDAE オサゾウムシ科の甲虫の中でも *Sitophilus* コクゾウムシ属に絞られる。口吻の触角溝の後方は複眼に接することなく、口吻は残りの頭部の長さの2倍以上である。これにより *Sitophilus* 属の中でもタマリンドオサゾウムシ *Sitophilus linearis* HERBSTは除かれる。前胸背の点刻はほぼ円状、翅鞘には強く点刻された条溝があり、列間部は条溝よりも幅が狭い。体色は茶褐色～黒褐色で、翅鞘には2対の淡色の斑点がある場合が多い。これにより、グラナリアコクゾウムシ *Sitophilus granaries* L.は除かれる。小楯板上の左右両側の隆起の長さ（実測値0.46mm）は両者の間隔（実測値0.70mm）より短い（図10：15-3：b）（吉田ほか2001）。触覚第3節の長さ（実測値0.075mm）は幅（実測値0.056mm）よりも長い（図10：15-2：a）（安富・梅谷2000）。

この2点から、コクゾウムシ *Sitophilus oryzae* L.ではなく、コクゾウムシ *Sitophilus zeamais* MOTSCHULSKYと同定される。

また体長は、コクゾウムシが2.3～3.5mm、コクゾウムシが2.1～2.9mm（平均2.3mm）であり（安富・梅谷）、別の文献ではコクゾウムシが4mm内外、コクゾウムシが2mm内外（原田1971）とされる。本出土例（15）は3.5mmであり、この点からもコクゾウムシの範疇に入る。前胸部の長さは1.1mm、幅は1.0mm、上翅の長さは1.6mm、幅1.1mm、口吻の長さ（複眼端から先端部まで）は1.0mmであった。

16は前胸部のみの破片であるが、背部の点刻が円状であることから、15と同様、コクゾウムシと



(試料43)

(試料48・49)

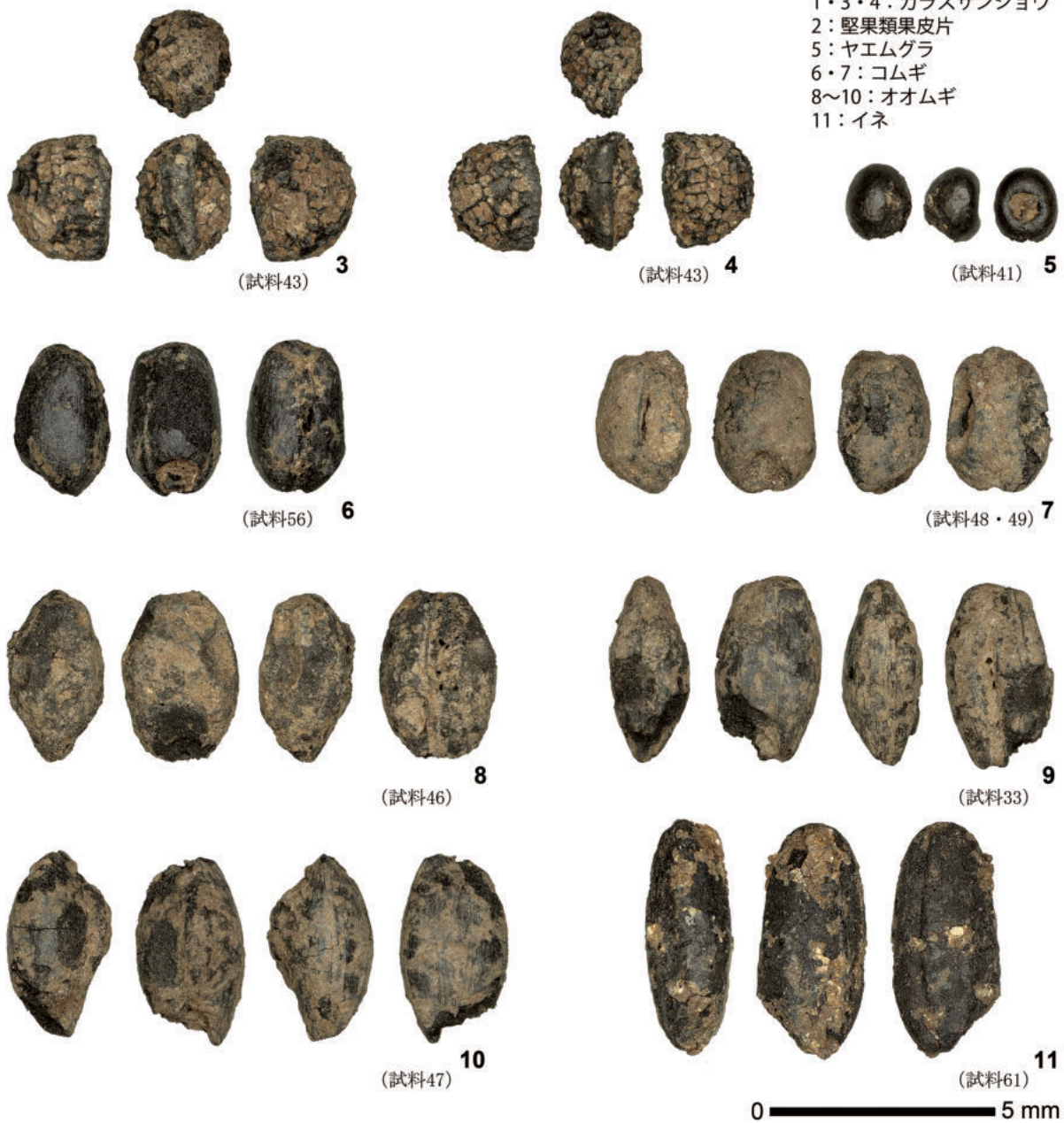


図9 法垣遺跡各遺構出土の炭化種実



(12~14 : 試料48・49)

- 12 : 動物・魚骨片
- 13 : 魚類脊椎骨
- 14 : 魚類歯
- 15・16 : コクゾウムシ

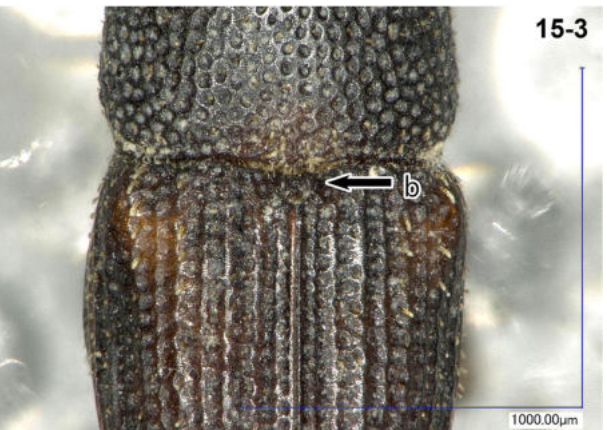


図10 法垣遺跡各遺構出土の動物骨・魚骨・昆虫遺体

考えられる。長さ1.0mm、幅0.9mmであり、15に比べて1割ほど小さい。

#### (4) 放射性炭素年代測定値による検討

放射性炭素年代測定の結果、同じ試料から検出されたカラスザンショウとコムギやイネとでは年代差が認められた。測定値を比較してみると、21号掘立柱建物址の4号ピットから検出したカラスザンショウ果実は $3520 \pm 20$ 年BP (PLD-30727) であり、コムギ瘦果は $350 \pm 15$ 年BP (PLD-30728) と、3000年以上の開きがあった。また、24号掘立柱建物址の1号ピットから検出したカラスザンショウ果実は $3495 \pm 20$ BP (PLD-30729) であり、イネ玄米は $1175 \pm 15$ 年BP (PLD-30730) と、2300年ほどの開きがあった。カラスザンショウ果実はこのほか、24号住居址の南北ベルト土壌および14号掘立柱建物址5号ピットから回収されたものが測定され、その測定値はそれぞれ、 $3505 \pm 20$ 年BP (PLD-30731) と  $3435 \pm 20$ 年BP (PLD-30732) であり、上記2遺構検出のカラスザンショウ果実とほぼ同じ年代値を示していた。

#### (5) 種実の出現率

今回のフローテーション調査はその洗浄量の77%が第24号住居址の土壌であるため、第24号住居址からの各種遺物の出土量が多いのは当然である。しかし、土壌1リットル当たりの各種遺物の出現率でも第24号住居址は抜きん出ており、開放的な廃棄空間をもつ住居址覆土と閉鎖的な柱穴との違いを示していた。

### 3. 考 察

#### (1) カラスザンショウと穀物の所属年代

今回検出された植物種実に関しては、土器圧痕調査とフローテーション調査で得られたものに大きな違いはなかった。どちらもカラスザンショウが主（圧痕資料の71%、フローテーション資料の76%）であり、それにコナラ属やシイ属の堅果類（圧痕資料の21%、フローテーション資料の22%）が加わるものであった。その大きな違いは、イネ・コムギ・オオムギなどの穀類がフローテーション試料中から得られている点である。コンタミネーションがないという土器圧痕の視点からみれば、圧痕資料に認められないことは、後代の紛れ込を示している可能性が高い。これを裏付けるように、放射性炭素年代測定値は、カラスザンショウが縄文時代後期、そして穀類が古代以降のものであることを示していた。これらカラスザンショウ果実の3500年BPを前後する年代値は、縄文時代後期と推定される遺構（14号・21号・24号・25号掘立柱建物址）の柱穴の柱痕や掘方から検出された木炭の放射性炭素年代測定値10個中9個と最大で135年ほどの幅はあるが、ほぼ整合的である。この3450年BP～3700年BPの放射性炭素年代測定値は中部九州では南福寺式や北久根山式土器の炭素年代値を含み、当地域における縄文時代後期前葉～中葉の年代観（水ノ江2008）と一致する。以上より、カラスザンショウ果実は縄文時代後期前葉～中葉であり、イネは9～10世紀、コムギは15～16世紀のものと判断される。これは本遺跡において、古代や中世の遺構・遺物が検出されていることと無縁ではない。オオムギは年代測定を行っていないが、これもおそらく古代・中世以降の所産であろう。このようなコンタミネーションは往々にしてあることであるが、掘立柱建物内の柱穴という限定された空間に後代の遺物が紛れ込むメカニズムについては今後さらなる検証や検討が必要であろう。

## (2) コクゾウムシの所属

2点検出されたコクゾウムシの生体化石はその帰属が問題である。縄文時代遺跡から主として圧痕として多数検出されるコクゾウムシは、縄文家屋内に貯蔵されたドングリ・クリの害虫と考えられており（小畑2016a・2016b）、これまで生体化石は、唯一青森県三内丸山遺跡から検出されているのみであった（小畑2014）。本遺跡例は、縄文時代で二番目の生体化石の可能性のあるものと考えたが、その保存状態はきわめてよく、三内丸山遺跡例に比較して劣化の程度がきわめて軽微であるため、穀類の年代値が示す古代以降のものと考えられる。そのもう一つの根拠として、体の大きさが現代の穀類加害種や福岡県鴻臚館遺跡（8世紀初）や愛知県清州城址（15世紀）出土の生体化石とほぼ同じである点である。縄文時代の圧痕コクゾウムシはこれらより1.25～1.3倍ほど大きい。よって、本遺跡のコクゾウムシも古代以降の所産と考えられる。

## (3) カラスザンショウの用途

本遺跡から多数検出されたカラスザンショウは、現代西日本の代表的な照葉樹林構成種である。この果実は、近年の土器圧痕種実の調査の進展に伴い、とくに九州地域の縄文時代を中心に数多く発見されるようになり、ダイズ属やアズキ亜属のマメ類やエゴマ（シソ属）、コクゾウムシとともに、当該地域の縄文時代晩期前半以前の主要圧痕構成種の一つとなっている（小畑2015a）。カラスザンショウは今ではほとんど利用されない植物であるが、その利用法の一つとして、縄文時代の多数の遺跡から土器圧痕として発見されているコクゾウムシの駆虫剤を想定した（真邊・小畑2017）。その根拠としては、一般に人為的利用種が多出する土器圧痕種実の主要構成種である点や近年貯蔵食物害虫の駆除成分として注目されている精油成分のテルペン類である1,8-シネオールを多量に含んでいる点が挙げられる。縄文遺跡においては、圧痕資料からも、堅果類の屋内貯蔵とそれを加害した害虫コクゾウムシの繁殖、そしてそれらを追い払うためのカラスザンショウなどの駆除剤の使用という相関図が想定できるのである。本遺跡においては圧痕や実物資料として堅果類も検出されている。しかし、残念ながら本遺跡においては、圧痕コクゾウムシは検出しておらず、生体化石も縄文時代のものでなく後代の可能性が高いものであった。

## (4) カラスザンショウ果実混入土器

また、カラスザンショウ果実・果皮を多量に含む土器（HGK 0012）も検出・証明できた。このような種実を多量に混入する土器は、近年、北陸・中部・関東地方の縄文時代前期から中期にかけての遺跡で発見が相次いでいる。混入している種実の種類は、ダイズ属・アズキ亜属のマメ類、エゴマなどであり、その意味するところは、豊穰や感謝の念を込めた意図的混入であり、祭祀的行為と考えた（小畑2015b・2016c・2017a・2017b）。ただし、これについては、土器作りの際の偶然の混入という反論もある（会田ほか2017）。その是非は、今後の議論や検証の進展を待たねばならないが、その背景に豊富な人為的利用植物（栽培植物）が存在したこと、そしてそれらが土器作りの場（家屋内）に加工・調理・保存のために持ち込まれていたという点は、相対する意見の間に共有された認識である。中部地方では、マメ類やエゴマ果実以外にミズキの果実が多量に入った土器も発見されているという（会田ほか2017）。ミズキ果実の効用は不明であるが、本遺跡のカラスザンショウ

ウ例も含め、食料利用以外の目的で住居内に多数持ち込まれた植物種実があったことを証明している。少なくとも言えることは、果実混入土器を含め、本遺跡でのカラスザンショウ果実の多出状況は、それらの利用局面が多かったこと、使用量が多かったことを強く示唆している。

カラスザンショウのその他の効用としては、樹皮や果実を潰して魚毒として利用する民族例（南1993）などもあり、駆除剤としての利用に限定する必要もない。カラスザンショウの果実の多出の意味するところについては、土器への意図的混入があったのかも含め、今後、周辺の同時期の遺跡における圧痕資料や炭化物資料に対する同様の悉皆的な調査を行った後、再度検討したい。

### Ⅲ. まとめ

今回の調査は、カラスザンショウという個別植物の利用とその意味について深く考えさせられる資料と機会を提供してくれた。ただし、カラスザンショウ果実利用の意味についてはさらなる検証が必要であることも判明した。

もう一つの意義としては、フローテーション法によって炭化物混入土壌だけでなく、住居址の埋土や床面直上の土壌などからも炭化種実以外に、哺乳動物や魚類の骨（歯）を検出することができた点である。また、時期の混乱はあったが、甲虫遺体も検出することができた。これは土壌条件にも因るので、すべての遺跡において可能であるとはいえないが、低湿地遺跡だけでなく台地上の遺跡においても、断片的ではあるが、土壌中に利用・廃棄された動物や魚類、さらには貯穀害虫などの情報が残されている可能性を示唆している。また、これらフローテーション資料を土器圧痕資料と比較することで、生業や生活様式に関するより厚みのある議論が可能となる。これはルーティンワークに陥りがちな発掘調査において、このような積極的な試みを行うことの重要性を示すものである。

今回の調査に当たっては、浦井直幸氏をはじめとする中津市教育委員会の全面的な協力を得た。土壌洗浄調査を進められた英断に敬意を表するとともに、フローテーションとソーティングという緻密で神経を使う作業を粘り強く行っていただいた整理作業員の方々にも感謝申し上げます。

なお、本研究には、筆者の一人小畑弘己が受けた2015年度日本学術振興会科学研究費補助金：基盤研究A「先端技術を用いた東アジアにおける農耕伝播と受容過程の学際的研究」（研究課題番号24242032）および現在受けている

2017年度科学研究費補助金研究：基盤A「軟X線・X線CTを用いた栽培植物・家屋害虫のタフノミーと縄文人の心象の解明」(研究課題番号16H01957)の一部を使用した。

## 参考文献

- 会田 進・酒井幸則・佐々木由香・山田武文・那須浩郎・中沢道彦 2017「アズキ亜属種子が多量に混入する縄文土器と種実が多量に混入する意味」『資源環境と人類』7, 23-50頁, 明治大学黒耀石研究センター
- 小畑弘己 2014「三内丸山遺跡からみた貯蔵食物害虫Sitophilus属の生態と進化過程の研究」『特別史跡三内丸山遺跡年報』17, 76-85頁, 青森県教育委員会
- 小畑弘己 2015a「植物考古学からみた九州縄文晩期農耕論の課題」『第25回九州縄文研究会研究発表要旨集』, 8-17頁, 九州縄文研究会 2015年2月14日 於:福岡市・西南学院大学
- 小畑弘己 2015b「エゴマを混入した土器-軟X線による潜在圧痕の検出と同定」『日本考古学』40, 33-52頁, 日本考古学協会
- 小畑弘己 2016a『タネまく縄文人-最新科学が覆す農耕の起源』, 歴史文化ライブラリー416, 217頁, 吉川弘文館
- 小畑弘己 2016b「縄文時代の家屋害虫:コクゾウムシ」『昆虫と自然』51-6, 24-27頁, ニューサイエンス社
- 小畑弘己 2016c「縄文時代の環境変動と植物利用戦略」『考古学研究』63-3, 24-37頁, 考古学研究会
- 小畑弘己 2017a「圧痕法が明かす縄文人の食と心」『ユリイカ』49-6, 94-104頁, 青土社
- 小畑弘己 2017b「種実・昆虫混入土器とその意味について」『日本考古学協会第83回総会研究発表要旨』, 30-31頁, 日本考古学協会 小畑弘己・佐々木由香・仙波靖子 2007「土器圧痕からみた縄文時代後・晩期における九州のダイズ栽培」『植生史研究』15-2, 97-113頁, 日本植生史学会
- 中津市教育委員会 2013『法垣遺跡-地域振興施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』, 中津市文化財調査報告第64集
- 中津市教育委員会 2017『法垣遺跡3次・4次調査-遺構・遺物(土器・鉄製品)写真図版, 観察表編-』, 中津市文化財調査報告第80集
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』, 642頁, 東北大学出版会
- 原田豊秋 1971『食糧害虫の生態と防除』, 526頁, 光琳書院
- 比佐陽一郎・片多雅樹 2005『土器圧痕レプリカ法による転写作業の手引き』, 福岡市埋蔵文化財センター
- 真邊 彩・小畑弘己 2017「産状と成分からみたカラスザンショウ果実の利用法について」『植生史研究』26-1, 27-40頁, 日本植生史学会
- 水ノ江和同 2008「九州磨消縄文土器」『総覧 縄文土器』, 666-673頁, 『総覧 縄文土器』刊行会
- 南 真木 1993「魚毒漁の社会生態-ネパールの丘陵地帯におけるマガールの例から-」『国立民族学博物館研究報告』18, 375-407頁
- 安富和男・梅谷献二 2000『原色図鑑 改訂衛生害虫と衣食住の害虫』, 310頁, 全国農村教育協会
- 吉田敏治・渡辺 直・尊田望之 2001『図説 貯蔵食品の害虫 実用的識別法から防除法まで』, 268頁, 全国農村教育協会

# 法垣遺跡出土縄文土器の胎土分析

福永将大<sup>(1)</sup>・足立達朗<sup>(2)</sup>・田尻義了<sup>(2)</sup>・小山内康人<sup>(2)</sup>

(1)九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程、日本学術振興会特別研究員DC2

(2)九州大学大学院比較社会文化研究院、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター

## 1. 研究の背景

縄文時代後期を特徴づける現象として、東日本由来文化複合体の波状的伝播現象（渡辺1968；前川1979ほか）がある。土器の磨消縄文施文手法や打製石斧などの生業に関わる道具、精神文化に関わる土偶や石棒など、東日本にその由来を辿ることができるような文化要素が、東から西へのベクトルをもって伝播する現象であり、これまで多くの研究者によって検討されてきた（渡辺1968・1975；乙益・前川1969；前川1979；田中1982；田中・松永1984；松本直2002；石川2010ほか）。

本研究の分析対象遺跡である法垣遺跡が位置する周防灘沿岸地域は、そうした様々な文化要素を受け入れる九州の門戸としての性格を有してきた。当該地域への東方からの文化波及については、土器の形態や装飾、住居の平面プランや炉の形態（小池1993・1998；松永1999・2001）といった具体的な考古資料の検討から論じられており、縄文時代後期の広域的かつ流動的な人・モノ・情報の移動のあり方を考察する上で、重要なフィールドであることが示されてきた。

筆者は、縄文時代後期社会における集団関係の実態解明を目的として、これまで縄文土器を分析対象として研究を行ってきた（福永2016a・2016b・2017a）。しかし、土器の形態や装飾などの考古学的分析のみでは、人・モノ・情報の移動の弁別を行うことは困難であり、当時の集団関係をより詳細に復元するためには、地球科学的分析を用いた土器の移動現象の把握が必要と考えた。

## 2. 資料と方法

### 2.1 対象遺跡の立地と地質環境

法垣遺跡は、犬丸川の左岸に位置しており、調査区の最高所は標高27mである。後期白亜紀に形成された変成岩類や花崗岩類が基盤岩であり、山国川の西側に花崗閃緑岩・トーナル岩が散見される。その基盤岩を新第三紀後期中新世から第四紀の火山岩類および堆積岩類が被覆している（島田1965；石塚ほか2009）（図1）。

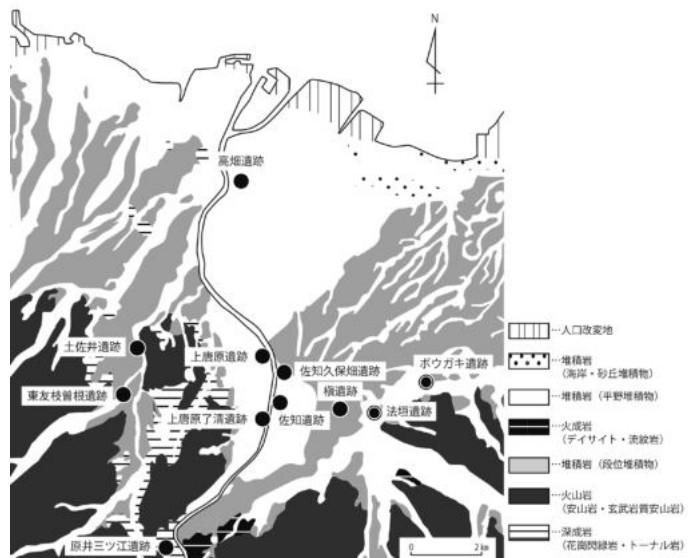


図1 対象遺跡周辺の地質環境

### 2.2 分析資料

分析対象資料は、法垣遺跡から出土した縄文時代後期土器28点である。いずれも竪穴住居跡から出土した資料であり、竪穴住居跡別に見ると、SH2：5点、SH5：2点、SH16：2点、SH22：6点、



SH24：9点、SH27：4点である。また、比較対象として、法垣遺跡から北東に約1.5kmに位置するボウガキ遺跡出土の縄文後期土器6点も分析した。ボウガキ遺跡の資料は、2004～2005年に中津市教育委員会が行った調査（中津市教育委員会2005）で検出された1号竪穴住居跡から出土した資料である。各土器資料の諸特徴については後述する。

## 2.3 分析方法

分析の方法は以下の手順で行った。

- ①分析する縄文土器群の観察・実測・写真撮影などを行い、考古学的記録を作成した。
- ②4 cm四方程度の試料を採取した後に、器壁内外面を2 mm程度研削し、風化部分を取り除いた。
- ③水道水を用いた5分間の超音波洗浄を数回繰返し、続いてイオン交換水を用いて2～3度超音波洗浄を行った。その後、110°Cで48時間以上乾燥させた。
- ④乾燥させた土器試料をタングステン製乳鉢で粗粉碎し、さらに、多検体試料精密粉碎機（安井器機社製マルチビーズショッカー）で細粉碎した。
- ⑤得られた粉末試料約6 gを秤量済みの磁性るつぼに計りとり、110°Cの恒温乾燥機で12時間乾燥させた。さらに880°Cのマッフル炉で2.5時間強熱乾燥させた。
- ⑥乾燥後の粉末から、ガラスビード試料を作成した（中野・角縁ほか2009）。ガラスビード作成において、融剤はLi<sub>2</sub>B<sub>4</sub>O<sub>7</sub> = 20 %、LiBO<sub>2</sub> = 80 %の混合試薬（Johnson-Matthey社製Spectroflux100B）、剥離剤は無水ヨウ化リチウムを用いている。まず、電子天秤で試料1.8000 gと融剤3.6000 g（混合比=1：2）を秤量しメノウ乳鉢で混合した。その後、粉末を白金るつぼに移し、ビードサンプラーでガラスビードを作成した。ビードサンプラーの融解条件は、予備加熱は800°Cで60秒、本加熱は1200°Cで180秒、振動加熱は1200°Cで330秒で行い、振動中に剥離剤をミクロスパーテル1杯分加えた。
- ⑦ガラスビード試料で、各元素の測定を実施した。九州大学大学院比較社会文化研究院に配備された、波長分散型蛍光X線分析装置（XRF）で、主要10元素（SiO<sub>2</sub>・TiO<sub>2</sub>・Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・MnO・MgO・CaO・Na<sub>2</sub>O・K<sub>2</sub>O・P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）および微量12元素（V・Cr・Ni・Cu・Zn・Ga・Rb・Sr・Y・Zr・Nb・Ba）を測定した。さらに、レーザー溶出型融導結合プラズマ質量分析計（LA-ICP-MS）で、希土類元素（La・Ce・Pr・Nd・Sm・Eu・Gd・Tb・Dy・Ho・Er・Tm・Yb・Lu）およびHf・Ta・U・Pb・Thを測定した。測定条件の詳細は中野・角縁ほか（2009）、中野・小山内ほか（2012）を参照のこと。

## 3. 分析

### 3.1 法垣遺跡・ボウガキ遺跡出土土器の考古学的分析

ここではまず、分析対象とする縄文土器資料の考古学的検討を行うことで、縄文時代後期土器群の時空間的様態の中に当該資料を位置づけ、胎土分析で明らかにすべき課題を明確化する。

#### 3.1.1 法垣遺跡出土土器の検討

法垣遺跡から出土した土器は、すべて竪穴住居跡から出土したものである（図2・3、表1）。法

表 1 分析資料観察表

No.	遺跡	遺構	種類	型式	土質	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成
HGK1	法垣遺跡	SH2	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石を含む。	灰黄褐10YR5/2	灰黄褐10YR4/2	振縄、横ナデ	横ナデ、ナデ	良好
HGK2	法垣遺跡	SH2	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや含む。角閃石を少量含む。	にぶい黄褐10YR5/3	灰黄褐10YR5/2	振縄、横ナデ	丁寧なナデ、一部ミガキ	良好
HGK3	法垣遺跡	SH2	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5~1.5mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石を少量含む。赤褐色の微粒をやや含む。	灰黄褐10YR5/2	にぶい黄褐10YR7/4	振縄、ナデ	ナデ	良好
HGK4	法垣遺跡	SH2	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや含む。角閃石をやや含む。	褐7.5YR4/3	灰褐7.5YR4/2	振縄、ナデのみガキ	丁寧なナデ	良好
HGK5	法垣遺跡	SH2	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5~1mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石を含む。赤褐色の微粒をやや多く含む。	橙7.5YR6/6	明黄褐10YR6/6	ナデ	ナデ	良好
HGK6	法垣遺跡	SH5	有文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石をやや含む。赤褐色の微粒を含む。	にぶい黄褐7.5YR5/3	にぶい黄褐7.5YR6/4	横ナデ、ナデ	横ナデ	良好
HGK7	法垣遺跡	SH16	無文鉢	鐘崎Ⅱ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒をかなり多く含む。角閃石を少量含む。	褐7.5YR4/4	明赤褐5YR5/6	ナデ	ナデ	良好
HGK8	法垣遺跡	SH16	有文鉢	鐘崎Ⅱ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石を含む。赤褐色の微粒を含む。	橙7.5YR6/6	橙5YR6/6	条痕→ナデ	条痕	良好
HGK9	法垣遺跡	SH16	有文鉢	鐘崎Ⅲ式~最新相	0.5~1.5mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石をやや多く含む。赤褐色の微粒をやや多く含む。	にぶい黄褐10YR6/4	にぶい黄褐10YR6/3	ナデ	ナデ	良好
HGK10	法垣遺跡	SH22	有文鉢	鐘崎Ⅱ式~Ⅲ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。赤褐色の微粒を含む。	にぶい黄褐10YR7/4	灰黄褐10YR5/2	ナデ	粗い横ナデ	良好
HGK11	法垣遺跡	SH22	有文鉢	鐘崎Ⅲ式最新相	0.5~1mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石を含む。赤褐色の微粒を含む。	明赤褐5YR5/6	橙7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良好
HGK12	法垣遺跡	SH22	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石をやや含む。	黒褐10YR3/1	灰黄褐10YR5/2	丁寧なナデ、ナデ	やや粗いナデ	良好
HGK13	法垣遺跡	SH22	鉢	鐘崎Ⅱ式~北久根山式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石をやや含む。	黒褐7.5YR3/1	黒褐7.5YR3/2	羽状縄、縞RL、ミガキ	ミガキ	良好
HGK14	法垣遺跡	SH22	鉢	鐘崎Ⅱ式~北久根山式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石をごく少量含む。	赤褐5YR4/6	にぶい赤褐5YR4/4	羽状縄、縞RL、ミガキ	ミガキ	良好
HGK15	法垣遺跡	SH24	無文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石をやや含む。	にぶい黄褐10YR5/3	灰黄褐10YR5/2	ナデ	破損のため不明	良好
HGK16	法垣遺跡	SH24	有文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石を含む。	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR6/3	ナデ	ミガキ	良好
HGK17	法垣遺跡	SH24	有文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5~2mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石をやや含む。	にぶい黄褐10YR7/4	黄灰2.5Y4/1	ナデ	横ナデ	良好
HGK18	法垣遺跡	SH24	有文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石を含む。赤褐色の微粒を含む。	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/6	ナデ	ナデ	良好
HGK19	法垣遺跡	SH24	有文鉢	鐘崎Ⅲ式最新相	0.5~1mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石をやや含む。赤褐色の微粒を含む。	橙5YR6/6	にぶい黄褐7.5YR6/4	ナデ	粗いナデ	良好
HGK20	法垣遺跡	SH24	有文深鉢	鐘崎Ⅲ式最新相~北久根山式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石をやや含む。	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR6/3	条痕、ナデ	ナデ	良好
HGK21	法垣遺跡	SH24	有文深鉢	北久根山第2型式	0.5~2mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石をうやや多く含む。	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄褐10YR7/3	振縄、ナデ	ナデ	良好
HGK22	法垣遺跡	SH24	有文鉢	鐘崎Ⅲ式最新相	1~2mm程度の白透色砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。赤褐色の微粒をやや含む。	にぶい黄褐7.5YR5/4	明赤褐5YR5/6	ナデ、粗いナデ	粗いナデ	良好
HGK23	法垣遺跡	SH24	無文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや含む。角閃石を多く含む。	黄褐10YR8/6	褐7.5YR4/3	横ナデ、ナデ	粗いナデ、条痕	良好
HGK24	法垣遺跡	SH24	無文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5~2mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石をやや多く含む。	にぶい黄褐10YR5/3	褐灰10YR4/1	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	良好
HGK25	法垣遺跡	SH27	有文鉢	西平式~太郎迫式(古相)	0.5mm程度の白透色砂粒をやや含む。角閃石をやや多く含む。	灰黄褐10YR5/2	褐灰10YR4/1	横ナデ	丁寧な横ナデ	良好
HGK26	法垣遺跡	SH27	有文鉢	太郎迫式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや含む。角閃石をやや含む。	灰褐7.5YR4/2	明褐7.5YR5/6	ミガキor丁寧なナデ	ミガキ	良好
HGK27	法垣遺跡	SH27	有文鉢	太郎迫式	0.5~1mm程度の白透色砂粒をやや多く含む。角閃石を含む。	にぶい黄褐7.5YR6/4	黒褐10YR3/1	丁寧なナデ、一部ミガキ	丁寧なナデ、一部ミガキ	良好
HGK28	法垣遺跡	SH27	無文鉢	太郎迫式	0.5~1mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石を含む。赤褐色の微粒をやや含む。	橙5YR6/6	橙7.5YR6/6	丁寧なナデ	ナデ	良好
BGK1	ボウガキ遺跡	SH1貝	有文鉢	鐘崎Ⅱ式	0.5~1mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石をやや多く含む。赤褐色の微粒を含む。	にぶい黄褐7.5YR5/4	にぶい黄褐10YR6/3	ナデ	ナデ	良好
BGK2	ボウガキ遺跡	SH1中	有文鉢	鐘崎Ⅱ式~Ⅲ式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石を少量含む。	橙5YR6/6	にぶい赤褐5YR5/4	ナデ	ナデ	良好
BGK3	ボウガキ遺跡	SH1中	有文鉢	鐘崎Ⅱ式	0.5mm程度の白透色砂粒を含む。角閃石をやや含む。	褐灰10YR4/1	灰黄褐10YR4/1	丁寧なナデ	横ナデ	良好
BGK4	ボウガキ遺跡	SH1中	有文鉢	鐘崎Ⅱ式~Ⅲ式	0.5mm程度の白透色砂粒をやや含む。角閃石を含む。	褐灰10YR4/1	灰黄褐10YR6/2	丁寧なナデ	やや丁寧なナデ	良好
BGK5	ボウガキ遺跡	SH1貝	無文鉢	鐘崎Ⅲ式	0.5mm程度の白透色砂粒をごく少量含む。角閃石を少量含む。	褐灰10YR4/1	灰黄褐10YR5/2	丁寧なナデ	丁寧なナデ	良好
BGK6	ボウガキ遺跡	SH1中	無文鉢	鐘崎Ⅲ式~最新相	0.5mm程度の白透色砂粒を少量含む。角閃石をやや多く含む。	灰黄褐10YR5/2	褐灰10YR5/1	丁寧なナデ、一部ミガキ	ナデ	良好

※土器の色調は、『新版 標準土色帖 1998年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修、を用いてデータ化した。

垣遺跡からは竪穴住居跡8棟が検出されており（中津市教育委員会2017）、それらは中央の遺構空白地を挟んで南北2群に分かれて分布している。2群に分かれる集落構成のあり方については、従来、何らかの異なる2つの集団によって社会が構成されていることを示唆している、と考えられてきた（春成2002；田中2008ほか）。こうした学史的な議論を踏まえるならば、南北2群間で土器の胎土に差異があるのか否かを検討することは、興味深い研究課題と言える。

以下、各竪穴住居跡別に分析対象資料の特徴について論じる。



図2 法垣遺跡 分析対象資料① (S=1/4)

【SH2】 図2のHGK1～5はSH2から出土した資料である。HGK1は有文深鉢の口縁部片であり、口縁波頂部外面に渦巻文を単位文様として有し、その両側には数条の横走沈線が配されている。口縁部の形態や文様モチーフより、林潤也氏が設定した石町式（林2002）に比定できる資料と考えられる。HGK3は口縁波頂部に棒状突起を有する土器である。HGK1～4の口縁部文様帯には巻貝擬縄文が施されている。

HGK1～5はすべて北久根山第2型式（前川1979）と考えられる。これらの土器は、形態や

装飾のあり方から、近畿・瀬戸内地方の土器群との影響関係が指摘されており（林2002；福永2016b）、当該時期には遠隔地間での人・モノ・情報の移動が想定される。

【SH5】 図2のHGK6・7はSH5から出土した資料である。両者ともに鉢形土器の口縁部であり、胴部文様が把握できないため口縁部形態での判断になるが、鐘崎Ⅲ式（田中・松永1983）と考えられる。HGK7は無文土器であり、胎土は赤褐色を呈する。

【SH16】 図2のHGK8・9はSH16から出土した資料である。HGK8は鐘崎Ⅲ式で、胎土は赤褐色を呈する。HGK9は「鐘崎式系土器の最終段階を示す土器」（松永1983）、「鐘崎式最新相」（水ノ江・前迫2010）とされる土器である。器壁は全体的に磨耗している。頸部に垂下波状文が施されており、こうした文様モチーフは近畿・瀬戸内地方にその祖形が求められる可能性が指摘されてきた（小池1996；松永2001）。特に、小池史哲氏は、こうした文様モチーフが京都府舞鶴市所在の桑飼下遺跡出土土器に多く見られることに注目している（小池1996）。

【SH22】 図2のHGK10～15はSH22から出土した資料である。HGK10は鐘崎Ⅲ式で、胴部に多重する半同心円文を有する。HGK11は鐘崎Ⅲ式～鐘崎式最新相に比定されると考えられ、胎土は赤褐色を呈する。HGK12は有文深鉢の口縁部で口縁は波状を呈している。北久根山第2型式と考えられる。HGK13・14は口縁部外面と胴部に縄文帯を有し、頸部無文の鉢形土器で、いわゆる「口胴縄文系統」（幸泉2010）と称される器種である。サイズは小さく、内外面ともにミガキ調整を行っている。HGK13・14ともに、胴部縄文帯には羽状縄文が施されており注目される。羽状縄文を施す同様の土器は、福岡県下吉田遺跡、同県狭間宮ノ下遺跡、大分県前田Ⅰ遺跡、愛媛県平城貝塚、香川県永井遺跡、岡山県津島岡大遺跡、同県百間川沢田遺跡四元調査区、京都府桑飼下遺跡、大阪府淡輪遺跡など、量的には少ないものの西日本の広範囲で散見される。時期の特定は難しいが、西日本縄文後期前葉～中葉に展開する縁帯文土器群に属する器種であることは間違いない。

【SH24】 図3のHGK16～24はSH24から出土した資料である。HGK16は橋状把手部分の破片で、鐘崎Ⅱ式（田中・松永1983）に比定される。HGK17・18は胴部文様や口縁部形態などから鐘崎Ⅲ式に比定されよう。HGK17は口縁波頂部外面に多重の弧文、口唇部上面に縦位の列点文が見られる。HGK19・22は鐘崎式最新相で、HGK19の頸部には垂下波状文が施されている。HGK20は有文浅鉢の口縁部と考えられる。渦巻文状の単位文様を有しており、その横には多条の横走沈線が施されている。HGK21は波状口縁深鉢の口縁部片で、口縁部文様帯には巻貝擬縄文が施されている。HGK20・21はその形態的・装飾的特徴から北久根山第2型式に比定されよう。HGK23・24は無文土器であり、形態的特徴から鐘崎Ⅲ式～鐘崎式最新相に比定される。なお、HGK18・19・22の胎土は赤褐色を呈する。

【SH27】 図3のHGK25～28はSH27から出土した資料である。HGK25は口縁部外面に粘土を少量貼り付けて口縁部文様帯を創出しており、HGK26・27に比べてやや古い様相を呈しているものの

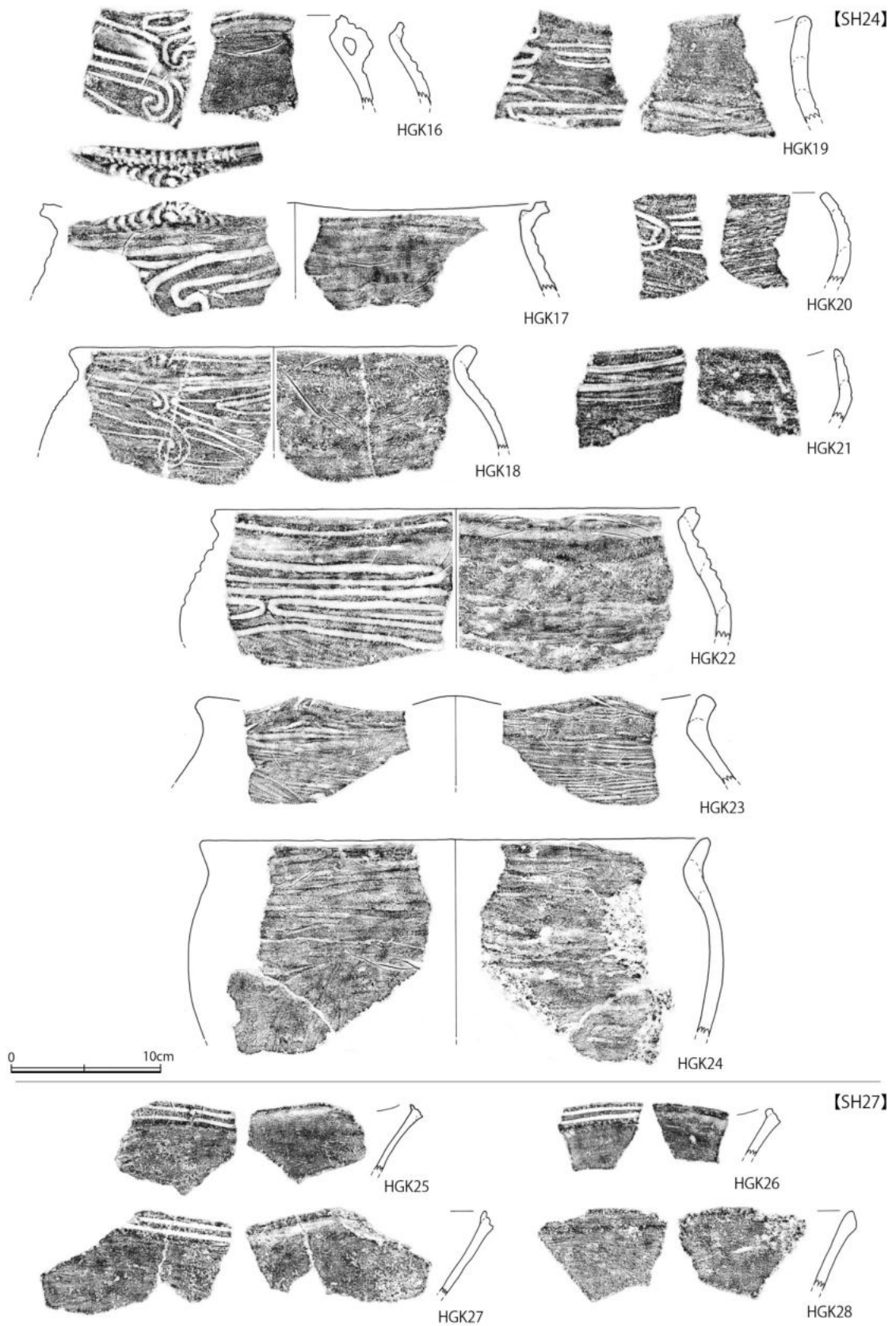


图3 法垣遺跡 分析対象資料② (S=1/4)

(福永2017b)、概ね太郎迫式に比定される土器群と考えられる。HGK26・28は胎土が赤褐色を呈している。

### 3.1.2 ポウガキ遺跡出土資料の検討

ポウガキ遺跡出土資料は1号竪穴住居跡(SH-01)から出土したものである(図4、表1)。この1号竪穴住居跡は、住居内に貝層が検出されており、床面から上約20cmの厚さで堆積していたと報告されている(中津市教育委員会2005)。貝層の上位で出土した遺物を「上層」、貝層出土遺物を「貝層」、貝層とほぼ同レベルから出土した遺物を「中層」として取り上げており、今回分析した資料は、「貝層」出土が2点、「中層」出土が4点である。なお、法垣遺跡からは貝層は検出しておらず、両遺跡の性格に差異があったことも想定される。

分析対象資料は図4のBGK1～6である。BGK1は橋状把手を有しており、鐘崎Ⅱ式に比定される。BGK2～4は口縁部形態や文様などから鐘崎Ⅲ式に比定されよう。BGK5は無文土器であるが、口唇部上面に一条沈線が施されている。

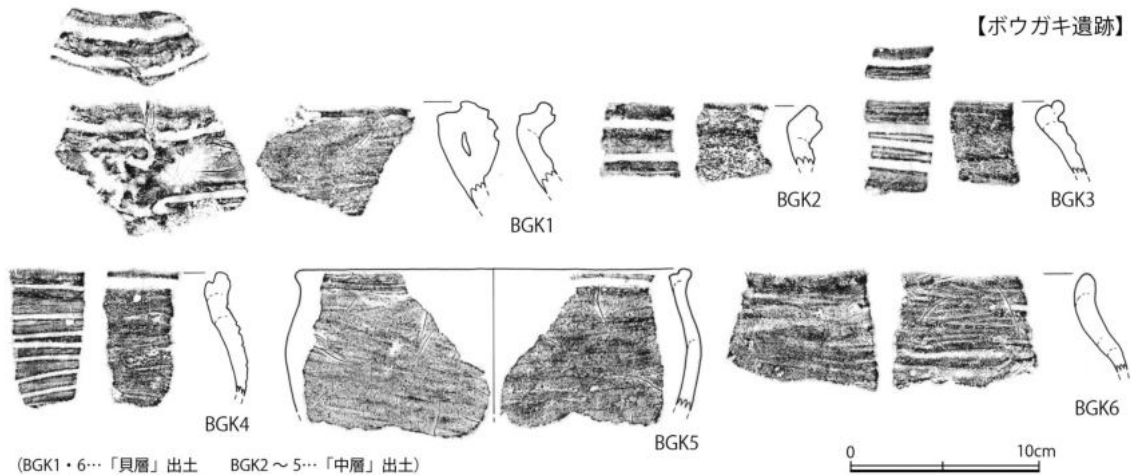


図4 ポウガキ遺跡 分析対象資料 (S=1/4)

以上の考古学的検討を踏まえた上で、今回の胎土分析で明らかにすべき課題を整理すると次のようになる。

①各土器型式別に比較した場合、胎土に差異が見られるのか？

今回対象とする土器資料は、縄文時代後期前葉から中葉の鐘崎Ⅱ式～太郎迫式までの土器型式が含まれている。先述したとおり、鐘崎式最新相や北久根山第2型式の土器群からは近畿・瀬戸内地方の土器群との影響関係が指摘でき、今回対象とした時期幅の中でも、地域関係や集団関係は一定ではなく、広域土器分布現象が生じる時期とそうでない時期があることがわかる。こうした土器の空間的動態と、土器胎土のあり方がどのように関係しているのかを明らかにすることを課題1としたい。

②各遺構別に比較した場合、胎土に差異が見られるのか？

法垣遺跡からは多数の竪穴住居跡が検出されている。中でも、南北2群に分かれて住居跡が配置されている点は興味深い。こうした住居配置と土器胎土のあり方に何らかの相関関係が見られ

表 2 元素測定結果

	HGK1	HGK2	HGK3	HGK4	HGK5	HGK6	HGK7	HGK8	HGK9	HGK10	HGK11	HGK12	HGK13	HGK14	HGK15	HGK16	HGK17	HGK18
(wt%)																		
SiO <sub>2</sub>	54.87	55.85	54.36	54.49	54.44	60.91	58.31	55.48	59.20	53.93	50.87	51.76	43.77	43.65	56.52	58.59	47.80	50.28
TiO <sub>2</sub>	1.60	1.81	1.65	1.08	1.24	1.20	1.28	1.49	1.23	1.79	1.29	1.26	0.63	0.65	1.11	1.20	2.00	1.52
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	19.91	19.62	20.04	22.19	22.63	20.63	20.35	24.00	21.46	21.13	21.04	23.15	19.77	20.04	21.18	19.86	19.99	22.25
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	6.55	8.91	6.84	5.92	6.24	5.02	5.38	5.47	6.02	5.23	6.82	4.45	11.69	12.02	4.20	4.87	12.93	7.98
MnO	0.07	0.05	0.07	0.02	0.04	0.03	0.06	0.04	0.04	0.06	0.04	0.05	0.09	0.06	0.04	0.04	0.10	0.05
MgO	1.62	0.92	1.72	0.73	0.92	0.68	1.25	0.83	0.95	1.16	0.81	1.23	5.17	5.06	1.09	0.78	1.99	0.84
CaO	2.47	1.98	2.76	1.48	2.11	1.71	1.63	1.67	1.97	2.27	2.59	2.37	3.59	3.70	1.74	1.89	2.13	2.56
Na <sub>2</sub> O	1.88	1.17	2.17	1.28	1.73	1.78	1.72	1.64	1.87	1.61	1.76	1.60	1.20	1.23	1.54	1.54	1.32	2.04
K <sub>2</sub> O	1.14	0.63	1.03	1.43	1.11	1.44	1.59	1.12	1.29	1.15	1.35	1.05	0.31	0.30	1.29	1.68	0.70	1.02
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	2.27	1.54	2.87	3.03	3.12	1.75	1.29	1.49	1.04	4.52	5.95	4.97	4.84	5.12	2.59	3.97	3.25	4.37
LOI	6.32	6.20	5.15	7.46	7.05	5.78	5.97	7.39	6.02	6.07	6.38	7.40	8.46	7.64	7.11	5.84	6.40	6.28
total	98.70	98.68	98.67	99.11	100.62	100.92	98.83	100.60	101.08	98.93	98.89	99.30	99.52	99.49	98.40	100.27	98.61	99.19

(ppm)																		
V	114.14	109.81	101.77	87.72	92.72	81.94	90.21	93.84	126.47	111.13	103.50	94.55	161.00	161.66	98.71	225.94	87.83	103.56
Cr	69.60	63.71	70.70	53.83	46.67	51.63	67.53	56.94	80.24	63.67	52.58	64.49	366.55	355.71	62.07	62.62	56.35	55.39
Ni	16.56	10.27	18.09	11.23	9.41	7.36	14.94	9.37	14.03	15.55	8.53	19.05	278.51	276.38	16.44	11.62	11.17	8.86
Cu	22.86	20.80	14.89	13.87	13.89	18.29	11.39	9.98	11.71	8.42	10.87	17.16	108.97	126.51	13.87	10.65	8.93	11.34
Zn	86.42	120.90	90.10	68.98	78.36	50.58	55.56	49.33	66.41	91.69	118.83	120.04	208.11	224.39	55.48	120.47	85.24	82.88
Ga	20.65	20.54	19.88	22.24	22.02	21.12	21.00	22.26	25.45	19.86	19.09	21.09	15.56	15.89	21.47	22.46	18.50	20.93
Rb	51.16	27.43	48.10	79.75	58.96	95.92	84.60	71.73	52.75	61.34	80.18	55.49	22.82	20.55	61.20	32.61	83.02	66.05
Sr	322.49	219.55	395.08	224.76	332.97	290.89	242.48	307.33	278.58	427.38	548.62	335.07	255.32	272.96	215.79	265.36	378.11	491.84
Y	22.25	13.70	19.62	19.12	19.79	21.85	24.69	22.15	18.62	22.70	21.24	21.77	13.03	13.92	25.37	18.13	18.71	24.87
Zr	217.59	337.90	199.84	243.23	284.30	255.33	263.23	251.75	234.00	239.51	265.50	208.20	59.76	58.32	211.70	211.86	258.86	264.05
Nb	19.70	22.17	20.01	17.34	18.59	18.91	19.33	18.88	18.47	20.41	19.83	16.90	4.54	4.39	16.28	23.89	18.69	20.35
Ba	665.13	642.01	647.39	676.16	720.99	588.81	488.90	466.83	478.18	1660.62	2323.30	1565.45	1887.81	1913.33	606.62	664.91	1671.24	1047.54
La	15.76	12.03	15.03	14.19	15.25	17.20	19.92	16.18	12.25	15.73	16.65	16.62	6.09	7.10	19.74	12.38	16.35	19.87
Ce	28.22	20.88	25.82	24.70	26.93	30.55	32.71	30.92	22.56	27.05	29.49	30.80	12.14	10.54	36.04	25.32	29.72	38.69
Pr	3.78	2.75	3.59	3.19	3.47	3.67	4.56	3.86	2.85	3.70	3.79	3.73	1.65	1.80	4.49	2.97	3.60	4.67
Nd	15.64	10.79	15.17	12.64	14.23	14.47	18.30	14.96	11.16	14.98	14.75	14.65	6.74	7.68	17.24	11.71	13.87	18.49
Sm	3.44	2.07	3.33	2.57	2.97	2.85	3.81	3.20	2.42	3.25	3.06	2.97	1.55	1.83	3.54	2.48	2.73	3.96
Eu	0.99	0.58	1.05	0.64	0.87	0.80	0.97	0.93	0.70	0.94	0.97	0.89	0.55	0.59	0.89	0.68	0.82	1.28
Gd	3.15	1.84	3.12	2.29	2.70	2.55	3.39	2.84	2.16	2.99	2.63	2.70	1.48	1.72	3.17	2.23	2.48	3.42
Tb	0.49	0.28	0.48	0.34	0.41	0.41	0.53	0.44	0.33	0.47	0.41	0.43	0.24	0.28	0.48	0.33	0.38	0.54
Dy	2.86	1.69	2.81	2.04	2.45	2.50	3.07	2.68	1.98	2.78	2.49	2.47	1.47	1.74	2.86	1.94	2.25	3.23
Ho	0.54	0.33	0.54	0.39	0.48	0.48	0.58	0.50	0.38	0.53	0.48	0.47	0.28	0.33	0.55	0.37	0.43	0.61
Er	1.54	1.01	1.57	1.16	1.43	1.44	1.77	1.52	1.16	1.62	1.45	1.41	0.82	0.99	1.62	1.12	1.34	1.80
Tm	0.26	0.18	0.28	0.20	0.25	0.25	0.30	0.25	0.21	0.28	0.25	0.25	0.15	0.18	0.28	0.19	0.23	0.30
Yb	1.62	1.20	1.78	1.30	1.58	1.60	1.91	1.63	1.25	1.73	1.57	1.54	0.96	1.13	1.76	1.27	1.50	1.91
Lu	0.25	0.20	0.27	0.19	0.24	0.24	0.30	0.24	0.19	0.26	0.24	0.24	0.14	0.16	0.26	0.19	0.22	0.28
Hf	4.18	6.63	4.45	4.73	6.18	4.98	5.36	4.90	4.29	4.80	5.18	3.85	1.10	1.24	4.04	3.77	5.28	5.18
Ta	1.13	1.22	1.19	1.09	1.19	1.12	1.16	1.09	1.03	1.13	1.12	0.93	0.20	0.22	0.93	1.15	1.15	1.14
Pb	14.10	9.71	13.19	15.32	17.66	15.62	15.74	15.97	16.85	15.26	17.87	15.23	4.85	4.15	14.78	11.66	17.01	17.75
Th	7.11	7.34	7.08	9.57	11.64	8.99	10.57	11.19	8.71	8.36	9.92	7.61	1.68	1.72	8.51	5.86	9.09	9.82
U	1.09	0.86	0.88	1.09	1.31	1.21	1.31	1.23	1.22	1.10	1.35	0.93	0.42	0.35	1.06	0.93	1.24	1.36

	HGK19	HGK20	HGK21	HGK22	HGK23	HGK24	HGK25	HGK26	HGK27	HGK28	BGK1	BGK2	BGK3	BGK4	BGK5	BGK6
(wt%)																
SiO <sub>2</sub>	57.11	50.70	53.05	52.84	53.83	51.92	52.25	53.75	53.27	55.31	56.03	53.80	57.69	56.19	58.12	57.12
TiO <sub>2</sub>	1.42	1.25	1.30	1.36	1.33	1.42	1.49	1.38	1.13	0.95	1.20	1.26	1.25	1.45	1.56	1.52
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	20.22	22.26	23.25	20.82	22.84	24.79	22.07	22.06	22.66	21.96	19.83	19.75	20.09	19.89	20.21	21.41
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	5.29	7.73	4.55	8.76	5.73	4.74	4.08	5.67	4.44	4.87	5.91	7.06	6.00	4.25	4.87	5.26
MnO	0.06	0.06	0.04	0.17	0.04	0.04	0.06	0.05	0.04	0.04	0.07	0.11	0.04	0.06	0.08	0.07
MgO	0.73	0.80	0.98	1.13	0.83	0.87	1.53	1.06	1.10	1.29	1.14	2.01	1.05	1.05	1.32	1.01
CaO	2.25	1.95	2.25	2.18	2.45	1.65	2.61	2.39	1.82	2.07	3.65	3.80	2.56	3.31	3.20	3.72
Na <sub>2</sub> O	1.95	1.68	1.76	1.57	1.94	1.21	1.67	1.51	1.28	1.52	1.69	1.93	1.50	1.78	1.81	1.71
K <sub>2</sub> O	1.07	1.07	1.10	1.13	1.04	1.05	1.36	0.93	1.06	1.26	1.33	1.10	1.11	1.33	1.27	1.12
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	3.81	4.39	4.81	4.47	3.87	3.43	5.12	5.23	4.47	2.56	1.48	3.05	3.39	3.63	2.30	1.61
LOI	6.33	6.98	7.81	6.61	6.89	8.26	6.96	6.93	7.67	6.70	5.89	5.31	6.21	5.96	6.08	6.07
total	100.24	98.87	100.89	101.04	100.79	99.38	98.89	100.98	98.93	98.51	98.23	99.17	100.89	98.91	100.82	100.62
(ppm)																
V	104.92	82.14	100.89	116.88	93.12	120.43	106.97	110.66	92.90	87.53	95.21	92.37	109.38	80.05	89.49	90.37
Cr	53.79	52.67	65.32	56.15	56.47	63.98	68.90	66.64	62.08	56.45	41.93	47.52	46.90	57.53	56.27	65.87
Ni	10.04	10.51	15.90	17.01	8.25	21.47</										

るのか、また各住居間で土器胎土に差異が見られるのか、という問題は、当時の土器製作のあり方を復元する上で重要な課題と考えられる。これを課題2とする。

③法垣遺跡とボウガキ遺跡を比較した場合、胎土に差異が見られるのか？

法垣遺跡とボウガキ遺跡から出土している土器はほぼ同時期に位置づけられ、形態や装飾などの考古学的検討から、両遺跡の土器を弁別することは困難である。貝層が形成されるか否かという差異はあるものの、両遺跡ではともに廃屋葬の事例が見られるなど、共通する文化要素も多い。この約1.5kmしか離れていない両遺跡間で、土器胎土に差異が見られるかどうかを明らかにすることは、第二の課題と同様、当時の土器製作のあり方を復元する上で重要な貢献を果たし得よう。これを課題3とする。

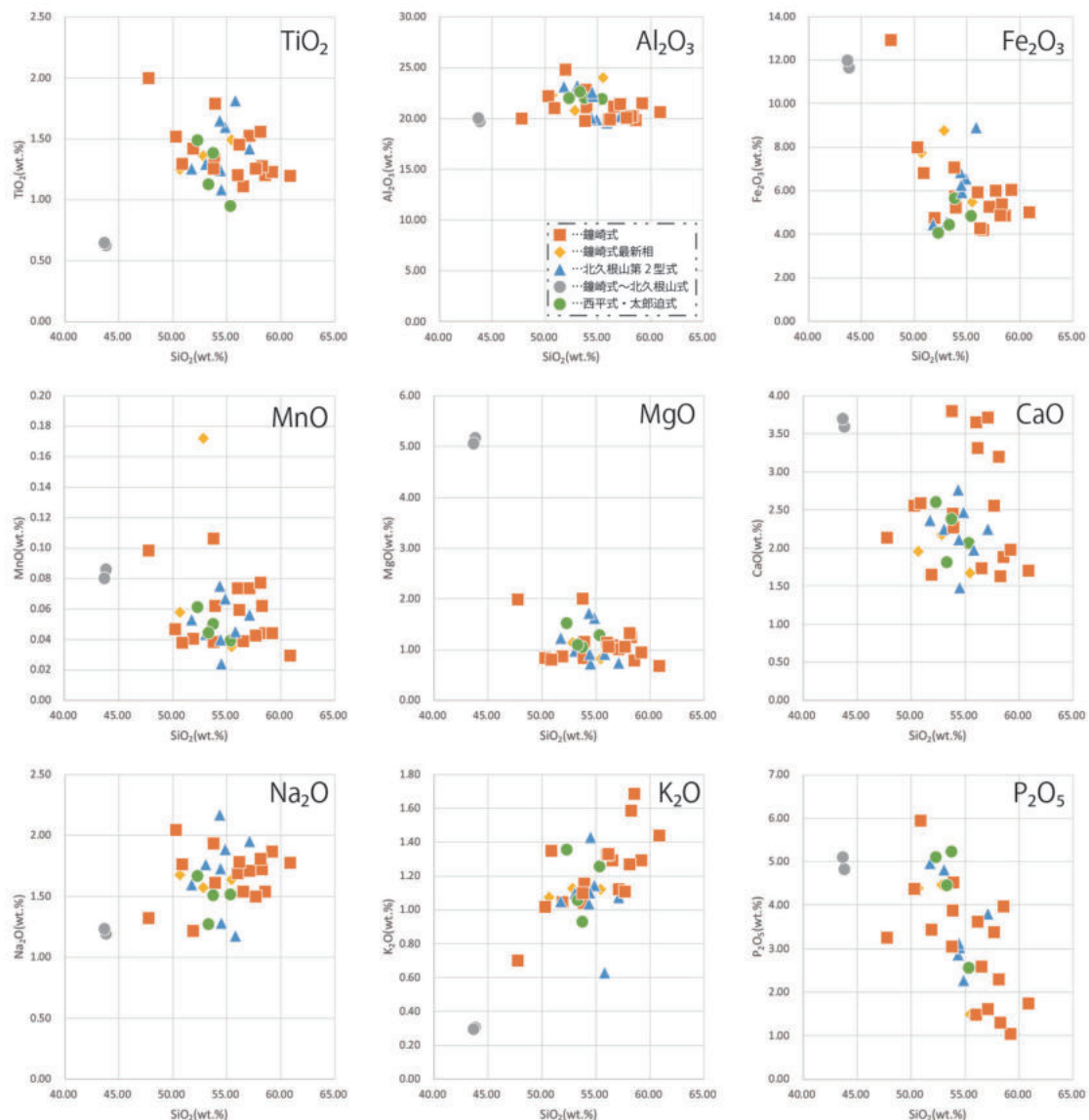


図5 主要元素ハーカーク [型式別]

3.2 法垣遺跡・ボウガキ遺跡出土土器の胎土分析

上述した3つの課題を解決するために、胎土分析を行った。XRFとLA-ICP-MSによる元素測定結



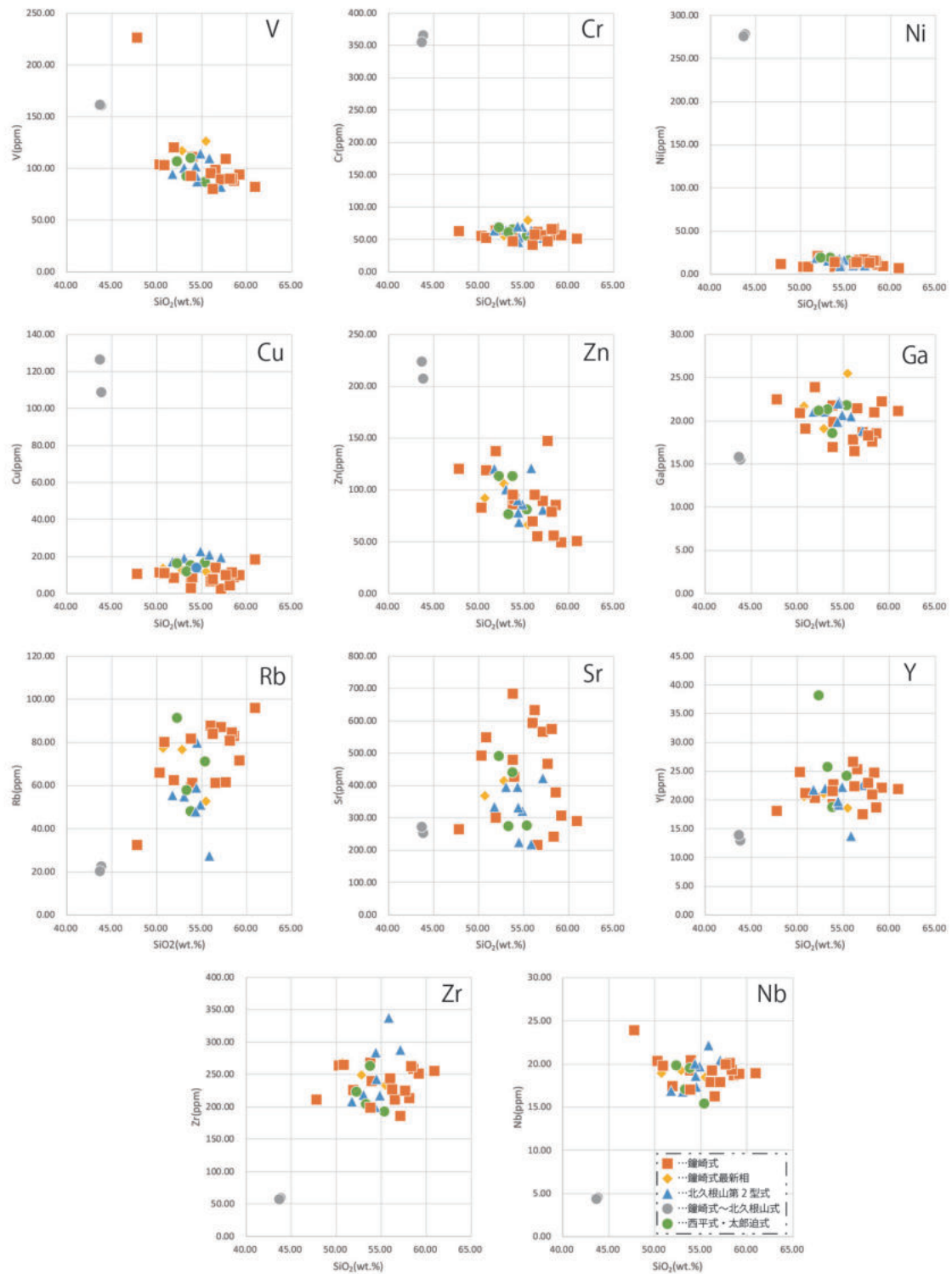


図6 微量元素ハーカー図 [型式別] ①

果は表2の通りである。以下、分析結果の詳細を述べる。

### 3.2.1 課題1：各土器型式別の比較検討

縦軸に各元素含有量、横軸にSiO<sub>2</sub>含有量を取り、各土器型式別にマーカーの形式を変えて表示したハーカー図が図5～7である。まず、これらの図を見ると、基本的に土器型式間に明確な不連続

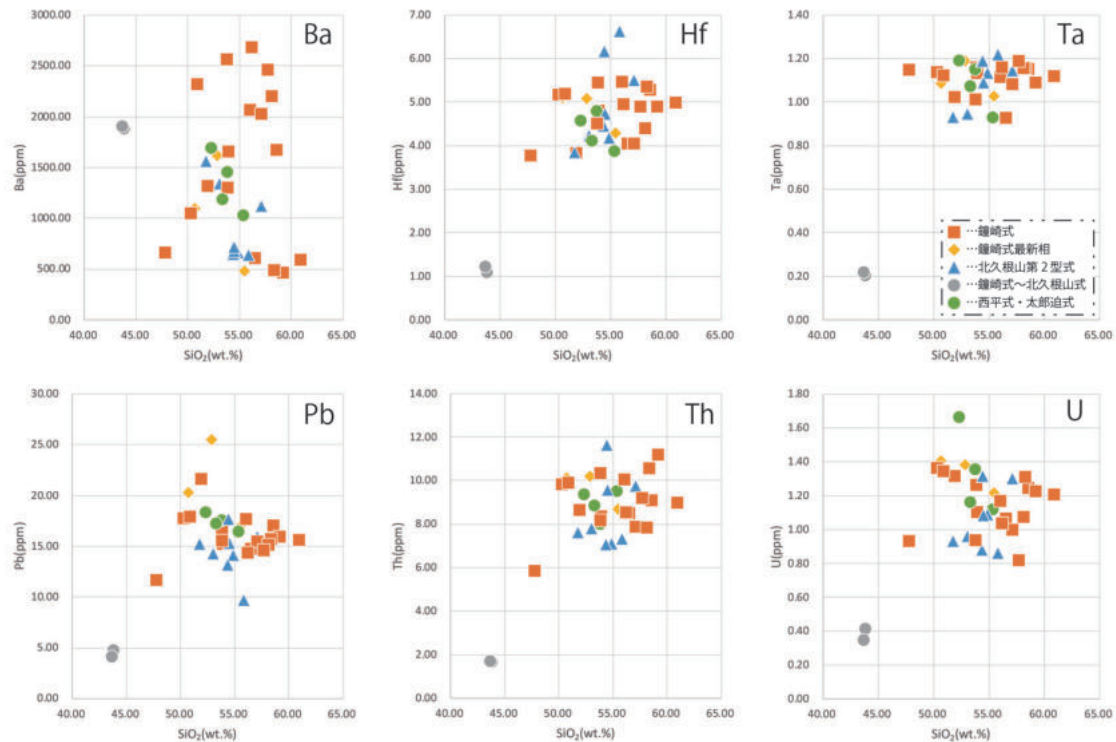


図7 微量元素ハーカー図 [型式別] ②

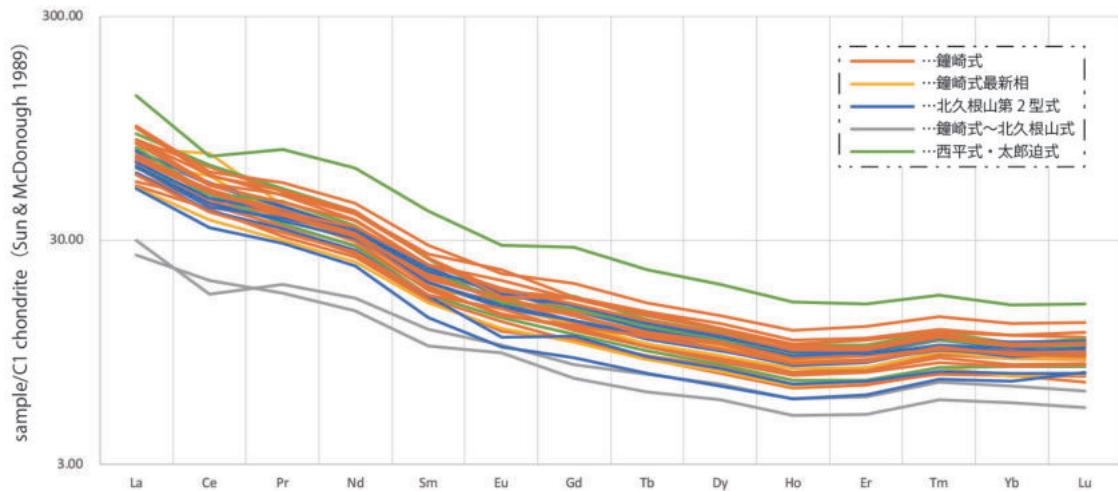


図8 希土類元素存在度パターン [型式別]

を見出すことは困難であり、各マーカーが塊状をなしていることがわかる。粘土採掘坑など土器製作関連遺構が検出されていないため、土器の製作地を厳密に特定することは不可能であるが、分析結果や周辺の地質環境などを総合的に判断すれば、これらの土器群の大部分は遺跡内あるいは遺跡周辺で製作されたものとするのが最も妥当な解釈と考えられる。

しかし、 $\text{SiO}_2 \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{MgO} \cdot \text{V} \cdot \text{Cr} \cdot \text{Ni} \cdot \text{Cu} \cdot \text{Zn} \cdot \text{Zr} \cdot \text{Nb}$ などの元素において、「鐘崎式~北久根山式」(灰色丸形のマーカー)とした図2のHGK13・HGK14の2点が明らかに他と異なる挙動を示していることがわかる。特に、 $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{MgO} \cdot \text{Cr}$ の値が他に比べて高く、 $\text{SiO}_2$ の値が低いことから、苦鉄質岩に由来する元素含有量の差異が生じている可能性が考えられる。図8は土器の希

土類元素存在度パターンを比較したものである。LA-ICP-MSを用いた希土類元素の組成分析では、太陽系始原物質と考えられるCIコンドライト組成 (Sun & McDonough 1989) で規格化したパターンをもとに検討している。これを見ると、HGK13・HGK14 (灰色ラインで示した「鐘崎式～北久根山式」の2本) は他の土器群に比べて、すべての希土類元素において低い値を示していることがわかる。一般的に苦鉄質岩は希土類元素濃度が低いため、図8の結果は、先ほど述べた苦鉄質岩に由来する元素含有量の差異である可能性を支持するものと考えられる。このように、HGK13とHGK14は、多くの元素において他の土器群と異なる含有量を示しており、他所からの搬入品である可能性が高い。

また、「鐘崎式」(橙色四角のマーカー) において $TiO_2 \cdot Fe_2O_3 \cdot V \cdot Nb$ の値が他より高い個体が存在している(図3のHGK16)。これらの元素の値が高い要因として、通常岩石中に副成分鉱物として含まれるチタン鉄鉱からの影響が考えられる。しかし、これら以外の元素においては、他の土器群と目立った差異は見られない。このことから、 $TiO_2 \cdot Fe_2O_3 \cdot V \cdot Nb$ の値に見られる差異は、土器胎土の本質的な差異と考えるよりも、粘土や混和剤の採集地の局所的な差異に基づくものと考え

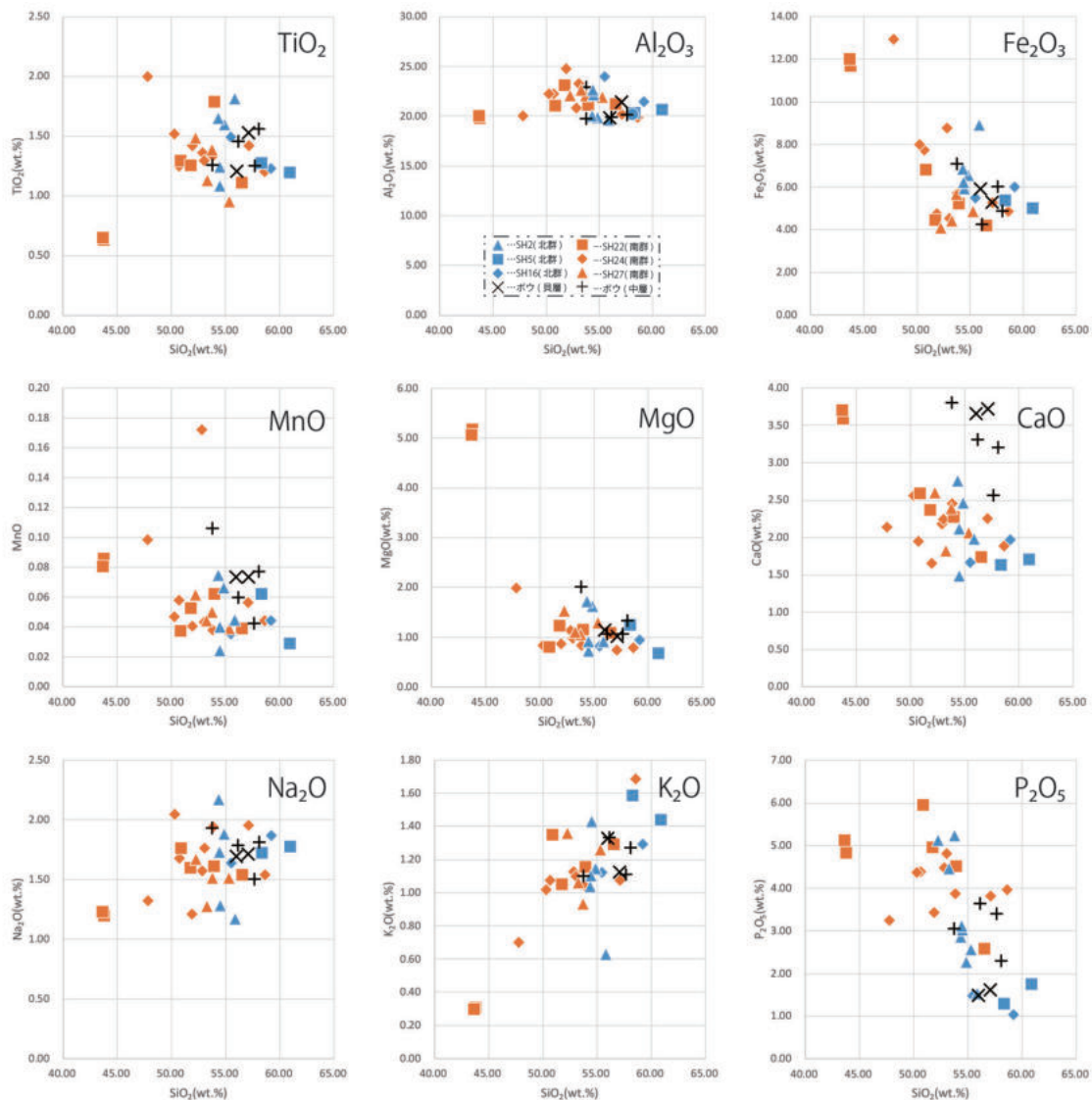


図9 主要元素ハーカー図 [遺構別]

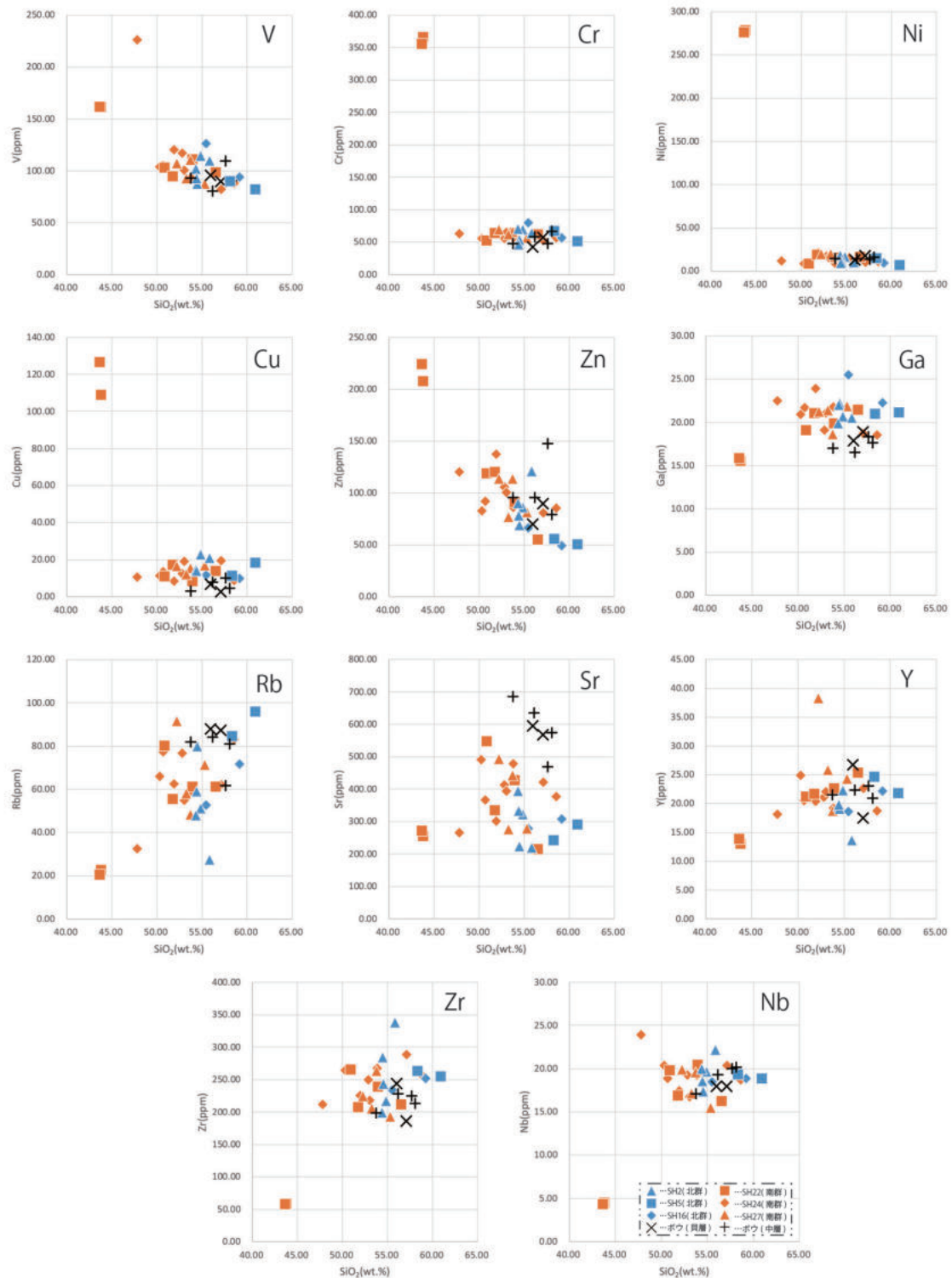


図10 微量元素ハーカー図 [遺構別] ①

られるため、HGK16を他所からの搬入品として積極的に評価することはできない。

### 3.2.2 課題2：各遺構別の比較検討

縦軸に各元素含有量、横軸にSiO<sub>2</sub>含有量を取り、各遺構別にマーカーの形式を変えて表示した

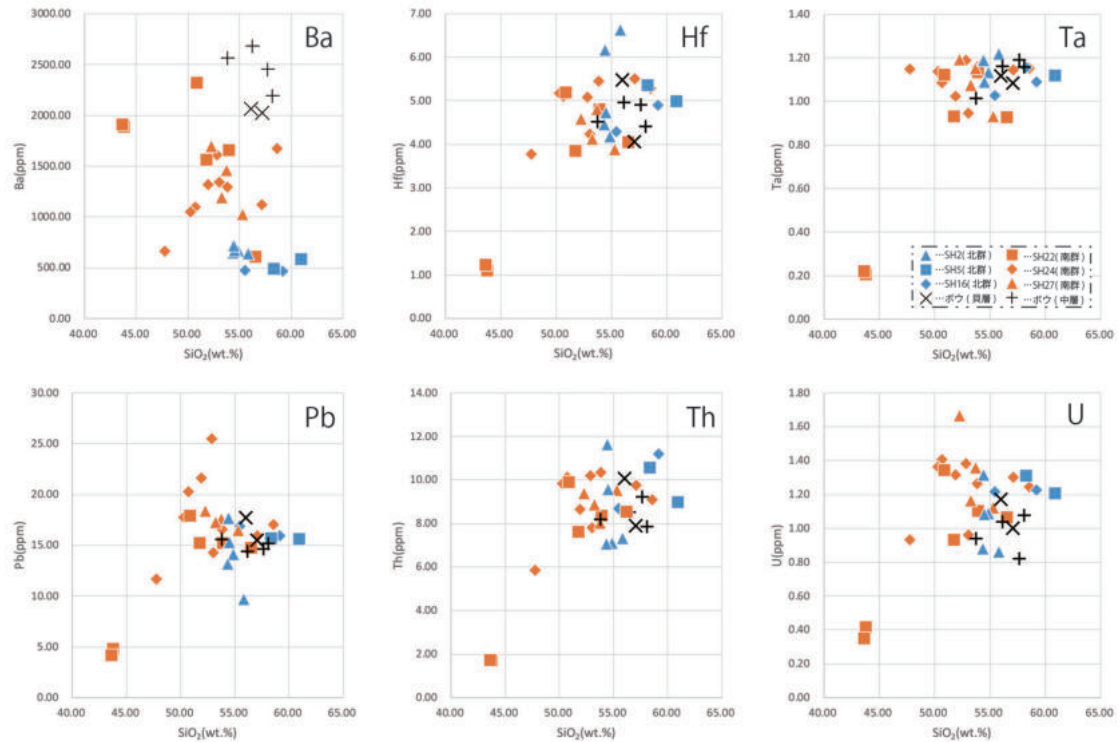


図 11 微量元素ハーカー図 [遺構別] ②

ハーカー図が図 9～11 である。SiO<sub>2</sub>・Ba において、法垣遺跡の北側に分布する住居跡群 (=北群) と南側に分布する住居跡群 (=南群) との間に緩やかな差異が見出せる可能性があるが、その他の元素においてこれらを区分する結果は得られていない。法垣遺跡の 2 つの住居跡群間、また、遺構間で土器胎土を明確に区分することは不可能であると結論づけたい。

### 3.2.3 課題 3：法垣遺跡とボウガキ遺跡の比較検討

縦軸に各元素含有量、横軸に SiO<sub>2</sub> 含有量を取り、法垣遺跡とボウガキ遺跡でマーカーの形式を変えて表示したハーカー図が図 12～14 である。CaO・Sr・Ba においてボウガキ遺跡の方が法垣遺跡よりも値が高く、両遺跡で差異が見られる。しかし、骨・植物・海藻など多くの有機物が堆積した環境下では、Ca・Sr・P・Ba の値が高くなる可能性が指摘されており (松本建 2002；石田 2014)、ボウガキ遺跡の資料を抽出した 1 号堅穴住居跡の貝層の存在が問題になる。CaO・Sr・Ba の 3 つの元素に見られる差異は、土器製作時における粘土・混和剤の差異ではなく、土器の埋没後環境の差異に基づく可能性を排除することができない。ただ、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>・Cu・Ga といった、水や風化などの作用によって移動しにくい元素の値においても、法垣遺跡とボウガキ遺跡の間でやや差異が見られることも事実である。これについては、今後、ボウガキ遺跡出土土器群のうち、貝層との関係性を排除できる資料を分析するなどして再検証する必要がある。今回の分析結果のみから、法垣遺跡とボウガキ遺跡との関係性について、判断を下すことは避けたい。

## 4. 考察

法垣遺跡とボウガキ遺跡から出土した縄文土器について、まず考古学的検討から当該資料に関わ

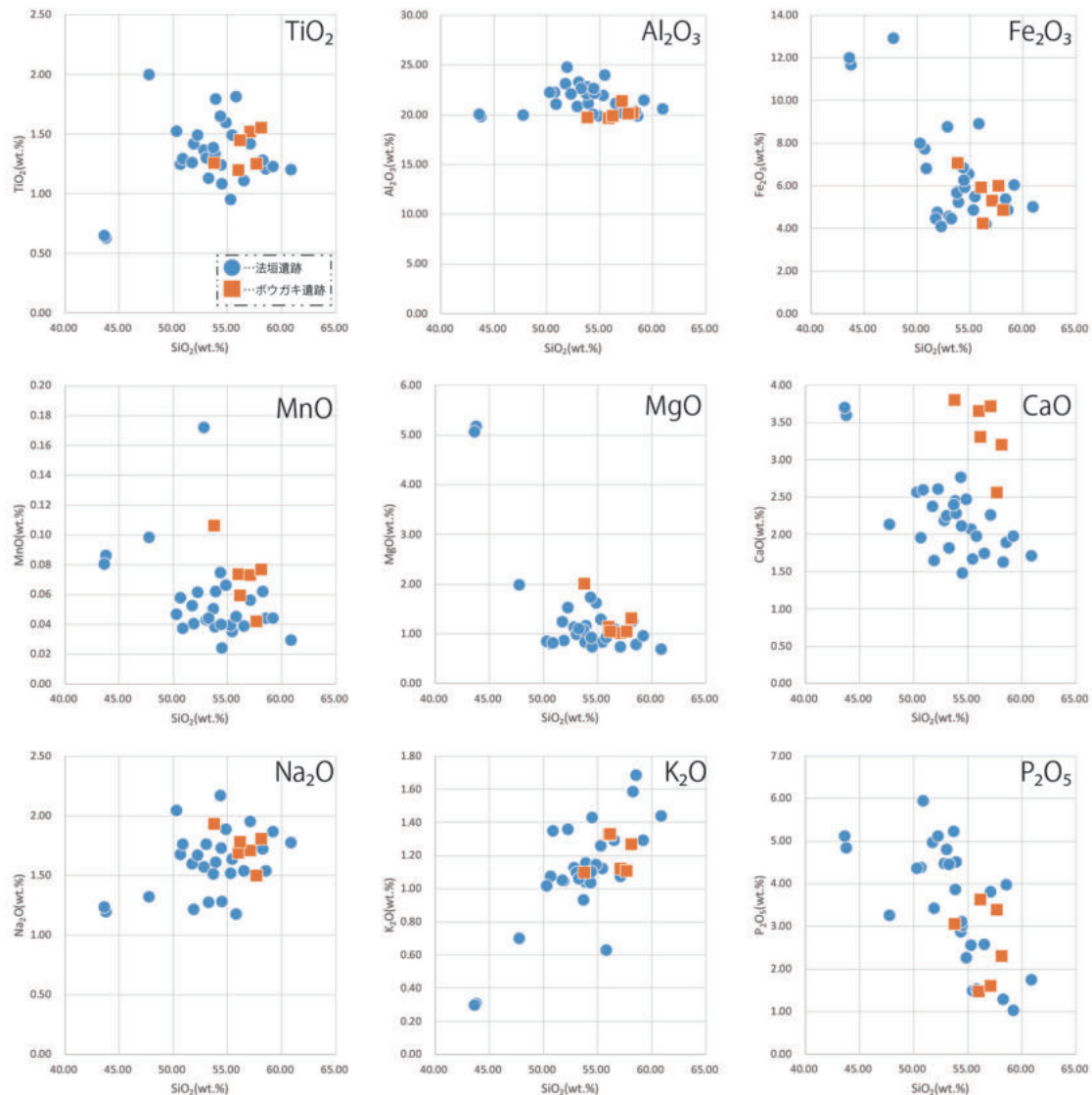


図 12 主要元素ハーカー図 [遺跡別]

る3つの研究課題を設定し、それらを解決するために胎土分析を行った。これまでの分析結果をまとめると、以下ようになる。

- ・今回分析した資料の大部分は遺跡内あるいは遺跡周辺で製作されたものである可能性が高い
- ・明らかに他所からの搬入品と考えられるものが2点確認された (HGK13・HGK14)
- ・各遺構間で出土した土器胎土に差異は見られない
- ・法垣遺跡とボウガキ遺跡の胎土を比較した結果、いくつかの元素含有量において差異を見出したが、埋没後環境の差異が元素含有量に与えた影響を排除することはできない

今回の分析で明らかな搬入品を2点確認できた点は大きな成果と言えよう。これらHGK13とHGK14のような口縁部と胴部に縄文帯を有する土器群は、縄文時代後期前葉から中葉にかけて西日本各地に広く分布している土器群である。また、これらの土器群は他の器種に比べて内外面ともに丁寧にミガキ調整されていることが多く、当該期の土器様式構造 (田中1982) において上位に位置づけられる器種と考えられる。

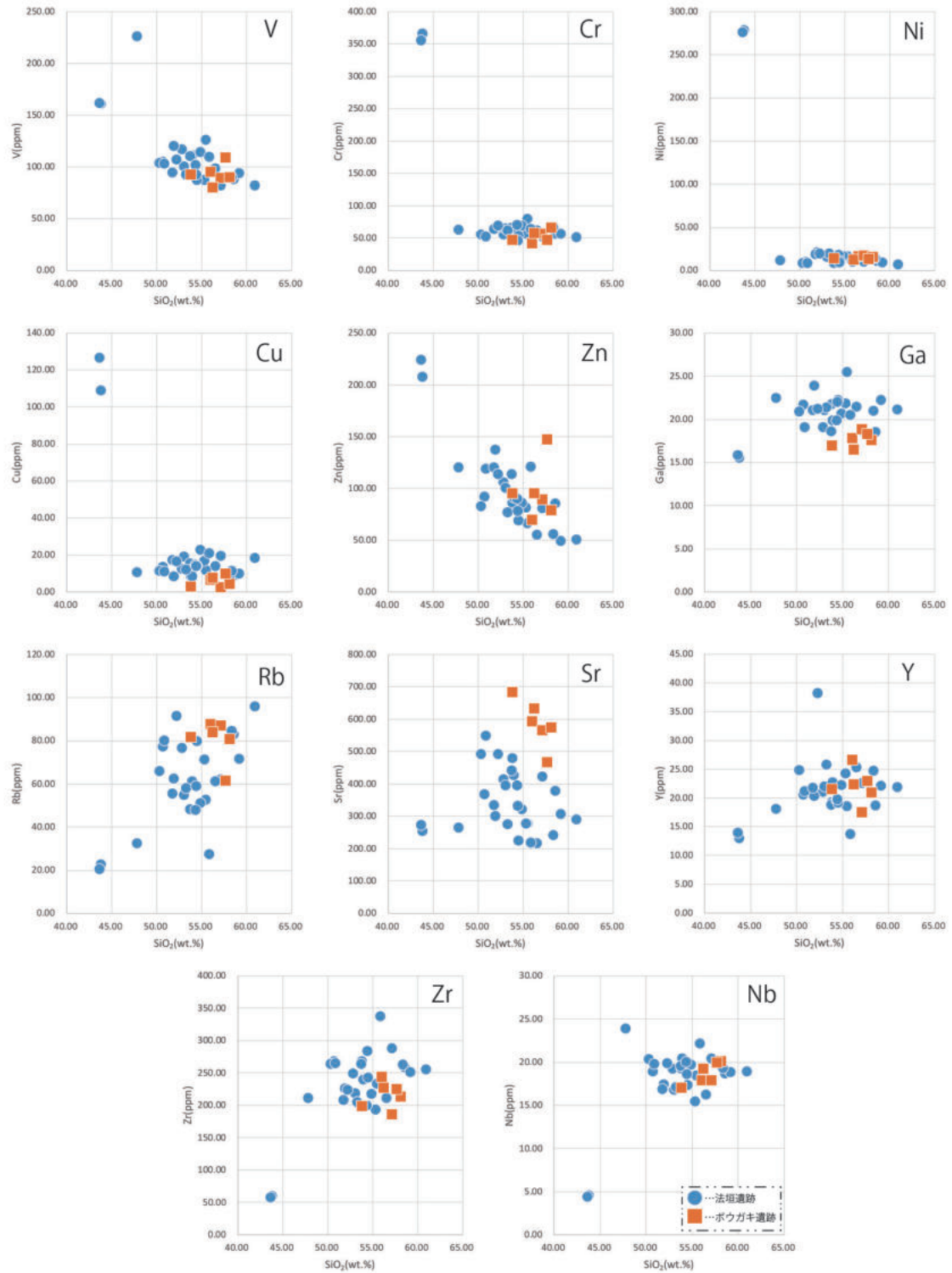


図13 微量元素ハーカー図 [遺跡別] ①

ではこれらの土器はどこから運ばれてきたのだろうか。その問題を考える上で重要な鍵をにぎるのが、HGK13とHGK14に施されている羽状縄文である。先述したとおり、口縁部と胴部に縄文帯を有する鉢形土器で、胴部に羽状縄文を施す事例は、西日本各地で散見される。羽状縄文がどういった系譜関係で出現したのかは明らかになっておらず、分布中心を明示することは不可能ではあ

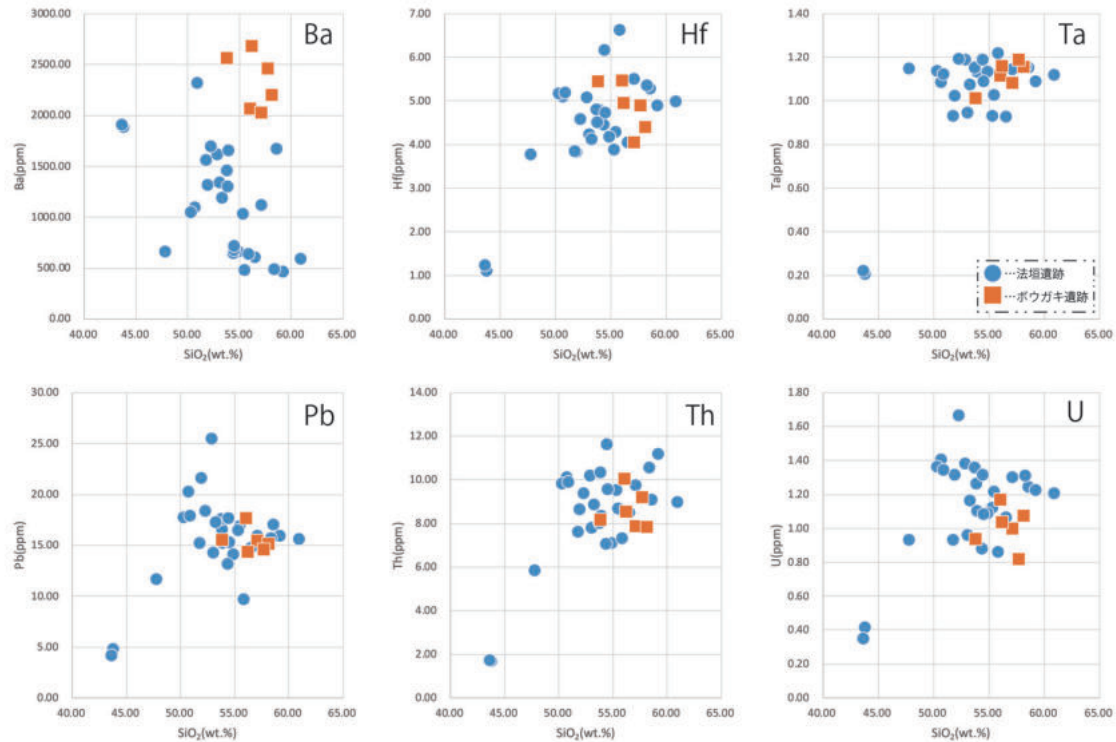


図14 微量元素ハーカー図〔遺跡別〕②

るものの、京都府桑飼下遺跡や香川県永井遺跡からはまとまった量が出土しており、岡山県津島岡大遺跡や同県百間川沢田遺跡でも一定数出土している点は注目される。

さて、HGK13とHGK14は苦鉄質岩に特徴的な元素濃度が高く、他の土器群の胎土とは元素含有量に差異が生じている可能性があることは先に指摘したとおりである。この苦鉄質岩の由来を考える上で注目されるのが舞鶴帯である（図15）。



図15 舞鶴帯  
(西村ほか2002、pp.161、図5.27を改変)

舞鶴帯とは、京都府北部の舞鶴市付近から西南西に延びて広島県付近に至る幅約20km、長さ約200kmの地帯のことで（磯崎・丸山1991；磯崎2000ほか）、舞鶴帯周辺地域は、西南日本内帯において本州地向斜内での塩基性～超苦鉄質の火成活動の最も著しかった地域の一つとされている（黒川1978）。先述した京都府桑飼下遺跡や、岡山県津島岡大遺跡、同県百間川沢田遺跡は、この舞鶴帯周辺に位置する遺跡であり、遺跡周辺で採集された粘土や混和剤などが苦鉄質岩に特徴的な元素濃度を示す可能性は十分考えられる。

苦鉄質岩が見られる地域は他にもあるため、容易に結論を出すことはできないが、先の考古学的検討と土器胎土の地球科学的検討の成果を総合すると、HGK13とHGK14の故地として、こうした舞鶴帯周辺地域の可能性が浮上してくるのである。鐘崎式最新相や北久根山第2型式の土器群の形態的・装飾的特徴からも近畿・瀬戸内地方の土器群との影響関係が指摘されており（小池1996；松永2001；林2002；福永2016b）、今回分析対象とした資料の中にもそうした土器群を一定数確認する



ことができた。このことは、先に提示した可能性を支持するものと考えられる。

以上の諸点を踏まえると、当該時期の土器様式構造内におけるレベル差の違いによって、その背後に想定される人・モノ・情報の移動現象が異なる可能性を指摘できる。土器様式構造において上位のレベルに位置づけられるHGK13やHGK14のような土器群は、西日本という広範な地域で土器製作情報の共有がなされていただけでなく、今回の胎土分析結果が示すように、土器そのものが遠隔地間を移動していた。一方、有文深鉢や有文鉢など他の精製土器は、形態的・装飾的属性において遠隔地の土器群からの影響が見られ、土器製作情報の広範な移動が想定されるものの、土器そのものの移動を把握することはできなかった。また、無文の粗製土器には外来的要素は見られず、土器そのものが移動していることも無いようである。

縄文時代後期前・中葉の西日本では、縁帯文土器と称される類似性が高い土器群が広域分布する現象が見られる（田中・松永1984ほか）。今回明らかになった土器の移動現象のあり方が、当該時期の広域的かつ流動的な社会状況の中でどのような意義をもっていたのかについて、本分析結果のみに基づいて言及することは難しい。しかし、土器様式構造における諸レベル間で、モノと情報の移動現象に差異が見られる可能性を指摘できたことは興味深く、縄文後期社会における重層的な社会関係の実態解明を行う上で重要な成果と言えよう。

## 5. 今後の展望と課題

土器様式構造内におけるレベル差の違いや、土器が有する諸属性の違いによって、土器製作情報の広がり方に位相差が存在することは、これまでの土器の考古学的分析結果からも指摘されてきたが（田中1979；田中・松永1984・1992；千葉1989；福永2017aほか）、その背後にある人・モノ・情報の移動現象に関しては仮説的な議論に留まらざるを得なかった。その点において、考古学と地球科学との学融合研究がもたらす成果は大きいことを、本研究を通して示すことができたのではないかと考える。しかし、本研究で行った諸議論も未だ仮説の域を出ないものである。今後さらに分析を深めることで仮説の検証に努めていきたい。

## 謝辞

本稿を執筆できましたのは、世話人教員である宮本一夫先生をはじめ、小山内康人先生、溝口孝司先生、田尻義了先生の指導教員の先生方、そして、岩永省三先生、辻田淳一郎先生、舟橋京子先生、菅浩伸先生、瀬口典子先生、仙田量子先生、藤岡悠一郎先生、足立達朗先生、谷澤亜里先生、米元史織先生の諸先生方による日々のご指導のおかげでございませう。

法垣遺跡・ボウガキ遺跡出土土器の胎土分析を許可していただき、また、当該遺跡出土資料の実見や分析資料の選別に便宜を図っていただきました、中津市教育委員会の浦井直幸様に感謝申し上げます。

また、本研究を行う機会を与えていただいた村上久和様と田中良之先生に心より御礼申し上げます。

なお、本研究は、平成29・30年度日本学術振興会特別研究員奨励費「縄文文化の東西差」発現要因の解明－集団関係・生業活動・資源環境の統合的研究（研究代表：福永将大）の成果の一部である。

## 参考文献

- 石川健2010「九州北半部地域における縄文時代後期の文化変容についての省察」『国際縄文学協会紀要』第3号、pp.40-49
- 石田智子2014「土器動態からみた弥生時代地域社会構造の研究」(九州大学大学院比較社会文化学府 学位論文)  
[Online] <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/recordID/1455993?hit=1&caller=xc-search>
- 石塚吉浩・尾崎正紀・星住英夫・松浦浩久・宮崎一博・名和一成・実松健造・駒澤正夫2009『20万分の1地質図幅「中津」』、(独法)産業技術総合研究所地質調査総合センター
- 磯崎行雄・丸山茂徳1991「日本におけるプレート造山論の歴史と日本列島の新しい地体構造区分」『地学雑誌』100-5、pp.697-761
- 磯崎行雄2000「日本列島の起源、進化、そして未来」『地学雑誌』108-5、pp.643-649
- 乙益重隆・前川威洋1969「縄文後期文化 九州」『新版考古学講座』3 雄山閣、pp.269-289
- 黒川勝己1978「舞鶴帯周辺の超苦鉄岩体とオフィオライト問題」『地球科学』32-6、pp.311-313
- 小池史哲1993「豊前地域の縄文後期の住居跡」『古文化談叢』30(下)、pp.1029-1044
- 小池史哲1996「Ⅲ 遺物と遺構」『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集 上唐原遺跡Ⅱ』福岡県教育委員会、pp.11-144
- 小池史哲1998「周防灘沿岸地域の縄文後期住居跡」『列島の考古学—渡辺誠先生還暦記念論文集—』、pp.629-646
- 幸泉満夫2010「四国」『西日本の縄文土器 後期』千葉豊編、真陽社、pp.69-112
- 島田義典1965「地質時代と地形の概観」『中津市史』pp.1-34
- 田中良之1979「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』6、pp.1-52
- 田中良之1982「磨消縄文土器伝播のプロセス—中部九州を中心として—」『森貞次郎先生古稀記念古文化論集 上巻』、pp.59-96
- 田中良之2008『骨が語る古代の家族』吉川弘文館
- 田中良之・松永幸男1983「寺の前遺跡縄文後期土器について」『萩台地の遺跡』大分県教育委員会、pp.105-114
- 田中良之・松永幸男1984「広域土器分布圏の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」『古文化談叢』14、pp.81-117
- 田中良之・松永幸男1992「土器文様の伝播と位相差」『Museum Kyusyu』39、pp.33-42
- 千葉豊1989「縁帯土器群の成立と展開—西日本縄文後期前半期の地域相—」『史林』72-6、pp.102-146
- 中津市教育委員会2005『中津市文化財調査報告第36集 ボウガキ遺跡・福島遺跡棒垣地区・福島遺跡西入垣地区』
- 中津市教育委員会2017『中津市文化財調査報告第80集 法垣遺跡3次・4次調査 遺構・遺物(土器・鉄製品) 写真図版・観察表編』
- 中野信彦・角縁進・小山内康人・米村和紘・桑原義博2009「低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希土類元素の定量」『比較社会文化』15、pp.1-15
- 中野信彦・小山内康人・足立達朗・米村和紘・吉本紘・NugrohoSETIAWAN2012「蛍光X線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・軽希土類元素の迅速定量分析」『比較社会文化』18、pp.81-94
- 西村祐二郎・鈴木盛久・今岡照喜・高木秀雄・金折裕司・磯崎行雄2002『基礎地球科学 第2版』朝倉書店
- 林潤也2002「北久根山式土器をめぐる諸問題」『四国とその周辺の考古学 犬飼徹夫先生古稀記念論集』、pp.181-203
- 春成秀爾2002『縄文社会論及』塙書房
- 福永将大2016a「縄文時代後期中葉土器群の基礎的研究—西日本広域土器編年案の提示—」『古文化談叢』75、pp.97-131
- 福永将大2016b「北久根山式土器の再検討」『九州考古学』91、pp.1-20
- 福永将大2017a「縄文時代後期広域土器分布圏の変遷とその特質」『考古学研究』63-4、pp.37-59
- 福永将大2017b「九州縄文後期中葉土器群の変遷とその歴史的意義」『第27回九州縄文研究会長崎大会 九州の縄文時代後期中葉土器—北久根山第二型式～西平式併行期を中心に— 発表要旨・資料集』九州縄文研究会、pp.27-36
- 前川威洋1979「九州後期縄文土器の諸問題—磨消縄文土器の展開—」『九州縄文文化の研究』、pp.41-107
- 松永幸男1983「垂水遺跡出土の鐘崎式系土器について」『古文化談叢』11、pp.173-177
- 松永幸男1999「周防灘西南沿岸の縄文時代後期集落をめぐる諸研究について」『研究紀要』北九州市立考古博物館、pp.47-55

- 松永幸男2001「大分県中津市棒垣遺跡の縄文土器について—鐘崎式～北久根山式をめぐって—」『縄文時代重層社会論—広域社会と地域社会—』、pp.292-310
- 松本建速2002「浜中2・種屯内遺跡出土土器の胎土分析」『先史学・考古学研究』13、pp.1-15
- 松本直子2002「伝統と変革に揺れる社会—後・晩期の九州—」『縄文社会論』下、安齋正人編、同成社、pp.103-138
- 水ノ江和同・前迫亮一2010「九州」『西日本の縄文土器 後期』千葉豊編、真陽社、pp.21-67
- 渡辺誠1968「九州地方における抜歯風習」『帝塚山考古学』1、pp.1-7
- 渡辺誠1975「第5章総括」『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会、pp.309-320

## 第6章 総括

### 法垣遺跡の概要

法垣遺跡からは縄文時代後期の竪穴住居跡8棟・掘立柱建物跡6棟・土坑24基、古墳時代後期の竪穴住居跡21棟・掘立柱建物跡8棟・土坑5基、古代の掘立柱建物跡10棟・土坑12基・溝状遺構1条・井戸1基、中世の溝状遺構2条・性格不明遺構1基、近世の溝状遺構9条、時期不明の掘立柱建物跡6棟・土坑4基・性格不明遺構3基・柵列3条などを検出した。出土遺物は、縄文土器が最も多く、古墳時代、古代、中世、近世、弥生、旧石器の順に少ない。

旧石器時代は集石などの生活痕跡は見つかっておらず、ナイフ形石器が少量出土している。縄文時代の遺構はほとんど後期に属し、前期末から中期初頭の玦状耳飾、中期の並木式土器など前代の遺物が単発的に出土した。弥生時代の遺構も少なく、土坑から遺物が少量出土する程度であり、弥生人の足跡は少ない。縄文時代後期以降、本遺跡における人類の活動は古墳時代後期の6世紀後半から7世紀初頭頃に再び活発化する。古代は8世紀末～9世紀、10世紀末～11世紀前半代の遺構がある。中世は16世紀代の溝が検出されたが遺構数は少ない。近世は複数の溝が検出されている。近代は畑地目的に造成された様子で、並行する幅40cm程度の溝跡などが十数本掘られている。

このように、法垣遺跡における土地利用は、縄文時代後期、古墳時代後期、古代の8世紀末～9世紀代、10世紀後半～11世紀前半にピークがあることがわかる。次に時代別に遺構・遺物の特徴を確認する。

### 縄文時代の遺構・遺物について

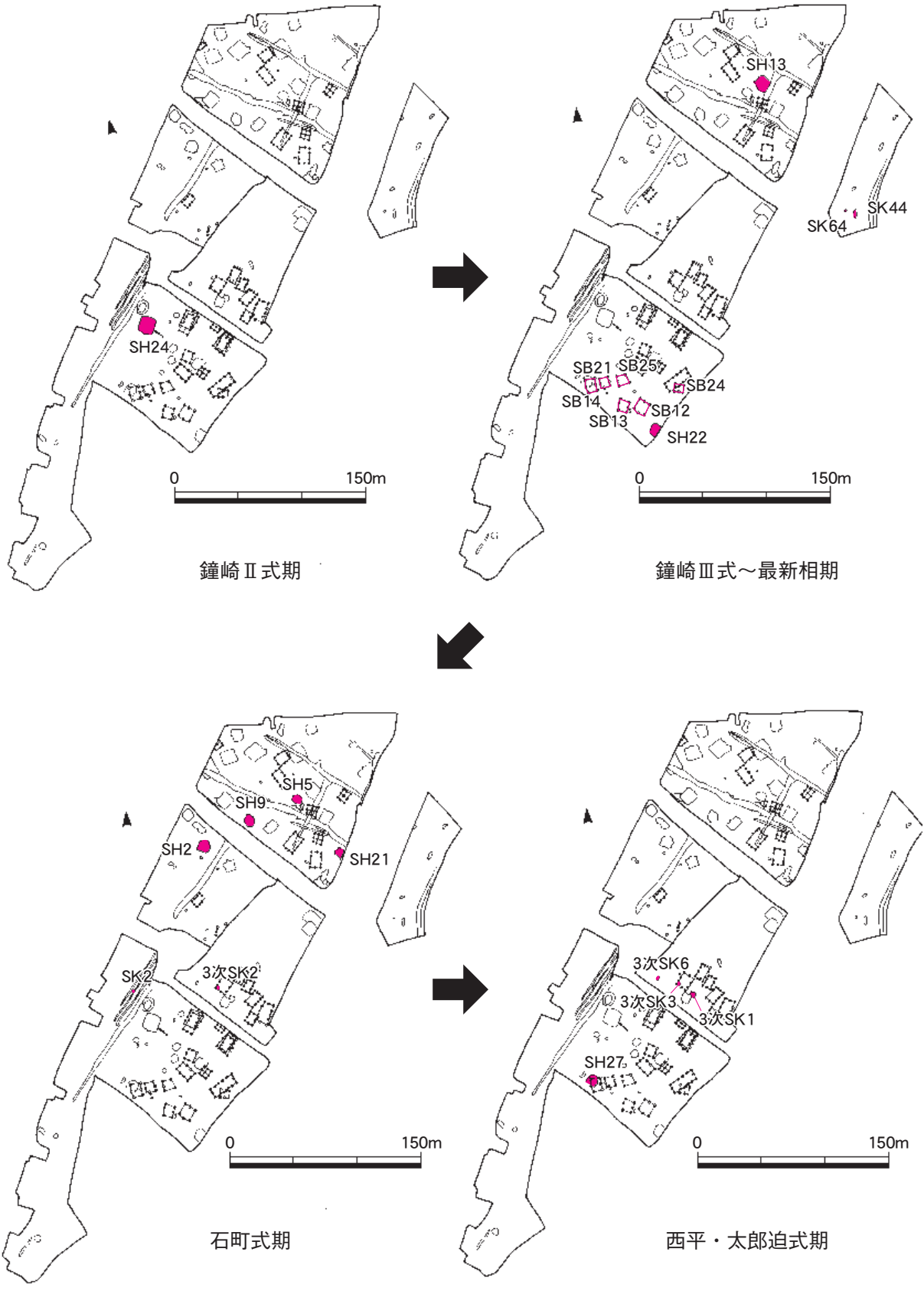
縄文時代の遺構は竪穴住居跡8棟、掘立柱建物跡6棟、土坑24基を検出した。各遺構を時期別に見ると、鐘崎Ⅱ式期はSH24のみで、鐘崎Ⅲ式～最新相期はSH13・22、SB12・13・14・21・24・25、SK44・64である。北久根山第二型式期（石町式期）は、SH2・5・9・21、3次SK2・SK2。西平・太郎迫式期はSH27、3次SK1・3・6と推定している。その他の土坑は、出土遺物が少なく詳細な時期を明らかにできていない。

時期別の変遷を第309図に示す。これをみると鐘崎Ⅱ式期はSH24のみと希薄である。次期の鐘崎Ⅲ式～最新相期の遺構が最も多く、竪穴住居2棟と掘立柱建物群が展開している。続く石町式期は14～15m間隔で並ぶ竪穴住居3棟とやや離れて1棟が存在する。西平・太郎迫期は竪穴住居跡がSH27の1基のみへ減少し、3次調査区に土坑群が形成される。縄文時代後期中葉～後葉にかけて、遺構数が一旦増加し減少に転じる傾向が窺い知れる。

### 【鐘崎Ⅱ式期】

#### 竪穴住居 SH24

鐘崎Ⅱ式期に位置づけたSH24は、南北6.6m、東西6.3mの大きさである。途中保存することが決定したため完掘していないが、支柱穴が平面四角形に並ぶと思われる。住居中央の石囲炉は底面に敷石を施す。本プランと同類の住居跡は山崎・石町遺跡で調査され、小池氏により「山崎7号型住居跡」と呼称されている（小池1998）。山崎・石町遺跡7号住居は、一辺6.4mの隅丸方形プランで、支柱穴は9本。南東辺側は4穴、その他の辺は3穴ずつ並ぶ。床面中央に石囲炉があり、不整



第309図 縄文遺構変遷図 (S=1/4,500)

円形土坑の周壁と下部に扁平石を敷き並べている。SH24と共通点が多く、遠隔地間の住居と類似する点が多いことは興味深い。

本住居からは多量の土器が出土している。遺物の時期は鐘崎Ⅱ式が少量、鐘崎Ⅲ式～最新相期が多量、鐘崎最新相と石町式が少量である。上層と下層の遺物が接合することから遺構の埋没に多くの時間を要していないと考えられる。遺物（土器）は、総破片数25,413点、総重量396,145.2gであることから、多数の土器が投棄されていることがわかる。総重量約400kgを遺存状態の良い深鉢No.348・349・350の平均重量値約4kgで割ると「100」の値が得られるため、深鉢換算では100個が廃棄されていることになる。無論、全てが深鉢ではないことや接合作業に用いた石膏の重量も含むため参考程度の値となるが、投棄された遺物の個体数を考える上で興味深い。遺物は、本遺跡の鐘崎Ⅲ式～最新相期の2棟の住居跡（SH13・22）の居住者によって生産・廃棄されたものか判断できないが、1住居で100個程度の深鉢がどれくらいの期間で生産可能かどうか今後の検証が必要である。また、遺物は無為に捨てられた訳ではなく、住居が10cm程埋まった段階で鉢の過半部を打ち欠き、正位の状態に据え置くという祭祀行為（No.399）を行っていることも重要である。

住居が廃絶し埋められていく際には、土器をはじめ、石器・魚類歯など様々な「物」が棄てられていることが判明したが、縄文人はその中に人骨を埋葬した。SH24埋土には貝殻は見つかっていないが、多量の土器が投棄されており、いわば「土器塚」のような場所に人骨を葬ったことになる。貝塚における人骨埋葬や他地域における廃屋墓の状況と合わせて比較検討する必要がある。

#### SH24出土土器について

SH24から25,413点の土器片が出土した。これらの資料は接合後、部位別に、深鉢・鉢・底部・その他に分類し、計量を行っている。表8に各区やベルトなどから出土したものをまとめた。分類は、(イ)「深鉢」口縁部・底部からの器高が20cm以上のもの、(ロ)「鉢」口縁部があり器高が20cm未満のもの、(ハ)「底部」口縁部のない底部が残るもの、(ニ)「その他」口縁部・底部以外の頸部や胴部、部位不明のものとした。

表9は上記イ～ニ4分類の各區別重量棒グラフである。南北・東西ベルト、一括、複数区接合資料は除外している。各区共通して「その他（胴部）」の出土量が多い。これは胴部などの1個体あたりに占める比率が口縁部・底部よりも高いため当然の結果と思われる。イ～ニは全ての区で同様の比率を示すため、土器を投棄する際、土器の中の一つの部位を選別し、住居内の特定の区へ集中的に投棄するという意識は働いていないことがわかる。逆にいえば完形に近い土器を住居内に偏りなく捨てているということなのかもしれない。全体の約65%の遺物がNE区・NW区から、23%の遺物がSW区から出土しており、遺物の多くが住居北側及び西側から投棄されていたことを示す。

#### 人骨

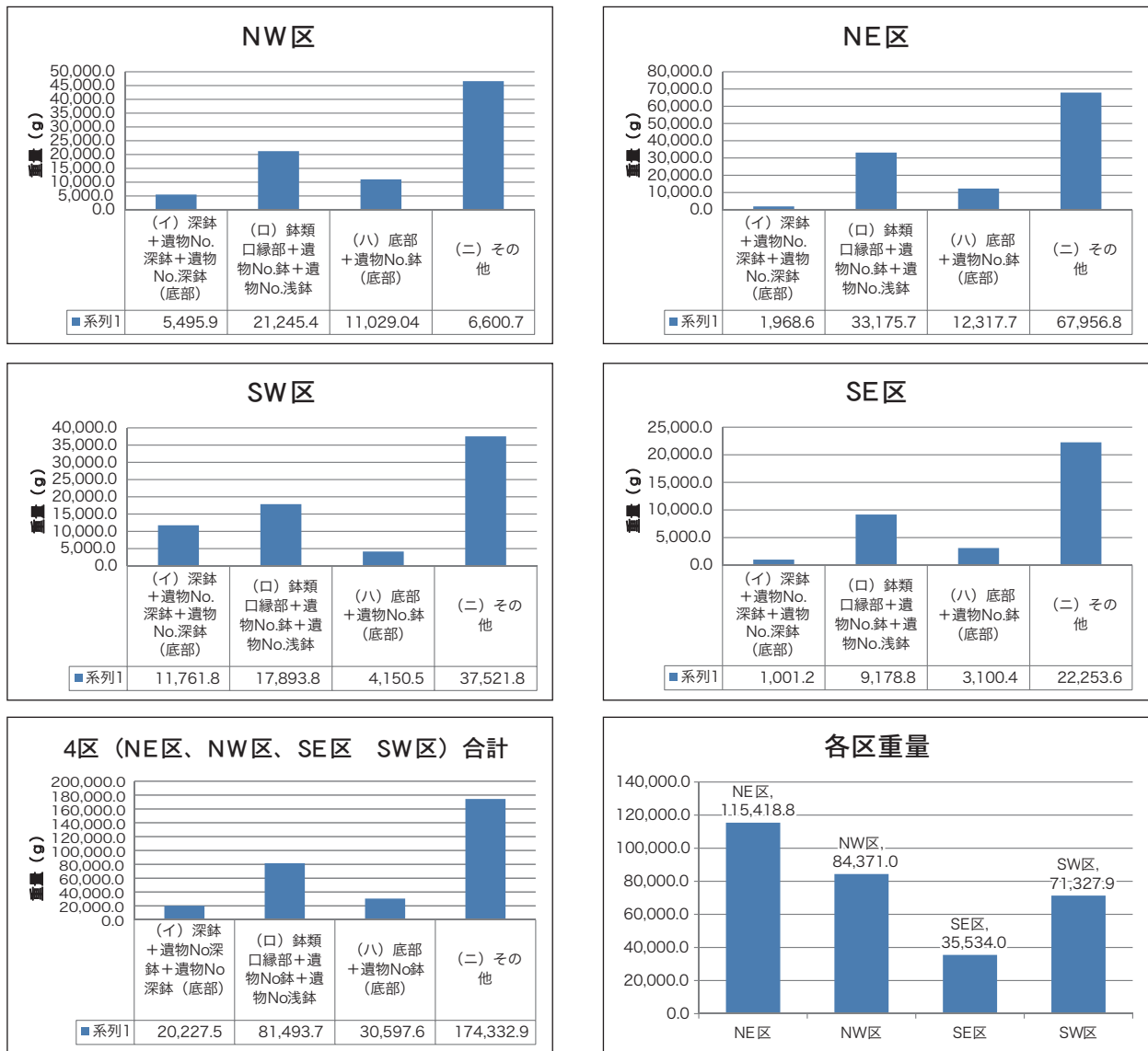
NE区埋土中位から出土した人骨は、舟橋先生・田中先生の分析報告にて断体儀礼の可能性が指摘され、廃屋墓と合せて東日本縄文文化が、西日本へ伝播した一端を示す可能性が述べられた。管見の限り、九州における廃屋墓は、市内のボウガキ遺跡が初出であり、本遺跡例は2例目となり貴重な発見である。今回の調査では明確に墓壇が確認されなかったが、遺骸が住居内に収まっていることから、廃された住居跡に墓壇を構築する意図があったものと解される。

表 8 SH24出土縄文土器重量集計表 4分類((イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)、(ロ)鉢類口縁部+遺物No.深鉢(底部)、(ハ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)、(ニ)その他)

SH24	種類	無文		有文		縄文		磨消縄文		計		袋物		計+袋物			
		個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	種別数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)	個数	重量(g)		
NE区	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	4	1,968.6	0	0.0	0	0.0	4	1,968.6	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	188	9,148.0	484	23,897.6	4	37.3	6	92.8	682	33,175.7	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	135	12,317.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	135	12,317.7	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	3,519	59,737.1	422	8,138.1	1	13.8	7	67.8	3,949	67,956.8	0	0.0	0	0.0		
NW区	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	2	2,253.0	4	3,242.9	0	0.0	0	0.0	6	5,495.9	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	125	7,589.3	251	13,513.3	3	65.0	4	77.8	383	21,245.4	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	139	10,918.0	1	11.0	0	0.0	0	0.0	140	11,029.0	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	2,421	42,313.0	262	4,173.3	10	114.4	0	0.0	2,693	46,600.7	0	0.0	0	0.0		
SE区	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	1	1,001.2	0	0.0	0	0.0	1	1,001.2	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	111	2,796.2	194	6,357.0	1	8.8	1	16.8	307	9,178.8	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	55	3,100.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	55	3,100.4	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	1,509	20,246.9	138	1,972.8	4	33.9	0	0.0	1,651	22,253.6	0	0.0	0	0.0		
SW区	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	2	1,929.1	5	9,832.7	0	0.0	0	0.0	7	11,761.8	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	107	4,979.4	196	12,833.6	0	0.0	1	80.8	304	17,893.8	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	71	4,150.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	71	4,150.5	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	2,084	33,235.9	243	4,250.8	0	0.0	2	35.1	2,329	37,521.8	0	0.0	0	0.0		
東西へリト	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	31	2,827.0	56	7,703.2	0	0.0	5	45.4	92	4,575.6	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	25	918.1	0	0.0	0	0.0	0	0.0	25	918.1	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	835	11,623.4	75	1,456.8	0	0.0	3	29.3	913	13,109.5	0	0.0	0	0.0		
南北へリト	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	49	2,277.5	90	4,256.6	0	0.0	3	24.7	142	6,558.8	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	42	3,715.2	1	120.9	0	0.0	0	0.0	43	3,836.1	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	223	2,067.9	25	276.9	0	0.0	0	0.0	248	2,344.8	0	0.0	0	0.0		
一括	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	14	294.1	15	722.0	0	0.0	1	42.9	30	1,059.0	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	7	287.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	7	287.2	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	223	2,067.9	25	276.9	0	0.0	0	0.0	248	2,344.8	0	0.0	0	0.0		
2ヶ所接合	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	2	1,218.2	6	11,406.7	0	0.0	0	0.0	8	12,624.9	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	3	2,604.2	15	7,857.9	0	0.0	0	0.0	18	10,462.1	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	3	1,012.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	1,012.8	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	9	3,079.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	9	3,079.8	0	0.0	0	0.0		
3ヶ所接合	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	1	1,258.2	0	0.0	0	0.0	1	1,258.2	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	1	105.2	8	4,856.2	0	0.0	0	0.0	9	4,961.4	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	1	1,107.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	1,107.7	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	1	78.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	78.7	0	0.0	0	0.0		
4ヶ所接合	(イ)深鉢+遺物No.深鉢(底部)	0	0.0	2	1,586.1	0	0.0	0	0.0	2	1,586.1	0	0.0	0	0.0		
	(ロ)鉢類口縁部+遺物No.鉢+遺物No.浅鉢	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
	(ハ)底部+遺物No.鉢(底部)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
	(ニ)その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		
		11,937	249,999.4	2,524	127,071.3	23	273.2	33	513.4	14,517	377,857.3	14,517	377,857.3	10,896	18,287.9	25,413	396,145.2

総個数	総重量(g)	総数(袋)	総重量(袋)	総個数	総重量(g)
14,517	377,857.3	10,896	18,287.9	25,413	396,145.2

表9 SH24出土縄文土器各区重量棒グラフ



埋葬姿勢については仰臥屈葬であった。本遺跡から東に1.5km離れたボウガキ遺跡では、住居内から4体の人骨が発見され、伸展葬状態であった。近距離の同時代の遺跡で埋葬形態に差異が認められることは興味深い。一方、本遺跡から直線距離で6km離れた中津市本耶馬溪町の粉洞穴でも縄文期の人骨が出土している(賀川1987)。人骨は縄文早期、縄文前期前半(約6700年前)、縄文前期後半、縄文後期のものが調査されているが、屈葬がほとんどで、緩い屈肢葬と伸展葬も少数存在するようである。縄文後期は法垣遺跡出土人骨と同じ屈葬姿勢の人骨が詳報されている。近距離の遺跡で埋葬形態が異なり、中距離の遺跡で同じ姿勢であったことは注目される。マクロ的にみると九州の縄文後期・晩期の埋葬は、有明海沿岸部(佐賀県・長崎県・熊本県)に屈葬が多く確認でき、伸展葬が周防灘沿岸地域などの北部九州に多いという(坂本2007)。



## 塊状耳飾

埋土中位で検出された塊状耳飾は、縦型のもので半分強が失われ孔が穿たれている。大坪志子先生の所見では孔は補修か垂下のための穴か判断できず、破損後長期使用していないのではないかとのことである。所産時期は、縄文時代前期後葉もしくは中期前葉の所産と推定されており、本住居と時期が異なる。仮にその時期の遺物とした場合、当該期の遺構は本遺跡では検出していないため、その出所については他所に求めるしかなくなる。いずれにせよ、縄文後期の人間が耳飾を手にして、本住居に遺棄したことは確かである。縦型耳飾の使用時期下限については今後の究明を待ちたい。

## 【鐘崎式Ⅲ式～最新相期】

### 竪穴住居 SH13・22

SH13・22のプランは隅丸方形で中央に石囲炉がある。炉底面は石を敷いておらず、前代の鐘崎Ⅱ式SH24の炉と異なる。SH13の炉の石は抜き取られていると思われるが、SH22の側石はそのまゝの状態、炉を土で埋めた後に大型の台石が被せられていた。住居廃絶の際の祭祀行為であろう。また、特筆すべき遺物として第5章特論にて福永氏により詳報されたHGK13・14の遺物がある。これらは羽状縄文が施された土器で、高精度胎土分析により舞鶴帯周辺地域からの搬入の可能性が指摘されている。福永氏の分析は、西日本から器形・文様などの情報だけではなく、土器がそのまま搬入された可能性が高いことを示すものであり、縄文期の人々の動態・思考を考える上で重要なものである。

### 掘立柱建物

SB12・13・14・21・24・25を検出した。縄文遺物が少量出土したSB24もこの時期に含めている。縄文時代の掘立柱建物については、関西以東の地域、特に関東甲信越地域で発見・報告される例が多い。九州では、宮崎県本野原遺跡、同高野原遺跡、鹿児島県藤平小田遺跡、福岡市有田・小田部遺跡などでその存在が指摘されている（石井2008）。一方、九州の掘立柱建物については、発掘調査時点における十分な検証、縄文時代以外に属する可能性の有無、東日本との無条件の比較の妥当性などの課題が指摘され、いましばらく慎重な対応を望む考えもある（水ノ江2012）。今回の調査で特に重要な点は、SB14廃絶後、その柱穴が西平・太郎迫期のSH27に切られていること、SB14柱穴から出土する遺物がすべて当該期に限られていることである。これにより九州の縄文期に掘立柱建物が存在したことが確実に became 意義は極めて深いと考える。用途については現時点では不明としておく。

先述した九州の諸遺跡出土遺構と本遺跡出土遺構について詳細に比較・検討する力量はないが、建物規模と配置についてだけ整理しておく。法垣遺跡の掘立柱建物は、大型（18～22㎡）のSB12・14、小型（10～15㎡）のSB13・21・24・25に分けられる。SB14とSB21は近接しているため、同時並存の可能性は低い。根拠は無いものの規模の差は、時期差を示している可能性もある。ただし、仮に時期差を認めた場合もSB14とSB21・25は並列しており、その差は僅かであったと思われる。掘立柱建物配置について、他遺跡の例では中央広場（空間）を中心として、弧状に展開する可能性が指摘されている（石井2008）。本遺跡掘立柱建物群は弧状に展開せず、SB14・21・25にみられる並列展開が特徴である。同時期に存在したと思われるSB12・13・24は散在的な建物

配置であり、並列建物群との相関関係は今のところ不明といわざるを得ない。

次に個別の掘立柱建物についてみていく。SB14は6本の柱穴で構成される大型建物遺構であるが、PIT3は柱抜き取りの際、最後に円礫を埋め置いていた。柱穴埋土に礫を入れる行為は同じ大型建物であるSB12の柱穴でも確認されている。廃絶に伴う何らかの祭祀行為である可能性が高い。一方、SH24の柱穴にも小礫を埋め込んでいる。同様の祭祀行為と考えられ、建物廃絶の際に柱穴に礫を埋め置く意識が存在したと理解したい。

### 土 坑

SK64からカラスザンショウを大量に含む土器 (No.716) が検出された。第5章の小畑教授の調査報告によると、意図的混入か否かは不明ながらカラスザンショウ果実42点とその果皮9点が混入することが判明している。法垣遺跡では多量の縄文土器が出土しているが、この1点だけ多数の種実が混入していた。さらに特異であったことは、本遺構の底面が被熱していたことである。本調査では多数の縄文期の土坑が検出されているが、底面の被熱を確認できた土坑はない。No.716が特異な遺構から出土していることも、その性格を考える上で抑えておく必要がある。

### 【石町式期】

石町式期の遺構はSH2・5・9・21である。石町式は林潤也氏により提唱された呼称であり (林2002)、従来の周防灘沿岸地域を含む「東北九州における北久根山第二型式該当の土器」として評価されている (小南2017)。本遺跡出土の当該期の竪穴住居は、平面プランが歪な点で共通している。また、SH2・5・9は14～15m間隔で並んでおり、意識的に配置された可能性がある。炉に着目すると、SH2＝地床炉、SH5＝石囲炉？、SH9＝地床炉となる。

特筆すべき点として、SH2の炉の東側にあった立石の存在が挙げられる。このような施設を伴う住居は、上唐原遺跡・挾間宮ノ下遺跡・佐知久保畑遺跡で確認され、「上唐原型住居跡」と呼称されている (小池1998)。上唐原遺跡や佐知久保畑遺跡は鐘崎III式期とみられる遺構で、本遺跡SH2のように時期が異なる遺構でも、向きは異なるものの立石が見られる点は注目される。

### 【西平・太郎迫式期】

#### 竪穴住居

西平・太郎迫式期の竪穴住居はSH27のみである。出土する遺物はほとんどが太郎迫式期で住居平面プランはほぼ円形、炉は地床炉である。本住居の柱穴は規模が小さいものが多く、どれが主柱穴になるのか不明瞭である。本遺構は、先述のSB14と同じ位置に構築された。このことはSB14廃絶後にSH27が構築されていることを示すものであり、SB14が縄文時代後期の遺構であることを明確にした。

### 土 坑

3次SK3から特殊遺物が2点出土している。人面形土製品 (No.622) は、人面を模し写実性が高い遺物である。裏面は何か貼り付けられていたような形状を示すため、単体として作られたものではない。何かの付属品としての見方を現時点ではとりたい。共伴遺物として太郎迫式期と考えられる鉢が出土している。関東地方などの人面形土器は後期初頭頃とのことであり本遺構と時期差が認められる (水ノ江2012)。類例の増加を待ちたい。また、同遺構から分胴形土偶も出土してい

る。小型化したタイプであり突起部は乳房を表現し、本来は左胸も存在したが剥落の可能性があるという<sup>(1)</sup>。側辺に刺突列があることから原井三ツ江遺跡出土土偶に近い形状である<sup>(2)</sup>。側縁部に刺突文を施すため、B類土偶の中でも古い部類に入るとされる（宮内1997）。近辺では本遺跡から西に約1kmに所在する槇遺跡1号住居跡（石町～西平期）にて同形状と思われる土偶が出土している。

#### 【法垣遺跡出土種実・動物遺体について】

法垣遺跡では、縄文遺構であるSH24、SB21・25埋土のフローテーション作業を実施した。小畑教授の調査報告ではSH24埋土から発見されたカラスザンショウについて詳述されている。合せて、動物骨片や魚類の歯なども多数発見・報告され、SH24埋土に土・土器・石器だけではなく、植物の微細な種実や骨片などの動物由来の遺物が含まれていたことが明らかとなった。

フローテーション作業によって得られた事実を充分消化できていないが、本作業は当時の植物利用のあり方、縄文人の精神性などを考える上で貴重な資料を提供するものである。

#### 【縄文時代の石器について】

本遺跡では総数348点の石器（SB14P3出土石（No.119）は除外）が出土している。348点の内、石器は旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代の石鏃、中世の石鍋が含まれている。この内縄文期と推定されるものは323点を数える。古墳時代の遺構から出土した敲石、台石、磨石、凹み石は、当該期での使用が想定されるため除外している。石鏃・スクレイパー系・石核・剥片（使用痕剥片含む）209点のうち、黒曜石は77%（姫島産72%、腰岳・針尾系5%）、サヌカイトは13%（多久産7%、金山産3%、産地不明3%）、安山岩5%、チャート・鉄石英・砂岩・メノウ・玉髓・水晶は各1%を占める。豊前市中村石丸遺跡や上毛町上唐原了清遺跡では黒曜石製は80～86%、安山岩製14.5～19%という（福岡県2000）。本遺跡は、黒曜石の比率は同程度であるが、安山岩製の比率が少ない。

打製石斧は総数46点のうち、安山岩系45%、緑泥片岩45%であり、両石材が拮抗している。上唐原了清遺跡も安山岩と片岩系がほぼ同じ比率であり、類似性を指摘しうる。磨製石斧は総数13点のうち、緑泥片岩は53%、蛇紋岩31%であった。

次に縄文時代に属し用途がわかる石器の組成についてみていく（表10）。スクレイパーは、用途別に分類することが困難であるため、上唐原了清遺跡報告に準じて工具に含める。総数292点のうち、狩猟具では石鏃が42%、植物採集具では打製石斧が16%、台石類・磨石類は計15%、漁労具が1%である。工具ではスクレイパーが14%、石錐が5%、磨製石斧が4%となる。狩猟具である石鏃の比率が最も高く、植物採集具類がやや少なく、漁労具の割合が極めて低いことがわかる。よって、本遺跡における生業は、狩猟と植物採集が主体であり、漁労活動はほとんど行われていなかったと考えられる。

周辺の石器生産具の傾向を確認する。山国川沿いの上唐原遺跡・佐知遺跡・上唐原了清遺跡の生産具の割合は、狩猟具は1～2割、植物採集・加工具の割合が5～6割、漁労具が1割5部～3割である（福岡県2000）。本遺跡は、狩猟具が5割を超え、植物採集・加工具の割合が4割弱、漁労具は1割に満たない（表11）。山国川沿いの遺跡は、植物採集活動が盛んであり、犬丸川沿いの遺跡は狩猟活動が盛んであったと考えることもできる。しかし、本遺跡から1.5km東に離れた同じ犬丸川沿いのボウガキ遺跡では貝層が発見され、隣接して入垣貝塚が所在し、漁労活動が活発であったと思

われる。よって、流系により生業活動が異なると考えることは早計であり、上唐原了清遺跡の報告でも指摘されている通り、各々の集落の実情に即した経済活動が行われていたものと推察する。

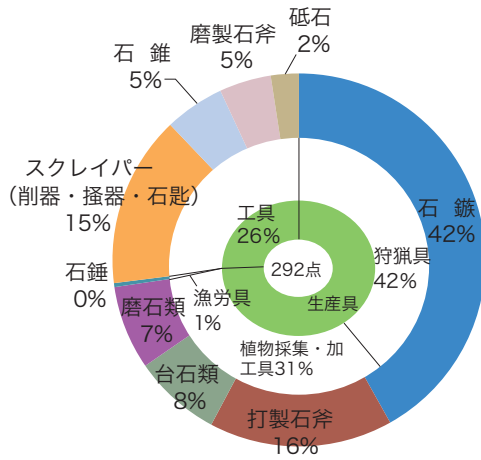


表10 石器組成表

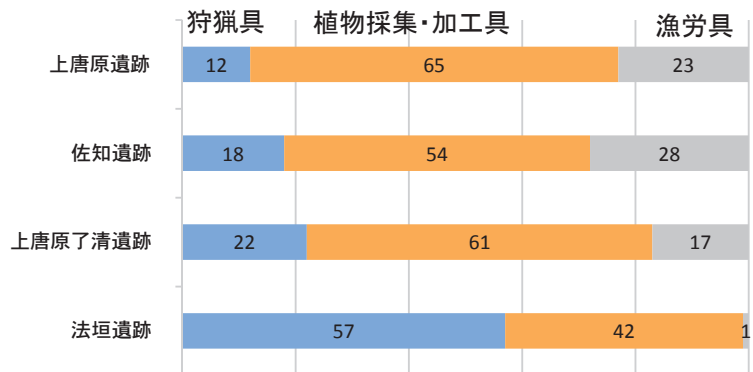


表11 各遺跡別出土石器生産具組成表

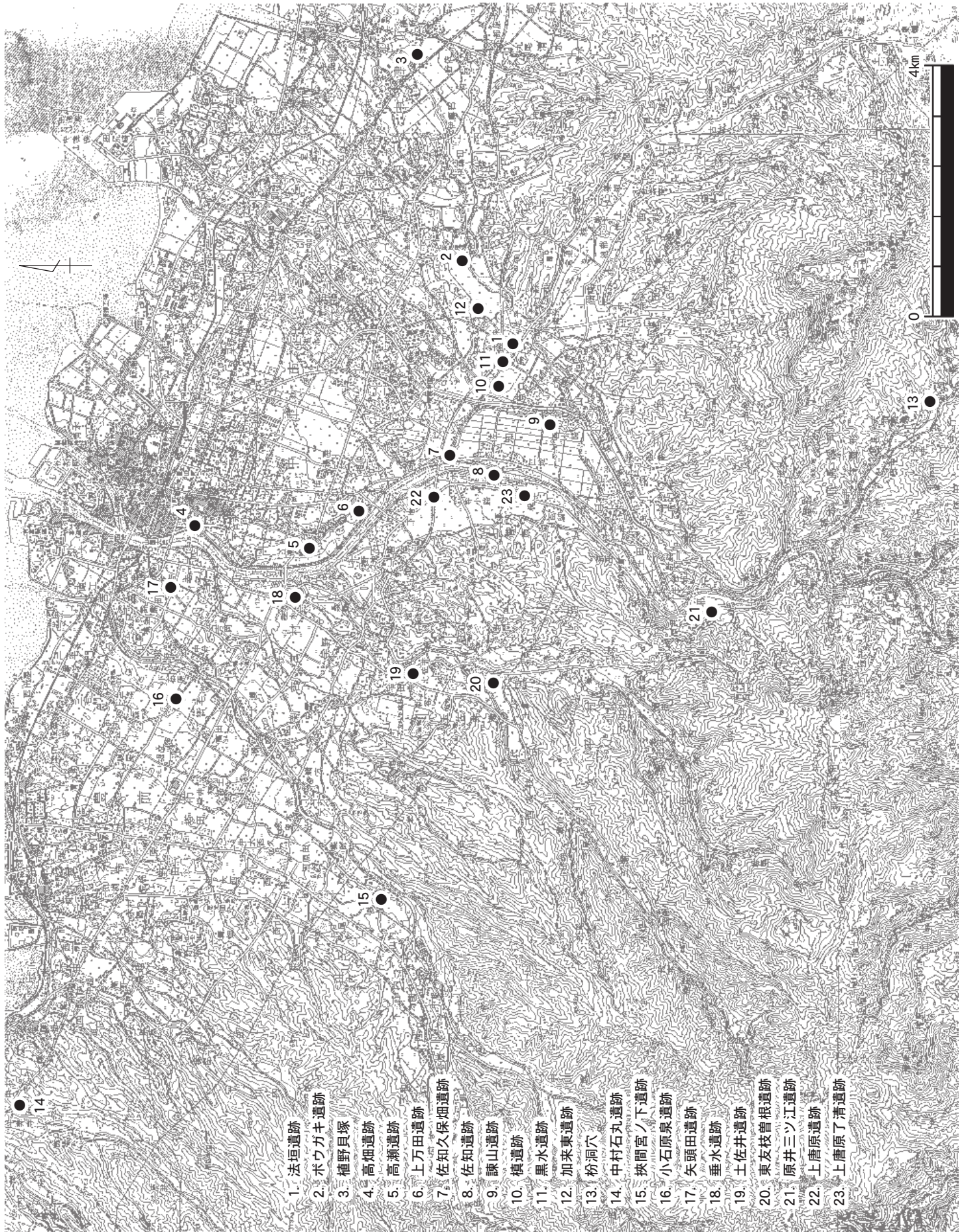
【周辺の縄文遺跡について (第310図)】

本遺跡周辺の集落様相について概観する。犬丸川河口では、後期初頭から貝塚が形成される(植野貝塚)。住居跡を伴う集落は本遺跡から東に1.5km離れたボウガキ遺跡、西に1km離れた槇遺跡がある。犬丸川沿いは上唐原遺跡、佐知遺跡、佐知久保畑遺跡で確認されている。各遺跡とも検出された住居跡は1～3棟程度であり、本遺跡も先述したとおり、同時並存した住居跡は2～3棟と考えられ共通性がある。また、豊前市挾間宮ノ下遺跡では住居跡18棟が報告され、同時併存住居跡は3～5棟と想定されている。中村石丸遺跡では9棟が確実な竪穴建物と推定されており、同時並存は2～3棟と考えられる。椎田町山崎・石町遺跡では、計11棟の後期中葉を中心とする住居跡が検出され、鐘崎期の住居跡は4～5棟、石町期の住居跡は6棟が同時並存したと考えられている。

したがって本遺跡周辺では縄文後期の住居跡は検出されるものの、彼らが一所に集住し、数十棟で構成される大規模集落を展開する状況には至らなかったことがわかる。住居数だけではなく、各遺跡には上唐原型住居や山崎7号型住居が存在すること、土器型式の変化に伴い住居プラン・炉のプランが変化していることなどに共通点を認めることができる(小池1998)。小規模集落は他遺跡と隔離した存在ではなく、緩やかな紐帯を有し、汎東九州的ともいえる枠組みの中に収まっていた。ただし、全ての遺跡が同質であったわけではなく、本遺跡の掘立柱建物群の存在が示すように、当該地域における縄文後期の遺跡の中に質的な差異が存在したことは確かである。また、住居形態や土器形式などの生活スタイルが変化しても縄文人は一定期間継続してそこに住み続けている。第5章竹村先生・山田先生の報告によると、本遺跡は河岸段丘堆積物(いわゆる自然堤防)ではなく、台地を形成する扇状地性の地形であることが判明している。水を得やすい高台の縁辺部が住環境に適していたことを示すものであり、縄文人の集落選地の思考の一端を知ることができる。

古墳時代の遺構・遺物について

古墳時代の遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡21棟、掘立柱建物8棟、土坑5基であった。特筆すべきは、第3調査区SH7で検出されたカマドである。通常のカマドと異なり、壁に沿って煙道状の遺構が延びる。このような形態の住居は、オンドル式住居と呼ばれており渡来人に関わる遺構の



第310図 法垣遺跡周辺主要縄文遺跡分布図 (S=1/80,000)

昭和60年度調査区



第311図 古墳時代遺構配置図 (S=1/1,200)

可能性が指摘されている（亀田2005）。市内では市場遺跡・諸田南遺跡などで発見されている。少数ではあるものの類例が蓄積されつつあり、一遺跡内で多出ししないこともわかりつつある。本遺跡の中で広い面積を有する住居跡であることなどと考え合わせると、本住居が特別な施設であったと考えることも許されるであろう。

昭和60年度、本調査区の北側で中津バイパス建設に伴う発掘調査が大分県により実施された。古墳時代の住居跡は10棟検出されており、本調査と合わせると31棟の竪穴住居が存在したことになる（第311図）。当該期の住居跡は、近年、沿岸部の諸田遺跡・諸田南遺跡で数多く発見されている。本遺跡はそれに次ぐ規模であり、犬丸川中流域にも当該期の集落が展開していたことを示す。

この他、特殊な遺物としてSK1より馬具2点が出土した。円環部が残る環状鏡板と引手部である。通常、土坑からこれらの遺物は出土しないとのことであり、本遺構で馬葬祭祀が行われた可能性もある<sup>(3)</sup>。

### 古代の遺構・遺物について

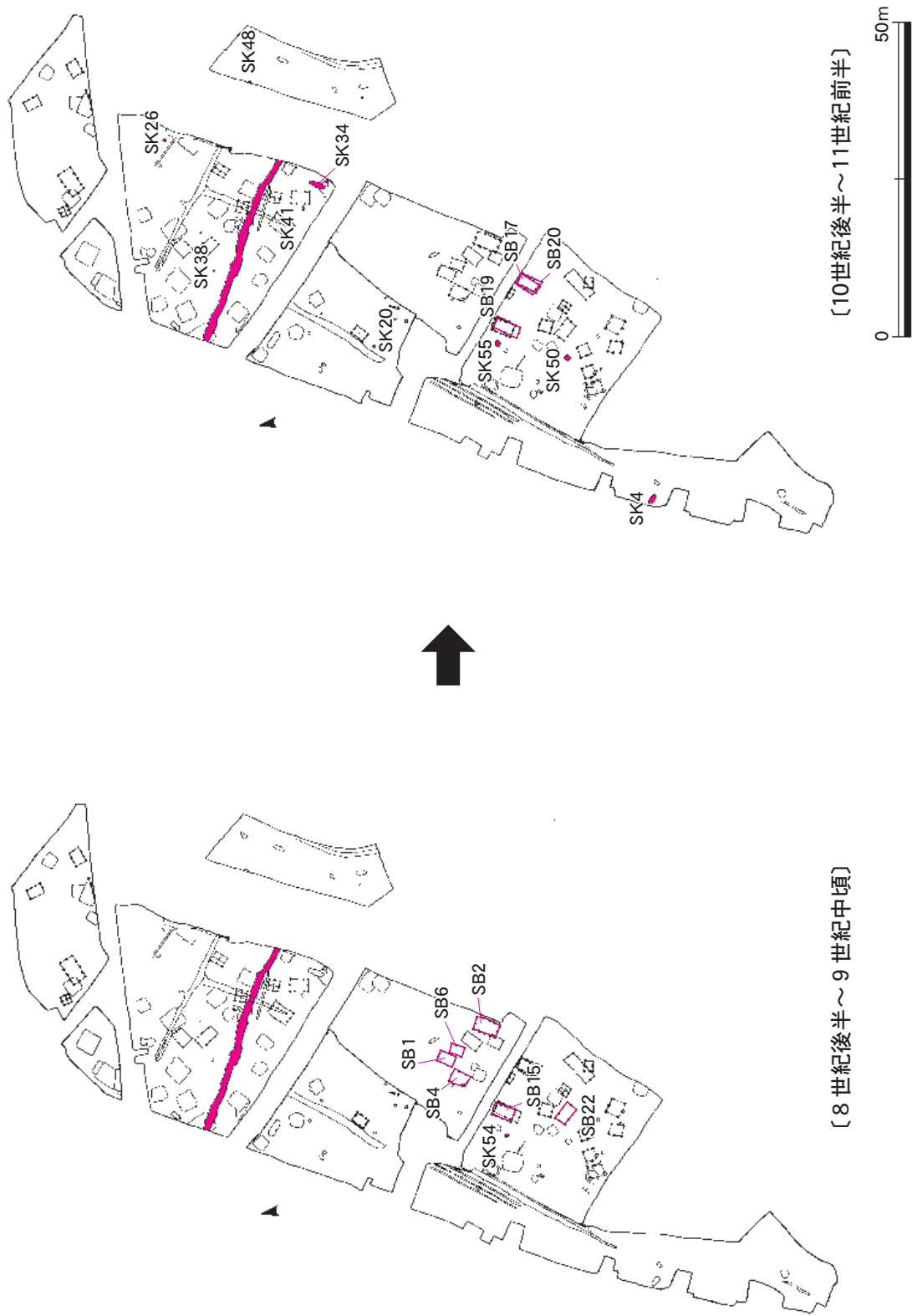
古代の遺構については、掘立柱建物をはじめとした遺構を検出したが、全てが一時期に収まるものではない。8世紀後半～9世紀中頃の時期と10世紀後半～11世紀前半代の時期の遺構にわかれる（第312図）。

#### 【8世紀後半～9世紀中頃】

8世紀後半～9世紀中頃の主要な遺構は、掘立柱建物3次SB1・2・4・6、SB15・22、SK54と大規模溝状遺構SD42である。この内SB6については遺物が出土していないが、他の遺構と同じ向きを指向しておりこの時期に含めている。

建物跡は3次調査区と5次調査区に集中する。この位置からは、東に犬丸川を望むことができるため、建物配置は地形を意識していると考えられる。各建物跡の軸は、長軸を略北北東にとるが、官衙跡などのように「コ」や「ロ」の字の規則的な配置をとらない。建物配置から官衙の可能性は低いと考えられるが、SD42より越州窯系青磁や市内初出土の猿投窯産短頸壺、第5調査区の表土剥ぎ時に9世紀中頃の京都産緑釉陶器が出土している。これらの希少な遺物は、本遺跡に有力層が存在したことを示す。

建物の非規則的配置をとる遺跡は、市内では円面硯が出土した諸田南遺跡、市外では日出町会下遺跡、大分市地藏原遺跡などで確認されている。8世紀中頃は官人・百姓・商旅の輩が、国崎津や坂門津から調庸物の輸送と共に私物を運搬する違法出港が問題とされた時期にあたり、8世紀後半頃は、中頃からの違法行為が公的に許可されるに至ったという点から、地藏原遺跡を物資集散の拠点とする考えがある（後藤1986）。これらの遺跡で活動したのは富豪の輩といわれた階層であった可能性がある。彼らは私出挙や調庸の代輸、浮浪人、逃亡人の囲い込みなどによって力をつけた。延暦4（785）年の太宰官符には、大宰府管内の浮浪人の数が増加し調庸を運ばないため、大宰府・国衙財政が困窮していたことがわかっている（西別府1984）。富豪層は奈良時代から官人などを巻き込み、租税の收取体制に寄生して成長した。8世紀前半における郡衙の成立以後、後半は富豪層関係遺跡の増加にみられるように、富豪の輩が増加し、全国的に浮浪人や逃亡人も増加するなど、奈良時代当初の直接公民から税を徴収するという原則が崩れ始めた時期であった。富豪の輩による貧窮民の隷属化は豊前地域でも進んだと考えられ、政府も富豪の輩の違法行為を容認せざるを得ない事



〔10世紀後半～11世紀前半〕

〔8世紀後半～9世紀中頃〕

第312図 古代遺構変遷図 (S=1/1,000)



態に陥り、郡司の在対に対する支配力が動揺し始めた時期であった（浦井2011）。本遺跡で検出した掘立柱建物群も富豪層の活動拠点であったと捉えておきたい。

**【10世紀後半～11世紀前半】**

掘立柱建物SB17・19・20と溝状遺構SD42、土坑9基を当該期と考える。SD42からは遺物が多く出土した。管見の限り、豊前地域における当該期の遺跡の調査例は、宇佐神宮内の弥勒寺跡・八坂遺跡群で調査されている。今回良好な一括資料が得られたため、以下に遺物の傾向をまとめる。

出土遺物は、小皿・坏・碗・黒色土器などである。小皿・坏の底部はほとんどをへら切りで仕上げる。同時期の遺構としては弥勒寺SK5・SK3があり、SK5→SK3の変遷が想定されている。SK5出土の小皿・坏の底部はほとんどへら切りであり、10世紀後半～末頃に位置づけられている。一方、SK3出土の小皿・坏は糸切り底であり、へら切りから糸切りへの転換が11世紀前半にほぼ完了したという（宮内1989）。本遺跡出土小皿・坏はほぼへら切りであり、SK5と類似する。本遺跡出土小皿・坏の法量を表12に示した。小

皿は口径8.8～12.9cm、器高0.9～2.4cm、その中心は口径9.6cm、器高1.5cmにある。坏は、口径10.4～17.6cm、器高1.7～4.6cmあり、まとまりを欠く。小皿は口径の大きなものがあり、弥勒寺SK5に似る。一方、坏は、弥勒寺SK3と近似値を示す。小皿・坏の底部仕上げがほとんどへら切りであること、法量は弥勒寺SK5・SK3の両方の特徴を有することから、本遺構出土資料は弥勒寺SK5とSK3の間に位置づけられる土器群と評価したい。

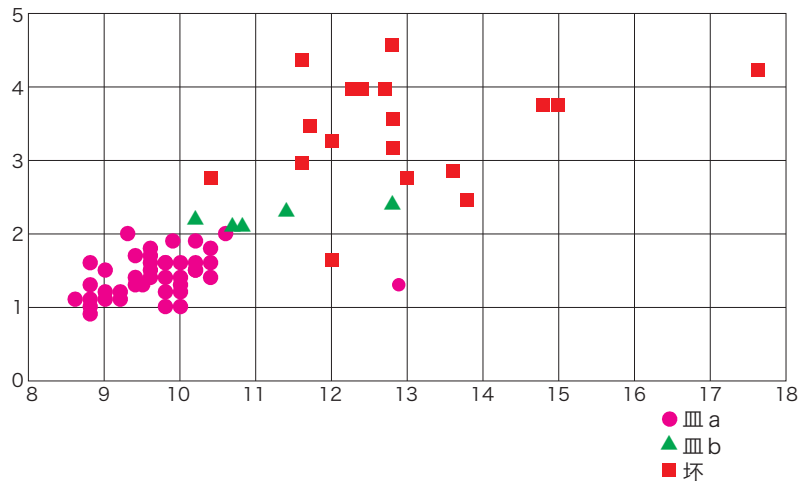


表12 SD42出土皿、坏法量図

SD42からは滑石製石鍋が出土している。その中には縦耳型の取手を再利用したバレン状石製品（No.203）も含まれている（松尾2017）。縦耳型石鍋の時期については、11世紀終末～12世紀初めに比定する説と、12世紀後半頃まで流通した説がある（松尾2011）。本遺構からは12世紀中頃～後半までの同安窯青磁碗などの遺物が出土し、遺構の完全な埋没もその時期に想定している。本遺構の石鍋もおそらく長崎県西彼杵半島よりもたらされた遺物であろう。当地方における縦耳型石鍋の流通時期・範囲を考察する上で貴重な資料である。

**中世の遺構・遺物について**

中世の主な遺構はSX4がある。SX4は、平面柄鏡状の性格不明遺構で内部に礫を含む溝が楕円形に巡り中央部が島状に残る。太郎迫式期などの縄文遺物が出土したが、14世紀代の遺物が出土しているため中世の所産と推定した。管見の限り円形遺構の類例は少ない。日田市祇園原遺跡では弥生時代と報告された円形周溝遺構が検出されているが、溝内に礫などは確認されていない（日田市

2007)。弥生期の遺構が多数検出されている玖珠町四日市遺跡でも円形の遺構が検出されている。両遺跡の遺構は、柄鏡状を呈さずSX4とは性格が異なる可能性が高い。類例の増加を待ちたい。

この他の遺構は溝状遺構を検出したのみで概して少ない。ただし、今回詳報していないが、第3調査区内にて扁平な礫を底面に敷いた複数の時期不明の柱穴を確認している。同様の遺構は、中世の他遺跡で確認されていることから中世の遺構に伴う柱穴と想定される。今回の調査では中世の掘立柱建物を復元できなかったが、調査区内にそれらが存在した可能性を指摘しておく。

以上、法垣遺跡3次・4次調査の発掘調査成果とその意義を述べ、総括とする。

## 註

1. 宮内克己氏・福永将大氏ご教示。
2. 福永将大氏ご教示。
3. 村上久和氏ご教示。

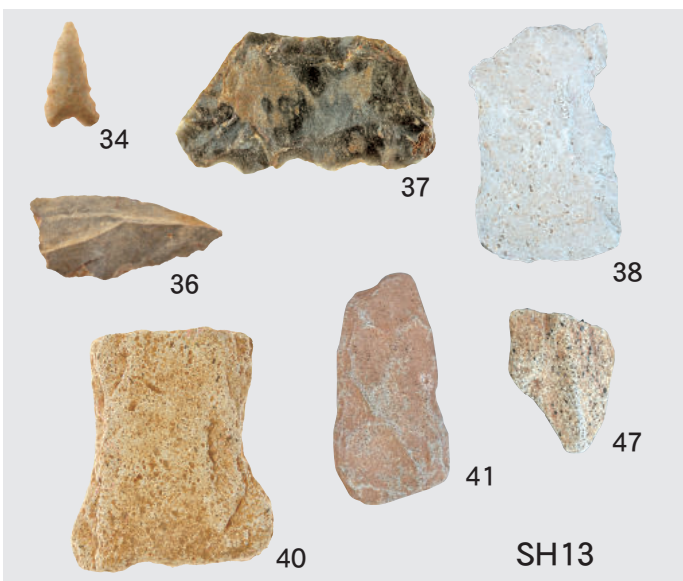
## 参考文献

- 石井 寛2008「掘立柱建物から見た後晩期集落址」『縄文時代19』
- 浦井直幸2011「律令体制化における地方官衙の成立と展開-二豊地域を中心として-」『別府大学文化財学論集Ⅰ』
- 大分県教育委員会1988「大坪遺跡」『中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）』
- 賀川光夫1987「原史第3章粉洞穴遺跡の葬制」『本耶馬溪町史』
- 亀田修一2005「地域における渡来人の認定方法」第8回九州前方後円墳研究会資料集
- 小池史哲1998「周防灘南西沿岸地域の縄文後期住居跡」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集
- 後藤宗俊1986「地藏原遺跡は語る」『大分市史 上』大分市
- 小南裕一2017「縄文後期中葉・石町式土器の細分編年について」『山口考古』山口考古学会
- 坂本嘉弘2007「縄文-弥生移行期の葬制変化（九州）」『縄文時代の考古学9 死と弔い-葬制-』
- 西別府元日1984「律令制の動揺と衰退」『大分県史古代篇Ⅱ』大分県
- 林潤也2002「北久根山式土器をめぐる諸問題」『四国とその周辺の考古学』
- 日田市教育委員会2007「祇園原遺跡Ⅱ」日田市埋蔵文化財調査報告書第81集
- 福岡県教育委員会1992「山崎遺跡」椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告（7）
- 福岡県教育委員会1996「中村石丸遺跡」一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第8集
- 福岡県教育委員会2000「上唐原了清遺跡Ⅱ」一級河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告5
- 豊前市教育委員会2001「挾間宮ノ下遺跡」豊前市文化財調査報告書第14集
- 松尾秀昭2011「縦耳型石鍋の時期-長崎県内における資料を中心に-」『別府大学文化財学論集Ⅰ』
- 松尾秀昭2017『石鍋が語る中世 ホケット石鍋製作遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ
- 水ノ江和同2012「九州縄文文化の研究-九州からみた縄文文化の枠組み-」
- 宮内克己1989「3.出土土器の編年」『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 宮内克己1997「九州の土偶」『土偶シンポジウム6 奈良大会-西日本をとりまく土偶-』土偶とその情報研究会



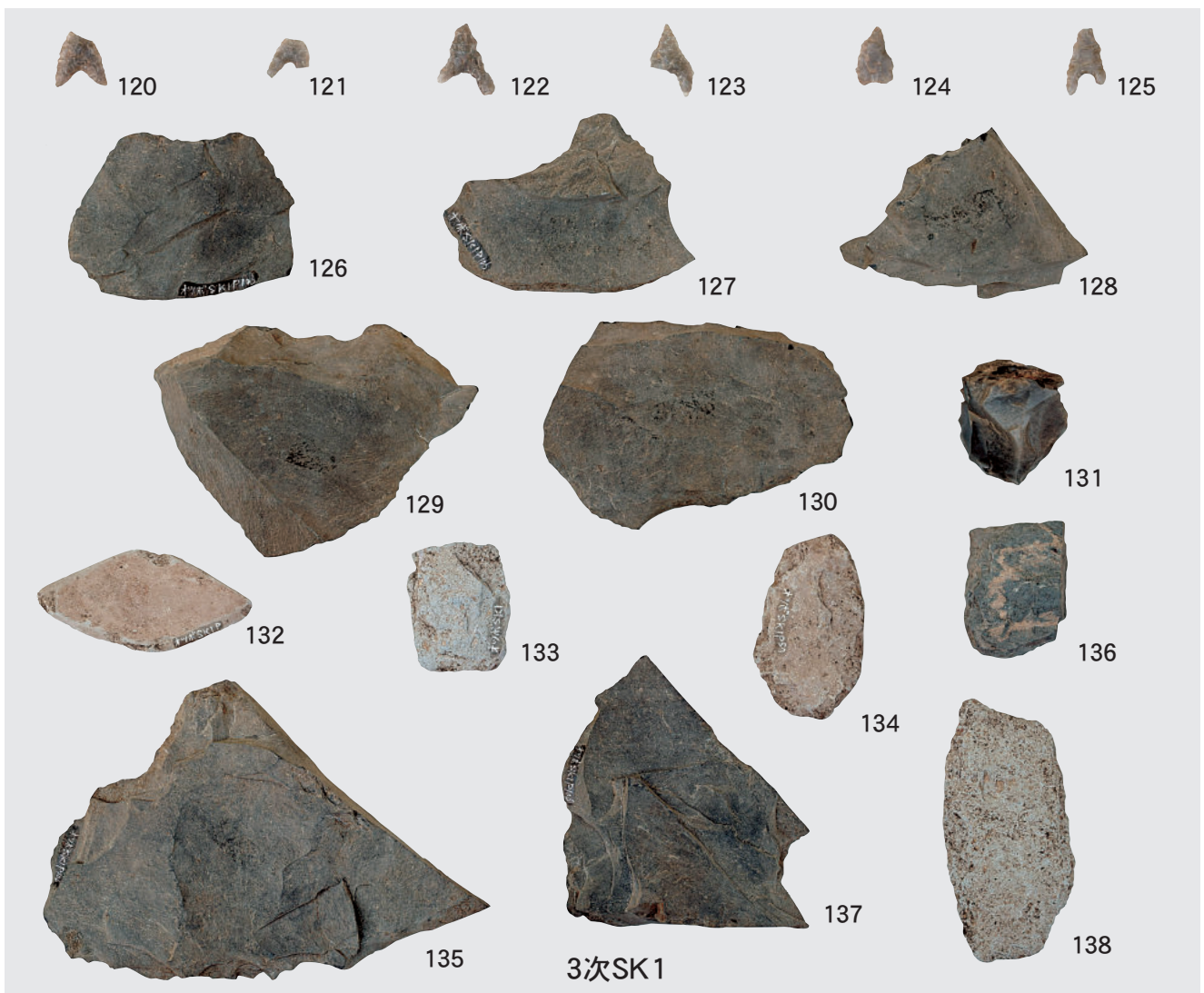
# 写 真 图 版





写真图版 2

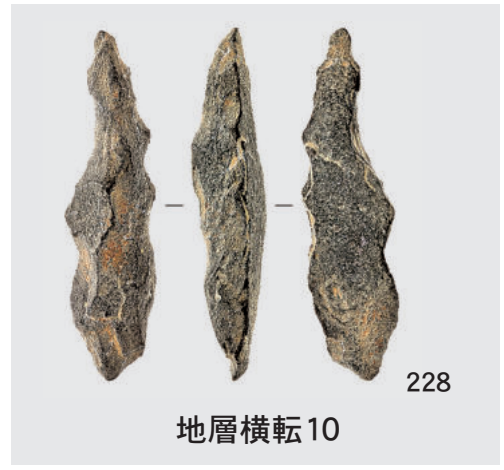
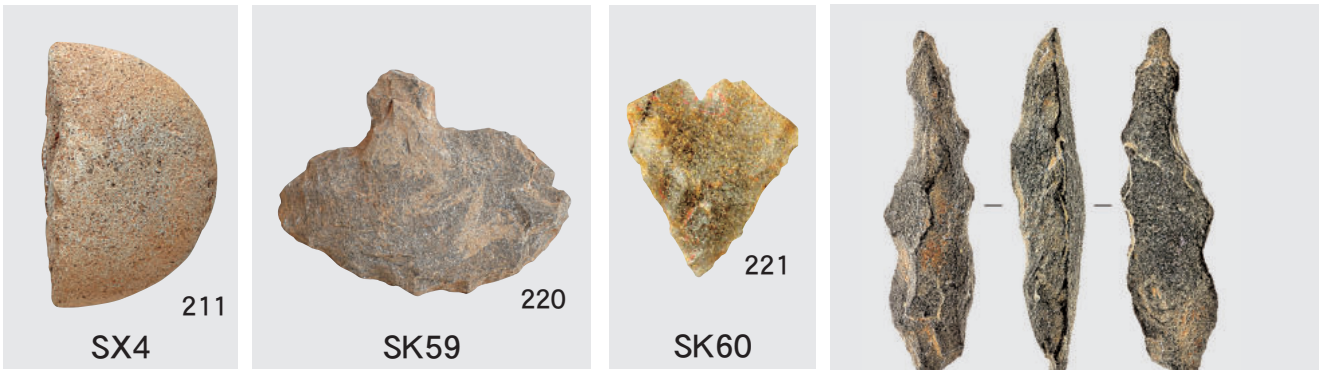






写真図版 4





写真图版 6



## あしがき

法垣遺跡の発掘調査は様々な貴重な機会を与えてくれた。

縄文時代の重要遺構の発掘調査という体験、記録保存目的で調査を開始した遺跡が、その後の重要遺構の発見により一部保存措置がとられる、その間のめまぐるしい政策的な動き。保存後の整備方針の立案なども行い、通常の記録保存調査では体験することのない出来事の連続であった。

そして、調査中・調査後は先学との素晴らしい出会いがあった。縄文時代について門外漢の私にとって、諸先生・先輩方からのご指導・ご指摘は何ものにも替え難く、調査・整理作業を支えてくれた。特に平成27年3月に他界された田中良之先生は、人骨の取り上げ、遺跡の重要性について報道各社への発信など遺跡の保存について多大なるお力をいただいた。また、遺跡公園整備指導者会での提言などについてもご指導を賜わった。指導者会終了後の懇親会席上、にこやかに微笑まれ村上久和さんとお酒を飲まれる先生のお姿を今も思い出す。また、調査に従事して下さった作業員の方々にも鬼籍に入られた方がおられる。刊行が遅れ本書を故人へお見せることができないことが悔やまれる。

第5調査区のほとんどは現在遺跡公園に整備され開放されている。縄文時代をテーマにした行事を引き続き行い、市民が遺跡に接する機会を提供していきたいと思う。

多くの課題を残したままの報告となり心苦しいが、沢山の皆様のお蔭で本書を刊行することができた。重ねて御礼申し上げる。また報告書作成に専念できるよう調整していただいた文化財室員の皆様にも紙面を借りて感謝申し上げたい。



人骨取り上げ風景（故田中良之先生（右）、村上久和氏（中央）、舟橋京子先生（左））



発掘調査作業員の皆さん

# 報告書抄録

ふりがな	ほうがき いせき じ じちようさ							
書名	法垣遺跡3次・4次調査							
副書名	— 本文、遺構・遺物図版、石製品写真図版・観察表編 — 事務所建設・地域振興施設（道の駅）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第84集							
編著者名	浦井直幸・荻 幸二・衛藤美紀・土谷崇夫・竹村恵二・山田圭太郎・舟橋京子・ 田中良之・小畑弘己・福永将大・足立達朗・田尻義了・小山内康人・大坪志子・ 榎パレオ・ラボ							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14番地3 TEL 0979-22-1111							
発行年月日	2018年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面積(mi)	調査原因
ほうがき いせき 法垣遺跡	おおいたけん なかつ し おおあぎ 大分県中津市大字 か く ほか 加来810-1他	44203	203072	33° 32′ 52″	131° 12′ 55″	19960509 19960703 20110509 20121122	4,067 10,000	事務所建設 地域振興施設 (道の駅)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
法垣遺跡	集落	縄文・古墳・ 古代・中世	竪穴住居跡・掘 立柱建物跡・溝 状遺構	縄文土器・須恵 器・土師器・瓦 質土器	縄文時代後期の竪穴住居 跡、掘立柱建物跡を検出し た。			
要約	<p>縄文時代後期の複数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した。掘立柱建物の内1棟は、縄文時代後期の住居と重複しており、当該期に九州に掘立柱建物が存在することが確実にした。また竪穴住居跡の内1棟から人骨が出土している。九州の当該期の集落様相を研究する上で重要な資料を得た。</p> <p>古墳時代後期の21棟の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を検出した。</p> <p>古代の大規模溝状遺構から猿投焼の壺、越州窯磁器碗など当時の有力者の存在を想起させる資料が出土した。</p>							

## 法垣遺跡3次・4次調査

— 本文、遺構・遺物図版、石製品写真図版・観察表編 —

事務所建設・地域振興施設（道の駅）建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書（2）

中津市文化財調査報告 第84集

2018年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 榎川原田印刷社